村上春樹全作品 1979~1989

7

ダンス・ダンス・ダンス

講談社

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

一九八三年三月

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

1

よくいるかホテルの夢を見る。

夢の中で僕はそこに含まれている。つまり、ある種の継続的状況として僕はそこに含まれている。夢は明らかにそういう継続性を提示している。夢の中ではいるかホテルの形は歪められている。とても細長いのだ。あまりに細長いので、それはホテルというよりは屋根のついた長い橋みたいにみえる。その橋は太古から宇宙の終局まで細長く延びている。そして僕はそこに含まれている。そこでは誰かが涙を流している。僕の為に涙を流しているのだ。

ホテルそのものが僕を含んでいる。僕はその鼓動や温もりをはっきりと感じることができる。僕は、夢の中では、そのホテルの一部である。

そういう夢だ。

目が覚める。ここはどこだ？　と僕は考える。考えるだけではなく実際に口に出して自分自身にそう問いかける。「ここはどこだ？」と。でもそれは無意味な質問だ。問いかけるまでもなく、答えは始めからわかっている。ここは僕の人生なのだ。僕の生活。僕という現実存在の付属物。特に認めた覚えもないのにいつの間にか僕の属性として存在するようになったいくつかの事柄、事物、状況。隣に女が眠っていることもある。でも大抵は一人。部屋の真向かいを走る高速道路のうなりと、枕もとのグラス（底に五ミリほ

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

ウィスキーが残っている）と、敵意をもった――いや、それは単なる無関心さなんだろうか――斑だらけの朝の光。時には雨が降っている。雨が降っていると、僕はそのままベッドの中でぼんやりとしている。グラスにウィスキーが残っていれば、それを飲む。そして軒から落ちる雨垂れを眺めながら、いるかホテルのことを考える。手脚をゆっくりと伸ばしてみる。そして自分がただの自分であり、何処にも含まれてなんかいないことを確かめる。僕は何処にも含まれて**は**い**な**い。でも夢の中の感触を僕はまだ覚えている。そこでは僕が手を伸ばそうとすれば、それに呼応して僕を含んだ全体像が動く。水を利用した細かい仕掛けのからくりのように、ひとつひとつゆっくりと注意深く、段階ごとにほんの微かな音を立てながら、それは順番に反応していく。僕が耳を澄ませれば、それが進行していく方向を聞き取ることができる。僕は耳を澄ます。そして誰かの静かな啜り泣きの声を聞き取る。とても静かな声。闇の奥の何処かから聞こえてくる啜り泣き。誰かが僕のために泣いているのだ。

いるかホテルは現実に存在するホテルだ。札幌の街のあまりぱっとしない一角にある。僕は何年か前にそこに一週間ばかり泊まったことがある。いや、きちんと思い出そう。はっきりとさせておこう。あれは何年前だ？　四年前。いや、正確に言うと四年半前だ。僕はその時はまだ二十代だった。僕はある女の子と二人でそのホテルに泊まった。彼女がそのホテルを選んだ。そのホテルに泊まろうと彼女が言ったのだ。そのホテルに泊まらなくては、と彼女は言ったのだ。もし彼女が要求しなかったら、僕はいるかホテルになんてまず泊まらなかっただろうと思う。

それは小さなみすぼらしいホテルで、僕らのほかには泊まり客の姿は殆ど見あたらなかった。僕がその一週間の滞在中にロビーで見掛けた客は二人か三人かそれくらいだったし、それだって泊まり客なのかどうかわかったものではない。でもフロントのボードに掛かった鍵がところどころ欠けていたから、僕らの

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

他にも泊まり客はいたはずだと思う。それほど多くないにしても、少しくらいは。幾らなんでも仮にも大都市の一角にホテルの看板を掲げ、職業別電話帳にだってちゃんと番号が出ているのだ、まったく客が来ないということは常識的に考えてありえない。しかしもし僕らの他に客がいたとしても、彼らはおそろしく物静かでシャイな人々だったはずだ。僕らは彼らの姿を殆ど見掛けなかったし、その物音も聞かなかったし、気配も感じなかった。ボードの上の鍵の配置だけが毎日少しずつ変わった。彼らは息をひそめ、多分薄い影のように壁を這って廊下を行き来していたのだろう。ときどきかたかたかたかたというエレベーターの走行音が遠慮がちに響いたが、その音が止むと、沈黙は前よりかえって重くなったように感じられた。

とにかく不思議なホテルだった。

それは僕に生物進化の行き止まりのようなものを連想させた。遺伝子的後退。間違えた方向に進んだまま後戻りできなくなった奇形生物。進化のベクトルが消滅して、歴史の薄明の中にあてもなく立ちすくんでいる孤児的生物。時の溺れ谷。それは誰のせいでもない。誰が悪いというわけでもないし、誰にそれが救えるというものでもない。まずだいいちに彼らはそこにホテルを作るべきではなかったのだ。あやまちはまずそこから始まっていた。第一歩から、全てが間違っていた。最初のボタンがかけ違えられ、それにあわせて全てが致命的に混乱していた。混乱を正そうとする試みはあらたな細かい——洗練されているとは言えない、ただ細かいだけだ——混乱を生み出した。そしてその結果、何もかもが少しずつ歪んで見えた。そこにある何かをじっと見ようとすると、ごく自然に首が何度か傾いてしまうのだ。そのような歪み。傾けるといってもほんの僅かの角度だから特に実害はないし、べつに不自然さを感じるほどでもないし、ずっとそこにいればそれに馴れてしまうのかもしれないが、やはりいささか気になる歪み（それにそんなものに馴れてしまったら、今度はまともな世界を見る時に首を傾けることにもなりかねない）。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

いるかホテルはそういうホテルだった。そしてそれがまともじゃないということは——そのホテルが混乱に混乱を重ねた末に飽和点に達して、やがて遠からぬ将来に時の大渦にすっぽりと飲み込まれていくであろうことは——誰が見たって一目瞭然だった。哀しげなホテルだった。十二月の雨に濡れた三本脚の黒犬みたいに哀しげだった。もちろん哀しげなホテルなんて世間には他にもいっぱいあるだろうが、いるかホテルはそういうのともまた少し違う。いるかホテルはもっと概念的に哀しげなのだ。だから余計に哀しい。

言うまでもないことだとは思うけれど、そんなホテルをえらんでわざわざ泊まろうなどという人間は、何も知らずに間違えてやってくる客を除けば、そんなにはいない。

いるかホテルというのは正式な名称ではない。正式にはそれは「ドルフィン・ホテル」というのだが、その名前と実体から受ける印象がかなり掛け離れているので（ドルフィン・ホテルという名前は僕にエーゲ海あたりの砂糖菓子のように真っ白なリゾート・ホテルを連想させる）、僕が個人的にそう呼んでいるだけだ。入り口には「ドルフィン・ホテル」と刻まれた銅板がかかっている。もしそんな看板がかかっていなければ、それは全然ホテルには見えないだろうと思う。看板があってさえ、なかなかそうは見えないくらいなのだ。何に見えるかというと、それはまるでうらぶれた博物館のように見える。特殊な展示物を見るために、特殊な好奇心を抱いた人々がひっそりやってくるような、そんな特殊な博物館。

でももし人がいるかホテルを眼前にしてそのような印象を抱いたとしても、それは決して的外れな想像力の飛翔ではない。実を言えば、いるかホテルの一部は博物館を兼ねているのである。

誰がそんなホテルに泊まるだろう？　その一部がわけのわからない博物館になっているようなホテルに？　暗い廊下の奥に羊の剝製やら、埃だらけの毛皮やら、黴臭い資料やら、茶色く変色した古い写真や

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

らが積みかさねてあるようなホテルに。果たされざる想いが乾いた泥のように隅々にしっかりとこびりついているようなホテルに？

全ての家具は色褪せ、全てのテーブルは軋み、全ての鍵は上手く閉まらなかった。廊下は磨り減り、電球は暗かった。洗面台の栓は歪んでいて、水がうまくたまらなかった。太ったメイド（彼女の脚は象を連想させた）は廊下を歩きながらコホッコホッと不吉な咳をした。いつもカウンターにいる支配人は哀しげな目をした中年の男で、指が二本なかった。この男は見るからに、何をやってもまずうまくは行かないというタイプだった。そういうタイプのまさに標本みたいな男だった。まるで淡い青インクの溶液に一日漬けておいてから引っ張り上げたみたいに、彼の存在の隅から隅までに失敗と敗退と挫折の影が染みついていた。ガラスの箱に入れて、学校の理科室に置いておきたくなるような男だった。「何をやっても上手くいかない男」という札をつけて。彼を見ているだけで大抵の人は多少の差こそあれ惨めな気持ちになったし、腹を立てる者も少なからずいた。ある種の人はそういうタイプの惨めな人間を見ているだけで意味もなく無性に腹が立ってくるのだ。誰がそんなホテルに泊まるだろう？

でも僕らは泊まった。我々はここに泊まるべきなのよ、と彼女は言った。そしてそのあとで彼女はいなくなってしまった。僕ひとりを残して消えてしまったのだ。彼女が行ってしまったことを僕に教えてくれたのは羊男だった。彼女は行ってしまったんだよ、と羊男は僕に教えてくれた。羊男は知っていたのだ。彼女が行かなくてはならなかったのだということを。僕にも今ではわかる。彼女の目的は僕をそこに導くことにあったからだ。それは運命のようなものだった。あたかもモルダウ河が海に達するように。僕は雨垂れを見ながら、そのことを考える。運命。

僕がいるかホテルの夢を見るようになった時に、まず思い浮かべたのは彼女のことだった。彼女が僕をまた求めているのだ、と僕はふと思った。そうでなければ、どうしてこんなに何度も同じ夢を見るのだ？

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

彼女、僕は彼女の名前さえ知らないのだ。彼女と一緒に何ヵ月か暮らしたというのに。僕は彼女について実質的には何ひとつ知らないのだ。僕が知っているのは彼女がある高級コール・ガール・クラブに入っているということだけだった。クラブは会員制で、身元の確かなきちんとした客しか相手にしなかった。ハイ・クラスの娼婦だ。彼女はそれ以外にもいくつかの仕事を持っていた。普段の昼間は小さな出版社でアルバイトの校正係をやっていたし、パートタイムに耳専門のモデルもやっていた。要するに彼女はとても忙しい生活を送っていたわけだ。彼女には名前がないわけではなかった。実際の話彼女は幾つも名前を持っていた。でもそれと同時に彼女には名前がなかった。彼女の持ち物——殆どないも同然だったが——のどれにも名前は入っていなかった。定期券も、免許証も、クレジット・カードも持っていなかった。小さな手帳をひとつ持っていたが、そこには訳のわからない暗号がボールペンでぐしゃぐしゃと書きこんであるだけだった。彼女の存在にはとっかかりというものがなかった。娼婦は名前を持っているかもしれない。でも彼女たちは名前を持たぬ世界で生きているのだ。

とにかく僕は彼女について殆ど何も知らない。どこで生まれたのかも、歳がほんとうは幾つなのかも。誕生日だって知らない。学歴も知らない。家族がいるかどうかさえ知らない。何も知らない。彼女は雨ふりのようにどこかから来て、どこかに消えてしまったのだ。ただ記憶だけを残して。

でも今僕は僕のまわりで彼女の記憶が再びある種の現実性を帯び始めていることを感じる。僕はこう感じるのだ。彼女はいるかホテルという状況を通して僕を呼んでいる、と。そう、彼女は今また再び僕を求めているのだ。そして僕はいるかホテルにもう一度含まれることによってのみ、彼女ともう一度巡り合えるのだ。そしておそらく彼女がそこで僕の為に涙を流しているのだ。

僕は雨垂れを見ながら自分が何かに含まれるということについて考えてみる。そして誰かが僕の為に泣いていることについて考えてみる。それはひどくひどく遠い世界のことのように感じられる。まるで月か

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

何かそういう所の出来事のように感じられる。結局のところ、それは夢なのだ。手をどれだけ長くのばしても、どれだけ早く走っても、僕はそこにたどりつけないような気がする。

どうして誰かが僕の為に涙を流したりするんだ？

いや、それでも、彼女は僕を求めているのだ。あのいるかホテルのどこかで。そして僕もやはり心のどこかでそれを望んでいるのだ。あの場所に含まれることを。あの奇妙で致命的な場所に含まれることを。

でもいるかホテルに戻るのは簡単なことではない。電話で部屋を予約し、飛行機に乗って札幌に行けばそれで終わりというものではないのだ。それはホテルであると同時にひとつの状況なのだ。それはホテルという形態をとった状況なのだ。いるかホテルに戻ることは、過去の影ともう一度相対することを意味しているのだ。それを考えると、僕はたまらなく陰鬱な想いに襲われた。そう、僕はこの四年のあいだ、その冷ややかでうす暗い影を捨て去ることに全力を傾けていたのだ。そしているかホテルに戻るということは、僕がこの四年間静かにこつこつとためこんできた全てをあらいざらい放棄し捨て去ることなのだ。もちろん僕はそれほど大したものを手に入れたわけではない。その殆どはどう考えてみても暫定的で便宜的ながらくただった。でも僕は僕なりにベストを尽し、そのようなガラクタをうまく組みあわせて現実と自分をコネクトし、僕なりのささやかな価値観に基づいた新しい生活を築きあげてきたのだ。もう一度もとのがらんどうに戻れというのか？ 窓を開けてなにもかもを放り出せというのか？

でも結局のところ、全てはそこから始まるのだ。僕にはそれがわかっていた。そこからしか始まらないのだ。

僕はベッドに寝転び、天井を眺めながら、深い溜め息をついた。あきらめろ、と僕は思った。あきらめろ、何を考えても無駄だ。それはお前の力を越えたものなんだ。お前が何を考えたところでそこからしか始まらないんだよ。決まってるんだ、ちゃんと。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

*

僕のことについて語ろう。

自己紹介。

昔、学校でよくやった。クラスが新しくなったとき、順番に教室の前に出て、みんなの前で自分についていろいろと喋る。僕はあれが本当に苦手だった。いや、苦手というだけではない。僕はそのような行為の中に何の意味を見出すこともできなかったのだ。僕が僕自身についていったい何を知っているだろう？　僕が僕の意識を通して捉えている僕は本当の僕なのだろうか？　ちょうどテープレコーダーに吹き込んだ声が自分の声に聞こえないように、僕が捉えている僕自身の像は、歪んで認識され都合良くつくりかえられた像なのではないだろうか？　……僕はいつもそんな風に考えていた。自己紹介をする度に、人前で自分について語らなくてはならない度に、僕はまるで成績表を勝手に書き直しているような気分になった。いつも不安でしかたなかった。だからそういう時、僕はなるべく解釈や意味づけの必要のない客観的事実だけを語るように心掛けたが（僕は犬を飼っています。水泳が好きです。嫌いな食べ物はチーズです。等々）、それでもなんだか架空の人間についての架空の事実を語っているような気がしたものだった。そしてそんな気持ちで他のみんなの話を聞いていると、彼らもまた彼ら自身とはべつの誰かの話をしているように僕には感じられた。我々はみんな架空の世界で架空の空気を吸って生きていた。

でもとにかく、何か喋ろう。自分について何か喋ることから全てが始まる。それがまず第一歩なのだ。正しいか正しくないかは、あとでまた判断すればいい。僕自身が判断してもいいし、別の誰かが判断してもいい。いずれにせよ、今は語るべき時なのだ。そして僕も語ることを覚えなくてはならない。

僕は今ではチーズが好きだ。いつからかはわからないが、いつの間にか自然に好きになった。飼ってい

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

た犬は僕が中学校に上がった年に雨に打たれて肺炎で死んだ。それ以来犬は一匹も飼っていない。泳ぐのは今でも好きだ。

終わり。

でも物事はそんなに簡単には終わらない。人が何かを人生に求めるとき（求めない人間がいるだろうか?）、人生はもっと多くのデータを彼に要求する。明確な図形を描くための、より多くの点が要求される。そうしないことには、何の回答も出てこない。

でーたフソクノタメ、カイトウフカノウ。トリケシきいヲオシテクダサイ。

取消キイを押す。画面が白くなる。教室中の人間が僕に物を投げ始める。もっと喋れ。もっと自分のことを喋れ、と。教師は眉をしかめている。僕は言葉を失って、教壇の上に立ちすくんでいる。喋ろう。そうしないことには、何も始まらない。それもできるだけ長く。正しいか正しくないかはあとでまた考えればいい。

*

時々、女が僕の部屋に泊まりにきた。そして朝食を一緒に食べ、会社に出勤していった。彼女にもやはり名前はない。でも彼女に名前がないのは、ただ単に彼女がこの物語の主要人物ではないからだ。彼女はすぐにその存在を消してしまう。だから混乱を避けるために僕は彼女に名前を与えない。しかしだからといって、僕が彼女の存在を軽んじていると考えてほしくない。僕は彼女のことがとても好きだったし、いなくなってしまった今でもその気持ちは変わっていない。

僕と彼女はいわば友達だった。少なくとも彼女は、僕にとって唯一友人と呼びうる可能性を持っていた人間である。彼女には僕の他にきちんとした恋人がいる。彼女は電話局に勤めていて、コンピューターで

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

電話料金を計算している。職場について詳しいことは僕も訊かなかったし、彼女もとくには話さなかったが、だいたいそういう感じの仕事だったと思う。個人の電話番号ごとに料金を集計して請求書を作るとか、その手のことだ。だから毎月郵便受けの中に電話料金の請求書が入っているのを見る度に、僕はまるで個人的な手紙を受け取ったような気がしたものだった。

彼女はそういうこととは関係なく、僕と寝ていた。月に二回か、あるいは三回か、それくらい。彼女は僕のことを月世界人か何かだと考えていた。「ねえ、あなたまだ月に戻らないの？」と彼女はくすくす笑いながら言う。ベッドの中で、裸で、体をくっつけあいながら。彼女は乳房を僕の脇腹に押し付けている。僕らは夜明け前の時間によくそんなふうに話をしたものだった。高速道路の音がずっと切れ目なく続いている。ラジオからは単調なヒューマン・リーグの唄が聞こえている。**ヒューマン・リーグ**。馬鹿気た名前だ。なんだってこんな無意味な名前をつけるのだろう？　昔の人間はバンドにもっとまともな節度のある名前をつけたものだ。インペリアルズ、シュプリームズ、フラミンゴズ、ファルコンズ、インプレッションズ、ドアーズ、フォア・シーズンズ、ビーチ・ボーイズ。

僕がそう言うと彼女は笑う。そして僕のことを変わっていると言う。僕の何処が変わっているのか僕にはわからない。僕は自分自身を非常にまともな考え方をする非常にまともな人間だと思っている。**ヒューマン・リーグ**。

「あなたといるのって好きよ」と彼女は言う。「ときどきね、すごくあなたに会いたくなるの。会社で働いているときとかね」

「うん」と僕は言う。

「ときどき」と彼女は言葉を強調して言う。そして三十秒くらい間を置く。ヒューマン・リーグの唄が終わり、知らないバンドの曲になる。「それが問題点なのよ、あなたの」と彼女は続ける。「私はあなたとね

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

たちやこうしているのって大好きなんだけど、毎日朝から晩までずっと一緒にいたいとは思えないのよ。どういうわけか」

「うん」と僕は言う。

「あなたといると気づまりだとかそういうんじゃないのよ。ただ一緒にいるとね、時々空気がすうっと薄くなってくるような気がするのよ。まるで月にいるみたいに」

「これは小さな一歩だけれど――」

「ねえ、これ冗談じゃないのよ」と彼女は体を起こして僕の顔をじっとのぞきこんだ。「私、あなたの為に言ってるのよ。誰かあなたの為に何か言ってくれる人、他にいる？　どう？　そういうこと言ってくれる人、他にいる？」

「いない」と僕は正直に言う。一人もいない。

彼女はまた横になって、乳房をやさしく僕の脇腹につける。僕は手のひらで彼女の背中をそっと撫でる。

「とにかく時々、月にいるみたいに空気が薄くなるのよ、あなたと一緒にいると」

「月の空気は薄くない」と僕は指摘する。「月面には空気は全く存在しないんだ。だから――」

「薄いのよ」と彼女は小さな声で言う。彼女が僕の発言を無視したのか、あるいは全然耳に入らなかったのかは、僕にはわからない。でも彼女の声の小ささが僕を緊張させる。どうしてかはわからないけれど、そこには僕を緊張させる何かがふくまれている。「ときどきすうっと薄くなるのよ。そして私とはぜんぜん違う空気をあなたが吸っているんだと思うの。そう認識するの」

「データが不足しているんだ」と僕は言う。

「私があなたについて何も知らないということかしら、それ？」

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

「僕自身も自分についてよくわかってないんだ」と僕は言う。「本当にそうなんだよ。別に哲学的な意味で言ってるんじゃない。もっと実際的な意味で言ってるんだ。全体的にデータが不足している」
「でもあなたもう三十三でしょう？」と彼女は言う。彼女は二十六だ。
「三十四」と僕は訂正する。「三十四歳と二ヵ月」
彼女は首を振る。そしてベッドを出て、窓のところに行き、カーテンを開ける。窓の外には高速道路が見える。道路の上には骨のように白い午前六時の月が浮かんでいる。彼女は僕のパジャマを着ている。
「月に戻りなさい、君」と彼女はその月を指し示して言う。
「寒いだろう？」と僕は言う。
「寒いって、月のこと？」
「違うよ。今の君のことだよ」と僕は言う。今は二月なのだ。彼女は窓際に立って白い息を吐いている。僕がそう言うと、彼女はやっと寒さに気づいたようだった。
彼女は急いでベッドに戻る。僕は彼女を抱き締める。そのパジャマはすごくひやりとしている。彼女は鼻先を僕の首に押し付ける。その鼻先もとても冷たい。「あなたのこと好きよ」と彼女は言う。
僕は何か言おうと思うのだけれど、上手く言葉が出てこない。僕は彼女に好意を抱いている。こうしてふたりでベッドの中にいると、とても楽しく時を過ごすことができる。僕は彼女の体を温めたり、髪をそっと撫でていたりするのが好きなのだ。彼女の小さな寝息を聞いたり、朝になって彼女を会社に送りだしたり、彼女が計算した――と僕が信じている――電話料金の請求書を受け取ったり、僕の大きなパジャマを彼女が着ているのを見たりするのが好きなのだ。でもそういうことって、いざとなると一言で上手く表現できない。愛しているというのではもちろんないし、好きというのでもない。
何と言えばいいのだろう？

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

でもとにかく僕には何も言えない。言葉というものがまったく浮かんでこない。そして僕が何も言わないことで彼女が傷ついていることが感じられる。彼女はそれを僕に感じさせまいとしているのだが、でも僕には感じられる。柔らかな皮膚の上から彼女の背中の骨の形を辿りながら、僕はそれを感じるのだ。とてもはっきりと。僕らはしばらく何も言わずに抱き合って、題もわからない唄を聴いている。彼女は僕の下腹にそっと手のひらをあてる。

「月世界の女の人と結婚して立派な月世界人の子供を作りなさい」と彼女は優しく言う。「それがいちばんよ」

開け放しになった窓からは月が見えた。僕は彼女を抱いたまま、その肩越しにじっと月を見ていた。時折何かひどく重い物を積んだ長距離トラックが崩壊し始めた氷山のような不吉な音を立てて高速道路を走り抜けていった。いったい何を運んでいるのだろう、と僕は思った。

「朝御飯、何がある?」と彼女は僕に尋ねる。

「特に変わったものはないね。いつもとだいたい同じだよ。ハムと卵とトーストと昨日の昼に作ったポテト・サラダ、そしてコーヒー。君のためにミルクを温めてカフェ・オ・レを作る」

「素敵」と彼女は言って微笑む。「ハムエッグを作って、コーヒーをいれて、トーストを焼いてくれる?」

「もちろん。喜んで」と僕は言う。

「私のいちばん好きなことって何だと思う?」

「正直言って見当がつかない」

「私がいちばん好きな事、何かというとね」と彼女は僕の目を見ながら言う。「冬の寒い朝に嫌だな、起きたくないなと思いつつ、コーヒーの香りと、ハムエッグの焼けるじゅうじゅういう匂いと、トースターの切れるパチンという音に我慢しきれずに、思い切ってさっとベッドを抜け出すことなの」

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

「よろしい。やってみよう」と僕は笑って言う。

＊

僕は変わった人間なんかじゃない。

本当にそう思う。

僕は平均的な人間だとは言えないかもしれないが、でも変わった人間ではない。僕は僕なりにしごくまともな人間なのだ。とてもストレートだ。矢のごとくストレートだ。僕は僕としてごく必然的に、ごく自然に存在している。それはもう自明の事実なので、他人が僕という存在をどう捉えたとしても僕はそれほど気にはしない。他人が僕をどのように見なそうと、それは僕には関係のない問題だった。それは僕の問題というよりはむしろ彼らの問題なのだ。

ある種の人間は僕を実際以上に愚鈍だと考えるし、ある種の人間は僕を実際以上に計算高いと考える。でもそれはどうでもいいことだ。それに「実際以上に」という表現は、僕の捉えた僕自身の像に比べてということに過ぎないのだ。彼らにとっての僕はあるいは現実的に愚鈍であり、あるいは計算高い。それは別にどちらでもいい。たいした問題ではない。世の中には誤解というものはない。考え方の違いがあるだけだ。それが僕の考え方だ。

しかしそれとは別に、その一方で、僕の中のそのまともさに引かれる人間がいる。とても数少なくはあるけれど、でも確かに存在する。彼ら／彼女たち、と僕とは、まるで宇宙の暗い空間に浮かぶ二つの遊星のようにごく自然に引き合い、そして離れていく。彼らは僕のところにやってきて、僕と関わり、そしてある日去っていく。彼らは僕の友人になり、恋人になり、妻にもなる。ある場合には対立する存在にもなる。でもいずれにせよ、みんな僕のもとを去っていく。彼らはあきらめ、あるいは絶望し、あるいは沈黙

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

し（蛇口をひねってももう何も出てこない）、そして去っていく。僕の部屋には二つドアがついている。一つが入り口で、一つが出口だ。互換性はない。入り口からは出られないし、出口からは入れない。それは決まっているのだ。人々は入り口から入ってきて、出口から出ていく。いろんな入り方があり、いろんな出方がある。しかしいずれにせよ、みんな出ていく。あるものは新しい可能性を試すために出ていったし、あるものは時間を節約するために出ていった。あるものは死んだ。残った人間は一人もいない。部屋の中には誰もいない。僕がいるだけだ。そして僕は彼らの不在をいつも認識している。去っていった人々を。彼らの口にした言葉や、彼らの息づかいや、彼らの口ずさんだ唄が、部屋のあちこちの隅に塵のように漂っているのが見える。

彼らが見た僕の像はおそらくかなり正確なものだったのではないかという気がする。だからこそ彼らはみんな僕のところにまっすぐやってきて、そしてやがて去っていったのだ。彼らは僕の中にまともさを認め、僕がそのまともさを維持していこうとする僕なりの誠実さ——という以外の表現を思いつけないのだ——を認めた。彼らは僕に対して何かを言おうとしたり、心を開こうとしたりした。彼らの殆どは心優しい人々だった。でも僕には彼らに何かを与えることはできなかった。もし与えることができたとしても、それだけでは足りなかった。僕はいつも彼らに出来る限りのものを与えようと努力した。できるだけのことは全部やった。僕も彼らに何かを求めようとした。でも結局は上手くいかなかった。そして彼らは去っていった。

それはもちろん辛いことだった。

でももっと辛いのは、彼らが入ってきた時よりずっと哀し気に部屋を出ていくことだった。彼らが体の中の何かを一段階磨り減らせて出ていくことだった。僕にはそれがわかった。変な話だけれど、僕よりは彼らの方がより多く磨り減っているように見えた。どうしてだろう？　何故いつも僕が残されるのだ？

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

そして何故いつも僕の手の中に磨り減った誰かの影が残されているのだ？　何故だろう？　わからないな。
データが不足しているのだ。
だからいつも回答がでてこないのだ。
何かが欠けているのだ。

ある日仕事の打ち合わせから戻ってみると、郵便受けに絵はがきが入っていた。宇宙飛行士が宇宙服を着て月面を歩いている写真の絵はがきだった。差しだし人の名前は書いてなかったけれど、それが誰からのはがきなのかは一目で理解できた。
「もう私たちは会わないほうがいいだろうと思います」と彼女は書いていた。「私はたぶん近いうちに地球人と結婚することになると思うから」
ドアの閉まる音が聞こえる。
でーたフソクノタメ、カイトウフカノウ。トリケシきいヲオシテクダサイ。
画面が白くなる。
いつまでこんなことが続くのだろう？　と僕は思った。僕はもう三十四だ。いつまでこれが続くのだ？
僕は哀しくはなかった。だってそれは明らかに僕の責任なのだ。彼女が僕のもとを離れていくのは当然のことだし、それは始めからわかっていたのだ。彼女にもわかっていたし、僕にもわかっていた。でも我々はささやかな奇跡を求めてもいたのだ。ちょっとしたきっかけで根本的な転換がやってくるかもしれないというようなことを。しかしもちろんそんなものはやってはこなかった。そして彼女は出ていった。
彼女がいなくなったことで僕は寂しい気持ちになったが、それは以前にも経験したことのある寂しさだっ

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

た。そして自分がその哀しさを上手くやりすごせるということもわかっていた。

僕は摩れつつあるのだ。

そう思うと僕は嫌な気持ちになった。内臓から黒い液がどっぷりと絞り出されて喉もとまで上がってくるような気がした。僕は洗面所の鏡の前に立って、これが俺自身だと思った。これがお前だ。お前が自分自身を磨り減らせてきたのだ。お前が思っているよりはずっと多くお前は磨り減ってきたんだ、と。僕の顔はいつもよりずっと汚く、ずっと老けて見えた。僕は石鹸で丁寧に顔を洗い、ローションを肌に擦り込み、それからまた手をゆっくり洗い、新しいタオルで手と顔をよく拭いた。そしてキッチンに行って缶ビールを飲みながら冷蔵庫の整理をした。萎びたトマトを捨て、ビールをきちんと並べ、容器をうつしかえ、買い物のリストを作った。

明け方に僕は一人でぼんやりと月を眺めながら、これがいつまで続くんだろうと思った。僕はやがてまたどこかで別の女にめぐりあうだろう。我々は遊星のように自然に引き合うのだ。そして我々はまたむなしく奇跡を期待し、時を食み、心を磨り減らせ、別れていくのだ。

それがいつまでつづくのだ？

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

2

彼女から月面の絵はがきが届いた一週間後に、僕は仕事で函館に行くことになった。例によってあまり魅力的とは言いがたい仕事だったが、僕は仕事のよりごのみが出来るような立場にはなかった。それにだいたい僕のところに回ってくるどの仕事をとってみても、そこにはよりごのみをするほどの差はないのだ。幸か不幸か一般的に物事というのは端っこに行けば行くほど、その質の差が目立たなくなってくる。周波数と同じことだ。あるポイントを越してしまうと、隣接する二つの音のどちらが高いかなんて殆ど聴きわけられないし、やがては聴きわけるまでもなく何も聞こえなくなってしまう。

それはある女性誌のために函館の美味い食べ物屋を紹介するという企画だった。僕とカメラマンとで店を幾つか回り、僕が文章を書き、カメラマンがその写真を撮る。全部で五ページ。女性誌というのはそういう記事を求めているし、誰かがそういう記事を書かなくてはならない。ごみ集めとか雪かきとかと同じことだ。だれかがやらなくてはならないのだ。好むと好まざるとにかかわらず。

僕は三年半の間、こういうタイプの文化的半端仕事をつづけていた。文化的雪かきだ。

ある事情でそれまで友人と二人で経営していた事務所を辞めたあと、僕は半年ばかり殆ど何もせずにただぼんやりと生きていた。何をする気も起きなかったのだ。その前の年の秋から冬にかけては実にいろんなことがあった。離婚した。友達が死んだ。不思議な死だった。女が何も言わずに去っていった。奇妙な人々に会い、奇妙な事件に巻き込まれた。そして全てが終わった時、僕はそれまでに経験したこともない

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

く、僕は静かにそっけなく包みこまれていた。恐ろしいほどの濃密な不在感が僕の部屋の中に漂っていた。僕はその無音の中に半年間じっと閉じこもっていた。生存に必要な最低限の買い物をすることを除けば、昼間は殆ど外に出なかった。人気のない明け方の時間に僕は街をあてもなく散歩した。人々が街に姿を見せ始めるころになると部屋に戻って眠った。

そして夕方前に目を覚まして簡単な食事を作って食べ、猫にもキャット・フードをやった。食事が終わると床に座って僕の身に起こったことを何度も何度も思い返して、整理してみた。順番を並べかえたり、そこに存在したはずの選択肢をリスト・アップしたり、自分の行動の正否について考えを巡らせたりした。それを明け方まで続けた。そしてまた外に出てあてもなく無人の街を彷徨い歩いた。

僕は半年間それを毎日毎日続けた。そう、一九七九年の一月から六月まで。僕は一冊の本も読まなかった。新聞さえ開かなかった。音楽も聞かなかった。TVも見なければ、ラジオも聞かなかった。誰とも会わなかったし、誰とも話をしなかった。酒も殆ど飲まなかった。飲みたいという気になれなかったのだ。世の中で何が起こっているのか、誰が有名になって誰が死んだのか、僕は何ひとつ知らなかった。一切の情報をかたくなに拒否していたというわけではない。ただとくに知りたいとも思わなかっただけだ。世界が動いていることは僕にも感じられた。部屋のなかにじっとしていても、僕はその動きを肌に感じることはできた。でもそれに対して僕は何の興味も抱けなかった。全ては無音の微風のごとく、僕のまわりを吹き過ぎていった。

僕はただ部屋の床に座って、頭の中に過去を再現しつづけていた。不思議な話だけれど、半年間それを毎日毎日続けても僕は退屈や倦怠というものをまるで感じなかった。何故なら、僕が体験したその出来事は余りにも巨大であり、余りにも多くの断面を有していたからだ。巨大で、そしてリアルだった。手を触れられるくらいに。それはまるで夜の闇の中にそびえたつモニュメントのようだった。そしてそのモニュ

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

ノントは僕ひとりのためにそびえていたのだ。僕は全てを隈なく検証した。僕はその出来事を通り抜けたことによってもちろんそれなりのダメージを受けてはいた。少なくはないダメージだった。多くの血が音もなく流れた。いくつかの痛みは時がたてば消えたが、いくつかの痛みはあとになってやってきた。しかし僕が半年間じっとその部屋の中に籠もり続けていたのは、その傷のためではなかった。僕はただ時間を必要としていただけなのだ。その出来事に関わる全てを具体的に——実際的に——整理し、検証するのに半年という時間が必要だったのだ。僕は決して自閉的になっていたり、外的世界をかたくなに拒否していたりしていたわけではない。ただ単にそれは時間的な問題だった。もう一度自己をきちんと回復し、立て直すための純粋に物理的な時間が僕には必要だったのだ。

自己を立て直すことの意味と、その後の方向性についてまでは考えないようにした。それはまた別の問題だ、と僕は思った。それについてはまたあとで考えればいい。まず第一に平衡性を回復するのだ。

僕は猫とさえ話をしなかった。

何度か電話がかかってきたが、僕は受話器を取らなかった。

誰かが時々ドアをノックしたが、僕は応えなかった。

手紙も何通か来た。僕のかつての共同経営者が僕の事を心配していると書いてきた。どこにいて何をしているのかわからない。とりあえずここの住所に手紙を書いておく。何か出来ることがあったら言ってほしい。こちらの仕事は今のところまずまず順調である、と書いてあった。共通の知人の消息についても触れてあった。僕は何度かそれを読み返してみて、内容を把握してから（把握するまでに四回か五回読みかえさなくてはならなかった）机の引きだしにしまった。

別れた妻からの手紙も来た。手紙には幾つか実際的な用事が書いてあった。非常に実際的なトーンの手紙だった。しかし終わりの方に自分は再婚することになった、再婚の相手はあなたの知らない人だ、と書

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

いてあった。この先知ることもないだろう、と言いたそうなそっけのない書き方だった。ということは、僕と離婚した時につきあっていた相手とは別れたということだった。まあそうだろうな、と僕は思った。僕はその男のことをよく知っていたが、それほど大した男ではなかったからだ。ジャズ・ギターを弾いていたが、特に驚くような才能を持っていたわけでもなかった。特に面白い人物でもなかった。彼女がどうしてそんな男に引かれたのか僕にはぜんぜん見当がつかなかった。でもまあ、それは他人と他人の間の問題だ。僕については何も心配していない、と彼女は書いていた。あなたは何をしてでもちゃんとやっていく人だから。私が心配しているのはこの先あなたが関わっていくであろう人々のことです。私は最近そういうことが何だかとても心配なのです、と。

僕はその手紙も何度か読みかえし、それからやはり机の引きだしに入れた。

そんな具合に時が流れていった。

金銭面での問題はなかった。とりあえず半年暮らしていけるくらいの蓄えはあったし、その先のことは先になって考えればよかった。冬が去り、春がやってきた。春は僕の部屋を温かい平和な光で満たした。窓から差し込む光が描く線を毎日じっと眺めていると、太陽の角度が少しずつ変化していくのがわかった。春はまた僕の心を様々な古い思い出で満たした。去っていった人々、死んでしまった人々。僕は双子のことを思い出した。僕は彼女たちと三人でしばらく暮らした。一九七三年のことだ、たしか。そのころ僕はゴルフ場のわきに住んでいた。日が暮れると、僕らは金網を乗り越えてゴルフ場の中に入り、あてもなく散歩し、ロスト・ボールを拾った。春の夕暮れは僕にそんな情景を思い起こさせた。みんな何処に行ってしまったんだろう？

入り口と出口。

死んでしまった友達と二人で通った小さなスナック・バーのことも思い出した。僕らはそこでとりとめ

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

もなく時を過ごしたものだった。でも今になってみれば、それがこれまでの人生でいちばん実体のある時間であったような気がする。変なものだ。そこでかかっていた古い音楽のことも思い出した。我々は大学生だった。我々はそこでビールを飲み、煙草を吸った。我々はそういう場所を必要としていたのだ。そしていろんな話をした。でもどんな話をしたかは思い出せない。ただいろんな話をしたとしか思い出せないのだ。

彼はもう死んでしまった。

あらゆる物を抱え込んで、彼は死んでいった。

入り口と出口。

春はどんどん深まっていった。風の匂いが変わっていった。夜の闇の色合いも変化した。音も違った響きを帯びるようになっていった。そして季節は初夏に変わった。

五月の終わりに猫が死んだ。唐突な死だった。何の予兆もなかった。ある朝起きてみたら猫は台所の隅で丸くなって死んでいた。たぶん本人にもよくわからないまま死んでしまったのだろう。体は冷えたロースト・チキンみたいにかちかちになり、毛なみは生きていた時よりもっと汚く見えた。「いわし」という名の猫。彼の人生は決して幸せな代物ではなかった。とくに誰かから深く愛されたわけでもないし、とくに何かを深く愛したわけでもなかった。彼はいつも不安そうな目で人の顔を見た。自分はこれから何を失おうとしているのだろう、というような目で。そんな目つきのできる猫は他にはちょっといない。でもとにかく死んでしまった。一度死んでしまえば、それ以上失うべきものはもう何もない。それが死の優れた点だ。

僕は猫の死骸をスーパーマーケットの紙袋に入れて車の後部席に置き、近くの金物屋でシャベルを買った。そして実に久し振りにラジオのスイッチを入れ、ロック・ミュージックを聴きながら西に向かった。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

大抵はつまらない音楽だった。フリートウッド・マック、アバ、メリサ・マンチェスター、ビージーズ、KCアンド・ザ・サンシャインバンド、ドナ・サマー、イーグルズ、ボストン、コモドアズ、ジョン・デンヴァー、シカゴ、ケニー・ロギンズ……。そんな音楽が泡のように浮かんでは消えていった。くだらない、と僕は思った。ティーン・エイジャーから小銭を巻き上げるためのゴミのような大量消費音楽。

　でもそれからふと哀しい気持ちになった。

　時代が変わったのだ。それだけのことなのだ。

　僕はハンドルを握りながら、僕らがティーン・エイジャーだったころにラジオからながれていた下らない音楽を幾つか思い出してみようとした。ナンシー・シナトラ、うん、あれは屑だった、と僕は思った。モンキーズもひどかった。エルヴィスだってずいぶん下らない曲をいっぱい歌っていた。トリニ・ロペスなんていうのもいたな。パット・ブーンの大方の曲は僕に洗顔石鹸を思い起こさせた。フェビアン、ボビー・ライデル、アネット、それからもちろんハーマンズ・ハーミッツ。あれは災厄だった。次から次へと出てきた無意味なイギリス人のバンド。髪が長く、奇妙な馬鹿気た服をきていた。いくつ思い出せるかな？　ハニカムズ、デイブ・クラーク・ファイブ、ジェリーとペースメーカーズ、フレディーとドリーマーズ……きりがない。死後硬直の死体を思わせるジェファーソン・エアプレイン。トム・ジョーンズ――名前を聞いただけで体がこわばる。そのトム・ジョーンズの醜いクローンであるエンゲルベルト・フンパーディング。何を聞いても広告音楽に聞こえるハーブ・アルパートとティファナ・ブラス。あの偽善的なサイモンとガーファンクル。神経症的なジャクソン・ファイブ。

　同じようなものだった。

　何も変わってやしない。いつだっていつだっていつだって、物事の在り方は同じなのだ。ただ年号が変わって、人が入れ替わっただけのことなのだ。こういう意味のない使い捨て音楽はいつの時代にも存在し

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

たし、これから先も存在するのだ。月の満ち干と同じように。
僕はぼんやりとそんなことを考えながらずいぶん長く車を走らせた。途中でローリング・ストーンズの「ブラウン・シュガー」がかかった。僕は思わず微笑んだ。素敵な曲だった。「まともだ」と僕は思った。「ブラウン・シュガー」が流行ったのは一九七一年だったかな、と僕は考えた。しばらく考えてみたが、正確には思い出せなかった。でも別にどうでもいいことだった。一九七一年だろうが一九七二年だろうが、今となってはどっちでもいいことなのだ。どうしてそんなことをいちいち真剣に考えるのだろう?
適当に山深くなったところで僕は高速道路を下り、適当な林をみつけてそこに猫を埋めた。林の奥の方にシャベルで一メートルほどの深さの穴を掘り、西友ストアの紙袋でくるんだままの「いわし」を放り込み、その上に土をかけた。悪いけど、俺たちにはこれが相応なんだよ、と僕は最後に「いわし」に声をかけた。僕が穴を埋めているあいだ、どこかで小鳥がずっと啼き続けていた。フルートの高音部のような音色の声で啼く鳥だった。
穴をすっかり埋めてしまうと、僕はシャベルを車のトランクに入れ、高速道路にもどった。そしてまた音楽を聴きながら東京に向けて車を走らせた。
何も考えなかった。僕はただ音楽に耳を澄ませていた。
ロッド・スチュアートとJ・ガイルズ・バンドがかかった。それからアナウンサーがここでオールディーズを一曲、と言った。レイ・チャールズの「ボーン・トゥー・ルーズ」だった。それは哀しい曲だった。「僕は生まれてからずっと失い続けてきたよ」とレイ・チャールズが歌っていた。「そして僕は今君を失おうとしている」。その唄を聴いていて、僕は本当に哀しくなった。涙が出そうなほどだった。ときどきそういうことがある。何かがちょっとした加減で、僕の心の一番柔らかな部分に触れるのだ。僕は途中でラジオを消して、サービス・エリアに車を停め、レストランに入って野菜のサンドイッチとコーヒーを

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

注文した。洗面所に入って手についた土を綺麗に洗い、サンドイッチをひときれだけ食べ、コーヒーを二杯飲んだ。

猫は今頃どうしているだろう、と僕は思った。あそこは真っ暗だろうな、と僕は思った。西友ストアの紙袋に土の当たる音を思い出した。でもそれが相応なんだよ。僕にもお前にも。

僕は一時間、そのレストランで野菜サンドイッチの盛られた皿をぼんやりと見つめていた。ちょうど一時間後に葦色の制服を着たウェイトレスがやってきて、その皿を下げていいか、と遠慮がちに僕に聞いた。僕は肯いた。

さて、と僕は思った。

社会に戻るべき時だった。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

この巨大な蟻塚のような高度資本主義社会にあっては仕事を見つけるのはさほど困難な作業ではない。その仕事の種類や内容について贅沢さえ言わなければ、ということだ、もちろん。

僕は事務所を持っていたころ編集の仕事にはけっこう関わっていたし、その過程でこまごまとした文章も自分で書いていた。そういう業界の関係の知り合いも何人かはいた。だからフリーのライターとして自分一人ぶんの生活費を稼ぎ出すくらいはまあ簡単なことだった。もともと僕はあまり生活費のかからない人間なのだ。

3

僕は昔の手帳をひっぱりだして何人かに電話をかけてみた。そして率直に、何か僕にできる仕事はないだろうかと聞いてみた。事情があってしばらくぶらぶらしてたんだけれど、できたらまた仕事をしたいんだと僕は言った。彼らはすぐにいくつか仕事をまわしてくれた。たいした仕事ではない。大体はPR誌や企業パンフレットの穴埋め記事の仕事だった。ごく控え目に言って、僕の書かされた原稿の半分はまったく無意味で、誰の役にも立ちそうもない代物だった。パルプとインクの無駄遣い。でも僕は何も考えずに、殆ど機械的にきちんきちんと仕事を片付けていった。最初のうちは仕事量は大したものではなかった。一日に二時間ほど仕事をして、あとは散歩したり、映画を見にいったりしていた。ずいぶん沢山の映画を見た。三ヵ月ほどそんな調子で僕はのんびりとやっていた。何はともあれとにかく少しは社会と関わっているのだと思うと僕はほっとした気持ちになれた。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

僕のまわりの状況が変化を見せ始めたのは秋に入って間もなくだった。仕事の依頼が突然激増したのだ。僕の部屋の電話はひっきりなしに鳴り、郵便物の量も増えた。僕は仕事の打ち合わせで沢山の人間に会い、一緒に食事をした。彼らは僕に親切にしてくれたし、これから先もどんどん仕事を回すからと言ってくれた。

理由は簡単だった。僕は仕事のよりごのみをしなかったし、まわってくる仕事は片っ端から引受けた。期限前にちゃんと仕上げたし、何があっても文句を言わず、字もきれいだった。仕事だって丁寧だった。他の連中が手を抜くところを真面目にやったし、ギャラが安くても嫌な顔ひとつしなかった。午前二時半に電話がかかってきてどうしても六時までに四百字詰め二十枚書いてくれ(アナログ式時計の長所について、あるいは四十代女性の魅力について、あるいはヘルシンキの街——もちろん行ったことはない——の美しさについて)と言われれば、ちゃんと五時半には仕上げた。書き直せと言われれば六時までに書き直した。評判が良くなって当然だった。

雪かきと同じだった。

雪が降れば僕はそれを効率良く道端に退かせた。

一片の野心もなければ、一片の希望もなかった。来るものを片っ端からどんどんシステマティックに片付けていくだけのことだ。正直に言ってこれは人生の無駄遣いじゃないかと思うこともないではなかった。でもパルプとインクがこれだけ無駄遣いされているのだから、僕の人生が無駄遣いされたとしても文句を言える筋合いではないだろう、というのが僕の到達した結論だった。我々は高度資本主義社会に生きているのだ。そこでは無駄遣いが最大の美徳なのだ。政治家はそれを内需の洗練化と呼ぶ。僕はそれを無意味な無駄遣いと呼ぶ。考え方の違いだ。でもたとえ考え方に相違があるにせよ、それがとにかく我々の生きている社会なのだ。それが気にいらなければ、バングラデシュかスーダンに行くしかない。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

僕はとくにバングラデシュにもスーダンにも興味が持てなかった。

だから黙々と仕事を続けた。

そのうちにPRの仕事だけではなく、一般誌の仕事の依頼も来るようになった。どういうわけか女性誌の仕事が多かった。インタビューの仕事や、ちょっとした取材記事を手掛けるようになった。でもそういうのがPR誌にくらべてとくに仕事として面白いわけではなかった。僕がインタビューする相手は雑誌の性格上、大半が芸能人だった。誰に何を聞いても、判で押したような答えしか返ってこなかった。彼らがどう答えるかは質問する前から予想がついた。ひどい時には、まずマネージャーが僕を呼びつけて、どんな質問をするのか、前もって教えてくれと言った。だから僕がする質問の答えは始めから全部きちんと答えが用意されていた。僕がその十七歳の女性歌手に決められた以外の質問をすると、隣にいるマネージャーが「そういうことは話が違うからちょっと答えられない」と口を出した。やれやれこの女の子はマネージャーなしには十月の次に何月がくるのかもわからないんじゃないだろうかと僕は時々真剣に心配したものだった。そんな代物はもちろんインタビューとも言えない。でも僕はベストをつくしてやった。インタビューの前にはできるだけ綿密な調査をしたし、他人があまりやらないような質問を考えた。構成に細かく工夫を凝らした。そんなことしたって特に評価されるわけでもないし、誰かから温かい言葉をかけられるわけでもない。僕がそういう風に一所懸命やったのはそうすることが、僕にとってはいちばん楽だったからだ。自己訓練。しばらく働かせていなかった指と頭を実際的な――そして出来ることなら無意味な――物事に向けて酷使すること。

社会復帰。

僕はそれまでに経験したことがないような忙しい日々を送るようになった。定期的な仕事を幾つか抱えたうえに、飛び込みの仕事も多かった。誰も引き受け手のみつからない仕事は必ず僕のところに回ってき

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

た。トラブルを抱えたややこしい仕事も必ず僕のところに回ってきた。僕はその社会の中では町はずれの廃車置き場のような位置をしめていた。何かの具合が悪くなると、みんな僕のところにそれを捨てにきた。誰もが寝静まった夜更けに。

おかげで僕の貯金通帳の数字は僕がそれまで見たこともないような額に膨れあがっていったし、忙しすぎてそれを使う暇もなかった。僕は問題の多かったこれまでの車を処分して、知り合いからスバル・レオーネを安く譲ってもらった。ひとつ前のモデルだったが、それほどの距離は走ってなかったし、カー・ステレオとエアコンまでついていた。そんなものがついた車に乗るなんて生まれて初めてのことだった。これまでのアパートは都心から離れすぎていたので、渋谷の近くに引っ越した。窓のすぐ前が高速道路で少々うるさくはあったけれど、それさえ気にしなければなかなか良いアパートだった。

仕事のうえで知り合った何人かの女の子と寝た。

社会復帰。

僕は自分がどんな女の子と寝ればいいのかがわかっていた。そして誰と寝ることができて誰と寝ることができないのかもわかっていた。誰と寝るべきじゃないのかも。年をとればそういうのが自然にわかるようになってくるものなのだ。そしてどこが切り上げ時かもわかっていた。そういうのはとても自然で楽なことだった。だれも傷つけなかったし、僕の方も傷つかなかった。あの締め付けられるような心の震えがないだけだった。

ぼくがいちばん深く関わったのは、例の電話局につとめる女の子だった。彼女とはどこかの年末のパーティーで知り合った。二人とも酔っぱらっていて、冗談を言いあって、意気投合して、僕のアパートに行って寝た。彼女は頭が良くて、脚がとても綺麗な子だった。僕らは中古のスバルに乗って、いろんなところにドライブにも行った。彼女は気が向いた時に僕に電話をかけてきて、泊まりにいっていいかと聞い

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

た。そういう一歩つっこんだ関係になった相手は彼女だけだった。そんな関係が何処にも到達しないことは僕にも彼女にもわかっていた。でも人生のある種の猶予期間のようなものを、僕らは二人で静かに共有した。それは僕にとっても久し振りに心おだやかな日々だった。僕らは優しく抱き合い、小さな声で話をした。僕は彼女の為に料理を作り、誕生日にはプレゼントを交換した。僕らはジャズ・クラブに行って、カクテルを飲んだ。僕らは口論ひとつしなかった。僕らはお互いが何を求めているのかを心得ていた。でもそれも結局は終わってしまった。それはある日突然フィルムが切れるみたいにぷつんと終わってしまったのだ。

彼女が去っていったことは、僕の中に予想以上の喪失感をもたらした。しばらくの間、自分自身がたまらなく空虚に感じられた。僕は結局どこにも行かない。みんなが次々に去っていき、僕だけが引き延ばされた猶予期間の中にいつまでもとどまっていた。現実でありながら現実でない人生。

でもそれが僕が空虚さを感じたいちばん大きな理由ではなかった。

いちばんの問題は僕が心の底からは彼女を求めてはいなかったということだった。僕は彼女のことが好きだった。彼女と一緒にいるのが好きだった。彼女と二人でいると、僕は心地好い時間を送ることができた。優しい気持ちにもなれた。でも結局のところ僕は彼女を求めてはいなかったのだ。彼女が去ってしまった三日ばかり後で、僕はそのことをはっきりと認識した。そう、結局のところ彼女の隣にいながら僕は月の上にいたのだ。脇腹に彼女の乳房の感触を感じながら僕が本当に求めていたのはもっと別のものだったのだ。

僕は四年かけてなんとか自らの存在の平衡性を取り戻した。僕は与えられた仕事をひとつひとつきちんと片付けてきたし、人々は僕に信頼感を抱いてくれた。それほど数多くないにせよ、何人かは僕に好意のようなものを抱いてくれた。でも、言うまでもないことだけれど、それだけでは足りなかったのだ。全然

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

戻らなかったのだ。要するに僕は時間をかけてやっと出発点に戻りついたというだけなのだ。

さて、と僕は思った。三十四にして僕は再び出発点に戻ったわけだ。さて、これからどうすればいいのだろう？　まず何をすればよいか？

考えるまでもなかった。何をすればよいかは、はじめからわかっていた。結論はずっと前から固い雲のように僕の頭上にぽっかりと浮かんでいた。僕はただそれを実行に移す決心をつけることができなくて、一日また一日と後回しにしていただけなのだ。いるかホテルに行くのだ。それが出発点なのだ。

そして僕はそこで彼女に会わなくてはならない。僕をいるかホテルに導いた、あの高級娼婦をしていた女の子に。何故ならキキは今僕にそれを求めているからだ（読者に・彼女は名前を必要としている。たとえそれがとりあえずの名前であったとしてもだ。彼女の名はキキという。片仮名のキキ。僕はその名前を後になって知ることになる。その事情は後で詳述するが、僕はこの段階で彼女にその名前を付与することにする。彼女はキキなのだ。少なくとも、ある奇妙な狭い世界の中で、彼女はそういう名前で呼ばれていた）。そしてキキがスターターの鍵を握っているのだ。僕は彼女をもう一度この部屋に呼び戻さなくてはならない。一度出ていったものはもう二度と戻ってはこないこの部屋に。そんなことが可能なのかどうか、僕にはわからない。でもとにかくやってみるしかないのだ。そこから新しいサイクルが始まるのだ。

僕は荷物をまとめ、とりあえず締切の迫っていた仕事をおお急ぎで片っ端から片付けてしまった。そして予定表に書いてあった来月の仕事を全部キャンセルした。みんなに電話をかけ、家庭の事情でどうしても一ヵ月東京を離れなくてはならないことになった、と言った。何人かの編集者はぶつぶつと文句を言ったが、僕がそんなことをするのはこれが初めてだったし、日程もまだずっと先のことだったから、彼らとしても今からならなんとでも手の打ちようがあった。だから、結局みんな了承してくれた。一ヵ月後にはちゃんと帰ってきてまた仕事をするからと僕は言った。そして僕は飛行機に乗って北海道に向かった。一

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

九八三年の三月の始めのことだった。

でももちろん僕のその戦場離脱は一ヵ月では終わらなかった。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

4

僕はタクシーを二日借りきって、カメラマンと二人で雪の降り積もった函館の食べ物屋を片っ端からまわっていった。

僕の取材はシステマティックで効率の良いものだった。この手の取材でいちばん大事なことは下調べと綿密なスケジュールの設定である。それが全てと言ってもいい。僕は取材前に徹底的に資料を集める。僕のような仕事をしている人間のために様々な調査をしてくれる組織がある。会員になって年会費を納めれば、たいていのことは調べてくれる。たとえば函館の食べ物屋についての資料をほしいといえば、かなりの量を集めてくれる。大型のコンピューターを使って情報の迷宮の中から効果的に必要な物をかきあつめてくるわけだ。そしてコピーをとって、きちんとファイルして、届けてくれる。もちろんそれなりの金はかかるが、時間と手間を金で買うのだと思えば決して高い金額ではない。

それとは別に、僕は自分の足を使って歩きまわり、独自の情報も集める。旅行関係の資料を集めた専門図書館もあるし、地方新聞・出版物を集めている図書館もある。そういう資料を全部集めれば相当な量になる。その中から物になりそうな店をピックアップする。それぞれの店に前もって電話をかけて、営業時間と定休日をチェックする。これだけ済ませておけば、現地に行ってからの時間が相当節約される。ノートに線を引いて一日の予定表を組む。地図を見て、動くルートを書き込む。不確定要素は最小限に押さえる。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

現地についてから、カメラマンと二人で店を順番に回っていく。全部で約三十店。もちろんほんの少し食べてあとはあっさり残す。味を見るだけだ。消費の洗練化。この段階では我々は取材であることを隠している。写真も写さない。店を出てから、カメラマンと僕とで味について討議し、十点満点で評価する。良ければ残すし、悪ければ落とす。だいたい半分以上を落とす見当でやる。そしてそれと平行して、地元のミニコミ誌と接触してリストからこぼれている店を五つばかり推薦してもらう。ここも回る。選ぶ。そして最終的な選択が終わるとそれぞれの店に電話をかけ、雑誌の名前を言って、取材と写真撮影を申し込む。これだけを二日で済ませる。夜のうちに僕はホテルの部屋で大体の原稿を書いてしまう。

翌日はカメラマンが料理の写真を手早く写し、その間に僕が店主に話を聞く。手短に。全ては三日で片付く。もちろんもっと早くすませてしまう同業者もいる。でも彼らは何も調べない。適当に有名店を選んで回るだけだ。中には何も食べないで原稿を書く人間だっている。書こうと思えば書けるのだ、ちゃんと。率直に言って、この種の取材を僕みたいに丁寧にやる人間はそれほどはいないだろうと思う。真面目にやれば本当に骨の折れる仕事だし、手を抜こうと思えば幾らでも抜ける仕事なのだ。そして真面目にやっても、手を抜いてやっても、記事としての仕上がりには殆ど差は出てこない。表面的には同じように見える。でもよく見るとほんの少し違う。

僕は別に自慢したくてこういう説明をしているわけではない。

僕はただ僕の仕事の概要のようなものを理解してほしいだけなのだ。僕の関わっている消耗がどのような種類の消耗であるかというようなことを。

そのカメラマンと僕とは前にも何度か一緒に仕事をしたことがあった。我々は割に気があっていた。我々はプロである。清潔な白手袋をはめ、大きなマスクをつけ、染みひとつないテニス・シューズをはいた死体処理係のように。我々はてきぱきと簡潔に仕事をする。余計なことは言わないし、お互いの仕事に

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

労働を払う。これが生活の為にやっているつまらない仕事だということはどちらもわかっている。でもそれが何であれ、やるからにはきちんとやる。そういう意味で我々はプロなのだ。三日めの夜には僕は原稿を全部仕上げてしまった。

四日めは予備に空けておいた日だった。仕事も終わったし特にやることもないので、僕らはレンタカーを借りて近郊にでかけ、一日クロスカントリー・スキーをした。そして夜はふたりで鍋をつつきながら、ゆっくり酒を飲んだ。のんびりとした一日だった。僕は原稿を彼に託した。これで僕がいなくても他の人間があとの仕事を引き継いでやってくれることになっていた。寝る前に僕は札幌の番号案内に電話をかけて、ドルフィン・ホテルの番号を聞いた。番号はすぐにわかった。僕はベッドの上に座りなおしてふうっと溜め息をついた。まあこれでまだいるかホテルが潰れていないことだけはわかった。一安心と言うべきだろう。いつ潰れても不思議はないホテルだったのだ。僕は一度深呼吸をしてから、その番号をまわした。すぐに人が出た。まるで待ち構えていたみたいに、すぐだった。それで僕はいささか混乱した。何だかちょっと手際が良すぎる。

電話に出た相手は若い女の子だった。女の子？　おいよせよ、と思った。いるかホテルはカウンターに若い女の子がいるようなホテルではないのだ。

「ドルフィン・ホテルでございます」と彼女は言った。

僕はよく訳がわからなかったので、念のために住所を確認してみた。住所はちゃんと昔どおりの住所だった。たぶん新しく女の子を雇ったんだろう。考えてみれば特に気にするほどのことでもない。予約をお願いしたい、と僕は言った。

「ありがとうございます。少々お待ち下さい。ただいま予約係におまわしいたします」と彼女ははきはきした明るい声で僕に言った。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

予約係？　僕はまた混乱した。ここまでくるとどうにも解釈のしようがない。いったいあのいるかホテルに何が起こったのだ？

「お待たせいたしました。予約係でございます」とこれも若そうな男の声がした。てきぱきとした愛想のいい声だった。どう考えてもプロのホテルマンの声だ。

僕はとにかく三日間シングル・ルームを予約した。名前と東京の電話番号を教えた。

「かしこまりました。明日から三日間、シングル・ルームをお取りいたします」と男が確認した。

それ以上話すべきことも思いつかなかったので、僕は礼を言って、混乱したままの状態で電話を切った。電話を切ってしまうと、余計に混乱の度合いが深まった。そしてしばらく電話機をじっと眺めていた。誰かが電話をかけてきて、それについて何かを説明してくれるんじゃないか、というような感じで。でも説明はなかった。まあいいや、なるようになるさ、と僕はあきらめた。実際に行ってみれば全てははっきりする。行ってみるしかない。いずれにせよ、そこに行かないわけにはいかないのだ。他に特に際だった選択肢があるわけでもないのだ。

僕はホテルのフロントに電話して札幌行きの列車の出発時刻を調べてもらった。昼前のちょうどいい時間に一本特急があった。それから僕はルーム・サービスの係に電話をかけて、ウィスキーのハーフ・ボトルと氷を持ってきてもらい、それを飲みながらTVの深夜映画を見た。クリント・イーストウッドの出てくる西部劇だった。クリント・イーストウッドはただの一度も笑わなかった。微笑みさえしなかった。苦笑さえしなかった。僕が何度か笑いかけてみても、彼は動じなかった。映画が終わり、ウィスキーもあらかた飲んでしまってから、僕は電気を消して朝までぐっすりと眠った。夢ひとつ見なかった。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

特急列車の窓からは雪しか見えなかった。よく晴れた日で、しばらく外を見ていると目がちくちくと痛んだ。僕の他には外を見ている乗客なんてひとりもいなかった。みんな知っているのだ。外を見たって雪しか見えないということを。

*

僕は朝食を抜かしたので十二時前に食堂車に行って昼食を食べた。ビールを飲み、オムレツを食べた。僕の向かいにはきちんとネクタイを締め、スーツを着込んだ五十前後の男が座って、やはりビールを飲み、ハムのサンドイッチを食べていた。彼はどことなく機械技師みたいに見えたが、実際に機械技師だった。彼は僕に話しかけてきて、自分は機械技師で、自衛隊の航空機の整備の仕事をしているのだと言った。そして、ソビエトの爆撃機や戦闘機の領空侵犯についていろいろと詳しく僕に教えてくれた。でも彼はソビエト機の領空侵犯の違法性については気にかけていないようだった。彼が気にしているのはF4ファントムの経済性についてだった。それが一度のスクランブルでどれくらい燃料を食うかということを、彼は僕に教えてくれた。燃料のひどい無駄遣いだ、と彼は言った。「日本の航空機会社に作らせれば、もっとずっと安上がりにできますよ。F4に性能的に負けない、安上がりのジェット戦闘機なんて作ろうと思えば作れるんですよ、すぐにでも」

それで僕は無駄というものは、高度資本主義社会における最大の美徳なのだと彼に教えてやった。日本がアメリカからファントム・ジェットを買って、スクランブルをやって無駄に燃料を消費することによって、世界の経済がそのぶん余計に回転し、その回転によって資本主義はより高度になっていくのだ。もしみんなが無駄というものを一切生み出さなくなったら、大恐慌が起こって世界の経済は無茶苦茶になってしまうだろう。無駄というものは矛盾を引き起こす燃料であり、矛盾が経済を活性化し、活性化がまた無

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

駄を作りだすのだ、と。
そうかもしれない、と彼は少し考えてから言った。でも自分は物資不足の極とも言うべき戦争中に子供時代を送ったせいか、そういう社会構造が実感としてよく摑めないのだ、と言った。
「私らは、どうもあなたがた若い人とは違って、そういう複雑なのにはどうも上手く馴染めんですな」と彼は苦笑しながら言った。
僕も決して馴染んでいるわけではなかったが、話がこれ以上長くなっても困るので、別に反論もしなかった。馴染んでいるのではない。把握、認識しているだけなのだ。そのふたつの間には決定的な差がある。でもとにかく僕はオムレツを食べ終え、彼に挨拶をして席を立った。
札幌までの列車の中で、僕は三十分ほど眠り、函館の駅近くの書店で買ったジャック・ロンドンの伝記を読んだ。ジャック・ロンドンの波瀾万丈の生涯に比べれば、僕の人生なんて樫の木のてっぺんのはらで胡桃を枕にうとうとと春をまっているリスみたいに平穏そのものに見えた。少なくとも一時的にはそういう気がした。伝記というのはそういうものなのだ。いったい何処の誰が平和にこともなく生きて死んでいった川崎市立図書館員の伝記を読むだろう？　要するに我々は代償行為を求めているのだ。
僕は札幌の駅につくと、ぶらぶらいるかホテルまで歩いてみることにした。風のない穏やかな午後だったし、荷物はショルダー・バッグひとつだけだった。街の方々に汚れた雪がうずたかく積み上げられていた。空気はぴりっと張り詰めていて、人々は足元に注意を払いながら簡潔に歩を運んでいた。女子高校生はみんな頰を赤く染めて、勢いよく白い息を空中に吐き出していた。その上に字が書けそうなくらいぽっかりとした白い息だった。僕はそんな街の風景を眺めながら、のんびりと歩いた。札幌に来たのは四年半ぶりだったが、それはずいぶん久し振りに見る風景のように感じられた。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

僕は途中でコーヒー・ハウスに入って一服し、ブランディーの入った熱くて濃いコーヒーを飲んだ。僕のまわりではごく当たり前の都市における人々の営みが続けられていた。恋人同士が小さな声で語り合い、ビジネス・マンが二人で書類を広げて数字を検討し、大学生が何人か集まってスキー旅行やらポリスの新しいLPやらについて話していた。それは日本中のどこの都市でも日常的に繰り広げられている光景だった。この店の内部をそっくり横浜なり福岡なりに持っていっても全然違和感はないはずだった。でもそれにもかかわらず、いやそれが外面的にはまったく同じであるからこそ、僕はその店の中に座ってコーヒーを飲みながら、激しい焼けつくような孤独を感じることになった。僕一人だけが完全な部外者だという気がした。この街にも、これらの日常生活にも、僕はまったく属していないのだ。

もちろん東京のコーヒー・ハウスの何処に僕が属しているかといえば、そんなものの何処にも属してはいない。でも僕は東京のコーヒー・ハウスでそのような激しい孤独を感じることはない。僕はコーヒーを飲み、本を読み、ごく普通に時を過ごす。何故ならそれはとりたてて深く考えるまでもない日常生活の一部だからだ。

しかしこの札幌の街で、僕はまるで極地の島に一人で取り残されてしまったような激しい孤独を感じた。情景はいつもと同じだ。どこにでもある情景だ。でもその仮面を剝いでしまえば、この地面は僕の知っているどの場所にも通じていないのだ。僕はそう思った。似ている――でも違う。まるで別の惑星みたいだ。言語も服装も顔つきもみんな同じだけれど、何かが決定的に違う別の惑星。ある種の機能がまったく通用しない別の惑星――でもどの機能が通用してどの機能が通用しないかはひとつひとつ確かめてみるしかないのだ。そして何かひとつしくじれば、僕が別の惑星の人間だということはみんなにばれてしまう。みんなは立ち上がって僕を指さしなじることだろう。**お前は違う**、と。**お前は違うお前は違うお前は違う**。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

僕はコーヒーを飲みながらぼんやりとそんなことを考えていた。妄想だ。

でも僕が孤独であること――これは真実だった。僕は誰とも結びついていない。それが僕の問題なのだ。僕は僕を取り戻しつつある。でも僕は誰とも結びついていない。

この前誰かを真剣に愛したのはいつのことだったろう？

ずっと昔だ。いつかの氷河期といつかの氷河期との間。とにかくずっと昔だ。歴史的過去。ジュラ紀とか、そういう種類の過去だ。そしてみんな消えてしまった。恐竜もマンモスもサーベル・タイガーも。宮下公園に打ち込まれたガス弾も。そして高度資本主義社会が訪れたのだ。そういう社会に僕はひとりぼっちで取り残されていた。

僕は勘定を払って外に出た。そして何も考えずにいるかホテルまでまっすぐ歩いた。

いるかホテルの場所を僕ははっきりとは覚えていなかったので、それがすぐにみつかるかどうかいささか心配だったのだけれど、心配する必要なんて何もなかった。ホテルはすぐにみつかった。それは二十六階建ての巨大なビルディングに変貌を遂げていた。バウハウス風のモダンな曲線、光り輝く大型ガラスとステンレス・スティール、車寄せに立ち並ぶポールとそこにはためく各国旗、きりっとした制服を着込んでタクシーを手招きしている配車係、最上階のレストランまで直行するガラスのエレベーター……そんなものを誰が見落とすだろう？　入り口の大理石の柱にはいるかのレリーフがうめこまれ、その下にはこう書かれていた。

「ドルフィン・ホテル」と。

僕は二十秒ばかりそこに立ちすくんで、口を半分開けて、そのホテルをただじっと見上げていた。そしてそれからまっすぐ延ばせば月にだって届きそうなくらい長く深い溜め息をついた。僕はすごく驚いたのだ――ごく控え目に表現して。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

5

いつまでもホテルの前にぼうっと立ちすくんでいるわけにはいかないので、とにかく中に入ってみることにした。住所もあっているし、ホテルの名前もあっている。予約だって取ってあるのだ。入るしかない。

僕はなだらかな坂になった車寄せを歩いて上り、ぴかぴかに磨きあげられた回転ドアから中に入った。ロビーは体育館みたいに広く、天井は吹き抜けになっていた。ずっと上の方までガラスの壁が続き、そこから陽光が燦々と降り注いでいた。フロアには大きなサイズのいかにも高価そうなソファが並び、その間に観葉植物の鉢が気前よくたっぷりと配されていた。ロビーの奥にはゴージャスなコーヒー・ルームがあった。こういうところでサンドイッチを注文すると名刺くらいのサイズの上品なハム・サンドイッチが大きな銀の皿に四つもられて出てくる。ポテト・チップとピックルスが芸術的に配されている。そしてそれにコーヒーをつけると、慎み深い四人家族の昼食代くらいの値段になるのだ。壁には北海道の何処かの湿原を描いたらしい三畳間くらいの大きさの油絵がかかっていた。特に芸術的とはいえないが、とにかく見栄えのする大きな絵であることは確かだった。何かの集まりがあるらしく、ロビーはけっこう混み合っていた。身なりの良い中年の男の一団がソファに座って、肯いたり、鷹揚に笑ったりしていた。みんな同じような顎の突き出し方をし、同じような脚の組み方をしていた。たぶん医者か大学の先生の団体だろうと僕は思った。それとは別に——いや同じ集まりなんだろうか?——盛装した若い女性のグループもいた。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

半分は和服を着て、半分はワンピースを着ていた。外国人も何人かいた。ビジネス・スーツに身を包み、目立たないネクタイを締め、アタッシェ・ケースを抱えて誰かと待ち合わせているビジネス・マンの姿も見えた。

一言で言えば、新・いるかホテルは繁盛しているホテルだった。

きちんと資本を投下し、きちんとそれを回収しているホテルなのだ。こういうホテルがどのようにして作られるのか、僕は知っていた。一度あるホテル・チェーンのPR誌の仕事をしたことがあるのだ。こういうホテルを作るにあたって、人は前もって何から何まで全部きちんと計算するのだ。プロが集まってコンピューターを使って、あらゆる情報を打ち込み、徹底的に試算する。トイレット・ペーパーの仕入れ値段とその使用量まで試算するのだ。学生アルバイトを使って札幌の街の各々の通りの通行人の数も調べる。結婚式の数を算定するために札幌の適齢期の男女の数も調べあげる。とにかく何から何まで調べるのだ。そして営業上のリスクをどんどん減らしていく。彼らは長い時間をかけて綿密な計画を練り、プロジェクト・チームを作り、土地を買収する。人材を集め、派手な宣伝を打つ。金で解決することなら——そしてその金がいつか戻ってくるという確信があれば——彼らはそこに幾らでも金を注ぎ込む。そういう種類のビッグ・ビジネスなのだ。

そういうビッグ・ビジネスを扱えるのは、様々な種類の企業を傘下に収めた大型複合企業だけだ。何故ならどれだけリスクを削っていっても、そこには計算の出来ない潜在的リスクが残るし、そういうリスクを吸収できるのは、その手のコングロマリットだけだからだ。

新・いるかホテルは正直なところ、僕の好みのホテルとは言えなかった。

少なくとも、普通の状況であれば僕は自分の金を出してこんなホテルには泊まらない。値段が高いし、余計な物が多すぎる。でも仕方ない。何はともあれとにかくこれが変貌を遂げた新しいいるかホテルなの

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

た。

僕はカウンターに行って名前を告げた。ライト・ブルーの揃いのブレザー・コートを着た女の子たちが歯磨きの宣伝みたいににっこりと笑って僕を迎えてくれた。こういう笑い方の教育も資本投下の一部なのだ。女の子たちはみんな処女雪のごとく真っ白なブラウスを着て、髪をきちんとセットしていた。女の子は三人いたが、僕のところに来た子だけが眼鏡をかけていた。眼鏡がよく似合う感じの良い女の子だった。彼女が来てくれたことで僕はちょっとほっとした。三人の中では彼女がいちばん綺麗だったし、僕は一目で彼女のことを気に入っていたからだ。彼女の笑顔の中にはなにかしら僕の心をひきつけるものがあった。まるでホテルのあるべき姿を具現化したホテルの精みたいだ、と僕は思った。手に小さな金の杖を持ってさっと振ると、ディズニー映画みたいに魔法の粉が舞って、ルーム・キイが出てくるのだ。

でも彼女は金の杖のかわりにコンピューターを使った。キイ・ボードで僕の名前とクレジット・カードのナンバーを手際良くインプットし、画面を確認してからまたにっこり微笑んでカード式のキイをくれた。1523というのが僕の部屋番号だった。僕は彼女に頼んでホテルのパンフレットをひとつもらった。そして、このホテルはいつから営業しているのかと訊いてみた。昨年の十月でございます、と彼女は反射的に答えた。まだ五ヵ月しか経っていないのだ。

「ねえ、ちょっと聞きたいんだけど」と僕は言った。「昔ここの同じ場所に同じ名前の『ドルフィン・ホテル』という小さなホテルがあったでしょう？　それがどうなったか知ってる？」

彼女の笑顔が少しだけ乱れた。上品な静かな泉にビール瓶のふたを放り込んだみたいに静かな波紋が彼女の顔に広がり、そして収まった。収まった時、笑顔は以前のそれよりも幾分後退していた。僕はそういうこみいった変化を感心して観察していた。泉の精が現れて、あなたが今投げ込んだのは金のふたです

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

か、それとも銀のふたですか、と質問するんじゃないかという気がしたくらいだった。でももちろんそんなものは出てこなかった。

「さあ、いかがでしょう」と彼女は言って、ひとさし指で眼鏡のブリッジを軽くさわった。「なにぶん開業前のことですので、私どもはちょっとそういうことは……」

彼女はそこで言葉を切った。僕はその続きを待ったが、続きはなかった。

「申し訳ございません」と彼女は言った。

「ふむ」と僕は言った。僕は時間が経つにつれてますます彼女に対して好感を持ち始めていた。僕もひとさし指で眼鏡をさわりたかったけれど、残念ながら僕は眼鏡をかけていなかった。「じゃあ、誰に聞けばわかるだろう、その辺の経緯が？」

彼女はしばらく息をとめて考えこんでいた。笑顔はもう消えていた。笑いながら息をとめるのはすごくむずかしいのだ。やってみればわかる。

「申し訳ございません。少々お待ち下さい」と彼女は言って、奥に引っ込んだ。三十秒ほどあとで彼女は四十前後の黒服の男を伴って戻ってきた。見るからにホテル・ビジネスのプロという雰囲気の男だった。こういう人物には前にも何度か仕事で会ったことがある。彼らは奇妙な人々である。彼らは大体いつも笑みを浮かべているのだが、状況に応じて笑顔を二十五種類くらい使いわけられるのだ。丁寧な冷笑から、適度に抑制された満足の笑みまで。その笑顔のグラデーションには全部番号が振ってある。ナンバー1からナンバー25まで。そういうのを、彼らは状況に応じてゴルフ・クラブを選ぶみたいに使いわける。そういうタイプの男だった。

「いらっしゃいませ」と言って彼は中間的な笑顔を僕に向けて丁寧に頭を下げた。僕の服装は彼にあまり良い印象を与えなかったようで、笑顔が三段階ほど下降した。僕は裏に毛皮のついた温かいハンティング

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

用のハーフコート（胸にキース・ヘリングのバッジをつけている）に毛糸の帽子（オーストリア陸軍のアルプス部隊がかぶっているやつ）をかぶり、ポケットがいっぱいついたタフなズボンをはき、雪道を歩くための頑丈なワーク・ブーツを履いていた。どれもきちんとした立派な、そして現実的な品物だったが、そのホテルのロビーにはいささかヘビー・デューティーに過ぎた。でもそれは僕のせいではない。そういうのは生き方の違いであり、考え方の違いなのだ。

「なにか手前どものホテルに関して御質問がおありということですが」と彼はとても丁寧な口調で言った。

僕はカウンターに両手を置いて、さっき女の子にしたのと同じ質問をした。

男は捻挫した猫の前足を眺める獣医のような目付きで、僕のはめているディズニー・ウォッチをちらりと見た。

「失礼でございますが」と彼はちょっと間をおいて言った。「どのようなわけで以前のホテルのことをお知りになりたいのでしょうか？　もしよろしければ、その理由をうかがわせて頂きたいのですが」

僕は簡単に説明した。何年か前に以前のドルフィン・ホテルに泊まって、そこの主人と親しくなった。今回久し振りに訪ねてみたら、このとおりがらりと変わってしまっていた。それで彼がどうなったのか知りたい。いずれにせよまったく個人的なことなのだ、と僕は言った。

彼は何度か肯いた。

「実を申しまして、わたくしも細かい事情まではよく存じません」と男は注意深く言葉を選びながら言った。「ただ簡単に御説明申し上げますと、以前のそのドルフィン・ホテルがございました土地を手前どもが買い上げまして、その跡に新しくホテルを建てたということです。たしかに名前は同じですが、経営的にはまったく別のホテルでございまして、具体的な関係のようなものは一切ございません」

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

「どうして名前が一緒なんだろう？」と僕は聞いてみた。

「申し訳ございませんが、その辺の事情まではちょっと……」と彼は言った。

「以前の主人がどこに行ったかもわからないでしょうね？」

「申し訳ございません」と彼は笑顔をナンバー16に切り換えて答えた。

「誰に聞けばわかるでしょうね、そういういろんなことが？」

「そうでございますねえ」と彼は言って、少し首をひねった。「わたくしどもは現場の人間でございまして、開業以前の事情というのは全くノー・タッチなんでございます。ですから誰に聞けばと言われましても、急にはちょっと、なんとも」

彼の言うことにも確かに一理あったが、何かが頭にひっかかった。その男の受け答えにも、女の子の受け答えにも、何かしら人工的な匂いが漂っているのだ。どこがいけないというのでもない。でもすんなりと飲み込めない。インタビューをしていると自然にこういう職業的な勘がついてくる。何かを隠しているときの口調、嘘をついているときの表情。根拠はなにもない。ただふと感じるのだ。ここには何か言外に隠されたものがある、と。

でもこれ以上ここで彼らを押しても何も出てこないだろうということだけははっきりしていた。僕は男に礼を言った。彼は軽く一礼して奥にひっこんだ。黒服の男がいなくなってしまってから、僕は女の子に食事とルーム・サービスのことを訊いた。彼女は丁寧に教えてくれた。彼女が喋っているあいだ、僕はじっとその目をのぞきこんでいた。とても綺麗な目だった。じっとのぞきこんでいると何かが見えそうだった。僕と視線が合うと、彼女は顔を赤らめた。僕はそれで彼女のことがもっと好きになった。どうしてだろう？　彼女がホテルの精のように見えるからだろうか？　とにかく僕は礼を言ってカウンターを離れ、エレベーターで部屋に上がった。

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

1523号室はなかなか立派な部屋だった。シングル・ルームにしてはベッドも風呂もひろびろとしていた。冷蔵庫にはいろんなものがたっぷりと入っていた。便箋も封筒もいっぱいあった。書きもの机も立派なものだった。バスルームにはシャンプーからリンスからアフター・シェーブからバスローブまで揃っていた。クローゼットも広かった。絨毯は新しくてふかふかしていた。僕はコートとブーツを脱いでソファに座り、ホテルのパンフレットを読んでみた。パンフレットも立派なものだった。僕もこういうものを作ったことがあるからよくわかる。どこも手を抜いていない。

このドルフィン・ホテルはまったく新しいタイプの高級都市ホテルなのだ、とパンフレットに書いてあった。すべての現代的な設備を備え、二十四時間切れ目のない万全のサービスを提供する。そして部屋はすべてゆったりと余裕をもって作られている。選びぬかれた調度品、静けさ、温かみのある居住性。「ヒューマンな空間」とパンフレットにはあった。要するに金がかかっていて、料金が高いのだ。

パンフレットを詳しく読んでみると、ここはたしかにいろんなものが実によく揃ったホテルだった。地下には大きなショッピング・センターがあった。室内プールもあれば、サウナもあれば、日焼け室もあった。インドア・テニス場があり、運動器具を並べたコーチつきのヘルス・クラブがあり、同時通訳ができる会議室があり、レストランが五つあり、バーが三つあった。終夜営業のカフェテリアもあった。リムジン・サービスまであった。あらゆる種類の文具・事務用品を完備したスタディー・スペースがあって、誰でもそこを利用することができた。考えつけるものはみんなあった。屋上にはヘリ・ポートまであった。ないものがなかった。

最新の設備・ゴージャスな内装。

でもいったいどこの企業がこのホテルを所有し経営しているのだろう？　僕はパンフレットやら何やら

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

かやらを隅々まで読んでみた。でも経営母体についてはどこにも何も書いてなかった。どう考えても変な話だった。これだけのスーパーAクラスの豪華ホテルを建てて経営することはホテル・チェーンを持っているプロの企業にしか不可能だし、そういう企業なら必ず社名を入れて、自社の他のホテルの宣伝もするはずだからだ。たとえばプリンスホテルに泊まれば、そのパンフレットには全国のプリンスホテルの住所と電話番号が印刷してある。そういうものなのだ。

それにこんな立派なホテルが何故「ドルフィン・ホテル」なんていう昔あったちっぽけなホテルの名前をわざわざ引き継いだりするのだ?

どれだけ考えても答えのかけらも浮かんでこなかった。

僕はパンフレットをテーブルの上に放り投げ、ソファにゆったりともたれて足を投げ出し、十五階の窓の外に広がる空を眺めた。窓の外には真っ青な空しか見えなかった。じっと空を眺めていると自分がとんびになったような気がした。

何はともあれ、僕は昔のいるかホテルが懐かしかった。あそこの窓からはいろんなものが見えた。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

6

夕方まで僕はホテルの中を見物して時間を潰した。レストランやバーをチェックし、プールやらサウナやらヘルス・クラブやらテニス場やらを覗き、ショッピング・センターに行って本を買ったりした。ロビーをうろつき、ゲーム・センターでパックマンを何ゲームかやった。そんなことをしているだけでたちまち夕方になってしまった。まるで遊園地じゃないか、と僕は思った。世の中にはこういう時間の潰し方もあるのだ。

それから僕はホテルを出て、夕方の街をぶらぶらと歩いてみた。歩いているうちにだんだんそのあたりの地理についての記憶がよみがえってきた。昔のいるかホテルに泊まっていたとき、僕は毎日毎日うんざりするくらい、街を歩きまわったのだ。どこを曲がれば何があるかも、大体は覚えていた。いるかホテルには食堂がなかったので――もしあったとしてもそこで何かを食べる気なんておそらく起きなかっただろうけれど――僕と彼女は（キキだ）いつも二人で近所の食堂に入って食事をした。僕は昔住んでいた家の近くをたまたま通りかかったみたいな気分で、一時間ばかりあてもなく見覚えのある街路から街路へと歩いた。日が暮れて冷気が肌にはっきりと感じられるようになった。路面にこびりつくように残っていた雪が足元でぱりぱりと音を立てるようになった。でも風はまったくなかったし、街を歩くのは楽しかった。空気はきりっとして澄みわたり、街角のいたるところに蟻塚のようにつみあげられ、排気ガスで灰色に染まった雪も、夜の街の光の下では清潔で、幻想的にさえ見えた。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

昔に比べると、いるかホテルのある地域ははっきりとした変化を見せていた。もちろん昔といってもたかだか四年ちょっと前のことだから、僕らが昔見かけたり入ったりした店の大方はそのままの形で残っていた。街の雰囲気も基本的には昔どおりのものだった。しかしそれでもこの近辺で何かが進行しつつあるということは一目で見てとれた。何軒かの店は戸を閉ざし、そこに建築予定の札がかかっていた。実際に建築中の大きなビルもあった。ドライブ・スルーのハンバーガー・ショップやら、デザイナーズ・ブランドのブティックやら、欧州車のショールームやら、中庭に沙羅の樹を植えた斬新なデザインの喫茶店やら、ガラスをふんだんにつかったスマートなオフィス・ビルやら、そういう以前にはなかった新しいタイプの店や建物が、昔ながらの古ぼけた色あいの三階建てのビルや暖簾のかかった大衆食堂やいつもストーブの前で猫が昼寝をしている菓子屋などを押しのけるような格好で次々に現れていた。まるで子供の歯がはえかわる時のように、町並みには一時的な奇妙な共存が見受けられた。銀行も新しく店舗を開いていた。それはあるいは新しいドルフィン・ホテルの波及効果かもしれなかった。あれほどの大きなホテルが何もないごく普通の――いささか取り残されたような趣さえある――街の一角に突然降って湧いたように出現したのだから、当然ながら街のバランスは大きく変化することになる。人の流れが変わり、活気が出てくる。地価も上がる。

あるいはその変化はもっと総合的なものかもしれない。つまりドルフィン・ホテルの出現が街に変化をもたらしたのではなく、ドルフィン・ホテルの出現もその街の変化の一過程であるのかもしれない。たとえば長期的に計画された都市の再開発というような。

僕は昔一度入ったことのある飲み屋に入って酒を少し飲み、簡単な食事をした。汚くて、うるさくて、安くて、美味い店だった。僕は一人で外で食事をするときはいつもなるべくうるさそうな店を選ぶことにしていた。その方が落ち着くのだ。淋しくないし、独り言を言っても誰にも聞こえない。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

食事を終えてもまだ何となく物足りなかったので、僕はもう少し酒を注文した。そして熱い日本酒を胃の中にゆっくり流し込みながら、僕はいったいこんなところで何をやっているんだろうと思った。いるかホテルはもう存在しないのだ。僕がそこに何を求めていたにせよ、とにかくいるかホテルはさっぱりと消えてなくなってしまったのだ。もう存在していないのだ。そのあとには「スター・ウォーズ」の秘密基地みたいなあの馬鹿気たハイテク・ホテルが建っている。すべてはただの時期遅れの夢だったのだ。僕は取り壊されて消滅してしまったいるかホテルの夢を見て、出口から出ていって消えてしまったキキの夢を見ていたにすぎないのだ。たしかにそこでは誰かが僕のために泣いていたかもしれない。でもそれも終わってしまったのだ。もうこの場所には何も残ってはいない。これ以上ここでお前は何を求めようというのだ？

そうだな、と僕は思った。あるいは口に出してそう独り言を言ったかもしれない。確かにそうだ。ここにはもう何も残ってはいない。ここには僕が求めるべき何物もない。

僕は唇を固く結んでしばらくじっとカウンターの上の醤油さしを眺めていた。

長く一人で生活していると、いろんなものをじっと眺めるようになる。ときどき独り言を言うようになる。賑やかな店で食事をするようになる。中古のスバルに親密な愛情を抱くようになる。そして少しずつ時代遅れになっていく。

僕は店を出て、ホテルに戻った。けっこう遠くまで来ていたが、ホテルに戻る道をみつけるのは簡単だった。首を上にあげれば街のどこからでもドルフィン・ホテルが見えたからだ。東方の三博士が夜空の星を目標に簡単にエルサレムだかベツレヘムだかにたどりついたみたいに、僕も簡単にドルフィン・ホテルに帰りついた。

部屋に戻って風呂に入り、髪を乾かしながら窓の外に広がる札幌の街を眺めた。昔のいるかホテルに泊

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

まったときは、そういえば窓の外に小さな会社が見えたなと僕は思った。何の会社かは全然わからなかったけれど、でもとにかく会社だった。人々が忙しそうに働いていた。僕は部屋の窓から一日そういう風景を眺めていたものだった。あの会社はどうなったんだろう？　綺麗な女の子が一人いた。あの子はどうなったんだろう？　でも、あれはそもそも何をしている会社だったんだろうな？

やることがないので、僕はしばらく部屋の中をあてもなくうろうろと歩きまわった。それから椅子に座ってTVを見た。ひどい番組しかやっていなかった。いろんな種類のつくりものの反吐を見せられているみたいな気がした。つくりものだから別に汚くはないのだが、じっと見ていると本物の反吐に見えてくるのだ。僕はTVを消して服を着て、二十六階にあるバーに行った。そしてカウンターに座ってソーダで割ってレモンをしぼったウォッカを飲んだ。バーの壁は全部ガラス窓になっていて、そこから札幌の夜景が見えた。ここにある何もかもが僕に「スター・ウォーズ」の宇宙都市を思い起こさせた。でもそれを別にすれば感じの良い静かなバーだった。酒の作り方もきちんとしていた。グラスも上等なものだった。グラスとグラスが触れあうととても良い音がした。客は僕の他には三人しかいなかった。ふたりづれの中年の男が奥まったテーブル席でウィスキーを飲みながらひそひそと声をひそめて話をしていた。何だかはわからなかったけれど、見たところすごく大事な話みたいだった。あるいはダースヴェーダーの暗殺計画を練っているのかもしれない。

僕のすぐ右手のテーブル席には十二か十三くらいの女の子がウォークマンのヘッドフォンを耳にあてて、ストローで飲み物を飲んでいた。綺麗な子だった。長い髪が不自然なくらいまっすぐで、それがさらりと柔らかくテーブルの上に落ちかかり、まつげが長く、瞳はどことなく痛々しそうな透明さをたたえていた。彼女は指でテーブルをこつこつと叩いてリズムをとっていたが、その華奢な細い指先だけが他のものから受ける印象に比べて妙に子供っぽかった。別に彼女が大人びていたというのではない。でもその女

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

の子の中にはなにかしら全てを上から見おろしているというような趣があった。悪意があるわけでもないし、攻撃的なわけでもない。ただ、何というか中立的に、見おろしているのだ。窓から夜景を見おろすみたいに。

でも実際には彼女は何も見ていなかった。まわりのことは全然目にも入らないようだった。彼女はブルージーンズに白いコンヴァースのスニーカーを履き、「GENESIS」というレタリングの入ったトレーナー・シャツを着ていた。トレーナーは肘のあたりまでひっぱりあげられていた。彼女はこつこつとテーブルを叩きながら、ウォークマンのテープに意識を集中させていた。時々、小さな唇がかすかな言葉の断片を形作った。

「レモン・ジュースです、あれは」と言い訳するように、バーテンダーが僕の前に来て言った。「あの子はあそこでお母さんが戻ってくるのを待ってるんです」

「うん」と僕は曖昧に返事をした。確かに考えてみれば、十二か十三の女の子が夜の十時にホテルのバーで一人ウォークマンを聴きながら飲み物を飲んでいるなんて、不思議な光景だった。でもバーテンダーにそう言われるまで、僕にはとくにそれが不自然だというふうには感じられなかった。僕はごく当たり前のものを見るように彼女を見ていたのだ。

僕はウォッカをおかわりし、バーテンダーと世間話をした。天気とか、景気とか、そういうとりとめのない話だ。それから僕は何気なくこの辺もかわったね、と言ってみた。バーテンダーは困ったように微笑んで、実は自分はこのホテルの前は東京のホテルで働いていたので、札幌のことは殆ど何も知らないのだ、と言った。そこで新しく客が入ってきたので、その会話も結局実りのないままに終わってしまった。

僕はウォッカ・ソーダを全部で四杯飲んだ。幾らでも飲めそうな気がしたが、きりがないので四杯でやめて、勘定書きにサインした。僕が立ち上がってカウンターを離れた時にも、その女の子はまだテーブル

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

席でウォークマンを聴き続けていた。母親はまだ現れていなかったし、レモン・ジュースの氷はすっかり溶けてしまっていたけれど、彼女はそんなことは全然気にならないみたいだった。僕が立ち上がると、彼女はふと目を上げて僕を見た。そして二秒か三秒僕の顔を見てから、ほんの少しだけにっこりと微笑んだ。あるいはそれはただの唇の微かな震えだったかもしれない。でも僕には彼女が僕に向かって微笑みかけたように見えたのだ。それで——とても変な話なのだけれど——胸が一瞬震えた。僕は何となく自分が彼女に選ばれたような気がしたのだ。それはこれまで一度も経験したことのない奇妙な胸の震えだった。僕は自分の体が五センチか六センチ宙に浮かんでいるような気がした。

僕は混乱したままエレベーターに乗って十五階まで下り、部屋にもどった。どうしてそんなにどぎまぎするんだ？　と僕は思った。十二かそこらの女の子に微笑みかけられたくらいで。娘と言ってもおかしくない歳なんだぜ、と僕は思った。

ジェネシス——また下らない名前のバンドだ。

でも彼女がそのネーム入りのシャツを着ていると、それはひどく象徴的な言葉であるように思えてきた。**起源**。

でも、と僕は思った、どうしてたかがロック・バンドにそんな大層な名前をつけなくてはならないのだ？

僕は靴を履いたままベッドに横になって、目を閉じて彼女のことを思い出してみた。ウォークマン。テーブルをこつこつと叩く白い指。ジェネシス。溶けた氷。

起源。

目を閉じてじっとしていると、体の中をアルコールがゆっくりと回っていくのが感じられた。僕はワーク・ブーツの紐をほどき、服を脱いで、ベッドにもぐりこんだ。僕は自分で感じていたよりもずっと疲れ

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

ずいぶん酔っぱらっているようだった。僕は隣にいる女の子が「ねえ、ちょっと飲みすぎよ」と言ってくれるのを待った。でも誰も言ってくれなかった。僕は一人なのだ。

乾杯。

僕は手をのばして電灯のスイッチを切った。いるかホテルの夢を見るだろうか、と僕は暗闇の中でふと思った。でも結局夢なんて何も見なかった。朝、目覚めた時、僕は自分がどうしようもなく空っぽに感じられた。ゼロだ、と僕は思った。夢もなく、ホテルもない。見当違いな場所で、見当違いなことをしているのだ。

ベッドの足元にはツーク・ブーフが行き倒れた二匹の子犬のような格好でごろんと横たわっていた。

窓の外には暗い色の雲が低くたれこめていた。今にも雪が降りだしそうなさむざむしい空だった。そんな空を見ていると、何をする気も起きなかった。時計の針は七時五分を指していた。僕はリモコンでTVをつけ、しばらくベッドに入ったまま朝のニュースを見ていた。アナウンサーが来るべき選挙について話していた。それを十五分ほど見てから、あきらめてベッドを出て、浴室に行って顔を洗い髭を剃った。元気を出すために「フィガロの結婚」序曲をハミングまでした。でもそのうちに、それが「魔笛」序曲であるような気がしてきた。考えれば考えるほど、その違いがわからなくなってきた。どっちがどっちだったんだろう？　何をやっても上手くいきそうにない日だった。髭を剃っていて顎を切り、シャツを着ようとすると袖のボタンが取れた。

朝食の席で、僕は昨日バーで見かけた少女にまた会った。彼女は母親らしい女性と一緒だった。彼女は今朝はウォークマンを持ってはいなかった。そして昨夜と同じ「ジェネシス」のトレーナー・シャツを着て、退屈そうに紅茶を飲んでいた。彼女はパンにもスクランブルド・エッグにも殆ど手をつけていなかった。彼女の母親——だろう、多分——は四十代前半の小柄な女性だった。髪を後ろでぎゅっとまとめ、白

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

いブラウスの上にキャメルのカシミア・セーターを着ていた。眉毛の形が顔とそっくりだった。鼻のかたちがすらりとして品がよく、大儀そうにトーストにバターを塗る仕種には何かしら人の心を引き付けるものがあった。他人から注目されることに慣れている女性だけが身につけることのできる種類の身のこなしだった。

僕がそのテーブルの脇を通りかかったとき、少女はふと目を上げて僕の顔を見た。そしてにっこりと微笑みかけた。今度の微笑みは昨夜のよりはずっときちんとした微笑みだった。見間違えようのない微笑みだった。

僕は一人で朝食を食べながら、何かを考えようとしたが、その少女に微笑みかけられたあとでは何も考えられなかった。何を考えてみても、頭の中で同じ言葉が同じところをぐるぐると回っているだけだった。だから僕はぼんやりと胡椒入れを眺めながら、何も考えずに朝食を食べた。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

7

何もやることがなかった。やるべきことも、やりたいことも、なかった。僕はいるかホテルに泊まるべくわざわざここまでやって来たのだ。その根本命題のいるかホテルがなくなってしまったわけだから、どうしようもなかった。お手あげだ。

とにかくロビーに下りて、そこの立派なソファに座って今日一日の計画を立ててみることにした。でも計画なんて立たなかった。街を見物したいわけでもないし、何処か行きたいところがあるわけでもなかった。映画を見て暇を潰すことも考えたが、見たい映画もなかったし、だいたい札幌まで来て映画館で時間潰しをするというのも馬鹿馬鹿しい話だった。じゃあ何をすればいい？

何もすることがなかった。

そうだ、床屋に行こうと僕はふと思った。考えてみれば東京にいるあいだは仕事が忙しくて床屋に行く暇さえなかったのだ。もう一ヵ月半近く散髪をしていない。まともな考えだった。現実的で健全な考え方だ。暇になったから、床屋に行く。筋が通っている。何処に出しても恥ずかしくない発想だ。

僕はホテルの理髪室に行ってみた。清潔で感じの良い床屋だった。混んでいて待たされるといいのにと期待していたのだが、平日の朝だったからもちろんすいていた。ブルーグレーの壁には抽象画がかかり、BGMに小さくジャック・ルーシェのプレイ・バッハがかかっていた。そんな床屋に入ったのは生まれて初めてだった。そんなのはもう床屋とも呼べない。そのうちに風呂屋でグレゴリオ聖歌が聞けるかもしれ

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

ない。税務署の待合室で坂本龍一が聞けるかもしれない。僕の髪を切ってくれたのは二十歳過ぎくらいの若い理髪師だった。彼も札幌のことはよく知らなかった。このホテルが出来る前に同じ名前の小さなホテルがここにあったんだと言っても、はあと言っただけで特に感心もしなかった。そんなことはどうでもいいみたいだった。クールだった。おまけにメンズ・ビギのシャツを着ていた。でも腕の方は悪くなかったので、僕は一応満足してそこを出た。

床屋を出ると、僕はまたロビーに戻ってさてこれから何をしようかと考えた。四十五分が潰れただけだった。

何も思いつかなかった。

仕方なくロビーのソファに座ってしばらくぼんやりとあたりを眺めていた。フロントには昨日の眼鏡をかけた女の子の姿が見えた。僕と目が合うと、彼女はちょっと緊張したみたいに見えた。何故だろう？僕の存在が彼女の中の何かを刺激するのだろうか？ わからない。そのうちに時計が十一時を指した。昼食について考えてもおかしくない時刻だった。僕はホテルを出てどこで何を食べようかと考えながら街を歩きまわった。でもどの店を見ても心が動かなかった。だいたい食欲というものが湧いてこないのだ。仕方なく適当に目についた店に入ってスパゲッティとサラダを注文した。そしてビールを飲んだ。今にも雪が降りそうだったが、まだ降り始めてはいなかった。雲はぴくりとも動かず、「ガリバー旅行記」に出てくる空に浮かぶ国みたいに、都市の頭上を重く覆っていた。地上にある何もかもが灰色に染まって見えた。フォークもサラダもビールもみんな灰色に見えた。こういう日にはまともな事なんて何も思いつけない。

結局タクシーを拾って中心地に行き、デパートで買い物をして暇を潰すことにした。靴下と下着を買い、予備の電池を買い、旅行用の歯ブラシと爪きりを買った。夜食用のサンドイッチを買い、ブランディーの小瓶を買った。どれも特に必要というものでもなかった。ただの暇潰しのための買い物だった。それ

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

とにかく、時間が潰れた。

それから僕は大通りを散歩し、特に目的もなく店のウィンドウを覗き、それにも飽きると喫茶店に入ってコーヒーを飲みジャック・ロンドンの伝記の続きを読んだ。そうこうしているうちにやっと夕暮れがやってきた。長い退屈な映画を見ているような一日だった。時間を無駄に潰すというのもなかなか骨の折れるものなのだ。

ホテルに戻ってフロントの前を通りすぎようとしたとき、誰かが僕の名を呼んだ。例の眼鏡をかけた受付の女の子だった。彼女がそこから僕を呼んでいた。僕がそちらに行くと、彼女はちょっと離れたカウンターの隅の方に僕をつれていった。そこはレンタカーの受付デスクになっていたが、看板のわきにパンフレットが積んであるだけで、係員は誰もいなかった。

彼女はしばらくボールペンを手の中でくるくると回しながら、何か言いたそうだがどう言えばいいのかわからないといった顔つきで僕を見ていた。彼女は明らかに混乱して迷って恥ずかしがっていた。

「申しわけないんですが、レンタカーの相談してるみたいなふりをしてて下さい」と彼女は言った。そして横目でちらちらとフロントの方を見た。「お客様と個人的に話しちゃいけないって規則で決められているんです」

「いいよ」と僕は言った。「僕がレンタカーの値段を君に訊いて、君がそれに答えてる。個人的な話じゃない」

彼女は少し赤くなった。「ごめんなさい。ここのホテル、すごく規則がうるさいんです」

僕はにっこりした。「でも眼鏡がすごくよく似合ってる」

「失礼？」

「その眼鏡が君によく似合っている。とても可愛い」と僕は言った。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

彼女は指で眼鏡の縁をちょっと触った。それから咳払いした。たぶん緊張しやすいタイプなのだろう。
「実はちょっとうかがいたいことがあったんです」と彼女は気をとりなおして言った。「個人的なことなんです」

僕はできることなら彼女の頭を撫でて気持ちを落ち着けてやりたかったけれどそうもいかないので、黙って相手の顔を見ていた。

「昨日話してらっしゃった、以前ここにあったホテルのことなんですけど」と彼女は小さな声で言った。「同じ名前の、ドルフィン・ホテルっていう……。それはどんなホテルだったんですか？　まともなホテルだったんですか？」

僕はレンタカーのパンフレットを一枚手にとって、それを眺めているふりをした。「まともなホテルというのはどういうことを意味するんだろう、具体的に？」

彼女は白いブラウスの両方の襟を指でつまんでひっぱって、それからまた咳払いした。

「その……上手く言えないんですけど、変な因縁のあるホテルとかそういうんじゃないんですか？　私、どうも気になって仕方ないんです、そのホテルのことが」

僕は彼女の目を見た。前にも思ったように、それは素直で綺麗な目だった。僕がじっと目を見ていると彼女はまた赤くなった。

「君が気になるというのがどういうことなのか僕にはよくわからないけれど、いずれにせよ話し始めるとかなり長い話になると思うんだ。ここで話すのはちょっと無理なんじゃないかな。君も忙しそうだし」

彼女はフロント・デスクで働いている同僚たちの方にちらりと目をやった。そして下唇をきれいな歯で軽く噛んだ。彼女は少し迷ってたが、やがて決心したように肯いた。

「じゃあ私の仕事が終わったあとで、会ってお話しできませんか？」

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

「君の仕事は何時に終わるの？」
「八時には終わります。でもこの近くで会うのは無理です。規則がうるさいから。遠くだったらいいけど」
「どこか離れたところで、ゆっくり話ができるような場所があったら、そこに行くよ」
彼女は肯いて、少し考えてからデスクに備えつけられたメモ用紙にボールペンで店の名前と簡単な地図を書いた。「ここで待っていて下さい。八時半までに行きます」と彼女は言った。
僕はそのメモをコートのポケットに仕舞った。
今度は彼女が僕の目をじっと見た。「私のこと、変な風に思わないでくださいね。こういうことするの初めてなんです。規則を破ったりするのは。でも本当にそうしないわけにいかないんです。その理由は後で話しますけど」
「変な風に思ったりしないよ。だから心配しなくていい」と僕は言った。「僕は悪い人間じゃない。あまり人には好かれないけれど、人の嫌がることはしない」
彼女は手の中でボールペンをくるくるまわしながら、それについて少し考えていたが、僕の言った意味はよく理解できなかったようだった。彼女は口もとに曖昧な微笑を浮かべ、それからまたひとさし指を眼鏡のブリッジにやった。「じゃあ、あとで」と彼女は言った。そして僕に営業用の会釈をしてから持ち場に戻っていった。魅力的な女の子だ。そして精神的に多少不安定なところがある。
部屋に戻ると冷蔵庫からビールを出して飲み、デパートの地下食料品売り場で買ってきたロースト・ビーフのサンドイッチを半分食べた。さて、と僕は思った。これでとりあえずの行動が決定されたわけだ。ギヤがローに入り、何処に行くのかはわからないにせよ、状況がゆっくりと動き始めた。悪くない。
僕は浴室に行って、顔を洗い、また髭を剃った。黙って、静かに、何の唄も唄わないで髭を剃った。ア

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

フター・シェーブをつけ、歯を磨いた。そして久し振りにじっと鏡の中の自分の顔を眺めた。大した発見はなかったし、別に勇気も湧いてこなかった。いつもの僕の顔だった。

僕は七時半に部屋を出てホテルの玄関でタクシーに乗り、彼女のメモ用紙を運転手に見せた。運転手は黙って肯いて僕をその店の前まで運んでくれた。タクシーで千円ちょっとの距離だった。五階建てのビルの地下にあるこぢんまりとしたバーで、ドアを開けると程よい音量でジェリー・マリガンの古いレコードがかかっていた。マリガンがまだクルー・カットで、ボタンダウン・シャツを着てチェット・ベイカーとかボブ・ブルクマイヤーが入っていた頃のバンド。昔よく聴いた。アダム・アントなんていうのが出てくる前の時代の話だ。

アダム・アント。

なんという下らない名前をつけるんだろう。

僕はカウンターに座って、ジェリー・マリガンの品の良いソロを聴きながら、J&Bの水割りを時間をかけてゆっくりと飲んだ。八時四十五分をまわっても彼女は現れなかったが、僕は別に気にしなかった。たぶん仕事が長引いているのだろう。店の居心地は悪くなかったし、一人で時間を潰すのには馴れていた。僕は音楽を聴きながら水割りをすすり、飲み終えると二杯めを注文した。そして特に見るべき物もないので、前に置かれた灰皿を眺めていた。

彼女がやってきたのは九時五分前だった。

「ごめんなさい」と彼女は早口で謝った。「仕事がのびちゃったんです。急にたてこんだうえにかわりの人の来るのが遅れたもので」

「僕のことならかまわないよ。気にしなくていい」と僕は言った。「どうせどこかで時間を潰さなくちゃ

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

ならなかったんだ」

奥の席に移りましょうと彼女は言った。僕は水割りのグラスを持って移動した。彼女は革の手袋を脱ぎ、チェックのマフラーを取り、グレーのオーバーコートを脱いだ。そして黄色の薄いセーターとダーク・グリーンのウールのスカートという格好になった。セーター姿になると、彼女の胸は思ったよりずっと大きいことがわかった。そして耳には上品な金のイヤリングをつけていた。彼女はブラディー・マリーを注文した。

飲み物が来ると、彼女はそれをとりあえず一口すすった。食事は済んだかと僕は訊いてみた。まだだけれど、それほどおなかは空いていない、四時に軽く食べたから、と彼女は答えた。僕はウィスキーを一口飲み、彼女はブラディー・マリーをもう一口飲んだ。彼女は急いでやってきたらしく、それから三十秒ほどじっと黙って息を整えていた。僕はナッツをひとつ手に取ってそれを検分して齧り、またひとつ手に取って検分しては齧りというのを繰り返しながら、彼女が落ち着きを取り戻すのを待っていた。

彼女は最後にひとつゆっくりと溜め息をついた。すごく長い溜め息だった。自分でも長すぎると思ったのか、あとで顔を上げて神経質そうな目で僕を見た。

「仕事が大変なの？」と僕は訊いてみた。

「ええ」と彼女は言った。「けっこう大変なんです。まだよく仕事に馴れてないし、ホテル自体開業して間もないから、上のほうもいろいろピリピリしてるし」

彼女はテーブルの上に両手を出して、指を組んだ。小指に一本だけ小さな指輪がはまっていた。飾り気のない、ごくあたり前の銀の指輪だった。僕と彼女は二人でしばらくその指輪を見ていた。

「その古いドルフィン・ホテルのことなんですけど」と彼女は言った。「でも、あなた、取材とかそういう関係の人じゃないですよね？」

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

「取材？」と僕はびっくりして聞き返した。「どうしてまた？」
「ちょっと訊いただけ」と彼女は言った。
僕は黙っていた。彼女は唇を噛んだままひとしきり壁の一点を眺めていた。
「少しごたごたがあったらしくて、それで上の方がすごく警戒してるんです。マスコミのことを。土地の買収とか、そういうことで……。わかるでしょ？ そういうの書きたてられるとホテルとしては困るわけ。客商売だから。イメージが悪くなるでしょう？」
「これまでに何か書かれたことはあるの？」
「一度、週刊誌にね。汚職まがいのこととか、立ち退き拒否してた人を会社がヤクザか右翼を使って追い出したとか、そういうようなこと」
「それで、そのごたごたに昔のドルフィン・ホテルが絡んでいるわけ？」
彼女は小さく肩をすくめて、ブラディー・マリーをすすった。「多分そうじゃないかしら。だからマネージャーもそのホテルの名前が出てきて、警戒したんだと思うの、あなたのことを。ね、警戒してたでしょう？ でも本当に私それについては詳しいことは知らないんです。ただこのホテルにドルフィン・ホテルっていう名前がついたのは、その前のホテルとの絡みがあったからだって話は聞いたことがあります。誰かから」
「誰から？」
「黒ちゃんの一人から」
「黒ちゃん？」
「黒服を着た連中のこと」
「なるほど」と僕は言った。「それ以外に何かドルフィン・ホテルについて耳にしたことはある？」

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

彼女は何度か首を振った。そして左手の指で右手の小指のリングをいじった。「怖いんです、私」と彼女は囁くように言った。「怖くてたまらないの。どうしようもないくらい」
「怖い？　雑誌に取材されることが？」
彼女は小さく首を振った。そしてしばらくグラスの縁に唇をそっとつけていた。どう説明すればいいものか、思い悩んでいるみたいだった。
「違うんです。そうじゃないの。別に雑誌のことなんてどうでもいいんです。だって、雑誌に何が出たって私は関係ないもの。そうでしょう？　上の方の人が慌てるだけだわ。私が言ってるのは全然別のことなの。あのホテル全体のこと。あのホテルには、つまりね、何かちょっとおかしいところがあるんです。ちょっとまともじゃないっていうのかな……歪んでいるところがあるの」
彼女は黙った。僕はウィスキーを飲み干し、おかわりを注文した。そして彼女のためにも二杯めのブラディー・マリーを取った。
「どんな風に歪んでいると感じるわけ、具体的に言って？」と僕は訊いてみた。「もし何か具体的にあればということだけれど」
「もちろんあります」と彼女は心外そうに言った。「あるけれど、それを上手く言葉にするのがむずかしいんです。だからそれについては今まで誰にも話したことがないの。感じたことはすごく具体的なんだけど、いざそれを言葉にしてみるとそういう具体性みたいなのがどんどん薄れていっちゃうんじゃないかという気がするんです。だから上手く話せないの」
「リアルな夢みたいに？」
「夢とはまた違うの。夢というのは、私もよく見るけれど、時間が経つと後退していくの。そのリアルさが。でもあれはそうじゃない。いつまで経っても同じなんです。いつまでもいつまでも、リア

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

んなの。いつまで経っても、そこにそのままあるの。さっと目の前に浮かぶんです」

僕は黙っていた。

「いいわ、何とか話してみます」と彼女は言って、酒を一口飲んだ。そして紙ナプキンで口を拭った。「一月だったわ。一月の始め。お正月が終わってちょっと経った頃。その日私は遅番で——遅番ってあまりやらないんだけど、その日は人がいなくて仕方なかったわけ——それでとにかく、仕事が終わったのが夜中の十二時ごろだったの。その時間に仕事が終わると、会社がタクシーを呼んで、みんなを順番に家に送り届けてくれるの。もう電車もないから。それで、十二時前に仕事が終わって、私服に着替えて、十六階まで従業員用のエレベーターで上がったんです。十六階には従業員の仮眠室があって、私そこに本を忘れてきたからなの。別にそんなの明日でもよかったんだけど、まあ読みかけだったし、それにもう一人いっしょのタクシーで帰ることになっていた女の子の仕事がちょっと手間取ってたんで、だからまあいいやついでだからと思って取りに上がったの。十六階には客室とは別にそういう従業員用の設備があるんです。仮眠室とか、ちょっとやすんでお茶を飲むところとか。だからちょくちょく行くことあるんです。

それでね、エレベーターのドアが開いて、私ごく普通に外に出たわけ。何も考えないで。ほら、そういうことってあるでしょう？　いつもいつもやり馴れていることとか、行き馴れている場所とかって、特に何も考えないで行動するでしょう、反射的に？　私もさっとごく自然に足を踏み出したの。考え事してたんだと思う、何かきっと。何だったかは覚えてないけど。コートのポケットに両手を突っ込んだまま、廊下に立ってふと気づくと、あたりが真っ暗なの。まったくの真っ暗。はっとして後ろを見ると、エレベーターのドアはもう閉まってるの。停電かな、と思ったわ、もちろん。でもそんなことありえない。まず第一にホテルはしっかりした自家発電装置を持ってるの。だからもし停電があったとしても、すぐにそっちに切り換えられるわけ。自動的に、ぱっと。本当にすぐに。私もそういう訓練に立ち会ってるから、よく

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

知ってるの。だから原理的に、停電というのは存在しないの。それにね、もし万が一、自家発電装置も故障したとしても、廊下の非常灯は点いてるはずなのよ。だから、こんな真っ暗になるわけがないの。廊下は緑色の光で照らされているはずなの。そうでなくてはならないの。あらゆる状況を考慮しても。
ところが、その時、廊下は真っ暗だったの。見える光といえばエレベーターのボタンと階数表示だけ。赤いデジタルの数字。私はもちろんボタンを押したわよ。でもエレベーターはどんどん下に行っちゃって、戻ってこないの。やれやれと思って、私はまわりを見回してみたの。もちろん怖かったけれど、でもそれと同時に面倒だなあとも思ったの。どうしてかわかる？」
僕は首を振った。
「つまりね、こんな風に真っ暗になっちゃうというのは、何かホテルの機能に問題があったということでしょう？　機械的にとか、構造的にとか、そういうこと。するとまたえらい騒ぎになるのよ。休日返上で仕事させられたり、訓練訓練で明け暮れたり、上がぴりぴりしたり。そういうの、もううんざり。やっと落ち着いたばかりなのにね」
なるほど、と僕は言った。
「それで、そういうことを考えていると、だんだん腹が立ってきたわけ。怖いよりも腹立たしさの方が強かったわけ。それで私、どうなっているかちょっと見てやろう、と思ったの。で、二、三歩歩いてみたの。ゆっくりと。するとね、何か変なの。つまり、足音がいつもと違うのよ。私はその時ローヒールの靴を履いていたんだけれど、いつもとは歩き心地も違うの。いつものカーペットの感触じゃないのよ。もっとゴツゴツしてるの。そういうのって、私敏感だから、間違えたりしないわ。本当よ。それからね、空気がいつもと違うの。何と言えばいいのかな、黴っぽいのね。ホテルの空気とは全然違う。うちのホテルはね、完全に空気を空調でコントロールしているの。すごく気をつかってるの。普通の空調じゃなくて、良い空

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

気を作って送ってるの。他のホテルみたいに乾燥しすぎて鼻が乾いたりしないように、自然な空気を送っているの。だから、黴臭いなんてことは、考えられないのよ。そこにあった空気はね、一口でいうと、古い空気。何十年も前の空気。子供のころ、田舎のおじいさんの家に遊びに行って、古いお蔵を開けて嗅いだような、そんな臭いなの。いろんな古いものが混じり合って、じっと澱んでいるようなね。

私はもう一度エレベーターを振り返ってみたの。でもこんどはもうエレベーターのスイッチ・ランプも消えちゃっているの。何も見えないの。全部死んじゃったのよ、完全に。そりゃ怖かったわ。当たり前でしょう？　真っ暗な中に私一人きりなんですもの。怖いわよ。でもね、変なの。あまりにもあたりが静かすぎるの。しーんと静まりかえっているの。物音ひとつしないの。変でしょう？　だって停電して真っ暗になっちゃったのよ。みんな騒ぎだすはずでしょう？　ホテルはほぼ満室だったし、そんなことになったらえらい騒ぎになってるはずですもの。なのに、気味が悪いくらい静かなわけ。それで私、何が何だか訳がわからなくなったの」

飲み物が運ばれてきた。僕と彼女は一口ずつそれをすすった。彼女はグラスを下に置いて、眼鏡に手を触れた。僕は黙って、彼女の話のつづきを待っていた。

「今までの感じはわかってもらえたかしら？」

「大体わかる」と僕は言って肯いた。「十六階でエレベーターを下りた。真っ暗だった。匂いが違う。静かすぎる。何かおかしい」

彼女は溜め息をついた。「自慢するわけじゃないけど、私はそれほど臆病な人間じゃないんです。少なくとも女の子にしては勇敢な方だと思うわ。電気が消えたからって、それだけで普通の子みたいにきゃあきゃあわめいたりしないわよ。そりゃ怖いことは怖いけれど、そういうのに負けちゃいけないとも思うの。だから何にせよ確かめてやろうと思ったの。それで手探りで廊下を進んでみたの」

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

「どっちの方に？」

「右」と言ってから、彼女は右手を上げて、それが間違いなく右であったことを確かめた。「そう、右の方に進んだのよ。ゆっくりと。廊下はまっすぐだった。壁沿いにしばらく進むとね、廊下が右に曲がっていたの。そしてその先の方に、ぼんやりと光が見えたの。すごく弱い光よ。ずっと奥の方から洩れてくる蠟燭の光みたいなの。それで私、誰かが蠟燭をみつけて、それをつけてるんだなと思ったわけ。それで、とにかくそこに行ってみようと思ったの。近づいてみると、その蠟燭の光はほんの少し開いたドアからこぼれていたわ。変なドア。見覚えがないドア。うちのホテルにはそんなドアないはずなのよ。でもとにかくそこから光がこぼれてたの。私はそこの前に立って、それからどうしたらいいのかわかんなくなっちゃったの。中に誰がいるかもわからないし、変な人が出てきても困るし、それにドアにも全然見覚えがないし。それで試しに小さくドアをノックしてみたんです。聞こえるか聞こえないくらいそっと、コンコンと。でもその音は私が予想していたよりずっと大きく響いたのよ。あたりがすごく静かだったから。でも何の反応もなかった。十秒くらいね。その十秒くらいのあいだ、私はそのドアの前でじっとしていたの。どうすればいいのかわからなかったから。でもそれから中でかさこそという音がしたの。何というか、重い服を着た人が床から立ち上がるような、そういう音。そして足音が聞こえたの。すごくゆっくりとした足音。さら……さら……さら……、そういうスリッパをひきずって歩くような足音。それが一歩一歩とドアの方に近づいて来るわけ」

　彼女はその音を思い出すように、宙を見つめた。そして首を振った。

「その音を聞いた途端に私ぞっとしちゃったの。これは人間の足音じゃないっていう気がした。根拠はないんだけど、直観的にそう思ったの。これは人間の足音じゃないって。背筋が凍りつくっていう感じが初めてわかったわ。その時。背筋って本当に凍りつくのよ。修辞的誇張じゃなくて。私、走って逃げたわ。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

一目散に。途中で一度か二度転んだと思う。ストッキングが破れてたから。でもそんなこと全然覚えてないの。ただ走って逃げたっていうただそれだけしか思いだせないの。走ってるあいだずっとエレベーターがまだ死んでたらどうしようとそのことばかり考えていたわ。でもちゃんとエレベーターは動いていた。階数表示もボタンもちゃんと電気がついていた。エレベーターは一階に停まってたわ。思いきりボタンを押すと、エレベーターは上がってきた。でもその上がり方がすごくゆっくりなの。本当に信じられないくらいのんびりしてるの。二階……三階……四階……ていう感じよ。早く来い、早く来い、とずっと念じていたけど、駄目なのよ。ものすごく時間がかかるの。なんだか人をじらしているみたいに」

彼女は一息ついて、ブラディー・マリーをまた一口すすった。そして指輪をくるくると回した。

僕は黙って話の続きを待った。音楽は消えていた。誰かが笑っていた。

「でもね、聞こえるのよ。足音が。さら……さら……さら……とそれは近づいてくるの。ゆっくりと、でも確実に。さら……さら……さら……と。部屋を出て、廊下を歩いて、私の方にやってくるの。怖かったわ。いや、怖いなんてものじゃないわね。きゅっと胃がせりあがってきてね、喉のすぐ近くまで来ているのよ。そして体じゅうから汗が吹き出すの。嫌な臭いのする冷たい汗。寒気。まるで肌の上を蛇が這っているみたい。エレベーターはまだ来ないの。七階……八階……九階……。そして足音は近づいてくる」

二十秒か三十秒彼女は黙っていた。そして相変わらずゆっくりと指輪を回していた。まるでラジオのチューニングをしているみたいに。カウンター席で女が何かを言い、男がまた笑った。早く音楽をかけてくれないかなと僕は思った。

「そういう怖さってね、経験してみないとわからないわよ」と彼女は乾いた声で言った。

「それでどうなったの?」と僕は聞いた。

「気がついたら、エレベーターのドアが開いていたの」と彼女は言って、肩をちょっとすくめた。「ドアが

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

聞いて、そこから懐かしい電灯の光がこぼれていたの。私そこに文字通り転がり込んだわ。そしてがたがた震えながら一階のボタンを押したの。ロビーに戻るとみんなびっくりしたわ。だってそうでしょ、私は真っ青で、口もきけないくらいぶるぶる震えているんだもの。マネージャーが来て、おい、どうしたんだ、って尋ねたの。それで私、息を詰まらせながら説明したの。十六階が何だか変だって。マネージャーはそれだけ聞くとすぐに男の子を一人呼んで、私と三人で十六階まで上がったの。何が起こったのかチェックするためにね。でも十六階はなんともなかったの。電灯もあかあかとついていたし、変な臭いもしなかった。いつもとまったく同じよ。衣裳室に行ってそこにいた人にも訊いてみたの。その人はずっと起きてたけれど、全然停電なんかしてないって言うのよ。念のために十六階を隅から隅まで歩いてみたけれど、変わったところは何もなかった。狐につままれたみたいだったわ。

下に降りるとマネージャーは私を自分の部屋に呼んだの。で、私てっきり怒られるものとおもっていたの。でも彼は怒らなかった。そしてもっと詳しく状況を説明しろって言うの。だから私、細かく全部説明したわよ。そのさらさらっていう足音のことまでね。何だか馬鹿馬鹿しいような気がしたけれど。きっと夢でも見てたんだろうって笑いとばされるんじゃないかって思いながら。

でも彼、笑わなかった。それどころかすごく真剣な顔してるの。そして私にこう言ったの。『今のこと誰にも何も言うんじゃないよ』って。優しい言いきかせるような口調で。『何かの間違いだと思うけれど、他の従業員が怖がったりするといけないから、黙っていなさい』って。うちのマネージャーって、そういう優しい言葉づかいする人じゃないのよ。もっと頭ごなしに話す人なの。それでその時私はこう思ったわ。ひょっとして、こういう経験したのは私が初めてじゃないんじゃないかって」

彼女は黙った。僕は彼女の話を頭の中で整理してみた。何か質問した方が良さそうな雰囲気だった。

「ねえ、他の従業員がそういう話をしているのを聞いたことはある?」と僕は訊いた。「何か君の体験に通

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

じるような異様なこととか、変わったこととか、不思議なこととか？　ただの噂でもいいんだけど」

彼女は少し考えてから首を振った。「ないと思う。でもね、私は感じるのよ。あそこには何か普通じゃないものがあるって。私の話を聞いた時のマネージャーの反応もそうだったし、それにあそこはなんだかひそひそ声の話が多すぎるのよ。上手く説明できないけど、何かが変なの。私がこの前に勤めていたホテルなんて全然そんなことなかったもの。もちろんこれほど大きなホテルじゃなかったから、事情は少しは違うでしょうけど。それにしても違いすぎるの。前のホテルにも怪談話みたいなのはあったけれど――どこのホテルにもひとつくらいはそういうのがあるのよ――私たちそんなもの笑いとばしていたもの。でもここはそうじゃないのよ。笑いとばすような雰囲気がないの。だから余計に怖いの。マネージャーだって、あの時笑いとばしてくれればよかったのよ。それとも怒鳴りつけるとかね。そうすれば私だってひょっとしたら何かの間違いだったんじゃないかとも思えたかもしれないのに」

彼女は目を細めて、手に持ったグラスをじっと見た。

「そのあとで十六階に行ったことはある？」と僕は訊いた。

「何度も」と彼女は平板な声で言った。「仕事場だから行きたくなくても行かなくちゃならない時はあるでしょう？　でも行くのは昼間だけ。夜は行かない。何があっても行かない。もう二度とあんな目にはあいたくないもの。だから遅番もやらないことにしたの。やりたくないって上の人に言ったの。はっきりと」

「これまで誰にもその話をしてないんだね？」

彼女は一度だけ短く首を振った。「さっきも言ったように誰かに話したのは今日が初めてよ。話そうにも話す相手がいなかったの。それにひょっとしてあなたがそのことについて何か心当たりでもあるんじゃないかと思ったから。その十六階の出来事について」

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

「僕が？　どうしてそう思ったの？」

彼女は漠然とした目で僕を見た。「よくわからないけど……あなたは前のドルフィン・ホテルのことを知っていたし、そのホテルがなくなった事情について聞きたがっていたし……それで何か私の経験したことについて思いあたることがあるんじゃないかという気がしたの」

「とくに思い当たることはないようだね」と僕は少し考えてから言った。「それに僕もそのホテルについて特に詳しく知っているわけじゃないんだ。小さな、あまりはやっていないホテルだった。四年ほど前にそのホテルに泊まって、そこの主人と知り合って、それでまた訪ねてきたんだ。それだけだよ。昔のドルフィン・ホテルはごく普通のホテルだった。別に何かの因縁があったというような話も聞いてないね」

いるかホテルが普通のホテルだとはとても思えなかったけれど、僕としては今のところはこれ以上話の間口を広げたくなかった。

「でも今日の午後私がドルフィン・ホテルってまともなホテルだったんですかって訊いた時、あなたは話が長くなるって言ったでしょう。それはどうしてかしら？」

「その話というのはとても個人的なことなんだ」と僕は説明した。「それを話し始めると長くなる。でも今君が話してくれたこととはたぶん直接的な関係はないと思うんだ」

僕がそう言うと彼女は少しがっかりしたようだった。彼女は唇をゆがめてしばらく自分の両手の甲を見ていた。

「役に立てなくて申し訳ないね。せっかく話してくれたのに」と僕は言った。

「いいの」と彼女は言った。「あなたのせいじゃない。それにとにかく話せてよかったわ。話しちゃって幾分すっきりしたから。こういうのってじっと一人で抱え込んでると、気持ちが落ち着かないの」

「そうだろうね」と僕は言った。「誰にも言わないで一人で抱えこんでると、頭の中でそれがどんどん膨れ

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

あがってくるんだ」僕は両手を広げて風船が膨らむ真似をした。
彼女は黙って肯いた。そしてリングをくるくる回して最後に指から引き抜き、またもとに戻した。
「ねえ、私の話を信じてくれる？　その十六階の話？」と彼女は自分の指を見ながら言った。
「もちろん信じる」と僕は言った。
「本当に？　でもそういうのって、異常な話じゃない？」
「たしかに異常かもしれない。でもそういうことってあるんだよ。僕にはわかる。だから君の言うことは信じるよ。何かと何かがふと繋がっちゃうんだ。何かの加減で」
彼女はそれについてひとしきり考えていた。
「あなたはそういうのをこれまでに経験したことあるの？」
「ある」と僕は言った。「あると思う」
「怖かった、その時？」と彼女が訊いた。
「いや、怖いというんじゃないな」と僕は答えた。「つまりね、いろんな繋がり方があるんだよ。僕の場合は……」
でもそこで言葉が突然ふっと消えてしまった。遠くの方で誰かが電話のコードを引き抜いたような感じだった。僕は一口ウィスキーを飲んでから、わからないと言った。「上手く言えない。でもそういうことってたしかにあるんだよ。だから信じる。他の誰が信じなくても、僕は君の言うことを信じる。嘘じゃない」
彼女は顔を上げて微笑んだ。これまでの微笑みとは少し感じの違う微笑みだった。個人的な微笑み、と僕は思った。彼女は話をしてしまったことで少しリラックスしたのだ。「どうしてかしら？　あなたと話してるとなんだかよくわからないけれど、気持ちが落ち着いてくるみたいなの。私、すごく人見知りする

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

方で、初対面の人とはあまりうまく話すことができないんだけれど、あなたにはすんなり話せる」

「それは我々二人のあいだにどこかしら相通じるところがあるからじゃないかな」と僕はにっこりと笑って言った。

彼女はそれに対してどう答えようかとしばらく迷っていたが、結局何も言わなかった。大きくため息をついただけだった。でも悪い感じのするため息ではなかった。ただ単に呼吸を調整しただけだった。「ねえ、何か食べない？　急におなかが空いてきたような気がする」

僕は何処かにきちんと夕食を食べにいこうと誘ってみたが、彼女はここで軽く食べるくらいでいいと言った。それで僕らはウェイターを呼んでピッツァとサラダを注文した。

食事をしながら僕らはいろんな話をした。彼女のホテルの仕事のことや、札幌での生活について。彼女は自分自身について話してくれた。彼女は二十三だった。高校を出て、ホテルの従業員教育をする専門学校で二年勉強した後、東京のホテルで二年働き、それからドルフィン・ホテルの募集広告に応募して採用され、札幌にやってきたのだ。札幌に来るのは彼女にとっては好都合だった。というのは、彼女の実家は旭川の近くで旅館を経営していたからだ。

「わりにいい旅館なのよ。古くからやっていて」と彼女は言った。

「じゃあここで君は見習いとか修業のようなことをやっているわけ、家業を継ぐための？」と僕は訊いてみた。

「というのでもないの」と彼女は言った。そしてまた眼鏡のブリッジに手をやった。「継ぐとかそういう先のことまでは全然考えてないの、まだ。私はただただ単純に好きなのよ、ホテルで働くのが。いろんな人が来て、泊まって、去っていく、そういうのが。そういう中にいるととてもほっとするの。安心できるの。子供の頃からそういう環境にいるでしょう。馴れてるのね」

「なるほどね」と僕は言った。

「どうしてなるほどなの？」

「フロントに立っていると君は何だかホテルの精みたいに見える」

「ホテルの精？」と彼女は言って笑った。「素敵な言葉。そういうのになれたら素敵でしょうね」

「君なら、努力すればなれる」と僕は言って微笑んだ。「でも、ホテルには誰も留まらないよ。それでいいの？　みんなやってきてただ通り過ぎて行くだけだよ」

「そうね」と彼女は言った。「でも何かが留まると、怖いような気がするの。どうしてかしら？　臆病なのかしら？　みんながやってきて、そして去っていくの。でもそれでほっとするの。変よね、そんなのって。普通の女の子ってそんな風には思わないでしょう？　普通の女の子って何か確かな物を求めているものなのよ。違う？　でも私はそうじゃない。どうしてだろう？　わからないわ」

「君は変じゃないと思う」と僕は言った。「まだ定まってないだけなんだ」

彼女は不思議そうに僕を見た。「ねえ、どうしてそんなことがあなたにわかるの？」

「どうしてだろう？」と僕は言った。「でも何となくわかるんだ」

彼女はしばらくそれについて考えていた。

「あなたの話をして」と彼女は言った。

「面白くない話だよ」と僕は言った。それでもいいから聞きたいと彼女は言った。それで僕は少しだけ自分のことを話した。三十四で、離婚経験があって、文章を書く半端仕事をして生計を立てている。スバルの中古に乗っている。中古だけれど、カー・ステレオとエアコンがついている。

自己紹介。客観的事実。

でも彼女は僕の仕事の内容についてもっと知りたがった。隠す必要もないので、僕は説明した。最近や

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

った女優のインタビューの話と、函館の食べ物屋の取材の話をした。
「そういう仕事ってとても面白そうだわ」と彼女は言った。
「面白いと思ったことなんて一度もないよ。文章を書くこと自体は別に苦痛じゃない。文章を書くのは嫌いじゃないんだ。書いているとリラックスする。でも書いている内容はゼロなんだよ。何の意味もない」
「たとえばどういうところが？」
「たとえば一日に十五軒もレストランやら料理屋やらを回って、出てきた料理を一口ずつ食べて、あとは全部残すなんてことが。そういうのってどこかが決定的に間違ってると僕は思うんだ」
「でも全部食べるわけにもいかないんでしょう？」
「もちろんいかない。そんなことしたら三日で死んでしまう。みんな僕のことを馬鹿だと思う。そんなことして死んでも誰も同情してくれない」
「じゃあ、仕方ないでしょう？」と彼女は笑いながら言った。
「仕方ないよ」と僕は言った。「それはわかっているんだ。だから雪かきのようなものだよ。仕方ないからやってるんだ。面白くてやっているわけじゃない」
「雪かき」と彼女は言った。
「文化的雪かき」と僕は言った。
それから彼女は僕の離婚について知りたがった。
「僕が離婚しようと思って離婚したわけじゃない。彼女の方がある日突然出ていったんだ。男と一緒に」
「傷ついた？」
「そういう立場に立てば普通の人間なら誰でも多少傷つくんじゃないかな」
彼女はテーブルに頬杖をついて僕の目を見た。「ごめんなさい。変な訊きかたをして。でもあなたはど

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

ういうふうに傷つくのか、うまく想像できなかったの。あなたってどういう風に傷つくのかしら？　傷つくとどうなるのかしら？」

「キース・ヘリングのバッジをコートにつけるようになる」

彼女は笑った。「それだけ？」

「僕が言いたいのは」と僕は言った。「そういうのって慢性化するってことなんだ。日常に飲み込まれて、どれが傷なのかわからなくなっちゃうんだ。でもそれはそこにある。傷というのはそういうものなんだ。これといって取り出して見せることのできるものじゃないし、見せることのできるものは、そんなの大した傷じゃない」

「あなたの言いたいことはすごくよくわかる」

「そう？」

「そうは見えないかもしれないけれど、私だっていろんなことで傷ついたのよ、ずいぶん」と彼女は小さな声で言った。「それでいろいろあって結局東京のホテルも辞めちゃったの。傷ついたの。辛かったし。私ってある種のことが上手く人並みに処理できないの」

「うん」と僕は言った。

「今でもまだ傷ついている。そのこと考えると今でも時々ふっと死んでしまいたくなる」

彼女はまた指輪を外して、またもとに戻した。それからブラディー・マリーを飲み、眼鏡をいじった。そしてにっこりと笑った。

僕らはけっこう酒を飲んでいた。何杯注文したのかわからなくなるくらい飲んでいた。時計はもう十一時を回っていた。彼女は腕時計を見て、明日の朝早いからもう帰ると言った。家までタクシーで送ると僕は言った。彼女のアパートは車で十分ほどのところにあった。僕が勘定を払った。外に出るとまだ雪がち

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

らついていた。たいした雪ではないが、路面は凍りついてつるつると滑った。それで僕らは腕をしっかりと組んでタクシー乗り場まで歩いた。彼女は少し酔っぱらってふらふらしていた。

「ねえ、その土地買収のごたごたについて書いた週刊誌のことだけどね」と僕はふと思い出して言った。「その週刊誌の名前は覚えてる？　それと大体の発売日と」

彼女はその週刊誌の名前を教えてくれた。新聞社系の週刊誌だった。「たしか去年の秋くらいだったと思うわ。私が直接読んだわけじゃないから、詳しいことはよくわからないけれど」

僕らは小雪の舞うなかで五分ほどタクシーがやってくるのを待った。そのあいだ、彼女は僕の腕をずっと掴んでいた。彼女はリラックスしていた。僕もリラックスしていた。

「こんなにのんびりしたのは久し振り」と彼女は言った。僕の方もそんなにのんびりしたのは久し振りだった。彼女と僕の間には何かしら相通じるところがある、と僕はあらためて思った。だからこそ一目会った時から僕は彼女に好意をいだいていたのだ。

タクシーの中で僕らはあたりさわりのない世間話をした。雪のこととか、寒さのこととか。彼女の勤務時間のこととか、東京のこととか。そういう話をしながら、僕はこのあと彼女をどうしたものかと思い悩んでいた。もうひと押しすれば彼女と寝られるだろうということは僕にはわかっていた。そういうのはだいたいわかるのだ。彼女が僕と寝たがっているかどうかまではわからない。でも僕と寝てもいいと思っている。そういうのは目つきや呼吸や喋り方や手の動かし方でわかるのだ。そして僕もたぶん彼女と寝たかった。寝ても面倒なことにはならないだろうということもわかっていた。でもそれだけなのだ。彼女自身が言うように。でも僕には決心がつかなかった。そういう風に彼女と寝るのはフェアじゃないんじゃないかという思いが頭の隅からどうしても

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

去らなかった。彼女は僕より十歳年下で、どことなく不安定で、おまけにかなり酔っぱらって足がよろけていた。そんなのはしるしのついたカードでトランプ・ゲームをしているみたいなものだった。フェアじゃない。

でもセックスの領域でフェアネスというものがどれだけの意味を持つのか、と僕は自問してみた。セックスに公正さを求めるんならどうしていっそのことミドリガメにでもならないんだ、その方が話が早いじゃないか、と僕は思った。

これも正論だった。

僕はその二つの価値観の間でしばらく思い悩んでいたが、タクシーが彼女のアパートに到着するちょっと前に、彼女がすごくあっさりとそのジレンマを解消してくれた。「私、妹と二人で暮らしてるの」と彼女が僕に言ったのだ。

それで、それ以上あれこれと考える必要がなくなって、僕はいささかほっとした。

タクシーがアパートの前に止まると、彼女は悪いけれど怖いので、ドアの前までついてきてくれないかと僕に言った。夜おそくになると時々廊下に変な人がいることがあるの、と彼女は言った。僕は運転手に五分で戻るからここで待っていてくれと言って、彼女の腕をとって入り口まで凍った道を歩いた。それから僕らは階段を三階まで上がった。余計なもののついていないシンプルな鉄筋のアパートだった。306という番号のついたドアの前までくると、彼女はバッグを開け、中に手を突っ込んでキイを探し出した。そして僕に向かってどことなく不器用そうに微笑んで、ありがとう、楽しかったわと言った。

僕の方も楽しかった、と僕は言った。

彼女は鍵を回して開け、キイをまたバッグに仕舞った。口金の閉まるぱちんという乾いた音が廊下に響いた。それから彼女は僕の顔をじっと見た。黒板に書かれた幾何の問題をじっと見ているような目付きだ

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

った。彼女は迷っていた。彼女は戸惑っていた。僕に上手くさよならを言えないのだ。僕にはそれがわかった。

僕は壁に手をついて彼女が何かを決心するのを待った。でもなかなか決心がつかなかった。

「おやすみ。妹さんによろしく」と僕は言った。

彼女は四秒か五秒の間、唇をきっと固く結んでいた。「妹と住んでるっていうの、あれウソなの」と彼女は小さな声で言った。「本当は一人で住んでるの」

「知ってるよ」と僕は言った。

彼女はゆっくりと時間をかけて赤くなった。「どうして知ってるの？」

「どうしてだろう？　ただわかるんだよ」と僕は言った。

「あなたって嫌な人ね」と彼女は静かに言った。

「そうだな、そうかもしれない」と僕は言った。「でも最初に断ったように人の嫌がることはしないよ。何かにつけこんだりもしない。だから何も嘘なんかつくことはなかったんだ」

彼女はしばらく迷っていたが、やがてあきらめたように笑った。「そうね。嘘なんかつくことなかったのね」

「でも」と僕は言った。

「でも、とても自然についちゃったの。私も私なりに傷ついたのよ。さっきも言ったように。いろんなことがあって」

「僕だって傷ついている。キース・ヘリングのバッジだって胸につけてる」

彼女は笑った。「ねえ、少し中に入ってお茶でも飲んでいく？　もう少しあなたと話がしたいわ」

僕は首を振った。「有り難う。僕も君と話がしたい。でも今日は帰るよ。どうしてかはわからないけど、

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

今日は帰った方がいいと思う。君と僕は一度にあまり沢山のことを話さない方がいいような気がする。どうしてだろう?」

彼女は看板の細かい字を読む時のような目つきでじっと僕を見ていた。

「うまく説明できない。でもそういう気がする」と僕は言った。「話すことが沢山ある時は少しずつ話すのがいちばんいいんだ。そう思う。あるいは間違っているかもしれないけれど」

彼女は僕の言ったことについて少し考えていた。それから考えるのをあきらめた。「おやすみなさい」と言って彼女は静かにドアを閉めた。

「ねえ」と僕は声をかけてみた。ドアが十五センチほど開いて、彼女が顔を見せた。「また近いうちに君を誘ってみていいかな」と僕は聞いてみた。

彼女はドアに手をかけたまま深く息を吸いこんだ。「たぶん」と彼女は言った。そしてまたドアが閉まった。

タクシーの運転手は退屈そうにスポーツ新聞を広げて読んでいた。僕が一人でシートに戻ってホテルの名前を言うと、彼はびっくりしたようだった。

「本当に帰っちゃうんですか?」と彼は言った。「てっきりあとはいいから帰ってくれって言われると思ったんだけどね。雰囲気的に。普通は大体そうなるんだけど」

「だろうね」と僕は同意した。

「長年こういう商売やってると、まず勘は外れないんだけどなあ」

「長年やってれば外れることもある。確率的に」

「そりゃそうだけど」と運転手はちょっと混乱したような声で言った。「でもお客さん、少し変わってるん

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

「ふうん」

「そうかい」と僕は言った。そして僕は寝た。いろいろありがとう」

部屋に戻って歯を磨いた。歯を磨きながら少し後悔した。結局そのまま少し寝てし
まった。僕の後悔は大体、それほど長くは続かなかった。

＊

＊

朝、十時に僕はフロントに電話をかけて、部屋の予約を三日延長した。問題はなかった。どうせオフ
の季節はシーズン・オフなのだ。それは以前から変わらない。
それから新聞を買って、ホテルの向かいのダンキン・ドーナツに入り、プレイン・マフィンを二つ食べ、大
きなカップでコーヒーを二杯飲んだ。ホテルの朝食なんて二日で飽きる。ダンキン・ドーナツがいちばん
だ。安いし、コーヒーはおかわりできる。
それからタクシーを拾って図書館に行った。札幌でいちばん大きい図書館に行ってくれと言うと、運
転手はそこに連れて行ってくれた。図書館で僕は四か月分の新聞と週刊誌のバックナンバーを調べてみた。ドルフィ
ン・ホテルの記事が出ているのは十一月と十二月分だった。僕はその部分のコピーをとって、近くの喫茶店に
入り、コーヒーを飲みながら記事を拡げてそれを読んでみた。
わかりにくい記事だった。きちんと理解するまでに、何度も読みなおさなくてはならなかった。記者は
わかりきった事を書いた、精一杯努力はしていたが、その努力も事態の複雑さの前には歯が立たなかった。たぶん
だ。私はほとんどわからないのだ。でもまあじっくり読めばおおよその輪郭はわかってきた。記事の

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

タイトルは「札幌の土地疑惑。黒い手がうごめく都市再開発」とあった。空から写した完成間近のドルフィン・ホテルの写真も載っていた。

要約するとこういうことだった。まずだいいちに札幌市の一部で大規模な土地の買い占めが進行していた。二年ばかりの間に水面下で土地の名義が異様に動いた。地価が意味もなくホットになってきた。記者がその情報を得て調査を始めた。調べてみると、土地は様々な会社によって買われていたが、その大方は名前だけのペーパー・カンパニーだった。会社の登録はしてある。税金も払っている。しかしオフィスもないし、社員もいない。そしてそのペーパー・カンパニーは別のペーパー・カンパニーに繋がっていた。実に巧妙に名義上の土地転がしが行われていた。二千万で売られた土地が六千万で転売され、それが二億で売られていた。様々なペーパー・カンパニーの迷路をひとつひとつ辛抱強く辿っていくと、行き先はひとつだった。B産業という不動産を扱う会社だった。これはリアルな会社だった。赤坂に大きなファッショナブルな本社ビルを持っている。そのB産業はおおっぴらにではないがA総業というコングロマリットに繋がっていた。鉄道やらホテル・チェーンやら映画会社や食品チェーンやらデパートやら雑誌、クレジット金融から損害保険までを配下に収める巨大企業だった。A総業は政界にも巨大なパイプを持っていた。

記者はもっと先まで追及した。するともっと面白いことがわかった。B産業の買い占めていた地域は札幌市が再開発計画を進めていた土地だったのだ。地下鉄の建設や、庁舎の移転や、そういう公共投資がその地域に行われることになっていた。その資金の大半は国から出ることになっていた。政府と北海道と札幌市が話しあって再開発計画を練り、最終決定に達した。場所や規模や予算、等々。ところがいざ蓋を開けてみると、その決定した地域の土地はこの何年かの間に誰かの手でしっかりと買い占められていた。情報がA総業に流れたのだ。そして計画が最終的に決定する以前から、土地の買い占めが地下深く進行していた。つまりその最終的な決定は最初から政治的に決定されていたのだ。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

その買い占めの尖兵がドルフィン・ホテルだった。まずドルフィン・ホテルが一等地を確保した。その巨大ホテルが全事業のヘッド・クォーターの役割を果たすことになった。それはその地域のリーダー的役割を担っていた。人目を引き、人の流れを変え、その地域の変貌の象徴となった。すべては綿密な計画のもとに進行した。それが高度資本主義というものだ。最も巨額の資本を投資するものが最も有効な情報を手にし、最も有効な利益を得ることになる。誰が悪いというのではない。資本投下というのはそういうものを内包した行為なのだ。資本投下をするものはその投下額に応じた有効性を要求する。中古車を買う人間がタイヤを叩いたりエンジンを調べてみたりするように、一千億の資本を投下するものはその投下の有効性を細かく検討するし、ある場合には操作もする。その世界ではフェアネスなんて何の意味も持たない。そんなことをいちいち考えるには投下資本の額が大きすぎるのだ。

強引なこともやる。

たとえば、土地買収に応じないものがいるとする。昔から商売をしている履物屋が買収に応じない。すると、どこからともなくこわもての人々が出てくる。巨大な企業というのはちゃんとそういうルートだって持っているのだ。そういう会社は政治家から、小説家から、ロック・シンガーから、やくざまで、息のかかったものを、応分に揃えている。日本刀を持ったこわもての連中が押し掛ける。警察もそういう事件にはあまり熱心には手を出さない。警察の一番上まで話はちゃんと通っているのだ。それは腐敗ですらない。システムなのだ。それが資本投下というものだ。もちろん昔から多かれ少なかれそういうことはあった。昔と違うのはその資本の網が比べ物にならぬほど細かくなり、タフになったことだった。巨大コンピューターがそれを可能にした。そして世界に存在するあらゆる事物と事象がその網の中にすっぽりと収まっていった。集約と細分化によって資本というものは一種の概念にまで昇華されていた。それは極言するなら、宗教的行為でさえあった。人々は資本の有するダイナミズムを崇めた。その神話性を崇めた。東京の

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

地価を集め、ぴかぴかと光るポルシェの象徴するものを集めた。それ以外にはこの世界にはもう神話など残されてはいなかったからだ。

それが高度資本主義社会というものだった。気にいるといらざるとにかかわらず、我々はそういう社会に生きていた。善悪という基準も細分化された。ソフィスティケートされたのだ。善の中にもファッショナブルな善と、非ファッショナブルな善があった。悪の中にもファッショナブルな悪と、非ファッショナブルな悪があった。ファッショナブルな善の中にもフォーマルなものがあり、カジュアルなものがあり、ヒップなものがあり、クールなものがあり、トレンディーなものがあり、スノッブなものがあった。組み合わせも楽しめた。ミッソーニのセーターに、トゥルッサルディのパンツをはき、ポリーニの靴を履くみたいに、複雑なスタイルを楽しむことができた。そういう世界では、哲学はどんどん経営理論に似ていった。哲学は時代のダイナミズムに近接するのだ。

当時はそうは思わなかったけれど、一九六九年にはまだ世界は単純だった。機動隊員に石を投げるというだけのことで、ある場合には人は自己表明を果たすことができた。それなりに良い時代だった。ソフィスティケートされた哲学のもとで、いったい誰が警官に石を投げられるだろう？　いったい誰が進んで催涙ガスを浴びるだろう？　それが現在なのだ。隅から隅まで網が張られている。網の外にはまた別の網がある。何処にも行けない。石を投げれば、それはワープして自分のところに戻ってくる。本当にそうなのだ。

記者は全力を傾けてその疑惑を追及していた。しかし彼がどれだけ声を上げたところで、いや上げれば上げるほど、その記事は微妙に説得力を失っていた。訴えかける力を持たなかった。彼にはわかっていないのだ。それは疑惑ですらないのだ。それは高度資本主義の当然のプロセスなのだ。そんなことはみんな知っているのだ。だから誰もそんなものには注意を払わないのだ。巨大資本が不正に情報を入手して土地

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

を買い占め、あるいは政治的決定を強要し、その末端でやくざが小さな履物店主を脅したり、流行らない小さなホテルの経営者を殴ったからといって誰がそんなことを気にするだろう？　そういうことなのだ。時代は流砂の如く流れつづけるのだ。我々の立っている場所は、我々の立っていた場所ではないのだ。

それは立派な記事だったと思う。よく調べてあったし、正義感に溢れていた。でもトレンディーではなかった。

僕はその記事のコピーをポケットに突っ込み、コーヒーをもう一杯飲んだ。

僕はいるかホテルの支配人のことを考えた。生まれながらに失敗の影に覆われたあの不幸な男のことを。彼にこの時代が乗り切れるわけがなかったのだ。

「トレンディーじゃないんだ」と僕は声に出して言ってみた。

ウェイトレスが通りかかって、変な顔で僕を見た。

僕はタクシーを拾ってホテルに帰った。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

8

部屋から昔の共同経営者に電話をかけた。僕の知らない誰かが電話に出て僕の名前を聞いて、それからまた別の誰かが出て僕の名前を聞いて、それからやっと彼が出てきた。忙しそうだった。我々が話をするのは殆ど一年振りだった。彼を意識的に避けていたわけではない。ただ単に話すことがなかったのだ。僕は彼に対してずっと好意を持っていたし、今でもそのことには変わりはない。でも結局のところ、彼は僕にとっては（そして僕は彼にとっては）「もう通過してしまった領域」に属していた。僕が彼をそこに押し込んだわけではない。彼が自分でそこに入り込んだわけでもない。我々はそれぞれに違う道を歩んでいたし、その二本の道はなかなか交わらなかった。それだけのことだった。

元気か、と彼が訊いた。

元気だ、と僕は言った。

今札幌にいると言うと、寒いだろうと彼は訊いた。

寒いと僕は答えた。

仕事の方はどうだと僕は聞いた。

忙しい、と彼は答えた。

あまり酒を飲みすぎないように、と僕は言った。

最近はあまり飲んでない、と彼は言った。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

そちらは今雪が降っているか、と彼は訊いた。

今のところ何も降ってない、と僕は答えた。

ひとしきりそういう礼儀正しいボールのやりとりがあった。

「ところでちょっと頼みがあるんだ」と僕は切り出した。僕はずっと以前に彼にひとつ貸しがあった。彼もそのことは覚えていたし、僕も覚えていた。それに僕はそうしょっちゅう他人に頼みごとをする人間ではないのだ。

「いいよ」と彼は簡単に言った。

「昔一緒にホテルの業界紙に関係した仕事やったことがあったよな」と僕は言った。「五年くらい前のことだけどさ、覚えてる？」

「覚えてる」

「あの関係のラインはまだ生きているかな？」

彼は少し考えていた。「あまり活発とは言えないけど、生きていることは生きてる。温めることは不可能ではないな」

「あそこに一人、業界の裏側にすごく詳しい記者がいただろう。名前は忘れたけど。痩せていて、いつも変な帽子をかぶってる男。彼とコンタクトつけられる？」

「たぶんつけられると思う。何が知りたい？」

僕は彼にドルフィン・ホテルのスキャンダル記事のことをかいつまんで話した。彼は週刊誌の名前と発売日をメモした。それから大ドルフィン・ホテルができる前にそこにあった小ドルフィン・ホテルのことを話した。そして次のことを知りたいと言った。まず、何故新しいホテルが「ドルフィン・ホテル」という名前を引き継いだのか？　そして小ドルフィン・ホテルの経営者はどのような運命を辿ったのか？　ス

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

キャンダルはその後どのような進展を見せたのか？

彼はそれを全部メモし、電話口で読みあげた。

「これでいい？」

「それでいい」と僕は言った。

「どうせ急ぐんだろう？」と彼が訊いた。

「悪いけど」と僕は言った。

「何とか今日の内に連絡を取るようにしてみるよ。そちらの電話番号を教えてくれないかな」

僕はホテルの電話番号と部屋番号を教えた。

「じゃあ、またあとで」と言って彼は電話を切った。

僕はホテルのカフェテリアで簡単な昼食を食べた。ロビーに下りてみると、カウンターに例の眼鏡をかけた女の子がいた。僕はロビーの隅のほうの椅子に座ってしばらく彼女を眺めていた。彼女は忙しそうに働いていたし、僕の存在には気づかないようだった。あるいは気づいていたかもしれないが、無視していた。でも別にどちらでもよかった。僕はただ彼女の姿をちょっと見たかっただけなのだ。僕は彼女を見ながら、あの子と寝ようと思えば寝られたんだ、と思った。

時々そういう風に自分を勇気づける必要があった。

十分ほど彼女を眺めてから、エレベーターで十五階に上がり、部屋で本を読んだ。今日も空はどんよりと曇っていた。ほんの少しだけ光が入ってくるはりぼての中で暮らしているような気分だった。いつ電話がかかってくるかもしれないので、外に出たくなかったし、部屋にいれば本を読むくらいしかやることもなかった。ジャック・ロンドンの伝記を最後まで読んでしまうと、スペイン戦争についての本を読んだ。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

長く長く引き延ばされた夕暮れのような一日だった。めりはりというものがない。窓の外の灰色に少しずつ黒が混じっていって、やがて夜になった。陰鬱さの質が少し変わっただけだった。世界には二色しか色が存在しなかった。灰色と黒。それが一定時間をおいて行ったり来たりしているだけなのだ。
僕はルーム・サービスでサンドイッチを注文した。そしてそのサンドイッチをひとつずつゆっくりと食べ、ビールを冷蔵庫から出して飲んだ。ビールも一口ずつゆっくり飲んだ。やることがないと、いろんなことを時間をかけて丹念にやるようになる。七時半に共同経営者から電話がかかってきた。
「連絡がとれたよ」と彼は言った。
「大変だった?」
「まあまあ」と彼は少し考えてから答えた。たぶんかなり大変だったんだろうと僕は思った。「ざっと簡単に教えるよ。まず第一に、この問題はもうぴったりと蓋をされてしまっている。蓋をされて、紐でしばられて、金庫の中に入ってる。誰ももうほじくりかえしたりしない。終わったんだよ。スキャンダルはもう存在しない。政府部内とか市庁舎で二、三目立たない異動のようなものがあったかもしれない。でもたいしたものじゃない。微調整みたいなもんだよ。それ以上は誰にもさわれない。検察庁もちょっとは動いたけど、確かなものは何もつかめなかった。いろいろとややこしい筋が絡んでいる。ホットなんだよ。だから聞き出すのはけっこうむずかしかった」
「個人的なことだし、誰にも迷惑はかけないよ」
「相手にもそう言っておいた」
僕は受話器を持ったまま冷蔵庫まで行ってビールを取り、片手で蓋を開けてグラスに注いだ。
「でもしつこいようだけど、下手に手を出すと怪我するよ」と彼は言った。「これはすごく大掛かりなことなんだ。どうしてお前がこんなことにかんでいるのかわからないけど、とにかく深入りしない方がいい

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

よ。事情はあるんだろうけど、もっと穏やかで身分相応の人生を送った方がいいと思うね。俺のように、とまでは言わないけどさ」

「わかってる」と僕は言った。

彼は咳払いした。僕はビールを一口飲んだ。

「昔のドルフィン・ホテルは最後まで立ち退かなかったんで、いろいろと気の毒な目にあった。すっきりと出ていけばよかったんだけどね、出ていかなかった。大勢というものが見えてなかったんだね」

「そういうタイプなんだ」と僕は言った。「トレンディーじゃないんだ」

「いろんな嫌な目にあった。たとえばやくざが何人かホテルにずっと泊まりこんでやりたい放題をやった。法律にひっかからない程度に。おっかないのがロビーにじっと座っているとかね。そして誰かが入ってくると睨むんだ。わかるだろう、そういうの？　でもホテルの方はなかなか音を上げなかった」

「わかるような気はするな」と僕は言った。いるかホテルの支配人は様々な種類の人生の不幸に馴れているのだ。多少のことでは驚かない。

「でも最後にドルフィン・ホテルは奇妙な条件を出した。そしてその条件を呑めば出ていってもいいと言った。想像してみなよ、どういう条件か？」

「わからない」と僕は言った。

「考えてみろよ。少しは」と彼は言った。「それはそっちのもうひとつの質問の答えにもなっているんだから」

「『ドルフィン・ホテル』という名前を引き継ぐという条件？」

「そのとおり」と彼は言った。「それが条件だった。で、買収する方はそれを呑んだ」

「どうして、また？」

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

「悪い名前じゃないから。そうだろう？『ドルフィン・ホテル』、悪い名前じゃないよ」
「まあね」と僕は言った。
「それにA総業は新しいホテル・チェーンを作る計画を立てていたんだ、ちょうど。これまでの中の上クラスの手持ちのチェーンじゃない最高クラスのチェーンをさ。そしてその名前はまだついていなかった」
「ドルフィン・ホテル・チェーン」と僕は言ってみた。
「そう。ヒルトンとか、ハイアットとかに匹敵するクラスのチェーンだよ」
「ドルフィン・ホテル・チェーン」と僕はもう一度繰り返した。引き継がれ、拡大された夢。「それで、昔のドルフィン・ホテルの経営者はどうなったんだろう？」
「そんなことは誰も知らない」と彼は言った。
僕はビールをまた一口飲み、ボールペンで耳たぶを掻いた。
「出ていく時にまあ、まとまった金をもらったから、それで何かやってるのかもしれないな。でも調べようがないね。通行人みたいな役まわりの人物だから」
「まあそうだろうな」と僕は認めた。
「だいたいそういうところだよ」と彼は言った。「それだけわかった。それ以上はわからなかった。いいかな？」
「ありがとう。とても助かった」と僕は礼を言った。
「うん」と言って彼はまた咳払いした。
「金は使った？」と僕は聞いてみた。
「いや」と彼は言った。「一度飯を食わせて、銀座のクラブにでも連れていって、車代渡すくらいでいいだろう。そういうのは気にしないでいいよ。どうせ全部経費で落ちるんだ。なんでも経費で落ちるんだ。税

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

理士にもっと経費をつかえって言われてるんだ。だからそのことは気にしないでいい。もし銀座のクラブに行きたいんなら今度一度つれていってやってもいいぜ。経費で落ちる。どうせ行ったことないんだろう？」

「銀座のクラブっていったい何があるんだ？」

「酒があって、女の子がいる」と彼は言った。「行くと税理士が褒めてくれる」

「税理士と行けばいい」と僕は言った。

「この前行った」と彼はつまらなそうに言った。

僕らは挨拶をして、電話を切った。

電話を切ったあとで、僕は共同経営者について少し考えてみた。僕と同じ歳で既に腹が出始めた男。机に何種類もの薬を入れ、選挙について真剣に考える男。子供の学校について気を病み、いつも夫婦喧嘩をし、それでも基本的には家庭を愛している男。気の弱いところがあって、時々酒を飲みすぎるけれど、でも基本的にはきちんとした丁寧な仕事をする男。あらゆる意味でまともな男。

僕らは大学を出てからコンビを組んで、長い間二人でうまくやってきた。小さな翻訳事務所から始め、少しずつ仕事の規模を大きくしていった。僕らはもともとはそれほど親しい友人というのではなかったけれど、割に気が合うところがあった。毎日顔を合わせていて、口論ひとつしたことがなかった。彼は育ちのいい穏やかな人間だったし、僕は口論を好まなかった。多少の差こそあれ、互いに敬意を払って一緒に仕事を続けてきた。でも結局のところ我々はいちばん良い時期に別れたのだ。僕が急に辞めてからも彼は僕抜きでうまくやっていたし、正直に言って僕がいなくなってからの方がうまくやっていた。仕事の業績も順調に伸びていた。会社も大きくなった。新しく人を入れ、彼らをうまく使っていた。精神的にも、一

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

人になってからの方がずっと安定していた。

たぶん僕の方に問題があったんだろうと思う。たぶん僕の中の何かが彼にとってはあまり健全ではない影響を及ぼしていたのだと思う。だから僕がいなくなってからの方がずっとのびのびと振る舞えるのだ。おだてたりすかしたりしながら人を上手く使い、経理の女の子につまらない冗談を言い、下らないとは思いながらも懸命に経費を使い、誰かを銀座のクラブに連れていって接待する。もし僕と一緒にいたら、彼は緊張してそういうことがすんなりと上手くやれなかっただろうと思う。いつも僕の目を気にして、こういうことをしたら僕がどう思うだろうというようなことばかり考えていただろう。そういう男なのだ。僕は正直なところ彼が隣で何をしていようが別に何とも感じなかったのだが。

あの男は一人になってよかったんだ、と僕は思った。あらゆる意味で。

要するに彼は僕がいなくなることによって、年齢相応に振る舞えるようになったのだ。年齢相応、と僕は思った。それから「年齢相応」と口に出して言ってみた。口に出してみると、それは何だか他人事のように思えた。

*

九時にもう一度電話のベルが鳴った。電話がかかってくるあてなんてまったくなかったし、最初それが何を意味する音なのかよくわからなかった。でも電話だった。僕は四回めのベルで受話器をとって耳にあてた。

「あなた今日ロビーで私のことをじっと見てたでしょう？」とフロントの女の子が言った。声からすると別に怒ってもいないし、喜んでもいないようだった。淡々とした声だった。

「見てた」と僕は認めた。

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

彼女はしばらく黙っていた。

「仕事中にあんな風に見られると緊張するのよ、私、すごく。おかげでいっぱい失敗しちゃったわよ。見られてるあいだ」

「もう見ない」と僕は言った。「僕はただ自分を勇気づけるために君を見てたんだ。そんなに君が緊張するとは思わなかった。これからは気をつけて見ないようにする。今どこにいるの？」

「家よ。これからお風呂に入って寝るの」と彼女は言った。「ねえ、あなた宿泊延ばしたのね？」

「うん。用事が少し延びたんだ」と僕は言った。

「でももうあんな風に私のことを見たりしないでよ。そういうことされると困るの」

「もう見ない」

少し、沈黙があった。

「ねえ、私って少し緊張しすぎてると思う？ 全体的に？」

「どうだろう、わからないな。そういうのは個人差があるものだからね。でも誰でも他人からじっと見られてると多かれ少なかれ緊張するんじゃないかな。とくに気にすることないよ。それに僕は時々無意識に何かをじっと見つめすぎる傾向があるんだ。いろんなものをじっと見ちゃうんだ」

「どうしてそういう傾向があるのかしら？」

「傾向というものは説明がつきにくいんだ」と僕は言った。「でも気をつけて見ないようにするよ。仕事で失敗させたくないから」

彼女は僕の言ったことについてしばらく黙って考えを巡らせていた。

「おやすみなさい」とやがて彼女が言った。

「おやすみ」と僕は言った。

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

電話が切れた。僕は風呂に入り、十一時までソファで本を読んだ。それから服を着て廊下に出た。そして迷路のように入り組んだ長い廊下の端から端まで歩いてみた。フロアのいちばん端の奥まったところに従業員用のエレベーターがあった。従業員用エレベーターは一応一般客の目には触れにくいようになっていたが、隠してあるわけではなかった。非常階段という矢印の方に歩いていくと客室番号のないドアが幾つか並んでいて、その一角にエレベーターはあった。宿泊客が間違えて乗らないように「荷物専用」という札がかかっていた。僕はしばらく前で様子をうかがっていたが、エレベーターはずっと地階にとどまったままだった。この時刻にはもう利用者は殆どいないのだ。天井のスピーカーからBGMが小さく流れていた。ポール・モーリアの「恋は水色」だった。

僕はエレベーターのボタンを押してみた。ボタンを押すと、エレベーターはふと目覚めたようにその首をもたげ、上にあがってきた。階数表示のデジタル数字が1、2、3、4、5、6、と上昇した。ゆっくりと、しかし確実にそれは近づいてきた。僕は「恋は水色」を聞きながらその数字を眺めていた。中に誰かがいたら客用のエレベーターと間違えたと言えばいい。ホテルの宿泊客なんてどうせいつも間違いばかりやってるものなのだ。11、12、13、14、とそれは上昇した。僕は一歩うしろに下がり、ポケットに両手を突っ込んでドアが開くのを待った。

15、というところで数字の上昇は止まった。そして一瞬の間があった。何の音も聞こえない。そしてドアがすうっと開いた。中には誰もいなかった。

すごく静かなエレベーターだな、と僕は思った。あの喘息もちみたいな昔のいるかホテルのエレベーターとはずいぶん違う。僕は中に入って、16のボタンを押した。ドアが音もなく閉まり、微かな移動の感覚があり、またドアが開いた。十六階だった。でも十六階は彼女が言っていたような暗闇ではなかった。ちゃんと光がついて、天井からはやはり「恋は水色」が流れていた。何の臭いもしなかった。僕は試しに十

六階を端から端まで歩いてみた。十六階は十五階とまったく同じ作りだった。廊下はくねくねと折れ曲がり、どこまでも客室がつづき、その間に自動販売機を集めたスペースがあり、何台か客用のエレベーターがあった。ドアの前にルーム・サービスの夕食の皿がいくつか出してあった。カーペットは深い赤で、柔らかく上質だった。足音も聞こえない。あたりはしんと静まり返っていた。BGMがパーシー・フェイス・オーケストラの「夏の日の恋」に変わった。僕は端まで歩くと回れ右をして途中まで引き返し、客用のエレベーターで十五階に下りた。そしてもう一度同じことを繰り返してみた。従業員用のエレベーターでまた十六階に上り、また光のついたごく当たり前のフロアを前にした。「夏の日の恋」が流れていた。

僕はあきらめてまた十五階に下り、ブランディーをふたくち飲んで眠った。

*

夜が明けて、黒が灰色に変化していった。雪が降っていた。さて、と僕は思った。今日は何をすればいいのか？

何もすることがなかった――相変わらず。

僕は雪の中をダンキン・ドーナツまで歩いて行ってドーナツを食べ、コーヒーを二杯飲み、新聞を読んだ。新聞には選挙の記事が載っていた。映画欄には相変わらず見たい映画は見当たらなかった。一本、僕の中学校の時の同級生が俳優になって準主役で出演している映画があった。「片想い」というタイトルの青春映画で、売りだし中のローティーンの女優と、同じく売りだし中のアイドル歌手が共演する学園物だった。僕のかつての同級生がどういう役を務めるのかは考えるまでもなく予想がついた。ハンサムで若くてものわかりのいい先生の役をやるのだ。すらりと背が高く、スポーツも万能で、女生徒たちは名前を呼ばれただけで失神するくらい彼に憧れている。で、その主役の女の子もやはり彼に憧れている。だから日

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

[illegible]たりもする。で、一人の男の子が懸命に恋をしている。ごく普通の、ちょっと気の弱い男の子が……たぶんそういう話だ。考えなくてもわかる。
僕は彼が俳優になってからしばらく、珍しさも手伝って何本か彼の出る映画を見た。でもそのうちに全く見なくなってしまった。どの映画も映画として全然面白くなかったし、彼はいつもいつも判で押したような同じ役しかやっていなかったからだ。ハンサムで、スポーツ万能で、清潔で、足が長い役だった。始めのうちは大学生の役が多く、それから先生とか医者とか若いエリート・サラリーマンとかの役が多くなった。でもやることはいつも同じだった。女の子が憧れて騒ぐ役なのだ。歯がきれいで、にっこり笑うと僕が見ても感じがよかった。でも僕はそんな映画を見るために金を払いたくない。僕はべつにフェリーニとかタルコフスキーみたいなのしか見ないというようなシリアスでスノッブな映画ファンではないけれど、彼の出る映画はあまりにもひどすぎた。筋はわかりきっているし、会話は月並みだし、金もかかっていなかったし、監督も投げたような仕事をしていた。
でも考えてみれば彼は俳優になる前から実にそういうタイプの男だった。感じはいい、でも実体がよくわからないのだ。僕は中学校時代二年間彼と同じクラスにいた。理科の実験では同じテーブルを使っていた。だから時々話もした。昔から映画そのままにおそろしく感じのいい男だった。女の子はその当時から彼に失神しそうなくらい憧れていた。彼が女の子に話しかけると、みんなうっとりとした目をした。理科の実験のときも、女の子はみんな彼の方を見ていた。わからないことがあると彼に訊いた。彼が優雅な手付きでガス・バーナーに火をつけるとみんなオリンピックの開会式でも見るみたいな目付きで彼を見ていた。僕が存在していることなんて誰ひとり気にもしなかった。
成績もよかった。いつもクラスで一番か二番だった。親切で、誠実で、思い上がったところがなかった。どんな服を着ても清潔でスマートで育ちがよさそうに見えた。便所で小便をしているときでさえエレ

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

ガントだった。小便している姿がエレガントに見える男なんてめったにいない。もちろんスポーツも万能だったし、クラス委員としても有能だった。クラスでいちばん人気のある女の子と仲がいいという話もあったが、本当かどうかはわからなかった。先生も彼に夢中だったし、父母参観日があると、お母さんたちがみんな彼に夢中になった。そういうタイプの男だった。でも僕には彼が何を考えているのかはさっぱりわからなかった。

映画と同じだった。

そんな映画を今更金を払って見にいく理由がどこにあるだろう?

僕は新聞をごみ箱に捨て、雪の中をホテルに戻った。ロビーを通る時にフロントの方を見たが、彼女の姿はなかった。休憩時間なのかもしれない。僕はビデオ・ゲームのあるコーナーに行って、パックマンとギャラクシーを何ゲームかずつやった。よくできているが神経症的なゲームだった。それに好戦的にすぎる。でも時間は潰せる。

それから部屋に戻って本を読んだ。

取り柄のない一日だった。本を読むのに飽きると、窓の外の雪を眺めた。雪は一日中降り続いていた。よくまあこれだけ雪が降るものだと感心するほど雪が降っていた。十二時になるとホテルのカフェテリアに行って昼食を食べた。そしてまた部屋に戻って本を読み、窓の外の雪を眺めた。

でもまったく取り柄がないというわけでもなかった。ベッドの中で本を読んでいると四時にドアにノックの音がした。開けると彼女が立っていた。眼鏡をかけて、ライト・ブルーのブレザー・コートを着たフロントの女の子だった。彼女は少しだけ開いたドアの隙間からひらべったい影のようにするりと部屋の中に入って素早くドアを閉めた。

「こんなところみつかったら、私クビになっちゃうのよ。ここのホテルってそういうことにすごく厳しい

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

んだから」と彼女は言った。

彼女は一度ぐるりと部屋を見回してからソファに座り、スカートの裾をきゅっきゅっとひっぱった。そして一息ついた。「休憩時間なの、今」と彼女は言った。

「何か飲む？　僕はビールを飲むけど」

「いらない。あまり時間がないの。ねえ、あなた部屋に籠って一日何してるの？」

「特に何もしてないよ。暇を潰してるんだ。本を読んだり、雪を見たり」と僕は冷蔵庫からビールを出し、グラスに注ぎながら言った。

「何の本？」

「スペイン戦争についての本。始まってから終わるまで詳しく書いてあるんだ。いろんな示唆に富んでいる」。スペイン戦争というのは本当にいろんな示唆に富んでいる戦争なのだ。昔はちゃんとそういう戦争があったのだ。

「ねえ、変な風に取らないでね」と彼女は言った。

「変な風に？」と僕は聞き返した。「変な風に取るって、つまり君がここに来たことについて？」

「うん」

僕はグラスを持ってベッドの端に腰を下ろした。「変な風には取らないよ。ちょっとびっくりはしたけど、来てくれて嬉しいよ。退屈してたし、話相手もほしかったんだ」

彼女は部屋の真ん中に立つと、ライト・ブルーの上着を音もなくするりと脱いで、皺にならないようにライティング・デスクの椅子の背にかけた。それから歩いて僕のとなりにやってきて、足を揃えて座った。上着を脱ぐと、彼女はどことなく弱く、傷つきやすそうに見えた。僕は彼女の肩に手を回した。彼女は僕の肩に頭を載せた。とてもいい匂いがした。白いブラウスにはきちんとアイロンがかかっていた。彼女

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

分はどそんな風にしていた。僕はじっと彼女の肩を抱き、彼女は僕の肩に頭を載せて目を閉じて眠っているみたいに静かに呼吸をしていた。雪が街の音を吸い込みながらいつまでもいつまでも降り続けていた。音というものがまるで聞こえなかった。

彼女は疲れていて、何処かで休みたかったのだろう、と僕は思った。僕はとまり木みたいなものなのだ。僕は彼女が疲れていることに対して気の毒に思った。彼女のような若くて綺麗な女の子がそんなに疲れるというのは理不尽で公正でないように思えたからだ。でも考えてみればそれは理不尽でも不公正でもなかった。疲労というのは美醜や年齢とは無関係にやってくるものなのだ。雨や地震や落雷や洪水と同じように。

五分たつと、彼女は頭を上げて僕の側を離れ、上着を取って着た。そしてまたソファに腰を降ろした。そして小指の指輪をいじっていた。上着を着ると彼女はまた少し緊張してよそよそしくなったように見えた。

僕はベッドに腰かけたまま彼女を見ていた。

「ねえ、君がその十六階で変な目にあった時のことだけどね」と僕は聞いてみた。「そのとき何か普段とは別のことをしなかった？　エレベーターに乗る前か、あるいは乗ってから？」

彼女は少し首をかしげて考えていた。「そうね……どうかしら？　何も変わったことはしなかったと思うけど。……思い出せないわ」

「何かいつもとは違う変な徴候みたいなのもなかった？」

「普通よ」と彼女は言って肩をすぼめた。「変なことなんか何もなし。ごく普通にエレベーターに乗って、ついてドアが開いたら真っ暗だったの。それだけ」

僕は肯いた。「ねえ、今日何処かで一緒に食事でもしないか？」

彼女は首を振った。「ごめんなさい。悪いけど、今日はちょっと約束があるの」
「明日はどう？」
「明日はスイミング・スクールに行くの」
「スイミング・スクール」と僕は言った。そして微笑んだ。「古代エジプトにもスイミング・スクールがあったの知ってる？」
「そんなこと知らないわ」と彼女は言った。「嘘でしょう？」
「本当だよ。仕事の関係で一度資料を調べたことがあるんだ」と僕は言った。でも本当だからといって、それでどうなるものでもなかった。
彼女は時計を見て立ち上がった。「有り難う」と彼女は言った。そして来たときと同じように音もなくするりと外に出ていった。それがその日の唯一の取り柄だった。ささやかなことだ。でも古代エジプト人だって、日々のささやかな出来事に喜びを見出しつつささやかな人生を送って、そして死んでいったのだろう。水泳を習ったり、ミイラを作ったりしながら。そういうものの集積を人は文明と呼ぶのだ。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

9

十一時になってついにやることがなくなってしまった。やれることはとにかく全部やった。爪も切ったし、風呂にも入ったし、耳の掃除もしたし、TVのニュースも見た。腕立て伏せと屈伸もやった。夕食も食べた、本も最後まで読んでしまった。でも眠くなかった。もう一度従業員用エレベーターを試してみたかったが、そうするにはまだ時間が早すぎた。従業員の行き来の跡絶える十二時すぎまで待った方がいい。

いろいろ考えた末に結局二十六階のバーに行くことにした。そして窓の外の雪のふりしきる茫漠とした暗闇を見ながらマティーニを飲み、エジプト人について考えた。古代エジプト人はいったいどんな人生を送っていたんだろう、と僕は思った。どんな人たちがスイミング・スクールに通っていたのだろう？　たぶんファラオの一族とか貴族とか、そういうハイ・クラスの人たちだろう。トレンディーなジェット・セット・エジプト人。そういう人たち用にナイル河の一部を区切るか何かして専用のプールみたいなのを作り、そこでシックな泳ぎ方を教えたのだろう。映画俳優になった僕の友達みたいな感じのいい教師がついて、偉い人たちに「はい殿下、結構でございます。ただクロールの右手をもう少しまっすぐに伸ばされた方がよろしいかと存じます」なんてことをしたり顔で言っていたのだろう。

僕はそういう光景を想像することができた。インクみたいに濃いブルーのナイルの水、ぎらぎらと輝く太陽（もちろんそこには葦賓ばりの屋根かなにかがついているだろう）、鰐やら平民やらを追い払うための

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

槍を持った兵隊、そよぐ葦、ファラオの王子たち。それから王女はどうかな、と僕は思った。女の子も水泳を習ったのだろうか？　たとえばクレオパトラ。ジョディー・フォスターみたいな感じの若き日のクレオパトラ。彼女も僕の友達の水泳教師を見て失神しただろうか？　たぶんしただろうな。それが彼の存在事由なのだから。

そういう映画を作ればいいんだと僕は思った。そういうのなら見にいってもいい。

水泳教師は卑しい生まれの人間ではない。イスラエルかアッシリアあたりの王族の息子なのだが、戦争に負けてエジプトに連れてこられ、奴隷になる。でも奴隷になっても彼は感じの良さを微塵も失わない。その辺がチャールトン・ヘストンやらカーク・ダグラスなんかとは違う。白い歯を見せてにっこりと笑い、優雅に小便をする。ウクレレを持たせたらナイルの河岸に立って「ロカフラ・ベイビー」でも歌い出しそうである。こういう役は彼にしかできない。

で、ある日ファラオの一行が彼の前を通りかかる。彼は河岸で葦を刈っていたのだが、その時ちょうど河で船が転覆する。彼はためらいひとつ見せずどぶんと河に飛び込み、鮮やかなクロールでそこまで泳いでいって、小さな女の子を抱えて鰐と競争しながら戻ってくる。すごく優雅に。科学の実験班でガス・バーナーをつけたりするときと同じようにすごく優雅に。それをファラオが見ていて感心し、そうだ、あの青年を王子たちの水泳教師にしようと思う。前の教師は口のきき方が悪かったので一週間前に底無しの井戸に放り込んだばかりなのだ。そんなわけで、彼は王立スイミング・スクールの先生になる。なにしろ感じがいいから、みんな彼に夢中になる。夜になると女官たちが体にいろんな香料をぬりたくって彼のベッドに潜りこんでくる。王子たちや王女たちも彼に心服する。ここで「水着の女王」と「王様と私」を一緒にしたようなスペクタクル・シーンが入る。彼と王子・王女たちがみんなでシンクロナイズド・スイミングみたいなことをやってファラオのお誕生日を祝うのだ。ファラオはいたくお喜びになり、それでまた彼

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

の株が上がる。でも彼はそれを鼻にかけたりしない。謙虚なのだ。そしていつもにっこりと微笑んで、エレガントに小便をする。女官がベッドに入ってくると前戯に一時間くらいかけ、ちゃんといかせてやり、終わったあとで髪を撫でて「最高だったよ」と言う。親切なのだ。

エジプトの女官と寝るというのはどんなものだろう、と僕はちょっと考えてみたが、どうも具体的なイメージが浮かんでこなかった。無理にイメージを喚起しようとすると、どうしても二〇世紀フォックスの「クレオパトラ」が浮かんでくるのだ。エリザベス・テイラーとリチャード・バートンとレックス・ハリソンの出ていたひどい映画。長い柄のついた扇ではたはたとエリザベス・テイラーを扇いでいたハリウッド的にエキゾチックな脚の長い色黒の女の子たち。いろんな大胆なポーズをとって、彼を楽しませる。エジプト人の女たちはそういうことに長けているのだ。

で、ジョディー・フォスター的クレオパトラが彼に失神するくらい夢中になる。

月並みかもしれないが、そうじゃないと映画にならない。

彼の方もジョディー・クレオパトラに夢中になる。

でもジョディー・クレオパトラに夢中になっているのは彼だけではない。真っ黒なアビシニアの王子も彼女に恋焦がれている。彼女のことを考えると思わず踊り出してしまうくらい好きなのだ。これは何といってもマイケル・ジャクソンが演じなくてはならない。彼は恋ゆえにアビシニアからはるばる砂漠を越えてエジプトまでやってきたのだ。キャラヴァンの焚き火の前でタンバリンか何か持って「ビリー・ジーン」を歌い踊りながら。星の光を受けて目がきらりと光ったりするのだ。そしてもちろん水泳教師とマイケル・ジャクソンとの間に葛藤がある。恋の鞘当てがある。

僕がそこまで考えたところでバーテンダーがやってきて、申し訳ありませんがそろそろ閉店の時間になりますのでと申し訳なさそうに言った。時計を見るともう十二時十五分だった。残っている客は僕しかい

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

なかった。バーテンダーはほとんど片付けをすませていた。やれやれ、なんでこんな長いあいだ下らないことを考えていたんだろうと僕は思った。無意味で馬鹿馬鹿しい。どうかしてる。僕は勘定書きにサインして、残っていたマティーニを飲みほし、席を立った。そしてバーを出て、両手をポケットにつっこんだままエレベーターがやってくるのを待った。

でもジョディー・クレオパトラはしきたりによって弟と結婚しなくてはならない、と僕は思った。その幻想のシナリオを僕は頭から追い払えなくなってしまっていた。あとからあとから頭にシーンが浮かんでくるのだ。性格が弱くて屈折した弟。誰がいいかな？　ウディー・アレン、まさか。それじゃ喜劇になってしまう。宮廷でしょっちゅう面白くない冗談を言ってはプラスティックの金槌で自分の頭を叩いている。駄目だ。

弟についてはあとで考えよう。ファラオはやはりローレンス・オリヴィエだ。頭痛もちで、いつもひとさし指の先でこめかみを押さえている。気に入らない人間は底無し井戸に放り込むか、ナイル河で鰐と競争させるかする。インテリジェントで、残酷なのだ。瞼を取り去って砂漠に放り出したりもする。

そこまで考えた時にエレベーターのドアが開いた。音もなくするすると。僕は中に入って十五階のボタンを押した。そしてまた話の続きを考えた。そんなもの考えたくなかった。でも止めようと思っても止まらないのだ。

舞台は一転して荒れはてた砂漠である。砂漠の奥にある洞窟ではファラオに追放された予言者が誰にも気づかれることなくひっそりと孤独に生きている。彼は瞼を切り取られながら、なんとか砂漠を横断して奇蹟的に生き延びたのだ。羊の皮を被って強い日光を避け、彼は暗闇の中で暮らしている。虫を食べ、草を齧って。そして内なる目を得て未来を予言する。きたるべきファラオの没落を、エジプトの黄昏を、そして世界の転換を。

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

羊男だ、と僕は思った。どうしてこんなところに突然羊男が出てくるんだ？

ドアがまたするすると音もなく開いた。僕はぼんやりと考え事をしながら外に出た。羊男、彼はエジプト時代から存在したのだろうか？　それともこれはみんな僕が頭の中で作り出した意味のない幻想に過ぎないのだろうか？　僕はポケットに手を突っ込んだまま暗闇の中に立ってそんなことを考えていた。

暗闇？

気がつくとあたりは真っ暗闇だった。小さな光ひとつ見えなかった。僕のうしろでエレベーターのドアが閉まってしまうとまわりには漆黒の闇が下りた。自分の手さえ見えなかった。もうBGMも聞こえなかった。「恋は水色」も「夏の日の恋」も聞こえなかった。空気はひやりとして、黴臭かった。

僕はそんな暗闇の中に一人立ちすくんでいた。

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

10

それは恐ろしいほどの完璧な暗闇だった。

何ひとつとして形のあるものを識別することができないのだ。自分自身の体さえ見えないのだ。そこに何かがあるという気配さえかんじられないのだ。そこにあるものは黒色の虚無だけだ。

そんな真の暗闇の中では自分の存在が純粋に観念的なものに思えてくる。肉体が闇の中に溶解し、実体を持たない僕という観念がエクトプラズムのように空中に浮かびあがってくる。僕は肉体から解放されているが、新しい行き場所を与えられてはいない。僕はその虚無の宇宙を彷徨っている。悪夢と現実の奇妙な境界線を。

僕はしばらくそこにじっと立ちすくんでいた。体を動かそうにも、手足は麻痺したように本来の感覚を失っていた。まるで深海の底におしこまれたみたいだった。濃密な闇が僕に奇妙な圧力を加えていた。沈黙が僕の鼓膜を圧迫していた。僕はなんとか少しでも暗闇に目を馴らそうとした。でも無駄だった。時間が経てば目が馴れるというような生半可な暗闇ではないのだ。完全な暗闇だった。黒色の絵具を幾重にも幾重にも塗り重ねたような深く隙のない闇だった。僕はポケットを無意識に探ってみた。右のポケットの中には財布とキイ・ホルダーが入っていた。左の方には部屋のカード・キイとハンカチといくらかの小銭。でもそんなものは闇の中では何の役にも立たない。僕は煙草をやめたことを初めて後悔した。煙草をやめていなければ、そこにはライターなりマッチなりがあったはずなのだ。でも今そんなことを悔やんで

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

も仕方無い。僕はポケットから手を出し、壁のありそうな方に伸ばしてみた。闇の奥に僕は固い縦の平面を感じた。壁がそこにあった。壁はつるりとして冷ややかだった。ドルフィン・ホテルの壁にしては冷たすぎる。ドルフィン・ホテルの壁はこんなに冷たくない。エアコンがいつも穏やかな温度に空気を保っているからだ。落ち着いてゆっくりと考えよう、と僕は自分に言い聞かせた。

落ち着いて考えるんだ。

まずだいいちにこれはあの女の子が遭遇したのとまったく同じ事態なのだ。僕はそれをなぞっているだけなのだ。だから脅えることはないのだ。彼女だって一人でちゃんとこの状況を切り抜けたのだ。もちろん僕にだってできる。できないわけはないのだ。だから落ち着くんだ。彼女がやったのとまったく同じように行動すればいいのだ。このホテルには何かしら奇妙なものが潜んでいるし、それはおそらく僕自身にも関わっていることなのだ。このホテルは間違いなくどこかであのいるかホテルと繋がっているのだ。だからこそ僕はここに来たのだ。そうだろう? そうだ。彼女と同じように行動し、そして彼女が見なかったものを見届けなくてはいけないのだ。

怖いか?

怖い。

やれやれ、と僕は思った。冗談抜きで怖いのだ。丸裸にされたような気がする。嫌な気分だ。深い暗黒は暴力の粒子を僕のまわりに漂わせている。そして僕はそれがうみへびのように音もなくするすると近寄ってくるのを見ることさえできないのだ。救いようのない無力感が僕を支配している。体中の毛穴という毛穴が直に暗闇に曝されているような気がする。シャツが冷たい汗でぐっしょりと濡れている。喉がからからになる。唾を飲み込むのにすごく骨が折れる。

ここはいったい何処なんだろう? ドルフィン・ホテルではない。絶対に違う。それだけは間違いな

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

……ここはどこか奇妙な場所なんだ。僕は何かを踏み越えて、この奇妙な場所に入り込んでしまったのだ。僕は目を閉じて大きく何度か深呼吸した。

馬鹿みたいな話だけれど、ポール・モーリア・グランド・オーケストラの「恋は水色」が聴きたかった。今あのBGMが聞こえたらどんなに幸せなことだろうと思った。どんなに元気づけられることだろう。リチャード・クレーダーマンだっていい。今なら我慢できる。ロス・インディオス・タバハラスだって、ホセ・フェリシアーノだって、フリオ・イグレシアスだって、セルジオ・メンデスだって、パートリッジ・ファミリーだって、1910フルーツガム・カンパニーだって、なんだっていい。なんだって今なら我慢する。なんでもいいから音楽が聴きたかった。あまりにも静かすぎるのだ。ミッチ・ミラー合唱団だって我慢する。アンディー・ウィリアムズとアル・マルティーノがデュエットで唄っても我慢する。何でももうよせ、と僕は思った。下らないことを考えすぎる。でも何かを考えないわけにはいかない。何でもいいのだ。頭の中の空白を何かで埋めてしまいたいのだ。恐怖のせいだ。空白の中に恐怖が忍び込んでくるのだ。

焚き火のまえでタンバリンを叩いて「ビリー・ジーン」を踊るマイケル・ジャクソン。らくだたちでさえうっとりとそれに聴きほれている。

頭が少し混乱している。

アタマガスコシコンランシテイル。

僕の思考が暗闇の中で軽くこだまする。思考がこだまするのだ。

僕はもう一度深呼吸して、頭から無意味なイメージを放逐する。いつまでもこんなことを続けているわけにはいかない。行動に移らなくてはならない。そうだろう？　そのために僕はここに来たんじゃないか？

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

僕は腹をきめて、暗闇の中を手探りでゆっくりと右に向けて歩き始めた。でもまだ足が上手く動かない。自分の足じゃないような気がする。筋肉と神経が上手く連動していないのだ。僕は足を動かしているつもりなのだが、実際には足は動いていない。暗黒の水のような暗闇が僕をすっぽりと包んで逃がさない。どこまでもどこまでもその暗闇は続いている。地球の芯まで。僕は地球の芯に向かって進んでいるのだ。そしてそこに行くと、もう二度と地上にもどりつくことはできないのだ。何か別のことを考えよう、と僕は思った。何か考えないことには恐怖がどんどん体を支配していく。映画の筋の続きを考えよう。何処まで話が進んだんだっけ？ 羊男の出てくるところまで。でも砂漠のシーンは今のところはそれで終わり。画面はまたファラオの宮殿に戻る。きらびやかな宮殿。アフリカ中の富がそこに集められている。ヌビア人の奴隷がそこらじゅうにかしこまっている。その真中にファラオがいる。ミクロス・ローザみたいな音楽が流れている。ファラオは明らかに苛立っている。「エジプトで何かが腐っている」と彼は思う。「それもこの宮殿で、何か間違ったことが進行している。私はそれをはっきりと感じる。それを正さねばならない」

僕は一歩一歩注意深く足を前に出す。そして思う。あの女の子によくこんなことが出来たものだと。僕はまったく感心してしまう。わけのわからない真っ暗闇に突然放り込まれ、その闇の奥に何があるか一人で確かめに行くなんて。僕でさえ――こういう異空間的な闇が存在するという話を前もって聞かされていた僕でさえ――これほど脅えているというのに。もし何の予告もなくこの闇の中に一人で放り出されていたら、僕は前に進もうなんていう気にはまずなれなかっただろう。きっと僕はエレベーターの前に立ちすくんでじっとしていたことだろう。

僕は彼女のことを考えた。彼女が競泳用の黒いつるりとした水着を着て、スイミング・スクールで泳ぎを習っているところを想像した。そしてそこにも映画俳優をやっている僕のかつての同級生がいた。そし

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

て彼女も彼に失神するくらい憧れていた。彼がクロールの右手の伸ばし方について注意すると、彼女はうっとりとした目で僕の友達を見た。そして彼女は夜になると彼のベッドにもぐりこんでいった。僕は悲しかった。傷つきさえした。そんなことしちゃいけない、と僕は思った。君には何もわかっちゃいないんだ。彼は感じが良くて親切なだけなんだ。彼は君にやさしい言葉をかけて、君をいかせてくれるかもしれない。でもそれはただ親切なだけなんだよ。それはただ単なる前戯の問題なんだよ。

廊下が右に折れていた。

彼女の言ったとおりだった。でも僕の頭の中で、彼女はその僕の同級生と寝ていた。彼は彼女の服を優しく脱がせ、体の部分部分を全部ひとつひとつ褒めた。それも本心で褒めていた。やれやれと僕は思った。まったく感心しちゃうね。でもそのうちにだんだん腹が立ってきた。そんなの間違っていると僕は思った。

廊下が右に折れていた。

僕は壁に手を触れたまま右に曲がった。遠くに小さな光が見えた。いくつものヴェールを通してこぼれてくるようなぼんやりとした小さな光。

彼女の言ったとおりだ。

僕の同級生は彼女の体に優しくくちづけをしていた。首筋から肩から乳房へとゆっくりと。カメラは彼の顔と彼女の背中を映している。それからくるりとカメラは回転する。そして彼女の顔を映す。でもそれは彼女ではない。ドルフィン・ホテルのフロントの女の子ではない。それはキキの顔なのだ。昔僕といるかホテルに泊まった、素敵な耳を持った高級娼婦のキキ。何も言わずに僕の人生から消えてしまったキキ。僕の同級生とキキが寝ているのだ。それは実際の映画の一シーンのように見える。カット割りがきちんとしすぎている。いささかきちんとしすぎている。凡庸と言ってもいいくらいに。彼らはアパートの一室で

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

抱き合っている。窓のブラインドから光が入っている。キキ。どうしてここに突然あの子が出てくるんだ？ 時空が混乱している。

ジクウガコンランシテイル。

僕は光に向かって進んだ。足を踏みだすと頭の中のイメージがすうっと消えた。

フェイドアウト。

僕は沈黙の暗闇の中を壁に沿って進んだ。僕はそれ以上何も考えないことにした。考えたって仕方ない。ただ時間を引き伸ばしているだけのことだ。何も考えず、足を前に出すことだけに集中するのだ。注意深く、確実に。光が仄かにあたりを照らしている。でもそこがどういう場所なのかが見定められるほど明るくはない。ただドアが見えるだけだ。見覚えのないドア。そう、彼女の言ったとおりだ。古い木製のドア。そこには番号の札がついている。でもその数字までは読みとれない。暗すぎるし、札も汚れている。いずれにせよここはドルフィン・ホテルではない。ドルフィン・ホテルにこんな古いドアが存在するはずがない。そして空気の質も違う。この臭いはいったい何だろう？ まるで古い紙の臭いのようだ。光が時折ふらふらと揺れた。たぶん蠟燭の光なのだろう。

僕はドアの前に立って、しばらくその光を見ていた。

そしてまたあのフロントの女の子のことを考えた。彼女とあの時寝ておくべきだったかな、とふと思った。僕はあの現実の世界にまた戻ることができるのだろうか？ そして僕はまたあの子とデートすることができるのだろうか？ そう思うと僕は現実の世界やらスイミング・スクールやらに対して嫉妬した。あるいはそれは正確には嫉妬じゃないのかもしれない。それは拡大され歪められた後悔の念かもしれない。でも外見的にはそれは嫉妬にそっくりだった。少くとも真暗闇の中では嫉妬そのものみたいに感じられた。やれやれ、どうしてこんなところで嫉妬を感じたりするのだ。何かに嫉妬するなんて、ものすごく久

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

し振りのことだった。僕は嫉妬という感情を殆ど感じることのない人間なのだ。何かに嫉妬するには僕はたぶんあまりにも個人的すぎるのだ。でも今、僕は驚くほど強い嫉妬を感じていた。それもスイミング・スクールに対して。

馬鹿気てる、と僕は思う。どこの誰がスイミング・スクールに嫉妬する？ そんな話聞いたこともない。

僕は唾を飲み込んだ。ドラム缶を金属バットでジャスト・ミートしたような大きな音がした。ただ唾を飲み込んだだけで。

音が奇妙な響き方をしているのだ。彼女が言っていたように。そう、僕はノックしなくちゃならないんだ。ノックするんだよ。そして僕はノックしてみた。ためらわずに思いきって。小さくこんこんと。聞こえなければいいのに、というくらい小さな音で。でも出てきた音は巨大だった。その音はまるで死そのもののように重く、冷たかった。

僕は息を止めて待った。

しばらく沈黙があった。彼女の時と同じだ。どれくらいの時間かはわからない。五秒かもしれないし、一分かもしれない。暗闇の中では時間がはっきり定まらない。揺れ動き、引き伸ばされ、凝縮する。その沈黙の中で僕自身も揺れ動き、引き伸ばされ、凝縮する。時間の歪みに合わせて僕自身も歪むのだ。ビックリハウスの鏡に写る像のように。

それからその音が聞こえた。かさこそという誇張された音。きぬずれの音だ。何かが床から立ち上がる。そして足音。それはこちらに向かってゆっくりとやってくる。スリッパをひきずるようなさら、さら、という音。何かがやってくる。何か人間でないもの、と彼女は言った。彼女の言うとおりだった。それは人間の足音ではなかった。何か別のものなのだ。現実には存在しない何か――でもここでは存在して

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

いる。

僕は逃げなかった。汗が背中をつたって流れていくのが感じられた。でもその足音が近づいてくるにつれて、奇妙なことに僕の中の恐怖は逆に少しずつ薄らいでいった。大丈夫、と僕は思った。これは邪悪なものではない。僕はそれをはっきりと感じることができた。何も怖がることはない。流れに身を任せればいいのだ。大丈夫。僕は温かい体液の渦の中にあった。僕はドアのノブをしっかりと握りしめ、目を閉じ、息を止めていた。大丈夫。怖くない。僕は暗闇の中で巨大な心音を聞く。それは僕自身の心音だ。僕自身の心音の中に僕が包まれ、含まれている。何も怖がることはない、と僕自身が言う。ただ繋がっているだけなのだ。

足音が止まった。それは僕のすぐそばにいた。そして僕を見ていた。僕は目をとじていた。繋がっている、と僕は思った。僕はあらゆる場所に繋がっていた。ナイルの岸辺や、キキや、いるかホテルや、古いロックンロールや、何もかもに。香料を塗りたくったヌビア人の女官たち。かちかちと時を刻む爆弾。古い光、古い音、古い声。

「待ってたよ」とそれは言った。「ずっと待ってた。中に入りなよ」

それが誰なのか目を開けなくてもわかった。

羊男だった。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

11

小さな古いテーブルをはさんで、僕らは話をした。小さな丸いテーブルで、その上には蝋燭がひとつ置いてあるだけだった。蝋燭は粗末な素焼きの皿の上に立ててあった。その部屋にある家具といえばせいぜいそれくらいのものだった。椅子もなかったので、僕らは床に積みあげてある本を椅子がわりにした。

それが羊男の部屋だった。細長く狭い部屋だ。壁や天井の雰囲気が昔のいるかホテルの部屋に少し感じが似ているが、でもよく見ると全然違うような気もする。つきあたりに窓がある。でも窓には内側から板が打ち付けられている。打ち付けられてからずいぶん年月がたっているのだろう、板の隙間に灰色のほこりが積もり、釘の頭が錆びている。それ以外には何もない。ただの四角い箱のような部屋だ。電灯もない。クローゼットもない。浴室もない。ベッドもない。彼はおそらく床で眠るのだろう。羊の衣装に身をくるんだまま。床には人ひとりがやっと歩いて通れるくらいの空間だけをあけて、あとは古い書籍や新聞や資料を集めたスクラップ・ブックが所狭しと積みあげてあった。どれも茶色に変色し、あるものは絶望的に虫に食われ、あるものはばらばらにほどけていた。僕がちらりと見たかぎりではどれも北海道における緬羊の歴史に関するものだった。たぶん昔のいるかホテルにあったものをここにあつめたのだろう。昔のいるかホテルには羊についての資料室のようなものがあって、主人の父親がその管理をしていたのだ。

彼らはみんなどこに行ってしまったんだろう?

羊男はちらちらと揺れる蝋燭の炎越しにしばらく僕の顔を見ていた。羊男の大きな影がしみのある壁の

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

上で揺れていた。拡大され誇張された影だった。

「ずいぶん久し振りだね」と彼はマスクの奥から僕を見ながら言った。「でもかわらないね。少しやせたかな？」

「そうだね。少しやせたかもしれない」と僕は言った。

「それで、外の世界の様子はどうだね？　何か変わったことは起こっていないかな？　ここにいると何が起こっているのかわからないもんでね」と彼は言った。

僕は脚を組んで首を振った。「相変わらずだよ。たいしたことは起こってないよ。世の中が少しずつ複雑になっていくだけだ。そして物事の進むスピードもだんだん速くなっている。でもあとはだいたい同じだよ。特に変わったことはない」

羊男は肯いた。「じゃあ、まだ次の戦争は始まっていないんだね？」

羊男の考える「この前の戦争」がいったいどの戦争を意味するのかはわからなかったけれど、僕は首を振っておいた。「まだだよ」と僕は言った。「まだ始まっていない」

「でも、そのうちにまた始まるよ」と彼は手袋をはめた両手をこすりあわせながら抑揚のない単調な声で言った。「気をつけるんだよ。殺されたくなければ、気をつけた方がいい。戦争というのは必ずあるんだ。いつでも必ずある。ないということはないんだ。ないように見えても必ずある。人間というのはね、心底では殺しあうのが好きなんだ。そしてみんなで殺し疲れるまで殺しあうんだ。殺し疲れるとしばらく休む。それからまた殺しあいを始める。決まってるんだ。誰も信用できないし、何も変わらない。だからどうしようもないんだ。そういうのが嫌だったら別の世界に逃げるしかないんだよ」

彼の着た羊の毛皮は昔より幾分薄よごれているように見えた。毛は固く全体的に脂じみていた。彼の顔を覆った黒いマスクも、僕が記憶していたものよりはずっと貧相に見えた。まにあわせで作った粗末な仮

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

装のように見えた。でもそれはこの穴ぐらのような湿っぽい部屋と、貧弱な仄暗い光のせいかもしれない。そして記憶というものがいつも不確かで都合の良いものだからかもしれない。しかしその衣装だけではなく、羊男自身も昔よりはいくらか疲労しているように見えた。この四年ほどの間に彼は年老いて体がひとまわり縮んでしまったように僕には感じられた。彼は時々深い息をついたが、その息は奇妙に耳障りな音を立てた。まるでパイプの中に何かが詰まっているようなごろごろとした居心地の悪い音だった。

「もっと前に来ると思ってたよ」と羊男は僕の顔を見て言った。「だからずっと待ってたんだ。この前誰かが来た。あんただと思った。でもあんたじゃなかった。きっと誰かが迷いこんできたんだね。不思議だね。他の人間がそんなに簡単にここに迷いこむことはできないはずなんだけど。でもそれはともかく、あんたはもっと前に来ると思ってた」

　僕は肩をすぼめた。「ここに来ることになるだろうとは思っていたんだ。来なくちゃいけないとも思ってた。でも来る決心がなかなかつかなかったんだ。ずいぶん沢山夢を見た。いるかホテルの夢だよ。しょっちゅうその夢を見てた。でもここに来ようと決心するまでに時間がかかったんだ」

「ここのことを忘れようとしていたのかい？」

「途中まではね」と僕は正直に言った。そしてゆらゆらと揺れる蠟燭の灯に照らされた自分の手を見た。何処から風が入ってくるんだろう、と僕は不思議に思った。「途中までは忘れられるものなら忘れたいと思ってた。こことはもう無縁に生きていきたいと思った」

「あんたの死んだ友達のせいでそう思ったのかい？」

「そう。僕の死んだ友達のせいでだよ」

「でもあんたは結局ここに来た」と羊男は言った。

「そうだね、僕は結局ここに帰ってきた」と僕は言った。「この場所のことを忘れることは出来なかったん

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

だ。忘れかけてる。何かが必ず僕にそのことを思い出させる。たぶんここは僕にとって特別な場所なんだろう。好きとか好きじゃないとかいうんじゃなくて、僕は自分がここに含まれているように感じるんだよ。それが具体的にどんなことを意味しているのかは僕にもわからない。でも僕には、きっとそう感じるんだよ。夢の中でそう感じるんだ。そこで誰かが僕のために涙を流している。そして僕を求めているんだ。だから僕はここに来るんだ。ねえ、ここはいったい何処なんだい？」

羊男はしばらく僕の顔を見ていた。それから首を振った。「細かいことはおいらにもわからないな。ここはすごく広いし、すごく暗い。どれくらい広いのかも、どれくらい暗いのかはおいらにもわからない。おいらが知っているのはこの部屋のことだけだ。他の場所のことはわからないよ。だから詳しいことは何も教えてあげられない。でもとにかく、あんたがここに来たのは、あんたがここに来るべき時がきたからだよ。おいらはそう思う。だからそのことについてあんたはあれこれ考えることはない。たぶん誰かがこの場所を通してあんたのために涙を流しているんだろう。たぶん誰かがあんたを求めているんだろう。あんたがそう感じるなら、きっとそのとおりなんだよ。でもそれはそれとして、今あんたがここに戻ってきたのはまあ当然のことなんだ。鳥が巣に帰るみたいにさ。自然なことなんだよ。逆に言うなら、あんたが帰ろうと思わなければ、ここは全く存在しないのと同じことなんだよ」羊男はまた両手をごしごしとこすりあわせた。体の動きにあわせて壁の上の影が大きく揺れた。まるで黒い幽霊が頭上から僕に襲いかかろうとしているみたいに。まるで昔の漫画映画みたいに。

鳥が巣に帰るように、と僕は思った。言われてみれば確かにそんな気がした。僕はただその流れを追ってここに来ただけにすぎないのだ。

「さあ、話してごらん」と羊男は静かな声で言った。「あんたのことを話してごらんよ。ここはあんたの世界なんだ。遠慮することは何もないんだ。話したいことをそのままゆっくり話せばいいんだよ。あんたに

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

はきっと話したいことがあるはずだよ」

僕は壁の上の影を眺めながら、仄暗い光の中で僕の置かれている状況について彼に話した。僕は本当に久し振りに心を開いて正直に自分自身について語った。長い時間をかけて、氷を溶かすようにゆっくりと、ひとつひとつ。僕が何とか自分の生活を維持していること。でも何処にも行けないこと。何処にも行けないままに年をとりつつあること。誰をも真剣に愛せなくなってしまっていること。そういった心の震えを失ってしまったこと。何を求めればいいのかがわからなくなってしまっていること。僕は自分が今関わっている物事に対して自分なりにベストをつくしていることを話した。でもそれは何の役にも立たないんだ、と僕は言った。自分の体がどんどん固まっていくような気がする。体の中心から少しずつ肉体組織がこわばって固まっていくような気がするんだ。僕はそれが怖い。僕が辛うじて繋がっていると感じるのはこの場所だけなんだ、と僕は言った。僕は自分がここに含まれているように感じてきた。ここがどういう場所なのか僕にはわからない。でも僕は本能的にそう感じるんだ。僕はここに含まれているんだ、と。

羊男は何も言わずに僕の話をじっと聞いていた。彼は殆ど眠っているように見えた。でも僕が話し終えると彼は目を開いた。

「大丈夫、心配することはないよ。あんたはいるかホテルに本当に含まれているんだよ」と羊男は静かに言った。「これまでもずっと含まれていたし、これからもずっと含まれている。ここからすべてが始まるし、ここですべてが終わるんだ。ここがあんたの場所なんだよ。それは変わらない。あんたはここに繋がっている。ここがみんなに繋がっている。ここがあんたの結び目なんだよ」

「みんな？」

「失われてしまったもの。まだ失われていないもの。そういうものみんなだよ。それがここを中心にして

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

みんな繋がっているんだ」

僕は羊男の言ったことについて少し考えてみた。でも彼の言わんとすることはよく理解できなかった。あまりにも漠然としていて、僕にはついていけなかった。もうすこし具体的に説明してもらえないかな、と僕は言った。でも羊男はそれには答えてくれなかった。彼はじっと黙っていた。それは具体的に説明することのできないものなのだ。彼は静かに首を振った。首を振ると、つくりものの耳がひらひらと揺れた。壁の上の影も大きく揺れた。壁そのものが崩れ落ちるんじゃないかという気がするくらい大きく、ぐらぐらと。

「それは今にわかることだよ。それは理解されるべきときが来たら理解されることなんだよ」と彼は言った。

「ねえ、それとは別にひとつどうしてもわからないことがあるんだ」と僕は言った。「いるかホテルの主人はどうしてこの新しいホテルに同じ名前をつけさせたんだろう？」

「あんたの為だよ」と羊男は言った。「あんたがいつでも帰ってこられるように同じ名前にしておいたんだよ。だって名前が変わってたら、あんただって何処に行けばいいかわからなくなっちまうだろう？ いるかホテルはちゃんとここにあるんだよ。建物が変わっても、何が変わっても。そんなこと関係ないんだ。ここにある。ここであんたを待っているんだ。だから名前もそのままにしておいた」

僕は笑った。「僕の為に？ 僕一人の為にこのでかいホテルの名前が『ドルフィン・ホテル』になっているわけ？」

「そうだよ。それがおかしいことかな？」

僕は首を振った。「いや、おかしいんじゃない。ただちょっと驚いたんだ。あまりにも途方もない話だからさ。なんだか現実の話じゃないみたいだ」

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

「現実の話だよ」と羊男は静かに言った。「ホテルはこうして現実に存在しているよ。『ドルフィン・ホテル』という看板もちゃんと現実に存在している。そうだろう？　これは現実だろう？」彼は指でとんとんと机を叩いた。蠟燭の炎がそれにあわせて揺れた。

「おいらもちゃんとここにいる。ここにいてあんたを待っている。みんなきちんとしたことなんだ。ちゃんと考えてあるんだ。あんたが帰ってこられるように。みんながちゃんとうまく繋がれるように」

僕は揺れる蠟燭の炎をしばらく見ていた。僕にはまだ上手く信じられなかった。「ねえ、何故僕のためにわざわざそんなことをするんだ？　わざわざ僕一人のために？」

「ここがあんたのための世界だからだよ」と羊男は当然のことのように言った。「何も難しく考えることなんてないのさ。あんたが求めていれば、それはあるんだよ。問題はね、ここがあんたのための場所だってことなんだよ。わかるかい？　それを理解しなくちゃ駄目だよ。それは本当に特別なことなんだよ。だから我々はあんたが上手く戻って来られるように努力した。それが壊れないように。それが見失われないように。それだけのことだよ」

「僕は本当にここに含まれているんだね？」

「もちろんだよ。あんたもここに含まれている。おいらもここに含まれている。みんなここに含まれている。そしてここはあんたの世界なんだ」と羊男は言った。そして指を一本上にあげた。巨大な指が壁の上に浮かびあがった。

「君はここで何をしているの？　そして君は何なんだろう？」

「おいらは羊男だよ」と彼は言ってしゃがれた声で笑った。「ご覧のとおりさ。羊の毛皮をかぶって、人には見えない世界で生きている。追われて森に入った。ずっと昔のことだけどね。思い出せないくらい昔のことだよ。その前おいらが何だったかもう思い出せない。とにかくそれ以来人の目につかなくなった。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

目につくまい目につくまいとしていると、自然に目につかなくなっちまうものなんだよ。そしていつからだったか、森を離れてここに住み着くようになったんだ。ここに置いてもらって、ここの番をしている。おいらだって、雨風をしのぐ場所は必要だものね。森の獣にだってねぐらくらいはある。そうだろう？」

「もちろん」と僕は相槌を打った。

「ここでのおいらの役目は繋げることだよ。ほら、配電盤みたいにね、いろんなものを繋げるんだよ。ここは結び目なんだ――だからおいらが繋げていくんだ。ばらばらになっちまわないようにね、ちゃんと、しっかりと繋げておくんだ。それがおいらの役目だよ。配電盤。繋げるんだ。あんたが求め、手に入れたものを、おいらが繋げるんだ。わかるかい？」

「なんとか」と僕は言った。

「さて」と羊男は言った。「そして今、あんたはおいらを必要としている。あんたは混乱しているからだ。あんたは自分が何を求めているのかがわからない。あんたは見失い、見失われている。何処かに行こうとしても、何処に行くべきかがわからない。あんたはいろんなものを失った。いろんな繋ぎ目を解いてしまった。でもそれに代わるものがみつけられずにいる。それであんたは混乱しているんだ。自分が何にも結びついてないように感じられる。そして実際に何にも結びついていないんだ。あんたが結びついている場所はここだけだ」

僕はそれについてしばらく考えてみた。「たぶんそのとおりだろう。君の言うとおりだ。僕は見失っているし、見失われている。混乱している。どこにも結びついていない。ここにしか結びついていない」僕は言葉を切って、蠟燭の光に照らされた自分の手を見た。

「でも僕は何かを感じるんだよ。何かが僕と繋がろうとしている。だから夢の中で誰かが僕を求め、僕のために涙を流しているんだ。僕はきっと何かと結びつこうとしているんだろう。そういう気がするんだ。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

ねえ、僕はもう一度やりなおしてみたい。そしてそのためには君の力が必要なんだ」

羊男は黙っていた。僕にもそれ以上言うべきことはなかった。沈黙はひどく重く、まるで深い深い穴の底にいるような気がした。沈黙の重力が僕の肩にずっしりとのしかかっていた。僕の思考さえもがその重力の支配下にあった。僕の思考はその湿っぽい重力の下で深海魚のような不気味な固い衣をまとっていた。時々蝋燭の炎がちりちりという音を立てて揺れた。羊男は目をその炎の方に向けていた。ずいぶん長い間その沈黙は続いた。それからゆっくりと羊男は顔を上げて僕を見た。

「あんたをその何かにうまく結びつけるためにできるだけのことはやってみよう」と羊男は言った。「うまく行くかどうかはわからない。おいらも少し年をとった。もう以前ほどの力はないかもしれない。どれだけあんたを助けてあげられるものか、おいらにもよくわからない。まあできる限りのことはやってみるよ。でもね、もしそれが上手く行ったとしても、あんたは幸せにはなれないかもしれないよ。それだけはおいらにも保証できないんだ。あちらの世界ではもう何処にもあんたの行くべき場所はないかもしれない。確かなことは言えない。でもあんたはさっきあんたが自分で言ったように、もう随分しっかりと固まってしまっているように見える。一度固まったものはもとには戻らないんだよ。あんたももうそれほど若くはない」

「どうすればいいんだろう、僕は？」

「あんたはこれまでにいろんな物を失ってきた。いろんな大事なものを失ってきた。それが誰のせいかというのは問題じゃない。問題はあんたがそれにくっつけたものにある。あんたは何かを失うたびに、そこに別の何かをくっつけて置いてきてしまったんだ。まるでしるしみたいにね。あんたはそんなことするべきじゃなかったんだ。あんたは自分のためにとっておくべき物までそこに置いてきてしまったんだな。そうすることによって、あんた自身も少しずつ磨り減ってきたんだ。どうしてかな？　どうしてそんなこと

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

をしたんだろう？」

「わからないね」

「でも、たぶんそれはどうしようもないことだったんだろうね。何か宿命のようなさ。なんというか、うまい言葉が思いつかないけど……」

「傾向」と僕は言ってみた。

「そう、それだよ。傾向。おいらは思うんだよ。もう一度人生をやりなおしても、あんたはきっとまた同じことをするだろうってね。それが傾向っていうもんだよ。そしてその傾向というものは、ある地点を越えると、もうもとに戻れなくなっちまうんだ。手遅れなんだ。そういうのはおいらにも何ともしてあげられない。おいらにできることはここの番をすることと、いろんなものを繋げることだけだよ。それ以上のことは何もできない」

「どうすればいいんだろう、僕は？」と僕は前と同じ質問をもう一度してみた。

「さっきも言ったように、おいらも出来るだけのことはするよ。あんたが上手く繋がれるように、やってみる」と羊男は言った。「でもそれだけじゃ足りない。あんたも出来るだけのことをやらなくちゃいけない。じっと座ってものを考えているだけじゃ駄目なんだ。そんなことしてたって何処にもいけないんだ。わかるかい？」

「わかるよ」と僕は言った。「それで僕はいったいどうすればいいんだろう？」

「踊るんだよ」羊男は言った。「音楽の鳴っている間はとにかく踊り続けるんだ。おいらの言ってることはわかるかい？ 踊るんだ。踊り続けるんだ。何故踊るかなんて考えちゃいけない。意味なんてことは考えちゃいけない。意味なんてもともとないんだ。そんなこと考えだしたら足が停まる。一度足が停まったら、もうおいらには何ともしてあげられなくなってしまう。あんたの繋がりはもう何もなくなってしま

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

をしたんだろう?」
「わからないね」
「でも、たぶんそれはどうしようもないことだったんだろうね。何か宿命のようなさ。なんというか、うまい言葉が思いつかないけど……」
「傾向」と僕は言ってみた。
「そう、それだよ。傾向。おいらは思うんだよ。もう一度人生をやりなおしても、あんたはきっとまた同じことをするだろうってね。それが傾向っていうもんだよ。そしてその傾向というものは、ある地点を越えると、もうもとに戻れなくなっちまうんだ。手遅れなんだ。そういうのはおいらにも何ともしてあげられない。おいらにできることはここの番をすることと、いろんなものを繋げることだけだよ。それ以上のことは何もできない」
「どうすればいいんだろう、僕は?」と僕は前と同じ質問をもう一度してみた。
「さっきも言ったように、おいらも出来るだけのことはするよ。あんたが上手く繋がれるように、やってみる」と羊男は言った。「でもそれだけじゃ足りない。あんたも出来るだけのことをやらなくちゃいけない。じっと座ってものを考えているだけじゃ駄目なんだ。そんなことしてたって何処にもいけないんだ。わかるかい?」
「わかるよ」と僕は言った。「それで僕はいったいどうすればいいんだろう?」
「踊るんだよ」羊男は言った。「音楽の鳴っている間はとにかく踊り続けるんだ。おいらの言ってることはわかるかい? 踊るんだ。踊り続けるんだ。何故踊るかなんて考えちゃいけない。意味なんてことは考えちゃいけない。意味なんてもともとないんだ。そんなこと考えだしたら足が停まる。一度足が停まったら、もうおいらには何ともしてあげられなくなってしまう。あんたの繋がりはもう何もなくなってしま

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

ら。永遠になくなってしまうんだよ。そうするとあんたはこっちの世界の中でしか生きていけなくなってしまう。どんどんこっちの世界に引き込まれてしまうんだ。だから足を停めちゃいけない。どれだけ馬鹿馬鹿しく思えても、そんなこと気にしちゃいけない。きちんとステップを踏んで踊り続けるんだよ。そして固まってしまったものを少しずつでもいいからほぐしていくんだよ。まだ手遅れになっていないものもあるはずだ。使えるものは全部使うんだよ。ベストを尽くすんだよ。怖がることは何もない。あんたはたしかに疲れている。疲れて、脅えている。誰にでもそういう時がある。何もかもが間違っているように感じられるんだ。だから足が停まってしまう」

僕は目を上げて、また壁の上の影をしばらく見つめた。

「でも踊るしかないんだよ」と羊男は続けた。「それもとびっきり上手く踊るんだ。みんなが感心するくらいに。そうすればおいらもあんたのことを、手伝ってあげられるかもしれない。だから踊るんだよ。音楽の続く限り」

オドルンダヨ。オンガクノツヅクカギリ。

思考がまたこだまする。

「ねえ、君の言うこっちの世界というのはいったい何なんだい？　君は僕が固まると、あっちの世界からこっちの世界に引きずりこまれると言う。でもここは僕のための世界なんだろう？　この世界は僕のために存在しているんだろう？　もしそうだとしたら、僕が僕の世界に入っていくことにどんな問題があるんだろう？　ここは現実に存在すると君は言ったじゃないか」

羊男は首を振った。影がまた大きく揺れた。「ここにあるのは、あっちとはまた違う現実なんだ。あんたは今はまだここでは生きていけない。ここは暗すぎるし、広すぎる。あんたにおいらの言葉でそれを説明することはむずかしい。それにさっきも言ったけれど、おいらにだって詳しいことはわかっていないん

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

だ。ここはもちろん現実だよ。こうしてあんたが現実においらと会って話をしている。それは間違いない。でもね、現実はたったひとつだけしかないってわけじゃないんだ。現実はいくつもある。現実の可能性はいくつもある。おいらはこの現実を選んだ。何故なら、ここには戦争がないからだよ。そしておいらには捨てるべきものは何もなかったからだよ。でもあんたは違う。あんたには生命の温もりがまだはっきりと残っているんだ。だからこの場所は今のあんたには寒すぎる。ここには食べ物だってない。あんたはここに来るべきじゃないんだ」

羊男にそう言われて、僕は部屋の温度が低下していることに気づいた。僕はポケットに両手をつっこんで、軽く身震いした。

「寒いかい？」と羊男が訊いた。

僕は肯いた。

「あまり時間がない」と羊男は言った。「時間がたてばもっと寒くなってくる。もうそろそろ行った方がいいな。ここはあんたには寒すぎるから」

「あとひとつだけ聞いておきたいことがあるんだ。さっきふと思ったんだ。ふと気がついた。僕はこれまでの人生の中でずっと君のことを求めてきたような気がするんだ。そしてこれまでいろんな場所で君の影を見てきたような気がする。君がいろんな形をとってそこにいたように思えるんだ。その姿はすごくぼんやりとしていた。あるいは君のほんの一部に過ぎなかった。でも今になって思い返してみると、それは全部君だったように思えるんだ。僕はそう感じるんだ」

羊男は両手の指で曖昧な形を作った。「そうだよ、あんたの言うとおりだよ。あんたの思っているとおりだよ。おいらはいつもそこにいた。おいらは影として、断片として、そこにいた」

「でも、わからないな」と僕は言った。「今僕はこうしてはっきりと君の顔や形を見ることができるように

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

なった。昔見えなかったものが、こうして今見えるようになった。どうしてだろう？」
「それはあんたが既に多くの物を失ったからだよ」と彼は静かに言った。「そして行くべき場所が少なくなってきたからだよ。だから今あんたにはおいらの姿が見えるんだよ」
　僕には彼の言葉の意味がよくわからなかった。
「ここは死の世界なのかい？」と僕は思い切って訊いてみた。
「違う」と羊男は言った。そして肩を大きく揺らせて息をした。「そうじゃない。ここは死の世界なんかじゃない。あんたも、おいらも、ちゃんと生きている。我々は二人とも、おなじくらいはっきりと生きている。二人でこうして息をして、話をしている。これは現実なんだ」
「僕には理解できない」
「踊るんだよ」と彼は言った。「それ以外に方法はないんだ。いろんなことをもっと上手く説明してあげられたらとは思う。でもそれはできないんだ。おいらに教えてあげられるのはそれだけだよ。踊るんだ。何も考えずに、できるだけ上手く踊るんだよ。あんたはそうしなくちゃいけないんだ」
　温度は急激に低下していた。この寒さには覚えがある、と僕は身震いしながらふと思った。骨にしみこむような湿気を含んだその冷気を、僕は前にも何処かで一度経験していた。遠い昔、遠い場所で。でもそれがどこだったか思い出せなかった。もう少しで思い出せそうなのに、どうしても駄目だった。頭の何処かが麻痺しているのだ。麻痺して固くこわばっている。
　カタクコワバッテイル。
「もう行った方がいいね」と羊男は言った。「ここにいると、体が凍りついてしまう。またそのうちに会えるよ。あんたが求めさえすれば。おいらはいつもここにいる。おいらはここであんたを待っている」
　彼は足をひきずりながら廊下の曲がり口まで僕を送ってくれた。彼が歩くとあのさら・さら・さら

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

……。という音がした。それから僕は彼にさよならを言った。別に握手もしなかったし、特別な別れの挨拶もしなかった。ただ、さよならと言っただけだった。そして暗闇の中で僕らは別れた。彼は狭くて細長い彼の部屋に戻り、僕はエレベーターの方に向かった。僕がボタンを押すと、エレベーターはゆっくりと上にあがってきた。そして音もなくドアが開き、明るい柔らかな光が廊下にこぼれて僕の体を包んだ。僕はエレベーターの中に入り、しばらく壁にもたれてじっとしていた。ドアが自動的にしまったが、それでも僕はじっと壁にもたれていた。

さて、と僕は思った。でも「さて」のあとが続かなかった。僕は思考の巨大な空白の真ん中にいた。どちらに行っても、何処まで行っても空白だった。何にもいきあたらなかった。羊男が言うように、僕は疲れて脅えていた。そして一人ぼっちだった。森の中に迷いこんだ子供みたいに。

踊るんだよ、と羊男が言った。

オドルンダヨ、と思考がこだました。

踊るんだよ、と僕は口に出して復唱してみた。

そして十五階のボタンを押した。

十五階でエレベーターを下りると、天井に埋めこまれたスピーカーから流れるヘンリー・マンシーニの「ムーン・リヴァー」が僕を出迎えてくれた。現実の世界——僕がおそらく幸せになることもできず、おそらく何処にも行くことのできない現実の世界。

僕は反射的に腕時計に目をやった。帰還時刻は午前三時二十分だった。

さて、と僕は思った。さてさてさてさてさてさてさて……、と思考がこだました。僕は溜め息をついた。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

12

部屋に戻ると僕はまずバスタブに熱い湯をはって裸になり、そこにゆっくりと体を沈めた。でも体は簡単には温まらなかった。体の芯が凍えきっていて、湯の中に体をつけるとかえって寒気がするほどだった。僕はその寒気が消えるまで湯につかっているつもりだったのだが、その前に湯気にあてられて意識が朦朧としてきたので、あきらめて風呂を出た。そして窓ガラスに頭をつけて少し冷やしてからブランディーをグラスになみなみと注いでぐっと飲み干し、そのままベッドに入った。何も考えずに、しみひとつない頭でぐっすりと眠ろうと僕は思った。でも駄目だった。眠ることなんて絶対にできなかった。僕は硬直した意識を抱えたままベッドに横になっていた。そしてやがて朝がやってきた。どんよりと曇った灰色の朝だった。雪こそ降ってはいないが、空は継ぎ目ひとつなく灰色の雪雲に覆われ、街は隅から隅までたっぷりとその灰色に染められていた。目に映るものすべてが灰色だった。うらぶれた魂の住むうらぶれた街。

　僕は何かを考えていて、そのせいで眠れなかったわけではなかった。僕は何も考えてなんかいなかった。何かを考えるには僕の頭は疲れすぎていたが、かといって眠ることもできない。僕の体と精神の殆どの部分は眠りを希求していた。それなのに頭の一部が固くこわばったまま頑なに眠ることを拒否して、そのせいで神経がいやにたかぶっていた。それはちょうど猛烈なスピードで走る特急列車の窓から駅名表示を読みとろうとするときの苛立たしさに似ていた。駅が近付いてくる——さあ、こんどは目をこらしてち

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

ゃんと読み取らなくてはと思う——でも駄目だ。スピードが速すぎるのだ。字のかたちは漠然と見える。しかしそれがどういう字なのかがわからない。あっという間にそれは後ろに過ぎ去ってしまう。そういうのが際限なくつづいた。次から次へと駅がやってきた。名前も知れぬ辺境の小さな駅。列車は何度も汽笛を鳴らした。その甲高い響きは蜂のように僕の意識を刺した。

九時までそれが続いた。時計が九時をさすのを確かめてから、僕はあきらめてベッドを出た。駄目だ、眠れっこない、と僕は思った。浴室に行って髭を剃ったが、きちんと剃り終えるためには何度も自分に向って「俺は今髭を剃っているんだぞ」と言いきかせなくてはならなかった。それから僕は服を着てブラシで髪をとかし、ホテルのレストランに朝食を食べに行った。窓際の席に座ってコンチネンタル・ブレックファストを注文し、コーヒーを二杯飲み、トーストを一枚齧った。一枚のトーストを食べ終えるのにずいぶん長い時間がかかった。灰色の雲がトーストをさえ灰色に染めていた。食べると綿ぼこりみたいな味がした。地球の終わりを予言するような天気だった。僕はコーヒーを飲みながら、朝食のメニューを五十回くらい読み直した。でも頭のこわばりはとれなかった。列車はまだ走り続けていた。汽笛も聞こえた。歯磨きのペーストが固まってこびりついているような、そんな感じのこわばりだった。僕のまわりで人々は熱心に朝食を食べていた。彼らはコーヒーに砂糖を入れ、トーストにバターを塗り、ナイフとフォークを使ってベーコン・エッグを切っていた。かちゃ・かちゃ・かちゃという皿や食器のふれあう音が間断なく鳴り響いていた。まるで操車場みたいだなと僕は思った。

僕はふと羊男のことを思った。今この瞬間も彼は存在しているのだ。このホテルのどこかにある小さな時空の歪みの中に彼はいるのだ。うん、彼はいる。そして彼は僕に何かを教えようとしているのだ。でも駄目だ。僕には読み取れない。スピードが速すぎる。頭の中がこわばっていて、字が読み取れないのだ。止まっているものしか読めない。(A)コンチネンタル・ブレックファスト——ジュース(オレンジ、グレ

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

ープフルーツ、またはトマト)・トースト、または……、誰かが僕に話しかけている。僕に答えを求めている。誰だろう? 僕は目を上げる。ウェイターだった。彼は白い上着を着て、コーヒー・ポットを両手で持っている。まるで何かの賞品みたいに。「コーヒーのおかわりはいかがでしょうか?」と彼は丁寧に質問する。僕は首を振る。彼が行ってしまうと、僕は立ち上がってレストランを出た。かちゃ・かちゃ・かちゃ、という音が僕の背後でいつまでも続いていた。

部屋に帰ってまた風呂に入った。今度はもう寒気はしなかった。僕は浴槽の中でゆっくりと体を伸ばし、時間をかけて糸のもつれをほぐすように体の関節をひとつひとつ緩めていった。指先もきちんと動くようにした。そう、これは僕の体だと僕は思った。僕は今ここにいる。リアルな部屋の中の、リアルな浴槽の中にいる。特急列車に乗ってなんかいない。汽笛も聞こえない。もう駅名を読み取る必要もないのだ。何を考える必要もない。

風呂を出てベッドにもぐりこんで時計を見ると、もう十時半だった。やれやれと僕は思った。いっそのこともう眠るのはあきらめて散歩にでも出ようかとさえ思った。でもそんなことをぼんやりと考えているうちに突然眠りがやってきた。舞台の暗転みたいな一瞬の急激な眠りだった。眠りに落ちた瞬間のことを僕はちゃんと覚えている。巨大な灰色猿がハンマーを持ってどこからともなく部屋に入ってきて、僕の頭の後ろを思いきり叩いたのだ。そして僕は気絶するみたいに深い眠りに落ちた。

それはハードでタイトな眠りだった。真っ暗で何も見えなかった。BGMもなかった。「ムーン・リヴァー」も「恋は水色」もなかった。シンプルで飾りのない眠りだった。「16の次の数は?」と誰かが訊いた。「41」と僕は答えた。「眠ってる」と灰色猿が言った。そう、僕は眠っている。固い固い鉄球の中で僕は体をくるりと丸めてリスのように深く眠っている。ビルを壊す時に使うような鉄球。中がくりぬいてある。その中で僕は眠っている。ハードでタイトでシンプルで……

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

何かが僕を呼んでいた。
汽笛だろうか？
いや、そうじゃない、違う、と鴎たちが言う。
誰かが鉄球をバーナーで焼き切ろうとしているのだ。そういう音がする。
いや、違う、そうでもない、と鴎たちが声をあわせて言う。ギリシャ劇のコーラスみたいに。
電話だ、と僕は思う。
鴎たちはもういなくなっている。誰も答えてくれない。どうして鴎たちはいなくなっちゃったんだ？
僕は手を伸ばして枕元の電話を取った。「はい」と僕は言った。でもつーんという音が聞こえるだけだった。ぴいいいいいいいいいいいいい、という音は別の空間で鳴っていた。ドア・ベルだ。誰かがドア・ベルを鳴らしているのだ。ぴいいいいいいいいいいいい。
「ドア・ベル」と僕は声に出して言ってみた。
でも鴎たちはもういなかったし、誰も「正解」とは褒めてはくれなかった。
ぴいいいいいいいいいいい。
僕はバスローブをひっかけて入り口まで行って、何も聞かずにドアを開けた。フロントの女の子がさっと中に入ってきて、ドアを閉めた。
頭の後ろの灰色猿に叩かれたところが疼いた。こんなに強く叩かなくたってよかったのにと僕は思った。ひどい。頭がへこんでしまったような気がするくらいだ。
彼女は僕のバスローブを見て、それから僕の顔を見た。そして眉をしかめた。
「どうして午後の三時に寝てるの？」と彼女は訊いた。
「午後の三時」と僕は繰り返した。僕にもどうしてかはうまく思い出せなかった。「どうしてかな？」と僕

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

は自分に向かって問いかけてみた。
「何時に寝たの、いったい？」
僕は考えてみた。考えようと努力してみた。でも何も考えられなかった。
「いいわよ、考えなくて」と彼女はあきらめたように言った。そしてソファに腰を下ろし、眼鏡の縁にちょっと手をやって僕の顔をまじまじと見た。「あなた、でもひどい顔してるわよ」
「うん。そうだろうと思う」と僕は言った。
「顔色も悪いし、むくんでるし。熱があるんじゃないの？　大丈夫？」
「大丈夫。ぐっすり眠ればもとどおりになる。心配ない。もともとが健康なんだ」と僕は言った。「君は休憩時間？」
「そう」と彼女は言った。「あなたの顔を見に来たの。なんとなく興味あったから。でも邪魔だったら出ていくけど」
「邪魔じゃない」と僕は言って、ベッドに腰掛けた。「死ぬほど眠いけど、でも邪魔じゃない」
「変なこともしない？」
「変なこともしない」
「みんなそう言うけど、ちゃんとするの」
「みんなはするかもしれないけど、僕はしない」と僕は言った。
彼女は少し考えてから、思考の結果を確かめるかのように指で軽くこめかみを押さえた。「そうかもしれないわね。あなたは他の人とはちょっと違ってるような気がする」と彼女は言った。
「それに今は何かするには眠すぎるし」と僕は付け加えた。
彼女は立ち上がってライト・ブルーの上着を脱ぎ、それを昨日と同じように椅子の背にかけた。でも彼

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

女は今回は僕の隣には来なかった。窓際まで歩いて行って、そこに立ってじっと灰色の空を眺めていた。たぶん僕がバスローブ一枚という格好で、それにひどい顔をしているからだろうと僕は思った。でも仕方ない。僕にだって僕の事情というものがあるのだ。他人に良い顔を見せることを目的として生きている訳ではないのだ。

「ねえ」と僕は言った。「この前も言ったと思うけれど、僕と君のあいだには、ささやかではあるにせよ何かしら相通じるところがあるような気がする」

「そう？」と彼女は無感動な声で言った。そして三十秒くらいそのまま黙っていた。「たとえば？」と三十秒あとで彼女は言った。

「たとえば——」と僕は言った。でも頭の回転は完全にストップしていた。何も思いつかなかった。何の言葉も浮かんではこなかった。僕はただふとそんな気がしただけのことなのだ。この女の子と僕のあいだにはささやかなものかもしれないにせよ、何かしら相通じるものがある、というふうに思ったのだ。たとえばも、それでも、何もなし。ただそういう気がしたというだけ。

「わからない」と僕は言った。「もう少しいろんなことを整理する必要がある。段階的思考。整理して、それから確認する」

「すごい」と彼女は窓ガラスに向かって言った。彼女の口調には皮肉の響きは感じ取れなかったけれど、かといって別に感心しているという風でもなかった。淡々として、中立的だった。

僕はベッドの中に入り、背もたれにもたれて彼女の姿を眺めた。しわひとつない白いブラウス。紺色のタイトなスカート。ストッキングに包まれたすらりとした脚。彼女もやはり灰色に染まっていた。でもそのせいで彼女はまるで古い写真の中の像のように見えた。そういうのを眺めているのは素敵なものだった。自分が何かに繋がっているという気がする。僕は勃起さえする。それも悪くない。灰色の空、死ぬは

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

と眠い午後三時の勃起。

僕は随分長く彼女の姿を眺めていた。彼女は振り向いて僕を見たが、僕はそれでもじっと彼女を眺めていた。

「どうしてそんなにじっと見るの？」と彼女が僕に訊いた。

「スイミング・スクールに嫉妬してるんだ」と僕は言った。

彼女は少し首をかしげて、それから微笑んだ。「変な人」と彼女は言った。

「変じゃない」と僕は言った。「ただ少し混乱してるだけだよ。考え方に整理の必要がある」

彼女は僕のそばに寄って、僕の額に手を触れた。

「まあ、熱はなさそうね」と彼女は言った。「ぐっすり眠りなさい。良い夢を見て」

彼女にずっとここにいてほしいと僕は感じた。眠っているあいだずっと側にいてほしいと。でもそれは無理な話だった。だから僕は何も言わなかった。黙って彼女がライト・ブルーの上着を着て部屋を出ていくのを眺めていた。彼女が出ていってしまうと、入れ違いにまた灰色猿がハンマーを持って部屋に入ってきた。「大丈夫だ。そんなことしなくてもちゃんと寝られる」と僕は言おうとした。でもうまく喋れなかった。そしてまた一撃がやってきた。

「25の次は？」と誰かが質問した。「71」と僕は言った。「眠っている」と灰色猿が言った。あたりまえだろう、と僕は思った。あんなに強く叩いたんだぞ、眠るに決まってるじゃないか、と。昏睡、というのが正確な言葉だ。そして暗闇がやってきた。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

13

結び目、と僕は思った。

それは夜の九時で、僕は一人で夕食を食べていた。僕は午後八時に深い眠りから目覚めたのだ。眠った時と同じように、僕は突然目覚めた。眠りと覚醒の中間的地域というものが存在しなかった。目を開けた時には僕は既に覚醒の中枢にいた。頭の動きは完全に正常に復しているように感じられた。灰色猿に叩かれた後頭部の痛みも消えていた。体もだるくないし、寒気も感じなかった。何から何まではっきりと思い出すことも出来た。食欲もあった——というよりむしろ猛烈に腹が減っていた。それで僕は最初の夜に入ったホテルの近くの飲み屋に行って酒を飲み、つまみを幾つか食べた。焼き魚とか、野菜の煮物とか、蟹とか、じゃがいもとか、そういうものをいろいろと。店は前と同じくらい混んでいて、同じくらいうるさかった。何やかやの煙やら匂いやらが、店内に満ち満ちていた。誰も彼もが大声で怒鳴りあっていた。

整理する必要がある、と僕は思った。

結び目、と僕はそんなカオスの中心で自らに向かって問いかけた。そして静かに口に出してみた。僕が求め、羊男が繋げる。

僕にはそれがどういうことなのか充分に理解できなかった。あまりにも比喩的な表現だ。でもたぶんそれは比喩的にしか表現できない種類のことなのだろうと僕は思った。何故なら羊男が比喩的表現を使って僕を翻弄して楽しむなどということはまずありえないからだ。おそらく彼はそういう言葉でしかそれを表

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

現できないのだ。そういう形でしか僕に示すことができないのだ。

僕はあの羊男の世界を通じて——彼の配電盤を通じて——いろんなものと繋がってるのだ、と彼は言った。そしてその繋がりに混乱が生じているのだと。どうして混乱が生じたか？　僕がうまく何かを求められなくなってしまったからだ。だから結び目が上手く機能しなくなってしまったのだ。混乱しているのだ。

僕は酒を飲み、目の前の灰皿をしばらく眺めた。

それでキキはどうなってしまったんだ、と僕は思った。僕は夢の中で彼女の存在を感じたのだ。彼女が僕をここに呼んでいたのだ。彼女は僕に何かを求めていた。だからこそ僕はいるかホテルにやってきたのだ。しかし彼女の声はもう僕の耳には届かなくなっていた。メッセージは分断されていた。無線機のプラグが抜かれたみたいに。

どうしていろんなことがこうも漠然としているのだろう？

繋がりが混乱しているからだ、たぶん。僕は自分が何を求めているのか明確にしなくてはならないのだ。そして羊男の助けを借りて、物事をひとつひとつ繋げていくのだ。状況がどれほど漠然として見えても、ひとつひとつ我慢して辛抱強くほぐしていくしかないのだ。ほぐして、そして繋げる。僕は状況を回復していかなければならない。

いったい何処から始めればいいのだろう？　何処にもとっかかりがない。僕は高い壁にはりついている。まわりの壁は鏡のようにつるつるしている。僕は何処にも手を伸ばすことができない。つかむべきものがない。僕は途方に暮れている。

僕は酒を何本か飲み、勘定を払って外に出た。空から大きな雪片がゆっくりと舞い下りていた。それはまだ本格的な降りではなかったけれど、雪のせいで街の音はいつもとちがって聞こえた。僕は酔いを覚ま

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

すためにそのブロックをぐるりと一周した。何処から始めればいいのだろう？　僕は自分の足を眺めながら歩いた。駄目だ、僕は自分が何を求めているのかがわからない。どちらを向けばいいのかさえわからない。錆びついているんだ。錆びついて固まっている。こうして一人でいると、だんだん自分が失われていくような気がする。やれやれ、何処から始めればいいんだろう？　とにかく何処かから始めなくてはならない。あのフロントの女の子はどうだろう、と僕は思った。僕は彼女に好意を感じている。僕と彼女の間には何かしら心が相通じるところがあるように感じる。そしてもし彼女と寝たいと思えば寝られるだろうという気がする。でもそれでどうなるだろう、そこから何処に行けるだろう、と僕は思った。何処にも行けないだろう。たぶん僕がもっと失われるだけのことだろう。何故なら僕には自分が何を求めているかが把握できていないからだ。そして自分が何を求めているのか把握できていない限り、別れた妻が言うように、僕はいろんな相手を傷つけていくことになるだろう。

　僕はそのブロックを一周し、それからもう一周することにした。雪は静かに降り続いていた。それは僕のコートに落ちて、しばらく戸惑い、そして消えていった。僕は歩きながら頭の中を整理しつづけた。人々は白い息を夜の闇の中に浮かべながら僕の脇を通り過ぎていった。寒さのせいで顔の皮膚が痛んだ。でも僕はそのブロックを時計回りに歩き続け、考え続けた。妻の言葉はまるで呪いのように僕の頭にこびりついていた。でもそれは本当のことだった。彼女の言うとおりなのだ。このままでは僕は僕に関わる誰かを永遠に傷つけ、損ない続けるのだ、おそらく。

「月に帰りなさい、君」と言って僕のガールフレンドは去って行った。いや去っていったんじゃない。戻っていったのだ。彼女は現実というあの偉大な世界に戻っていったのだ。

　キキ、と僕は思った。彼女が最初のとっかかりになるはずだったのだ。でも彼女のメッセージは途中で煙のように消えてしまった。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

何処から始めればいいんだろう？

僕は目を閉じて回答を求めた。でも頭の中には誰もいなかった。羊男もいないし、踊たちもいないし、灰色猿さえいなかった。がらんとしていた。がらんとした部屋に僕が一人で座っているだけだった。誰も答えてはくれなかった。その部屋の中で僕は年老いて、ひからびて、疲れていた。僕はもう踊ってはいなかった。それは哀しい光景だった。

駅名がどうしても読みとれない。

でーたフソクノタメ、カイトウフカノウ。トリケシきいヲオシテクダサイ。

でも回答は翌日の午後にやってきた。いつもの如く何のまえおきもなく、突然。灰色猿の一撃のように。

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

14

妙なことに——別にそれほど妙じゃないのかもしれないけれど——その夜僕は十二時にベッドに入ってそのままぐっすり眠った。そして目が覚めたら朝の八時だった。出鱈目な睡眠パターンだったが、とにかくきちんと朝の八時に目覚めたのだ。一周してもとに戻ったという風に。気分は良かった。腹も減っていた。だからまたダンキン・ドーナッツに行ってコーヒーを二杯飲みドーナッツを二個食べ、それから何処に行くというあてもなく街をぶらぶらと歩いてみた。道は固く凍りついて、柔らかな雪が無数の羽毛のように静かに降り続いていた。空は相変わらず端から端までどんよりとした雲に覆われていた。散歩日和とはとても言えない。でも街を歩いていると精神が解き放たれるような気がした。ここのところずっとつづいていた重苦しい圧迫感が消えて、厳しい冷気さえもが肌に心地良かった。いったいどうしたというんだろう？　と僕は歩きながら不思議に思った。物事はまだ何ひとつとして解決していないというのに、どうしてこんなに気分がいいのだろう？

一時間ほど歩いてからホテルに戻るとフロントにあの眼鏡をかけた女の子がいた。カウンターには彼女の他にもう一人フロント係がいたが、そちらの方の女の子が客の応対をしていた。彼女は電話の応対をしていた。彼女は受話器を耳にあて、営業用の微笑みを浮かべ、指にはさんだボールペンを無意識にくるくると回していた。そんな姿を見ていると、僕は何でもいいから彼女と話してみたかった。それもなるべく無意味なことがいい。意味をなさないような馬鹿気た話題が求められている。僕は彼女のところに行っ

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

て、電話が終わるのをじっと待った。彼女は僕の顔を疑わしそうな目でちらっと見たが、営業マニュアルどおりの感じの良い微笑みは絶やさなかった。
「何か御用でございましょうか?」彼女は電話を終えると僕に向かって丁重に尋ねた。
僕は咳払いした。「実は昨日の夜、この近所のスイミング・スクールで女の子がふたり鮹に食べられて死んだっていう話を聞いたんだけれど、本当でしょうか?」と僕はなるべく真剣な顔をして口からでまかせを言った。
「さあ、いかがでしょう?」と精巧な造花のような営業用の微笑みを浮かべたまま彼女は答えた。でも目を見ると彼女が怒ってるのがわかった。頬が少し赤らみ、鼻腔が固くなったように見えた。「そういう話はわたくしどもはちょっと耳にしておりませんが、失礼ですが何かお客様のお間違えではございませんでしょうか?」
「すごく大きい鮹で、見た人の話だと大きさがボルボのステーション・ワゴンくらいあって、それが突然天窓のガラスを割って中に飛び込んできて、一口で女の子二人をかぷっと飲み込んで食べちゃって、デザートに椰子の木を半分食べて逃げたってことだけど、それはもう捕まったのかな? もしまだ捕まっていなかったら外に出るのは……」
「申し訳ございませんが」と彼女は表情を変えずに僕の話を遮った。「よろしければ、お客様の方から直接警察に電話でお問い合わせになりましたらいかがでしょうか? その方がむしろ確実ではないかと存じますが。あるいは玄関を出て右の方にまっすぐにいかれますと交番がございますので、そちらでお尋ねになってもよろしいかと思います」
「そうだね。そうしてみよう」と僕は言った。「ありがとう。理力があなたとともにありますように」
「おそれいります」と彼女は眼鏡の縁に手をやって、クールに言った。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

部屋に帰ってしばらくすると、彼女から電話がかかってきた。
「何よ、あれ？」と彼女は怒りを押し殺したような静かな声で言った。「仕事中は変なことしないでってこの前言ったでしょう。仕事中にああいうことされるの嫌いなの」
「悪かった」と僕は素直に謝った。「何でもいいから君と話したかったんだ。君の声を聞きたかった。つまらない冗談だったかもしれない。でも冗談の内容が問題じゃない。ただ君と話したかっただけだよ。特に迷惑はかけてないと思うけど」
「緊張するのよ。前にも言ったでしょう？　仕事してる時って、私すごく緊張してやってるの。だから邪魔してほしくないの。約束したじゃない？　じろじろ見たりしないって」
「じろじろ見てない。話しかけただけだ」
「じゃあこれからもうあんな風に話しかけないで。お願い」
「約束する。話しかけない。見ないし、話しかけない。花崗岩みたいにじっとおとなしくしてる。ねえ、ところで君は今夜は暇なのかな？　それとも今日は登山教室のある日だっけね？」
「登山教室？」と彼女は言ってから溜め息をついた。「冗談ね、それ」
「そう、冗談だよ」
「時々私ね、そういう冗談についていけなくなるの。登山教室だって。ははは」
彼女は壁に書かれた字を読みあげるみたいに乾いた平板な声ではははと言った。そして電話を切った。
僕はそのまま三十分待ってみたが、もう電話はかかってこなかった。怒っているのだ。僕のユーモアの感覚は時々まったく相手に理解されないことがある。僕の真剣さが時々まったく相手に理解されないのと同じように。他にやることも思いつかないのでまたしばらく外を歩いてみることにした。うまくいけば何

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

かにぶつかるかもしれない。何か新しいものをみつけることができるかもしれない。何もやらないよりは動いた方がいい。何か試してみた方がいい。理力が僕とともにありますように。

一時間歩いたが何もみつからなかった。体が冷えただけだった。雪はまだ降りつづいていた。十二時半にマクドナルドに入ってチーズバーガーとフライド・ポテトを食べ、コカコーラを飲んだ。そんなもの全然食べたくもなかった。でもどうしてかはわからないけれど時々つい食べてしまうのだ。たぶん体が定期的にジャンク・フードを求めるような構造になっているのだろう。

マクドナルドを出てまた三十分歩いた。何もなかった。ただ雪が激しさを増しただけだった。僕はコートのジッパーをいちばん上までひっぱりあげて、マフラーを鼻の上でぐるぐると巻いた。それでも寒かった。ひどく小便がしたくなった。こんな寒い日にコカコーラなんて飲むからだ。どこか便所がありそうなところはないかなと僕はあたりをみまわしてみた。通りの向かいに映画館が見えた。ひどくうらぶれた映画館だったが、まあ便所くらいはあるだろう。それに小便をしたあとで、映画を見ながら体を温めるというのも悪くない。どうせ暇をもてあましているのだ。何をやっているんだろうと思って看板を見た。日本映画の二本立てで、そのうちの一本が「片想い」だった。僕の同級生の出ている映画だ。やれやれ、と僕は思った。

長い小便をすませると僕は売店で熱いコーヒーを買い、それを持って中に入って映画を見た。思ったとおりがらがらだったが、場内は暖かかった。僕は席に座ってコーヒーを飲みながら映画を見た。「片想い」は始まってからもう三十分たっていたが、最初の三十分を見なくても筋は充分すぎるくらい充分に理解出来た。想像したとおりの筋だったからだ。僕の同級生は脚が長くてハンサムな生物の先生だった。主人公の女の子は彼に恋していた。例によって失神するくらい憧れているのだ。そして彼女に恋している剣道部の男の子がいた。まるでもうデジャヴュと言ってもいいくらいの代物だった。こんな映画なら僕にだって

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

作れる。

ただし僕の同級生（五反田亮一というのが彼の本名だったが、もちろん立派な芸名をつけてもらっていた。五反田亮一というのは残念ながら女の子が共感を抱ける名前ではないのだ）はいつもよりはほんの少しは複雑な役をもらっていた。彼はハンサムで感じがいいだけではなく、過去の傷を背負っていた。学生運動にかかわってどうこうとか、恋人を妊娠させて捨ててどうこうというようなかなり月並みな傷だったが、まあ何もないよりはましだった。ときどきそういう回想が猿が粘土を壁にぶっつけるみたいに不器用に挿入された。安田講堂の攻防戦の実写フィルムが入ったりしたりもした。僕はよほど「異議なし！」と小さな声で叫んでみようかとも思ったが馬鹿馬鹿しくなってやめた。

とにかく、何はともあれ五反田君はそういう傷を負った役を演じていた。それもかなり一所懸命演じていた。でも映画自体がひどかったし、監督には才能のかけらもなかった。台詞の半分は恥ずかしくなるくらい稚拙なしろもので、唖然とするような無意味なシーンが延々と続いたりした。女の子の顔がしょっちゅう意味もなくアップになった。だから彼が幾らがんばって演技しても回りから浮きあがって見えるだけだった。僕は彼のことがだんだん可哀そうになってきた。見ていて痛々しいのだ。でも考えてみたら彼はある意味では昔からずっとこういう種類の痛々しい人生を送ってきたのかもしれないなという気がした。

一箇所ベッド・シーンがあった。五反田君が日曜日の朝に自分のアパートの部屋で女と寝ているところに主人公の女の子が手作りのクッキーか何か持ってやってくるのだ。やれやれ僕が想像したのとまったく同じじゃないか。五反田君は僕が予想したとおりベッドの中でも優しく親切だった。とても感じのいいセックス。すごくいい匂いがしそうなわきの下。セクシーに乱れる髪。彼は女の裸の背中を撫でている。カメラがくるりと回りこむように移動してその女の顔を映し出す。

デジャ・ヴュ。僕は息を呑んだ。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

それはキキだった。座席の上で僕の体は凍りついた。後ろの方でからからからという瓶の転がる音が聞こえた。キキだ。あの廊下の暗闇の中で見たイメージのとおりだ。本当にキキが五反田君と寝ているのだ。

繋がっている、と僕は思った。

*

キキの出てくるシーンはそこだけだった。彼女はその日曜日の朝に五反田君と寝る。それだけ。五反田君は土曜日の夜にどこかで酔っぱらって彼女を拾い、自分のアパートに連れてきたのだ。そして朝にもう一度彼女を抱く。そこに教え子である主人公の女の子がやってくる。まずいことにドアに鍵をかけわすれている。そういうシーン。キキの台詞はたったひとことだけ。「どうしたっていうのよ？」と言うだけ。主人公の女の子がショックを受けて走って行ってしまったあとで五反田君が茫然としていると、キキがそう言うのだ。ひどい台詞だった。でもそれが彼女の語る唯一の言葉だった。

「どうしたっていうのよ？」

その声が本当にキキの声なのかどうか、僕には確信が持てなかった。僕はそれほど正確にキキの声を記憶しているわけではなかったし、それに映画館のスピーカーの音もひどかった。でも彼女の体には覚えがあった。背中の形や首筋やつるりとした乳房は僕の覚えているとおりのキキだった。僕は体を固くこわばらせたままスクリーンの上のキキをじっと見ていた。そのシーンは時間にして五分か六分か、たぶんそんなものだったと思う。彼女は五反田君に抱かれ、愛撫され、気持ち良さそうに目を閉じて唇を微かに震わせていた。小さく溜め息もついた。それが演技なのかどうか、僕には判断がつかなかった。まあ、演技なのだろう。これは映画なんだから。でも僕にはキキが演技をするということ自体が全然呑み込めなかっ

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

た。僕はそれでずいぶん混乱してしまった。というのは、もしそれが演技でなかったとしたら、彼女は本当に五反田君に抱かれて陶酔しているということになるし、もし演技だったとしたら、僕の中での彼女の存在意義が狂ってくる。そう、彼女は演技したりするべきではないのだ。いずれにせよ僕はその映画に対して激しく嫉妬した。

スイミング・スクール、それから映画。僕はいろんなものに嫉妬しはじめている。これは良い徴候なのだろうか？

それから主人公の女の子がドアを開ける。そして彼女は二人が裸で抱き合っているところを目撃する。息を呑む。目を閉じる。そして走って行ってしまう。五反田君が茫然とする。キキが言う。「どうしたっていうのよ？」茫然としている五反田君のアップ。フェイドアウト。

それっきりキキは画面には登場しなかった。僕は筋なんかとばして、ただじっと注意深く画面を睨んでいたのだが、彼女の姿はそれっきりちらりとも出てこなかった。彼女は五反田君と何処かで知り合って、彼と寝て、そして彼の人生のワン・シーンに立ち会い、そして消えていく。そういう役まわりなのだ。僕の場合と同じように。ふと現れて、立ち会って、消えていく。

映画が終わって、場内の照明がついた。音楽が流れた。でも僕はまだ体をこわばらせたままじっと白いスクリーンを睨んでいた。これは現実なんだろうか、と僕は思った。映画が終わってしまうと、それは全然現実じゃないみたいに思えた。どうしてキキが映画に出てるんだ？ それも五反田君と一緒に。馬鹿気てる。僕はきっと何処かで間違いを犯しているにちがいない。回路が入れ違っているのだ。何処かで想像力と現実が交錯し混乱しているのだ。そうとしか考えられないじゃないか？

僕は映画館を出てしばらくあたりを歩きまわった。そしてずっとキキのことを考えていた。「どうしたっていうのよ？」と彼女は僕の耳元で囁きつづけていた。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

どうしたっていうんだろう？
でもあれはキキだったんだ。間違いなくそうだったんだ。僕に抱かれているときにも、彼女はああいう顔をして、ああいう風に唇をふるわせ、ああいう風に溜め息をついたのだ。あれは演技なんかじゃない。本当にそうなんだ。でも映画だぜ、あれは。
僕にはわからなかった。
時間がたてばたつほど、僕は自分の記憶が信用できなくなってきた。あれはただの幻想だったのだろうか？
一時間半後に僕はもう一度その映画館に入った。そしてもう一度最初から「片想い」を見た。日曜日の朝、五反田君は女を抱いていた。女の背中が見えた。カメラが回る。女の顔が見える。キキだった。間違いない。主人公の女の子が入ってくる。息を呑む。目を閉じる。走り去る。五反田君は茫然とする。キキが言う。「どうしたっていうのよ？」フェイドアウト。
まったく同じことの繰り返しだった。
それでも映画が終わると、僕にはそれがやはり全然信じられなかった。何かの間違いだろうと思った。どうしてキキが五反田君と寝るんだ？
翌日、僕はもう一度映画館にいってみた。そして座席の上で体をこわばらせ、「片想い」をもう一度見てみた。僕はじっとそのシーンが来るのを待っていた。すごくいらいらしながら。やっとそのシーンになった。日曜日の朝、五反田君は女を抱いていた。女の背中が見えた。カメラが回る。女の顔が見える。キキだ。間違いない。主人公の女の子が入ってくる。息を呑む。目を閉じる。走り去る。五反田君は茫然とする。キキが言う。「どうしたっていうのよ？」
僕は暗闇のなかで溜め息をついた。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

オーケー、これは現実だ。間違いない。繋がっている。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

15

僕は映画館の座席に深くしずみこみ、鼻の前で両手の指を組んでいつもの同じ質問を自らに向かって発した。さて、これからどうすればいいんだろう？

いつもの質問。でも落ち着いてじっくり考える必要がある。整理する必要がある。僕がやるべきこと。繋がりの混乱を解消すること。

たしかに何かが混乱している。それは間違いない。キキと僕と五反田君が絡み合っている。どうしてそんなことになったのか見当もつかないが、とにかく絡み合っているのだ。ほぐさなくてはならない。現実の回復をとおしての自己の回復。あるいはこれは繋がりの混乱ではなく、それとは無関係に生じつつある新たな繋がりなのかもしれない。でもいずれにせよ、僕としてはこの線を辿ってみるしかないだろう。この糸を切れないように注意深く辿っていくのだ。これが手掛かりなのだ。とにかく動くこと。立ちどまらないこと。踊り続けること。みんなが感心するくらいうまく踊ること。

踊るんだよ、と羊男が言う。

オドルンダヨ、と思考がこだまする。

いずれにせよ東京に帰ろう、と僕は思った。これ以上ここにいてもしかたない。僕がいるかホテルを訪れた目的はもう充分に達している。東京に帰って態勢を立て直してその結びつきを手繰っていってみよう。僕はコートのジッパーを上げ、手袋をはめ、帽子をかぶり、マフラーを鼻の上にぐるぐると巻いて映

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

函館を出た。雪はますます激しく降り、殆ど前も見えないくらいだった。街全体が冷凍された死体のように絶望的に固く凍りついていた。

僕はホテルに戻ると全日空のオフィスに電話をかけて午後一番の羽田行きを予約した。「雪が激しくて、直前になってあるいは遅れるか欠航するかということになるかもしれませんが、よろしいでしょうか？」と予約係の女性が言った。かまわない、と僕は言った。帰るときめたからには一刻も早く東京に戻りたかった。それから僕は荷物をまとめ、下におりて勘定をすませた。そしてカウンターに行って眼鏡をかけた彼女をレンタカーのデスクに呼んだ。

「急に用事ができて、東京に帰ることになったんだ」と僕は言った。

「どうも有り難うございました。またお越しくださいませ」と彼女はにっこりと営業的に微笑みながら言った。たぶんこんな風に急に帰ると言い出したことで彼女は少し傷つけられているのだろうと僕は思った。傷つきやすいのだ。

「ねえ」と僕は言った。「また来るよ。近いうちに。その時に二人でゆっくりと食事でもして、いろんなことを話そう。君にきちんと話さなくちゃいけないこともあるんだ。でも今は僕は東京に帰っていろんなことを整理しなくちゃならないんだ。段階的思考。前向きの姿勢。総合的展望。そういうのが僕に求められている。それが終わったら、またここに来る。何ヵ月かかるかはわからない。でもちゃんと戻ってくる。どうしてかと言えば、ここは僕にとって……つまり何というか、特別な場所であるような気がするからだ。だからおそかれはやかれここに戻ってくる」

「ふうん」と彼女はどちらかというと否定的に言った。

「ふうん」と僕はどちらかというと肯定的に言った。「でもきっと僕の言ってることは馬鹿みたいに聞こえるんだろうね」

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

「そんなことないわ」と彼女は無表情に言った。「何ヵ月かかるかわからない先のことがうまく考えられないだけよ」

「それほど先のことではないと思うよ。また会える。何故なら僕と君との間にはなにかしら相通じるところがあるから」と僕は彼女を説得するように言った。でも彼女は説得されたようには見えなかった。「そんな風に感じない？」僕は訊いてみた。

彼女はボールペンの頭で机をとんとんと叩いただけで僕の質問には答えなかった。「それで、次の飛行機で帰るのかしら、ひょっとして？」と彼女は言った。

「そのつもりだよ。飛んでくれさえすればね。でも何しろこの天候だから、どうなるかはっきりしたことはわからない」

「次の飛行機で帰るんだったら、ひとつお願いがあるんだけど、きいてくれる？」

「もちろん」

「実は十三の女の子が一人で東京に帰らなくちゃならないの。お母さんが用事ができて先に何処かに行っちゃったの。で、その子が一人でここのホテルに残されたの。悪いけど、あなたその子をちゃんと東京まで連れていってくれないかしら？　荷物もけっこうあるし、一人で飛行機に乗せるのも心配だし」

「よくわからないな」と僕は言った。「どうしてお母さんが子供を一人で放り出して何処かに行っちゃったりするんだよ？　そんなの無茶苦茶じゃないか？」

彼女は肩をすぼめた。「だからまあ、無茶苦茶な人なのよ。有名な女性カメラマンなんだけど、ちょっと変わった人なの。思いつくとどっかにさっと行っちゃうの。子供のことを忘れちゃって。ほら、芸術家だから、何かあるとそれで頭が一杯になっちゃうのね。あとで思い出してうちに電話をかけてきたの。子供をそこに置いてきちゃったんで、適当に飛行機に乗せて東京に帰してほしいって」

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

「そんなの自分で引き取りにくりゃいいじゃないか」
「そんなこと私知らないわよ。とにかくあと一週間仕事でどうしてもカトマンズにいなくちゃならないんだって。それにその人有名な人だし、うちのお得意さんだし、そう邪険にも出来ないのよ。彼女は空港まで運んでくれればあとは一人で帰れるからって気楽に言うんだけど、そうもいかないでしょう。女の子だし、もし何かあったらうちとしてもすごく困るのよ。責任問題になっちゃうし」
「やれやれ」と僕は言った。それから僕はふと思いついたことを口に出してみた。「ねえ、その子ひょっとして髪が長くて、ロック歌手のトレーナーを着て、ウォークマンを聴いてない、いつも?」
「そうよ。何だ、ちゃんと知ってるんじゃない」
「やれやれ」と僕は言った。

*

彼女は全日空のオフィスに電話をかけて僕と同じ便の座席を予約した。それからその女の子の部屋に電話をかけて、荷物をまとめてすぐに下りてくるように、一緒に帰る人がみつかったから、と言った。大丈夫、よく知っているちゃんとした人だから、と彼女は言った。次にボーイを呼んで、彼女の部屋に荷物を取りにやらせた。そしてホテルのサービス・リムジンを呼んだ。きびきびとしてとても手際がよかった。有能だった。とても手際がいい、と僕は言った。
「この仕事好きだって言ったでしょう。向いてるのよ」
「でも、からかわれるとムキになる」と僕は言った。
彼女はまたボールペンで机をとんとんと叩いた。「そういうのはまた別なの。冗談言われたりからかわれたりするのって、あまり好きじゃないの。昔から。そういうことされるとすごく緊張するの、私」

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

「ねえ、君を緊張させるつもりなんか全然ない」と僕は言った。「逆だよ。僕はリラックスしたいから冗談を言うんだ。下らなくて無意味な冗談かもしれないけれど、僕だって僕なりに努力して冗談を言ってるんだ。もちろん時によっては自分が考えてるほど相手が面白がってくれないこともある。でも別に悪意はないんだ。何も君のことを笑っているわけじゃない。僕が冗談を言うのは、僕にとってそういうのが必要だからだよ」

彼女は少し唇をすぼめて僕の顔を眺めていた。丘の上に立って洪水の引いたあとを眺めるような目付きだった。それから彼女は溜め息をつくような、鼻をならすような、複雑な声を出した。「ところであなたの名刺を頂けないかしら？　一応女の子を預けた手前、立場上」

「立場上」と僕はもそもそと口ごもりながら、財布から名刺をひっぱりだして彼女に渡した。僕も一応名刺くらいは持っている。一応名刺くらいは持っている必要があると十二人くらいの人に忠告されたのだ。

彼女は雑巾でも見るみたいにじっとその名刺を見ていた。

「ところで君の名前は？」と僕は訊いてみた。

「今度会った時に教えてあげる」と彼女は言った。そして中指で眼鏡のブリッジを触った。「もし会えたら」

「もちろん会えるよ」と僕は言った。

彼女は新月のように淡く物静かな微笑を浮かべた。

十分後に女の子がボーイと一緒にロビーに下りてきた。ボーイはサムソナイトの大きなスーツケースを持っていた。ドイツ・シェパードが立ったまま一匹入りそうなくらい大きなスーツケースだった。たしかにこんなものを十三の女の子に持たせて空港に置き去りにするわけにもいかない。彼女は今日は「TAL

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

「KING HEADS」と書かれたトレーナー・シャツを着て、細いブルージーンズとブーツを履き、その上に上等そうな毛皮のコートを羽織っていた。前に見た時と同じように彼女には透き通るような奇妙な美しさが感じられた。とても微妙な——明日消えたとしてもおかしくなさそうな——美しさだった。でもその美しさは見るものにある種の不安定な感情を起こさせるような気がした。たぶんそれが微妙すぎるからだろう。「トーキング・ヘッズ」と僕は思った。悪くないバンド名だった。ケラワックの小説の一節みたいな名前だ。

「語りかける頭が俺の隣でビールを飲んでいた。俺はひどく小便がしたかった。小便をしてくるぜと俺は語りかける頭に言った」

懐かしきケラワック。今はどうしているものか。

女の子は僕を見た。でも彼女は今度はにっこりとはしなかった。眉をしかめるようにして僕を見て、それから眼鏡の女の子を見た。

「大丈夫。悪いひとじゃないから」と彼女は言った。

「みかけほど悪くない」と僕も言い添えた。

女の子はまた僕を見た。それからまあ仕方ないという風に何度か肯いた。よりごのみできる立場じゃないんだ、というように。それで僕は彼女に対してすごくひどいことをしているような気になった。なんだかスクルージ爺さんになったような気分だった。

　スクルージ爺さん。

「心配しないで大丈夫よ」と彼女が言った。「このおじさんは冗談もうまいし、気のきいたことも言ってくれるし、女の子には親切なの。それにお姉さんのお友達なの。だから大丈夫よ、ね？」

「おじさん」と僕は啞然として言った。「僕はまだおじさんじゃない。まだ三十四だ。おじさんはひどい」

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

でも誰も僕の言うことなんか聞いていなかった。彼女は女の子の手をとって玄関に止まったリムジンの方にさっさと歩いて行ってしまった。ボーイはサムソナイトをすでに車の中に積み込んでいた。僕は自分のバッグを下げてその後を追った。おじさん、と僕は思った。ひどい。

空港行きのリムジンに乗ったのは僕とその女の子だけだった。天候がひどすぎるのだ。空港までの道中どこを向いても雪と氷しか見えなかった。まるで極地だ。

「ねえ、君、名前はなんていうの？」と僕は女の子に聞いてみた。

彼女はじっと僕の顔を見た。そして小さく首を振った。やれやれという風に。それから何かを探すようにゆっくりと回りを見回した。どこを向いても雪しか見えなかった。「雪」と彼女は言った。

「雪？」

「名前」と彼女は言った。「それ。ユキ」

それから彼女はウォークマンをポケットからひっぱりだして、個人的な音楽の中にひたった。空港に着くまで僕の方をちらりとも見なかった。

ひどい、と僕は思った。あとになってわかったことだけれど、ユキというのは彼女の本当の名前だった。でもその時は、それはどう考えても即席のでっちあげの名前に思えた。それで僕はちょっと傷つきもした。彼女はときどきポケットからチューインガムを出して一人で噛んでいた。僕には一枚も勧めてはくれなかった。僕はべつにチューインガムなんてほしくはなかったけれど、儀礼的に勧めてくれたっていいんじゃないかという気はした。そういう何やかやで、僕はなんだか自分がひどくみすぼらしく年とってしまったような気がした。仕方ないので僕はシートに深く身を沈め、目を閉じた。そして昔のことを思い出した。僕が彼女の年頃であった当時のことを。そういえば僕もその頃はロック・レコードを集めていた。45回転のシングル盤を。レイ・チャールズの「旅立てジャック」やら、リッキー・ネルソンの「トラヴェ

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

リン・マン」やら、ブレンダ・リーの「オール・アローン・アム・アイ」、そういうのを百枚くらい。歌詞を暗記するくらい毎日繰り返して聴いた。僕は頭の中で試しに「トラヴェリン・マン」の歌詞を思い出して歌ってみた。信じられない話だけれど、まだ歌詞を全部覚えていた。どうしようもない下らない歌詞だったが、歌ってみるとちゃんとすらすら出てきた。若い頃の記憶力というのは大したものだ。無意味な事柄を実によく覚えている。

And the China doll
down in old Hongkong
waits for my return.

トーキング・ヘッズの歌とは確かにずいぶん違う。時代は変わる——タアアアイムズ・ア・チェエエエンジン……

*

僕はユキを待合室にひとり置いて、空港カウンターに行って切符を買った。あとで精算するつもりで、二人分の料金を僕のクレジット・カードで払った。搭乗までにあと一時間あったが、たぶんもっと遅れることになるだろうと係員が言った。「アナウンスがありますから、気をつけていてください」と彼女は言った。「とにかく今のままでは視界が悪すぎるんです」
「天候は回復するかな？」と僕は訊いてみた。
「予報はそうなっているんですけどね、でも何時間かかるかはわかりませんね」と彼女はうんざりしたよ

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

うに言った。同じ事を二百回くらい言ってるのだ。まあ誰だってうんざりするだろう。
僕はユキのところに戻って、雪が止まないので少し飛行機が遅れることになりそうだ、と言った。彼女は僕の顔をちらっと見てから〈ふうん〉という顔をした。でも何も言わなかった。
「どうなるかわからないから、荷物はチェックインしないでおこう。一度チェックインしちゃうと戻してもらうのが面倒だからね」と僕は言った。
〈お好きに〉という顔を彼女はした。でも何も言わなかった。
「しばらくここで待つしかないね。それほど面白い場所でもないけど」と僕は言った。「ところで昼御飯は食べた？」
彼女は肯いた。
「コーヒー・ショップにでも行かないか？　何か飲みたくない？　コーヒーかココアか紅茶かジュースか、何でも」と僕はきいてみた。
〈どうかしら〉という顔を彼女はした。感情表現が豊かだ。
「じゃあ行こう」と僕は言って立ち上がった。そしてサムソナイトを押して、彼女と一緒にコーヒー・ショップに行った。コーヒー・ショップは混んでいた。どの便も出発が遅れているらしく、みんな一様に疲れた顔をしていた。そんなざわざわとした店の中で僕は昼食がわりにコーヒーとサンドイッチを頼み、ユキはココアを飲んだ。
「ねえ、何日くらいあのホテルに泊まってたの？」と僕は聞いてみた。
「十日」と彼女は少し考えてから言った。
「お母さんはいつ行っちゃったの？」
彼女はしばらく窓の外の雪を見ていた。それから「三日前」と言った。まるで初歩英会話のレッスンを

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

ゃっているみたいだった。

「学校は春休みなの、ずっと？」

「学校は行ってないの、ずっと。だから放っておいて」と彼女は言った。そしてポケットからウォークマンを出して、ヘッドフォンを耳にあてた。

僕はコーヒーの残りを飲み、新聞を読んだ。どうも最近僕は女の子を怒らせてばかりいる。どうしてだろう？　運が悪いだけなのだろうか、それとももっと根本的な原因があるのだろうか？

たぶん運が悪いだけだ、と僕は結論を下した。そして新聞を読んでしまうと、フォークナーの「響きと怒り」の文庫本をバッグから出して読んだ。フォークナーとフィリップ・K・ディックの小説は神経がある種のくたびれかたをしているときに読むと、とても上手く理解できる。僕はそういう時期がくるとかならずどちらかの小説を読むことにしている。それ以外の時期にはまず読まない。途中でユキは一度洗面所に行った。そしてウォークマンの電池を入れ替えた。三十分ほどあとで、アナウンスがあった。羽田行きの便は四時間遅れて出発するというアナウンスだった。天候の回復を待つのだ。僕は溜め息をついた。やれやれ、ここであと四時間も待つのか。

でもまあ仕方ない。そういうことは最初に警告されていたのだから。もっと前向きに積極的にものを考えよう、と僕は思った。パワー・オブ・ポジティブ・シンキング。五分ポジティブに考えて、ちょっとしたアイデアが閃いた。上手くいくかもしれないし、上手くいかないかもしれない。でもこんなうるさくて煙草臭いところで漫然と時間をつぶしているよりはずっといい。僕はユキにちょっとここで待っていてと言って、空港のレンタカー会社のカウンターまで行った。そして車を借りたいと言った。カウンターの女性はすぐに手続きしてくれた。カー・ステレオつきのカローラ・スプリンターだった。僕はマイクロ・バスでレンタカー・オフィスまで運ばれ、そこでカローラのキイを渡された。オフィスは空港から車で十分

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

ほどのところにあった。新しいスノー・タイヤのついた白いカローラだった。僕はその車に乗って、空港まで戻った。そしてコーヒー・ショップに行って、ユキに「これから三時間ほどこの辺をドライブしてみようよ」と言った。

「だってこんなに雪が降ってるのよ。ドライブといっても何も見えないでしょう？」と彼女はあきれたように言った。「それにいったい何処に行くの？」

「何処にもいかない。車に乗って走るだけ」と僕は言った。「でも大きな音で音楽が聴ける。音楽が聴きたいんだろう。たっぷり聴かせてあげるよ。ウォークマンばかり聴いていると耳が悪くなる」

彼女はどうかしらという風に首を振った。でも僕がさあ行こうと言って立ち上がると、席を立ってついてきた。

僕はスーツケースをかつぎあげてトランクに放り込み、雪の降りしきる道路をゆっくりと何処にいくともなく車を走らせた。ユキはショルダー・バッグの中からカセット・テープを出して、カー・ステレオに入れ、スイッチを押した。デヴィッド・ボウイが「チャイナ・ガール」を歌っていた。それからフィル・コリンズ。スターシップ。トマス・ドルビー。トム・ペティー&ハートブレーカーズ。ホール&オーツ。トンプソン・ツインズ。イギー・ポップ。バナナラマ。そういうローティーンの女の子がごく普通に聴きそうな音楽がずっと続いていた。ストーンズが「ゴーイン・トゥー・ア・ゴーゴー」を歌った。「この曲知ってる」と僕は言った。「昔ミラクルズが歌ったんだ。スモーキー・ロビンソンとミラクルズ。僕が十五か十六の頃」

「へえ」とユキは興味なさそうに言った。

「ゴオイン・トゥ・ア・ゴッゴ」と僕も曲にあわせて歌った。

それからポール・マッカートニーとマイケル・ジャクソンが「セイ・セイ・セイ」を歌った。道路を走

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

っている車は少なかった。ほとんどないと言ってもいいくらいだった。ワイパーがいかにも大儀そうに窓についた雪片をばた・ばた・ばたと払い落としていた。車の中は暖かく、ロックンロールは心地良かった。デュラン・デュランでさえ心地良かった。僕はけっこうリラックスしてときどきテープにあわせて歌いながらまっすぐな道路をまっすぐに進んだ。ユキも少しは気持ちを楽にしているように見えた。彼女はその九十分テープを聴いてしまうと、僕がレンタカー・オフィスで借りてきたテープに目をとめた。「それ何？」と彼女は訊いた。オールディーズのテープだと僕は答えた。空港に戻るまでの道中、暇つぶしに聴いていたのだ。「それ聴きたい」と彼女は言った。

「気に入るかどうかわからないよ。みんな古いものだから」と僕は言った。

「いいわよ、何でも。この十日くらいずっと同じテープばかり聴いてたんだもの」

それで僕はそのテープをセットした。まずサム・クックが「ワンダフル・ワールド」を歌った。「僕は歴史のことなんてよく知らないけれど……」、いい歌だ。サム・クック、僕が中学三年生の時に撃たれて死んだ。バディー・ホリー「オー・ボーイ」。バディー・ホリーも死んだ。飛行機事故。ボビー・ダーリン「ビヨンド・ザ・シー」。ボビー・ダーリンも死んだ。エルヴィス「ハウンド・ドッグ」。エルヴィスも死んだ。麻薬漬け。みんな死んだ。それからチャック・ベリーが歌った。「スイート・リトル・シックスティーン」。エディー・コクラン「サマータイム・ブルース」。エヴァリ・ブラザーズ「起きろよ、スージー」。僕は歌詞の覚えている部分だけを一緒に歌った。

「よく覚えているのね」とユキが感心したように言った。

「そりゃそうだよ。僕も昔は君と同じくらい熱心にロックを聞いてたんだ」と僕は言った。「君と同じくらいの歳のころにさ。毎日ラジオにしがみついて、小遣いを貯めてレコードを買った。ロックンロール。世の中にこれくらい素晴らしいものはないと思ってた。聴いているだけで幸せだった」

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

「今はどうなの？」

「今でも聴いている。好きな曲もある。でも歌詞を暗記するほどは熱心に聴かない。昔ほどは感動しない」

「どうしてかしら？」

「どうしてだろう？」

「教えて」とユキは言った。

「本当にいいものは少ないということがわかってくるからだろうね」と僕は言った。「本当にいいものはとても少ない。何でもそうだよ。本でも、映画でも、コンサートでも、本当にいいものは少ない。ロック・ミュージックだってそうだ。いいものは一時間ラジオを聴いて一曲くらいしかない。あとは大量生産の屑みたいなもんだ。でも昔はそんなこと真剣に考えなかった。何を聞いてもけっこう楽しかった。若かったし、時間は幾らでもあったし、それに恋をしていた。つまらないものにも、些細なことにも心の震えのようなものを託することができた。僕の言ってることわかるかな？」

「何となく」とユキは言った。

デル・ヴァイキングズの「カム・ゴー・ウィズ・ミー」がかかったので、僕はしばらくそれを一緒に合唱した。「退屈じゃない？」と僕は聞いてみた。

「ううん。悪くない」と彼女は言った。

「悪くない」と僕も言った。

「今は恋をしないの？」とユキが訊いた。

僕はそのことについて少し真剣に考えた。「むずかしい質問だ」と僕は言った。「君は好きな男の子はいるの？」

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

「いない」と彼女は言った。「嫌な奴はいっぱいいるけど」
「気持ちはわかる」と僕は言った。
「音楽聴いてる方が楽しい」
「その気持ちもわかる」
「本当にわかる？」とユキは言って、疑わしそうに目を細めて僕を見た。
「本当にわかる」と僕は言った。「みんなはそれを逃避と呼ぶ。でも別にそれはそれでいいんだ。僕の人生は僕のものだし、君の人生は君のものだ。何を求めるかさえはっきりしていれば、君は君の好きなように生きればいいんだ。人が何と言おうと知ったことじゃない。そんな奴らは大鰐に食われて死ねばいいんだ。僕は昔、君くらいの歳の時にそう考えていた。今でもやはりそう考えている。それはあるいは僕が人間的に成長していないからかもしれない。あるいは僕が恒久的に正しいのかもしれない。まだよくわからない。なかなか解答が出てこない」
ジミー・ギルマー「シュガー・シャック」。僕は歯の隙間から口笛を吹いて運転した。道路の左手には真っ白な原野が広がっていた。「ただの小さな木作りのコーヒー・ショップ。エスプレッソ・コーヒーが御機嫌にうまいんだ」。良い唄だ。一九六四年。
「ねえ」とユキが言った。「あなたちょっと変わってるみたい。みんなにそう言われない？」
「ふふん」と僕は否定的に言った。
「結婚してる？」
「一度した」
「離婚したの？」
「そう」

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

「どうして？」

「奥さんに逃げられたんだ」

「本当、それ？」

「本当だよ。奥さんが他の男の人を好きになって一緒に何処かに行っちゃったんだ」

「可哀そう」と彼女は言った。

「ありがとう」と僕は言った。

「でも奥さんの気持ちわかるような気がする」とユキは言った。

「どんな風に？」と僕は聞いてみた。

彼女は肩をすぼめて何も言わなかった。僕もあえて聞きたいとは思わなかった。

「ねえ、チューインガム食べる？」とユキが訊いた。

「ありがとう。でもいらない」と僕は言った。

僕らは少しずつ仲良くなって、ビーチ・ボーイズの「サーフィンUSA」のバック・コーラスを二人でつけた。「inside-outside-U. S. A.」とか、そういう簡単なやつ。でも楽しかった。「ヘルプ・ミー・ロンダ」のリフも二人で歌った。僕もまだ捨てたものではない。僕はスクルージ爺さんではないのだ。そうこうするうちに雪がだんだん小降りになってきた。僕は空港に戻り、キイをレンタカーのカウンターに戻した。そして荷物をチェックインし、三十分後にゲートに入った。飛行機は結局五時間遅れて離陸した。ユキは飛行機が離陸するとすぐに眠りこんでしまった。彼女の寝顔はすばらしく綺麗だった。何かしら非現実的な材料で作った精密な彫像みたいに美しかった。誰かが強く突くと壊れてしまいそうに見えた。そういう種類の美しさだった。スチュワーデスがジュースを運んでやってきて、彼女の寝顔を見てとても眩しそうな顔をした。そして僕に向かって微笑んだ。僕も微笑んだ。僕はジン・トニックを注文した。そして

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

それを飲みながら、キキのことを考えた。僕は頭の中で彼女と五反田君がベッドの中で抱き合っているシーンを何度も何度も再生してみた。カメラがまわりこむように移動した。キキがそこにいた。「どうしたっていうのよ？」と彼女は言った。

ドウシタッテイウノヨ、と思考がこだました。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

16

羽田で荷物を受け取ってから、僕はユキに家は何処にあるのかと聞いてみた。
「箱根」と彼女は言った。
「ずいぶん遠いな」と僕は言った。もう夜の八時も過ぎていたし、これからタクシーに乗るにせよ何にせよ、箱根に帰るのはちょっと骨だった。「東京に知っている人はいないの？　親戚だとか、親しい人だとか。そういう人」と僕は訊いてみた。
「そんな人いないけど、赤坂にアパートならあるわよ。小さなアパートだけど。ママが東京に出る時に使ってるの。そこに泊まれる。誰もいないから」
「家族はいないの？　お母さんの他に」
「いない」とユキは言った。「私とママの二人だけ」
「ふん」と僕は言った。なんとなくややこしそうな家庭だったが、まあそれは僕には関係のないことだった。「とにかく僕のところまでタクシーで行こう。それから一緒に晩御飯をどこかで食べよう。食べ終わったら。僕が車で君をその赤坂のアパートまで送ってあげる。それでいいかな？」
「何でもいい」と彼女は言った。
僕はタクシーを拾って渋谷の僕のアパートまで行った。そしてユキを玄関で待たせて、部屋に一人で戻り、荷物を置いてヘビー・デューティーじゃない普通の格好に着替えた。普通のスニーカーと普通の皮ジ

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

ャンパーと普通のセーター。それからスバルにユキを乗せて、車で十五分ほどの距離にあるイタリアン・レストランに行って食事をした。僕はラヴィオリと野菜サラダを食べ、彼女はボンゴレのスパゲッティとほうれん草を食べた。そして魚のフリット・ミストを一皿注文して二人で分けた。フリットはかなりの量があったが、彼女はすごくおなかがすいていたらしく、その上にティラミスまで食べた。僕はエスプレッソを飲んだ。「おいしかった」と彼女は言った。

　どこに美味い店があるかとか、そういうことだけはよく知っているんだと僕は言った。そして美味い物を食べさせる店を捜してまわる仕事の話をした。

　ユキは僕の話を黙って聞いていた。

「だから詳しいんだ」と僕は言った。「フランスにぶうぶう鳴いて地下のキノコを捜す豚がいるけど、あれと同じだよ」

「あまり仕事が好きじゃないの？」

　僕は首を振った。「駄目だね。好きになんかなれない、とても。何の意味もないことだよ。美味い店をみつける。雑誌に出してみんなに紹介する。ここに行きなさい。こういうものを食べなさい。でもどうしてわざわざそんなことしなくちゃいけないんだろう？　みんな勝手に自分の好きなものを食べていればいいじゃないか。そうだろう？　どうして他人に食い物屋のことまでいちいち教えてもらわなくちゃならないんだ？　どうしてメニューの選び方まで教えてもらわなくちゃならないんだ？　そしてね、そういうところで紹介される店って、有名になるに従って味もサービスもどんどん落ちていくんだ。十中八、九はね。需要と供給のバランスが崩れるからだよ。それが僕らのやっていることだよ。何かをみつけては、それをひとつひとつ丁寧におとしめていくんだ。真っ白なものをみつけては、垢だらけにしていくんだ。それを人々は情報と呼ぶ。生活空間の隅から隅まで隙を残さずに底網ですくっていくことを情報の洗練化と

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

呼ぶ。そういうことにはとことんうんざりする。自分でやっていて」
ユキはテーブルの向かい側からじっと僕を見ていた。何か珍しい生物でも見るみたいに。「でもやってるのね？」
「仕事だから」と僕は言った。それから僕は突然向かいに座っているのが十三かそこらの女の子であることを思い出した。やれやれ俺はいったいこんな小さな女の子を相手に何を言ってるんだろう？「行こう」と僕は言った。「もう夜も遅いし。そのアパートまで送るよ」
スバルに乗ると、ユキがその辺に転がっていたテープを手に取ってカー・ステレオに入れた。僕が作ったオールディーズのテープだった。僕は一人で運転しながらよくそういうのを聴いてるのだ。フォー・トップスの「リーチ・アウト・アイル・ビー・ゼア」。道路はすいていたから、赤坂まではすぐだった。僕はユキにアパートの場所を訊いた。
「教えたくない」とユキは言った。
「どうして教えたくないんだろう？」と僕は訊ねた。
「まだ帰りたくないから」
「ねえ、もう夜の十時を過ぎてる」と僕は言った。「長いハードな一日だった。犬のように眠りたい」
隣の席からユキはじっと僕の顔を見ていた。不思議な視線だった。僕は前方の路面に目を注いでいたけれど、彼女の視線をずっと左側の頬に感じつづけていた。そこには何の感情も含まれていなかったが、その視線は僕をどきどきさせた。しばらく僕を見つめたあとで、彼女は視線を反対側の窓の外に向けた。
「私、眠くないの。それに今アパートに帰っても一人だし。もう少しドライブしてたい。音楽聴いて」
僕は少し考えた。「あと一時間。それから帰ってぐっすり眠る。それでいい？」
「それでいい」とユキは言った。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

僕らは音楽を聴きながら、東京の街をぐるぐると回った。そしてこういうことをしているからどんどん大気が汚染され、オゾン層が破壊され、騒音が増え、人々の神経が苛立ち、地下資源が枯渇するんだと思った。ユキは頭をシートにもたせかけ、何も言わずにぼんやりと夜の街を眺めていた。
「お母さんはカトマンズにいるんだって？」と僕は尋ねてみた。
「そう」彼女はけだるそうに言った。
「じゃあ、戻ってくるまでは一人なんだ」
「箱根に帰ったらお手伝いのおばさんがいるけど」と彼女は言った。
「ふん」と僕は言った。「しょっちゅうこういうことはあるの？」
「私を放り出していっちゃうってこと？　しょっちゅうよ。あの人、自分の写真のことですぐ頭がいっぱいになっちゃうの。悪気はないんだけど、そういう人なの。要するに自分のことしか考えてないの。私がいるってこと忘れちゃうの。傘と同じ。ただ単に忘れるのよ。それで一人でふっと何処かに行ってしまうの。カトマンズに行きたいと思ったら、そのことしか頭になくなっちゃうわけ。もちろんあとで反省して謝るけど、すぐにまた同じことやるの。気紛れで私を一緒に北海道に連れていってあげるって連れていって、連れていかれたのはいいけど毎日私はホテルの部屋でウォークマンばかり聴いていて、ママは殆ど帰ってなんかこなくて、一人で御飯食べて……。でももうあきらめてる。今度だって一週間で帰るって言ってるけど、あてになんかならないわよ。カトマンズから何処にいくかわかったもんじゃない」
「お母さんの名前はなんて言うの？」と僕は聞いてみた。
彼女は名前を言った。僕はその名前を聞いたことがなかった。聞いたことないな、と僕は言った。
「仕事用の名前を持ってるの」とユキは言った。「アメっていう名前で仕事してるのずっと。それで私の名前をユキにしたの。馬鹿みたいだと思わない？　そういう人なの」

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

僕はアメを知っていた。誰でも彼女のことを知っている。とびっきり有名な女流写真家だ。ただしマスコミに顔は出さない。世間にも出てこない。本名さえほとんど誰も知らない。好きな仕事しかしない。奇行で知られている。攻撃的で鋭い写真を撮る。僕は首を振った。「じゃあ、君のお父さんはあの小説家か？　牧村拓、たしかそうだったね」

ユキは肩をすぼめた。「あの人そんな悪い人じゃないわよ。才能はないけど」

僕はユキの父親の書いた小説を昔何冊か読んだことがあった。若い頃に書いた二冊の長編と一冊の短編集は悪くなかった。文章も視点も新鮮だった。それで本はまずまずのベストセラーになった。本人も文壇の寵児のような存在になった。TVやら雑誌やらいろんなところに顔を出して、社会のあらゆる事象について意見を述べた。そして当時新進の写真家であったアメと結婚した。それが彼の頂点だった。そのあとがひどかった。とくにこれといった理由もなく、突然彼はまともな物が書けなくなってしまったのだ。次に書いた二、三冊はどうしようもない代物だった。批評家も酷評したし、本も売れなかった。それから牧村拓はがらりとスタイルを変えた。ナイーブな青春小説の作家から突然実験的前衛作家に転向してしまったのだ。でも無内容であることに変わりはなかった。文体もフランスあたりの前衛小説の部分部分をもってきてつぎあわせたようなおぞましい代物だった。それでも想像力のかけらもない何人かの新しい物好きの評論家がそれを褒めた。でも二年もたてば、批評家たちもさすがにこれは駄目だと思ったのか、何も言わなくなってしまった。どうしてそういうことが起こるのか僕にはわからない。でもとにかく彼の才能は最初の三冊で完全に枯渇してしまったのだ。しかしそれでも、文章だけはまずまず書けた。だから去勢された犬が過去の記憶に従って雌犬の尻の匂いを嗅ぐみたいに、文壇の近辺をうろつきまわっていた。その頃にはもうアメは彼とは離婚していた。正確に言えば、アメが彼に見切りをつけたのだ。少なくともそれが世間の定説になっていた。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

でも牧村拓はそのままでは終わらなかった。彼は冒険作家というふれこみで新しい分野に仕事を広げた。一九七〇年代の始め頃だ。前衛よさらば、行動と冒険。彼は世界の秘境をめぐり、それについて文章を書いた。エスキモーと一緒にアザラシを食べたり、アフリカで原住民と生活したり、南米のゲリラの取材をしたりした。そして書斎型の作家を激しい言葉で非難した。最初はそれはそれで悪くなかったのだが、十年も同じことをやっているうちに——まあ当然のことだが——みんなそれに飽きてきた。だいたい世界にそれほどたくさんの冒険の種があるわけではない。リヴィングストンとかアムンゼンの時代ではないのだ。冒険の質は薄れ、文章だけが仰々しくなっていった。それに実際のところそれは冒険でさえなかったのだ。彼の大方の「冒険」にはコーディネーターとか編集者とかカメラマンとかがぞろぞろ同行していた。TVが絡むと、それに十人くらいのスタッフとかスポンサーとかがついてきた。演出もあった。あとになればなるほど演出がふえてきた。それは業界の人間ならみんな知っていることだった。

たぶんそれほど悪い人ではないのだろう。でも才能はなかった。娘が言うように。

僕らはその作家の父親についてはそれ以上話をしなかった。ユキも話したくなさそうだったし、僕も別に話したくなかった。

僕らはしばらく黙って音楽を聴いていた。僕はハンドルを握って、前を行くブルーのBMWのテール・ランプを眺めていた。ユキはソロモン・バークにあわせてブーツの先でリズムを取りながら、街の風景を見ていた。

「これいい車ね」と少しあとでユキは言った。「なんて言うの？」

「スバル」と僕は言った。「中古の古い型のスバル。わざわざ口に出して褒めてくれる人は世間にあまりいないけど」

「よくわかんないけど、乗っていて何となく親密な感じがする」

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

「たぶんそれはこの車が僕に愛されているからだと思う」
「そうすると親密な感じになるの？」
「調和性」と僕は言った。
「よくわからない」とユキは言った。
「僕と車とでたすけあっているんだ。簡単に言えば。つまり、僕がここの空間に入る。僕はこの車を愛していると思う。するとここにそういう空気が生じる。そして車もそういう空気を感じる。僕も気持ち良くなる。車も気持ち良くなる」
「機械も気持ち良くなるの？」
「もちろんなる」と僕は言った。「どうしてかはわからない。でも機械も気持ち良くなったり、頭に来たりする。理論では解明できないけれど、経験的に言ってそうなんだ。間違いない」
「人間が愛しあうのと同じように？」
僕は首を振った。「人間とは違う。こういうのはね、その場にとどまっている感情なんだ。人間に対する感情というのはそれとは違う。相手にあわせていつも細かく変化している。揺れ動いたり、戸惑ったり、膨らんだり、消えたり、否定されたり、傷ついたりする。多くの場合意識的に統御することはできない。スバルに対するのとは違う」
ユキはそれについてしばらく考えていた。「奥さんとは通じあえなかったの？」とユキが訊いた。
「通じあえていると僕はずっと思っていた」と僕は言った。「でも僕の奥さんはそう考えなかった。見解の相違。だから何処かに行っちゃったんだ。たぶん見解の相違を訂正するよりは他の男の人と何処かに行っちゃう方が話が早かったんだろうね」
「スバルみたいには上手くいかなかったのね？」

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

「そういうことだね」と僕は言った。やれやれ、いったい十三の女の子相手に話す事柄か、これが。
「ねえ、私のことはどう思う？」とユキが訊いた。
「僕はまだ君のことを殆ど何も知らない」と僕は言った。
彼女はまた僕の左側の頬をじっと見つめた。そのうちに左側の頬に穴が開くんじゃないかという気がした。それくらい鋭い視線だった。わかったよ、と僕は思った。
「君は僕がこれまでにデートした女の子の中ではたぶんいちばん綺麗な女の子だよ」と僕は前の路面を見ながら言った。「いや、たぶんじゃない。間違いなくいちばん綺麗だよ。僕が十五だったら確実に君に恋をしていただろうね。でも僕はもう三十四だから、そんなに簡単に恋はしない。これ以上不幸になりたくない。スバルの方が楽だ。そういうところでいいだろうか？」
ユキは今度は平板な視線で僕をしばらく見ていた。そして「変な人」と言った。
僕は自分が本当に人生の敗残者になったような気がした。たぶん悪気はないのだろう。彼女にそう言われると僕は自分が本当に人生の敗残者になったような気がした。たぶん悪気はないのだろう。でも彼女にそう言われると結構こたえるのだ。

＊

十一時十五分に僕は赤坂に戻ってきた。
「さて」と僕は言った。
今度はユキはちゃんと僕にそのアパートの場所を教えてくれた。赤い煉瓦を使ったこぢんまりとしたマンションで、乃木神社の近くの静かな通りにあった。僕はその前に車を停めてエンジンを切った。
「お金のことなんだけど」と彼女はシートに座ったまま静かに言った。「飛行機代とか、食事代とかそういうの」

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

「飛行機代はお母さんが戻ってきてから返してくれればいい。それ以外のものは僕が出す。気にしなくていい。割り勘のデートはしないんだ。飛行機代だけでいい」

ユキは何も言わず肩をすぼめ、車のドアを開けた。そして嚙んでいたチューインガムを植木鉢の中に捨てた。

「ありがとう・どういたしまして」と僕は一人で声に出して礼儀正しく会話してみた。そして財布から名刺を出して彼女に渡した。「お母さんが帰ったらこれを渡して。それからもし君が一人でいて何か困ったことがあったらここに電話するんだよ。僕に出来ることだったらやってあげるから」

彼女はしばらく僕の名刺をつまんでじっと睨んでいた。それからコートのポケットに突っ込んだ。

「変な名前」とユキは言った。

僕は後部席から重いスーツケースを引っ張り出し、それをエレベーターにのせて四階まで運んだ。ユキはショルダー・バッグから鍵を出してドアを開けた。僕はスーツケースを中に入れた。食堂を兼ねたキッチンとベッドルームと浴室だけの作りだった。建物はまだ新しく、部屋の中はモデルルームみたいにきちんと片付いていた。食器や家具や電気器具はひととおり揃っていたし、どれも洒落た高価そうなものだったが、生活の匂いというものはほとんど感じられなかった。とにかく金を出して全部を三日で買い揃えたといった風だった。趣味は良い。でもどことなく非現実的だ。

「ママがたまに使うだけなの」とユキは僕の視線を追ったあとで言った。「ママはこの近くにスタジオを持ってて、東京にいる時はほとんどそこで暮らしているようなものなの。そこで寝てそこで御飯食べて。ここにはたまに帰ってくるだけ」

「なるほど」と僕は言った。忙しそうな人生だ。

彼女は毛皮のコートを脱いでハンガーにかけ、ガス・ストーブをつけた。そしてどこかからバージニ

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

ア・スリムの箱をもってきて一本口にくわえ、紙マッチをクールに擦って火をつけた。十三の女の子が煙草を喫うというのは良くないことだと僕は思う。健康にもよくないし、肌も荒れる。でも彼女の煙草を喫う姿は文句のつけようがないくらい魅力的だった。だから僕は何も言わなかった。ナイフで切り取ったような薄い鋭角的な唇にフィルターがそっとくわえられ、火をつけるときに長いまつげが合歓の木の葉のようにゆっくりと美しく伏せられた。額に落ちた細い前髪が彼女の小さな動作にあわせて柔らかく揺れた。完璧だった。十五だったら恋におちている、と僕はあらためて思った。それも春の雪崩のような宿命的な恋に。そしてどうしていいかわからなくて、おそろしく不幸になっていただろう。ユキは僕に昔知っていたある女の子を思い出させた。僕が十三か十四の頃に好きになったひとりの女の子のことを。その当時に味わった切ない気持ちがふとよみがえった。

「コーヒーか何か飲む？」とユキが尋ねた。

僕は首を振った。「遅いからもう帰る」と僕は言った。

ユキは煙草を灰皿に置いて立ち上がり、僕をドアのところまで送ってくれた。

「煙草の火とストーブに気をつけて」と僕は言った。

「お父さんみたい」と彼女は言った。正確な指摘だった。

*

渋谷のアパートまで帰り、ソファに寝転んでビールを飲んだ。そして郵便受けに入っていた四通か五通の手紙をチェックした。どれもたいして大事ではない仕事の関係の手紙だった。読むのは全部後回しにして、封を切っただけでテーブルの上に放り出しておいた。体はぐったり疲れていて、何もしたくない。でもひどく気がたかぶっていて、うまく眠れそうになかった。長い一日だった、と僕は思った。長く長く引

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

き延ばされた一日、一日がかりでジェット・コースターに乗っていたような気がする。まだ体が揺れている。

結局いったい何日札幌にいたんだろうと僕は考えてみた。でも思い出せなかった。いろんなことが次々に起こった上に、睡眠時間が混乱していた。空は切れ目なく灰色だった。出来事と日付が錯綜していた。まずフロント係の女の子とデートした。昔の相棒に電話して、ドルフィン・ホテルについて調べてもらった。羊男と会って話をした。映画館に入ってキキと五反田君の出る映画を見た。十三歳の綺麗な女の子と二人でビーチ・ボーイズを合唱した。そして東京に戻ってきた。全部で何日だ？ 数えられなかった。

全ては明日だ、と僕は思った。明日考えられることは、明日考える。

僕は台所に行ってグラスにウィスキーを注いで、何も入れずにそのまま飲んだ。そして半分残っていたクラッカーを何枚か食べた。クラッカーは僕の頭みたいに少し湿気ていた。懐かしきモダネアーズが懐かしきトミー・ドーシーの歌を歌った古いレコードを小さな音でかけた。僕の頭みたいに少し時代遅れだった。そしてノイズも入っていた。でも誰にも迷惑はかけない。それなりに完結している。何処にも行かない。僕の頭みたいに。

どうしたっていうのよ、と僕の頭の中でキキが言った。

カメラがぐるりと回転した。五反田君の端正な指が彼女の背中を優しく這っていた。まるでそこに隠された水路を探るかのように。

どうしたっていうんだろうな、キキ？　僕はたしかにかなり混乱している。僕は昔ほど自分に自信が持てない。愛と中古のスバルとは別のものだ。そうだろうか？　僕は五反田君の端正な指に嫉妬している。ユキはちゃんと煙草の火を消しただろうか？　ちゃんとガス・ストーブのスイッチを切っただろうか？

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

お父さんみたい。まったく。自分に自信が持てない。そして僕はこの高度資本主義社会の象の墓場みたいなところでこんな風にぶつぶつ独り言を言いながら朽ち果てていくのだろうか？

でも全ては明日だ。

僕は歯を磨き、パジャマに着替え、それからグラスに残っていたウィスキーを飲み干した。ベッドに入ろうとしていた時に電話のベルが鳴った。僕はしばらく部屋の真ん中に立って電話機をじっと眺めていたが、結局それを取った。

「今ストーブ消した」とユキが言った。「煙草の火の始末もした。それでいいでしょう？　安心した？」

「それでいい」と僕は言った。

「おやすみなさい」と彼女が言った。

「おやすみ」と僕は言った。

「ねえ」とユキが言った。そして少し間を置いた。「あなた札幌のあのホテルで羊の毛皮かぶった人を見たでしょう？」

僕はひびの入ったダチョウの卵を温めるみたいな格好で電話機を胸に抱えてベッドに腰を下ろした。

「私にはわかるのよ。あなたがあれ見たっていうことが。ずっと黙ってたけど、わかるの。最初からちゃんとわかってたの」

「君は羊男に会ったの？」と僕は聞いてみた。

「んんん」とユキは曖昧に言って、コンと舌を鳴らした。「でもそのことはまた今度ね。今度会った時ゆっくりと話す。今日はもう眠い」

そして彼女はがちゃんと電話を切った。

こめかみが痛んだ。僕は台所に行ってまたウィスキーを飲んだ。僕の体はどうしようもなく揺れつづけ

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

ていた。ジェット・コースターは音を立ててまた動き始めていた。繋がっている、と羊男は言った。

ツナガッテイル、と思考がこだました。

いろんなものが少しずつ繋がり始めている。

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

17

台所で流し台にもたれかかってもう一杯ウィスキーを飲み、一体どうしたものかと考えた。ユキにもう一度こちらから電話をかけてみようかとも思った。どうして羊男のことを知ってるのか、と。でも僕はいささか疲れすぎていた。長い一日だったのだ。それに彼女は「また今度」と言って電話を切ったのだ。また今度を待つしかなかろう。それに、と僕は思った、だいたい僕は彼女のアパートの電話番号を知らないのだ。

僕はベッドに入って、寝つけぬままに枕元の電話を十分か十五分眺めていた。ひょっとしてまたユキから電話がかかってくるかもしれないという気がしたからだ。あるいはユキではない別の誰かから。そういう時、電話というのは置き去りにされた時限爆弾みたいに思える。いつ鳴り出すかは誰にもわからない。可能性だけが時を刻む。それによく見ると電話機というのは奇妙な形をしている。とても奇妙だ。普段は気づかないのだが、じっと見ていると、その立体性には不思議な切実さが感じられる。電話はひどく何かを話したがっているようにも見えるし、逆にそういう電話という形態に縛られていることを憎んでいるようにも見える。それは不器用な肉体を与えられた純粋概念のように見える。電話。

僕は電話局のことを思った。線が結びついている。この部屋からずっとどこまでもその線は結びついている。僕は原理的には誰にでも結びつくことができる。アンカレッジにだって電話をかけることができる。ドルフィン・ホテルにだって、別れた妻にだって電話をかけることができる。そこには無数の可能性

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

がある。結び目は電話局にある。コンピューターがその結び目を処理している。数字の配列によって結び目が転換し、コミュニケーションが成立する。電線やら地下ケーブルやら海底トンネルやら通信衛星やらを伝って、我々は繋がる。巨大なコンピューターがそれを統御している。しかしそれが方式としてどれほど優れていて精密なものであれ、我々が話そうという意志を持たなければ、それは何も結びつけることはできない。それに仮にそういう意志を持ったとしても、今回のようにもしこちらが相手の電話番号を知らなければ（聞き忘れたのだ）、結びつきようがない。また番号をちゃんと聞いていても、忘れたり、メモをなくしてしまうこともある。番号を覚えていても、ダイヤルを回し間違えることもある。そうすると、我々はどこにも結びつかない。我々は極めて不完全で無反省な種族なのだ。それからまだある。僕がもし仮にそれらの条件をクリアして、ユキに電話をかけることができたとしても、彼女は「今話したくないの。さよなら（がちゃん）」と電話を切ってしまうかもしれない。そうするとそこには会話というものは成立しない。それは一方的な感情の提示でしかない。

電話はその事実に苛立っているように見える。

彼女は（彼かもしれないが、ここでは僕は一応電話というものを女性形で捉えることにする）自分が純粋概念として自立していないことに苛立っているのだ。コミュニケーションが不確定で不完全な意志を基盤としていることに腹をたてているのだ。それは彼女にとってあまりにも不完全であり、あまりにも偶発的であり、あまりにも受動的なのだ。

僕は枕の上に片肘をついてそのような電話の苛立ちをしばらく眺めていた。でもそれはどうしようもないことなのだ。僕のせいじゃない、と僕は電話に向かって言った。コミュニケーションというのはそういうものなのだ。不完全で偶発的で受動的なものなのだ。それを純粋概念として捉えるから彼女は苛立つのだ。僕が悪いんじゃない。たぶん彼女は何処に行ったって苛立つだろう。でも僕の部屋に属していること

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

いう、彼女の苛立ちは僕らは高められているかもしれない。そういう意味では少しは僕も責任を感じる。僕がその不完全性と偶発性と受動性を知らず知らずのうちに煽っているような気がしなくもない。足を引っ張っているのだ。

そのうち僕は別れた妻のことをふと思い出した。電話は何も言わずにじっと僕を非難していた。妻と同じように。僕は妻を愛していた。僕らはずいぶん幸せな時を送った。冗談も言い合った。何百回も性交した。いろんな場所に旅行もした。でも時々、妻はじっとこんな風に僕を非難した。夜中に、静かに、じっと。彼女は僕の不完全性と偶発性と受動性を非難した。彼女は苛立っていた。僕らはうまくやっていた。でも彼女が求めているもの、彼女が頭に描いているもの、と僕の存在の間には決定的な差があった。妻はコミュニケーションの自立性のようなものを求めていた。コミュニケーションが染みひとつない白旗を掲げて人々を輝かしい無血革命へと先導していくようなシーンを。完全性が不完全性を呑み込んで治癒してしまうような状況を。そういうのが彼女にとっての愛だった。僕にとってはもちろんそうではなかった。僕にとっての愛とは不器用な肉体を与えられた純粋な概念で、それは地下ケーブルやら電線やらをぐしゃぐしゃと通ってやっとの思いでどこかと結びついているものだった。すごく不完全なものなのだ。ときどき混線もする。番号もわからなくなる。間違い電話がかかってくることもある。でもそれは僕のせいではない。我々がこの肉体の中に存在している限り、永遠にそうなのだ。原理的にそうなのだ。僕は彼女にそう説明した。何度も何度も。

でも彼女はある日出ていった。

あるいは僕がその不完全性を煽って、助長したのかもしれない。

僕は電話を見ながら、妻と交わった時のことを思い出した。でも出ていくまでの最後の三ヵ月ばかり、彼女は僕と一度も寝てくれなかった。他の男と寝ていたからだ。僕はその時は彼女が他の誰かと寝ている

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

なんてまったく知らなかったのだけど。
「ええ、悪いんだけど。他のところで他の人と寝てきて。怒らないから」と彼女は言った。僕は冗談だと思った。でも彼女は本気だった。他の女と別に寝たくない、と僕は言った。だって本当に寝たくなんかなかったのだ。「でも他の人と寝てきてほしいの」と彼女は言った。そしてこれからのことをおたがいもう一度考え直してみましょうよ、と。
結局僕は誰とも寝たりはしなかった。僕は性的に潔癖な人間とも言えないけれど、ちょっと考え直すために女と寝たりはしない。誰かと寝たいから寝るのだ。
それからしばらくして彼女は家を出ていった。もし僕があの時言われたようにどこかで他の女の子と寝ていたら、妻は出ていかなかったのだろうか？　彼女はそうすることによって僕との間のコミュニケーションをいささかなりとも自立させようと考えていたのだろうか？　でもそれはあまりにも馬鹿気ている。僕はその時他の女となんか寝たくなんかなかったのだから。でも彼女が何を考えていたかは僕にはよくわからない。彼女はそれについては具体的に何も話さなかったからだ。離婚したあとでも、何も話さなかった。ごく象徴的にしか話さなかった。彼女は大事なことについてはいつも象徴的な話し方をした。
高速道路のうなりは一時を過ぎてもまだ途切れなかった。時折バイクの激しい排気音が鳴り響いた。防音用の密閉ガラスを通してその音はくぐもっていたが、でもその存在感は重く濃密だった。それはそこに存在し、僕の人生に直接していた。僕を地表のある部分にしっかりと規定していた。
電話を眺めるのに飽きると、僕は目を閉じた。
目を閉じると待ち構えていたように無力感が音もなくその空白を満たした。とても手際良く、素早く。
それからゆっくりと眠りがやってきた。

*

朝食を終えると僕は住所録を繰って知り合いの芸能関係のエージェントのような仕事をしている男のところへ電話をかけた。僕は雑誌のインタビューの仕事をしている関係で、彼とはこれまでに何度か関わりを持ったことがあった。朝の十時だったので、彼はもちろん寝ていた。僕は起こしてしまった詫びを言い、そして五反田君の連絡先が知りたいのだと言った。彼は少しぶつぶつと文句を言っていたが、それでも五反田君の所属するプロダクションの電話番号を教えてくれた。中堅のプロダクションだった。僕はその番号を回してみた。そして担当のマネージャーが出ると、雑誌の名前を出して、五反田君と連絡をとりたいのだが、と言った。取材ですか、と相手は訊いた。正確にはそうではない、と僕は答えた。じゃあ何ですか、と相手は訊いた。まあ正当な疑問だった。個人的な話があるのだ、と僕は言った。どのような個人的な話なのか、と相手は訊いた。僕らは中学校の同級生だったのだ、そして彼とどうしても連絡をとりたいことがあるのだ、と僕は言った。名前を聞かせてくれ、と相手は言った。僕は名前を告げた。彼は名前をメモした。大事なことなのだ、と僕は言った。私の方から伝えてあげますよ、と相手は言った。直接話したい、と僕は言った。そういう人沢山いるんですよ、と彼は言った、中学校の同級生だけで何百人いるんですよ。

「大事なことなんです」と僕は言った。「だからもし今回このことで連絡をつけてもらえたら、こちらも仕事の上で便宜をはかれると思うんですけどね」

相手はそれについて少し考えていた。もちろん嘘だった。僕にはそんな埋め合わせをできるような力はない。僕の仕事はインタビューしてこいと言われた相手をインタビューするだけのことである。でも相手にはそんなことはわからない。わかったら問題になる。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

「取材じゃないですよね」と相手は言った。「取材だったら僕を通してもらわないと困りますよ。オフィシャルにしてもらわないと」

違う、百パーセント個人的なことだ、と僕は言った。

そっちの電話番号を教えてくれと彼は言った。僕は教えた。

「中学校の同級生ねえ」と彼は溜め息をついて言った。「わかりました。今日の夜か明日にでも電話させましょう。もちろん本人にその気があればということですけどね」

「もちろん」と僕は言った。

「忙しい人間だし、中学校の同級生と話したくないと思っているかもしれない。子供じゃないから無理に電話口にひっぱってこられないですからね」

「もちろん」

それから相手は欠伸をしながら電話を切った。仕方ない。まだ朝の十時なのだ。

昼前に車で青山の紀ノ国屋に行って買い物をした。駐車場で僕はサーブとメルセデスの間にスバルを停めた。まるで僕自身の分身のように肩身の狭い旧型のスバル。でも僕は紀ノ国屋で買い物するのが好きだ。馬鹿気た話だけど、ここの店のレタスがいちばん長持ちするのだ。どうしてかはわからない。でもそうなのだ。閉店後にレタスを集めて特殊な訓練をしているのかもしれない。もしそうだとしても僕は全然驚かない。高度資本主義社会ではいろんなことが可能なのだ。

留守番電話をセットしていったのだが、メッセージは何も入っていなかった。誰からも電話はかかっていなかった。僕はラジオから流れる「シャフトのテーマ」を聴きながら買ってきた野菜をひとつひとつきちんと包装して冷蔵庫にしまった。その男は誰だ？　シャフト！

CamScannerでスキャン

それから僕は渋谷の映画館に行ってまた「片想い」を見た。もうこれで四回目だった。でも見ないわけにはいかなかったのだ。僕は大体の時間を計算して映画館に入り、キキの出てくるシーンをぼんやりと待ちうけ、そのシーンに神経を集中した。細部までを見逃すまいとした。情景はいつもいつも同じだった。日曜日の朝。どこにでもあるのどかな日曜日の光。窓のブラインド。女の裸の背中。そこを這う男の指。壁にはル・コルビュジェの絵がかかっている。ベッドの枕もとにはカティー・サークの瓶が置いてある。グラスがふたつ、そして灰皿。セブン・スターの箱。部屋にはステレオ装置がある。花瓶もある。花瓶にはマーガレットみたいな花が差してある。床には服が脱ぎすてられている。本棚も見える。カメラがぐるりと回る。キキだ。僕は思わず目を閉じた。そして目を開く。五反田君がキキを抱いている。そっと優しく。「違うよ」と僕は思う。そして思わず口に出してしまう。四つばかり向こうの席に座っていた若い男が僕の方をちらっと見る。主人公の女の子がやってくる。彼女は髪をポニーテイルにしている。ヨットパーカとブルージーンズ。赤いアディダス・シューズ。手にケーキかクッキーかそういうものを持っている。彼女が部屋に入り、そして逃げ去る。五反田君は茫然とする。彼はベッドの上に起き上がり、眩しい光をのぞきこむみたいな目付きで、彼女の走り去ったあとの空間をじっと見つめている。キキが彼の肩に手を載せ、物憂げに言う。「どうしたっていうのよ?」

僕は映画館を出る。そしてあてもなく渋谷の街を歩き回った。

もう春休みに入っていたせいで、町は中学生や高校生でいっぱいだった。彼らは映画を見て、マクドナルドで宿命的なジャンク・フードを食べ、「ポパイ」だか「ホットドッグ・プレス」だか「オリーブ」だかが推薦する店で役にもたたない雑貨を買い、ゲーム・センターで小銭を使っていた。そこらじゅうの店先では大きな音で音楽がかかっていた。スティーヴィー・ワンダーやらホール&オーツやら、パチンコ屋のマーチやら、右翼の宣伝車の軍歌やら、なにやかやが渾然一体となってカオスのような喧騒を作り出して

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

いた。渋谷の駅前では選挙演説が行われていた。

僕はキキの背中を追う五反田君のほっそりとした端正な十本の指先を思い浮かべながら、街を歩いた。原宿まで歩き、それから千駄ヶ谷を抜けて神宮球場に行き、青山通りから墓地下に向かって歩き、根津美術館に向かい、「フィガロ」の前を通って、それからまた紀ノ国屋まで行った。そして仁丹ビルの前を過ぎて渋谷に戻った。結構な距離だった。渋谷に着いた時にはもう日は暮れていた。坂の上から見ると、色とりどりのネオンがともり始めた街の通りを、黒々としたコートに身を包んだ無表情なサラリーマンたちが暗流を遡る冷ややかな鮭の群れのように均一な速度で流れていた。

部屋に帰ると留守番電話の赤いランプが点いているのが見えた。僕は部屋の明かりを点け、コートを脱ぎ、冷蔵庫から缶ビールを出して一口飲んだ。そしてベッドに腰かけて機械の再生スイッチを押してみた。テープが巻き戻され、それからプレイバックされた。

「やあ、久し振り」と五反田君が言った。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

18

「やあ、久し振り」と五反田君が言った。よくとおる明快な声だった。早すぎもせず、遅すぎもせず、大きすぎもせず、小さすぎもせず。緊張もないが、かといってリラックスしすぎてもいない声だった。完璧な声。それが五反田君の声だということは一瞬にしてわかった。それは一度聞くとなかなか簡単には忘れられない種類の声だった。彼の笑顔や、清潔な歯ならびや、すらりとした鼻筋と同じように。それは簡単には忘れられないのだ。僕は五反田君の声のことなんてそれまで気にしたこともなかったし、思い出したこともなかったけれど、それでもその声はしんとした夜更けによく響く鐘をうち鳴らしたみたいに僕の頭の片隅にこびりついていた潜在的記憶を一瞬にしてありありと蘇らせた。たいしたものだな、とたしかに、と僕は思った。

「僕は今日の夜は家にいるからこちらに電話をかけて下さい。どうせ朝まで寝ないから」と彼は言って、電話番号を二度繰り返した。「じゃあまたその時に」と言って彼は電話を切った。局番からすると僕のアパートからそう遠くないはずだった。僕は彼の言った番号をメモしてから、それをゆっくりと回してみた。六回目のコールで留守番電話のテープが出てきた。ただいま留守にしておりますので、メッセージがありましたら吹き込んでくださいと女の声が言った。僕は自分の名前と電話番号と時刻を吹き込んだ。そして「僕はここにいる」と言った。ややこしい世の中だ。電話を切って台所に行き、セロリを洗い細く切ってマヨネーズをつけ、ビールを飲みながらそれを齧っているときに電話がかかってきた。ユキからだった。今

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

何してるの」と彼女は言った。台所でセロリを齧ってビールを飲んでると僕は言った。そういうのって惨めね、とユキは言った。それほどでもない、と僕は言った。もっと惨めなことは幾らでもある。彼女がまだよく知らないだけのことなのだ。

「君は今どこにいるの？」と僕は訊いてみた。

「まだ赤坂のアパート」と彼女は言った。「今からどこかにドライブに行かない？」

「悪いけど今日は駄目だ」と僕は言った。「今は仕事の大事な電話を待ってるんだ。また今度にしよう。ねえ、そうだ、昨日の話だけど、羊の皮をかぶった人を君は見たの？　その話が聞きたいんだ。それ、すごく大事なことなんだ」

「また今度」と彼女は言って思いきりがちゃんと電話を切った。

やれやれ、と僕は思った。そしてしばらく手に持った受話器を眺めていた。

＊

僕はセロリを齧ってしまってから、夕食に何を食べようかと考えた。スパゲッティにしよう、と僕は思った。にんにくを二粒太めに切ってオリーブ・オイルで炒める。フライパンを傾けて油を溜め、長い時間をかけてとろ火で炒める。それから赤唐辛子をまるごとそこにいれる。そしてそれもにんにくと一緒に炒める。苦みの出ないうちににんにくと唐辛子を取り出す。この取り出すタイミングがけっこう難しい。そしてハムを切ってそこに入れ、かりっとしかけるところまで炒める。そこに茹であがったスパゲッティを入れ、さっとからめてみじん切りにしたパセリを振る。それからさっぱりとしたモツァレラ・チーズとトマトのサラダ。悪くない。

でもスパゲッティの湯をわかしかけたところでまた電話のベルが鳴った。僕はガスを消して電話のとこ

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

ろに行き、受話器を取った。
「やあ、久し振り」と五反田君が言った。「懐かしいな。元気かい？」
「なんとか元気だよ」と僕は言った。
「マネージャーが言ってたけど、何か用事があるんだって？　まさか一緒にまた蛙の解剖がやりたいっていうんじゃないだろうね？」そして彼は楽しそうにくすくす笑った。
「いや、ちょっと聞きたいことがあってね。それで忙しいだろうとは思ったんだけど、電話してみたんだ。ちょっと変な話なんだ。実はね……」
「あのさ、今忙しいの？」と五反田君が訊いた。
「いや、別に忙しくはない。暇だから夕食を作ろうかと思っていたところだよ」
「それはちょうどいい。よかったら外で一緒に晩飯でも食べようよ。僕もちょうど誰か飯を食べる相手がいないかと探してたところなんだ。一人で黙って飯を食ってもあまり美味くないからね」
「でもいいのかな、急にこんな風に電話して。つまりさ、その……」
「遠慮することないだろう。どうせ毎日しかるべき時間がくれば腹が減るし、好むと好まざるとにかかわらず、飯は食べなきゃいけないんだ。君のために無理して飯を食べるわけじゃない。ゆっくり食事して酒でも飲んで二人で昔話をしようよ。もう随分昔の知り合いにも会ってないんだ。君さえ迷惑じゃなきゃ是非会いたいね。それとも迷惑かな？」
「まさか。話があるのは僕の方だよ」
「じゃあ今から君のところに迎えにいこう。何処だい、そこ？」
僕は住所とアパートの名前を言った。
「うん、それなら家の近くだ。二十分くらいで行けるだろう。すぐに出られるように準備しといてくれ

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

よ。今けっこう腹が減ってるんだ。長くは待てない」
そうすると言って僕は電話を切った。それから首をひねった。昔話？
僕と五反田君の間にどんな昔話があるのか、僕には全然理解できなかった。僕と彼とは当時とくに仲が良かったわけではなかったし、話だってそんなに多くはしなかった。彼は輝かしいクラスのエリートで、僕はどちらかといえば目立たない存在だった。彼が僕の名前を未だに覚えていたことすら僕には奇跡のように思えるのだ。昔話っていったい何だ？　話すべき何がある？　でもまあいずれにせよ、冷たく鼻であしらわれるよりは、当然のことながらこの方がずっと良かった。
僕は手速く髭を剃り、オレンジのストライプのシャツの上にカルヴァン・クラインのツイードのジャケットを着て、以前のガールフレンドが誕生日にプレゼントしてくれたアルマーニのニット・タイを結んだ。そして洗ったばかりのブルージーンズをはき、買って間もない真っ白なヤマハのテニス・シューズを用意した。それは僕のワードローブの中ではいちばんシックな格好だった。そして相手がこういうシックさを理解してくれればいいのだがと思った。僕はこれまでの人生で映画俳優と一緒に食事をしたことなんて一度もないのだ。そういう時にどんな服を着ていけばいいのかなんて見当もつかない。
ぴったり二十分で彼はやってきた。五十前後の礼儀正しい口のききかたをする運転手が僕の部屋のドア・ベルを押し、五反田君が下で待っていると言った。運転手とくればメルセデスだろうと思ったが、案の定メルセデスだった。それもすごく大きなメタリック・シルバーのメルセデスだった。モーターボートみたいに見える。ガラスは中が見えないようになっている。運転手がかしゃっという気持ちの良い音を立ててドアを開けてくれて、僕は中に入った。中には五反田君がいた。
「よう、懐かしいねえ」と彼はにっこりと微笑んで言った。握手したりしなかったので、僕はすごくほっとした。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

「久し振りだね」と僕は言った。

彼はごく普通のVネックのセーターの上に紺のウィンドブレーカーを羽織り、くたびれたクリーム色のコーデュロイのパンツをはいていた。靴は色の褪せたアシックスのジョギング・シューズだった。でも彼の着こなしは見事だった。何でもない服なのに、彼が着るととても上品で気持ち良く見えるのだ。彼は僕の服装をにこにこしながら見ていた。

「シックだね」と彼は言った。「趣味がいい」

「有り難う」と僕は言った。

「映画スターみたいだ」と彼は言った。皮肉ではなく、ただの冗談だった。僕が笑い、彼も笑った。それで少しふたりともリラックスした。それから五反田君は車の中を見回した。「どう、凄い車だろう？ これ、必要な時にプロダクションが貸してくれるんだ。運転手つきで。これなら事故も起こさないし、酔っぱらい運転もしないしね。安全なんだ。彼らにとっても、僕にとっても。どっちも幸せになれる」

「なるほど」と僕は言った。

「自分じゃこんなもの運転しない。僕自身はもっと小さい車が好きだな」

「ポルシェ？」と僕は訊いた。

「マセラティ」と彼は言った。

「僕はそれよりもう少し小さい車が好きだけど」と僕は言った。

「シビック？」と彼が訊いた。

「スバル」と僕は言った。

「スバル」と五反田君は言って、肯いた。「そういえば昔乗ってた。僕が最初に買った車だよ。もちろん経費なんかじゃなくて、自分の金で買った。最初の映画に出たギャラで中古を買ったんだ。僕はすごくそれ

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

が気に入ってた。それに乗って撮影所に行ったんだ。二本目で準主役がついた頃だよ。すぐに注意された。お前、スターになりたきゃスバルなんか乗るなって。それで買いかえた。そういう世界なんだ。でもいい車だった。実用的。安い。僕は好きだよ」

「僕も好きだ」と僕は言った。

「どうしてマセラティなんかに乗ってると思う？」

「わからないな」

「経費を使う必要があるからだよ」と彼はよくない秘密を打ち明けるように眉をひそめて言った。「マネージャーがもっともっと経費を使えっていうんだ。使いかたが足りないって。だから高い車を買うんだ。高い車を買うと経費がいっぱい落ちる。みんな幸せになる」

やれやれ、と僕は思った。みんな経費以外のことが考えられないのか？

「腹が減った」と彼は言って首を振った。「分厚いステーキが食べたい。つきあってくれるかな？」

まかせると僕が言うと、彼は運転手に行き先を告げた。運転手は黙って肯いた。それから五反田君は僕の顔を見て微笑み、「さて」と言った。「個人的な話になるけど、一人で夕食の支度をしているとなると、君はおそらく独身なんだろうな？」

「そうだよ」と僕は言った。「結婚して、離婚した」

「じゃあ、僕と一緒だ」と彼は言った。「結婚して、離婚した。それで慰謝料は払ってる？」

「払ってない」と僕は言った。

「一銭も？」

僕は首を振った。「受け取らないんだ」

「幸運な男だ」と彼は言った。そしてにっこりと笑った。「僕も慰謝料は払ってないけど、結婚のせいで一

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

文なしになっちゃった。僕の離婚の話は少しは知ってる？」

「漠然と」と僕は言った。彼はそれ以上は何も言わなかった。

彼は四年か五年前に人気女優と結婚して、二年ちょっとで離婚していた。週刊誌がそれについてはいろいろと書きまくった。例によって真相はよくわからない。でも結局は相手の女優の家族と彼との折り合いが悪かったということらしかった。よくあるケースだ。相手の女優には公私両面にわたってタフな親族がぎっしりとしがみついている。彼の方はどちらかといえば坊ちゃん育ちで、のんびりとひとりで生きてきたというタイプだ。上手くいくわけがない。

「不思議な話だ。この間まで一緒に理科の実験をしてたと思ったら、次に会ったときはどちらも離婚経験者ときてる。不思議だと思わない？」と彼はにこやかに言った。そしてひとさし指の先で瞼を軽く撫でた。「ところで、君の方はどうして離婚することになったの？」

「すごく簡単だよ。ある日女房が出ていったんだ」

「突然？」

「そう。何も言わずに。突然出ていった。予感すらなかった。家に帰ったらいなかった。何処かに買い物にでも行ったんだろうと僕は思っていた。それで晩飯を作って待っていた。でも朝になっても帰ってこなかった。一週間経っても、一ヵ月経っても帰ってこなかった。それから離婚請求の用紙が送られてきた」

彼はそのことについてしばらく考えていた。そして溜め息をついた。「こういう言い方は君を傷つけるかもしれないけど、でも君は僕より幸せだと思う」と彼は言った。

「どうして？」と僕は訊いた。

「僕の場合、女房は出ていかなかった。僕が叩き出されたんだ。文字通り。ある日叩き出された」そして彼はガラス越しにじっと遠くの方を見た。「ひどい話だよ。何から何まで計画的だったんだ。きちんと全

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

使い込まれてたんだ。君と同じさ。知らないうちにいろんなものの名義がどんどん書き換えられていた。あれは見事なものだったね。僕はそんなこと何ひとつ気がつかなかった。僕は彼女と同じ税理士に頼んでいて任せきりにしてたんだ。信用していた。実印だって、証書だって、株券だって、通帳だって、税金の申告に必要だから預けろと言われれば何の疑問も抱かずに預けた。僕はそういう細かいことは苦手だし、任せられるものなら任せたいものね。ところがそいつが向こうの親戚とつるんでいたんだな。気がついたら僕はきれいに一文なしになっていた。骨までしゃぶられたようなもんだ。そして僕は用の無くなった犬みたいに叩き出された。いい勉強になった」そして彼はまたにっこりと笑った。「それで僕も少し大人になった」

「もう三十四だよ。みんな嫌でも大人になる」と僕は言った。

「たしかにそうだ。そのとおりだよ。でも、人間って不思議だよ。一瞬で年をとるんだね。まったくの話。僕は昔は人間というものは一年一年順番に年をとっていくんだと思ってた」と五反田君は僕の顔をじっとのぞきこむようにして言った。「でもそうじゃない。人間は一瞬にして年をとるんだ」

＊

五反田君が連れていってくれたのは六本木のはずれの静かな一角にある見るからに高級そうなステーキ・ハウスだった。玄関にメルセデスを停めると、店の中からマネージャーとボーイが出てきて我々を迎えた。五反田君は一時間ほどしてから来てくれと運転手に言った。メルセデスはききわけの良い巨大な魚のように、音もなく夜の闇の中に消えていった。僕らは少し奥まった壁際の席に通された。店の中はファッショナブルな服装の客ばかりだったが、コーデュロイ・パンツとジョギング・シューズという格好の五

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

五反田君がいちばんシックに見えた。どうしてかはわからない。でもとにかく彼はどうしようもなく目立つのだ。我々が中に入っていくと客はみんな目を上げて彼の方をちらりと見た。そして二秒だけ見てから視線をもとに戻した。たぶんそれ以上長く見るのは失礼にあたることなのだろう。複雑な世界だ。

　僕らは席につくとまずスコッチの水割りを注文した。「別れた女房たちのために」と彼は言った。そして僕らはウィスキーを飲んだ。

「馬鹿気た話だけど」と彼は言った。「僕は彼女のことがまだ好きなんだ。あんなにひどい目にあったっていうのに、それでもまだ僕は彼女のことが好きだ。忘れられない。他の女が好きになれない」

　僕はクリスタルのタンブラーの中のものすごく上品な形に割られた氷を眺めながら肯いた。

「君はどう？」

「僕が別れた女房のことをどう思うかってこと？」と僕は訊いた。

「そう」

「わからない」と僕は正直に言った。「僕は彼女に行って欲しくなかった。でも彼女は行ってしまった。誰が悪いのかはわからない。でもそれは起こってしまったことだし、もう既成事実なんだ。そして僕は時間をかけてその事実に馴れようとしてきたんだ。それに馴れるという以外のことは何も考えないようにしてきた。だからわからない」

「うん」と彼は言った。「ねえ、こういう話は君にとって苦痛かな？」

「そんなことはない」と僕は言った。「これは事実なんだよ。事実を避けるわけにはいかない。だから苦痛というんじゃないね。よくわからない感覚だ」

　彼はぱちんと軽く指を鳴らした。「そう、それだよ。よくわからない感覚。まさにそのとおりだ。引力が変化しちゃったような感覚。苦痛ですらない」

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

ウェイターがやってきて、僕らはステーキとサラダを注文した。ふたりとも焼き具合はミディアム・レアだった。それから僕らは二杯目の水割りを注文した。
「そうだ」と彼は言った。「君は僕に何か用事があるんだったね。先にそれを聞いておこう。酔っぱらわないうちにね」
「ちょっと変な話なんだ」と僕は言った。
彼は気持ちの良い笑顔を僕に向けた。よく訓練されてはいるけれど、嫌味のない笑顔だった。
「変な話って好きだよ」と彼は言った。
「このあいだ君の出た映画を見た」と僕は言った。
「『片想い』」と彼は眉をしかめて、小さな声で言った。「ひどい映画。ひどい監督。ひどい脚本。いつもと同じだ。あの映画に関わった人間はみんなあのことは忘れたがっている」
「四回見た」と僕は言った。
彼は虚無をのぞきこむような目つきで僕を見た。「賭けてもいいけど、あの映画を四回見た人間なんてどこにもいないぜ。この銀河系宇宙のどこにも。何を賭けてもいい」
「知っている人間があの映画に出てたんだ」と僕は言った。それから「君以外に」とつけくわえた。
五反田君はひとさし指の先でこめかみを軽く押さえた。そして目を細めて僕を見た。
「誰？」
「名前は知らないんだ。日曜日の朝に君と寝ている役の女の子」
彼はウィスキーを一口飲み、それから何度か肯いた。「キキ」
「キキ」と僕は繰り返した。奇妙な名前だ。別の人物のように感じられる。
「それが彼女の名前だよ。少なくともだれもその名前しか知らない。我々の小さな奇妙な世界では彼女は

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

キキという名前で通っていたし、それで充分だった」

「彼女に連絡がつけられるだろうか？」

「駄目だね」と彼は言った。

「どうして？」

「最初から話そう。まずだいいちにキキは職業的な女優じゃない。だから話がややこしいんだ。俳優というものは有名であれ無名であれ、みんなきちんとどこかのプロダクションに属している。だからすぐに連絡がつけられる。大抵の連中はみんな電話の前に座って連絡を待ってる。でもキキはそうじゃない。どこにも属していない。彼女はたまたまあの映画に出ただけなんだ。完全なパートタイムなんだ」

「どうしてあの映画に出ることになったんだろう？」

「僕が推薦した」と彼はあっさりと言った。「僕がキキに映画に出ないかと言って、それで監督にキキを推薦したんだ」

「どうして？」

彼はウィスキーを一口飲んで、ちょっと間を求めた。「あの子には才能のようなものがある、だからだよ。何というかな、存在感。そういうのがあるんだ。感じるんだよ。凄い美人というのでもない。演技力がどうこうというんでもない。ただあの子がいるだけで画面がしまるんだよ。きちっと。そういうのってね、才能の一種なんだ。だから映画に出してみた。結果は良かったよ。みんなキキのことは気に入ってたね。自慢するわけじゃないけどね、あのシーンはよくできてたよ。リアルだった。そう思わない？」

「そうだな」と僕は言った。「リアルだ。たしかに」

「で、僕はあの子をそのまま映画の世界に入れようと思ったんだ。あの子ならかなりやれると思うから。でも駄目だった。消えちゃった。これが第一の問題点だ。彼女は消えてしまった。煙の如く、[illegible]

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

ごとく」

「消えた？」

「うん、文字通り消えちゃったんだ。一ヵ月くらい前のことなんだけど、オーディションに来なかったんだ。オーディションにさえ出れば、その新しい映画でかなりきちんとした役がつくように根回ししてセットしておいたんだ。そして前の日に電話をかけて、ちゃんと時間の打ち合わせまでしたんだ。時間に遅れないように来るんだよって。でも結局キキは姿を見せなかった。それでおしまい。それっきりさ。どこにも見当たらない」

彼は指を一本上げてウェイターを呼び、水割りのお代わりを二杯注文した。

「ひとつ質問があるんだけど」と五反田君は言った。「君はキキと寝たことあるのかな？」

「ある」と僕は言った。

「それで、うん、つまりさ、もし僕が彼女と寝たことあるって言ったら君は傷つくだろうか？」

「傷つかない」と僕は言った。

「良かった」と五反田君は安心したように言った。「僕は嘘をつくのが苦手なんだ。だからちゃんと言っておくよ。僕は何度か彼女と寝た。良い子だよ。ちょっと変わったところがあるけど、でも何かしら人に訴えかけるところがある。女優になればよかったんだ。いいところまで行ったかもしれない。残念だね」

「連絡先はわからないの？　本名とかそういうの？」

「駄目だね。調べようがない。誰も知らない。キキとしかわからない」

「映画会社の経理部に支払い伝票があるだろう？」と僕は言った。「ギャラの支払い伝票。そういうのって本名と住所が必要なはずだよ。源泉徴収があるから」

「もちろんそれも調べてみたさ。でも駄目なんだ。彼女はギャラを受け取ってないんだ。金を受け取って

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

だってこの世界でいろいろ綺麗な女は見てるけど、あれはその中でもけっこういい方だね。性格だっていいんだ。頭も悪くない。ちゃんとした話もできる。ところがキキの方はそうじゃないんだ。それほど美人っていうんでもない。うん、綺麗だよ。でもね、そこのクラブの子ってさ、みんなぱりっとした美人なんだよ。彼女はなんというか……」

「カジュアル」と僕は言った。

「そう、それだよ。カジュアルなんだ。実に。洋服だって普段着だし、話だってロクにしないし、化粧気もあまりないし。どうでもいいやって感じだし。でもさ、不思議なんだけどね、だんだん彼女の方に心が引かれてくるんだ。キキの方に。三人でやったあとで、みんなで床に座って酒を飲みながら、音楽を聞いたり、話をしたりした。久し振りに楽しかった。学生時代みたいで。そんな風にリラックスできるのって、ずっとなかったんだ。それから何度かその三人で寝た」

「いつごろのこと？」

「離婚して半年くらいあとのことだから、そうだな、一年半くらい前のことかなあ」と彼は言った。「その三人で寝たのはたぶん五回か六回くらいのことだったと思うよ。キキと二人だけで寝たことはないね。どうしてだろう？　寝てもよかったのにな」

「どうしてだろう？」と僕も聞いてみた。

彼はナイフとフォークを皿の上に置いて、またひとさし指をこめかみに軽くつけた。それが彼が物を考えるときの癖らしかった。チャーミング、と女の子なら言うだろう。

「あるいは怖かったからかもしれない」と五反田君は言った。

「怖い？」

「あの子と二人きりになるのがさ」と彼は言った。そしてナイフとフォークを取り上げた。「キキの中に

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

「ここのステーキ悪くないだろう」と彼は言った。
「悪くない」と僕は言った。「文句のつけようがない。良い店だ」
彼は肯いた。「でも月に六回も来れば飽きる」
「どうして六回も来るんだ？」
「馴染みだからだよ。僕が入ってきても誰も騒がない。従業員がひそひそ囁いたりもしない。客も有名人に馴れてるから、じろじろ見たりもしない。肉を切ってるときにサインを求められたりもしない。そういう店じゃないと落ち着いて食事もできないんだ。真剣な話」
「苦労の多い人生みたいだ」と僕は言った。「経費もつかわなくちゃならないしね」
「まったく」と彼は言った。「それでどこまで話したっけ？」
「コールガールを呼んだところまでだよ」
「そう」と言って五反田君はナプキンの端で口許を拭った。「で、ある日いつもの馴染みの女の子を呼んだんだ。ところが、その子はいなかった。それで別の女の子が二人来たんだ。どっちか選べってことなんだろうね。僕は上客だからね、サービスがいいんだ。そのうちの一人がキキだった。どうしようかと思ったけれど、選ぶのが面倒だったから、二人と寝た」
「ふん」と僕は言った。
「傷つかない？」
「大丈夫。高校時代なら傷ついたかもしれないけど」
「高校時代には僕だってそんなことしなかった」と五反田君は笑って言った。「まあとにかく、その二人と寝た。不思議な組み合わせだった。つまりね、もう一人の女の子の方はすごくゴージャスなんだ。びりっとくるくらいゴージャスなんだ。すごい美人で、体の隅々まで金がかかっている。これ嘘じゃないよ。僕

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

だってこの世界でいろいろ綺麗な女は見てるけど、あれはその中でもけっこういい方だね。性格だっていいんだ。頭も悪くない。ちゃんとした話もできる。ところがキキの方はそうじゃないんだ。それほど美人っていうんでもない。うん、綺麗だよ。でもね、そこのクラブの子ってさ、みんなぱりっとした美人なんだよ。彼女はなんというか……」

「カジュアル」と僕は言った。

「そう、それだよ。カジュアルなんだ。実に。洋服だって普段着だし、話だってロクにしないし、化粧気もあまりないし。どうでもいいやって感じだし。でもさ、不思議なんだけどね、だんだん彼女の方に心が引かれてくるんだ。キキの方に。三人でやったあとで、みんなで床に座って酒を飲みながら、音楽を聞いたり、話をしたりした。久し振りに楽しかった。学生時代みたいで。そんな風にリラックスできるのって、ずっとなかったんだ。それから何度かその三人で寝た」

「いつごろのこと？」

「離婚して半年くらいあとのことだから、そうだな、一年半くらい前のことかなあ」と彼は言った。「その三人で寝たのはたぶん五回か六回くらいのことだったと思うよ。キキと二人だけで寝たことはないね。どうしてだろう？　寝てもよかったのにな」

「どうしてだろう？」と僕も聞いてみた。

彼はナイフとフォークを皿の上に置いて、またひとさし指をこめかみに軽くつけた。それが彼が物を考えるときの癖らしかった。チャーミング、と女の子なら言うだろう。

「あるいは怖かったからかもしれない」と五反田君は言った。

「怖い？」

「あの子と二人きりになるのがさ」と彼は言った。そしてナイフとフォークを取り上げた。「キキの中に

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

はさ、何か人を刺激し、挑発するものがあるんだ。少なくとも僕はそういう感じを持ってたんだ。ごく漠然とだけどね。いや、挑発っていうんじゃないね。うまく言えない」

「示唆し、導く」と僕は言ってみた。

「うん、そうかも知れない。よくわからない。僕が感じたのは、すごく漠然としたものだからね。正確なことは何とも言えない。でも、とにかく彼女とふたりきりになるのは、何かしら気が進まなかった。本当は彼女の方にずっと心が引かれていたんだけれどね。僕の言ってることは何となくわかってもらえるかな？」

「わかるような気はする」

「要するにね、キキと二人で寝ても、僕はリラックスできなかったんじゃないかと思うんだ。彼女と関わると僕はもっと深いところに行ってしまいそうな気がしたんだ。なんとなく。でも僕はそういうのを求めていたわけじゃなかった。僕はただリラックスするために女の子と寝たかっただけなんだ。だからキキと二人では寝なかった。彼女のことはとても好きだったんだけどね」

それから我々はしばらく黙って食事をした。

「オーディションにキキが来なかった日に、僕はそのクラブに電話をかけてみた」としばらくあとで五反田君は思い出したように言った。「そしてキキを指名した。でも彼女はいなかった。彼女はいなくなったって言われた。消えたんだよ。ふっと。あるいは僕が電話してもキキはいないってことにしてあるのかもしれない。それはわからないね。確かめようのないことだから。でもいずれにせよ、彼女は僕の前から消えてしまった」

ウェイターがやってきて皿を下げ、食後にコーヒーをお持ちしましょうか、と訊いた。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

「コーヒーより酒がもっと飲みたいな」と五反田君は言った。「君はどう？」
「つきあうよ」と僕は言った。
四杯目の水割りが運ばれてきた。
「今日の昼間僕が何してたと思う？」と五反田君が言った。
わからない、と僕は言った。
「ずっと歯医者の助手をやってた。役作りのためさ。今TVの連続ドラマで歯医者の役やってるんだ。僕が歯医者で中野良子が眼科医なんだ。どっちの病院も同じ町内にあってね、幼な馴染みなんだけど、なかなか上手くむすびつかなくて……。そういう話。よくある話だけど。どうせTVドラマなんてみんなよくある話だ。見たことある？」
「見たことない」と僕は言った。「TVって見ないんだ。ニュースしか。ニュースだって週に二回くらいしか見ない」
「賢明だ」と五反田君はうなずきながら言った。「下らない番組だよ。自分が出てなきゃ僕だって絶対に見ない。でも人気はある。本当にすごく人気があるんだ。よくある話というのは大衆に支持されるんだ。毎週投書がいっぱいくる。全国の歯医者が手紙出してくるんだ。手付きが違うとか治療法が間違ってるとか、なんやらかんやらそういう細かい抗議してくるんだ。こういういい加減な番組を見ているとイライラするとかね。嫌なら見なければいいんだ。そう思わない？」
「そうかもしれない」と僕は言った。
「でもね、医者とか学校の先生の役となるといつも僕にお呼びがかかるんだ。医者の役なんて数限りなくやった。やってないのは肛門科医くらいだ。あれはTVうつりが悪いから。獣医だってやった。産婦人科医もやった。学校の先生も全教科やったよ。信じないかもしれないけど、家庭科の先生までやった。どう

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

してただろう？」

「信頼感が持てるんじゃないかな？」

五反田君は肯いた。「多分ね。多分そうだと思う。昔、屈折した中古車のセールスマンの役をやったことがある。片目が義眼で、やたら口が上手い役。僕はすごくその役が好きだった。やりがいもあった。うまくやれたと思う。でも駄目だった。投書がいっぱい来るんだ。僕にあんな役をやらせるのはひどい、可哀そうだってね。僕にこんな役をつけるんならもうその番組のスポンサーの商品は買わないっていうんだ。なんだっけな、あの時のスポンサーは？　ライオン歯磨とかそういうんだっけな、いやサンスターだっけな、忘れた。でもとにかく途中で僕の役は消えちゃったんだ。消滅した。けっこう重要な役だったんだけど、自然消滅した。面白い役だったのにね……。それ以来また医者・医者・先生・先生の連続だよ」

「複雑そうな人生だね」

「あるいは単純な人生」と彼は笑って言った。「で、まあ、今日はその歯医者のところで助手をしながら、医療技術の勉強をしていた。もう何度もそこには行ってるんだ。随分技術も向上した。本当だよ。先生も褒めてくれる。実を言うと単純な治療ぐらい出来るようになった。誰も僕だってわからない。マスクしてるしさ。でもね、僕と話すと患者はみんなすごくリラックスするんだ」

「信頼感」と僕は言った。

「うん」と五反田君は言った。「僕も自分でそう思う。そして、そういうことをしている時って、自分でもすごくリラックスしているんだ。僕は本当に医者とか先生とかに向いてたんじゃないだろうかと自分でもよく思う。現実にそういう職に就いてたら僕は幸せな人生を送っていられたんじゃないだろうかってね。それは別に不可能なことじゃなかったんだ。なろうと思えばなれたんだ」

「今は幸せじゃないの？」

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

「難しい問題だ」と五反田君は言った。そしてひとさし指の先を今度は額の真ん中につけた。「要するに信頼感の問題なんだ。君の言うように。自分で自分が信頼できるかどうかっていうこと。視聴者は僕を信頼してくれる。でもそれは虚像だ。ただのイメージだ。スイッチを切って映像が消えちゃえば、僕はゼロだ。ね？」

「うん」

「でももし僕が本当の医者なり先生なりをやっていたら、スイッチなんてない。僕はいつも僕だ」

「でも今だって演じている君というのはいつも存在している」

「時々ひどく疲れるんだ。そういうのに」と五反田君は言った。「すごく疲れる。頭痛がする。本当の自分というものがわからなくなる。どれが自分自身でどれがペルソナかがね。自分を見失うことがある。自分と自分の影の境界が見えなくなってくる」

「誰だって多かれ少なかれそうだよ。君だけじゃない」と僕は言った。

「もちろんそれはわかってるさ。誰だって時々自分を見失うことがある。ただ僕の場合そういう傾向が強すぎるんだ。なんていうのかな、致命的なんだ。昔からそうだよ。昔からずっと。正直言って君のことがうらやましかった」

「僕のことが？」と僕はびっくりして聞き返した。「よくわからないな。僕のいったいどこがうらやましいんだろう？ 見当もつかないね」

「何と言うかな、君はいつも一人で好きにやっているみたいに見えた。他人がどう評価するかとか、どう考えるかとか、そういうことはあまり気にしないで、自分のやりたいことをやりやすいようにやっているように見えた。きちんとした自分というものを確保しているように見えた」彼は水割りの入ったグラスを少し上にあげて、それを透かして見た。「ねえ、僕はいつも優等生だった。物心ついた時からずっとそうだ

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

ったんだ。成績もよかった。人気もあった。みかけも良かった。教師にも親にも信頼された。いつもクラスのリーダーだった。運動もできた。僕がバットを振ると、いつもロング・ヒットになった。どうしてかはわからない。でもちゃんとヒットになるんだ。そういう気持ちってわからないだろう?」

わからない、と僕は言った。

「だから野球の試合があると、みんな僕を呼びにきた。断るわけにはいかなかった。弁論大会があると、必ず僕が代表になった。先生が僕にやれと言った。断れない。やると優勝した。生徒会長の選挙があると出ないわけにはいかなかった。みんな僕が出ると思ってるんだ。テストでも僕が良い成績をとることをみんなが予想していた。授業中に難しい問題がでてくると先生は大抵僕をあてて質問した。遅刻ひとつしなかった。まるで僕自身なんてないようなものだった。ただ単にそうするのが僕にとって相応しいと思えることをやっていただけだ。高校時代もそうだった。同じようなものだった。そう、君とは高校が違ったんだな。君は公立の高校に行って、僕は私立の受験校に行ったんだ。僕は高校時代はサッカー部に入ってたんだ。受験校だったけど、サッカーはかなり強かった。もう少しで全国大会に出られるところだった。中学校の時と大体同じだよ。理想的な高校生だった。成績もいい、スポーツも万能、リーダーシップもある。近隣の女子校の女の子の憧れの的だった。恋人はいたよ。綺麗な子だったな。いつもサッカーの試合を応援しにきてくれて、それで知り合ったんだ。でもやらなかった。ペッティングだけ。彼女の家に遊びに行って、親がいなくなった間に手でやるんだ。急いで。でもそれで楽しかった。図書館でデートした。絵に描いたような高校生だよ。NHKの青春物みたい」

五反田君はウィスキーを一口飲み、頭を振った。

「大学に入ってちょっと様子が変わった。紛争があった。全共闘。当然僕がまたリーダー格になった。動きのあるところ必ず僕がリーダーになる。決まってるんだ。バリ封鎖やって、女と同棲して、マリファナ

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

吸って、ディープ・パープルを聴いた。あの頃、みんなそういうことやってた。機動隊が入って、少し留置所に入れられた。それからやることがなくなって、一緒に暮らしてた女に誘われて芝居をやってみた。最初は冗談だったんだけど、だんだんやってるうちに面白くなってきた。新入りだったけど、良い役も回してくれた。自分にそういう才能があることもわかってきた。何かを演じるというのが上手いんだね。自然なんだ。二年ほどやってると、けっこう人気が出てきた。その頃はけっこう無茶やったな。随分酒を飲んだし、いっぱい女と寝た。でもみんなその頃はそういうことしてたんだ。映画会社の人が来て、映画に出てみないかと言った。興味があったから出てみた。悪い役じゃなかった。傷つきやすい高校生の役だった。すぐに次の役が来た。TVの話も来た。あとはお決まりだよ。忙しくなって劇団を辞めた。辞めるときに当然一悶着あった。でも仕方なかったんだ。いつまでもアングラ芝居やってるわけにもいかないものな。僕はもっと大きな広い世界に興味があったんだ。そしてかくのごとしさ。医者と教師のスペシャリスト。広告には二本出ている。胃の薬と、インスタント・コーヒー。これがその大きな広い世界というわけだ」

五反田君は溜め息をついた。とてもチャーミングな溜め息のつきかただったが、それでも溜め息は溜め息だった。

「絵に描いたみたいな人生だと思わない？」

「それほど上手く絵に描けない人もいっぱいいる」と僕は言った。

「まあね」と彼は言った。「幸運だったことは認めるよ。でも考えてみたら、僕は何も選んでいないような気がする。そして夜中にふと目覚めてそう思うと、僕はたまらなく怖くなるんだ。僕という存在はいったい何処にあるんだろうって。僕という実体はどこにあるんだろう？　僕は次々に回ってくる役回りをただただ不足なく演じていただけじゃないかっていう気がする。僕は主体的になにひとつ選択していない」

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

僕には何とも言えなかった。何を言っても無駄だろうという気がした。

「僕は自分のことを喋りすぎるかな？」

それほどでもない、と僕は言った。「喋りたい時には喋ればいいんだ。言いふらしたりはしない」

「そんなこと心配してない」と五反田君は僕の目を見て言った。「そんなこと始めから心配してないよ。安心して。誰にでもこんな風に話しているわけじゃない。どうしてかはわからん。でもそうなんだ。君になら話せるんだ。僕は最初から君のことは信用している。というか、殆ど誰にも話してない。別れた女房とは話したよ。すごく正直に。僕らはよく話をした。僕らは上手く行ってたんだ。理解しあっていたし、愛しあってもいた。回りの奴らによってたかってぐしゃぐしゃにされちゃうまではね。僕と彼女と二人きりなら、今でもずっと上手く行ってたよ。でも彼女には精神的にすごく不安定なところがあったんだ。彼女はハードな家庭で育ったんだ。家族に頼り過ぎていた。自立してなかった。それで僕は……いや、話が飛びすぎるな。それはまた別の話になる。僕が言いたいのは君が相手だと安心して話せるってことなんだ。ただ、僕の話を聞いているのが迷惑じゃないかと思っただけなんだ」

迷惑じゃない、と僕は言った。

それから彼は理科の実験班の話をした。いつも緊張していたこと。きちんきちんと実験を上手く終わらせようとしていたこと。わかりの悪い女の子にもちゃんと説明をしてやらなくてはならなかったこと。その間僕がのんびりとマイ・ペースで作業をこなしているのがうらやましかったこと。でも中学校の理科の実験の時間に自分が何をやっていたかなんて、僕には全然思い出せなかった。だから何がうらやましいのか、全く理解できなかった。僕が覚えているのは彼がすごく手際良く作業をこなしていたことだけだった。そしてバーナーに火をつけたり、顕微鏡のセットをする動作がとても優雅だったこと。女の子たちはまるで奇跡を目前にしているみたいにじっと彼の一挙一動に視線を注いでいたこと。僕がのんびりやって

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

いたのは、彼が難しいことは全部やってくれたからという、ただそれだけの理由からである。

でも僕はそれについては何も言わなかった。ただ黙って彼の話を聞いていた。

少しすると彼の知り合いらしい四十前後の身なりの良い男がやってきて、彼の肩をぽんと叩き、よう、久し振りと言った。きらきらと眩しくて思わず目をそらせたくなるような見事なロレックスを腕にはめていた。彼は最初に五分の一秒くらいちらっと僕を見たが、僕の存在はそれっきり忘れられた。まるで玄関マットを見るときのような目付きだった。たとえアルマーニのネクタイをしめていても、僕が有名人じゃないということは彼には五分の一秒でわかるのだ。彼と五反田君とはしばらく雑談していた。「最近どう」とか、「いや、忙しくてね」とか、「またそのうちゴルフに行きたいね」とか、その手の話だった。それからロレックス男はぽんとまた五反田君の肩を叩いて「じゃあまたそのうち」と言って行ってしまった。

男が行ってしまうと五反田君は五ミリほど眉をしかめてから、指を二本上げてウェイターを呼び、勘定をしてくれと言った。そして勘定書きが運ばれて来ると何も見ずにそこにボールペンでサインした。

「遠慮しなくていいよ。どうせ経費なんだ」と彼は言った。「これは金でさえないんだ。経費なんだ」

有り難く御馳走になる、と僕は言った。

「御馳走じゃない。経費だ」と彼は表情のない声で言った。

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

19

五反田君と僕は、彼のメルセデスに乗って、麻布の裏通りにあるバーに酒を飲みに行った。そこのカウンターの端っこの方で僕らはカクテルを何杯かずつ飲んだ。五反田君は酒に強いらしく、どれだけ飲んでもまったく酔っぱらわなかった。口調にも表情にも変化らしい変化は見えなかった。彼は酒を飲みながらいろんな話をした。TV局の下らなさについて。ディレクターの頭の悪さについて。吐き気のするような下品なタレントたちについて。ニュース・ショーに出てくるインチキな評論家について。彼の話はなかなか面白かった。表現がいきいきしていて、観察は辛辣だった。

それから彼は僕の話を聞きたいと言った。君はどういう人生を辿ってきたのだろう、と。それで僕は自分の人生をかいつまんで話した。大学を出てから、友達と事務所を開いて広告とか編集のような仕事をしたこと。結婚し、離婚したこと。仕事は上手く行っていたのだが、ちょっとした事情があってそこを辞め、今はフリーのライターをしていること。たいした金にはならないが、どうせ金を使う暇もないこと……。かいつまんで話すと、それは物静かな人生のように感じられた。なんだか僕の人生ではないみたいだった。

そのうちにバーが少しずつ混んできて、話がしづらくなってきた。彼の顔をじろじろ見る人間も出てきた。「僕の家に行こう」と五反田君は言って立ちあがった。「すぐ近くだし、誰もいない。酒もある」

彼のマンションはそのバーから二、三回角を曲がったところにあった。彼はメルセデスの運転手にもう

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

帰っていいと言った。立派なマンションだった。エレベーターが二つあり、一つには専用の鍵が必要だった。

「このマンションは離婚して家を追い出された時に事務所が買ってくれたんだ」と彼は言った。「有名な映画俳優が女房に家を追い出されて一文なしで安アパートに住んでいちゃまずいからね。イメージが壊れる。もちろん僕が家賃を払ってる。形式としては僕が事務所からここを借りてるわけだね。家賃は経費で落ちる。ちょうどいい」

彼の部屋は最上階にあった。広々とした居間と部屋が二つ、それに台所がついていた。ベランダがあり、そこから東京タワーがひどくくっきりと見えた。家具の趣味は悪くなかった。シンプルで清潔で見るからに金がかかっていた。居間の床は板張りで、その上に大きさの違うペルシャ絨毯が何枚か敷かれていた。どれも上品な柄だった。ソファは大きく、固すぎもせず、柔らかすぎもしなかった。大きな観葉植物の鉢が幾つか効果的に配されていた。天井から下がったペンダント照明とテーブルの上のスタンドはイタリア・モダン風のものだった。装飾品は少なかった。サイドボードの上に明朝のものらしい皿が何枚か並んでいるだけだった。部屋はちりひとつなく片付いていた。たぶん通いのメイドが毎日掃除をしていくのだろう。テーブルの上には「GQ」と建築雑誌が載っていた。

「良い部屋だ」と僕は言った。

「撮影に使えそうだろう？」と彼は言った。

「そういう気もする」と僕はもう一度部屋の中を見回してから言った。

「インテリア・デザイナーに頼むとみんなこうなるんだ。撮影現場みたいになる。写真うつりが良い。時々壁を叩いてみるんだ。はりぼてじゃないかなっていう気がしてさ。何かこうね、生活の匂いってものがない。見ばえだけだ」

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

「じゃあ、君が生活の匂いを出せばいい」

「問題は生活がないことなんだ」と彼は無表情な声で言った。

彼はB&Oのプレイヤーにレコードを乗せて、針を降ろした。スピーカーは懐かしいJBLのP88だった。JBLが神経症的なスタディオ・モニターを世界にばらまく前の時代、まだスピーカーがまともな音で鳴っていた時代の素敵な製品だった。彼のかけたのはボブ・クーパーの古いLPだった。「何がいい？　何が飲みたい？」と彼が訊いた。

「何でもいい。君の飲むものを飲む」と僕は言った。

彼はキッチンに行って、ウォッカとトニック・ウォーターの瓶を何本かとアイスペールにいっぱいの氷と半分に切ったレモンを三つ、盆に載せて持ってきた。そして僕らはクールで清潔なウェスト・コースト・ジャズを聴きながらレモンをきかせたウォッカ・トニックを飲んだ。確かに生活の匂いというのが希薄だな、と僕は思った。何がどうというのではないのだが、何となく希薄なのだ。でもそういうものが希薄だからといって、とくに不自由はないような気がした。要は考え方の問題なのだ。僕にとってはそれはとても落ち着ける部屋だった。僕は気持ちの良いソファの上でリラックスして酒を飲んだ。

「いろんな可能性があった」と五反田君はグラスを顔の上にあげて天井のライトにすかせて見ながら言った。「なろうと思えば医者にだってなれた。大学の時は教職課程だって取った。一流の会社につとめることもできた。でも結局こうなった。こういう生活。変なものだ。目の前にカードがずらっと並んでた。どれを取ることもできた。どれを取っても上手く行くだろうと思っていた。自信はあった。だからかえって選べなかった」

「カードなんて見たこともなかった」と僕は正直に言った。彼は目を細めて僕の顔を見て、それからにっこり笑った。たぶん冗談だと思ったのだろう。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

彼はおかわりをグラスに注ぎレモンをぎゅっと搾って、皮をごみ箱に放って捨てた。「結婚でさえ成り行きだった。僕と女房は映画で共演して、なんとなく親しくなったんだ。ロケ先で一緒に酒を飲んだり、車を借りてドライブしたりしてね。映画が終わってからも、何度かデートした。まわりも僕らは似合いのカップルで、結婚するだろうと思っていた。結局流されるみたいに結婚した。君にはわからないと思うけど、ここは本当に狭い世界なんだ。路地の奥の長屋で暮らしているのと同じだよ。一度流れが作りだされると、それは全くのリアルな力を帯びてくるんだ。でも僕は彼女のことは本当に好きだった。あの子は僕がこの人生で手にしたものの中ではいちばんまともなもののひとつだ。結婚してから僕はそのことを認識した。そして僕はきちんと彼女を僕のものにしようとした。でも駄目だ。僕が真剣にそれを選びとろうとすると、それは逃げていくんだ。女にしても、役にしても。向こうから来るものなら僕は最高に上手くこなせる。でも自分から求めると、みんな僕の手の指の間からするっと逃げていくんだ」

僕は黙っていた。何も言えなかった。

「暗く考えているわけじゃない」と彼は言った。「僕は彼女のことがまだ好きなんだよ。それだけのことだ。ときどきこう考える。僕が俳優をやめて、彼女も女優をやめて、二人でのんびりと暮らせたらどんなに素敵だろうって。ファッショナブルなマンションもいらない。マセラティもいらない。何もいらない。まっとうな仕事と、小さなまっとうな家庭があればそれでいい。子供も欲しい。仕事の帰りに友達とどこかの飲み屋に寄って酒を飲んで愚痴を言う。そして家に帰ると彼女がいる。月賦でシビックかスバルを買う。そういう生活。よく考えてみれば僕が望んでいるのはそういう生活だったんだよ。彼女がいてくれさえしたら、それでいい。でも駄目なんだ。彼女はそれとは違うことを望んでいる。家族がみんな彼女に期待している。母親は典型的なステージ・ママで、父親は金の亡者だ。兄貴がマネージメントをやっている。弟はしょっちゅう問題を起こしていて、その始末に金がかかる。妹は歌手として売りだし中だ。とて

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

も抜けられない。そして彼女自身も三つか四つの歳からそういう価値観をしっかりと植えつけられているんだ。ずっと子役でこの世界で生きてきた。作られたイメージの中で生きている。僕や君とは全然違う。現実の世界というものが理解できてないんだ。でもとても心の綺麗な女だ。素晴らしく清らかなものを持っている。僕にはそれがわかる。でも駄目だ。どうしようもない。ねえ、知ってるかい、僕は先月彼女と寝たんだ」

「別れた奥さんと?」

「そう。異常だと思う?」

「別に異常だとは思わない」と僕は言った。

「この部屋に来たんだ。どうして来たのかはわからない。電話がかかってきて、遊びに行っていいかって言うんだ。もちろんいいって言った。そして二人で昔みたいに酒を飲んで、話をして、そして寝た。すごく素敵だったよ。彼女は僕のことがまだ好きだと言った。僕は君とやりなおせたらどんなに素敵だろうって言った。彼女は何も言わなかった。にこにこして話を聞いているだけだった。僕は平凡な家庭の話をした。さっき君に言ったようなやつさ。彼女はやはりにこにこして話を聞いていた。でも本当はそんなのぜんぜん聞いてないんだ。最初から聞いてないんだ。話していても手応えというものがないんだ。まるっきり無駄なんだよ。彼女はただ寂しくて誰かに抱かれたかっただけなんだよ。たまたまその相手が僕だったというだけのことなんだ。ひどい言い方かもしれないけど、本当にそうなんだよ。彼女は僕や君とは全然違うんだ。寂しいというのは彼女にとっては誰かに解消してもらう感情なんだ。誰かが解消してやればそれでいいんだ。それでおしまい。そこからどこにもいかない。でも僕はそうじゃない」

レコードが終わり、沈黙が訪れた。彼は針を上げ、しばらく何かを考えていた。

「ねえ、女を呼ばないか?」と五反田君は言った。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

「僕は何でも構わないよ。君の好きにすればいい」と僕は言った。
「金を払って女と寝たことはある？」と彼が訊いた。
ない、と僕は言った。
「どうして？」
「思いつきもしなかった」と僕は正直に答えた。
五反田君は肩をすぼめて、それについてしばらく考えていた。「でも今夜は僕につきあった方がいい」と彼は言った。「キキと一緒に来てた女の子を呼ぶよ。何か彼女についてわかるかもしれない」
「君にまかせる」と僕は言った。「でもまさかこれは経費じゃ落ちないだろう？」
彼は笑いながらグラスに氷を入れた。「信じないかもしれないけど、落ちるんだよ、それが。そういうシステムになってるんだ。パーティー・サービス会社という建前になっていて、ちゃんとクリーンなぴかぴかの領収書を切ってくれるんだ。調べが入っても簡単にはわからないような複雑な仕組みになっている。そして女と寝るのが見事に接待費になる。凄い世の中だ」
「高度資本主義社会」と僕は言った。

*

女の子が来るのを待っている時に、僕はふとキキの素敵な耳のことを思い出して、五反田君にキキの耳を見たことがあるかと聞いてみた。
「耳？」とよくわからない顔をして彼は僕を見た。「いや、見てないな。見たかもしれないが、覚えていない。耳がどうかしたの？」
なんでもない、と僕は言った。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

女の子がふたりやってきたのは十二時少し過ぎだった。一人は五反田君が「ゴージャス」と表現したキキとコンビを組んでいた女の子だった。彼女は確かにすごく「ゴージャス」だった。どこかでふと巡り合ってその時は口もきかなかったけれど、それでもずっと会ったことを覚えているというタイプの女の子だった。男の永遠の夢をかきたてるような、そんな女の子。けばけばしくない。品が良い。彼女はトレンチ・コートの下に緑のカシミアのセーターを着ていた。そしてごく普通のウールのスカート。装身具は小さくてシンプルなピアスだけだった。品の良い女子大の四年生という感じだった。

もう一人の女の子はクールな色合いのワンピースを着て眼鏡をかけていた。眼鏡をかけた娼婦がいるなんて僕は知らなかった。でもちゃんといるのだ。彼女はゴージャスというのではないけれど、やはりとても魅力的な子だった。手足がすらりとして、よく日焼けしていた。先週ずっとグアムに泳ぎに行ってたのと言った。髪は短く、きちんと髪どめでまとめられていた。彼女は銀のブレスレットをつけていた。動作がきびきびとして、肌が滑らかな肉食獣のように優雅にきゅっと締まっていた。

彼女たちを見ていると僕はふと高校のクラスを思い出した。程度の差こそあれ、どちらのタイプの女の子も一人ずつくらいちゃんとクラスにいるのだ。綺麗で品の良い女の子と、活動的でピリっとした感じの魅力的な女の子。まるで同窓会みたいだ、と僕は思った。同窓会が終ったあと、緊張がほぐれたところで気のあった同士で二次会で酒を飲んでいるといった雰囲気だった。馬鹿気た連想だが、本当にそういう気がしたのだ。五反田君がリラックスするという意味がなんとなくわかるような気がした。彼は以前にどちらとも寝たことがあるらしく、女の子たちも彼も気楽に挨拶した。「やあ」とか「元気?」とか、そういう感じだ。五反田君は僕を中学校の同級生で、今は物を書く仕事をしている男だと言って紹介した。よろし

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

く、と女の子たちがにっこりして言った。大丈夫、みんな友達よ、という感じの微笑みだった。現実の世界ではあまりお目にかかれない種類の微笑みだ。よろしく、と僕も言った。

僕らは床に座ったり、ソファに寝転んだりして、ブランディー・ソーダを飲み、ジョー・ジャクソンやシックやアラン・パーソンズ・プロジェクトのLPを聴きながらいろんな話をした。とてもリラックスした雰囲気だった。僕らもその雰囲気を楽しんでいたし、女の子たちも楽しんでいた。五反田君は眼鏡をかけた方の女の子を相手に歯医者の演技を見せてくれた。確かに上手かった。本物の歯医者より歯医者らしく見えた。才能だ。

五反田君は眼鏡をかけた女の子の隣に座っていた。彼はひそひそ声で何か話し、女の子がときどきくすくすと笑った。そのうちにゴージャスな方の女の子が僕の肩にそっともたれかかって僕の手を握った。とても素敵な匂いがした。胸が詰まって息苦しくなるような匂いだった。本当に同窓会みたいだ、と僕は思った。あの頃上手く言えなかったけど、本当はあなたのことが好きだったの。どうして私を誘ってくれなかったの？　男の、少年の、夢。イメージ。僕は彼女の肩を抱いた。彼女はそっと目を閉じて、鼻先で僕の耳の下を探った。それから僕の首に唇をつけ、柔らかく吸った。ふと気がつくと、五反田君ともう一人の女の子の姿はなかった。たぶんベッドルームに行ったのだろう。もうすこし明かりを暗くしない？　と彼女が言った。僕は壁の照明スイッチを探して切り、小さなテーブル・スタンドの光だけにした。気がつくとレコードのかわりにボブ・ディランのテープがかかっていた。曲は「イッツ・オール・オーヴァー・ナウ、ベイビー・ブルー」だった。

「ゆっくり脱がせて」と彼女が耳元で囁いた。僕は言われるままに彼女のセーターやらスカートやらブラウスやらストッキングやらをゆっくりと脱がせた。僕は脱がせたものを反射的に畳みそうになったが、そんな必要はないのだと思いなおしてやめた。彼女も僕の服を脱がせた。アルマーニのネクタイやら、リ

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

ヴァイスのブルージーンズやら、Tシャツやらを。そしてつるりとした小さなブラとパンティーだけになって、僕の前に立った。

「どう？」と彼女は微笑みながら僕に訊いた。

「素敵だよ」と僕は言った。彼女はとても綺麗な体をしていた。美しく、生命感に溢れ、清潔で、セクシーだった。

「どういう風に素敵？」と彼女は訊いた。「もっとくわしく表現して。うまく表現できたらすごく親切にしてあげる」

「昔を思い出す。高校生の頃」と僕は正直に言った。

彼女はしばらく不思議そうに目を細めて微笑みながら僕を見ていた。「あなたってちょっとユニークね」

「まずい答えだったかな？」

「全然」と彼女は言った。そして僕の隣に来て、僕が三十四年の人生で誰にもしてもらったことのないようなことをしてくれた。デリケートで大胆でちょっと簡単には思いつけないようなことを。でも誰かが思いついたのだ。僕は体の力を抜いて目を閉じ、流れに身を委ねた。それは僕がこれまでに経験したどんなセックスとも異なっていた。

「悪くないでしょう？」と彼女が僕の耳もとで囁いた。「悪くない」と僕は答えた。

それは素晴らしい音楽と同じように心を慰撫し、肉を優しくほぐし、時の感覚を麻痺させた。そこにあるものは洗練された親密さであり、空間と時間との穏やかな調和であり、限定された形での完璧なコミュニケーションだった。おまけにそれは経費で落ちるのだ。「悪くない」と僕は言った。ボブ・ディランは何かを歌っている。なんだっけ、これは？「ハード・レイン」だ。僕は彼女をそっと抱いた。彼女は力を抜いて僕の腕の中に入ってきた。ボブ・ディランを聴きながら経費でゴージャスな女の子を抱くというの

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

は何だか変なものだった。なつかしの一九六〇年代にはこんなこと考えられなかった。

これはただのイメージなんだ、と僕は思った。スイッチを押せば全ては消える。3Dの性的イメージ。セクシーなオーデコロンの匂いと、柔らかい肌の感触と、熱い吐息。

僕が定められたコースをきちんと辿って射精してしまうと、僕らは二人でバスルームに行って、体を洗った。そして大きなバスタオルだけという格好で居間に戻ってブランディーをちびちびと飲んでダイア・ストレイツやらなにやらのLPを聴いた。

物を書く仕事ってどんな物を書いているの、と彼女は訊いた。僕は仕事の内容をおおまかに説明した。面白そうな仕事じゃないと彼女は言った。書くものによる、と僕は言った。僕がやっているのはいわば文化的雪かきなんだ、と僕は言った。私のやってるのは官能的雪かき、と彼女は言った。そして笑った。ねえ、もう一度二人で雪かきしない、と彼女は言った。それから僕らは絨毯の上で交わった。今度はすごくシンプルに、そしてゆっくりと。でもどのようにシンプルな形態をとっていようとも、彼女はどうしたら僕を喜ばせられるかということをちゃんと承知していた。どうしてそんなことがわかるんだろう、と僕は不思議に思った。

大きな長い浴槽の中に二人で並んで寝そべりながら、僕は彼女にキキのことを尋ねてみた。

「キキ」と彼女は言った。「懐かしい名前ね。あなたキキのことを知ってるの？」

僕は肯いた。

彼女は子供みたいに唇を小さくすぼめ、ふうっと息をついた。「彼女はもういないわよ。あの人突然消えちゃったの。私たち、けっこう仲が良かったのよ。時々二人で一緒に買い物に行ったり、お酒飲んだりしたの。でも何も言わずに突然いなくなっちゃった。一ヵ月だか、二ヵ月だか前に。でも、そういうのって別に珍しいことじゃないのよ。こういう仕事って退職願い出す必要もないし、やめたければ黙ってすっ

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

とやめちゃうもの。彼女がいなくなったのは残念だわ。私と彼女とはわりに気があったから。でも、まあ仕方ないわよね。ガール・スカウトやってるわけじゃないんだから」彼女は長く綺麗な指で僕の下腹を撫で、そっとペニスに触れた。「キキと寝たことあるの？」

「昔しばらく一緒に暮らしてたんだ。四年くらい前に」

「四年前か」と言って彼女は微笑んだ。「ずいぶん昔の話みたい。四年前には私はまだおとなしい女子高校生だったわ」

「なんとかしてキキと会えないものかな？」と僕は彼女に聞いてみた。

「むずかしいわね。本当に何処に行ったかわかんないのよ。今も言ったようにただいなくなっちゃったの。まるで壁に吸い込まれたように。手掛かりひとつないし、探そうたって探しようもないんじゃないかしら。ねえ、あなたキキのことが今でも好きなの？」

僕は湯の中でゆっくりと体をのばし、天井を見上げた。僕は今でもキキのことが好きなのか？

「わからない。でもそういうこととは関係なく、僕はどうしても彼女に会わなくちゃいけないんだよ。キキが僕に会いたがっているような気がして仕方ないんだ。ずっと彼女の夢を見続けている」

「変ね」と彼女は僕の目を見て言った。「私も時々キキの夢を見るの」

「どんな夢？」

彼女は答えなかった。ちょっと考えるように微笑んだだけだった。お酒が飲みたいな、と彼女は言った。僕らは居間に戻って床に座って音楽を聴き、酒を飲んだ。彼女は僕の胸にもたれて、僕は彼女の裸の肩を抱いていた。五反田君と彼の相手の女の子は眠ってしまったのか、全然部屋から出てこなかった。

「ねえ、信じないかもしれないけど、あなたとこうしてるの楽しいわ。本当よ。仕事とか演技とかそういうのと関係なく楽しいの。嘘じゃないわよ、これ。信じてくれる？」と彼女は言った。

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

「信じるよ」と僕は言った。「僕もこうしているととても楽しい。リラックスする。なんだか同窓会みたいだ」

「あなたユニークよね」と彼女はくすくす笑いながら言った。

「キキのことなんだけど」と僕は言った。「誰も知らないのかな。彼女の住所とか、本名とか、そういうの？」

彼女はゆっくりと首を振った。「私たち、そういうこと殆ど話さないのよ。みんな勝手な名前つけて生きてるの。キキとかね。私はメイ。もうひとりの子はマミ。みんな片仮名の二文字なの。私生活のことって、みんな知らないし、そういう事は尋ねないの。相手が自分から言わない限り尋ねないの。礼儀として。仲は良いわよ、けっこう。一緒に遊びにいったりする。でも現実じゃないのよ、それ。相手がどういう人かなんてわかってないの。私はメイで、彼女はキキなの。私たちには現実の生活はないの。私たちはなんていうか、ただのイメージなの。空中に浮かんでいるの。ぽっ、と。名前なんて幻想につけられたただの記号なの。だから私たちもできるだけお互いのイメージを尊重するの。そういうのってわかるかしら？」

「わかるよ」と僕は言った。

「お客の中には私たちに同情する人もいるけど、そういうんじゃないのよ。お金のためにだけこういう事してるんじゃないのよ。私たちだって、こうしてる時、けっこう楽しんでるの。うちのクラブって厳密な会員制だからお客の質だっていいし。みんな私たちのことを楽しませてくれるし。私たちだって、そのイメージの世界を楽しんでいるのよ」

「楽しい雪かき」と僕は言った。

「そう、楽しい雪かき」と彼女は言った。そして僕の胸に唇をつけた。「時々雪のなげっこしたり」

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

いい子だった」

「メイ」と僕は言った。「昔本当にメイという名前の女の子がいた。僕の事務所の隣の歯医者で受付をやってた。北海道の農家で生まれた女の子だった。山羊のメイってみんな呼んでた。色が黒くてやせてた。いい子だった」

「山羊のメイ」と彼女は繰り返した。「あなたの名前は？」

「熊のプー」と僕は言った。

「童話みたい」と彼女は言った。「最高。山羊のメイと熊のプー」

「童話みたいだ」と僕も言った。

「キスして」とメイが言った。僕は彼女を抱いてキスした。素敵なキスだった。懐かしいキス。それから僕らは何杯めかわからなくなったブランディー・ソーダを飲み、ポリスのレコードを聴いた。ポリス、また下らないバンド名。どうしてポリスなんて名前をつけるんだろう？　でも僕がそれについて考えているうちに、彼女は僕の腕の中ですやすやと眠ってしまった。僕の腕の中で眠っているときのメイはもうゴージャスな女の子には見えなかった。彼女はどこにでもいるごく普通の傷つきやすい少女のように見えた。同窓会みたい、と僕はまた思った。時計はもう四時を回っていた。あたりはしんと静まりかえっていた。山羊のメイと熊のプー。ただのイメージ。経費で落とせる童話。ポリス。またまた奇妙な一日。繫がりそうで繫がらない。糸を辿っていくと、やがてぷつんと切れる。五反田君と話し合った。彼にある種の好意さえ抱くようになった。山羊のメイと知り合った。彼女と寝た。素敵だった。僕は熊のプーになった。官能的雪かき。でも何処にもたどりつかない。

僕が台所でコーヒーを作っていると、あとの三人が目を覚まして起きてきた。朝の六時半だった。メイはバスローブを着た。マミは五反田君のペイズリーのパジャマの上だけを着て、五反田君はその下をはいていた。僕はブルージーンズにTシャツという格好だった。僕らは四人で食卓についてコーヒーを飲ん

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

だ。パンも焼いて食べた。バターやらマーマレードやらを回した。FMの「バロック音楽をあなたに」がかかっていた。ヘンリー・パーセル。キャンプの朝みたいだった。

「キャンプの朝みたいだ」と僕は言った。

「かっこう」とメイが言った。

七時半に五反田君は電話でタクシーを呼んで女の子たちを帰した。帰る時、メイは僕にキスした。「もしうまくキキに会えたら私がよろしく言ってたって伝えてね」と彼女は言った。僕はそっと彼女に名刺を渡して、もし何かわかったら電話をかけてくれと言った。彼女は肯いて、そうすると言った。

「また機会があったら一緒に雪かきやろうね」とメイは片目をつぶって言った。

「雪かき？」と五反田君が言った。

二人きりになると、僕らはもう一杯コーヒーを飲んだ。僕がコーヒーを作った。僕はコーヒーを作るのが上手いのだ。静かに音もなく太陽が上り、東京タワーが眩しく輝いていた。それを見ていると、僕は昔のネスカフェの広告を思い出した。たしかあそこにも朝の東京タワーが出てきたはずだ。東京の朝はコーヒーで始まる……違うかもしれない。何でも良い。でもとにかく東京タワーが朝日に光って、僕らはコーヒーを飲んでいた。それで僕はふとネスカフェの広告を思い出したのだ。

まともな人々が会社や学校に向かって急いでいる時刻だった。でも僕らはそうではなかった。ゴージャスなプロの女の子と一晩楽しんで、ぼんやりとコーヒーを飲んでいた。そしてたぶんこれからぐっすりと眠る。好むと好まざるとにかかわらず、そして程度の差こそあれ、我々は——僕と五反田君とは——ごく普通の世間の生活様式からははみだしてしまっていた。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

「今日はこれからどうするんだい？」と五反田君が首を僕の方に向けて言った。

「家に帰って寝るよ」と僕は言った。「とくに予定は何もない」

「僕はこれから一眠りして、昼に人に会う。打ち合わせがあるんだ」と彼は言った。

それからしばらく、僕らは黙ってまた東京タワーを眺めていた。

「どう、楽しかった？」と五反田君が訊いた。

「楽しかったよ」と僕は言った。

「それで、どうだった？　キキのことはなにかわかった？」

僕は首を振った。「ただふっと消えちゃったんだ。君が言ったように。手掛かりもない。きちんとした名前さえわからない」

「僕も映画会社の連中にキキのことを少し聞いてみるよ」と彼は言った。「上手くいけば何かわかるかもしれない」

それから彼はちょっと唇を歪め、スプーンの柄でこめかみを掻いた。チャーミング、と女の子たちなら言うだろう。

「ねえ、ところで君はキキに会ってそれでどうするつもりなの？」と彼は訊いた。「よりを戻すとか、そういうことなのかな？　それとも懐かしいだけ？」

わからない、と僕は言った。

それは僕にもわからない。会ってどうするかは会ってから考えるしかないのだ。

コーヒーを飲んでしまうと五反田君は彼の曇りひとつない茶色のマセラティで僕を渋谷のアパートまで送ってくれた。僕はタクシーで帰ると言ったが、彼は近くだからと言って送り届けてくれた。

「そのうちにまた電話して誘っていいかな？」と彼は言った。「君と話ができて楽しかった。僕にはまと

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

ちに話をできる相手があまりいないんだ。君さえかまわなければ、近いうちにまた会いたいんだけれど、いいかな？」

「もちろん」と僕は言った。そしてステーキと酒と女の子の礼を言った。

彼は何も言わずにただ静かに首を振った。言葉がなくても彼の言わんとすることは十分よく理解できた。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

20

それから何日かはこともなく静かに過ぎた。毎日何本か仕事の関係の電話が入ったが、僕はずっと留守番電話を入れ放しにして応答しなかった。僕の人気はまだ衰えていないようだった。僕は食事を作り、渋谷の街に出て毎日一度「片想い」を見た。春休みだったので映画館は満員とはいかないまでもけっこう混んでいた。観客の殆どは高校生か中学生だった。まともな大人の観客なんて僕一人だった。彼らは主演の男の子や、アイドル歌手の女の子を見るために映画館にやってきていたのであって、映画の筋や質がどうかなんてどうでもいいことだった。彼らはお目当てのスターが出てくるとわあわあと声を限りにわめきたてた。野犬収容所みたいな騒ぎだった。お目当てのスターが出てこないときには、みんなぐしゃぐしゃ・ぱりぱりと音を立てて何かを食べたり、甲高い声で「やっっっっだあ」とか「てめえよう」だとか怒鳴りあっていた。映画館ごと焼き払ったらさっぱりするだろうなとふと思ったりもした。

「片想い」が始まると、僕はタイトルのクレジットを注意深く睨んだ。たしかにキキという名前が小さくはいっていた。

キキの出るシーンが終わると、僕は映画館を出てぶらぶらと街を歩いた。いつもだいたい同じコースだった。原宿から神宮球場、青山墓地、表参道、仁丹ビル、渋谷。途中でコーヒーを飲んで休むこともあった。地上には確実に春が来ていた。懐かしい春の匂いがした。地球は辛抱強く律儀に太陽の回りを公転しつづけているのだ。宇宙の神秘。僕は冬が終わって春が来る度にいつも宇宙の神秘について考える。どう

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

していつもこう同じ春の匂いがするのだろう、と。毎年毎年春になると必ずちゃんとこの匂いがするのだ。とても微妙なかすかな匂いなのだけれど、いつもぴたりと同じだ。

街には選挙ポスターが溢れていた。どれもこれも醜いポスターだった。選挙演説の車も走りまわっていた。何を言っているのかはよくわからない。ただうるさいだけだ。僕はキキのことを考えながら、そんな街を歩きつづけた。そしてそのうちに僕は、少しずつ自分の足が動きを取り戻し始めていることに気づいた。ステップが軽く、そして確かになり、それにつれて頭の動きにも以前にはない鋭さが感じられるようになった。僕はほんの少しずつではあるけれど一歩一歩前に進んでいるのだ。僕は目的を持ち、それによってごく自然にフットワークを身につけてきたのだ。悪くない徴候だった。踊るのだ、と僕は思った。あれこれと考えても仕方ない。とにかくきちんとステップを踏み、自分のシステムを維持すること。そしてこの流れが僕を次にどこに運んでいくのか注意深く目を注ぎつづけること。こっちの世界にいつづけること。

三月の末の四日か五日がそんな風にこともなく流れた。表面的には何の進展もなかった。僕は買い物をし、台所でささやかな食事を作り、映画館に通って「片想い」を見て、長い散歩をした。家に戻ると留守番電話をプレイバックしてみたが、入っているのは仕事の用件の電話ばかりだった。夜には一人で本を読み、酒を飲んだ。毎日が同じような繰り返しだった。そうこうするうちにエリオットの詩とカウント・ベイシーの演奏で有名な四月がやってきた。夜中に一人で酒を飲んでいると、山羊のメイとのセックスのことをふと思い出した。雪かき。それは奇妙に独立した記憶だった。何処にも結び付いていない。五反田君にも、キキにも、何にも結びついていない。それはすごくリアルな夢のように感じられた。細部までありありと思い出せるのに、ある意味では現実より鮮明なのに、結局は何にも結びついていないリアルな夢。でもそれは僕にはとても好ましい出来事であるように思えた。とても限定された形での心の触れ合い。二

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

人で力をあわせて幻想なりイメージなりを尊重すること。大丈夫よ、私たちみんなお友達なんだから的微笑。キャンプの朝。かっこう。

キキは五反田君とどんな風に寝たんだろうと僕は想像してみた。彼女もやはり、メイと同じように五反田君にすごくセクシーなサービスをしたのだろうか？　そういうサービスはあのクラブに属する女の子みんなが職業上の基本技術として心得ているノウハウなんだろうか、それともあれはあくまでメイの個人的なものなのだろうか？　僕にはわからない。五反田君に聞いてみるわけにもいかない。僕と暮らしている時、キキはセックスに対してはどちらかといえば受動的だった。僕が抱くと彼女はそれに温かく応えてはくれたけれど、決して自分の方から要求したり、積極的に何かをしたりということはなかった。僕に抱かれている時、キキは体の力を抜いて、とてもリラックスしてそれを楽しんでいるように僕には思えた。そして僕はそういうセックスに対して不満を抱いたことは一度もなかった。リラックスした彼女を抱いているのは素敵なことだったからだ。柔らかな体と、安らかな息づかいと、温かい性器と。僕にはそれで充分だった。だから彼女が誰かに——たとえば五反田君に——積極的なプロフェッショナルな性的サービスをするなんてことは、僕にはどうもうまく想像できなかった。でもあるいはそれは単に、僕に想像力が不足しているせいなのだろうか？

娼婦というものは私生活と営業用のセックスをどう使いわけるのだろう？　それは僕には見当もつかない問題だった。僕は五反田君にも言ったように、これまで娼婦と寝たことが一度もなかったからだ。キキとは寝た。キキは娼婦だった。でも僕はその時は言うまでもなく娼婦としてのキキと寝たのではなく、個人としてのキキと寝たのだ。それとは逆に、僕は娼婦としてのメイとは寝たが、個人としてのメイとは寝ていない。だからそのふたつのケースをつきあわせてみても、おそらく意味がないだろう。これはつきつめて考えれば考えるほど難しい問題だった。そもそもセックスというのはどこまでが精神的なもので、ど

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

こからが技術的なものなのだろう？　どこまでが実像でどこからが演技なのだろう？　充分な前戯は精神的なものなのだろうか、それとも技術的なものなのだろうか？　キキは本当に僕との性交を楽しんでいたのだろうか？　彼女はあの映画の中で本当に演技をしていたのだろうか？　それとも五反田君の指に背中を探られて本当に陶然としていたのだろうか？

実像とイメージが混乱していた。

たとえば五反田君。彼の医者としての姿はただのイメージに過ぎない。でも彼は本物の医者よりはずっと医者らしく見える。信頼感が持てる。

僕のイメージっていったい何だろう？　いや、そんなものが僕にあるのだろうか？

踊るんだよ、と羊男は言った。それも上手く踊るんだよ、みんなが感心するくらい。

みんなが感心するくらい、というからには僕にもやはりイメージというべきものはあるのだろう。そしてあるとすれば、みんなはその僕のイメージに感心するのだろうか？　まあそうだろうな、と僕は思った。いったい何処の誰が僕の実像に感心したりするだろう？

眠くなると、僕はグラスを流しで洗い、歯を磨いて眠った。目が覚めると翌日がやってきた。一日一日が早く過ぎる。もう四月だ。四月の始め。トルーマン・カポーティの文章のように繊細で、うつろいやすく、傷つきやすく、そして美しい四月のはじめの日々。僕は朝のうちに紀ノ国屋に行って、またよく調教された野菜を買った。それから缶ビールを一ダースとバーゲンのワインを三本買った。コーヒー豆も買った。サンドイッチにするためのスモーク・サーモンも買った。味噌と豆腐も買った。家に帰って留守番電話のテープをプレイバックしてみると、ユキからのメッセージが入っていた。彼女は面白くもなんともなさそうな声で十二時にもう一度電話してみるから家にいてね、と言った。そしてがちゃんと電話を切っ

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

た。がちゃんと電話を切るのは彼女にとっては一種のボディー・ランゲージのようなものなのだろう。時計は十一時二十分を指していた。僕は台所で熱くて濃いコーヒーを作り、それを飲みながら床に座ってエド・マクベインの87分署シリーズの新刊を読んだ。もう十年くらい前からそんなもの読むのはやめようと思ってはいるのだが、新刊が出るとつい買ってしまうのだ。惰性と呼んで済ませるには十年というのは余りにも長い歳月だ。十二時五分に電話がかかってきた。ユキだった。

「元気？」と彼女は言った。

「とても元気だよ」と僕は言った。

「今何してるの？」と彼女は言った。

「そろそろ昼飯を作ろうかなと思ってたんだ。ぱりっとした調教済みのレタスとスモーク・サーモンと剃刀の刃のように薄く切って氷水でさらした玉葱とホースラディッシュ・マスタードを使ってサンドイッチを作る。紀ノ国屋のバター・フレンチがスモーク・サーモンのサンドイッチにはよくあうんだ。うまくいくと神戸のデリカテッセン・サンドイッチ・スタンドのスモーク・サーモン・サンドイッチに近い味になる。うまくいかないこともある。しかし目標があり、試行錯誤があって物事は初めて成し遂げられる」

「馬鹿みたい」

「でも美味しい」と僕は言った。「嘘だと思ったら、蜜蜂に訊いてもいい。しろつめ草に訊いてもいい。本当に美味しいんだ」

「何よ、それ？　蜜蜂としろつめ草というのは？」

「たとえだよ」と僕は言った。

「やれやれ」とユキは溜め息まじりに言った。「あなた、もう少し大人になれば。もう三十四でしょう？　私から見てもちょっと馬鹿みたいよ」

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

「社会化しろということかな、君の言ってるのは？」
「ドライブに行きたい」と彼女は僕の質問を無視して言った。「今日の夕方はあいてる？」
「あいてると思う」と僕は少し考えてから言った。
「五時に赤坂のアパートに迎えにきてよ。場所は覚えてる？」
「覚えてる」と僕は言った。「ねえ君、あれからずっとそこにいるの、ひとりで？」
「うん。箱根になんて帰ったって何もないもの。なにしろ山のてっぺんにあるがらんとした家なの。そんなところに一人で帰りたくない。ここにいる方が面白いわ」
「お母さんはどうしたの？　まだ帰ってこないの？」
「知らないわよ、ママのことは。連絡ひとつないんだもの。まだカトマンズなんじゃないかしら？　だから言ったでしょう、あの人のことはもう全然あてにならないんだって。いつ帰ってくるかなんてわからないわよ」
「お金はどうしてるの？」
「お金は大丈夫。キャッシュ・カードが自由に使えるから。ママのやつをお財布から一枚抜いておいたの。あの人そんなの一枚なくなったって、全然気がつきもしないもの。私だって自衛しなきゃ死んじゃうわよ。あの人まともじゃないんだもの、それくらい当然よ。そう思うでしょ？」
僕は回答を避けてあいまいな返事をした。「ちゃんと御飯は食べてる？」と僕は聞いてみた。
「食べてるわよ。何だと思ってるのよ？　食べなきゃ死んじゃうでしょう？」
「ちゃんとしたものを食べてるかって訊いてるんだよ」
ユキは咳払いした。「ケンタッキー・フライド・チキンやらマクドナルドやらデイリー・クイーンやらそういうの。あとはホカホカ弁当……」

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

ジャンク・フード」

「五時に迎えにいくよ」と僕は言った。「何かまともなものを食べに行こう。それは食生活としてはあまりにもあまりにもひどすぎる。思春期の女の子はもう少しまともなものを食べるべきだ。そんな生活を長い間続けてたら大きくなって生理不順になる。何になろうともちろん君の勝手だとも言うこともできる。でも君が生理不順になるとまわりのみんなが迷惑する。まわりのことも考えなくちゃいけない」

「馬鹿みたい」と小さな声でユキが言った。

「ねえ、ところでもし嫌じゃなかったら君のその赤坂のマンションの電話番号を教えてくれないかな?」

「どうして?」

「そういう一方的なコミュニケーションというのはフェアじゃない。君は僕の電話番号を知ってる。僕は君の電話番号を知らない。君は気が向いたら僕に電話してくる、僕は気が向いても君に電話できない——不公平だ。それから今日みたいに会う約束して、いざとなって急に予定が変わったりしたときに連絡がつけられないとなると不便だ」

彼女はちょっと迷ったように鼻を小さく鳴らしたが、結局番号を教えてくれた。僕は手帳の住所録の五反田君の下の欄にそれをメモした。

「だけど簡単に予定を変えたりしないでよね」とユキは言った。「そういういい加減な相手はママ一人でもう充分なんだから」

「大丈夫だよ。僕は簡単に予定を変えたりはしない。嘘じゃないよ。もんしろ蝶に訊いてもいい、うまごやしに訊いてもいい。僕くらいきちんと約束を守る人間はそんなにいない。ただ世の中には突発事故というものがあるんだ。予想もしていないことが急に起こったりする。世界は広くて複雑だから、ある場合には僕の手に負えないことがもちあがるかもしれない。そういう時に君に連絡が取れないと、とても困る。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

僕の言ってることはわかるだろう？」

「突発事故」と彼女は言った。

「青天の霹靂」と僕は言った。

「起こらないといいわね」とユキは言った。

「まったく」と僕は言った。

でもそれはちゃんと起こった。

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

21

彼らは午後の三時過ぎにやってきた。二人連れだった。僕がシャワーを浴びている時にドア・ベルが鳴った。僕がバスローブを着て、ドアを開けるまでにドア・ベルは八回も鳴った。苛立ちが肌につきささってくるような鳴らし方だった。僕がドアを開けると、男が二人立っていた。一人は四十代半ばに、もう一人は僕と同じくらいの歳格好に見えた。年上の方が背が高く、鼻に傷あとがあった。まだ春の始めだというのによく日焼けしていた。漁師のような深い現実的な日焼けだった。グアムのビーチとか、スキー場で焼いたわけではない。髪は見るからに硬そうで、手がいやに大きかった。彼はグレーのオーバーコートを着ていた。若い方は背が低く、髪が長めだった。目が細く、鋭かった。一昔前の文学青年みたいに見えた。同人誌の集まりで額の髪をかきあげて「やはり三島だよ」と言ったりしそうな雰囲気がある。昔、大学のクラスにも何人かこういうのがいた。こちらは紺のステン・カラーのコートを着ていた。どちらもあまりファッショナブルとは言えない黒い革靴を履いていた。道に落ちていたらよけて通りたくなるような代物だった。安物で、しかもくたびれている。どちらの紳士も僕がとくに積極的に友達になりたいと思うようなタイプではなかった。「漁師」と「文学」と僕はとりあえず名前をつけた。

文学がコートのポケットから警察手帳を出して何も言わずに僕に見せた。映画みたい、と僕は思った。僕はそれまで警察手帳なんて見たこともなかったけれど、一見してそれは本物であるように感じられた。くたびれかたが革靴のくたびれかたによく似ていたからだ。でも彼がコートのポケットから出してさした

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

すと、なんだか同人誌を売りつけられているような気がした。
「赤坂署のものです」と文学が言った。
僕は肯いた。
漁師はオーバーコートのポケットに両手をつっこんだまま一言も口をきかなかった。ただ何気なく戸口に片足を置いていた。ドアが閉められないように。やれやれ、本当に映画みたいだ。
文学は手帳をポケットにしまい、それからひととおり僕の格好を点検した。髪は濡れたままで、バスローブしか着ていない。グリーンのレノマのバスローブ。もちろんライセンス生産だけど、背中を向けるとちゃんとレノマと書いてある。シャンプーはウェラ。人に恥じるところは何もない。だから僕は相手が何かを言い出すのをじっと待っていた。
「実はちょっと伺いたいことがあるんです」と文学が言った。「それで申し訳ありませんが、できましたら署まで御足労願えませんでしょうか」
「訊きたいって、何について？」と僕は質問してみた。
「それはまたあとで、その時にお話しします」と相手は言った。「ただお話を伺うのにいろいろと形式とか書類とかが必要なものですから、まあ出来れば署の方においでいただきたいということなんです」
「着替えてもいいんでしょうね？」と僕は訊いてみた。
「もちろんどうぞ」と文学は表情も変えずに言った。とても平板な声で、とても平板な表情だった。五反田君が刑事をやったらもっと上手くやれるだろうにな、と僕はふと思った。現実というのはそういうものなのだ。
僕が奥の部屋で着替えている間、二人はドアを開けたまま戸口に立っていた。僕はお馴染みのブルージーンズにグレーのセーターを着て、ツイードのジャケットを着た。髪を乾かしてとかし、財布と手帳とキ

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

イ・ホルダーをポケットに入れ、窓を閉め、ガスの元栓を閉め、電気を消し、留守番電話のスイッチをオンにした。そして紺のトップサイダーを履いた。二人は僕が靴を履くのを珍しそうにじっと見ていた。漁師はまだ戸口に片足を置いていた。

アパートの入り口から少し離れたところに目立たないようにパトカーが停まっていた。ごく普通のパトカーで、運転席に制服の警官が座っていた。漁師が先に乗り、それから僕が乗り、最後に文学が乗った。そういうのも映画の通りだった。文学がドアを閉めると、何も言わないうちに車は発車した。

道路は混んでいたが、パトカーはサイレンなんか鳴らさずにゆっくりと走った。乗り心地はタクシーと大体同じだった。メーターがないだけだった。走っている時間よりは停まっている時間の方が多く、おかげでまわりの車の運転手は僕の顔をみんなじろじろと覗きこんだ。誰も口をきかなかった。漁師の方は腕を組んでじっと前方を見ていた。文学の方は風景描写の練習でもしているみたいに難しい顔つきで窓の外を睨んでいた。いったいどんな描写をするんだろうと僕は思った。きっとわけのわからない言葉をつかった暗い描写なんだろう。「概念としての春は暗黒の潮流とともに激しくやってきた。その訪れは都市の間隙にこびりついた名も知れぬ人々の情念を揺すり起こし、それを不毛の流砂へと音もなく押し流していった」

僕はそういう文章を片っ端から添削していきたかった。「概念としての春」ってなんだ？「不毛の流砂」ってなんだ？ でもさすがに途中で馬鹿馬鹿しくなってやめた。渋谷の街は相変わらずちゃらちゃらとした道化服みたいな格好をした頭の悪そうな中学生でいっぱいだった。情念も流砂も何もなかった。

警察に着くと、僕は二階の取り調べ室に連れていかれた。小さな窓のある四畳半くらいの広さの部屋だった。窓からは殆ど光が入ってこなかった。隣の建物と近接しすぎているのだろう。部屋の中には机がひとつあり、事務椅子がふたつ、そしてビニール・シートの補助用の椅子がふたつ置いてあった。壁にはこ

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

れ以上シンプルには作れまいという感じの時計がかかっていた。それだけだった。他には何もない。カレンダーもかかってないし、絵もかかってない。書類棚もない。花瓶もない。標語もない。茶器セットもない。机と椅子と時計があるだけだった。机の上には灰皿とペン皿が置かれ、端の方に書類ばさみが積んであった。彼らは部屋に入るとコートを脱ぎ、畳んで補助椅子の上に置き、それから僕をスチール製の事務椅子に座らせた。そして僕の向かいに漁師が座った。文学はちょっと離れたところに立って、手帳をぱらぱらと繰っていた。しばらく二人とも何も言わなかった。僕も何も言わなかった。

「ところで、あんた昨日の夜、何してました？」とたっぷりと間を置いてから漁師が口を開いた。考えてみると漁師が口をきいたのはそれが初めてだった。

　昨日の夜、と僕は思った。昨日の夜はどんな夜だったろう？　昨日の夜と一昨日の夜の区別がつかない。一昨日の夜とその前日の夜の区別がつかない。不幸なことだが、事実なのだ。僕はしばらく黙って考えていた。思い出すのに時間がかかる。

「あんたね」と漁師が言った。そして咳払いした。「法律的なことなんたらかんたら言い出すとけっこう時間かかりますよ。ただ単に簡単なことを聞いてるだけなんですからね。昨日の夕方から今日の朝まで何してたか。簡単なことじゃないですか。答えてくれたって損はないでしょ？」

「だから今考えてるんですよ」と僕は言った。

「考えないと思い出せないの？　昨日のことですよ。去年の八月のことを尋ねてるわけじゃないです。考える余地もないでしょうが」と漁師が言った。

　だからそれが思い出せないんだよ、と言おうかと思ったが言わなかった。たぶんそういう記憶の一時的欠落なんて彼らには理解できないだろう。頭がおかしいと思われるのがおちだ。

「待ちますよ」と漁師は言った。「待つからゆっくりと思い出してちょうだい」そして彼は上着のポケット

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

からセブン・スターを出して、ビックのライターで火をつけた。「あんた、吸う？」
「いらない」と僕は言った。先端的都市生活者は煙草を吸わないと「ブルータス」に書いてあった。でも二人はそんなことにはお構いなく美味そうに煙草を吸った。漁師はセブン・スターを吸い、文学はショート・ホープを吸った。二人ともチェーン・スモーキングに近かった。彼らは「ブルータス」なんか読まないのだ。全然トレンディーじゃない人たちなのだ。
「五分待ちましょう」と文学が相変わらず表情のない平板な声で言った。「その間に何とかちゃんと思い出していただけませんでしょうかね。昨日の夜、何処で何してたか」
「だからね、この人インテリなんだよ」と漁師が文学の方を向いて言った。「調べたら前にも取り調べ受けてた。ちゃんと指紋が登録されてた。学生運動。公務執行妨害。書類送検。こういうのになれてるんだ。筋金入りなんだよ。警察が嫌いなんだ。法律にも詳しい。憲法で保障された国民の権利とかそういうことをちゃんと詳しく知ってる。もうすぐ弁護士を呼べって言い出すよ」
「でも我々は任意同行してもらって、ごく簡単な質問してるだけですよ」と文学がいかにも驚いたという風に漁師に言った。「何も逮捕するとかそういうことを言ってるわけじゃないですよ。よくわからないな。弁護士を呼ぶ理由なんてなにもないでしょう？　どうしてそういうややこしい考え方をするんだろう？　理解に苦しみますねえ」
「だからさ、私は思うんだけど、この人はただ単に警察が嫌いなんじゃないかな。警察と名のつくものがとにかく何でも生理的に嫌いなんだよ。パトカーから交通巡査まで。だからそんなものになんか死んでも協力したくないと思っているんだろうね」と漁師が言った。
「でも大丈夫ですよ。はやく答えれば、はやく家に帰れるんだから。実際的なものの考え方ができる人ならきっとちゃんと応えてくれますよ。それにね、昨日の夜何をしてたかっていう質問されただけで弁護士

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

呼んだって来やしませんよ。弁護士さんだって忙しいんだから。インテリならそれくらいのことわかりますよ」

「まあね」と漁師は言った。「そういうことをきちんとわかっていただければ、お互い時間が節約できるというものだわな。こっちだって忙しいし、この人だって忙しいだろう。長引くとお互い時間の無駄だし、それに疲れる。これが結構疲れるんだ」

かけあい漫才が続いているうちにその五分が過ぎた。

「さて」と漁師が言った。「どうでしょう、何か思い出していただけましたかね？」

思い出せなかったし、思い出そうという気も起きなかった。そのうちにたぶん思い出すだろう。でもとにかく今は思い出せない。記憶が欠落したまま戻ってこないのだ。「どういうことなのか、まず事情が知りたいですね」と僕は言った。「事情がわからないことには何も言えない。事情がわからないうちに、不利なことは言いたくない。それにまず事情を説明してから質問するのが人の礼儀だ。あなたたちのやってることは全然礼儀にかなってない」

「不利なことは言いたくない」と文学が文章を検証するように繰り返した。「礼儀にかなってないだって」

「だからインテリだって言っただろう」と漁師が言った。「ものの見方がひねくれているんだね。警察が嫌いなんだ。朝日新聞をとって『世界』を読んでるんだ」

「新聞なんかとってないし、『世界』も読んでない」と僕は言った。「とにかくどういうわけで僕がここに連れてこられたか教えてくれないうちは何も喋りたくないですね。こづきまわすんなら好きなだけこづきまわしていい。こっちはどうせ暇なんだ。時間なんかいくらでもある」

二人の刑事はちらっと顔を見合わせた。

「事情を教えたら質問に答えてもらえますかね？」と漁師が言った。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

「たぶん」と僕は言った。
「この人にはさりげないユーモアの感覚があるね」と文学が腕組みをして壁の上の方を見ながら言った。
「たぶん、だって」
漁師が鼻の上に真横についた傷を指の腹でさすった。刃物の傷みたいに見えた。けっこう深く、まわりの肉がひきつっていた。「あのですね」と彼は言った。「私ら、忙しいんですよ。それに真剣なんです。早くこれかたづけてしまいたいんです。私らだって好きでこれやってるわけじゃないです。できることなら夕方の六時には家に帰って、家族と一緒にゆっくりと飯を食べたい。私らあんたに別に恨みもないし、含むところもない。あんたが昨日の夜どこにいて何してたかそれを教えてくれたら、それ以上何も要求しない。やましいことがなかったら教えてまずいこともないでしょう？　それとも何かやましいところがあるから言えないの？」
僕はテーブルの上のガラスの灰皿をじっと眺めていた。
文学が手帳をばたんと叩いてからポケットにしまった。三十秒ばかり誰も何も言わなかった。漁師がまたセブン・スターをくわえて火をつけた。
「筋金入りなんだ」と漁師が言った。
「人権擁護委員会でも呼ぶ？」と文学が言った。
「あのね、こういうの人権でもなんでもないんだよ」と漁師が言った。「こういうのは市民の義務なんだよ。市民は警察の捜査にできる限り協力せにゃならんって、ちゃんと法律にも書いてあるんだよ。あんたの好きな法律にもちゃんとそう書いてあるんです。どうしてそんなに警察を毛嫌いするんですか？　あんただって警官に道を訊いたことくらいあるでしょう？　泥棒が入ったら警察に電話かけるでしょう？　もちつもたれつじゃないですか。どうしてこんな簡単なことで協力してくれないんです。本当に簡単な形式

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

的質問じゃないですか？　昨日の夜、あなたは何処で何してたか？　ややこしいことなしで早く済ませちゃいましょう。そうすれば我々も次に進める。あんたも家に帰れる。万事オーケーです。そう思いませんか？」

「まず、事情を知りたいですね」と僕は繰り返した。

文学がポケットからティッシュ・ペーパーを出し、大きな音を立てて洟をかんだ。漁師は机の引きだしからプラスティックの定規を出して、手のひらをぱたぱたと叩いた。

「あんた、わかってるのかな？」と文学がティッシュ・ペーパーを机の脇のごみ箱に捨てながら言った。「あんたは自分の立場をどんどん悪くしてるんですよ」

「なあ、今は一九七〇年じゃないんだよ。あんたとここで反権力ごっこしてる暇はないの」とうんざりしたように漁師が言った。「ああいう時代はね、終わったんだよ。それで、私もあんたもみんなこの社会にきちっと埋めこまれてるの。権力も反権力もないんだよ、もう。誰もそういう考え方はしないんだよ。大きな社会なんだ。波風を立てても、いいことなんか何もないのよ。システムがね、きちっとできちゃってるの。この社会が嫌ならじっと大地震でも待ってるんだね。穴でも掘って。でも今ここでつっぱったって何の得もないよ、お互い。消耗だよ。インテリならそういうことわかるでしょうが？」

「まあね、僕らもちょっと疲れていて、口のきき方がいささか荒っぽかったかもしらん。だとしたら悪かった。謝りますよ」と文学が手帳をまたぱらぱらと繰りながら言った。「でもね、僕らも疲れてるんだよ。働きっぱなしに働いてる。昨日の夜から殆ど寝てない。子供の顔をもう五日も見てない。ろくに飯も食ってない。あんたの気にいらないかもしれないけど、僕らだって僕らなりに社会の為に働いているんです。そこにあんたが出てきてつっぱらかって何も答えてくれない。そりゃあいらいらもしますよ。わかるでしょう？　あんたが自分の立場を悪くしてるというのはね、結局僕らも疲れるとどんどん機嫌が悪くなるっ

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

てことなんだよね。簡単に済ませられるはずのことも簡単に済まなくなってくる。物事がこじれてくる。もちろんあんたが頼れる法律はある。国民の権利もある。でもそういうのを運用するのは時間がかかる。時間がかかるあいだ、あんたは不愉快な目にあうかもしれない。法律というのはすごくこみいっていて、手間がかかるもんだからね、どうしても現場の運用次第というところはあるよね。理解してもらえるかな、そういうの？」

「誤解されると困るけど、別に威してるんじゃないよ」と漁師が言った。「忠告してるんだ、彼は。我々だってあんたを不快な目にあわせたいと思ってるわけじゃない」

僕は黙って灰皿を見ていた。灰皿には何のしるしもついていなかった。ただ古くて汚いガラスの灰皿だった。最初は透明だったのだろうが、今ではもうそうではなかった。白く濁って、隅にはヤニがこびりついていた。何年くらいこの机の上に載っているんだろう、と僕は考えてみた。十年は載ってるな、と僕は想像した。

漁師はしばらくプラスティックの定規をいじりまわしていた。

「いいでしょう」と彼はあきらめたように言った。「事情を説明しましょう。本当は我々にも質問する手順というものがあるんだが、あんたの方にも言い分があるみたいだから、今はそれに従いましょう。今のところは」

そして定規をテーブルの上に置くと、紙ばさみをひとつ取り、ぱらぱらとめくって封筒を手に取り、そこから大型の写真を出して僕の前に差し出すようにして置いた。僕はその三枚の写真を手にとって見た。白黒の実際的な写真だった。それが芸術的な目的で写されたものでないことは一目でわかった。写真には女が写っていた。まず最初は裸の背中を向けてベッドにうつぶせになっている写真だった。手脚が長く、尻がしまっていた。髪が扇のように広がって首から上を隠していた。脚は心持ち広げられ、性器が見え

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

た。手は横にだらんと伸ばされていた。女は眠っているように見えた。ベッドには特徴らしいものはなかった。

二枚目のはもっとリアルだった。女はあおむけにされていた。乳房と陰毛と顔が見えた。手と脚はきちんと気をつけの姿勢になっていた。女が死んでいることには説明の必要がなかった。目が見開き、口もとが妙にこわばって歪んでいた。メイだった。

僕は三枚目の写真を見た。顔をアップで写した写真だった。メイだった。間違いない。でも彼女はもうゴージャスではなかった。彼女は凍りついた無感動とでもいったようなものを身に纏っているだけだった。首のまわりにごしごしとこすったあとのような筋がかすかについていた。口の中がからからに乾いて、唾がうまく飲み込めなかった。手のひらの皮膚がむず痒くなった。メイ。彼女の素敵なセックス。僕らは朝までかけて楽しく雪かきをし、ダイア・ストレイツを聴き、そしてコーヒーを飲んだのだ。そして死んでしまった。今はもういない。僕は首を振りたかった。でも振らなかった。僕は三枚の写真を重ねて、何事もなかったように漁師に返した。二人は僕が写真を見ている様子をじっと観察していた。それで？という顔で僕は漁師の顔を見た。

「その女のことは御存じでしょうかね？」と漁師が言った。

僕は首を振った。「知りませんね」と僕は言った。もし僕が知っていると言えば、当然のことながら五反田君がこれに巻き込まれることになる。彼が僕とメイのリンクであるからだ。でも今ここで彼を巻き込むわけにはいかない。あるいは彼もこの事件にもう既に巻き込まれているかもしれない。それは僕にはわからない。もしそうだとしたら、そして五反田君が僕の名前を出し、僕がメイと寝たことを既に喋っていたとしたら、僕はかなりまずい立場に立たされることになる。僕は嘘の供述をしたことになるからだ。そうなるともう冗談事ではすまない。それは賭だった。でもいずれにせよ僕の方から五反田君の名前を持ち出

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

すわけにはいかないのだ。彼と僕とでは立場が違う。そんなことをしたら偉い騒ぎになる。週刊誌が飛んでくる。

「もう一度ようく見て」と漁師がゆっくりとして含みのある口調で言った。「すごく大事なことだから、もう一度よく見て、それで答えてちょうだい。どう、この女に見覚えある？　嘘だけはつかないで下さいね。私らはプロだから、誰かが嘘をつくと嘘だってちゃんとわかります。警察で嘘をつくと、これはひどいことになります。わかりました？」

僕はもう一度時間をかけて三枚の写真を見た。目を背けたかったが、背けるわけにはいかなかった。

「知らない」と僕は言った。「でも、死んでる」

「死んでる」と文学が文学的に繰り返した。「すごく死んでる。非常に死んでる。全く死んでる。見たらわかる。僕らそれ見ましたよ、現場で。いい女だった。それが裸で死んでた。いい女だったということは一目でわかった。でも死んでしまうとね、いい女かどうかってもうあまり関係ないね。裸なんてのも関係ないね。ただの死人だね。放っておきゃ腐っていく。皮膚が破れてめくれて腐った肉が出てくる。すごい臭いがする。虫がわいてくる。あんたそういうの見たことあります？」

ない、と僕は言った。

「僕ら何回か見たことありますよ。そこまでいくと、いい女だったかどうかもわからない。ただ肉が腐っているだけ。腐ったステーキ肉と同じ。あの臭い嗅ぐとちょっとしばらく飯食えないね。僕らはプロだけど、あの臭いだけは馴れることできないね。それからもっと時間がたつと、今度は骨だけになる。ここまでいくと臭いはない。何も彼も干からびてる。白くて、綺麗なもんです。骨は清潔でいいよね。で、まあ、とにかく、この女はそこまでは行ってなかった。骨までも行ってないし、腐ってもいない。ただ死んでるだけ。ただ硬くなってる。コチコチ。いい女であったこともよくわかる。生きている

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

うちにああいういい女としっぽりやれたらいいだろうね。でも裸を見ていても何も感じない。もう死んでるから。我々と死人というのは全然違うものなんですよ。死人というのはね、石の像と同じなんですよ。つまりね、こう分水嶺があって、そこを一歩でも越えるとゼロになる。完全なゼロになるんです。あとは焼かれるのを待つだけ。でもいい女だった。かわいそうにね。生きていればずっといい女でいられたのにね。誰かが殺したんだ。いけないことだよ。この女の子にも生きる権利があったんだ。まだ二十歳ちょっとだよ。だれかにストッキングで首を絞められた。なかなか急に死ねない。死ぬまでに時間がかかる。すごく苦しい。自分が死んでいくんだってことがわかる。どうして私がこんなところで死ななくちゃならないんだろう、と思う。もっと生きていたいと思う。酸素が少なくなって窒息していくのが感じられる。頭がぼうっとしてくる。小便をしてしまう。なんとか助かろうともがく。でも力が足りない。ゆっくり死ぬ。あまりいい死に方じゃないね。僕らは彼女にそういう死に方をさせた犯人を捕まえたいですね。捕まえなくちゃならんですよ。これは犯罪なんだ。それも非常に悪質な犯罪だ。力のあるものが暴力的に力の弱いものを殺しているんだ。それは許されないことです。そういうことを許していたら、社会の根底が揺らいでしまう。犯人を捕まえて、処罰する。それが我々の義務です。そうしないと、犯人はまた別の女を殺すかもしれない」

「この女は昨日の昼頃に赤坂の高級ホテルのダブル・ルームをリザーブして、五時に一人で入った」と漁師が言った。「あとで夫が来ると言った。名前と電話は偽物。金は先払いだった。六時にルーム・サービスで夕食を一人分とった。その時は一人だった。七時には盆が廊下に出してあった。そしてドント・ディスターブの札が出ていた。翌日の十二時がチェックアウト・タイムだった。十二時半にフロント係が電話したが、誰も出なかった。ドアにはまだドント・ディスターブの札がかかっていた。ノックしたが、返事はなかった。ホテルの従業員が合鍵で鍵を開けた。女が裸で死んでいた。一枚目の写真と同じ格好で。男

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

が来たところは誰も見てない。最上階にレストランがあって、みんなしょっちゅうエレベーターで行ったり来たりしている。出入りが激しい。だからここのホテルはよく密会につかわれている。足がつかない」

「ハンドバッグの中には手掛かりになるものは何もなかった」と文学は言った。「免許証もなし、手帳もなし、クレジット・カードもなし、キャッシュ・カードもなし、何もなし。服にはイニシャルがついてない。あるのは化粧道具と三万円ちょっと入った財布と、避妊ピルだけ。他には何もなし。いやひとつだけあった。財布のいちばん奥のちょっとわかりにくいところにね、名刺が一枚入っていた。あんたの名刺」

「本当に知らない？」と漁師が念を押すように言った。

僕は首を振った。僕だってできることなら警察に協力して、彼女を殺した犯人を捕まえてやりたかった。でも、僕はまず生きている人間のことを考えなくてはならないのだ。

「じゃあ、あんたが昨日何処で何をしてたかを教えてくれますか？　これで我々があんたにわざわざここに来てもらって事情聴取している理由がわかったでしょう？」と文学が言った。

「六時に家で一人で食事して、それから本を読んで、酒を何杯か飲んで、十二時前に寝た」と僕は言った。僕の記憶はやっと回復していた。たぶんメイの死体写真を見たせいだろう。

「その間誰かに会った？」と漁師が質問した。

「誰にも会ってない。ずっと一人だったから」と僕は言った。

「電話はどう？　誰かから電話はかかってこなかったですか？」

誰からもかかって来なかった、と僕は言った。「九時前後にひとつかかってきたけど、留守番電話をいれてたから出なかった。後で聞いてみたら仕事の電話だった」

「どうして家にいるのに留守番電話にしてたんだろう？」と漁師が訊いた。

「今休暇中なんで仕事の関係者と話がしたくなかったからですね」と僕は言った。

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

彼らがその電話の相手の名前と電話番号を聞きたがったので、僕は教えた。
「それで、一人で夕食食べてから、ずっと本を読んでたの？」と漁師が質問した。
「まず皿を片付けて、それから本を読んだ」
「どんな本？」
「信じないかもしれないけど、カフカの『審判』」
漁師は紙にカフカの「審判」と書いた。どういう字かわからなかったので文学が教えた。僕が予想したとおり彼はちゃんとカフカの「審判」のことを知っていた。
「そして、それを十二時まで読んでいた、と」と漁師は言った。「酒も飲んでいた」
「夕方にまずビール。それからブランディー」
「どれくらい飲みました？」
僕は思い出してみた。「缶ビールが二本。それからブランディーを瓶に四分の一くらい。缶詰の桃も食べましたね」
漁師はそれを全部紙にメモした。缶詰の桃も食べた。「他に思い出せることがあったら思い出してくれますか？　どんな細かいことでもいいから」
僕はしばらく考えてみたが、それ以上何も思い出せなかった。本当に細かい特徴のない夜だったのだ。僕は一人で静かに本を読んでいただけだった。そしてその特徴のない静かな夜にメイは誰かにストッキングで絞め殺されていた。思い出せない、と僕は言った。
「ねえ、真剣に考えた方がいいよ」と文学が咳払いしてから言った。「あんた、今すごく不利な立場にいるんだからね」
「いいですか、僕は何もしてないんだから、不利も何もない」と僕は言った。「僕はフリーランスで仕事を

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

しがない人間だから、名刺くらい仕事先で幾らでも配っている。どうしてその女の子が僕の名刺を持っていたのか見当もつかないけど。だからといって僕がその子を殺したことにはならないでしょう」

「全然関係のない名刺ならわざわざ財布の奥に大事に一枚だけ持っていたりしないでしょうが」と漁師が言った。「我々は二つの仮説を持ってる。まず第一にこの女はあんたがたの業界の関係者で、ホテルで男と取引をして、おそらくはその相手に殺された。相手の男がバッグの中の足がつきそうなものを洗いざらい持っていった。ただし名刺だけは財布のいちばん奥に入ってたんで取り忘れた。第二に、この女はプロだった。売春婦。高級売春。一流ホテルを使うやつ。この手合いは足がつきそうなものはまず身につけていない。それが何らかの理由で客に殺された。金は取られてないから、犯人は異常者かもしれない。この二つの線が考えられる？　どうです？」

僕は黙って少し首を傾けた。

「どちらにしても、あんたの名刺がキイになっている。なにしろ今のところ我々にはそれしか手掛かりがないんだから」と漁師がボールペンの頭でこんこんとテーブルを叩きながら言い含めるように言った。

「名刺なんて名前を印刷しただけの紙きれだ」と僕は言った。「証拠にも何にもならない。それだけじゃ何も立証できない」

「今のところはね」と漁師は言った。彼はずっとボールペンの頭でテーブルを叩き続けていた。「それだけじゃ何も立証できない。実にそのとおりです。今鑑識が部屋と遺留品を調べてます。遺体解剖もしている。明日になればもう少しいろんな事がはっきりします。繋がり具合がわかります。それまで待つしかない。待ちましょう。待っている間にあんたにもっといろいろと思い出してほしい。あるいは一晩かかるかもしらんが。徹底的にやります。じっくり時間をかければ、いろいろと思い出すことも出てくるかもしれない。もう一度きちんと最初からやりましょう。きちんと昨日一日のことを思い出してもらいます。朝

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

からひとつひとつ順番に」

僕は壁の時計を見た。時計はいかにも面白くなさそうに五時十分を指していた。僕はその時突然ユキとの約束を思い出した。

「電話を貸してくれませんか？」と僕は漁師に言った。「五時に人と会う約束してたんです。大事な約束だ。連絡しないとまずいことになる」

「女の子？」と漁師が訊いた。

「そう」と僕は答えた。

彼は背いて電話を僕の方に向けて差し出した。僕は手帳を出してユキの電話番号を調べてダイヤルを回した。三回目のコールで彼女が出た。

「用事ができて行けないって言うんでしょう？」とユキが先に言った。

「事故なんだよ」と僕は説明した。「僕のせいじゃない。悪いとは思うけどどうしようもないんだ。警察につれてこられて取り調べを受けてる。赤坂署にいる。説明すると長くなるんだけど、とにかく簡単には解放してもらえそうもない」

「警察？　何をしたのよ、いったい？」

「何もしてない。殺人事件の参考人として呼ばれてるんだ。巻き込まれてるんだよ」

「馬鹿みたい」とユキは無感動に言った。

「たしかに」と僕も認めた。

「ねえ、あなたが殺したわけじゃないんでしょう？」

「もちろん僕が殺したわけじゃない」と僕は言った。「僕はいろいろと失敗もするし間違いも犯すけれど、人を殺したりはしないよ。事情を聞かれてるだけだよ。いろいろ質問されてるんだ。でもとにかく君には

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

悪いことをした。そのうちにちゃんと埋め合わせするから」
「本当に馬鹿みたい」とユキは言った。そしてがちゃんと叩きつけるように電話を切った。
僕も受話器を置いて、電話を漁師に返した。二人は僕とユキの話にじっと耳を傾けていたが、特に得るところはなかったようだった。でももし僕が十三歳の女の子とデートの約束をしていたなんて知ったら、彼らはきっと僕に対する疑いを一層深めるだろうなと想像した。きっと異常性欲者か何かだと思うだろう。世間一般の三十四歳の男は十三の女の子とデートしたりはしない。

彼らはそれから僕の昨日一日の行動について微にいり細にわたって詳しく質問し、それを書類にした。便箋のような紙に厚紙の下敷きを敷いてボールペンできちんとした字で書きこんだ。何の意味もない馬鹿馬鹿しい書類だった。時間と労力の浪費だった。そこには僕が何を食べて、何処に行ったかが実に克明に記されていた。僕は夕食に食べたこんにゃくの煮物の作り方まで詳しく説明した。冗談半分でかつおぶしの削り方まで説明した。でも彼らには冗談は通じなかった。彼らはひとつひとつ丁寧にそれを書きとめた。かなり分厚い書類になった。本当に無意味な書類。六時半に彼らは近くの仕出し屋から弁当をとってくれた。あまり立派な弁当とは言えなかった。どちらかと言えばジャンク・フードに近かった。肉だんごとか、ポテト・サラダとか、ちくわの煮物とかが入っていた。味つけも材料もあまり感心できる代物ではなかった。油はしつこくて、味つけは濃かった。漬物は人工着色料を使っていた。でも漁師も文学も同じものをとても美味そうに食べていたので、僕も残さずに全部食べた。緊張して食事も喉を通らないんだろうと思われるのが癪だったからだ。

食事が終わると、文学が薄くて生温いお茶を持ってきてくれた。お茶を飲みながら二人はまた煙草を吸った。狭い部屋の中は煙でいっぱいになっていた。目が痛くなり、上着にまでニコチンの臭いが染み付いていた。お茶の時間が終わると、質問がまた始まった。限りのない無意味さの蓄積だった。「審判」をどの

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

あたりからどのあたりまで読んだかとか、何時頃にパジャマに着替えたかとか、そういうつまらないことだ。僕はカフカの小説のあらすじを漁師に説明してやったが、その内容はあまり彼の興味を引かなかったようだった。そのストーリーは彼にとってあまりにも日常的すぎたのかもしれない。フランツ・カフカの小説は果して二十一世紀まで生き残れるだろうか、とふと僕は心配になった。いずれにせよ、彼は「審判」のあらすじまで書類に書きつけた。どうしてそんなことをいちいち聞いて書類にしなくてはならないのか、僕には全然理解できなかった。実にフランツ・カフカ的だ。僕はだんだん馬鹿馬鹿しくなってうんざりしてきた。そして疲れてきた。頭が上手く働かなくなってきた。それはあまりにも瑣末で、あまりにも無意味だった。でも彼らは辛抱強くあらゆる事象の隙間をみつけてはそれについて質問し、それに対する僕の答えを用紙にこと細かに書きつけていった。時々字がわからなくて、漁師が文学に訊いた。彼らはそういう作業には全然うんざりしていないようだった。おそらく疲れてはいるのだろうが、決して手は抜かなかった。どんな細かいことにもどこかに穴がないかと耳を澄ませ、目を光らせていた。時々どちらかが外に出て、五、六分してから戻ってきた。彼らはタフな人々だった。

八時になると質問する係が漁師から文学に代わった。漁師はさすがに腕が疲れたらしく、立ったまま伸びをしたり手を振ったり首を回したりしていた。そしてまた煙草を吸った。文学も質問に入る前にまず一本煙草を吸った。換気の悪い部屋の中には、まるでウェザー・リポートのステージみたいに部屋じゅうに白い煙がたちこめていた。ジャンク・フードと煙草の煙。僕は外に出て思いきり深呼吸がしたかった。

便所に行きたいと僕は言った。ドアを出て右に行って突き当たって左、と文学が言った。僕はゆっくり小便して深呼吸して帰ってきた。便所で深呼吸するというのも変なものだったし、事実あまり気分の良いものではなかった。でも殺されたメイのことを思うと贅沢は言えなかった。少なくとも僕は生きているのだ。少なくとも僕は呼吸ができるのだ。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

便所から戻ると文学が質問を再開した。その夜僕に電話をかけてきた相手について彼は詳しく質問した。どんな関係なのか？　どんな仕事で関わったのか？　どんな用事があってかけてきたのか？　どうして折り返しすぐに電話しなかったのか？　どうしてそんなに長い休暇をとったのか？　それだけの経済的余裕はあるのか？　税金の申告はしているのか？　そんな様々な細かい事を訊いた。僕が答えると彼はそれを漁師と同じように時間をかけて綺麗な楷書で用紙に書き込んだ。そんな作業に本当に意味があると彼らが思っているのかどうか、僕には判断できなかった。そういうのは考えるまでもなく、彼らにとっては日常的な作業なのかもしれない。フランツ・カフカ的に。あるいは彼らは僕をぐったりさせて、それによって真実をひっぱりだそうとわざとこういう下らない事務作業を延々と続けているのかもしれなかった。そしてもしそうだとしたら、彼らは実にちゃんとその目的を達していた。僕はくたくたになって、うんざりして、質問されたことは全部ちゃんと答えるようになっていた。何でもいいから早く終わらせてしまいたかった。

　でも十一時になってもその作業は終わらなかった。終わる徴候すら見えなかった。十時に漁師が部屋を出て、十一時に戻って来た。仮眠を取ったらしく、目が少し赤くなっていた。彼は自分がいない間に書かれた書類をチェックした。そして文学と代わった。文学はコーヒーを三杯持ってきた。インスタント・コーヒーだった。おまけに砂糖とクリープまで入っていた。ジャンク・フード。

　僕はもううんざりだった。

　十一時半に疲れて、眠くて、もうこれ以上は何も喋れない、と僕は宣言した。

「弱ったな」と文学は机の上で指を組んでぽきぽきと乾いた音を立てながらいかにも弱ったように言った。「これすごく急いでるし、捜査にとって重要なことなんです。申し訳ないんですが、できることならこのまま頑張って何とか最後までやってしまいたいんですがね」

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

「こういう質問が重要だとはとても思えないんですがね」と僕は言った。「正直言って瑣末なことのように思える」

「しかし瑣末なことがあとになって結構役に立つんです。瑣末なことで事件が解決した例はいくつもあります。逆に瑣末なことをおろそかにして後悔した例も幾つかありますからね。何しろこれは殺人ですからね。人が一人死んでるんです。我々だって真剣なんです。悪いけど我慢して協力してください。正直言いましてね、やろうと思えば重要参考人としてあんたの拘置許可をとることもできるんです。でもそういうことするとお互い面倒が増える。そうでしょう？　いっぱい書類がいる。融通もきかなくなる。だからここはひとつ穏便にやりましょうや。協力してくれれば、そういうあらっぽい措置は取りません」

「眠いんなら、仮眠室で寝たらどうです？」と漁師が横から口を出した。「横になってぐっすり寝たらまた何か思い出すかもしれん」

僕は肯いた。どこでもいい。こんな煙っぽい部屋にいるよりはどこでもましだった。

漁師が僕をその仮眠室に連れていってくれた。陰気な廊下を歩き、もっと陰気な階段を降り、また廊下を歩いた。何もかもに陰惨さがしみついているような場所だった。彼の言う仮眠室というのは留置所のことだった。

「ここは僕には留置所のように見えますがね」と僕はとてもとても乾いた微笑みを浮かべて言った。「もし思い違いじゃなかったらということだけど」

「ここしかないんだ、申し訳ないけど」と漁師は言った。

「冗談じゃないよ。家に帰る」と僕は言った。「明日の朝、また来る」

「いや、鍵はかけないから」と漁師は言った。「ねえ、頼みますよ。今日一日だけ我慢してよ。留置所だって鍵をかけなきゃただの部屋でしょう」

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

僕はあれこれ押し問答するのがだんだん面倒臭くなってきた。もうどうでもいい、と僕は思った。たしかに留置所だって鍵をかけなきゃただの部屋なのだ。とにかく僕はひどく疲れていて、ひどく眠かった。誰ともうこれ以上話をしたくなかった。口をききたくなかった。僕は頭を振り、何も言わずに中に入って固いベッドに寝転んだ。懐かしい感触だった。湿ったマットレスと安物の毛布、便所の臭い。絶望感。
「鍵はかけないから」と漁師は言ってドアを閉めた。かちゃんというひどく冷たい音がした。鍵を掛けても掛けなくても、ちゃんと冷たい音がするのだ。

僕は溜め息をついて、毛布をかぶった。誰かが何処かで大きな鼾をかいているのが聞こえた。その音はすごく遠くから聞こえるようでもあり、近くのようでもあった。僕の知らないうちに地球がいくつもの行き来できない細かい絶望的な層に分かれていて、その近接した層のどこかからもれ聞こえてくるような感じの音だった。物哀しくて、手が届かなくて、そしてリアルだった。メイ、と僕は思った。そういえば、僕は昨日の夜君のことを思い出していたんだ。その時君はまだ生きていたのか、あるいはもう死んでいたのか、どちらかはわからない。でも僕はとにかくその時君のことを思い出していた。君と寝た時のことを。君の服をゆっくりと脱がせた時のことを。あれは本当に、何というか、同窓会みたいだったよ。世界中のネジが緩んだみたいに僕はリラックスしていた。そういうのって本当に久し振りだった。でもね、メイ、僕が君にしてあげられることは今のところ何もない。悪いけど、何もないんだ。君にもわかっているとは思うけれど、我々はみんなとても脆い人生を送っているんだ。僕としては五反田君をスキャンダルに巻き込むわけにはいかないんだ。彼はイメージの世界で生きている男だ。彼が売春婦と寝て、殺人事件の参考人として呼ばれたなんてことが世間に漏れたら、そのイメージの世界はダメージを受けることになるんだ。番組もコマーシャルも降ろされるかもしれない。下らないといえば下らない。下らないイメージで、下らない世間だ。でも彼は僕を友達として信用して、遇してくれた。だから僕も彼を友達として扱

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

う。それは信義の問題なんだ。メイ、山羊のメイ、僕は君と二人でいてとても楽しかった。君と寝ることができてとても楽しかった。童話みたいだった。それが君にとって慰めになるかどうかは僕にはわからないけど、でも君のことはずっと忘れないで覚えている。我々は二人で朝まで雪かきをしたのだ。官能的雪かき。僕らはイメージの世界で、経費を使って抱き合ったのだ。熊のプーと山羊のメイ。首を締められるのはすごく苦しかったろう。まだ死にたくなんかなかっただろう。たぶん。でも僕には何もしてあげられない。こうすることが本当に正しいのかどうか、正直言って僕にもわからない。でも、僕にはこうするしかないんだ。それが僕の生き方なんだ。システムなんだ。だから僕は口をつぐんで何も言わない。おやすみ、山羊のメイ、少なくとも君はもう二度と目が覚めないで済む。二度と死なないで済む。

おやすみ、と僕は言った。

オヤスミ、思考がこだました。

かっこう、とメイが言った。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

22

翌日もだいたい同じようなことの繰り返しだった。朝に我々はまた同じ部屋に集まって三人で黙々とひどいコーヒーを飲み、パンを食べた。それほど悪くないクロワッサンだった。それから文学が僕に電気剃刀を貸してくれた。僕は電気剃刀があまり好きではなかったが、あきらめてそれで髭を剃った。歯ブラシはなかったので、仕方ないから丁寧にうがいをした。そして質問が再開された。下らない瑣末な質問。合法的な拷問。昼までそれがぜんまい仕掛けのかたつむりみたいにだらだらと続いた。昼までに彼らは質問できるだけのことは全部質問してしまった。質問の種もようやく尽きたようだった。

「まあ、こんなところですな」と漁師がボールペンを机の上に置いて言った。

二人の刑事は申し合わせたみたいに同時にふうっと溜め息をついた。僕も溜め息をついた。たぶん彼らは僕をここに留めておくために時間稼ぎをしていたのだろう、と僕は見当をつけた。いくらなんでも殺された女の財布に名刺が一枚入っていたくらいで拘置許可が取れるわけがない。たとえ僕に有効なアリバイがなかったとしてもだ。だから彼らはこんな馬鹿気たカフカ的迷路の中に僕をつなぎとめているのだ。指紋だか遺体解剖だかの結果が出て、僕が犯人かどうかはっきりするまで。下らない話だ。

でもとにかくこれで質問も終わったのだ。僕は家に帰る。そして風呂に入り、歯を磨き、きちんとまともに髭を剃る。まともなコーヒーを飲む。まともな食事をする。

「さて」と漁師が背中を伸ばしてとんとんと腰を叩きながら言った。「そろそろ昼飯にしますか」

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

「もう質問も終わったようだから、僕は家に帰ります」と僕は言った。
「それがそうもいかんのです」と漁師が言いにくそうに言った。
「どうして？」と僕は訊いた。
「あんたがこうこう述べましたという署名がいる」
「いいですよ。署名しましょう」
「その前にまず内容に間違いないかどうか読んで確かめて下さい。一行一行きちんと。非常に大事なことですから」

僕は三十枚か四十枚はあるぎっしりと書き込まれた事務用便箋をゆっくりと丁寧に読んだ。二百年くらい経ったらこういう文章にもあるいは風俗資料的な価値は出るかもしれないな、と僕は読みながら思った。病的と言ってもいいくらい細かくて、実証的だ。研究者の役には立つだろう。都会で生活する三十四歳の独身男性の生活がかなりありありと浮かび上がってくる。平均的男性、とは言えないにせよ、一応時代の子ではある。でも今警察署の取り調べ室で読んでいるとただうんざりするだけだった。読みとおすのに十五分かかった。でもまあ、これで最後なのだ。これさえ読み終えて署名すれば家に帰れるのだ。読み終えると僕は机の上でとんとんと紙を揃えた。

「いいですよ」と僕は言った。「結構です。内容に異存はないですね。署名します。どこに署名すればいいんですか？」

漁師は指の中でボールペンをくるくると回しながら文学の方を見た。文学はラジエーターの上に置いたショート・ホープの箱をとってそこから一本取り出し、口にくわえて火をつけ、顔をしかめてその煙を眺めていた。僕は何だかひどく嫌な予感がした。馬が死にかけていて、遠くで太鼓の音が聞こえる。

「そう簡単にはいかんのです」と文学がとてもゆっくりとした口調で言った。プロがアマチュアに説明す

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

る時の、噛んで含める喋り方だった。「こういう書類はですね、自筆じゃないと駄目なんです」
「自筆？」
「つまり、これをもう一度書き直してもらわなくてはならないんですよ。あなたに。自分の字で。そうしないと法律的には有効じゃないんです」
僕はその事務用便箋の束に目をやった。僕には腹を立てる気力も残ってはいなかった。僕は腹を立てたかった。そしてこういうのは間違ったことだ、と怒鳴りたかった。机だって叩きたかった。君たちにこういうことをする権利はない、僕は法律によって保護された市民なんだ、と。僕は立ち上がってさっさと家に帰ってしまいたかった。正確にはそれを止める権利が彼らにないこともわかっていた。でも僕はあまりにも疲れていた。疲れていて、もう何もしたくなかった。誰にも何も主張したくなかった。何か主張するくらいなら言われたとおりに何でもやってやろうというような気になっていた。その方が楽なように思えた。やわになっている、と僕は思った。疲れてやわになっている。昔はこうじゃなかった。昔はもっと真剣に腹を立てていた。ジャンク・フードだろうが煙草の煙だろうが電気剃刀だろうが、そんなもの気にもならなかった。年をとったんだ。弱気になってる。
「嫌だ」と僕は言った。「もう疲れた。家に帰る。帰る権利がある。誰にも止められない」
文学が唸るような欠伸をするような曖昧な声を出した。漁師は天井を見上げながらボールペンの頭でとんとんと机を叩いた。とんとんとん・とん、とんとん・とんとん・とん、という風にリズムに変化をつけて叩いた。
「そういう風に言われると話がややこしくなるね」と乾いた声で漁師が言った。「よろしい。そういうことならこっちも拘置許可を取る。強制的に拘置して取り調べる。そうなったらこんな風におっとりとはしてないよ。ま、いいや、その方がこっちもやりやすい。なあ、そうだよな？」と彼は文学に訊いた。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

「そうですね。その方が却ってやりやすいですね。いいです。そうしましょう」と文学は言った。
「お好きに」と僕は言った。「でも拘置許可が出るまでは僕は自由だ。家にいるから、出たら迎えに来てほしい。何でもいいから家に帰る。ここにいると気が滅入る」
「拘置許可がでるまで暫定的に身柄を拘束できるんだよ」と文学は言った。「そういう法律はちゃんとあるんだよ」
六法全書を持ってきてその法律のあるところを見せてくれと言おうと思ったが、そこで僕のエネルギーも尽きた。むこうがはったりでやっていることはわかっていたが、それに立ち向かうには僕はあまりにも疲労していた。
「わかったよ」と僕はあきらめて言った。「言われたとおりに書きましょう。そのかわり電話をかけさせて」
漁師が電話を僕の方に差し出した。僕はユキにもう一度電話をかけた。
「まだ警察にいる」と僕は言った。「夜までかかりそうなんだ。だから今日もそちらにはいけそうもない。悪いけど」
「まだいるの?」と彼女はあきれたように言った。
「馬鹿みたいだ」と僕は言われる前に自分の方から言った。
「まともじゃないわよね」とユキは言った。物事にはいろんな言い方がある。
「何してるの、今?」と僕は訊いてみた。
「別に何も」と彼女は言った。「ただぶらぶらしてるだけ。寝転んで音楽聴いて、雑誌か何か読んで、ケーキ食べて。そういうの」
「ふうん」と僕は言った。「とにかくここを出られたら電話するよ」

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

く聞こえるように、ときどき大きな声で言った。

二人はまた僕の電話の会話をじっと耳を澄ませて聞いていた。でも今回も特に得るところはなかったようだった。

「じゃ、まあ、とにかく昼飯にしよう」と漁師は言った。

昼飯はそばだった。箸ではさんで持ちあげただけで切れてしまうくらいのびたそばだった。病人用の流動食みたいだった。不治の病の匂いがした。でも二人はとても美味そうに食べていたので、僕もそれにならった。そばを食べ終えると、文学がまた生温いお茶を持ってきた。

午後は淀んだ深い川のように静かに流れていった。こつこつという時計の音が部屋に響いているだけだった。時々隣の部屋の電話のベルが聞こえた。僕はただただ事務用便箋に字を書いていた。その間に二人の刑事は交代で休憩を取った。時々二人で廊下に出てひそひそと小声で話をしていた。僕は机に向かって黙々とボールペンを走らせていた。下らない文章を左から右に書き写していた。「私は六時十五分頃に夕食を取ろうと思い、まず冷蔵庫からこんにゃくを取り出し……」。純粋な消耗。やわになってる、と僕は自分に向かって言った。すごくやわになってる。言いなりになってる。何も言い返さない。

でもそれだけじゃない、と僕は思った。確かに少しやわにはなっている。しかし一番の問題は自分に確信が持てないことだ。だから突っ張れないのだ。僕のやっていることは本当に正しいのだろうか？ 僕は五反田君をかばったりするかわりに全てを正直に打ちあけて捜査に協力するべきではないのだろうか？ 僕は嘘をついている。嘘をつくのは、それがどんな種類の嘘であっても、あまり気持ちの良いものではない。たとえ友達のためであってもだ。自分に言い聞かせることはできる。たとえ何をしてもメイが生き返るわけではないのだ、と。そういう風に自分を納得させることはできる。でも突っ張れない。だから僕は黙って書類を書き写し続けた。夕方までかけて二十枚仕上げた。長時間ボールペンで細かい字を書き続け

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

るのは骨の折れる作業だった。だんだん手首がだるくなってくる。肘が重くなる。右手の中指が痛み始める。頭がぼんやりしてすぐに字を間違える。間違えると線を引いて、そこに拇印を押す。気が滅入ってくる。

夕方にまた弁当を食べた。食欲は殆どなかった。茶を飲むと胃がむかついた。洗面所に行って鏡を見ると、我れながらひどい顔をしていた。

「まだ結果は出ないんですか？」と僕は漁師に訊いてみた。「指紋とか遺留品とか遺体解剖の結果とかは？」

「まだだね」と彼は言った。「もう少し時間がかかる」

十時までかけてあと五枚というところまで何とかやっとこぎつけたが、それが僕の能力の限界だった。これ以上もう一字も書けない、と僕は思った。そしてそう言った。漁師がまた僕を留置所に連れて行った。僕はそこでぐっすりと眠った。歯を磨けないことも、着替えがないことも、もうどうでも良くなっていた。

朝になってまた電気剃刀で髭を剃り、コーヒーを飲み、クロワッサンを食べた。そしてあと五枚と思った。僕は二時間でその五枚を書いた。そして一枚一枚にきちんと署名をし、拇印を押した。文学がそれをチェックした。

「これでもう解放してもらえるんでしょうね？」と僕は言った。

「あともう少しだけ質問に答えてくれれば、帰っていいです」と文学は言った。「大丈夫、簡単な質問です。少し補足したいことを思い出したもので」

僕は溜め息をついた。「そしてそれをまた書類にするんでしょうね、もちろん？」

「もちろんです」と文学は答えた。「残念ながら役所というのはそういう所なんです。書類が全てです。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

書類と印鑑がなければ、何もないのと同じです」

僕は指の先でこめかみを押さえた。こめかみの中にごわごわとした異物が入っているような気がした。それは何処かから入ってきて、そして頭の中で膨らんだのだ。今となってはもう取り出すことはできない。手遅れですね、もう少し前だったら簡単に取り出せたんですがね。お気の毒です。

「大丈夫ですよ。そんなに時間は取らせません。すぐに終わります」

僕があらたなる瑣末な質問に力なく答えていると、漁師が部屋に戻ってきて、文学を呼び出した。そして長い間二人でひそひそと立ち話をしていた。その間僕は背もたれにもたれて首を上にあげ、部屋の天井の隅に染みのようにこびりついた黒い黴を観察していた。黴はまるで死体写真の陰毛のように見えた。そしてそこから壁のひびわれに沿って、フラスコ画のように滲んだ点が下に向けて連なっていた。その黴にはこの部屋に出入りした数多くの人間の体臭やら汗やらが染み込んでいるように僕には感じられた。そういうものが何十年かかけてこんな陰惨な黴を作り出したのだ。そういえば随分長く外の風景を見てないな、と僕は思った。音楽も聴いていない。ひどい場所だ。ここでは人々があらゆる手段を使って人間の自我や感情や誇りや信念を圧殺しようとする。目に見える傷が残らないように心理的にこづきまわし、蟻巣のような官僚的迷路を引きずり回し、人が抱く不安感を最大限に利用する。そして太陽の光を遠ざけ、ジャンク・フードを食べさせる。嫌な汗をかかせる。そのようにして黴が生まれる。

僕は机の上に両手を揃えて置き、目を閉じて雪の降りしきる札幌の街のことを思った。巨大なドルフィン・ホテルとそこのフロント係の女の子のこと。彼女は今どうしているだろう？ フロントに立ってあの輝かしい営業的微笑を口許に浮かべているのだろうか？ 僕は今ここから電話をかけて彼女と話したかった。下らない冗談を言いたかった。でも僕は彼女の名前さえ知らない。名前も知らないのだ。電話のかけようがない。可愛い女の子だった、と僕は思った。特に彼女が働いている姿が素敵だった。ホテルの精。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

彼女はホテルで働くことが好きなのだ。僕とは違う。僕は働くことが好きになったことなんて一度もない。僕はとてもきちんとした仕事をする。でもそれを愛したことは一度もない。彼女は仕事そのものを愛している。でも仕事場を離れると彼女はどことなく脆く見える。不安定で傷つきやすく見える。僕はあの時、彼女と寝ようと思えば寝られた。でも寝なかった。

僕は彼女ともう一度話をしたかった。

彼女が誰かに殺されたりしないうちに。

彼女がどこかに消えてしまったりしないうちに。

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

23

二人の刑事はやがて部屋に入ってきたが、今度はどちらも腰掛けなかった。僕はまだぼんやりと黴を眺めていた。

「あんた帰っていいですよ、もう」と漁師が無表情な声で僕に言った。「御苦労さんでした」

「帰っていい？」と僕は啞然として聞きかえした。

「もう質問が終わったの。おしまい」と文学が言った。

「いろいろと事情が変わったのよ」と漁師が言った。「これ以上あんたをここに置いておけなくなった。だから帰っていいです。御苦労さん」

僕はすっかり煙草臭くなってしまったジャケットを着て、椅子から立ち上がった。何だかよくわけがわからないけれど、何にせよ相手の気が変わらないうちにさっさと帰ってしまった方がよさそうだった。玄関まで文学が送ってくれた。

「あのね、あんたがシロだってことは、昨日の夜にもうわかってたんですよ」と彼は言った。「鑑識と解剖の結果が出て、あんたとは全く繫がりがみつからなかった。残っていた精液の血液型も違ってた。あんたの指紋も出なかった。でもね、あんたは何か隠してたね。だから置いておいたんです。それを吐き出すまでもう少し叩いてみようって。何か隠してることは我々にはわかるんだ。勘ですよ。職業的な勘。あの女が誰か、ヒントくらいは持ってるでしょう？　でも何かの理由でそれを隠している。いけないことだよ。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

俺たちそんな甘くないよ。プロだから。だいたい人が一人殺されてるんだ」

「悪いけど何を言ってるのかよくわからない」と僕は言った。

「また来てもらうことになるかもしれんですよ」と彼はポケットからマッチを出して、マッチ棒で爪の甘皮を押しながら言った。「やるとなると、我々はしつこいからね。今度は横から弁護士が出てきてもびくともしないくらいびしっと準備してやる」

「弁護士？」と僕は訊いた。

でもその時、彼はもう建物の中に姿を消していた。僕はタクシーを拾って家に帰った。そして浴槽に湯をはって、ゆっくりとそこに身を沈めた。歯を磨き、髭を剃り、頭を洗った。体中が煙草臭かった。ひどい場所だった、と僕は思った。蛇の穴みたいだ。

風呂を出ると僕はカリフラワーを茹で、それを食べながらビールを飲み、アーサー・プライソックがカウント・ベイシー・オーケストラをバックに唄うレコードを聴いた。無反省にゴージャスなレコード。十六年前に買った。一九六七年。十六年間聴いている。飽きない。

それから僕は少し眠った。ちょっとどこかに行って、回れ右して引き返してくるような眠りだった。三十分かそこらのものだ。目が覚めて時計を見ると、まだ一時だった。僕は水着とタオルをバッグに入れて、スバルに乗って千駄ヶ谷の室内プールに行き、一時間みっちりと泳いだ。それでやっと人間らしい気持ちになれた。食欲も少し出てきた。僕はユキに電話をかけてみた。彼女はいた。やっと警察から解放されたんだ、と僕は言った。それはよかったわね、と彼女はクールに言った。昼御飯は食べたかと僕は聞いてみた。食べてないと彼女は言った。朝からシュークリームを二個食べただけ、と彼女は言った。相変わらずひどい食生活だ、と僕は思った。今から迎えにいく、何か食べにいこう、と僕は言った。うん、と彼女は言った。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

僕はスバルに乗って外苑を回り、絵画館前の並木道を通って、青山一丁目から乃木神社に出た。日一日と春の気配は濃くなっていた。僕が赤坂警察署に二泊している間にも、風の感触は穏やかになり、木々の葉は目に見えて青みを増し、光は丸みを帯び柔らかくなっていた。都市の騒音さえもがアート・ファーマーのフリューゲル・ホーンみたいに優しく聞こえた。世界は美しく、腹も減っていた。こめかみの奥のいびつな形をしたこわばりもいつの間にか消えていた。

僕が玄関のベルを押すと、ユキはすぐ下におりてきた。彼女は今日はデヴィッド・ボウイのトレーナー・シャツを着て、その上に茶色の揉み革のジャンパーを着ていた。そしてキャンバス地のショルダー・バッグを下げていた。ショルダー・バッグにはストレイ・キャッツとスティーリー・ダンとカルチュア・クラブのバッジがついていた。奇妙な組み合わせだったが、まあ何でもいいのだろう。

「警察は楽しかった？」とユキは訊いた。

「ひどかった」と僕は言った。「ボーイ・ジョージの唄と同じくらいひどかった」

「へえ」と彼女は無感動に言った。

「今度エルヴィス・プレスリーっていうバッジ買ってあげるから、つけかえたら」と僕はショルダー・バッグのカルチュア・クラブのバッジを指して言った。

「変な人」と彼女は言った。いろんな言い方がある。

僕はまず彼女をまともな店に連れていって、ホール・ホイートのパンで作ったロースト・ビーフ・サンドイッチと、野菜サラダを食べさせ、まっとうで新鮮なミルクを飲ませた。僕も同じ物を食べ、コーヒーを飲んだ。美味いサンドイッチだった。ソースがさっぱりとして、肉が柔らかく、本物のホースラディッシュ・マスタードを使っている。味に勢いがある。こういうのを食事というのだ。

「さて、これから何処に行こうか？」と僕はユキに訊いた。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

「辻堂」と彼女は言った。
「いいよ」と僕は言った。「辻堂に行こう。でもどうして辻堂なんだろう?」
「パパの家があるから」とユキが言った。「あなたに会いたいんだって」
「僕に?」
「あの人、そんなに悪い人じゃないわよ」
僕は二杯目のコーヒーを飲みながら首を振った。「何も悪い人だなんて言ってない。でも君のお父さんがどうしてわざわざ僕に会いたがるんだろう? 君が僕のことをお父さんに話したの?」
「そう。電話したの。そしてあなたに北海道から連れて帰ってもらったこと話して、今あなたが警察に連れていかれて帰してもらえないで困ってるって言ったの。それでパパが知り合いの弁護士に警察にあなたの事を問い合わせてもらったの。あの人そういうつきあいが広いのよ。かなり現実的な人だから」
「なるほどね」と僕は言った。「そういうことか」
「役に立ったでしょ?」
「役に立ったよ。実に」
「パパは言ってたけど、警察にはあなたをひきとめておくような権利はなかったんですって。帰ろうと思えばあなたはいつでも自由に帰れたのよ。法律的には」
「知ってたよ、そのことは」と僕は言った。
「じゃあ、どうして帰ってこなかったの? もう帰りますって」
「むずかしい問題だ」と僕は少し考えてから答えた。「あるいは自己を罰していたのかもしれない」
「普通じゃないわね」と彼女は頬杖をついて言った。いろんな言い方がある。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

僕らはスバルに乗って辻堂まで行った。午後も遅くなっていたので、道路は空いていた。彼女はショルダー・バッグからいろんなテープを出してかけた。ボブ・マーリーの「エキソダス」からスティックスの「ミスター・ロボット」まで、実に様々な種類の音楽が車内に流れた。面白いものもあれば、下らないものもあった。でもそういうのは景色と同じなのだ。右から左にどんどん過ぎ去っていく。ユキは殆ど口をきかずにシートにゆったりともたれて音楽を聴いていた。ダッシュボードにあった僕のサングラスをとって、それをかけ、途中でバージニア・スリムを一本吸った。僕も黙って運転に神経を集中していた。細かくギヤを変え、ずっと先の路面を眺めていた。交通標識をひとつひとつ丁寧にチェックした。

時々彼女のことがうらやましくなった。彼女が今十三歳であることが。彼女の目にはいろんな物事が何もかも新鮮に映るのだろう。音楽や風景や人々が。それは僕が見ているものの姿とはまるで違っているだろう。僕だって昔はそうだった。僕が十三歳の頃、世界はもっと単純だった。努力は報いられるはずのものであり、言葉は保証されるはずのものであり、美しさはそこに留められるはずのものであった。でも、十三歳の時の僕はそれほど幸せな少年ではなかった。僕は一人でいることを好み、一人でいるときの自分を信じることができたけれど、当然ながら大抵の場合一人にはなれなかった。家庭と学校という二種類の強固な枠の中に閉じ込められて、僕は苛立っていた。苛立ちの年だった。僕は女の子に恋をしていて、それはもちろん上手く行かなかった。何故なら恋がどういうものかということさえ僕は知らなかったのだから。僕は彼女と殆どまともに口をきくことすらできなかった。僕は内気で不器用な少年だった。教師や親の押し付けてくる価値観に異議を唱え反抗しようとしていたが、異議申し立ての言葉が上手く出てこなかった。何をやっても手際良く行かなかった。何をやっても手際良く行く五反田君とは全く逆の立場の人間

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

だった。でも、僕は物事の新鮮な姿を見ることはできた。それは素敵なことだった。匂いがきちんと匂い、涙は本当に温かく、女の子は夢のように美しく、ロックンロールは永遠にロックンロールだった。映画館の暗闇は優しく親密であり、夏の夜はどこまでも深く、悩ましかった。それらの苛立ちの日々を僕は音楽や映画や本とともに過ごした。サム・クックやリッキー・ネルソンの唄の歌詞を覚えて過ごした。僕は自分一人の世界を構築し、その中で生きていた。それが僕の十三歳だった。そして五反田君と同じ理科の実験班にいた。彼は女の子たちの熱い視線を浴びてマッチを擦り、ガス・バーナーに優雅に火をつけていた。ポッと。

どうして彼が僕をうらやましがらなくてはならないのだ？

わからない。

「ねえ」と僕はユキに声をかけた。「羊の皮を着ていた人の話を聴かせてくれないかな？　何処で君はその人に会ったの？　そしてどうして僕がその人に会ったことを知っているの？」

彼女は顔をこちらに向け、サングラスをとってダッシュボードに戻した。そして肩を小さくすくめた。

「その前にまず私の質問に答えてくれる？」

「いいよ」と僕は言った。

ユキはしばらく二日酔いの朝みたいに薄暗くて物哀しいフィル・コリンズの唄にあわせてハミングしてから、もう一度サングラスを手にとってつるをいじった。「あのね、前にあなた北海道で私に言ったでしょう？　これまでにデートしたことのある女の子の中で私がいちばん綺麗だって」

「確かにそう言った」と僕は言った。

「あれ本当なの？　それとも私の機嫌を取るためのものだったの？　正直に言ってほしいんだけど」

「本当だよ。嘘じゃない」と僕は言った。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

「何人くらいの人とデートしたのかしら、これまで？」
「数知れず」
「二百人くらい？」
「まさか」と僕は笑って答えた。「僕にはそれほどの人気はない。まったく人気がないというわけでもないけど、どちらかと言うとすごく局地的なんだ。幅が狭くて、ひろがりに欠ける。せいぜい十五人くらいのものじゃないかな」
「そんなに少しなの？」
「みじめな人生なんだ」と僕は言った。「暗くって、湿ってて、狭い」
「局地的」とユキは言った。
僕は肯いた。
彼女はそういう人生について少し考えを巡らせていた。でもうまく理解できないようだった。仕方ない。まだ若すぎるのだ。「十五人」と彼女は言った。
「だいたい」と僕は言った。そしてもう一度三十四年のささやかな人生を振り返ってみた。「だいたいそれくらい。多くてもせいぜい二十人くらいのものだろうな」
「二十人か」とユキはあきらめたように言った。「でもまあとにかくその中で私がいちばん綺麗だったのね？」
「そう」と僕は言った。
「綺麗な人とはあまり付き合わなかったの？」と彼女は訊いた。そして二本目の煙草に火をつけた。交差点に警官の姿が見えたので、僕はそれを取り上げて窓から捨てた。
「けっこう綺麗な女の子ともデートした」と僕は言った。「でも君の方が綺麗だ。嘘じゃないよ。こうい

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

う言い方が理解できるかどうかわからないけれど、君の綺麗さは独立して機能してる綺麗さなんだ。他の子とは全然違う。でもお願いだから車の中で煙草吸わないで。外から見えるし、車も臭くなる。前にも言ったように女の子が小さい時から煙草を吸い過ぎると大きくなって生理不順になる」

「馬鹿みたい」とユキは言った。

「羊の皮をかぶった人の話をして」と僕は言った。

「羊男のことね？」

「どうして知ってるの、その名前を？」

「あなたが言ったのよ、このあいだ電話で。羊男って」

「そうだっけ？」

「そうよ」とユキは言った。

道路は渋滞していて、僕は信号を二回ずつ待たなくてはならなかった。

「羊男の話をして。何処で羊男に会ったの？」

ユキは肩をすぼめた。「私、その人に会ったわけじゃないの。ただふとそう思っただけなの。あなたを見ていて」そして細いまっすぐな髪を指にくるくるとまきつけた。「そういう感じがしたの。羊の皮をかぶった人がいるような。そういう気配がしたの。あなたにあのホテルで会う度に、そういう風に感じたの。だからそう口に出して言ってみたの。それについてとくに何かを知ってるってわけではないの」

僕は信号待ちをする間そのことについてしばらく考えてみた。考える必要がある。頭のねじを巻く必要がある。きりきりと。

「そう思った、ということは」と僕はユキに聞いた。「つまり君にはその姿が見えたっていうことかな、羊男の姿が？」

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

「うまく言えない」と彼女は言った。「どう言えばいいのかな。その羊男という人の姿が目にありありと浮かぶというんじゃないの。わかるかな？　何かこう、そういうものを見た人の感情がこっちに空気みたいに伝わってくるのよ。それは目には見えないものなの。目には見えないんだけど、それを私は感じて、かたちに置き換えることができるの。でもそれは正確にはかたちじゃないの。かたちのようなものなの。もし誰かにそれをそのまま見せることができたとしても、他の人には何がなんだかわからないと思う。それはつまりね、私だけにしかわからないかたちなの。ねえ、上手く説明なんかできないわよ。馬鹿みたいだわ。ねえ、私の言ってることわかる？」

「漠然としかわからない」と僕は正直に言った。

ユキは眉をしかめながら僕のサングラスのつるを噛んでいた。

「つまり、こういうことなのかな？」と僕は聞いてみた。「君は僕の中にある、あるいは僕にくっついて存在している感情なり思念なりを感じとって、それを例えば象徴的な夢みたいに映像化できるということ？」

「思念？」

「強く考えられたこと」

「そうね、そうかもしれない。強く考えられたこと――でもそれだけじゃない。その強く考えられたことを作り出したもの、そういう物があるの。そのとても強い何か。思いを作り出す力と言えばいいのかしら、そういう物があると私はそれを感じちゃうの。感応するんだと思う。そしてそれを、私なりに、見るの。でも夢のようにではない。空っぽの夢。そう、そういうこと。空っぽの夢なの。そこには誰もいない。何の姿も見えない。ほら、TVのコントラストをすごく暗くしたり、すごく明るくしたりしたときと同じ。何も見えない。でもそこには誰かがいるのね。じっと目を凝らすと。それを感じるの。そこにいる

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

のは羊の皮をかぶった人だって。悪い人じゃない。いや、それは人でさえないって。でも悪いものじゃない。でも見えない。あぶりだした絵みたいに、それはそこにあるの。見えないけれど、わかるの。見えないものとして見えるの。かたちのないかたちなの」彼女は舌打ちした。「ひどい説明」

「いや、君は上手く説明してるよ」

「本当？」

「とても」と僕は言った。「君の言いたいことはわかるような気がする。僕がそれを呑みこむのに時間がかかるだけだ」

町中を抜けて辻堂の海にでると、僕は松林のわきの駐車スペースの白い線の中に車を停めた。車の姿は殆どなかった。少し歩こうと僕はユキに言った。気持ちの良い四月の午後だった。風らしい風もなく、波も穏やかだった。まるで沖の方で誰かがシーツをそっと揺すっているみたいに小さく波が寄せ、そして引いていった。静かで規則正しい波だった。サーファーはあきらめて陸に上がり、ウェット・スーツを着たまま砂浜に座って煙草をふかしていた。塵を焼く焚き火の白い煙が殆ど真っ直ぐに空に向けてたちのぼり、左手には江ノ島が蜃気楼のようにぼんやりとかすんで見えた。大きな黒い犬が思いつめたような顔つきで波打ち際を右から左に向けて小走りに均等な歩調で通りすぎていった。沖合には何隻か漁船が浮び、その上空を白い渦巻きのように音もなく鴎の群れが舞っていた。海にも春の気配が感じられた。

僕らは海岸の歩行者道路を散歩した。ジョガーや自転車に乗った女子高校生とすれちがいながら、藤沢の方に向けてのんびりと歩き、適当なところで砂浜に座って二人で海を眺めた。

「よくそういうことは感じるの？」と僕は彼女に聞いてみた。

「そんなにしょっちゅうじゃない」とユキは言った。「たまに。たまにしか感じないの。そういうことを感じる相手ってそんなに沢山はいないの。ちょっとだけ。でもなるべくそういう風に感じることは避ける

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

ようにしてるの。何か感じてもなるべくそのことは考えないようにしてるの。何か感じそうになったらぱっと閉じちゃうようにしてるの。だいたいそういう時って感じでわかるから。閉じちゃうと、深くは感じなくてすむの。目を閉じるのと同じ。感覚を閉じちゃうの。そうしたら何も見えない。何かがあることはわかる。でも見えない。そのままじっとしてれば、何も見なくてすむ。ほら映画なんかで怖いものが出てきそうになると目を閉じるでしょう、あれと同じこと。それが通りすぎてしまうまで閉じてるの。じっと」

「どうして閉じちゃうの？」

「嫌だから」と彼女は言った。「昔は――もっと小さい頃は――閉じなかった。学校でもね、何か感じたらそれを口に出してた。でもそうすると、みんなが気持ち悪がるの。つまりね、誰かが怪我しそうだってわかるの。それで、友達に『あの人怪我するわよ』って言うと、結局その人ちゃんと怪我するの。そういうことが何度かあって、それ以来みんな私のことお化けみたいに扱うようになったの。『お化け』って呼ばれたことだってあるのよ。そういう評判が立ったの。それで私すごく傷ついたわ。だからそれ以来もう何も言わないことにしたの。誰にも何も言わないの。見えそうになったら、感じそうになったら、すっと自分を閉じちゃうの」

「でも僕の時は閉じなかったんだね？」

彼女は肩をすぼめた。「なんだか突然だったの。警戒する暇もなかった。突然ふっと、そのイメージみたいなのが浮かんだの。最初にあなたに会った時。ホテルのバーで。私が音楽聴いていて、ロック聴いて……何だっていいのよデュラン・デュランだろうがデヴィッド・ボウイだろうが……うん、音楽をじっと聴いてる時ってそうね。あまり警戒してないの。リラックスしてるの。だから音楽って好きよ」

「予知能力があるっていうことなんだろうか？」と僕は訊いた。「たとえばその、怪我をすることがわかる

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

とか。そういうのは？」

「どうかしら。そういうのとはまた少し違うと思うな。私は予知するわけではなくて、そこにあるものをただ感じとるだけなの。でもなんて言うのかな、何かが起こるには起こるための雰囲気みたいなのがあるでしょう。わかるかな？　たとえば鉄棒をやってて怪我する人って、何かしら油断とか過信とかそういうのがあるでしょう？　はしゃいで調子に乗っているとか。そういう感情の波のようなものが、私にはすごく敏感に感じとれるの。そしてそういう感情の波が、こう、空気の塊りみたいになるの。そしてこれは危ない、と思うわけ。そうすると空っぽの夢みたいなのがふっと出てくるの。それが出てくると……起こるのよ、それが。予知じゃないの。もっとぼんやりとしたものなの。でもそれは起こるの。見えるのよ。でももう何も言わない。何か言うとみんな私をお化けって呼ぶから。ただ見てるの。ここでこの人は火傷するんじゃないかって。すると火傷するの。でも私には何も言えないの。そういうのって、ひどいでしょう？　自分が嫌になってしまうの。だから閉じる。閉じちゃえば、自分が嫌にならないで済むし」

彼女はしばらく手に砂をとって遊んでいた。

「羊男は本当にいるの？」

「本当にいるよ」と僕は言った。「あのホテルの中には彼の住んでいる場所があるんだ。ホテルの中にもうひとつ別のホテルがある。それは普通では見えない場所なんだ。でもそれはちゃんとそこに残されている。僕の為に残されているんだ。それは僕の為の場所だからだよ。彼はそこで生きていて、僕といろんな物事を繋げているんだ。それは僕のための場所で、羊男は僕のために働いている。彼がいないと、僕はいろんなものとうまく繋がらない。彼がそういうのを管理してるんだ。電話の交換手みたいに」

「繋げる？」

「そう。僕が何かを求める。何かを繋げようと思う。彼がそれを繋げる」

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

「よくわからない」
僕もユキと同じように砂をすくって、指のあいだから落とした。
「僕にもまだよくわからない。でも羊男が僕にそう説明してくれた」
「ずっと昔から羊男はいたの？」
僕は肯いた。「うん、昔からいた。子供の頃から。僕はそのことをずっと感じつづけていたよ。そこには何かがあるんだって。でもそれが羊男というきちんとした形になったのは、それほど前のことじゃない。羊男は少しずつ形を定めて、その住んでいる世界の形を定めてきたんだ。僕が年をとるにつれてね。何故だろう？ 僕にもわからない。たぶんそうする必要があったからだろうね。年をとって、いろんなものをなくしちゃったから、そうする必要が出てきたんだろうな。生きていくために、そういうものの助けが必要になったんだろう。でも僕にもはっきりとはわからないよ。別の理由があるのかもしれない。それについてずっと考えている。でもわからない。馬鹿みたいだ」
「そのこと、他の誰かに話した？」
「いや、話してない。そんなこと話しても誰も信じないだろうしね。誰も理解しない。それに僕には上手く説明できない。君に話したのが初めてだよ。君になら話せそうな気がしたんだ」
「私もきちんとこういう風に説明したのはあなたが初めて。ずっと黙っていたの。パパもママもある程度知ってはいるけど、私の方から話したことはないの。ずっと小さい時からそういうことは話さない方がいいんだっていう気がしてたの。本能的に」
「話しあえてよかった」と僕は言った。
「あなたもお化け組の一人なのよ」とユキは砂をいじりながら言った。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

車を停めたところまで歩いて戻るあいだに、ユキは学校の話をした。中学校がどれほどひどいところだったかということを彼女は話した。

「夏休みからずっと学校に行ってないの」と彼女は言った。「勉強が嫌いなわけじゃないの。ただあそこの場所が嫌いなの。我慢できないの。学校に行くと気分が悪くなってすぐ吐いちゃうの。毎日吐いてたわ。吐くとそのことでまた苛められるの。みんなが苛めるのよ。先生まで一緒になって苛めるの」

「僕が同級生だったら、君みたいな綺麗な子は絶対苛めないけどね」

ユキはしばらく海を眺めていた。「でも逆に綺麗だから苛めるってこともあるんじゃないかしら？ それに私、有名人の子供だし。そういうのって、すごく大事にされるかすごく苛められるか、どちらかなの。そして私はあとの方なの。みんなと上手くやっていけないの。私はいつも緊張してなくちゃならないの。ほら、いつでもすっと心を閉じられるようにしてなくちゃならないでしょう？ でもそういうのって誰にもわからない。私がいつもそういう風にびくびくしてなくちゃいけないという理由がね。びくびくしてると、カモみたいに見えるの。そして苛めるの。すごく嫌らしいやりかたで。信じられないくらい嫌らしいの。すごく恥ずかしいことするの。そんなことできるなんて信じられないようなこと。だって……」

僕はユキの手を握った。「大丈夫だよ」と僕は言った。「そんなつまらないこと忘れなよ。学校なんて無理に行くことないんだ。行きたくないなら行かなきゃいい。僕もよく知ってる。あれはひどいところだよ。嫌な奴がでかい顔してる。下らない教師が威張ってる。はっきり言って教師の八〇パーセントまでは無能力者かサディストだ。あるいは無能力者でサディストだ。ストレスが溜まっていて、それを嫌らしいやりかたで生徒にぶっつける。意味のない細かい規則が多すぎる。人の個性を押し潰すようなシステムができあがっていて、想像力のかけらもない馬鹿な奴が良い成績をとってる。昔だってそうだった。今でもきっとそうだろう。そういうことって変わらないんだ」

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

「本当にそう思う？」
「もちろん。学校のくだらなさについてなら一時間だってしゃべれる」
「でも義務教育よ、中学校って」
「そういうことは誰か他の人が考えることで、君が考えることじゃない。みんなが君を苛めるような場所に行く義務なんて何もない。まったくない。そういうのを嫌だという権利は君にあるんだよ。大きな声で嫌だと言えばいいんだ」
「でもそれから先はどうなるの？　ずっとこういう事の繰り返しなの？」
「僕も十三の時はそういう風に思ったこともあった」と僕は言った。「こんなままの人生が続くんじゃないかって。でもそんなことない。何とかなる。何とかならなかったら、またそのときに考えればいい。もう少し大きくなれば恋もする。ブラジャーも買ってもらえる。世界を見る目も変わってくる」
「あなたって馬鹿ね」と彼女はあきれたように言った。「あのねえ、最近の十三の女の子はみんなブラくらい持ってるわよ。あなた半世紀くらい遅れてるんじゃない？」
「へえ」と僕は言った。
「うん」とユキは言った。そしてもう一度確認した。「あなた馬鹿よ」
「そうかもしれない」と僕は言った。
彼女はそのまま何も言わずに僕の前に立って車まで歩いた。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

24

海岸の近くにあるユキの父親の家に着いた時にはもう日が暮れかけていた。古くて広くて、いやに庭木が多い家だった。その一角には湘南がまだ浜辺の別荘地だったころの面影が残っていた。静かでひっそりとして、春の夕暮れがよく似合っていた。ところどころの庭で桜がもったりと蕾を膨らませていた。桜が咲き終わると、やがて木蓮が花をつけることだろう。そういう具合に色合いと匂いの微かな日々の変化によって季節の移り変わりを感じ取ることができる。そんな場所がまだ残っているのだ。

牧村家は高い板塀で囲まれ、門は屋根のついた昔風の造りだった。表札だけがいやに新しく、そこにくっきりとした字で黒々と「牧村」と書いてあった。ベルを押すとしばらくして二十代半ばの背の高い男が出てきて、僕とユキを中に通してくれた。髪が短く、愛想の良い男だった。僕に対してもユキに対しても愛想が良かった。ユキとは前に何度か会っているらしかった。彼は五反田君と同じような清潔で感じの良い笑い方をした。でももちろん五反田君の方がずっと洗練されていた。彼は僕を奥の庭に案内しながら、自分は牧村先生の手伝いをしているのだと言った。

「自動車の運転手やったり、原稿を届けたり、調べ物をしたり、ゴルフのお供したり、麻雀のおつきあいしたり、外国についていったり、とにかく何でもやりますよ」と彼は特に聞かれもしないのに楽しそうに僕に説明した。「昔風に言えば住み込みの書生というところですね」

「へえ」と僕は言った。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

ユキは「馬鹿みたい」と言いたそうだったが、何も言わなかった。彼女もやはり相手を見て物を言うのだろう。

牧村先生は裏庭でゴルフの練習をしていた。松の木の幹と幹の間に緑色のネットを張って、真ん中の的を目掛けて思いきりボールを打っていた。クラブが空を切るヒュッという音が聞こえた。僕が世の中でいちばん嫌いな音のひとつだ。惨めで物哀しく聞こえる。どうしてだろう？　簡単だ。偏見があるからだ。僕がゴルフというスポーツをわけもなく嫌っているからだ。

彼は僕らが入っていくと振り向いてクラブを下に置いた。そしてタオルをとって丁寧に顔の汗を拭き、ユキに「よく、来たな」と言った。彼女は何も聞こえなかった振りをした。目を逸らしてジャンパーのポケットからガムを出し、紙をはがして口に入れ、くちゃくちゃと音を立てて噛んだ。そして包装紙を丸めて近くの植木鉢の中に捨てた。

「こんにちはくらい言えば」と牧村先生は言った。

「こんにちは」とユキが嫌そうに言った。そしてジャンパーのポケットに手をつっこんだままふらりとどこかに行ってしまった。

「おい、ビール持ってきてくれ」と牧村先生がぶっきらぼうな声で書生に言った。書生は「はい」とよく澄んだ大きな声で返事をして足早に庭を出ていった。牧村先生は大きな咳払いをして地面にぺっと唾を吐き、またタオルで顔の汗を拭いた。そして僕の存在は無視してしばらくの間じっと緑のネットと白い的を睨んでいた。何かを総合し省察するように。僕はそのあいだ苔のはえた庭石をぼんやりと見ていた。

その場の雰囲気は僕には何となく不自然で人工的で、多少馬鹿馬鹿しく感じられた。何処が悪いというのではない。誰が間違っているというのでもない。でもどうも何かのパロディーみたいな感じがするのだ。みんなきちんと自分に与えられた役割を果たしているように見える。作家と書生。でも五反田君なら

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

もっとチャーミングに上手くやれるだろうなと僕は思った。五反田君は何でも上手くやれるのだ。たとえ脚本がまずくとも。

「君がユキの面倒を見てくれたんだって」と先生は言った。

「たいしたことじゃないです」と僕は言った。「ただ一緒に飛行機に乗って帰ってきただけです。何もしてないですよ。それよりも警察のこと有り難うございました。助かりました」

「うん、ああ、いや、そりゃいいんだ。とにかくこれで貸し借りなしだ。気にしなくていい。それに娘が俺に何か頼みごとをするなんて希有なことだからさ。別にそりゃいいんだ。俺も警察は昔から嫌いだ。六〇年には俺もひどい目にあった。樺美智子が死んだとき俺は国会の回りにいた。大昔だ。大昔には——」

それから彼は腰を屈めてゴルフ・クラブを拾い上げ、僕の方を向き、クラブで自分の足をとんとんと軽く叩きながら僕の顔を見て、僕の足元を見て、また僕の顔を見た。まるで足と顔の相関関係を捜しているみたいに。

「——大昔には、何が正義で、何が正義じゃないかちゃんとわかっていた」と牧村拓は言った。

僕はあまり熱意をこめないで肯いた。

「君はゴルフやるか？」

「やりませんね」と僕は答えた。

「ゴルフは嫌いか？」

「好きも嫌いも、やったことないですからね」

彼は笑った。「好きも嫌いもないなんてことはなかろう。大体においてゴルフやったことのない人間はみんなゴルフのことが嫌いなんだ。決まってるんだ。正直に言っていいよ。正直な意見が聞きたい」

「好きじゃないですね、正直言って」と僕は正直に言った。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

「どうして?」

「何をとっても馬鹿気てるように感じられるんです」と僕は言った。「大袈裟な道具とか偉そうなカートとか旗とか、着る服とか履く靴とか、しゃがみこんで芝を読む時の目付きとか耳の立て方とか、そういうのがひとつひとつ気に入らないんです」

「耳の立て方?」と彼は不思議そうな顔つきで聞き返した。

「ただの言い掛かりです。意味ないです。ただゴルフに付随する何もかもが気にさわるというだけです。耳の立て方のことは冗談です」と僕は言った。

牧村拓はまたしばらく空虚な目で僕の顔を見ていた。

「君は少し変わってるのかな?」と彼は訊いた。

「変わってないです」と僕は言った。「ごく普通の人間です。ただ冗談が面白くないだけです」

やがて書生がビールを二本とグラスをふたつ盆に載せて持ってきた。そして盆を廊下に置き、栓抜きで栓を開け、グラスにビールを注いだ。そしてまた足早にさっと何処かに行ってしまった。

「まあ、飲めよ」と彼は廊下に腰を降ろして言った。

いただきます、と言って僕はビールを飲んだ。喉が乾いていたのでビールはとても美味かった。でも車を運転しているからそれ以上は飲めない。一杯だけだ。

牧村拓の歳が幾つなのか、僕ははっきりとは知らなかったが、たぶんもう四十半ばにはなっているはずだった。それほど背は高くないが、がっしりとした体格のせいで実際よりは大男に見えた。胸が厚く、腕も首も太かった。首はいささか太すぎた。もう少し首が細かったらスポーツマン・タイプに見えなくはなかったのだろうが、顎に直結するようなそのもったりとした太さと耳の下の宿命的な肉の弛みは長い年月にわたる不摂生を表していた。そういうものはどれだけゴルフをやったところで取れないのだ。そして人

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

は年をとっていく。時は取り分をとっていく。僕が昔写真で見た牧村拓はほっそりとして、鋭い目をした青年だった。とくにハンサムなわけではなかったが、何かしら人目を引くものがあった。いかにも前途有望な新進作家という風貌だった。あれは何年前だろう？　十五年か十六年前のことだったろうか？　目つきにはまだ鋭さが残っていた。時々光線や角度によってその目は綺麗に澄んで見えることがあった。髪は短く、ところどころに白髪が混じっていた。たぶんゴルフのせいだろう、よく日焼けして、ラコステのワイン・レッドがよく肌の色にあっていた。もちろん彼はシャツのボタンは全部外していた。首が太すぎるのだ。ラコステのワイン・レッドのポロ・シャツを着こなすのはけっこうむずかしいのだ。首が細すぎると貧相に見える。太すぎると暑苦しく見える。兼ね合いが難しい。五反田君ならきっと上手く着こなすだろうなと僕は思った。おい、よせよ、もう五反田君のことは考えるな。

「君は何か書く仕事をしてるそうだな」と牧村拓は言った。

「書くというほどのことじゃないですね」と僕は言った。「穴を埋める為の文章を提供してるだけのことです。何でもいいんです。字が書いてあればいいんです。でも誰かが書かなくてはならない。で、僕が書いてるんです。雪かきと同じです。文化的雪かき」

「雪かき」と牧村拓は言った。そしてわきに置いたゴルフ・クラブにちらりと目をやった。「面白い表現だ」

「それはどうも」と僕は言った。

「文章を書くのって好きか？」

「今やってることに関しては、好きとも嫌いともいえないですね。そういうレベルの仕事じゃないから。でも有効な雪かきの方法というのは確かにありますね。コツとか、ノウハウとか、姿勢とか、力の入れ方とか、そういうのは。そういうのを考えるのは嫌いではないです」

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

「明快な答えだな」と彼は感心したように言った。
「レベルが低いと物事は単純なんです」
「ふうん」と彼は言った。そして十五秒ほど黙っていた。「その雪かきという表現は君が考えたのか？」
「そうですね、そうだと思う」と僕は言った。
「俺がどこかで使っていいかな？　その『雪かき』っていうやつ。面白い表現だ。文化的雪かき」
「いいですよ、どうぞ。別に特許をとって使ってるわけじゃないですから」
「君の言わんとすることは俺にもわかるよ」と牧村拓は耳たぶをいじりながら言った。「ときどき俺もそう感じる。こんな文章を書いて何の意味があるのかと。たまに。昔はこうじゃなかった。世界はもっと小さかった。手応えのようなものがあった。自分が今何をやっているかがちゃんとわかった。みんなが何を求めているかがちゃんとわかった。メディアそのものが小さかった。小さな村みたいだった。みんながみんなの顔を知ってた」
　そしてグラスのビールを飲み干し、瓶を取って両方のグラスに注いだ。僕は断ったが、無視された。
「でも今はそうじゃない。何が正義かなんて誰にもわからん。みんなわかってない。だから目の前のことをこなしているだけだ。雪かきだ。君の言うとおりだ」彼はそう言ってまた木の幹と幹との間に張られた緑のネットを眺めた。芝生の上には白いゴルフ・ボールが三十個か四十個落ちていた。
　僕はビールを一口飲んだ。
　牧村拓は次に自分が何を言うべきかを考えていた。考えるのに少し時間がかかる。でも本人はあまりそのことを気にしていない。みんながじっと彼の話を待つことに慣れているからだ。仕方ないから僕も彼の話が始まるのを待っていた。彼はずっと耳たぶを指でいじっていた。それはまるで新札の束を数えているみたいに見えた。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

「娘が君になついてる」と牧村拓は言った。「あれは誰にでもなつくわけじゃない。というか殆ど誰にもなつかない。俺となんかろくに口もきいてくれない。母親ともろくに口をきかないけど、少なくとも母親のことは尊敬してる。俺のことは尊敬してない。全然。馬鹿にさえしている。友達もまるでいない。何ヵ月か前から学校にも行ってない。家に籠もって一人でやかましい音楽ばっかり聴いてる。問題児と言ってもいいくらいだし、実際担任の教師からはそう言われた。他人とうまくやっていけない。でも君にはなついてる。どうしてかな?」

「どうしてでしょうね」と僕は言った。

「気が合うのかな?」

「そうかもしれないですね」

「娘のことはどう思う?」

僕は返事をする前に少し考えてみた。まるで面接試験をうけているような気がした。正直に言うべきなんだろうなと僕は思った。「難しい年齢です。ただでさえ難しいのに、家庭環境がひどすぎて修復不可能なくらい難しくなっている。誰もその世話をしてない。誰も責任を負おうとしない。話をする相手がいない。彼女の心を開いてやることのできる人間がいない。とても傷ついている。その傷を癒してやることのできる人間がいない。両親が有名すぎる。顔が綺麗すぎる。重い荷物を背負いすぎてる。そしてちょっと普通じゃないところがある。感じやすすぎるというか……ちょっと特殊なものがある。でも本来は素直な子です。きちんとかまってやれば、まともに育つ」

「でも誰もかまってない」

「そういうことですね」

彼は深く長い溜め息をついた。そして耳から手を放し、長いあいだその指先をじっと見ていた。「君の

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

言うとおりだ。まったくそのとおりだ。でもな、俺にはどうしようもないんだよ。まず第一に、離婚したときにきちんと書類交わしてるんだ。俺は一切ユキに構わないっていうさ。しかたなかったんだ。俺もあの頃ずいぶん女遊びしてたからさ、何を言える立場にもなかった。正確に言えば、今こうしてユキに会うのにも本当ならアメの許可がいるんだよ。下らん名前だろう、アメとユキだぜ。まあ、とにかくそういうことになってるんだ。それから第二にさっきも言ったように、ユキは全然俺になついてない。何を言ったって俺の言うことなんて聞きやしない。俺にはだからどうしようもないんだよ。娘のことは可愛いさ、そりゃ。たった一人の子供だもんな。でも駄目だ。手の出しようがない」

そしてまた緑のネットを見た。夕暮れの闇はもうずいぶん深くなっていた。芝の上に散らばった白いゴルフ・ボールは籠いっぱいの関節の骨を撒き散らしたみたいに見えた。

「でもだからといって手をこまねいているわけにもいかないんじゃないですか?」と僕は言った。「母親は自分の仕事で手いっぱいで、世界中とびまわっていて、子供のことを考える暇もない。子供がいることさえしょっちゅう忘れてしまう。金も渡さないで北海道のホテルの部屋に置き去りにして、そのことを思い出すのに三日かかってる。三日ですよ。東京に連れてかえったら娘は何処にも行かずに一人でアパートの部屋に閉じ籠もって、ロックを聴いて、フライド・チキンやらケーキやらばかり食べて暮らしている。学校にも行かない。友達もいない。そんなのどう考えてもやはりまともじゃないですよ。まあ、他人の家庭のことですからね、こういうのは余計な御世話かもしれない。でもひどすぎる。あるいは僕の考え方というのは、あまりにも現実的で常識的で中産階級的にすぎるんでしょうか?」

「いや、一〇〇パーセント君の言うとおりだよ」と牧村拓は言った。そしてゆっくりと肯いた。「実にそのとおりだ。俺としても一言もない。二〇〇パーセント君の言うとおりだ。そこでひとつ君に相談があるんだ。だからこそわざわざここまで来てもらった」

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

不吉な予感がした。馬が死んだ。インディアンの太鼓もやんだ。静かすぎる。僕は小指の先でこめかみを掻いた。

「つまりだな、君にユキの面倒を見てもらえないだろうかな」と彼は言った。「面倒を見るといっても大したことじゃない。時々あれと会ってくれるだけでいいんだ。一日に二時間か三時間。そして二人で話をして、まともな飯を一緒に食ってくれればいい。それだけでいいよ。仕事としてちゃんと金は払う。つまり言うなれば勉強を教えない家庭教師みたいなもんだと考えてくれればいい。君が今幾ら稼いでるかしらんが、それに近いものは保証できると思う。そしてそれ以外の時間は君の好きに使えばいい。ただ一日に何時間かユキに会ってほしいんだ。悪い話じゃないだろう？ それについてはアメにも電話して話した。あれは今ハワイにいるんだ。ハワイで写真を撮ってる。ざっと状況を説明したら、アメも君に頼むことには賛成した。あれもあれなりにユキのことは真剣に考えてるんだぜ。ただちょっと人間が変わってるだけなんだ。神経がまともじゃない。才能はあるんだけどな、すごく。頭がときどきポッて飛んじゃうんだ。ヒューズが切れるみたいに。すると何もかも忘れちまう。現実的なことになると、からきし駄目だ。引き算もろくにできない」

「よくわからないですね」と僕は力なく微笑みながら言った。「いいですか、あの子に必要なのは親の愛情なんですよ。誰かが無償で心から自分を愛してくれるという確信なんです。そういうものを僕が彼女に与えることはできないんです。そういうことができるのは親だけなんです。そのことを、あなたもあなたの奥さんもきちんと認識するべきです。それが第一。第二に、あの年代の女の子にはどうしても同じ年代の同性の友人が必要です。シンパシーを感じあえていろんなことをストレートに話しあえる同性の友人、そういう相手がいるだけでずいぶん楽になる。僕は男だし、歳も離れ過ぎている。それにですね、だいたいあなたも奥さんも僕のことなんか何も知らないじゃないですか？ 十三の女の子といえばある意味ではも

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

ユキはですよ、とても綺麗で、おまけに精神的に不安定な女の子だ。そんな子を何処の誰だかわからない男に託していいものなんですか？　僕について何を知っているんですか、いったい？　僕はさっきまで殺人に絡んで警察に引っ張られてたんですよ。もし僕が犯人だったらどうするんですか？」

「君が殺したのか？」

「まさか」と僕は溜め息をついて言った。親子で同じ質問をする。「殺してなんかいないですよ」

「じゃあ、いいじゃないか。俺は君のことを信用してる。君が殺してないっていうんなら、殺してないんだろう」

「どうして信用できるんですか？」

「君は人を殺すタイプじゃない。それに少女強姦するタイプでもない。それくらいは見ればわかる」と牧村拓は言った。「それに俺はユキの勘を信じてる。あの子にはね、昔からものすごく勘の鋭いところがあったんだ。普通の勘の鋭さとはちょっと違う。何というかな、時々気持ち悪くなるくらい鋭いんだ。霊媒みたいなところがある。一緒にいると、俺の見えない物をあれが見ているように感じることがたまにある。そういう感じってわかるか？」

「なんとなく」と僕は言った。

「そういうのは母親譲りだと思うんだよ。そういうエキセントリックなところ。ただし母親の方は芸術にそれを集中させている。そうすると、人はそれを才能と呼ぶ。しかしユキはそういう集中させるべきものをまだ持っていない。ただ無目的に溢れてるんだ。桶から水が溢れるみたいに。霊媒みたいなもんだよ。母親の系統の血だな、あれは。俺にはそういうところはあまりない。全然ない。エキセントリックじゃない。だから母親も娘も俺のことなんかろくに相手にしない。俺もあの二人と一緒に暮らすのはいささか疲れた。当分女の顔は見たくない。君にはきっとわからんぜ、あのアメとユキと一緒に暮らすのがどういう

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

ことかというのは。アメとユキだぜ、下らん。まるで天気予報だ。でも俺はもちろん二人とも好きだよ。今でもときどきアメに電話して話しする。でもな、二度と一緒に暮らしたいとは思わんよ。あれは地獄だ。俺に作家としての才能があったとしても――あったんだ――あの生活のせいできれいさっぱり消えたよ。正直言って。でも才能のなくなったわりには俺はよくやってきたと自分でも思うけどな。雪かきだ。君の言う有効な雪かきだ。上手い表現だ。何を話していたっけな？」

「僕が信用できるかどうかってことでしたが」

「そう。俺はユキの勘を信用する。ユキは君を信用している。だから俺は君を信用する。君も俺を信用していい。俺はそんな悪い人間じゃない。ときどきろくでもない文章を書くけど、悪い人間ではない」彼はまた唾払いして唾を地面に吐いた。「どう、やってくれないかな？　そのユキの面倒を見ることを？　君の言うことは俺にだってよくわかるさ。そういうことをするのは確かに親の役目だ。でもあれはね、ちょっと普通じゃないんだ。さっきも言ったように手の打ちようがないんだ。君しか頼れる相手がいない」

僕は自分のグラスの中のビールの泡をしばらく眺めていた。どうすればいいのか、僕にもよくわからなかった。不思議な一家だ。三人の変人と書生のフライデー。宇宙家族ロビンソンみたい。

「彼女とときどき会うのはかまいません」と僕は言った。「ただし毎日は会えない。僕にもやらなくちゃならないことがあるし、義務的に人に会うのは好きではない。会いたい時に会います。金は要りません。今のところ金には困ってないし、彼女と友達として付き合うからには僕がそれくらいの金は払います。そういう条件でしか引き受けようがないですね。彼女のことは僕も好きだし、会えれば僕としても楽しいでしょうね。でも何の責任も持てませんよ。それはいいですね。彼女がどうなったとしても、最終的な責任は言うまでもなくあなた方にあるんですからね。それをはっきりさせておくためにも金はもらえないですね」

牧村拓は何度か肯いた。耳の下の肉が揺れた。ゴルフではその肉のたるみは取れない。もっと根本的な生活の転換が必要なのだ。でもそれは彼にはできないだろう。できていればもっと前にやっているはずだ。

「君の言いたいことはよくわかるし、言ってることの筋も通ってる」と彼は言った。「君に責任を押し付けようとしているわけではない。責任なんか感じることはない。我々には君以外に選択肢がないからこうして頭を下げてお願いしてるんだ。責任云々なんてことは何も言ってない。金のことはまたいつかその時になったら考えよう。俺は借りは忘れずにちゃんと返す人間だからな。それだけは覚えておいてくれ。でも今はまあ君の言うとおりかもしれん。君にまかせる。君の好きなようにすりゃいい。金が必要だったら俺のところか、あるいはアメのところか、どちらでもいいから連絡してくれ。どっちも金には困ってない。遠慮しなくていい」

僕は何も言わなかった。

「みたところ君もなかなか頑固そうな男だな」と彼は言った。

「頑固ではないです。僕には僕なりの考え方のシステムというものがあるだけです」

「システム」と彼は言った。そしてまた耳たぶを指でいじった。「もうそういうものはあまり意味を持たないんだよ。手作りの真空管アンプと同じだ。手間暇かけてそんなもの作るよりはオーディオ・ショップに行って新品のトランジスタ・アンプを買った方が安いし、音だって良いんだ。壊れたらすぐ修理に来てくれる。新品を買う時には下取りだってしてくれる。考え方のシステムがどうこうなんて時代じゃない。そういうものが価値を持っていた時代もたしかにあった。でも今は違う。何でも金で買える。考え方だってそうだ。適当なのを買ってきて繋げばいいんだ。簡単だよ。その日からもう使える。AをBに差し込めばいいんだ。あっという間にできる。古くなったら取り換えりゃいい。その方が便利だ。システムなんて

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

ことにこだわってると時代に取り残される。小回りがきかない。他人にうっとうしがられる」

「高度資本主義社会」と僕は要約した。

「そうだ」と牧村拓は言った。そしてまたしばらく沈黙の中に沈みこんだ。

あたりはずいぶん暗くなっていた。近くで犬が神経質そうに吠えていた。誰かがつっかえながらモーツァルトのピアノ・ソナタを弾いていた。牧村拓は廊下に座って脚を組み、何事かじっと考えながらビールを飲んでいた。東京に帰って以来どうも奇妙な人間にばかり会ってるな、と僕は思った。五反田君、二人のハイ・クラスの娼婦（一人は死んだ）、二人組のタフな刑事、牧村拓と書生のフライデー。暗い庭を眺めながらぼんやりと犬の声やピアノの音に耳を澄ませていると、現実がだんだん溶解して闇の中に溶けて吸い込まれていってしまうような気がした。いろんな物がその本来の形を失って混ざりあい、意味を失ってひとつのカオスとなる。キキの背中を撫でる五反田君の優雅な指も、雪の降りしきる札幌の街も、「かっこう」と言う山羊のメイも、刑事がぱたぱたと手のひらを叩いていたプラスティックの定規も、暗い廊下の奥でじっと僕を待っている羊男の姿も、何もかもが溶けてひとつになっていった。疲れているんだろうか？と僕は思った。でも疲れてはいなかった。ただ現実がすうっと溶けていっているだけなのだ。溶けてひとつの丸いカオスの球になっている。まるである種の天体みたいなかたちに。そしてピアノが鳴って、犬が吠えている。誰かが何かを言っている。誰かが何かを僕に言っている。

「なあ」と牧村拓が僕に話しかけていた。

僕は顔を上げて彼を見た。

「君はその女の事を知ってたんじゃないのか？」と彼は言った。「その殺された女の事を。新聞で読んだ。ホテルで殺されたんだろう。身元不明って書いてあった。名刺だけが一枚財布に入ってて、その人物に事情を聞いていると出てた。君の名前は出てなかった。弁護士の話だと君は警察では何も知らないと突

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

っ張っていたらしいが、でも知らないわけじゃないんじゃないか？」
「どうしてそう思うんですか？」
「ただふと、さ」彼はゴルフ・クラブを手にとって刀のようにまっすぐに前にのばしてそれをじっと眺めた。「そういう気がしたんだ。何かをかばっているように俺には感じられる。ふとね。君と話していると、だんだんそういう感じがしてくる。細かいことにいちいちこだわるくせに、大きなことに対しては妙に寛大になる。そういうパターンが見えてくる。面白い性格だ。そういう意味ではユキに似てるよ。生き延びるのに苦労する。他人に理解されにくい。転ぶと命取りになる。そういう意味では君らは同類だよ。今度のことだってそうだぞ。警察は甘くないからな。今度は上手くいったが、次も上手く行くとは限らんぜ。システムもいいが、突っ張ると怪我することが多い。もうそういう時代じゃあないんだよ」
「突っ張ってるわけでもないんです」と僕は言った。「ダンス・ステップみたいなもんです。習慣的なものです。体が覚えてるんです。音楽が聞こえると体が自然に動く。回りが変わっても関係ないんです。すごくややこしいステップなんで、回りのことを考えてられないんです。あまりいろんなことを考えると踏み違えちゃうから。ただ不器用なだけです。トレンディーじゃない」
牧村拓はまた黙ってゴルフ・クラブを睨んでいた。
「変わってる」と彼は言った。「君は俺に何かを連想させる。何だろう？」
「何でしょうね？」と僕は言った。何だろう？　ピカソの「オランダ風の花瓶と髭をはやした三人の騎士」だろうか？
「でも俺は君のことが結構気にいったし、君という人間を信用するよ。悪いがユキの面倒は見てくれ。いつかきちんと礼はする。俺は借りは必ず返す人間だよ。そのことはさっき言ったよな？」
「聞きました」

CamScannerでスキャン

「結構」

「じゃあそれでいい」と牧村拓は言った。そしてゴルフ・クラブをそっと縁側に立てかけた。

「新聞には他にどんなことが出てました？」と僕は訊いた。

「他には殆ど何も出てないよ。ストッキングで絞殺された。一流ホテルというのは都会の盲点なんだと書いてあった。名前も何もわからない。身元を調べているとあった。それだけだ。よくある事件だよ。すぐにみんな忘れる」

「そうでしょうね」と僕は言った。

「でも忘れない人間もいる」と彼は言った。

「たぶん」と僕は言った。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

25

七時になってユキがふらりと戻ってきた。海岸を散歩していたのだ、と彼女は言った。どうする、飯でも食べていくか、と牧村拓が尋ねた。ユキは首を振った。おなかすいてないから、もう家に帰ると言った。

「じゃあ、また気が向いたら遊びに来いよ。今月はまだずっと日本にいると思うから」と父親は言った。そして僕に向かってわざわざ来てくれて有り難うと礼を言った。何もお構いできなくて申し訳なかった、と。どういたしまして、と僕は言った。

書生のフライデーが僕らを送ってくれた。庭の奥の駐車場にはジープ・チェロキーとホンダの750ccとオフロード用のバイクが見えた。

「ヘビー・デューティーな生活みたいですね」と僕はフライデーに言ってみた。

「やわじゃないですね」とフライデーはちょっと考えてから答えた。「いわゆる作家というタイプじゃないんです。何はともあれまず行動という人ですから」

「馬鹿みたい」と小さな声でユキが言った。

僕もフライデーも聞こえなかったふりをした。

CamScannerでスキャン

スバルに乗り込むとすぐにユキはおなかが減ったと言った。僕は海岸沿いの「ハングリー・タイガー」で車を停めて、ステーキを食べた。そしてアルコール抜きのビールを飲んだ。

「どんな話だったの？」と彼女はデザートのプディングを食べながら言った。

隠さなくてはならない理由もなかったので、僕は大体のところを説明した。

「そんなことだろうと思った」と彼女は顔をしかめて言った。「あの人の考えそうなこと。それで、あなたどうしたの？」

「断ったよ、もちろん。そういうのは僕向きじゃない。話の筋がまともじゃない。でもそれとは別に我々は時々会った方がいいんじゃないかと思う。お互いの為に。僕らは歳がずいぶん違うし、生活環境も考え方も感じ方も生き方もずいぶん違うかもしれないけれど、それでも二人でいろんなことを話し合えそうな気がする。そう思わない？」

彼女は肩をすぼめた。

「会いたくなったら君の方から電話してくればいい。人と人とが義務的に会うことなんて何もないんだ。会いたくなれば会えばいいんだ。僕らはお互いに誰にも言ってないことを打ち明けあって、秘密を共有している。そうだろう？　違う？」

彼女は少し迷ってから「うん」と言った。

「そういうのは放っておくと体の中でどんどん膨らんでくることがある。抑えがきかなくなる時があるんだ。時々空気抜きをしないと、爆発しちゃう。ボンッと。わかる？　そうなると生きていくのが難しくなる。何かを一人で抱えこむというのは辛いことなんだ。君だって辛いし、僕だってやはり辛いと感じるこ

となあえ。誰にも言えないし、誰もわかってくれない。でも僕らはお互いにそれがわかりあえる。正直に話しあえる」

彼女は肯いた。

「僕は君に対して何も強要しない。君が何か話したかったら僕のところに電話してくれればいい。これは君のお父さんの話とは何の関係もない。あるいは僕が君に対してものわかりの良いお兄さんなりおじさんなりの役を務めようと思っているわけでもない。僕らはある意味では対等なんだ。我々は助けあえると思う。その為にも僕らはたまに会った方がいい」

彼女は何も答えなかった。デザートを食べてしまうと、水をごくごくと飲んだ。そして隣のテーブルで太った一家が熱心に食事を頑張っている様子を横目でちらちらと見ていた。両親と娘が一人と小さな男の子が一人。みんな見事に太っていた。僕はテーブルに肘をついて、コーヒーを飲みながらユキの顔を眺めていた。本当に綺麗な子だ、と僕は思った。じっと見ていると心のいちばん深い部分に小さな石を投げ込まれたような気がする。そういう種類の美しさなのだ。くねくねと穴が複雑に折れ曲がっているし、そのすごく奥の方だから普通なら届きっこないのだが、彼女はそこにきちんと小石を放り込むことができるのだ。僕が十五だったら恋に落ちていたな、と僕は二十回目くらいに改めて思った。でも十五の僕は彼女の気持ちなんてまず理解できなかっただろう。今はある程度理解できる。僕なりにかばってやることもできる。でも僕はもう三十四で、十三の女の子に恋をしたりはしない。上手くいかないものだ。

同級生たちが彼女を苛める気持ちというのは僕にもわからないではなかった。彼女は多分彼らの日常性を越えて美しすぎるのだ。そして鋭すぎる。おまけに彼女の方からは決して彼らに歩み寄ろうとはしない。だから彼らは恐怖し、そしてヒステリックに彼女を苛めるのだ。彼女によって自分たちの親密な共同体が不当におとしめられているように感じるのだ。そこが五反田君と違うところだ。五反田君は自分が他

CamScannerでスキャン

人に与える印象の強さをよく認識し、それをきちんとセーブしていた。それを制御していた。彼は他人に恐怖を与えたりはしなかった。彼の存在が知らず知らず大きくなりすぎた時にはにっこりと微笑んで冗談を言った。立派な冗談である必要はなかった。ただ感じよくにっこりとして普通の冗談を口にすればいいのだ。そうするとみんなもにっこりとして楽しい気持ちになることができた。いい奴なんだ、とみんなは思った。それが——たぶん本当に良い男なんだろう——五反田君だった。でもユキはそうではなかった。ユキは自分一人を抱えて生きていくだけで精一杯なのだ。まわりの人間の感情の動きまで細かく考えてそれに細かく対処していくような余裕がないのだ。そしてその結果他人を傷つけ、またそれによって他人をとおして自分も傷つくことになるのだ。五反田君とは根本的に違っているのだ。ハードな人生だ。十三の女の子にとってはいささかハードすぎる。大人にとってさえそれはハードなことなのだ。

この先彼女がどうなっていくのか、僕には予想がつかなかった。うまくいけば、母親のように自分を表現するための何かの方法を発見し獲得して、芸術的な分野で生きていくことになるのかもしれない。たぶんそれがどういう分野であれ、彼女の持っている力の方向性に合ってさえいれば、彼女は他人に認められるだけの仕事をするだろう、と僕は思った。根拠はない。でもそういう気がした。牧村拓が言うように、彼女の中には力があり、オーラがあり、才能がある。人並み外れたものがある。雪かき的じゃないものが。

あるいは彼女は十八か十九になるまでにはごく普通の女の子に変わっているかもしれない。そういう例を僕は幾つか見ている。十三か十四の透き通るように美しく鋭い少女が、思春期の階段を上るにつれてすこしずつその輝きを失っていく。手を触れただけで切れてしまいそうな鋭さが鈍化していく。そして「綺麗ではあるけれど、それほど印象的ともいえない」娘になる。でも本人はそれはそれで幸せそうに見える。

CamScannerでスキャン

ときもそのどちらか過程を経ていくことになるのか、もちろん僕には見当もつかなかった。奇妙なことには人間にはそれぞれにピークというものがある。そこを登ってしまえば、あとは下りるしかない。それはどうしようもないことなのだ。そしてそのピークが何処にあるのかは誰にもわからない。まだ大丈夫だろうと思っている、そして突然その分水嶺がやってくる。誰にもわからない。あるものは十二歳でピークに達する。そしてあとはあまりぱっとしない人生を送ることになる。あるものは死ぬまで上り続ける。あるものはピークで死ぬ。多くの詩人や作曲家は疾風のように生きて、あまりにも急激に上りつめたが故に三十に達することなく死んだ。パブロ・ピカソは八十を過ぎても力強い絵を描き続け、そのまま安らかに死んだ。これぱかりは終わってみなくてはわからないのだ。

俺はどうなんだろう、と僕は考えてみた。

ピーク、と僕は思った。そんなものどこにもなかった。振り返ってみると、それは人生ですらないような気がする。少し起伏はあった。こそこそと登ったり下りたりはした。でもそれだけだった。殆ど何もしていない。何も生み出していない。誰かを愛したこともあったし、誰かに愛されたこともあった。でも何も残っていない。奇妙に平坦で、風景が平板だ。まるでビデオ・ゲームの中を歩いているみたいな気がする。パックマンみたいだ。ぱくぱくぱくと迷路の中の点線を食べていく。無目的に。そしていつか確実に死ぬ。

あんた幸せにはなれないかもしれない、と羊男が言った。だから踊るしかないんだよ、みんなが感心するくらい上手く。

僕は考えるのをやめて少し目を閉じていた。

目を開けるとユキがテーブルの向かいから僕をじっと見ていた。

「大丈夫？」と彼女は言った。「何だか参ってるみたい、すごく。何か私、ひどいこと言った？」

CamScannerでスキャン

僕は微笑んで首を振った。「いや、君は何も言ってない」
「嫌なこと考えてたのね？」
「そうかもしれない」
「そういうことよく考える？」
「時々、だね」
ユキは溜め息をついてしばらく紙ナプキンをテーブルの上で折って遊んでいた。「すごく寂しくなることある？　つまり、夜中なんかにそういうことをふと考えて？」
「もちろんある」と僕は言った。
「ねえ、どうして今ここで急にそんなこと考えたの？」
「たぶん君が美しすぎるからだ」と僕は答えた。
ユキは父親と同じような空虚な目つきでしばらく僕の顔を見ていた。それから静かに首を振った。何も言わなかった。

*

夕食の勘定はユキが払ってくれた。パパがいっぱいお金くれたからいいのよ、と彼女は言った。そして勘定書を持ってレジに行き、ポケットから一万円札をまとめて五、六枚ひっぱりだして、そのうちの一枚で勘定を払い、釣り銭をろくに数えもせずまた革ジャンパーのポケットに突っ込んだ。
「あの人、私にお金渡せばそれでいいと思ってんのよ」と彼女は言った。「馬鹿みたい。だから今日は私が御馳走してあげるわよ。私たち対等なんでしょ、ある意味では？　いつも御馳走されてばかりだから、たまにはいいじゃない」

CamScannerでスキャン

「御馳走さま」と僕は言った。「でも後学のために一応言うなら、そういうのはクラシックなデートのマナーには反してる」
「そうかしら？」
「デートで御飯を食べたあとで、女の子は自分で勘定書をつかんでレジで金を払ったりしちゃいけない。男にまず払わせて、あとで返す。それが世間のマナーなんだ。男としてのプライドを傷つける。僕はもちろん傷つかない。僕はどのような観点から見てもマッチョな人間じゃないから。でも僕はいいけど、気にする男も世間にはけっこう沢山いる。世界はまだまだマッチョなんだ」
「馬鹿みたい」と彼女は言った。「私、そういう男とデートなんかしないもの」
「それはまあ一つの見識だな」と僕は言った。そして駐車場からスバルを出した。「でも人は理不尽に恋に落ちることがある。より好みできないこともある。それが恋というものだ。君もブラジャーを買ってもらえるくらいの歳になったらたぶんそれがわかる」
「持ってるって言ったでしょう」と彼女は拳で思いきり僕の肩を叩いた。それで僕はもう少しで赤く塗られた大きなごみ箱に車をぶっつけそうになった。
「冗談だよ」と僕は車を停めて言った。「大人の世界では我々はみんな冗談を言って笑いあうんだよ。あるいはそれは下らない冗談かもしれない。でも君もそれに馴れなくちゃいけない」
「ふん」と彼女は言った。
「ふん」と僕も言った。
「馬鹿みたい」と彼女は言った。
「馬鹿みたい」と僕も言った。
「真似しないでよ」と彼女は言った。

僕は真似をやめた。そして車を駐車場から出した。

「でも今みたいに運転してる人間をぶったりしちゃ駄目だよ、冗談抜きで」と僕は言った。「そんなことしたらどっかにぶつかって、二人とも死んでしまうことになる。これがデート・マナーの第二だ。死なないで生き延びること」

「ふん」とユキは言った。

*

帰りの車の中ではユキは殆ど口をきかなかった。彼女は体の力を抜いてぐったりとした姿勢でシートにもたれ、何かを考えていた。ときどき眠っているようだったが、起きている時と眠っている時の違いはあまりなかった。もうテープも聴かなかった。僕はためしにジョン・コルトレーンの「バラード」のテープをかけてみたが、彼女はとくに文句は言わなかった。何が鳴っているのか気づきもしないようだった。僕はコルトレーンのソロにあわせて小さな声でハミングしながら車を走らせた。

湘南から夜に東京に帰ってくる道は退屈な道だ。僕は前の車のテール・ランプにずっと神経を集中させていた。別に話すこともない。首都高速に入ると、彼女は身を起こしてずっとガムを噛んでいた。そして一本だけ煙草を吸った。三、四回吹かして窓の外に捨てた。二本吸ったら文句を言おうと思ったが、一本しか吸わなかった。勘がいいのだ。僕の考えていることがわかる。引き際というものを心得ている。

赤坂の彼女のアパートの前で僕は車を停めた。そして「着いたよ、お姫様」と言った。

彼女はガムを包装紙にくるんでダッシュボードの上に置いた。そしてけだるそうにドアを開けて車から降り、そのまま行ってしまった。さよならも言わず、ドアも閉めず、後ろも振り返らず。複雑な年頃なのだ。あるいはただ単に生理なのかもしれない。でもこういうのってまるで五反田君の出ていた映画の筋み

CamScannerでスキャン

たいだな、と僕は思った。傷つきやすく複雑な年頃の少女。いや、五反田君なら僕よりもっとずっと上手く手際よくやるだろう。彼が相手ならユキだってボオッとして恋をしてしまうかもしれない。そうしないと映画にならないから。そして……やれやれまた五反田君のことを考えている。僕は頭を振ってから、助手席に移って体を伸ばしてドアを閉めた。ばたん。そしてフレディー・ハバードの「レッド・クレイ」をハミングしながら家に帰った。

＊

朝起きて、僕は駅まで新聞を買いに行った。九時前だったので、通勤する人々が渋谷の駅前を渦巻いていた。春だというのに、微笑んでいる人は数えるほどしかみあたらなかった。そしてそれだってあるいは微笑ではなくて、ただ顔がひきつっていただけなのかもしれなかった。僕は売店で新聞を二紙買い、ダンキン・ドーナツでドーナツを食べ、コーヒーを飲みながらそれを読んだ。どちらの新聞にもメイの記事はもう載っていなかった。ディズニーランドが開園することやら、ヴェトナムとカンボジアが戦争していることやら、都知事選挙のことやら、中学生の非行のことやらが載っていた。でも赤坂のホテルで美しい若い女が絞殺されたことについてはもうただの一行も触れられてはいなかった。牧村拓の言ったように、ありふれた事件なのだ。ディズニーランドの開園なんかとは比べ物にならない。そんな事件があったことなんて、みんなすぐに忘れてしまう。そしてもちろん忘れない者も何人かいる。僕もその一人だ。殺人者もその一人だ。あの二人の刑事も忘れないだろう。

僕は何か映画でも見ようと思って新聞の映画欄を開いてみた。「片想い」はもう終わっていた。それで僕は五反田君のことを思い出した。少なくとも彼にはメイのことを知らせておくべきだろう。もし何かの拍子で彼が取り調べられでもして、そこで僕の名前がでてきたら、僕は非常にまずい立場に立たされるこ

CamScannerでスキャン

とになる。警察でまた絞りあげられることを想像しただけで頭が痛んだ。
僕はダンキン・ドーナツのピンク電話で五反田君のマンションに電話をかけてみた。もちろん彼は出なかった。留守番電話だった。僕はちょっと大事な話があるので連絡をほしいと言った。そして新聞をごみ箱に捨てて家に帰った。歩きながらどうしてヴェトナムとカンボジアが戦争なんかしてるんだろうと思った。よくわからない。複雑な世界だ。

調整の為の一日だった。

やらなくてはならないことが沢山あった。そういう一日がある。現実的になって、現実的な現実と正面から取り組まねばならない一日。

まず僕は何枚かのシャツをクリーニング屋に持っていき、何枚かのシャツを持って帰ってきた。そして銀行に寄って現金を出し、電話料金とガス料金を払った。家賃もふりこんでおいた。靴屋に寄って、踵を新しい物にかえてもらった。目覚まし時計の電池と生のカセット・テープを六本買った。そして部屋に戻ってFENを聴きながら部屋の片づけをした。浴槽を綺麗に洗った。冷蔵庫の中の物を全部ひっぱりだして内側を綺麗に拭き、食品を点検し、整理した。ガス・レンジを磨き、換気扇の汚れをおとし、床を拭き、窓を磨き、ごみをまとめた。シーツと枕カバーを換えた。掃除機をかけた。それだけやるのに二時までかかった。スティックスの「ミスター・ロボット」にあわせて歌いながら雑巾でブラインドを拭いていると、電話のベルが鳴った。五反田君からだった。

「一度直接会ってゆっくり話せないかな？　電話じゃちょっとまずい話なんだ」と僕は言った。

「いいよ。でもそれ、急ぐのかな？　今いささか仕事がたてこんでるんだよ。映画とTVのビデオ撮りが重なってるんだ。二、三日経つと楽になってけっこうゆっくりできるんだけどね」

「忙しいところを申し訳ないとは思う。でも人が一人死んでいるんだ」と僕は言った。「僕らの共通の知

CamScannerでスキャン

人で、警察が動いてる」
彼は電話口で黙りこんだ。物静かで能弁な沈黙だった。僕はそれまで、沈黙というのはただじっと黙っているだけのことだと思っていた。でも五反田君の沈黙はそうではなかった。それは五反田君が身につけている他の全ての資質と同じようにスマートでクールでインテリジェントだった。変な言い方だとは思うけれど、耳を澄ませれば彼の頭が最高速度で回転している音が聞こえそうだった。「わかった。今夜会えると思う。けっこう遅くなるかもしれないけど、それはかまわないかな？」
「かまわない」
「たぶん一時か二時に電話をかけることになると思うよ。悪いけど今のところその前にはどうしても時間があけられないんだ」
「いいよ、構わない。起きて待ってる」
電話を切ってから、その会話をひとつひとつ全部思い出してみた。
でも人が一人死んでるんだ。僕らの共通の知人で、警察が動いてる。
これじゃまるで犯罪映画じゃないか、と僕は思った。五反田君が関わると、何も彼もが映画のシーンみたいになる。どうしてだろう？　現実が少しずつ後退していくような気がする。自分が与えられた役をこなしているような気分になってくる。たぶん彼はそういうオーラのようなものを持っているのだろう。僕はサングラスをかけてトレンチ・コートの襟を立て、マセラティから下りてくる五反田君の姿を想像した。チャーミングだ。ラジアル・タイヤの宣伝みたいだ。僕は頭を振ってブラインドの残りを拭いた。もうよせ、今日は現実的になる日なのだ。

＊

五時に僕は原宿まで散歩して、竹下通りでエルヴィスのバッジを捜した。でもエルヴィスのバッジは簡単にはみつからなかった。キッスやジャーニーやらアイアン・メイデンやらAC／DCやらモーターヘッドやらマイケル・ジャクソンやらプリンスやら、そういうのはいっぱいあったが、エルヴィスのはなかった。でも三軒目の店でやっと「ELVIS・THE KING」というのをみつけて、それを買った。僕は冗談で店員にスライ&ザ・ファミリー・ストーンのバッジはないかと尋ねてみた。小型の風呂敷くらいあるリボンをつけた十七か十八の女の店員が啞然とした顔で僕を見た。

「それ何？　聞いたことない。ニュー・ウェーブとかパンクとかそういうの？」

「まあ、だいたいその中間くらいだけど」

「最近新しいのいっぱい出てくんのよね。ホント。ウソみたい」と彼女は言って舌打ちした。「とてもついてけない」

「まったく」と僕は同意した。

僕はそれから「つる岡」でビールを飲み、天麩羅を食べた。そのようにして漫然と時が流れ、日が沈んだ。サンライズ・サンセット。僕は一人の平面的パックマンとしてあてもなくただぱくぱくと点線を食べ続ける。事態は全然進展していないように感じられる。僕は何処にも近づいていないように思える。途中からどんどん伏線が増えてきてしまった。そして肝心のキキとつながる線はぷっつりと跡絶えてしまった。僕は脇道をどんどん進んでいるような気がする。メイン・イベントにたどりつく前に付属演芸に関わって時間と労力を無駄に費やしているような気がする。でもいったいメイン・イベントは何処でやっているんだろうか？　そして本当にやっているんだろうか？

CamScannerでスキャン

夜中までやることがなかったので、七時から渋谷の映画館でポール・ニューマンの「評決」を見た。悪くない映画だったが途中で何度も考え事をしたので映画の筋がずたずたに分断されてしまった。スクリーンを見ていると、そこにキキの裸の背中がふっと現れるような気がしてきて、それでつい彼女のことをいろいろと考えてしまうのだ。キキ――君は僕に何を求めているのだ？

映画のエンドマークが出ると、僕は殆ど筋のわからないままに席を立って外に出た。街を少し歩き、時々行くバーに入ってナッツを齧りながらウォッカ・ギムレットを二杯飲んだ。そして十時過ぎに家に戻って、本を読みながら五反田君からの電話を待った。僕は時々電話機の方にちらっと目をやった。電話機がじっと僕を見ているような気がしたからだ。神経症的だ。

僕は本を放り出してベッドに仰向けに寝転び、土に埋めた猫のいわしのことを考えてみた。あれはもう骨だけになってしまっているんだろうな、と僕は思った。土のなかは静かだろう。そして骨もまた静かだ。骨は真っ白で綺麗だ、と刑事は言った。そして何も語らない。僕は林の中の土の下にそれを埋めたのだ。西友ストアの紙袋につめて。

何も語らない。

気がつくと無力感が静かに音もなく、水のように部屋に満ちていた。僕はその無力感をかきわけるようにして浴室に行き、「レッド・クレイ」を口笛で吹きながらシャワーを浴び、台所に立って缶ビールを飲んだ。そして目を閉じてスペイン語で一から十まで数え、声を出して「おしまい」と言って、手をぱんと叩いた。それで無力感は風に吹き飛ばされるようにさっと消えた。これが僕のおまじないなのだ。一人で暮らす人間は知らず知らずいろんな能力を身につけるようになる。そうしないことには生き残っていけないのだ。

26

五反田君からの電話がかかってきたのは十二時半だった。

「悪いんだけれど、もしできたら今から君の車で僕の家まで来てくれないかな?」と彼は言った。「僕の家の場所は覚えてる?」

覚えてる、と僕は言った。

「とてもごたごたしていて、結局うまく時間がとれなかったんだ。でも車の中で話せると思う。君の車の方がいいだろうね。運転手の耳に入るとまずいんだろう?」

「まあ、そうだね」と僕は言った。「今からここを出る。二十分くらいでそちらに着くと思うよ」

「じゃあ、あとで会おう」と彼は言って電話を切った。

僕は近所の駐車場からスバルを出して、麻布の彼のマンションまで行った。十五分しかかからなかった。玄関の「五反田」と本名の書いてあるベルを押すと、彼はすぐに下りてきた。「遅くなって悪かったね。すごく忙しかった。ひどい一日だった」と彼は言った。「これからまだ横浜まで行かなくちゃならない。明日の朝早く映画の撮影があるんだ。それまでに少し眠っておきたい。ホテルはとってある」

「じゃあ横浜まで送ろう」と僕は言った。「そうすればその間に話ができる。時間が節約できる」

「そうしてくれると助かるね」と彼は言った。

五反田君はスバルに乗り込むと、珍しそうに車内を見回した。

CamScannerでスキャン

「落ち着く」と彼は言った。
「心がかよいあってるから」と僕は言った。
「なるほど」と彼は言った。
五反田君は驚いたことに本当にトレンチ・コートを着ていた。そしてそれが実によく似合った。サングラスはかけていなかった。そのかわりにごく普通の透明なレンズの眼鏡をかけていた。その眼鏡もとてもよく似合っていた。とてもインテリジェントに見えた。僕は深夜のすいた道路を第三京浜の入口に向かって車を走らせた。
彼はダッシュボードの上にあったビーチ・ボーイズのテープを手にとって、しばらくそれを眺めていた。
「懐かしいね」と彼は言った。「昔よく聴いたな。中学校のころだね。ビーチ・ボーイズ――何というか、特別な音だった。親密でスイートな音だ。いつも太陽が輝いていて、海の香りがして、となりに綺麗な女の子が寝転んでいるような音だ。唄を聴いているとそういう世界が本当に存在しているような気持ちになった。いつまでもみんなが若く、いつまでも何もかもが輝いているようなそういう神話的世界だよ。永遠のアドレセンス。お伽噺だ」
「そう」と僕は言った。そして肯いた。「そのとおりだ、実に」
彼はまるで重さを測るように手のひらの上にテープを載せていた。
「でも、そういうのはもちろんいつまでも続かない。みんな年をとる。世の中も変わる。神話というのはみんないつか死んでしまう。永遠に存続するものなんて何もない」
「そのとおり」
「そういえば、『グッド・ヴァイブレーション』からあとのビーチ・ボーイズは殆ど聴いてないね。何とな

CamScannerでスキャン

く聴く気がなくなっちゃったんだ。もっとハードなものを聴くようになった。クリーム、ザ・フー、レッド・ツェッペリン、ジミ・ヘンドリックス……。ハードな時代になったんだ。ビーチ・ボーイズを聴く時代じゃなくなった。でも今でもよく覚えてるよ。『サーファー・ガール』とかね。お伽噺だ。でも悪くない」

「悪くない」と僕は言った。「でも『グッド・ヴァイブレーション』以後のビーチ・ボーイズも悪くはないよ。聴く価値はある。『20／20』も『ワイルド・ハニー』も『オランダ』も『サーフズ・アップ』も悪くないLPだ。僕は好きだよ。初期のものほどの輝きはない。内容もばらばらだ。でもそこにはある確かな意志の力が感じられるんだ。ブライアン・ウィルソンがだんだん精神的に駄目になって、最後には殆どバンドに貢献しないようになって、それでも何とかみんなで力をあわせて生き残っていこうとする、そういう必死な思いが伝わってくるんだ。でも確かに時代にはあわなかった。君の言うとおりだ。でも悪くない」

「今度聴いてみるよ」と彼は言った。

「きっと気に入らないよ」と僕は言った。

彼はテープをデッキに入れた。「ファン・ファン・ファン」が流れた。五反田君はテープにあわせてしばらく小さな音で口笛を吹いていた。

「懐かしい」と彼は言った。「ねえ、信じられるかい？　これが流行ったのはもう二十年も前なんだぜ」

「まるでつい昨日みたいに思える」と僕は言った。

五反田君は決め兼ねるような顔つきでしばらく僕を見ていた。それからにっこりと笑った。「時々君は複雑な冗談を言うね」と彼は言った。

「みんなあまり理解してくれないけどね」と僕は言った。「僕が冗談を言うと、大抵みんな本気にとるん

CamScannerでスキャン

だ。ひどい世の中だ。冗談ひとつ言えない」
「でもきっと僕の住んでいる世界よりはずっとずっとましだよ」と彼は笑いながら言った。「あそこでは弁当箱に玩具の犬の糞を入れるのが高級な冗談だと思われてるんだ」
「本物を入れる方が冗談としては高級だ」
「実に」
それからしばらく、僕らは黙ってビーチ・ボーイズの音楽を聴いていた。「カリフォルニア・ガールズ」、「409」、「キャッチ・ア・ウェイブ」、そんな昔のイノセントな曲ばかりだった。細かい雨が降り始めていた。僕は時々ワイパーを動かし、しばらく止め、それからまた動かした。その程度の雨だった。柔らかな春の雨。
「中学校の頃っていうと、君はどんなことを思い出す？」と五反田君が僕に訊いた。
「自分という存在のみっともなさとおぞましさ」と僕は答えた。
「その他には？」
僕は少し考えてみた。「君が理科の実験の時間にガス・バーナーに火を点けていたことを思い出すね」
「どうしてまた？」と不思議そうに彼は言った。
「火の点けかたがね、何というか、とてもシックだった。君が火を点けると、それは人類史上に残る偉業みたいに見えた」
「それはいささかオーバーだぜ」と彼は笑って言った。「でも君の言わんとすることはまあわかる。君の言わんとするのはつまり……ショウ・アップのことだろう。うん、何度か人にそう言われたことはあるよ。そしてそのことで昔は傷ついたもんだよ。僕自身はショウ・アップしているつもりなんて全くなかったからね。でも、していたんだろうな、多分。自然に。小さい時からずっとみんな僕のことを見ていた。

CamScannerでスキャン

注目を浴びていた。だから当然意識する。何をするにも多少演技的になる。そういうのが身についちゃうんだね。要するに、演じていたんだな。だから俳優になった時は、なんとなくホッとしたもんだ。これからはもう堂々と演じられるわけだからね」彼は膝の上で両方の手のひらをぴったりと重ねあわせた。そしてそれをしばらく眺めていた。「でもね、僕はそれほどひどい人間じゃないよ。本当は——というか、本来はね。それほどひどい人間じゃない。僕は僕なりに素直な人間だし、また傷つきやすくもある。ずっと仮面をかぶって生きているわけじゃない」

「もちろん」と僕は言った。「それに僕はそういう意味で言ったんじゃないよ。僕の言いたかったのはただ単に君のガス・バーナーの火の点け方がシックだったっていうことだけだよ。もう一度見てみたいくらいだ」

彼は楽しそうに笑い、眼鏡を外してハンカチで拭いた。とてもチャーミングな拭き方だった。「いいよ、じゃあ今度やってみよう」と彼は言った。「ガス・バーナーとマッチを用意しておくよ」

「失神したときのために枕を持っていく」と僕は言った。

「いい考えだ」と彼は言った。そしてくすくす笑ってから、また眼鏡をかけた。少し考えて、カー・ステレオのボリュームを下げた。「もしよかったら、その、君の言った死んだ人間の話をしないか、そろそろ?」

「メイ」と僕はワイパーの向こう側を睨みながら言った。「彼女が死んだんだ。殺された。赤坂のホテルで、ストッキングで絞め殺された。犯人はわかってない」

五反田君はしばらくぼんやりとした目で僕を見ていた。話を理解するのに三秒か四秒かかった。そして理解すると顔が歪んだ。大きな地震で窓枠が歪むような歪み方だった。僕は彼の表情の変化を何度かちらっと横目で眺めた。彼は本当にショックを受けているようだった。

CamScannerでスキャン

「殺されたのは何日？」と彼は訊いた。

僕は正確な日にちを教えた。五反田君は気持ちを整理するようにまたしばらく黙りこんだ。

「ひどい」と彼は言った。そして何度か首を振った。「それはちょっとひどすぎる。殺す理由なんて何もない。良い子だった。それに――」彼はまた何度か頭を振った。

「良い子だったよ」と僕は言った。「お伽噺みたいに」

彼は体の力を抜いて深い溜め息をついた。疲労が急激に彼の顔を覆っていった。もうこれ以上留めておくことはできないというように。彼はその疲労をずっと体の中のどこか人目につかないところに留めておいたのだ。不思議な男だ、と僕は思った。そんなことができるのだ。疲労した五反田君はいつもより少し老けて見えた。でも疲労でさえ彼が身につけるとチャーミングに見えた。人生のアクセサリーのように見えた。でももちろんそういう言い方は不公平だった。彼だって本当に疲れて、傷ついていたのだ。僕にはそれを感じ取ることができた。ただ何をしてもチャーミングに見えてしまうだけのことなのだ。ちょうど何に手を触れてもそれが黄金に変わってしまうあの伝説の王様のように。

「よく三人で朝まで話をした」と五反田君は静かに言った。「僕とメイとキキで。楽しかった。親密な気分になれた。君はお伽噺って言う。でもお伽噺だってそう簡単には手に入らない。だから僕は大事にしていた。でもひとつずつ消えてなくなっていく」

それからずっと二人とも黙っていた。僕はじっと前方の路面を眺め、彼はダッシュボードの上を睨んでいた。僕はワイパーを止めたり動かしたりした。ビーチ・ボーイズは小さな声で古い唄を唄っていた。太陽とサーフィンと自動車レースについての唄を。

「どうして君は彼女が死んだことを知ったの？」と五反田君が僕に訊いた。

「警察に呼ばれた」と僕は説明した。「彼女が僕の名刺を持っていたんだ。この間渡したんだ。キキのこ

CamScannerでスキャン

とで何かわかったら教えて欲しいって。メイはそれを財布のいちばん奥に入れていた。どうしてそんなもの持ち歩いていたんだろう？ でもとにかく持っていたんだ。そして具合の悪いことに、それが彼女の身元確認に繋がる唯一の遺留品だった。だから僕が呼ばれた。死体写真を見せられて、この女を知っているかと尋ねられた。タフな刑事が二人だよ。知らないって言った。嘘をついた」

「どうして？」

……

「どうして？ 君に紹介されて二人で女を買いましたって言えば良かったか？ そんなこと言ったらどうなると思う？ おいどうしたんだよ、君の想像力は何処に行った？」

「悪かった」と彼は素直に謝った。「僕も少し混乱してるんだ。余計な質問だったな。それくらい考えたらわかる。下らん。それでどうなった？」

「警察は全然信用しなかった。プロだからね、誰かが嘘をついていれば匂いでわかる。三日間絞りあげられた。法律にひっかからないように、体にあとが残らないように、徹底的にやられた。かなりきつかった。もう年だよ。昔とは違う。他に寝る場所もなかったので、留置所で寝た。鍵はかけられなかった。でも鍵がかかってなくても、留置所は留置所だ。気持ちが暗くなる。弱気になる」

「わかるよ。僕も昔二週間入ってた。完黙した。とにかく完黙しろって言われてたから完黙した。でも怖かった。二週間一度も太陽を見ることができなかった。もう二度と出られないかと思ったよ。そういう気持ちになるんだ。あいつらは人を打ちのめす。ビール瓶で肉を叩くみたいに。やり方を知ってるんだ、どうすれば人が参るかってのをさ」彼は手の指の爪をじっと眺めていた。「でも三日間絞られて、結局何も言わなかったの？」

「当然じゃないか。途中でまさか『実は……』って言いだすわけにもいかないだろう。そんなことしたら、それこそ帰れなくなってしまうよ。ああいうところでは一度口に出した事は最後まで死守するしかないん

た。たとえ何があろうとしらを切りとおすしかないんだ」
五反田君はまた少し顔を歪めた。「悪かったな。僕が彼女を紹介したばっかりに、君をひどい目にあわせてしまった。巻き込んじゃった」
「君が謝ることはない」と僕は言った。「あの時はあの時だよ。あれは僕だって楽しかった。そしてこれはこれだ。彼女が死んだのは君のせいじゃない」
「それはそうだ。でもとにかく君は僕のために警察に嘘をついてくれた。僕を巻き込まないために一人でひどい目にあった。それは僕のせいだ。僕が絡んでいたからだ」
僕は信号を待つ間、彼の目を見ながら僕にとって一番肝心な部分を彼に説明した。「ねえ、そのことはもういいんだよ。気にしなくていい。あやまらなくていい。感謝しなくていい。君には君の立場があるし、僕はそれを理解している。問題はね、僕が彼女の身元を明らかにできなかったってことなんだ。彼女にも身内はいるだろうし、犯人だって捕まえて欲しかった。僕だって全部しゃべってしまいたかった。でもしゃべれなかった。僕はそれが辛いんだよ。メイだって名前もないまま一人で死んでいるのは寂しいだろう?」
彼は長い間じっと目を閉じて考え込んでいた。眠りこんでしまったんじゃないかという気がしたほどだった。ビーチ・ボーイズのテープがひととおり終わったので、僕はボタンを押してテープを取り出した。あたりが急にしんとした。車のタイヤが薄い水の膜をはねるシュウウウウッという均一な音が聞こえるだけだった。真夜中なんだ、と僕は思った。
「僕が警察に電話するよ」と五反田君は目を開けて静かに言った。「匿名で電話する。そして彼女の属していたクラブの名前を言う。そうすれば彼女の身元もわかるし捜査の役に立つだろう」
「素晴らしい」と僕は言った。「君は本当に頭がいい。なるほどそういう手があった。そうすれば警察は

クラブを手入れする。メイが殺された何日か前に、君が彼女を指名して家に呼んだことがわかる。当然君は警察に呼ばれる。そうなったら僕が三日間絞りあげられてもじっと黙って秘密を守りとおした意味がどこにある？」

彼は肯いた。「君の言うとおりだ。うん、まったく僕はどうかしてる。混乱してる」

「混乱してる」と僕は言った。「そういう時はじっとしてればいいんだ。そうすればみんな過ぎ去っていく。時間の問題だ。ホテルで女が絞め殺されただけだ。よくあることだし、今にみんな忘れる。君が責任を感じる筋合いはない。君はただ首をすくめて静かにしてればいいんだ。何もしなくていい。今ここで君が余計なことをすると話がこじれる」

少し声が冷たすぎたかもしれない。言い方がきつすぎたかもしれない。でも僕にだって感情というものはある。僕にだって……。

「悪かった」と僕は言った。「君を責めてるんじゃないんだ。ただ僕だって辛かったんだ。あの子に対して何もしてやれなかった。それだけだよ。君のせいじゃない」

「いや、僕のせいだ」と彼は言った。

沈黙が重くなってきたので、僕は新しいテープをかけた。ベン・E・キングが「スパニッシュ・ハーレム」を唄っていた。横浜の市内に入るまで僕らはそれぞれに黙りこんでいた。でもその沈黙のせいで僕は五反田君にこれまでになかった親密な感情を抱くことができた。僕は彼の背中に手を置いて、もういいんだ、終わったことなんだから、と言ってやりたかった。でも僕は言わなかった。人が一人死んでいるのだ。人が一人つめたく葬られているのだ。それは僕の力を越えた重みを持っているのだ。

「誰が殺したんだろう？」とずいぶん後で彼は言った。

CamScannerでスキャン

「さあね」と僕は言った。「ああいう商売をしてればいろんな相手に会うことになる。いろんな事が起こり得る。お伽噺ばかりじゃない」

「でも、あのクラブは身元が確かな人間しか相手にしないんだぜ。それにきちんと組織が仲介してるから、調べれば誰が相手だったかはすぐにわかる」

「その時は多分クラブを通してなかったんだろう。そういう気がするね。仕事抜きの個人的な相手か、あるいはクラブを通さないでアルバイトをしていたかどちらかだよ、きっと。どちらにせよ、選んだ相手が悪かった」

「かわいそうに」と彼は言った。

「あの子はお伽噺を信じすぎたんだ」と僕は言った。「あの子が信じていたのはイメージの世界だ。でもいつまでもそういうのが続くわけはない。そういうのを続かせるにはきちんとしたルールが必要なんだ。でもみんながルールを尊重して守ってくれるわけじゃないからね。相手を間違えるとひどいことになる」

「不思議だったんだ」と五反田君は言った。「どうしてあんな綺麗で頭の良い子が娼婦をやってるんだろうってね。不思議だった。あれくらいの子ならもっと上手い生き方ができるはずだ。きちんとした仕事につくこともできただろうし、金持ちの男を見つけることもできたはずだ。モデルにだってなれる。どうして娼婦なんてやってるんだろう？　たしかに金にはなるだろう。でもあの子はそれほど金に興味があるわけじゃないんだ。たぶん彼女は君の言うそのお伽噺を求めていたんだろうな」

「たぶんね」と僕は言った。「君と同じように。僕と同じように。他のみんなと同じように。みんなそれぞれ求め方が違う。だからときどきすれ違いや誤解が起きる。そして人が死ぬこともある」

僕はニュー・グランド・ホテルの前に車を停めた。

「ねえ、今日は君もここに泊まっていかないか？」と彼は僕に訊いた。「部屋は取れると思うんだ。ルー

CamScannerでスキャン

ム・サービスで酒をとって、少し二人で飲みたい。これじゃどうせすぐには眠れそうにないから」
僕は首を振った。「酒を飲むのはまた今度にしたいな。僕もいささか疲れてる。できたらこのまま家に帰って何も考えずに眠りたい」
「わかった」と彼は言った。「送ってくれてどうも有り難う。僕は今日はずっとろくでもないことばかり言ってるみたいだね」
「君も疲れてるんだ」と僕は言った。「死んだ人間のことなら急いで考えることはないよ。大丈夫、ずっと死んでる。もう少し元気になってからゆっくりと考えればいい。僕の言うことわかるか？ 死んでるんだ。非常に、完全に、死んでるんだ。解剖されて冷凍されてるんだ。君が責任を感じても、何を感じても生き返らないんだ」
五反田君は肯いた。「君の言うことはよくわかる」
「おやすみ」と僕は言った。
「いろいろと有り難う」と彼は言った。
「今度ガス・バーナーに火を点けてくれればそれでいい」
彼は微笑んで車を降りようとしたが、ふと思い直したように僕の顔を見た。
「不思議な話だけど、僕には君以外に友達と言えそうな人間がまったく一人もいないんだ。二十年振りに会って、それも今日で会うのが二回目なのにね。不思議だ」
そう言って彼は行ってしまった。彼はトレンチ・コートの襟を立てて、春の小雨の中をニュー・グランド・ホテルの玄関に入っていった。「カサブランカ」みたいだ、と僕は思った。美しい友情の始まり……。
でも僕もやはり彼に対して同じようなことを感じていた。だから彼の言うことはよく理解できた。僕が今友達と呼べるのは彼しかいないような気がした。そして僕もやはりそれを不思議だと感じていた。それ

CamScannerでスキャン

が「カサブランカ」みたいに見えるのは、彼のせいではないのだ。

＊

僕はスライ&ザ・ファミリー・ストーンを聴き、曲にあわせてハンドルをぱたぱたと叩きながら東京に戻った。懐かしき「エヴリデイ・ピープル」。

僕はなんてことのない人間、
君だってどっこいどっこい、
やってることは違っても、
僕らは似たもの同士だぜ、
ウー・シャシャシャ、エヴリデイ・ピープル。

雨は相変わらず静かに均一に降り続いていた。夜の間に植物の芽を導き出す、優しく柔らかな雨。「非常に、完全に、死んでいる」と僕は自分に向かって言ってみた。そしてあのホテルに泊まって五反田君と一緒に酒を飲むべきだったかな、とふと思った。僕と五反田君との間には四つの共通点がある。まず理科の実験班が同じだった。次にどちらも離婚していて独身だ。それからキキと寝ている。そして第四にどちらもメイと寝ている。そしてメイは死んでいる。非常に、完全に。酒を一緒に飲むだけの価値はある。別に付き合ったってよかったのだ。僕はどうせ暇で、とくに明日に何をするという予定もなかった。何が僕を止めたのだろう？　たぶんそれが映画のシーンみたいに見えることが嫌だったんだろう、という結論に僕は達した。考えようによっては気の毒な男だ。あまりにもチャーミングすぎる。そしてそれは彼のせい

ではないのだ。たぶん。

渋谷のアパートに戻ると、僕はブラインドの隙間から高速道路を眺めながらウィスキーを飲んだ。四時前に眠くなってきたのでベッドに入って眠った。

CamScannerでスキャン

27

一週間が過ぎた。春が地歩を固め、確実に前進していく一週間だった。春は一度も後戻りしなかった。三月とは全然違うのだ。桜が咲き、そして夜の雨がそれを散らせた。選挙はやっと終わり、学校の新学期が始まった。東京ディズニーランドが開園した。ビョン・ボルグが引退した。ラジオのトップ・テンの一位はずっとマイケル・ジャクソンだった。死者はずっと死者のままだった。

僕にとってのそれはとりとめのない一週間だった。僕はその週に二回プールに行って泳いだ。そして床屋に行った。時々新聞を買って読んでみたが、メイについての記事は見当たらなかった。おそらくまだ身元がわからないのだろう。僕はいつも渋谷駅の売店で新聞を買い、ダンキン・ドーナッツでそれを読み、読み終えるとごみ箱に捨てた。たいした記事はなかった。

その週は火曜日と木曜日にユキに会って話をし、食事をした。そして週が明けた月曜日には音楽を聴きながら車で遠出した。彼女と会うのは楽しかった。我々には共通点があった。暇なのだ。母親はまだ帰国していなかった。僕と会わないときは、日曜日以外は昼間は殆ど外には出ないのだと言った。ぶらぶら歩いてると補導されちゃうからね、と彼女は言った。

「ねえ、今度ディズニーランドに行ってみないか?」と僕は聞いてみた。

「あんなところ行きたくなんかないわよ」と彼女は顔をしかめて言った。「ああいうの嫌いなの」

CamScannerでスキャン

「ああいうソフトでやわでわざとらしくて子供向きで商業主義的でミッキーマウス的なところは嫌なんだね？」
「そうよ」と彼女は簡単に答えた。
「でも家でじっとしてると体に良くない」と僕は言った。
「ねえ、ハワイに行かない？」と彼女は言った。
「ハワイ？」と僕はびっくりして言った。
「ママが電話してきて、私に少しハワイに来ればっていうの。あの人いま、ハワイにいるの。ハワイで写真とってるの。ずっと私のこと放っておいたんで、きっと突然心配になったのね。そして電話してきたの。ママはまだしばらくは日本に戻れないし、どうせ私も学校に行ってないしね。うん、まあ、ハワイって悪くないじゃない。それでもしあなたが来られるんだったらあなたの分のお金も出してくれるって。だって私ひとりで行けないでしょう？　一週間くらい遊びに行こうよ。きっと面白いわよ」
僕は笑った。「ディズニーランドとハワイの違いは何処にあるんだろう？」
「ハワイには補導員はいないわよ。少なくとも」
「まあ、悪い考えじゃないな」と僕は認めた。
「じゃあ一緒に行く？」
僕はそれについて少し考えてみた。そして考えれば考えるほどハワイに行ってもいいような気持ちになってきた。というか、何となく東京の街を離れて全く違う環境に身を置いてみたかった。僕はこの東京の街で全くの手詰まりになっていた。良い考えというのが全然頭に浮かんでこないのだ。糸は切れたままだったし、新しい糸も出てくる気配はなかった。見当違いな場所で見当違いなことをやっているような気分だった。何をやってもしっくりと体に馴染まなかった。間違ったものを食べつづけ、間違ったものを買い

CamScannerでスキャン

つづけているような鬱陶しい気持ちだった。そして美人は実際に、完全に、死んでいた。一言で言えば、僕はいささか疲れていた。警察で絞り上げられたあの三日間の疲労がまだきちんとは取れていないのだ。

以前に僕は一日だけハワイに滞在した事があった。仕事でロス・アンジェルスに行った時に、途中で飛行機のエンジンの具合が悪くなって、ハワイで足止めを食い、ホノルルに一泊させられたのだ。僕は航空会社が用意してくれたホテルの売店でサングラスと水着を買い、一日ビーチに寝転んで過ごした。素晴らしい一日だった。ハワイ、悪くない。

そこで一週間のんびりして、たっぷりと泳いで、ピナ・コラーダを飲んで帰ってくる。疲れもとれているし、ハッピーな気持ちにもなっている。日焼けもしている。そしてあらためて視点を変えて物事を見直し、考え直してみる。そしてたぶんこう思う、そうだ、こういう考え方があったんだ、と。悪くない。

「悪くない」と僕は言った。

「じゃあ、決まりね。切符を買いに行こう」

その前に僕は彼女に電話番号を聞いて牧村拓の家に電話をかけた。電話には書生のフライデーが出てきた。僕が名前を告げると、彼は愛想良く取り次いでくれた。

牧村拓に僕は事情を説明した。そして彼女を連れてハワイに行ってかまわないだろうか、と聞いてみた。願ってもないことだ、と彼は言った。

「少し君も南国に行ってのんびりしてきた方がいい」と彼は言った。「雪かき労働者にだって休暇は必要だ。警察にも小突きまわされたですな。あの事件はまだ落着していないんだろう？　あいつらまた君んとこに来るぞ、きっと」

「そうかもしれないですね」と僕は言った。

「金のことは気にしなくていいから、好きなだけ行ってていい」と彼は言った。この男と話すと結局いつ

も金の話になる。現実的なのだ。

「好きなだけといわれても困ります。せいぜい一週間くらいのものですよ」と僕は言った。「僕にもいろいろとやらなくちゃいけないことはありますから」

「なんでもいい。君の好きにすりゃあいい」と牧村拓は言った。「それでいつ行く？ うん、早い方がいいだろうな。旅行ってのはそういうもんだ。思いついたらすぐに行くんだ。それがコツだよ。荷物なんてたいしたものはいらん。シベリアに行くわけじゃないもんな。足りなきゃ向こうで買えばいいんだ。向こうで何だって売ってる。そうだな、明後日の切符は取れると思う。それでいいか？」

「いいですけれど、僕の切符の分は自分で払いますよ。ですから――」

「ぐずぐずと下らんこと言うな。俺はこういう仕事してるから、飛行機の切符くらいおそろしく安く買えるんだ。すぐに良い席が手に入る。ここは俺に任せておけばいいよ。人にはそれぞれの能力というものがあるんだ。余計なことは言わなくていい。システムがどうこうなんてことを言うな。ホテルも俺の方でとっておいてやる。二部屋。君とユキの分だ。どうする？ キッチンつきがいいか？」

「ええ、自炊できれば僕はその方がありがたいですが――」

「良いのを知ってる。ビーチに近くて、静かで、綺麗だ。前に泊まったことあるんだ。とりあえずそこを二週間押さえておく。好きなだけいればいい」

「しかしですね――」

「余計なことは何も考えるな。全部俺に任せろ。大丈夫だ。母親には俺の方から連絡しておく。君はただホノルルに行って、ユキと一緒にビーチに寝転んで飯を食ってればいいんだ。母親はどうせ仕事でとびまわってる。仕事してると娘だろうがなんだろうが、眼中になくなっちまうんだ。だから君も何も気にしなくていい。のんびりしてりゃいい。ユキにちゃんと飯を食わせてくれればそれでよろしい。リラックスす

CamScannerでスキャン

るんだよ。体の力を抜くんだ。それだけだ。ああ、そうだ、ビザは持ってるよな？」
「持ってます。ただ——」
「明後日だぞ。いいな。水着とサングラスとパスポートだけ持っていきゃいい。あとは買えばいい。簡単だ。シベリアに行くわけじゃない。シベリアはきつかった。あそこはひどい。アフガニスタンも相当だった。ハワイなんてディズニーランドみたいなもんだ。あっという間だよ。寝転んで口を開けてりゃいいんだ。ところで君、英語できるよな？」
「普通の話くらいなら——」
「結構」と彼は言った。「充分だ。パーフェクトだ。言うことない。中村に明日切符をそちらに持って行かせる。その時にこの前の札幌からの飛行機代も持っていかせる。行く前に電話する」
「中村？」
「書生だよ。この前会っただろう。住み込みの若い男」
書生のフライデー。
「何か質問はあるか？」と牧村拓が訊いた。沢山質問があったような気がしたが、僕はひとつも思い出せなかった。とくにない、と僕は言った。
「結構」と彼は言った。「わかりが早い。俺好みだ。ああ、そうだ、それからもうひとつ君に俺からプレゼントがある。これも受け取ってくれ。それが何かは向こうに行けばわかる。リボンを取ってのお楽しみだ。ハワイ。良いところだ。遊園地だ。リラックス。雪かきはなし、だ。匂いが良い。楽しんでこいよ。またそのうちに会おう」
そして電話が切れた。
ヘビー・デューティーな作家。

CamScannerでスキャン

僕はレストランの席に戻って、明後日出発ということになりそうだ、とユキに言った。「いいわね」と彼女は言った。

「一人で準備できる？　荷物とか、バッグとか、水着とか、そういうもの」と僕は聞いてみた。

「だってハワイでしょう？」と彼女は怪訝そうな顔をして言った。「そんなの大磯に行くのとたいして変わらないわよ。カトマンズに行くわけじゃないもの」

「まあね」と僕は言った。

でもそうはいっても、一応僕には旅行前にやっておくことが幾つかあった。僕は翌日銀行に行って預金を下ろし、トラベラーズ・チェックを組んだ。預金はまだずいぶん残っていた。先月分の原稿料が入ってきているのでむしろ増えているくらいだった。それから書店に行って本を何冊か買った。クリーニング屋からシャツを持って帰った。家に帰って冷蔵庫の食品の整理をした。三時にフライデーから電話があった。今丸の内にいるのだがこれからそちらに切符を持っていっていいかと彼は言った。僕らはパルコのコーヒー・ルームで待ち合わせた。彼は僕に分厚い封筒を渡した。中には札幌から東京までのユキの飛行機代と、JALのファースト・クラスのオープン・チケットが二人分と、アメックスのトラベラーズ・チェックが二冊入っていた。その他にはホノルルのアパートメント・ホテルの地図が入っていた。

「そこに行ってあなたの名前をおっしゃっていただければわかるようになっています」とフライデーは言った。「予約は二週間とってありますが、短くも長くも変えられます。それから、小切手はあなたのサインを入れておいて下さい。好きに使って下さい。遠慮することない、どうせ経費で落ちるんだから、ということでした」

「何でも経費で落ちる」と僕はあきれて言った。

CamScannerでスキャン

「全額というのは無理でしょうが、できたら領収書のもらえるものは領収書をもらっておいて下さい。あとで僕が処理することになりますので、その方がありがたいんです」とフライデーは笑いながら言った。決して厭味な笑いかたではなかった。

そうする、と僕は言った。

「気をつけて良い御旅行を」と彼は言った。

「有り難う」と僕は言った。

「でもまあハワイですから」とフライデーはにこにこしながら言った。「ジンバブエに行くわけじゃないですから」

いろんな言い方がある。

*

日が暮れてから僕は冷蔵庫の中の物をかきあつめて夕食を作った。野菜サラダとオムレツと味噌汁がちょうど出来た。明日からハワイなんだと思うとなんだか不思議な気がした。僕にとってはそれは明日からジンバブエだというのと同じような不思議な気分だった。それはたぶん僕がジンバブエに行ったことのないせいだろう。

僕は押し入れからあまり大きくないビニールの旅行用バッグを出して、そこに洗面用具を入れたバッグと本と替えの下着と靴下を入れた。そして水着とサングラスと日焼けクリームを入れた。Tシャツを二枚とポロ・シャツとショート・パンツとスイス・アーミー・ナイフを入れた。マドラス・チェックの夏物上着をきちんと畳んで一番上に入れた。そしてバッグのファスナーをしめ、パスポートとトラベラーズ・チェックと免許証と飛行機のチケットとクレジット・カードを確認した。その他に何か持っていくべきも

CamScannerでスキャン

のはあるだろうか？
何も思いつけなかった。
ハワイに行くのはとても簡単なことなのだ。確かに大磯に行くのとあまり変わらない。北海道行きの方がはるかに荷物は多かった。
僕は荷作りしたバッグを床に置き、着ていく服を用意した。ブルージーンズとTシャツとヨットパーカと薄いウィンドブレーカーを畳んで積んでおいた。それだけやってしまうと、すごく手持ち無沙汰になってしまった。何もすることがないのだ。仕方ないので風呂に入ってビールを飲み、TVのニュースを見た。たいしたニュースはなかった。天気は明日から崩れるだろうとアナウンサーは予言していた。結構、と僕は思った。我々は明日からはもうホノルルなのだ。僕はTVを消して、ベッドに寝転んでビールを飲んだ。そしてまたメイのことを考えた。非常に、完全に、死んでいるメイ。彼女は今、ひどく冷たいところにいる。身元もわかってない。引き取り手もいない。ダイア・ストレイツもボブ・ディランももう聴けない。そして僕は明日からハワイに行こうとしている。それも他人の経費で。これが世界の正しいありかたなのだろうか？
僕は首を振って、メイのイメージを頭の中から追い払った。またいつか考えよう。今は少しハードすぎる話題だ。ハードすぎるし、ホットすぎる。
僕は札幌のドルフィン・ホテルの女の子のことを考えてみた。眼鏡をかけたフロントの女の子。名前も知らない女の子。僕はここのところ何日かひどく彼女と話がしたかった。僕は彼女の夢さえ見たのだ。でもいったいどうすればいいのか、僕にはわからなかった。何と言って電話をかければいいのだ？　眼鏡をかけたフロントの女の子と話をしたいんですが、と言えばいいのだろうか？　駄目だ。そんなのが上手く行くわけがない。おそらくとりあってもくれないだろう。ホテルというのはとてもシリアスな職場なの

た。

僕はそれについてしばらく考えてみた。そして何かきっと上手い方法があるはずだと思った。意志のあるところに方法は生じるものなのだ。十分で僕はその方法に思いあたった。上手くいくかどうかはともかく、やってみる価値はある。

僕はユキに電話をかけてみた。そして明日の打ち合わせをした。朝の九時半にタクシーで迎えに行くと言った。そしてそのついでにという感じで、あの女の人の名前を知らないかと聞いてみた。ほら、君を僕に預けたホテルのフロントの女の人。眼鏡をかけた人。

「うん、知ってると思う。たしかものすごく不思議な名前だったから、日記に書きとめてある。今は思い出せないけど、日記を見ればわかると思う」と彼女は言った。

「今見てくれないかな？」と僕は言った。

「今TV見てるのよね。後でいいでしょう？」

「悪いけど急ぐんだよ、すごく」

彼女はぶつぶつ文句を言ったが、それでも日記を調べてくれた。「ユミヨシさん」と彼女は言った。

「ユミヨシ？」と僕は言った。「それはいったいどんな字を書くの？」

「知らないわよ。だからすごく不思議な名前だって言ったでしょう。字なんか知らない。沖縄の人か何かじゃないの。だってそういう感じの名前じゃない？」

「いや、沖縄にもそんな名前なかったと思うな」

「でもとにかくそういうのよ。ユミヨシっていうの」とユキは言った。「ねえ、もういい？　TV見てるのよ」

「何を見てるの？」

CamScannerでスキャン

彼女はそれには答えずにがちゃんと電話を切った。

僕は試しに東京の電話帳を片っ端から繰ってユミヨシという名前を捜してみた。信じられないことに東京都内には二人のユミヨシ氏がいた。一人は「弓吉」という字になっていた。もうひとりは写真屋で、かたかなで「ユミヨシ写真館」とあった。世の中にはいろんな名前がある。

それから僕はドルフィン・ホテルに電話をかけて、ユミヨシさんはいらっしゃいますでしょうかと聞いてみた。たいして期待もしていなかったのだが、ちゃんと相手は彼女にとりついでくれた。やあ、と僕は言った。彼女は僕のことを覚えていた。捨てたものではない。

「今仕事中なのよ」と彼女は小さな声でクールに簡潔に言った。「あとで電話する」

「いいよ、あとで」と僕は言った。

ユミヨシさんからの電話を待っているあいだに、僕は五反田君の家に電話をかけ、明日から急にしばらくハワイに行くことになった、というメッセージを留守番電話に入れておいた。

五反田君は家にいたらしく、すぐに電話をかけてきた。

「いいね。うらやましい」と彼は言った。「気分転換にとてもいい。行けるものなら僕も行きたい」

「君だって行けなくはないだろう?」と僕は言った。

「いや、それがそう簡単にはいかない。事務所に借金がある。結婚、離婚云々のごたごたでずいぶん金を借りたんだ。僕がそれで一文なしになった話はたしか君にしたね? その借金を返すために僕は身を粉にして働いている。出たくもないコマーシャルにも出てる。まったく変な話さ。経費はどんどん使える。でも借金はなかなか返せない。世の中は日毎にややこしくなってる。自分が貧乏なのか金持ちなのか、それさえわからない。物は豊富にあるのに、欲しいものがない。金は幾らでも使えるのに、本当に使いたいも

CamScannerでスキャン

ののためには使えない。綺麗な女は幾らでも買えるのに、好きな女とは寝られない。不思議な人生だ」

「借金の額は多いの？」

「かなりのものだね」と彼は言った。「でも、かなりのものだというだけで、何がどうなってるのかは当事者である僕にもさっぱりわからん。ねえ、自慢するわけじゃないが、僕は大抵のことは人並みか人並み以上にできる。ところが金の勘定がまるっきりの苦手なんだ。帳簿の金の数字を見ると生理的にぞっとする。目をそらせちゃうんだ。僕の家はまあ昔風の家でね、そういう風にしつけられたんだ。金のことをとやかく言うのは上品な人間ではないと教えられた。数字のことは気にするな、一所懸命働いて分相応に暮らしていればそれでいいんだって。細部にこだわるな、大筋でしっかり生きろってさ。まあそれはひとつの考え方ではあるよ。少なくともその当時はそうだった。でもね、分相応なんていう観念そのものが消えてしまった今となっては、そんな考え方には何の意味もない。それで話はややこしくなった。大筋がなくなって、数字に弱いという細部だけが残った。最悪だよ。何がどうなっているのか、僕にはさっぱりわからない。事務所の税理士が僕に細かく説明してくれる。でも面倒でとても理解できない。金があっちにいったり、こっちにいったりしている。名目上の借金があったり、名目上の貸し金があったり、経費の操作があったり、ものすごくこみいっている。もっとさっぱりとしてほしいと僕は言う。でもそんなこと言っても誰もとりあってくれない。じゃあとにかく結果だけを教えてくれと言う。教えてくれる。これは簡単だ。借金がまだずいぶんある。かなり減ったが、まだこれこれが残っている。だから働け。そのかわり経費はどんどん使え。そういうことだ。くだらん。何だか蟻地獄みたいだ。ねえ、働くのはいいんだよ、僕は。別に嫌いじゃない。しかし仕組みが理解できないというのは困る。時々怖くなることがあるんだ——。ああ、また喋りすぎてるな。悪かった。君と話するとつい喋りすぎる」

「いいよ。かまわないよ」と僕は言った。

CamScannerでスキャン

「でも君に関係ないことだし、また今度会ってゆっくり話せる」と五反田君は言った。「まあ気をつけて行ってこいよ。君がいないと寂しいね。暇が出来たら会って飲みたいと思ってたんだ、ずっと」

「ハワイだよ」と僕は笑って言った。「何も象牙海岸に行くわけじゃない。一週間で帰ってくる」

「まあ、そりゃそうだ。帰ってきたらとにかく電話をくれないか？」

「電話する」と僕は言った。

「君がワイキキ・ビーチで寝転んでいるあいだ、僕は歯医者の真似ごとをして借金を返済してる」

「世の中にはいろんな人生がある」と僕は言った。「人それぞれ、それぞれの生き方。Different strokes for different folks.」

「スライとザ・ファミリー・ストーン」と五反田君はぱちんと指を鳴らして言った。同世代の人間と話していると確かにある種の手間が省ける。

ユミヨシさんは十時前に僕に電話をくれた。今仕事から帰って、家から電話していると言った。僕は降りしきる雪の中の彼女のアパートをふと思い出した。とてもシンプルなアパート。とてもシンプルな階段。とてもシンプルなドア。彼女の神経質そうな微笑。そういう何もかもがひどく懐かしかった。僕は目を閉じて夜の闇の中を静かに舞う雪を想像した。まるで恋をしているみたいだ、と僕は思った。

「どうして私の名前がわかったの？」とまず彼女は訊いた。

ユキが教えてくれたんだと僕は説明した。「何も不正なことはしてない。買収もしていない。盗聴もしていない。誰かを殴って聞き出したわけでもない。あの子に礼儀正しく尋ねたら教えてくれたんだ」

彼女は疑わしそうに少し黙っていた。「あの子どうだった？　ちゃんと無事に送り届けてくれた？」

「無事だよ」と僕は言った。「ちゃんと送り届けたし、今でもときどき会ってる。元気だよ。ちょっと変わった子だけれど」

CamScannerでスキャン

「あなたとお似合いよ」とユミヨシさんは特に何の感情も込めずに言った。それは世界中の人間が誰でも知っている明白な事実みたいに聞こえた。猿はバナナが好きだとか、サハラ砂漠にはあまり雨が降らないとか、そういう感じだった。

「ねえ、どうしてずっと僕に名前を隠してたの？」と僕は尋ねてみた。

「違うわよ。今度来たら教えるって言ったでしょう？　隠してたわけじゃない」と彼女は言った。「隠してるんじゃなくて、教えるのが面倒なだけだったの。どういう字を書くのかとか、そういう名前はよくあるのかとか、何処の出身なのかとか、みんなそういうことばかり訊くから、それが面倒で名前を人に教えるのがあまり好きじゃないの。あなたが思ってるよりずっと煩わしいことなのよ、そういうのって。いつもいつも同じこと答えなくちゃいけないんだもの」

「でも良い名前だよ。さっき調べてみたんだけれど、東京都内にも二人ユミヨシさんがいた。知ってる？」

「知ってるわよ」と彼女は言った。「私、以前東京に住んでたって言ったでしょう。それくらいとっくに調べてるわよ。変わった名前もってるとね、行く先々で電話帳を調べる癖がついちゃうのよ。どこに行ってもまず電話帳を繰ってみるの。ユミヨシ、ユミヨシって。京都にも一人いるわよ。それで、何か私に用事があるの？」

「別にとくに用事はないんだ」と僕は正直に言った。「明日から旅行でしばらくいなくなる。それでその前に君の声を聞いておきたかったんだ。それだけだよ。時々とても君の声が聞きたくなる」

彼女はまたしばらく黙っていた。電話が少し混線していた。ものすごく遠くの方で女が喋っている声が聞こえた。長い廊下の向こうの端から聞こえてくるような声だった。小さく乾いていて、妙な響き方をした。内容までは聞き取れなかったが、それはとても辛そうな声に聞こえた。辛そうに、途切れ途切れにそ

CamScannerでスキャン

の声は話しつづけていた。

「ねえ、この前エレベーターを降りたら真っ暗だったっていう話をしたわよね、あなたに？」とユミヨシさんは言った。

「うん、聞いた」と僕は言った。

「実はあれがまたあったの」と彼女は言った。

僕は黙っていた。彼女も黙っていた。遠くの方で女はまだ辛そうに喋り続けていた。彼女の話している相手は時々相槌を打ったが、その声はひどく聞こえにくかった。もそっとした声が「ああ」とか「うん」とか――たぶんそう言っているのだろうと思う――短く答えるだけだった。女はゆっくりと梯子でも登るみたいに、辛そうに話し続けていた。まるで死人が語りかけているみたいだな、と僕はふと思った。長い廊下の端の方から死人が話しかけている。死んでいるというのが、どれほど辛いことなのかについて。

「ねえ、聞いてる？」とユミヨシさんが言った。

「聞いてるよ」と僕は言った。「話して、そのことを」

「でもあなた、本当にあの時私の言ったことを信じてくれたの？　ただ適当に相手をしただけなんじゃないの？」

「信じてるよ」と僕は言った。「君には言わなかったけれど、あのあとで僕も君と同じ場所に行ったんだ。エレベーターを使って、同じ真っ暗闇の中に。そして君とまったく同じ体験をした。だから君の言うことは全部信じてる」

「行った？」

「そのことは改めてゆっくり話そう。今はまだ上手くちゃんと言えないんだ。いろんなことが解決してないから。今度君に会った時に始めから終わりまで順序だてきちんと説明する。だから僕はそのためにも

CamScannerでスキャン

もう一度君に会う必要があるんだ。でもそれはそれとして、今はともかく君の話を聞かせてくれないか？　それはとても大事なことだから」

しばらく沈黙がつづいた。混線の会話はもう聞こえなくなっていた。そこにはただ電話的沈黙があるだけだった。

「何日か前」とユミヨシさんは言った。「十日くらい前かしら。私がエレベーターで地下の駐車場に下りようとしたの。夜の八時くらいに。するとまたあそこに出たの。前と同じ。エレベーターを降りてふと気づいたらそこにいたの。今度は真夜中でもないし、十六階でもなかった。でも同じだった。真っ暗で、黴の匂いがして、湿ってるの。匂いも暗さも湿り気もまったく同じよ。今度は私、何処にもいかなかった。じっとそこにいて、エレベーターが戻ってくるのを待ってたの。ずいぶん長い時間だったような気がするけど。そしてエレベーターが戻ってきて、それに乗ってそこを出てきたの。それだけ」

「そのことは誰かに話した？」と僕は訊いた。

「誰にも話してない」と彼女は言った。「だって二回目でしょう？　今度はもう誰にも言わない方が良いと思ったの」

「それでいい。もう誰にも言わない方が良い」

「ねえいったいどうすればいいのかしら？　最近エレベーターに乗る度にドアが開いたらあの暗闇がまたあるんじゃないかと怖くてしかたないの。でもこういう大きなホテルで働いていると一日に何度もエレベーターに乗らないわけにはいかないし。どうしたらいいと思う？　このことではあなたの他に相談する相手もいないのよ、私には」

「ねえ、ユミヨシさん」と僕は言った。「どうしてもっと前に電話をくれなかったの？　そうすればもっと前に君にちゃんと説明できたのに」

CamScannerでスキャン

「何度も電話したわよ」と彼女は小さな声で囁くように言った。「でもあなたはいつもいなかったの」
「留守番電話が入っていたでしょう？」
「あれ、嫌いなの。すごく緊張するの」
「わかった。じゃあ今簡単に説明する。あの暗闇は邪悪なものじゃないし、君に対して悪意を抱いてもいない。だから脅えることはないんだよ。そこにはあるものが住んでいるけど——君はその足音を聞いたよね——それは決して君を傷つけたりはしない。それは何かを傷つけるようなものじゃないんだ。だから君はもしまた暗闇に遇ったら、じっと目を閉じて、そこでエレベーターが戻ってくるのを待っていればいいんだよ。わかった？」
ユミヨシさんはしばらく黙って僕の言ったことを咀嚼していた。「正直な感想言っていいかしら？」
「もちろん」
「私、あなたのことがよくわからないの」とユミヨシさんがとても静かに言った。「時々あなたのことを思い出すの。でもあなたという人間の実体がよくわからないの」
「君の言っていることはよくわかる」と僕は言った。「僕は三十四だけれど、残念ながら年齢のわりにはまだ解明されていない部分が多すぎる。保留事項も多すぎる。今それを少しずつ詰めているところなんだ。僕なりに努力してる。だからもう少し時間がたてば、いろんなことを君に正確に説明できると思う。そして我々はもっと深く理解しあえるはずだと思う」
「そうなるといいわね」と彼女は非常に第三者的に言った。TVのニュース・キャスターみたいだなと僕はふと思った。「そうなるといいですね。はい、それでは次のニュース」という感じだった。それでは次のニュース……
「僕は明日からハワイに行くのだ」と僕は言った。

「へえ」と彼女は無感動に言った。それが我々の会話の終わりだった。僕らはさよならを言って電話を切った。僕はウイスキーを一杯だけ飲み、電気を消して眠った。

CamScannerでスキャン

28

それでは次のニュース。僕はフォート・デラシーのビーチに寝転んで高く青い空と椰子の葉と鷗を見上げながらそう口に出してみた。僕の隣にはユキがいた。僕はござの上にあおむけになり、彼女はうつぶせになって目を閉じていた。彼女の隣に置かれた巨大なサンヨーのラジオ・カセットからはエリック・クラプトンの新曲が流れていた。ユキはオリーブ・グリーンの小さなビキニを着て、足の指先にまでたっぷりとココナッツ・オイルを塗っていた。彼女は若い細身のイルカのようにつるつるとしていた。若いサモアンがサーフボードを抱えて前を横切り、真っ黒に日焼けしたライフ・ガードが見張り台の上で金の鎖のペンダントをクールに光らせていた。街中に花と果物と日焼けオイルの匂いがした。ハワイ。

それでは次のニュース。

いろんなことが起こり、いろんな人物が登場し、次々に場面が転換する。この間まで雪の降りしきる札幌の街をあてもなく歩きまわっていた。それが今はホノルルのビーチに寝転んで空を見上げている。成り行きというものだ。点を辿って線を引いていったらこういう風になった。音楽にあわせて踊っていたら、ここまでやってきた。**僕は上手く踊っているだろうか？**僕は頭の中でこれまでの事態の進行を順番に辿り、それに対して自分がとった行動をひとつひとつチェックしてみた。それほど悪くない、と僕は思った。たいして良くはないかもしれない。でも悪くない。もう一度同じ立場に立ったとしても、僕はやはり同じように行動するだろう。それがシステムというものだ。一応足は動いている。ステップを踏み続けて

CamScannerでスキャン

いる。

そして今僕はホノルルにいる。休憩時間だ。

休憩時間、と僕は口に出して言ってみた。ほんの小さな声のつもりだったのだが、ユキに聞こえたみたいだった。彼女はごろりと転がるようにして僕の方を向き、サングラスをとって疑わしそうに目を細め、じっと僕を見た。「ねえ、さっきから何を考えてるの?」と彼女はかすれた声で言った。

「たいしたことは考えてないよ。あれこれと細かいこと」と僕は言った。

「なんでもいいけど隣でぶつぶつひとりごと言わないで。そういうの言いたかったら、部屋で一人の時に言ってよね」

「悪かった。もう言わない」

ユキはどことなく穏やかな目で僕を見ていた。「馬鹿みたいよ、それ」

「うん」と僕は言った。

「まるで孤独なひとり暮らしの老人みたい」とユキは言った。それからまたごろんと向こうを向いた。

空港からタクシーに乗ってホノルルのアパートメント・ホテルに行き、部屋に荷物を置いてショート・パンツとTシャツに着替え、それからまずだいいちに僕らがやったのは、近くのショッピング・モールに行って大型のラジオ・カセットを買うことだった。ユキがそれを要求した。

「なるべく大きくて音のでかいやつ」とユキは僕に言った。

僕は牧村拓のくれた小切手を使ってまずまずの大きさのサンヨーのラジオ・カセットを買った。そして電池をたっぷりと、テープを何本か買った。他に何かほしいものはないのかと僕は彼女に尋ねてみた。服とか、水着とか、そういうのはいらない? 彼女は首を振った。何もいらない、と彼女は言った。ビーチ

に出るとき、彼女は必ずそのラジオ・カセットを持っていった。もちろん持つのは僕の役目だった。僕がそれをターザン映画に出てくる剽軽な原住民みたいに肩にかついで（「旦那、この先には行きたくねえだ。悪魔が住んでるだ」）彼女の後ろに従った。ディスク・ジョッキーはノン・ストップでポップ・ソングを流しつづけていた。そんなわけで、僕はその春に流行っていた曲をよく覚えている。マイケル・ジャクソンの唄が清潔な疫病のように世界を覆っていた。それよりは幾分凡庸なホール&オーツも自らの道を切り開くべく健闘していた。想像力の欠如したデュラン・デュラン、ある種の輝きを有しながらもそれを普遍化する能力が幾分不足した（不足していると僕には思える）ジョー・ジャクソン、どう考えても先のないプリテンダーズ、いつも中立的苦笑を呼び起こすスーパー・トランプとカーズ……その他数知れぬポップ・シンガーとポップ・ソング。

部屋は牧村拓が言ったようになかなか悪くなかった。もちろん家具や内装デザインや壁の絵はシックという地点からは遠く遠く離れていたがそれでも不思議に居心地はよかったし（ハワイ諸島のいったい何処に人はシックなものを求め得るだろうか？）、ビーチからも近くて便利だった。部屋は十階にあったので、静かで眺望も開けていた。テラスで海を眺めながら日光浴することもできた。台所も広くて機能的で清潔だった。電子レンジから皿洗い機までちゃんと揃っていた。隣にユキの部屋があり、そちらは僕の部屋よりは小さく、台所のかわりにこぢんまりとしたキチネットがついていた。エレベーターやフロントで会う人々はみんな身なりが良く、上品だった。

ラジオを買ったあとで、僕は一人で近所のスーパーマーケットにでかけ、ビールとカリフォルニア・ワインと果物とジュースをたっぷりと買い込んだ。そしてとりあえず簡単なサンドイッチが作れる程度の食料品を買った。それからユキと二人でビーチに出てそこに並んで寝転び、夕方まで海と空を見て時を過ごした。我々は殆ど何も話さなかった。時々体を裏返したり表返したりするだけで、あとは何をするともな

CamScannerでスキャン

く、ただただ過ぎ行く時間に身を任せていた。光はあきれるほど惜しげもなく地上に降り注ぎ砂を焼いた。優しく柔らかな湿りけを含んだ海からの風が、時々思いついたように椰子の葉を揺らせた。僕は何度かうとうととまどろみ、そして足元を通り過ぎる人々の声や風の音にふと目覚め、その度に僕は何処にいるんだろうと思った。ハワイにいるんだと自分を納得させるまでに少し時間がかかった。汗が日焼けオイルと混ざり合って頬をつたい、耳元からぽとぽとと地面に落ちた。様々な種類の音が波のように寄せたり引いたりした。時々それに混じって自分の心臓の鼓動音が聞こえた。僕の心臓もまた地球の巨大な営みの内の一つなんだという気がした。

僕は頭のネジを緩め、リラックスした。休憩時間なのだ。

ユキの顔つきもはっきりとした変化を見せていた。空港で飛行機を降りてハワイ特有の甘く生温かい空気に触れた途端にそれは起こった。彼女はタラップを降りると立ち止まって眩しくてたまらないというように目を閉じ、深呼吸し、それから目を開けて僕を見た。そしてそのときにはもう、彼女の顔をそれまで薄い膜のように覆っていた緊張感は消滅していた。そこには脅えもなく苛立ちもなかった。髪に手をやったり、チューインガムを丸めて捨てたり、意味もなく肩をすくめたりするような彼女のいつもの何でもない動作までがのびのびとして自然に見えた。逆に、この子はこれまで本当にひどい生活を送っていたんだと僕は実感した。それはひどいというだけではなく、明らかに間違った生活なのだ。

髪を上できゅっとまとめて色の濃いサングラスをかけ、小さなビキニに身を包んでビーチに寝転んでいると、ユキは年齢がよくわからなくなった。体つき自体はまだ子供なのだが、彼女の見せる自然でどことなく自己完結的な新しい身のこなしは彼女を本当の歳よりはずっと大人っぽく見せていた。手脚はすらりと細かったが、華奢というのではなく、そこには何かしら力強いものが含まれていた。彼女がその四本の手脚を思いきり伸ばすと、その回りの空間までがぎゅっと四方に引き伸ばされたように感じられた。彼女

は今成長の一番ダイナミックな段階を通過しているのだと僕は思った。激しく急速に大人になりつつあるのだ。

僕らは背中にオイルを塗りあった。まずユキが僕の背中にオイルを塗った。すごく大きな背中、と彼女は言った。背中が大きいなんて誰かに言われたのは初めてだった。僕が塗るとユキはくすぐったがって身をよじった。髪の毛を上げたせいで小さな白い耳と首筋が見えた。そしてそれは僕を微笑ませた。遠くから見るとビーチに寝そべったユキは時々僕でさえはっとするほど大人びて見えたが、首筋だけはきちんと年相応に若く、そこには場違いと言ってもいいような子供っぽさが残っていたからだ。まだ子供なんだ、と僕は思った。不思議なことだけれど、女性の首筋は年輪のように順序正しく年をとっていく。どうしてかはわからないし、何がどう違うかと聞かれても正確に説明できない。でもとにかく少女は少女のような首筋をしているし、成熟した女は成熟した首筋をしているのだ。

「最初はゆっくりと焼くのよ」とユキはわけしり顔で僕に言った。「まず日陰で焼いて、少しひなたに出て焼いて、また日陰に戻るの。そうしないと火傷みたいになっちゃうからね。ひぶくれができるし、跡も残るわよ。すごく醜くなるんだから」

「日陰・ひなた・日陰」と僕は彼女の背中にオイルを塗りながら復唱した。

そんなわけで、そのハワイでの一日目の午後、僕らはだいたい椰子の木陰に寝転んでFMのディスク・ジョッキーを聴いていた。僕はときどき海に入って泳ぎ、浜辺のスタンド・バーできりっと冷えたピナ・コラーダを飲んだ。彼女は泳がなかった。まずリラックス、と彼女は言った。パイナップル・ジュースを飲み、マスタードとピックルスをたっぷりはさんだホットドッグを時間をかけて一口ずつ齧った。そして巨大な太陽が西に落ちて水平線がトマト・ソースのような赤に染まり、サンセット・クルーズの船が帆柱に灯をともし始めるまでそこに寝転んでいた。彼女は最後の一筋の光までを味わっていた。

「もう帰ろう」と僕は言った。「日も暮れたし腹も減った。少し散歩してまともなハンバーガーを食べにいこう。肉がかりっとしてジューシーで、トマト・ケチャップがとことん無反省で、美味く焦げたリアルな玉葱のはさんである本物のハンバーガー」

彼女は肯いたが、立ち上がらずにじっとそのままの姿勢でうずくまっていた。まるで一日の残りの僅かな時間をいとおしむように。僕はござを丸め、ラジオをかついだ。

「大丈夫だよ、まだ明日がある。何も考えなくていい。明日が終われば明後日がある」と僕は言った。

彼女は僕の顔を見上げ、にっこりとした。僕が手をさしだすと、彼女はそれを握って立ち上がった。

29

翌日の朝、ユキは母親に会いに行くと言った。彼女は母親の住んでいる場所の電話番号しか知らなかったので、僕が電話をかけて簡単な挨拶をし、家に行く道順を聞いた。彼女はマカハの近くにコテージを借りて住んでいた。ホノルルから車で三十分くらいはかかると彼女は言った。たぶん一時すぎにはうかがえると思うと僕は言っておいた。それから僕は近くにあるレンタカーのオフィスに行って三菱ランサーを借りた。申しぶんなく快適なドライブだった。僕らはカー・ラジオを大きな音でかけ、窓を開けっぱなしにし、海岸沿いのハイウェイを時速一二〇キロで飛ばした。あらゆる場所に光と潮風と花の香りが満ちていた。

お母さんは一人で暮らしているのか、と僕はふと気になって尋ねてみた。

「まさか」とユキは微かに唇を曲げて言った。「あの人が一人でそんなに長く外国でやっていけるわけがないわよ。本当に非現実的な人なんだから。あの人は誰か面倒をみてくれる人がいないと全然やっていけないの。賭けてもいいけどボーイフレンドが一緒よ。たぶんハンサムで若いボーイフレンド。パパと同じよ。ほら、パパのところにもいたでしょう、あのつるっとした気味の悪いゲイのボーイフレンドが？　あの男きっと一日に三回くらいお風呂に入って、二回くらい下着換えてるわよ」

「ゲイ？」と僕は聞いた。

「知らなかったの？」

「いや、知らなかった」

「馬鹿みたい。見ればわかるじゃない」とユキは言った。「パパにその趣味があるかどうかはしらないけど、あれはとにかくゲイよ。完璧に。二〇〇パーセント」

ロキシー・ミュージックがかかるとユキはラジオのボリュームを上げた。

「ママはね、昔からずっと詩人が好きなの。詩人だか詩人志望だとかの若い男の子。現像したり何のかんのしているときに後ろで詩を朗読させるの。それが趣味なの。変な趣味。詩なら何でもいいのよ。宿命的に引かれるみたい。だからパパも詩を書ければよかったんだけどね。あの人はどう転んだって詩を書けるわけないし……」

不思議な家族だ、と僕はあらためて思った。宇宙家族。行動派作家と天才女流写真家と霊媒的少女とゲイの書生と詩人のボーイフレンド。やれやれ。僕はこのサイケデリックな拡大家族の中で一体どういう位置を占め、どういう役割を果たしているのだろう？　調子はずれの娘の面倒を見る剽軽な男付き添い、というあたりだろうか。僕はフライデーが僕に見せた感じの良い微笑を思い出した。あれはひょっとしたら連帯の微笑だったのだろうか？　おい、よしてくれよ、と僕は思った。これは一時的なことなんだよ。休憩時間なんだよ。わかるか？　休暇が終わったら僕はまた雪かき仕事に戻らなくちゃならないし、そうすればもう君たちと遊んでいる暇なんてないんだ。これは本当に一時的なことなんだよ。本筋には関係のない挿話のようなものなんだ。すぐに終わる。そのあとは君たちは君たちだけでやればいい。僕は僕でやっていく。僕はもっとシンプルでわかりやすい世界が好きなんだよ。

僕はアメの教えてくれたとおりにマカハの手前でハイウェイを右に折れ、山に向かってしばらく走った。今度大きな台風が来たら屋根が飛んでしまいそうなあぶなっかしい造りの家が道の両側にぽつぽつと

並んでいたが、やがてそれも跡絶え、言われたとおり集合住宅地の門が見えてきた。門番小屋にはインド人のような顔つきの門番がいて、何処に行くのかと訊いた。僕はアメのコテージの番号を言った。彼は電話をかけ、そして僕に向かって肯いた。「いいよ、どうぞ」と彼は言った。

門の中に入るとよく手入れされた広い芝生が見渡す限り広がっていた。ゴルフ・カートのようなものに乗った庭師が何人か黙々と芝生と樹木の手入れをしていた。僕は庭師のひとりにユキの母親の住所を見せて場所を聞いた。嘴の黄色い鳥の群れが芝生の上を虫のようにぴょんぴょんと跳ねていた。あっち、と彼は言って簡単に指をさした。指の先にはプールと木立と芝生が見えた。黒々としたアスファルト道路がプールの裏手に向かって大きくカーブしていた。僕は彼に礼を言ってそのまま車を走らせた。坂を下り、また坂を上がったところにユキの母親のコテージがあった。トロピカル風にアレンジされたモダンな建物だった。玄関の前にベランダがあり、軒下で風鈴が揺れていた。まわりには名前のわからない果樹が茂って、名前のわからない実をつけていた。

僕は車を停め、ユキとふたりで階段を五段上って玄関のチャイム・ボタンを押した。風鈴が眠たげな微風に誘われるように時々小さな乾いた音を立て、開け放った窓から聞こえてくるヴィヴァルディの音楽と奇妙に心地よく混じりあっていた。十五秒ほどあとでドアが静かに開いて、男が姿を見せた。よく日焼けしたあまり背の高くない白人のアメリカ人で、肩のところから左腕がなかった。体つきはがっしりとして、どことなく思慮深そうな趣のある口髭をはやしていた。色の褪せたアロハ・シャツにジョギング・ショーツをはき、ゴム草履をはいていた。歳は僕とだいたい同じくらいに見えた。ハンサムというほどではないが、感じの良い顔つきだった。詩人にしては少し外見がタフにすぎるかもしれない。でも世界にはタフな詩人だっているだろう。いたっておかしくない。世界は広いのだ。

彼は僕の顔を見て、ユキを見て、また僕を見て、顔をほんのちょっと傾け、そして微笑んだ。「ハロー」

と彼は静かな声で言った。それから「こんにちは」と日本語で言いなおした。そしてユキと握手し、僕と握手した。それほど強くない握手だった。「どうぞ、中に入って」と彼は綺麗な日本語で言った。

彼は広々としたリビング・ルームに僕らを通し、大きなソファに座らせ、台所からプリモ・ビールを二本とコークを一本とグラスを三つ盆に載せて持ってきた。僕と彼はビールを飲み、ユキは飲み物には手もつけなかった。彼はそれから立ち上がってステレオ装置の前に行き、ヴィヴァルディのボリュームを小さくして戻ってきた。何となくサマセット・モームの小説に出てきそうな部屋だった。窓が大きくて、天井には扇風機がつき、壁には南洋の民芸品が飾ってあった。

「彼女は今、現像の最中なので、あと十分くらいで来ます」と彼は言った。「少しここで待っていてください。僕はディックと言います。ディック・ノース。彼女とここに住んでいます」

「よろしく」と僕は言った。ユキは何も言わずに窓の外の景色を眺めていた。果樹の隙間から青く光る海が見えた。水平線の上には猿人の頭骨のような形をした雲がひとつだけぽつんと浮かんでいた。雲はぴくりとも動かず、また動きそうな気配もなかった。それはどことなく頑迷そうな感じのする雲だった。漂白されたように真っ白で、輪郭はひどくはっきりしていた。嘴の黄色い鳥がさえずりながら時々その雲の前を飛び過ぎていった。ヴィヴァルディが終わるとディック・ノースはプレイヤーの針を上げ、片腕で器用にレコードを取ってレコード・ジャケットに入れ、それを棚に戻した。

「日本語が上手いですね」と僕は訊いてみた。他に話すことといっても特になかったからだ。

ディック・ノースは肯いて、片方の眉毛を動かし、目を閉じ、それから微笑んだ。「日本に長くいたんです」と彼は言った。口を開くまでに時間がかかる。「十年いました。戦争で——ヴェトナムの戦争で——初めて日本に行って、それで気に入って、戦争の後で日本の大学に入りました。上智大学です。今は詩を書いています」

CamScannerでスキャン

やはり、と僕は思った。若くもないし、それほどハンサムでもないけれど、やはり詩人なんだ。

「それから日本の俳句や短歌や詩を英語に訳す仕事もしています」と彼は付け加えた。「難しい仕事です。とても」

「そうでしょうね」と僕は言った。

彼はにっこりと微笑んでもう一本ビールを飲まないかと僕に訊いた。飲む、と僕は言った。彼はまた二本ビールを持ってきた。片手で信じられないくらい優雅にプルリングを取り、それをグラスに注いで美味そうに一口飲んだ。それから彼はグラスをテーブルに置き、首を何度か振り、壁に貼ってあるウォーホールのポスターを点検するようにじっくりと眺めた。

「不思議な話ですが」と彼は言った。「世間には片腕の詩人というのがいないのです。どうしてでしょうね？　片腕の画家もいますし、片腕のピアニストだっています。片腕のピッチャーだっていました。どうして片腕の詩人がいないんでしょうね？　詩を書くのなんて腕が一本だろうが三本だろうが全然関係ないように思えるんですが」

たしかにまあそのとおりだ、と僕も思った。腕が何本だろうが、詩を書くのには別に関係ない。

「片腕の詩人を思いつけますか？」とディック・ノースは僕に訊いた。

僕は首を振った。でも正直言って僕は詩のことなんて殆ど知らないし、両腕揃った詩人だってろくに名前を思い出せないのだ。

「片腕のサーファーは何人かいます」と彼は続けた。「パドリングを足でやるんです。なかなか上手いもんです。僕も少しやりますが」

ユキは立ち上がって部屋の中をうろつき、レコード棚のレコードをばらばらと見たが、彼女好みのものはなかったらしく、顔をしかめて馬鹿みたいという表情を浮かべた。音楽が消えるとあたりは眠りこんで

信じられないくらい静かだった。ときどき芝刈り機のうううううんんんんという唸りが聞こえた。誰かが誰かを大声で呼んだ。風鈴がからからと小さな音で鳴った。鳥も鳴いた。でも静けさは圧倒的だった。何か音がしてもそれはあっという間に痕跡ひとつ残さず静けさの中に吸い込まれてしまった。家の回りに何千人もの透明な沈黙男がいて、透明な無音掃除機でかたっぱしから音を吸い取っているような気がした。ちょっと音がするとみんなでそこに飛んでいって音を消してしまうのだ。

「静かなところですね」と僕は言った。

ディック・ノースは肯き、大事そうに自分の片方の手のひらを眺め、それからまた肯いた。

「そうです。静けさです。これが一番大事なことです。とくに僕やアメのような仕事をする人間にはこういう静けさが必要なんです。hustle-bustleは苦手ですね。何と言ったかな——そう、雑踏ね。賑やかなところ。駄目です。どうです？　ホノルルはうるさいでしょう？」

僕はとくにホノルルがうるさいとも思わなかったけれど、話が長くなっても面倒なのでいちおうそれに同意しておいた。ユキは相変わらず「馬鹿みたい」という顔をして外の景色を眺めていた。

「カウアイは良いところです。静かで人も少ない。本当は僕はカウアイに住みたい。オアフは駄目だ。ツーリスティックだし、車も多すぎるし、犯罪も多い。でもアメの仕事の関係でここにいるんです。週に一度か二度ホノルルの街に行かなくちゃならないんです。機材の関係です。いろいろと機材がいるんです。それからまあ、オアフにいるほうが連絡も楽だし、様々な人に会える。彼女は今はいろんな人を写しています。生活する人々を写しているんです。漁師や庭師や農夫やコックや道路工事の人、魚屋さん……何でも。優れた写真家です。彼女の写真には純粋な意味での才能が含まれています」

僕はアメの写真をそれほど熱心に見たことはなかったが、それにもいちおう同意しておいた。ユキはとても微妙な鼻の鳴らし方をした。

彼は僕にどのような仕事をしているのか、と質問した。

フリーランスのライターだ、と僕は答えた。

彼は僕の職業に興味を持ったようだった。たぶん従兄弟のまた従兄弟くらいの間柄の同業者だとでも思ったのだろう。どんなものを書いているのか、と彼は訊いた。

何でも、と僕は言った。注文があれば何でも書く。要するにそれは雪かきのようなものなのだ、と。

雪かき、と彼は言って、しばらく真剣な顔つきでそれについて考えていた。たぶん意味がよく理解できなかったのだろう。僕は雪かきについてもう少し詳しく説明しようかどうしようかと迷ったが、そのときちょうどアメがやってきたので、話はそこで終わってしまった。

アメは半袖のダンガリのシャツに、白いよれよれのショート・パンツという格好だった。化粧もしていないし、髪は寝て起きたばかりとでもいうようにくしゃくしゃに乱れていた。それでも彼女は魅力的な女性だったし、僕が札幌のホテルの食堂で見掛けた時と全く同じような上品な傲慢さとでもいうべきものを漂わせていた。彼女が部屋に入ってくると、一瞬にして、彼女は他の誰とも違う存在なんだということを全員が実感するのだ。説明もなく、ショウ・オフもなく、一瞬にして。

彼女は何も言わずにまっすぐユキのところに行って、彼女の髪の中に指を入れてばさばさになるまでかきまわし、それからこめかみのあたりに鼻をこすりつけた。ユキはあまり面白そうな顔はしなかったが、それでも抵抗はしなかった。頭を二、三度振って髪をもとどおりまっすぐに戻しただけだった。そしてただクールに棚の花瓶を眺めていた。しかしそのクールさは父親と会っている時のあのどうしようもない無関心さとはまったく異なったものだった。彼女のちょっとした身のこなしに、ぎこちない感情の揺れのようなものがふとうかがえた。この母娘の間にはたしかに何かしらの心の交流はあるらしかった。

CamScannerでスキャン

アメとユキ。たしかに馬鹿気てる、と僕は思った。本当にひどい名前をつける。牧村拓の言うようにまるで天気予報だ。もうひとり子供が生まれていたらいったいどんな名前をつけたんだろう？

アメとユキは一言も口をきかなかった。「元気？」もなく、「どうしてる？」もなかった。母親が娘の髪をくしゃくしゃにして、こめかみに鼻をくっつけただけだった。それからアメは僕のところに来て、隣に腰を下ろし、シャツのポケットからセイラムの箱を出して紙マッチで火をつけた。詩人はどこかから灰皿を持ってきて、それをテーブルの上に優雅にとんと置いた。あたかも妥当な場所に気のきいた装飾句を挿入するかのように。アメはそこにマッチを捨て、煙を吐き出し、洟をすすった。

「ごめんなさいね。仕事の手が離せなかったもんだから」とアメは言った。「途中で手が離せない性格なの。やりだすと駄目なの」

詩人はアメのためにビールとグラスを運んできた。そしてまた片手で器用にプルリングを取り、ビールをグラスに注いだ。彼女は泡が収まるのを見届けてから、それを一口で半分飲んだ。

「それで、あなた、いつまでハワイにいられるの？」とアメは僕に訊いた。

「わかりませんね」と僕は言った。「別に決めてないんです。でもたぶん一週間くらいでしょう。今は休暇中なんです。そのうちに日本に帰って仕事を始めなくてはなりませんし……」

「長くいるといいわよ。良いところよ」

「それはまあ良いところです」と僕は言った。やれやれ、僕の言うことなんて何も聞いてないのだ。

「食事はすんだ？」と彼女は訊いた。

「途中でサンドイッチを食べてきました」と僕は答えた。

「私たちはどうするのかしら、昼食は？」とアメは詩人に尋ねた。

「我々はたしか一時間前にスパゲッティを作って食べたと僕は記憶しているんだけどね」と詩人はゆっく

りと静かな声で言った。「一時間前は十二時十五分だから、普通の人はそれを昼食と呼ぶだろうね、一般的に」

「そうかしら？」とぼんやりした顔でアメは言った。

「そうだよ」と詩人は言った。そして彼は僕の方を向いて微笑んだ。「彼女は仕事に夢中になるといろんな現実的なことを忘れてしまうんです。御飯を食べたかどうかとか、今まで何処で何をしていたかとか、そういうことをさっぱりと。頭の中が真っ白になっちゃうんです。強烈な集中力です」

それはどちらかといえば集中力というよりは精神病の領域に属する事例ではないのかと僕はふと思ったが、もちろんそんなことは口に出さなかった。僕はソファの上で黙って礼儀正しく微笑んでいた。

アメはしばらくぼんやりとした目でビール・グラスを眺めていたが、やがて思い直したようにそれを手に取ってまた一口飲んだ。「ねえ、でも、それはそれとしておなか減ったわよ。だって私たち朝御飯だって食べなかったし」と彼女は言った。

「ねえ、僕は文句ばかりつけているような気がするけれど、正確に事実を述べるなら、君は朝の七時半に大きなトーストとグレープフルーツとヨーグルトを食べた」とディック・ノースは説明した。「そしてとても美味しかったと言ったよ。朝御飯が美味しいのは人生の大きな喜びのひとつだって」

「そうだったかしらね」とアメは言って鼻の脇を掻いた。そしてまたぼんやりとした目で宙を見ながらそれについて考えた。まるでヒッチコックの映画のシーンみたいだ、と僕は思った。だんだん何が真実かわからなくなってくる。何が正常で何が狂っているのか判断できなくなってくる。

「でもとにかくすごくおなかが減ったわ」とアメは言った。「別に食べたってかまわないんでしょう？」

「もちろんかまわないよ」と詩人は笑いながら言った。「それは君のおなかであって、僕のじゃない。君が食べたければ何だって好きなだけ食べればいい。食欲があるっていうのは良いことだよ。君はいつもそう

た。仕事が上手く行っていると、食欲も出てくる。サンドイッチでも作ってあげよう」

「ありがとう。それとその時にビールをもう一本持ってきてくださる？」

「*Certainly*」と彼は言って台所に消えた。

「あなた、昼食はすんだ？」とアメはまた僕に訊いた。

「さっき途中でサンドイッチを食べてきました」と僕は繰り返した。

「ユキは？」

いらない、とユキは簡単に言った。

「ディックとは東京で会ったの」とアメはソファの上で足を組んで、僕の顔を見ながら言った。でも彼女はそれをユキに向かって説明しているように思えた。「それで、彼がカトマンズ行きを勧めてくれたの。あそこはインスピレーションをかきたててくれるって。カトマンズ、良いところだったわ。ディックはヴェトナムで片腕なくしたの。地雷で。バウンシング・ベティーっていうやつ。足で踏むとぴょんと飛び上がって空中で爆発するやつ。どかん。隣の人が踏んで、彼が腕なくしたの。彼は詩人よ。日本語うまいでしょう？　私たちカトマンズにしばらくいて、それからハワイに来たの。しばらくカトマンズにいたら暑いところに行きたくなったから。それでディックがここに家を見つけてくれたの。ここは彼の友達のコテージなの。客用のバスルームを暗室にしてね。うん、良いところよ」

それだけ言うと、言うべきことは全部言ったとでも言わんばかりに彼女は大きく息をして、背筋を伸ばした。そしてそのまま黙りこんだ。午後の沈黙は深く、窓の外には強い光の粒子が塵のようにちらちらと漂って、好き勝手な方向にゆっくりと移動していた。猿人の頭骨のような白い雲はまだ前と同じ格好で水平線の上に浮かんでいた。それは相変わらず頑迷そうに見えた。アメが灰皿に置いたセイラムは殆ど手も触れられないままに灰皿の中で燃えつきていた。

CamScannerでスキャン

ディック・ノースはどうやって片腕でサンドイッチを作るんだろう、と僕は考えた。パンをどうやって切るんだろう？　右手でナイフを持つ。これはまあ当然だ。じゃあ、パンはどういう風に押さえるんだろう？　足か何かを使うんだろうか？　僕にはわからなかった。あるいは上手く韻を踏むとパンが勝手に切れてくれるんだろうか？　それにしてもどうして彼は義手をつけないんだろう？

少しあとで詩人は皿にとても上品に並べられたサンドイッチを持って現れた。きゅうりとハムのサンドイッチで、イギリス風に小さく切り揃えられ、オリーブまでついていた。とても美味しそうだった。どうしてこんなに上手く切れるんだろう、と僕は感心した。それから彼はビールを開け、グラスに注いだ。

「ありがとう、ディック」とアメは言った。そして僕の方を向いた。「彼はとても料理が上手いの」

「片腕の詩人を対象にした料理コンクールがあれば僕は絶対に一位になるね」と詩人は片目をつぶって僕に言った。

アメは僕にひとつ食べてごらんなさいよ、と言った。僕はひとつつまんでみた。たしかにとても美味いサンドイッチだった。どことなく詩的な趣があった。材料が新鮮で、扱いかたが洗練されていて、音韻は正確だった。美味しい、と僕は言った。でもどういう風にパンを切るのかだけはどうしてもわからなかった。訊いてみたかったが、もちろんそんなこと訊くわけにはいかない。

ディック・ノースはこまめな人物であるらしかった。彼はアメがそのサンドイッチを食べているあいだに、また台所に行ってみんなのためにコーヒーを作ってくれた。とても美味しいコーヒーだった。

「ねえ、あなた」とアメは僕に言った。「あなた、ユキと二人でいて何ともない？」

僕はその質問の意味がまったく理解できなかった。何ともないというのはどういうことなのか、と僕は質問してみた。

「もちろん音楽のことよ。あのロック音楽。あなたあれ苦痛じゃない？」
「別に苦痛でもないですけれど」と僕は言った。
「あれを聞かされてると、私、頭が痛くなってくるのよ。三十秒も我慢できない。どうしても。ユキというのはいいんだけれど、あの音楽だけは駄目」と彼女は言って、ひとさし指の先でこめかみをぐいぐいと押した。「私が聞ける音楽というのはすごく限られてるの。バロック音楽とか、ある種のジャズとか。民族音楽とか。心を落ち着けてくれる音楽。そういうのって好きよ。詩も好き。調和と静けさ」

彼女はまた煙草を取り出して火をつけ、一口吸って灰皿に置いた。たぶんそのまま煙草のことを忘れてしまうんだろうと僕は想像したが、事実そのとおりになった。よくこれまで火事を起こさなかったもんだと僕は感心した。牧村拓が彼女と暮らしたことで人生と才能を磨り減らしたと言ったことも、今では理解できるような気がした。彼女はまわりの人に何かを与えるというタイプではなかった。それとはまったく逆だ。自分自身の存在を調整するために、まわりからちょっとずつ何かを取っていくタイプだった。でも人々は彼女に何かを与えないわけにはいかないのだ。何故なら彼女は才能という強力な吸引力を有しているからだ。そして彼女はそうすることを自分の当然の権利だと思っているからだ。調和と静けさ。彼女がそれを得るために人々はみんな脚やら腕やらを彼女に差し出しているのだ。

でも僕は関係ないんだ、と僕は叫びたかった。僕がここにいるのは、今僕がたまたま休暇中だからなのだ。それだけのことなのだ。休暇が終われば僕はまた雪かき仕事に戻る。こういう奇妙な状況はもうすぐごく自然に終わってしまうのだ。だいいち、僕は彼女の輝かしい才能に対して差し出すものなど何も持ち合わせてはいないのだ。もし持ち合わせていたとしても、僕は自分の為にそれを使わなくてはならないのだ。僕はちょっとした運命の流れの乱れによってここに――このわけのわからない奇妙な場所に――一時的に押しやられているだけなのだ。できることなら、僕は大声でそう言いたかった。でもたぶん誰も僕の

言うことになんて耳も傾けないだろう。この拡大家族の中では僕はまだ声もなき二級市民なのだ。

雲はまだ同じ形のまま水平線のちょっと上に浮かんでいた。そこに船を浮かべて竿を伸ばしたら届きそうなくらいだった。僕らはたぶん同類だよ、と僕は雲に向かって言ってみた。巨大な猿人の巨大な頭骨。何処かの歴史の断層からこのホノルルの上空にこぼれ落ちてきたのだ。

アメはサンドイッチを食べてしまうとまたユキのところに行って、髪の中に指をいれてゆっくりと動かした。ユキは無表情にテーブルの上のコーヒー・カップを見つめていた。「素敵な髪」とアメは言った。「こういう髪が私もほしかったな。いつもつやつやして、真っ直ぐで。私の髪はすぐくしゃくしゃになっちゃうの。手がつけられないの。ねえ、そうでしょう、お姫様？」そして彼女はまたユキのこめかみに鼻先を押しつけた。

ディック・ノースは空のビール缶と皿を下げた。そしてモーツァルトの室内楽をかけた。「ビールはどうですか？」と彼は僕に尋ねた。もういらない、と僕は言った。

「ねえ、私ここでユキと二人で家庭的な話をしたいんだけど」とアメがぴりっとした声で言った。「家庭内の話。母親と娘の話。だからディック、彼を海岸に案内してあげたらどうかしら？　そうねえ、一時間くらい」

「いいとも。もちろん」と詩人は言って席を立った。僕も立ち上がった。詩人はアメの額に軽くくちづけし、白いキャンバス地の帽子をかぶり、緑色のレイバンをかけた。「我々は一時間ほど散歩してくる。ゆっくりと君たち二人で話をしてればいいよ」そして彼は僕の肘をとって「さあ、行きましょう。素敵なビーチがあるんです」と言った。

ユキは肩を小さくすぼめるようにして、無表情な目で僕を見上げていた。アメは三本目のセイラムを箱からひっぱりだした。彼女たちを後に残して僕と片腕の詩人はドアを開けてむせかえるような午後の光の

CamScannerでスキャン

中に出ていった。

*

僕がランサーを運転して海岸まで行った。義手をつければ運転は簡単なのだが、なるべくならつけたくないのだと彼は言った。

「自然じゃないんです」と彼は説明した。「あれをつけるとどうも落ち着かない。便利にはちがいないが、違和感があるんです。自分じゃないみたいだ。だからなるべく腕一本の生活に自分を馴らすようにしているんです。少し足りないにせよ、自前の体だけでやっていけるように」

「パンはどうやって切るんですか?」と僕は思いきって訊いてみた。

「パン」としばらく彼は考えていた。何のことかよくわからないといった様子だった。それからやっと質問の趣旨を理解した。「ああ、パンを切るときね。なるほど、当然な質問ですね。普通の人にはわからないでしょう。でも簡単です。片手で切るんです。普通にナイフを持つとそりゃ切れません。持ち方にコツがあるんです。指で押さえながら刃を持ってですね、こうとんとんと切るんです」

彼はそれを手真似で実演して見せてくれたが、そんなことが実際にできるとは僕にはどうも納得できなかった。それにパンは普通の人間が両手を使って切るよりずっと上品に切れていたのだ。

「でもちゃんとできるんですよ」と彼は僕の顔を見て微笑みながら言った。「大抵のことは片手で間に合うんです。拍手するのは駄目ですが、腕立て伏せだって、鉄棒だってできるんです。訓練です。あなたどう思いました? どうやってパンを切ると思いましたか」

「足か何か使うんじゃないかと思ったけど……」

彼は楽しそうに声を上げて笑った。「面白い」と彼は言った。「詩にしたいですね。足をつかってサンド

イッチを作る片腕の詩人についての詩。面白い詩になる」
僕はそれに対してはとくに反対も賛成もしなかった。
僕らは海岸沿いのハイウェイをしばらく進んだところで車を停めて冷えたビールを六本買い（彼が無理に金を払った）、少し離れたあまり人気のないビーチまで歩き、そこに寝転んでビールを飲んだ。あまりに暑いせいで、どれだけビールを飲んでも酔わなかった。あまりハワイらしくないビーチだった。背の低い不格好な樹木が茂り、砂浜も均一ではなくて、どことなくごつごつしていた。でもまあ少なくともトゥーリスティックではなかった。付近にはピックアップ・トラックが何台か停まって、家族づれが水遊びをしていた。沖合ではロコが十人ほどサーフィンをやっていた。頭骨雲はまだ同じところに同じ形でぽっかりと浮かび、鷗の群れが洗濯機の渦みたいにぐるぐると空を舞っていた。僕らはぼんやりとそんな風景を眺め、ビールを飲み、ぽつぽつと話をした。ディック・ノースは自分がどれほどアメに対して敬意を抱いているかということを語った。彼女は真の意味での芸術家だと彼は言った。アメの話になると、彼は自然に日本語からゆっくりとした英語に切り換えた。日本語では上手く感情が表現できないのだ。
「彼女に会ってから僕の中での詩に対する考え方自体が変わりました。彼女の写真は何というか、詩というものを裸にしてしまうんです。僕らが言葉を選びに選んで、身を切るようにして紡いだものが、彼女の写真においては一瞬にして具現されているんです。具現（エンバディメント）。彼女は空気の中から、光の中から、時間の隙間からそれをさっととつかみとり、人間のいちばん深い部分にある心的情景をエンバディーズするんです。僕の言ってることわかります？」
だいたい、と僕は言った。
「彼女の写真を見ていると、時々怖くなることがあります。自分の存在が危うくなるような気がすること

もあります。それはとくに圧倒的なのです。あの、dissilient っていう言葉知ってますか？」

「知らない」と僕は言った。

「日本語でなんというのかな、ぱんと何かが割れて弾けるような感じ。何の予感もなく突然世界が弾けて割れるんです。時間や光やそういうものが dissilient するんです。一瞬にして。天才です。僕とも違うし、あなたとも違う。失礼。ごめんなさい。僕はあなたのことをまだよく知らない」

僕は首を振った。「大丈夫。あなたの言ってることはよくわかります」

「天才というのは非常に稀な存在です。一流の才能というのはどこにでもあるというものではありません。それに巡り合えるというのは、それを目の前に見られるというのは、幸運というべきでしょうね。しかし――」と彼は言って少し黙りこみ、それから両手を広げるような具合に右手を外側に差し出した。「それはある意味では手痛い体験でもある。それはあるときには僕のエゴを針のように刺す」

僕は彼の話に聞くともなく耳を傾けながら水平線とその上の雲を眺めていた。このあたりのビーチの波は荒く、それは波打ち際に激しくたたきつけるように砕けた。僕は熱い砂の中に指を入れ、それを握りしめ、さらさらと下に落とした。それを何度も何度も繰り返していた。サーファーたちは波を待ってそれを捉え、波打ち際まで来るとまたパドリングして沖に戻っていった。

「でも僕はそれ以上に――僕のエゴうんぬんという以上に――彼女の才能に引き付けられていますし、また彼女を愛している」と彼は言った。そして指をぱちんと鳴らした。「まるで大きな渦に引き寄せられるように。ねえ、僕には妻がいるんです。日本人です。子供もいます。妻のことだって愛してる。本当に愛してるんです。今でも。でもアメに最初に会った時、彼女にどうしようもなく引き寄せられたんです。渦のようにです。抵抗のしようもなかったんです。僕にはわかったんです。これは一生に一度のことなんだって。こういう巡り合いというのは一生に一度しかないことなんだって。そういうのってね、わかるんで

すよ、ちゃんと。で、僕は思いました。この人と一緒になったらたぶん僕はいつか後悔することになるだろう。でも一緒にならなかったら、僕の存在そのものが意味を失うことになるって。あなたはこれまでに、そういう風に思ったことあります？」

ないと思う、と僕は言った。

「不思議なものです」とディック・ノースは続けた。「僕はとても苦労して静かな安定した生活を手に入れた。妻と子供と小さな家、それから仕事。大した収入にはなりませんが、やりがいのある仕事です。詩を書いて、翻訳もやりました。僕としては上出来な人生だと思っていました。僕は戦争で腕を一本失ったけれど、でもそれを充分補ってあまりある人生だと思っていました。それを手に入れるのにずいぶん時間がかかりました。努力もしました。心の平穏。手に入れるのが大変に難しいものです。僕はそれを手に入れた。でも――」と彼は言って手のひらを宙に上げてすっと水平に動かした。「失うのは一瞬のことです。あっというまです。僕にはもう帰る場所もない。日本の家にも帰れない。アメリカにも帰る場所はありません。僕は余りにも長く国を離れすぎた」

僕は何か言って彼を慰めてやりたかったが、言うべきことばも思いつかなかった。僕はただ砂をつかみ、さらさらと下に落としていた。ディック・ノースは立ち上がって、五、六メートルほど離れたところにあるぼそぼそと茂った木立ちまで行って小便して、またゆっくり歩いて戻ってきた。

「打ち明け話」と彼は言って笑った。「でも誰かに喋りたかった。どう思います？」

どう思うと言われても、僕にも何とも言いようがなかった。我々はどちらももう三十を過ぎた大人なのだ。誰と寝るかくらい自分で選ぶしかないし、渦だろうが竜巻だろうが砂嵐だろうが自分が選んだからにはなんとかそれでやっていくしかないのだ。僕はこのディック・ノースという男からどことなく良い印象を受けた。彼が様々な難事を片手でやってのけていることに対して敬意さえ抱いた。しかしいったいそん

な質問に何と答えればいいのだろう？

「まずだいいちに、僕は芸術的な人間じゃない」と僕は言った。「だからそういう芸術的にインスパイアされた関係というのはよくわからない。僕の想像を越えてる」

彼は少し寂しそうな顔をして海を見ていた。彼は何か言いたそうだったが、結局何も言わなかった。

僕は目を閉じた。最初はちょっとだけ目を閉じているつもりだったのだが、ぐっすり眠りこんでしまったようだった。たぶんビールのせいだろう。目が覚めると木の影が移動して僕の顔の上にかかっていた。暑さで頭が少しふらふらした。時計の針は二時半を指していた。僕は頭を振って体を起こした。ディック・ノースは波打ち際で何処かの犬と遊んでいた。彼を傷つけていなければいいんだけれど、と僕は思った。僕は話の途中で彼を放り出したまま眠ってしまったのだ。それも彼にとっては大事な話だったのだ。でもいったいなんて言えばよかったんだ？

僕はまた手で砂をすくいながら、犬と遊んでいる彼の姿を眺めていた。詩人は犬の頭を抱え込むようにして抱いていた。彼は首を立てて砕け、そして勢い良く退いていった。白い細かいしぶきが眩しく光っていた。僕は冷たすぎるんだろうか、と僕は思った。僕には彼の気持ちが理解できないではなかった。腕が一本しかないにせよ二本揃っているにせよ、詩人であるにせよ非詩人であるにせよ、ここはタフでハードな世界なのだ。僕らはみんなそれぞれに問題を抱えて生きている。でも我々はもう大人なのだ。我々はもうここまで来てしまったのだ。少なくとも初対面の相手に答えることの困難な質問をするべきじゃないのだ。それは基本的な礼儀の問題なのだ。冷たすぎる、と僕は思った。そして僕は首を振った。首を振ったって何も解決しないのだけれど。

＊

僕らはランサーでコテージに戻った。ディックがチャイムを押すとユキが面白くもなんともないという顔でドアを開けた。アメは煙草をくわえてソファの上であぐらをかき、禅でもやっているような目付きでじっと宙を見ていた。ディック・ノースは彼女のところに行ってまた額にくちづけした。

「話は済んだ？」と彼は訊いた。

「んんん」と彼女は煙草をくわえたまま言った。肯定の返事だった。

「僕らはビーチでのんびりと世界の端っこを見ながら気持ち良く日光浴していた」とディック・ノースは言った。

「そろそろ帰る」とユキがすごく平面的な声で僕に言った。

僕も同感だった。そろそろうるさくて現実的でトゥーリスティックなホノルルに戻りたかった。

アメは椅子から立ちあがった。「また遊びに来て。あなたに会いたいから」と彼女は言った。そして娘のところに行ってその頬に手をあて、そっと撫でた。

僕はディック・ノースにビールやら何やらの礼を言った。彼はにっこりと微笑んで、どういたしましてと言った。

僕がランサーの助手席にユキを乗せたところで、アメが僕の肘をとって引き寄せた。「ねえ、ちょっとお話があるの」と彼女は言った。僕らはふたりで並んで少し先にある小さな公園のようなところまで歩いた。公園の中には簡単な作りのジャングル・ジムがあって、彼女はそこにもたれかかって煙草をくわえた。それから面倒臭そうにマッチを擦って煙草に火をつけた。

「あなた良い人よね、私、それわかるの」と彼女は言った。「だからあなたにお願いがあるの。あの子をな

るべくここに連れてきて。私、あの子のこと好きなのよ。あの子に会いたいのよ。わかる？　会って話をしたいの。そして友達になりたいの。私たち良い友達になれると思うのよ。親とか娘だとかいう以前にね。だからここにいる間に少しでも沢山ふたりで話をしたいの」

アメはそう言うとしばらくじっと僕の顔を見ていた。

僕は言うべきことを何ひとつとして思いつけなかった。でも何か言わないわけにはいかなかった。

「それはあなたと彼女のあいだの問題です」と僕は言った。

「もちろん」と彼女は言った。

「だから彼女があなたに会いたいということであれば、もちろん連れてきます」と僕は言った。「あるいはあなたが親として彼女を連れてこいというんであれば、それはやはり連れて来ます。どちらかです。それ以外には僕には何も言えない。友達というのは第三者の介在を必要としない自発的なものです。僕の記憶に間違いがなければ」

アメはそれについて少し考えていた。

「あなたは彼女と友達になりたいと言う。それは良いことです。もちろん。でもいいですか、あなたは彼女にとって友達である前にまず母親なんです」と僕は言った。「好むと好まざるとにかかわらず、そうなってるんです。そして彼女はまだ十三なんです。そしてまだ母親というものを必要としている。暗くて辛い夜に無条件で抱き締めてくれるような存在を必要としているんです。ねえいいですか、僕はまったくの他人だからこんなことを言うのは見当違いかもしれない。でもね、彼女に必要なのは中途半端な友達じゃなくて、まず自分を全的に受け入れてくれる世界なんです。まずそこをはっきりさせなくちゃならない」

「あなたにはわかってないのよ」とアメは言った。

「そのとおりです。僕にはわかってない」と僕は言った。「でもいいですか、彼女はまだ子供だし、傷つい

ている。誰かが守ってやらなくちゃならないんです。手間のかかることだけれど、誰かがやらなくちゃならない。それは責任なんです。わかりますか？」

でももちろん彼女にはわからなかった。

「毎日連れてきてくれと言ってるわけじゃないのよ」と彼女は言った。「あの子が来てもいいという時に連れてきてくれればそれでいいの。私の方からもちょくちょく電話はしてみるから。ねえ、私ね、あの子を失いたくないのよ。このままだとだんだんあの子が大きくなって私から離れていくような気がするのよ。私が欲しいのは精神的な繋がりなのよ。絆。私は良い母親じゃなかったかもしれないわ。でも母親である前に、私にはやることがいっぱいあったのよ。それはどうしようもないことだったのよ。それはあの子にだってわかるはずよ。だからね、私が求めてるのは母親とか娘とかいう以上の関係なの。言うなれば血の繋がった友達」

僕は溜め息をついた。そして首を振った。首を振ってどうなるというものでもないのだけれど。

*

帰りの車の中で僕らは黙ってラジオの音楽を聴いていた。時々僕は小さく口笛を吹いたけれど、それを別にすればただただ沈黙が続いた。ユキは顔を背けるようにしてじっと外を見ていたし、僕の方にもとくに言うべきことはなかった。十五分ばかり僕はそのまま運転を続けた。でもささやかな予感がした。頭の中を音のない弾丸のように素早くさっとその予感がよぎった。予感には小さな字で「車を何処かで停めたほうがいい」と書いてあったような気がした。

僕はその予感に従って目についたビーチの駐車場に車を停めて、ユキに気分が悪いんじゃないかと訊いてみた。「何ともない？　大丈夫？　何か飲む？」ユキはしばらく黙っていた。暗示的な沈黙だった。僕

はそれ以上何も言わずにその暗示の行く先を見守っていた。年をとると暗示の暗示性というものが少しは理解できるようになる。そしてその暗示性が現実の形を取るまでじっと待つことを覚えるようになる。ペンキが乾くのを待つのと同じように。

同じような形の黒い小さな水着をつけた女の子が二人並んで、椰子の木の下をゆっくりと歩いて行った。塀の上を歩く猫のような足の運び方だった。彼女たちは裸足で、水着は小さなハンカチをいくつか結びあわせたみたいなワイルドな代物だった。強い風が吹いたら飛ばされてしまいそうに見える。二人は抑圧された夢みたいに妙にリアルな非現実性を漂わせながら、僕の視界を右から左へとゆっくりと横断して消えていった。

ブルース・スプリングスティーンが「ハングリー・ハート」を歌った。良い歌だ。世界もまだ捨てたものではない。ディスク・ジョッキーもこれは良い歌だと言った。僕は軽く爪を噛み、空を眺めていた。例の頭骨雲はまるで宿命のようにそこにあった。ハワイ、と僕は思った。世界の果てみたいだ。母親が娘と友達になりたいと思っている。娘は友達よりは母親を求めている。すれちがいだ。何処にもいけない。母親にはボーイフレンドがいる。戻る場所のない片腕の詩人だ。父親にもボーイフレンドがいる。ゲイの書生のフライデー。何処にもいけない。

十分ほどあとで、ユキは僕の肩に顔をつけて泣き始めた。最初は静かに、それから声を出して泣き始めた。彼女は両手を自分の膝の上にきちんと揃えて置き、僕の肩に鼻先をつけて泣いた。当たり前だよ、と僕は思った。僕だって君の立場だったら泣く。当たり前のことだ。

僕は彼女の肩を抱いて泣きたいだけ泣かせた。僕のシャツの袖はやがてぐっしょりと濡れた。ずいぶん長いあいだ彼女は泣き続けていた。肩を激しく揺らせて彼女は泣いた。僕は黙ってじっと彼女の肩を押さえていた。

サングラスをかけて、回転拳銃を光らせた二人組の警官が駐車場を横切っていった。ドイツ・シェパードが辛そうに舌を出しながらあたりを徘徊し、どこかに消えた。椰子の葉がさらさらと揺れた。フォードのピックアップ・トラックが近くに停まって、大柄のサモアンがそこから下り、綺麗な女の子を連れてピーチを歩いて行ってしまった。ラジオではJ・ガイルズ・バンドが懐かしい「ダンス天国」を歌っていた。

ひとしきり泣いてしまうと彼女は落ち着いたようだった。

「ねえ、私のこと二度とお姫様って呼ばないでね」とユキは僕の肩に顔をつけたまま言った。

「呼んだっけ？」と僕は訊いた。

「呼んだわよ」

「覚えてない」

「辻堂から帰った時よ。あの夜」と彼女は言った。「とにかく二度と呼ばないで」

「呼ばない」と僕は言った。「ちゃんと約束するよ。ボーイ・ジョージとデュラン・デュランに誓って約束する。二度と呼ばない」

「いつもママがそう呼んでいたの。私のことを。お姫様って」

「呼ばないよ」と僕は言った。

「あの人、いつもいつも私のことを傷つけるのよ。でもあの人、そのこと全然わかってないのよ。そして私のことを好きなのよ。そうでしょう？」

「そのとおりだよ」

「私どうすればいいの？」

「成長するしかない」

CamScannerでスキャン

「しかたない」

「するしかないんだ」と僕は言った。「いやでもみんな成長するんだよ。そして問題を抱えたまま年をとってみんないやでも死んでいくんだ。昔からずっとそうだったし、これからもずっとそうなんだ。君だけが問題を抱えているわけじゃない」

　彼女は涙の筋のついた顔を上げて僕を見た。「ねえ、あなた人を慰めることってできないの？」

「慰めてるつもりなんだけど」と僕は言った。

「絶対にずれてるわよ」と彼女は言った。そして僕の手を肩からどかせ、バッグからティッシュ・ペーパーを出して洟をかんだ。

「さて」と僕は現実的な声で言った。そして車を駐車場から出した。「家に帰ってひと泳ぎして、それから美味しい御飯を作って仲良く食べよう」

　僕らは一時間ほど泳いだ。ユキはなかなか泳ぎが上手かった。沖の方まで泳いだり、潜って足をひっぱりあったりして遊んだ。それからシャワーを浴びてスーパーに買い物に行き、ステーキ肉と野菜を買った。そして玉葱と醤油をつかってさっぱりとしたステーキを焼き、野菜サラダを作った。豆腐と葱の味噌汁も作った。気持ちの良い夕食だった。僕はカリフォルニア・ワインを飲み、ユキもグラスに半分ほどそれを飲んだ。

「あなた料理が上手いのね」とユキが感心して言った。

「上手いんじゃない。ただ愛情をこめて丁寧に作っているだけだよ。それだけでずいぶん違うものなんだ。姿勢の問題だよ。様々な物事を愛そうと努めれば、ある程度までは愛せる。気持ち良く生きていこうと努めれば、ある程度までは気持ち良く生きていける」

「でもそれ以上は駄目なのね？」

「それ以上のことは運だ」と僕は言った。

「あなたってわりに人のこと落ち込ませるのね。ちゃんとした大人のくせに」とユキはあきれたように言った。

二人で皿を洗ってかたづけてから、僕らは外に出て灯のともり始めたにぎやかなカラカウア通りをぶらぶらと散歩した。どことなくピントがずれた様々な種類の店をのぞいて品物を批評し、道を行く人々の姿を眺め、混みあったロイヤル・ハワイアン・ホテルのビーチ・バーで休んだ。僕はまたピナ・コラーダを飲み、彼女はフルーツ・ジュースを飲んだ。そしてディック・ノースはこういうがやがやとした夜の街が大嫌いなんだろうなと想像した。僕はそれほど嫌いじゃない。

「ねえ、ママのことをどう思った？」とユキが僕に訊いた。

「初対面の人のことは僕には正直言ってよくわからない」と僕はしばらく考えてから言った。「考えをまとめたり、判断したりするのに割に時間がかかるんだよ。頭がよくないから」

「でもあなたちょっと怒ってたでしょ？　違う？」

「そう？」

「うん。顔を見ればわかる」とユキは言った。

「そうかもしれない」と僕は認めた。そして夜の海を眺めながらピナ・コラーダを一口すすった。「そう言われれば、ちょっと怒っていたかもしれない」

「何に対して？」

「君に対して責任を取るべき人間が誰一人として真剣に責任を取っていないことに対して。でも無駄なことだな。僕には怒る資格なんかないし、僕が怒ったって何の役にも立たないもの」

CamScannerでスキャン

ユキは皿のプリッツェルを取ってぽりぽりと齧った。「きっとみんなどうしていいかわからないのよ。何かやらなくちゃとは思ってるんだけど、どうすればいいかがわかんないのね」

「たぶんそうなんだろうね。誰にもわかってないみたいだ」

「あなたにはわかってるの?」

「暗示性が具体的な形をとるのをじっと待って、それから対処すればいいんだと思う。要するに」

ユキはTシャツの襟もとを指でいじりながらそれについて考えていた。でもよくわからないようだった。「それ、どういうこと?」

「待てばいいということだよ」と僕は説明した。「ゆっくりとしかるべき時が来るのを待てばいいんだ。何かを無理に変えようとせずに、物事が流れていく方向を見ればいいんだ。そして公平な目で物を見ようと努めればいいんだ。そうすればどうすればいいのかが自然に理解できる。でもみんな忙しすぎる。才能がありすぎて、やるべきことが多すぎる。公平さについて真剣に考えるには自分に対する興味が大きすぎる」

ユキはテーブルの上で頬杖をついた。そしてピンク色のテーブル・クロスの上に落ちたプリッツェルのかけらを手で払った。隣のテーブルにはそろいの柄のアロハとムームーを着たアメリカ人の老夫婦が座って二人で巨大なグラスに入った派手なトロピカル・カクテルを飲んでいた。彼らはとても幸せそうに見えた。ホテルの中庭では同じような柄のムームーを着た女の子が電気ピアノを弾きながら「ソング・フォー・ユー」を歌っていた。あまり上手くはなかったが、「ソング・フォー・ユー」であることはたしかだった。庭のところどころでは松明をかたどったガスの炎がゆらめいていた。歌が終わると二、三人がぱらぱらと手を叩いた。ユキは僕のピナ・コラーダを取って一口飲んだ。

「おいしい」と彼女は言った。

「動議支持」と僕は言った。「おいしいに二票」

ユキはしばらくあきれたような顔をして僕をまじまじと見ていた。「あなたっていったいどういう人なのか、私にはよく理解できないわ。すごくまともで正常な人のようにも見えるし、とことん根本的にずれているようにも見えるし」

「すごく正常であるということは同時にずれているということでもあるんだ。だからそれはとくに気にしなくていいんだ」と僕は説明した。そしておそろしく愛想の良いウェイトレスにピナ・コラーダのおかわりを注文した。彼女は腰を振りながら迅速に飲み物を運んできて、伝票にサインし、チェシャ猫みたいな幅の広い微笑を残して去っていった。

「それで、私はいったいどうすればいいのかしら？」とユキが言った。

「お母さんは君に会いたがっている」と僕は言った。「細かいことは僕にもよくわからない。他人の家庭のことだし、いささかユニークな人物だからね。でも一言で言うなら、これまでに様々な軋轢を生み出してきた母と娘という関係を越えて、君と友達になりたがっている」

「人と人が友達になるというのはすごく難しいことだと思うわ」

「賛成」と僕は言った。「難しいに二票」

ユキはテーブルに肘をついてぼんやりとした目で僕の顔を見た。

「あなたはそれについてどう思うの？　そういうママの考え方について」

「僕がそれについてどう思うかというのは全然問題じゃない。君がどう思うかというのが問題なんだ。言うまでもないことだけれど。『それはいささか虫がよすぎる』という考え方もあるだろう。『考慮に値する建設的な姿勢だ』という考え方もあるだろう。そのどちらを取るかは君次第だ。何も急ぐことはないよ。ゆっくり考えて、それで結論を出せばいい」

ユキは頬杖をついたまま肯いた。カウンターで誰かが大きな声で笑っていた。ピアノ弾きの女の子が戻ってきて、「ブルー・ハワイ」の弾き語りを始めた。「夜は始まったばかり、僕らは若い。さあおいで、月が海の上に浮かんでいるうちに」

「私たち、かなりひどい状態だったのよ」とユキは言った。「札幌に行く前なんて、そりゃひどいものだったわ。学校に行く行かないのことでもめにもめて、すごく険悪だったの。殆ど口もきかなかったし、顔だってろくに合わせなかったし。そういうのがずっと続いてたの。あの人はきちんとものを考えるということができない人なの。その場の思いつきで何か言って、そのまま忘れちゃうの。言ってるときは本気なんだけど、何も覚えてないの。そのくせときどき気まぐれで母親としての役割に目覚めるの。私はそういうのがすごく頭に来るのよ」

「でも」と僕は言った。接続詞的存在。

「でもね、うん、あの人には確かに何かしら普通ではない優れたものがあるのよ。母親としては無茶苦茶で最悪だし、私はそれでずいぶん傷つきもしたんだけど、それはそれとして、どことなく、わけはわからないけどひきつけられるところはあるの。そこはパパとは全然違うのよ。よくわからないけど。でもね、今急に友達になりましょうと言われても、あの人と私とでは力が違いすぎるのよ。私はまだ子供だし、あの人は強い力を持った大人なのよ。誰が考えたってそれくらいわかるでしょう？　それがママには全然わかってないの。だからママが私と友だちになろうとしても、本人は一所懸命努力しているつもりでも、ママは知らないうちに私をどんどん傷つけているのよ。たとえば札幌のことだってそうよ。ママはある時には私の方に歩み寄ろうとする。だから私もママの方に近づこうとする。私も努力するのよ、ちゃんと。でもそうするとママはもうどこか別のところを向いてしまっているの。もう別のことで頭がいっぱいになって私のことを忘れてるの。全部気まぐれな思いつきなの」ユキはそう言って、半分かじったプリッツェル

を指で砂の上にはじきとばした。「私を一緒に札幌に連れていったの。でも結局はあの調子なんだもの。私を連れてきたことなんか忘れてふらっとカトマンズに行っちゃうわけ。そして自分が私を置きざりにしたことに三日も気がつかないのよ。いくらなんでも無茶苦茶じゃない。そしてそのことで私がどれほど傷ついたかというのもよく理解できないの。私はママのことが好きよ。たぶん、好きだと思う。友だちになれたら良いだろうなと思う。でももう二度とあんな風に振り回されたくないの。思いつきであっちにやられたり、こっちにやられたりしたくないの。そういうのはもう嫌なの」

「君の言ってることは全部正しい」と僕は言った。「論旨も明確だ。とてもよく理解できる」

「でもママにはわかってないの。そういうことをきちんと説明しても、きっと何のことだか全然理解できないと思うわ」

「そういう気もする」

「だから苛立つの」

「それもよく理解できる」と僕は言った。「そういう時、我々大人は酒を飲むんだ」

ユキは僕のピナ・コラーダをごくごくと半分くらい飲んだ。金魚鉢みたいな巨大なグラスに入っていたから、かなりの量があった。飲み終わって少しすると、彼女はテーブルに頬杖をついたままとろんとした目で僕の顔を見た。

「ちょっと変」と彼女は言った。「体が温かくて、何だか眠い」

「それでいいんだ」と僕は言った。「気持ちは悪くない?」

「悪くない。良い気持ち」

「結構。長い一日だった。十三だろうが、三十四だろうが最後に少し気持ち良くなるくらいの権利はある」

僕は勘定を払い、ユキの腕を取って海沿いにホテルまで戻った。そして彼女の部屋の鍵を開けてやった。

「ねえ」とユキが言った。

「何？」と僕は訊いた。

「おやすみ」と彼女は言った。

翌日も見事にハワイ的な一日だった。朝食を済ませるとすぐに水着に着替えてビーチに出た。サーフィンをやってみたいとユキが言ったので、僕は貸しボードを二枚借り、彼女と一緒にシェラトンの沖に出た。僕は昔友達に初歩的な技術を教わったことがあったので、それをそのまま彼女に教えた。波の捉え方や、足の置きかたや、その程度のことだ。でもユキはとても覚えがよかった。体も柔らかかったし、タイミングをとらえる勘が良かった。三十分ほどで彼女は僕よりずっとうまく波に乗れるようになった。「面白い」と彼女は言った。

昼食のあとで僕は彼女をつれてアラモアナの近くにあるサーフ・ショップに行き、中古のまずまずのボードを二枚買った。店員は僕とユキの体重を聞き、それぞれにあったボードを選んでくれた。「あんたたち兄妹？」と店員が僕に尋ねた。面倒臭いので「そうだ」と僕は答えた。親子には見えないようなので僕は少し安心した。

二時に僕らはまたビーチに出て、砂浜に寝転んで日光浴をした。少し泳ぎ、少し眠った。でも殆どの時間を我々はただぼんやりとして過ごした。ラジオを聴き、ぱらぱらと本を読み、人々の姿を眺め、椰子の葉の揺れる音に耳をすませた。太陽が少しずつその定められた軌道を移動していった。日が落ちてくると僕らは部屋に戻ってシャワーを浴び、スパゲッティとサラダを食べてからスピルバーグの映画を見にいっ

た。映画館を出ると、しばらく街を散歩し、ハレクラニ・ホテルの優雅なプールサイド・バーに行った。そして僕はまたピナ・コラーダを飲み、彼女はフルーツ・ジュースを頼んだ。

「ねえ、それまた少し飲んでもいいかしら？」とユキは僕のピナ・コラーダを指さして言った。「いいよ」と僕は言って、グラスを取り替えた。ユキはそのストローで二センチほどピナ・コラーダを飲んだ。「美味しい」と彼女は言った。「昨日のバーとは少し味が違うような気がする」

僕はウェイターを呼んでもう一杯ピナ・コラーダを頼んだ。そしてそれをまるごとユキに与えた。「全部飲んでいい」と僕は言った。「毎晩僕につきあっていたら、一週間で君は日本でいちばんピナ・コラーダに詳しい中学生になれるよ」

プールサイドではフル・サイズのダンス・バンドが「フレネシ」を演奏していた。年をとったクラリネット奏者が途中で長いソロを取った。アーティー・ショーを思わせるような品の良いソロだった。そしてそれにあわせて正装した十組ほどの老夫婦が踊っていた。プールの底から浮かびあがる照明がかれらの顔を幻想的に照らしていた。踊っている老人たちはとても幸せそうに見えた。彼らは様々な歳月の末に、このハワイにたどりついたのだ。彼らは優雅に足を動かし、きちんと律儀にステップを踏んでいた。男たちは背を伸ばし、顎を引き、女たちはくるりと円を描き、ロング・スカートの裾を柔らかに揺らせていた。僕らはそんな人々の姿をじっと眺めていた。彼らの姿はなぜか僕の心を落ち着かせた。たぶん老人たちがいかにも満ち足りた顔をして踊っていたからだろう。曲が「ムーン・グロウ」に変わると、彼らはそっと頬を寄せあった。

「また眠くなってきた」とユキが言った。

でも今回は彼女はひとりでちゃんと歩いて帰ることができた。進歩している。

CamScannerでスキャン

僕は自分の部屋に戻るとワインの瓶とグラスを居間に持ってきてTVでクリント・イーストウッドの「奴らを高く吊るせ」を見た。またまたクリント・イーストウッドだ。そしてまたまたにこりともしない。僕はワインを三杯飲むあいだ映画につきあっていたが、途中でだんだん眠くなってきたのであきらめてTVを消し、バスルームに行って歯を磨いた。これで一日が終わった、と僕は思った。有意義な一日だっただろうか？　それほどでもない。まあまあというところだ。朝ユキにサーフィンを教え、それからサーフボードを買ってやった。夕食を食べ、「E.T.」を見た。そしてハレクラニのバーで二人でピナ・コラーダを飲み、優雅に踊る老人たちを眺めた。ユキが酔っぱらい、僕は彼女をホテルに連れて帰った。まあまあだ。良くも悪くもハワイ的な一日だった。しかしとにかくこれで一日が終わった、と僕は思った。

*

でも物事はそう簡単には終わらなかった。

僕がTシャツとパンツだけになってベッドにもぐりこみ、電気を消して五分も経たないうちにドア・ベルがかんこんと鳴った。やれやれまったく、と僕は思った。時計は十二時少し前を指していた。僕は枕もとの電気をつけ、ズボンをはいて戸口に行った。僕がそこに行くまでにベルはあと二回鳴った。ユキだろう、と僕は思った。それ以外に誰かが僕を訪ねてくるなんて考えられないから。だから僕はそれが誰であるかも確かめずにドアをあけた。でもそこにいたのはユキではなかった。知らない若い女だった。

「ハーイ」と彼女は言った。

「ハーイ」と僕も反射的に言った。

見たところ女は東南アジア系らしかった。タイかフィリピンかヴェトナムか。僕には微妙な人種的違いというものがよくわからない。でもとにかくそのどれかだ。綺麗な女だった。小柄で色が黒く、目が大き

い。そして光沢のあるピンクの、つるりとした生地のワンピースを着ていた。バッグも靴もみんなピンク色だった。左腕の手首にブレスレットのように大きなピンク色のリボンを巻いていた。まるで何かのプレゼントみたいに。いったいどうして手首にリボンなんか巻いてるんだろう、と僕は思った。でもわからなかった。彼女はドアに手をかけて、にっこりと笑って僕を見ていた。

「私の名前はジューンっていうの」と彼女は少し訛のある英語で言った。

「ハイ、ジューン」と僕は言った。

「中に入っていいかしら？」と彼女は指で僕の背後をさして訊いた。

「ちょっと待って」と僕はあわてて言った。「君はたぶんドアを間違えていると思う。君は誰のところに来たんだろう？」

「んーと、待ってね」と彼女は言って、バッグからメモを出して読んだ。「えーと、ミスター・……のところ」

僕だった。「僕だ、それは」と僕は言った。

「じゃあ間違ってないじゃない」

「ちょっと待ってよ」と僕は言った。「名前は確かにあってる。でも僕には何が何だか全然理解できない。君は誰なのいったい？」

「とにかくちょっと中に入れて下さらない？　ここで立ち話というのも外聞が悪いじゃない。人が何かと思うでしょう？　大丈夫よ、安心しなさい。中に入ってホールド・アップなんてことはないから」

たしかに戸口であれこれと押し問答をしているうちに隣の部屋にいるユキが起きて出てきたりしたら面倒だった。僕は彼女を中にいれた。なるようになる。なるようになればいい。

ジューンは中に入ると僕が勧めるまでもなくすぐにソファに座ってくつろいだ。何か飲むかと僕は訊い

た。あなたと同じ物でいい、と彼女は言った。僕は台所でジン・トニックを二つ作って持ってきた。そして彼女の向かいに腰を下ろした。彼女は脚を大胆に組んで美味しそうにジン・トニックを飲んだ。綺麗な脚だった。

「ねえ、ジューン、君はどうして僕のところに来たんだろう?」と僕は訊いてみた。

「来るように言われたからよ」と彼女は当然という顔で言った。

「誰に?」

彼女は肩をすぼめた。「あなたに好意を持っている匿名の紳士に。その人がお金を払ったの。日本から。あなたの為に。わかるでしょう、どういうことだか?」

牧村拓、と僕は思った。これが彼の言っていた「プレゼント」なのだ。だから彼女は手首にピンクのリボンを巻いているのだ。たぶん彼は僕に女をあてがっておけばユキが安全だと考えたのだろう。実際的だ。実に実際的だ。僕は腹が立つよりはむしろ素直に感心してしまった。なんていう世の中だろう、みんなが僕の為に女を買ってくれる。

「朝までのぶんもうちゃんともらってるの。だから二人でたっぷり楽しもうよ。私の体すごくいいわよ」

ジューンは脚を上げてピンクのハイヒール・サンダルを脱ぎ、床にころんとセクシーに転がした。

「ねえ、わるいけどそれは出来ない」と僕は言った。

「どうしてよ、あなたホモなの?」

「いや、そうじゃない。そうじゃなくて、その金を払った紳士と僕の間に考え方の違いがあるんだ。だから君と寝るわけにはいかない。筋の問題なんだ」

「でもお金はもう払ってあるし、払い戻しはきかないのよ。それにあなたが私とファックしようがしまいが、そんなこと相手にはわからないわよ。私が国際電話でその人に報告するわけじゃないもの。『イエッ

サー、ちゃんと彼と三回ファックしました』、なんてね。だからさ、やってもやんなくても同じことなのよ、それ。筋も何もないのよ」

僕は溜め息をついた。そしてジン・トニックを飲んだ。

「やろうよ」とジューンは単純に言った。「気持ちいいわよ、あれ」

僕にはよくわからなかった。そしていろんなことを考えたり、いろんなことを説明したりするのがだんだん億劫になってきた。まずまずの一日がやっと終わってベッドに入り、電気を消して眠りの中に片足を入れかけたところだったのだ。そこに知らない女が突然やってきてアレやろうと言う。ひどい世界だ。

「ねえ、もう一杯ずつジン・トニック飲まない？」と彼女が僕に訊いた。僕が肯くと、台所に行って二人分のジン・トニックを作ってくれた。そしてラジオをつけた。彼女は自分の部屋にいるみたいにくつろいでいた。ハードロックがかかっていた。

「サイコー」とジューンは日本語で言った。そして僕の隣に座り、僕にもたれかかって、ジン・トニックをすすった。「むずかしく考えちゃ駄目よ」と彼女は言った。「私はプロなのよ。このことに関しては、あなたよりは私の方が詳しいの。そこには筋もなにもないの。だから私に全部まかせなさい。これはその日本人の紳士とはもう関係のない問題なの。それは彼の手をもう離れてしまっているの。もう私とあなた二人の問題なの」

そしてジューンは指で僕の胸をすっと優しく撫でた。僕は本当にいろんなことが面倒になってきた。牧村拓がもし僕が娼婦と寝ることで安心できるのなら、それはそれで構わないという気さえしてきた。こうして押し問答しているくらいならやってしまった方が早いような気がした。たかがセックスなのだ。勃起して、挿入して、射精すればそれでおしまいなのだ。

「オーケー、やろう」と僕は言った。

CamScannerでスキャン

「そうこなくちゃ」とジューンは言った。そしてジン・トニックを飲み干し、空のグラスをテーブルの上に置いた。

「でも僕は今日はすごく疲れてる。だから余計なことは何もできない」

「まかせなさいって。始めから終わりまで私がやってあげるから。あなたはじっとしてればいいのよ。ただし最初に二つだけやってほしいことがあるの」

「何だろう？」

「部屋の電気を消すことと、リボンを取ってくれること」

僕は電気を消し、手首のリボンを取った。そしてベッドルームに行った。電気を消すと、窓の外に放送用のアンテナ塔が見えた。塔のてっぺんでは赤いライトが点滅していた。僕はベッドに横になって、そのライトをぼんやりと眺めていた。ラジオからはハードロックが流れ続けていた。現実じゃないみたいだ、と僕は思った。でも現実だった。奇妙な色彩を帯びてはいたが、まぎれもない現実なのだ。ジューンは手短にさっとワンピースを脱ぎ、それから僕の服を脱がせた。メイほどではないにせよ、彼女もやはり技巧的な娼婦であり、その技巧にプライドを持っているようだった。彼女は指や舌や何やらを使って僕を有効に勃起させ、フォリナーの曲にあわせてちゃんと射精に導いた。夜は始まったばかりで、月は海の上に浮かんでいた。

「どう？　良かったでしょう？」

「良かった」と僕は言った。本当に良かったのだ。

それから僕らはまたジン・トニックを一杯ずつ飲んだ。

「ジューン」と僕はふと思いついて言った。「ねえ君、ひょっとして先月はメイっていわなかった？」

ジューンは楽しそうにははと笑った。「面白いわねえ。私ジョークって好きよ。来月はジュリーって

いうのかしら。八月はオージー」

冗談で言ってるんじゃないんだと僕は言いたかった。本当に先月メイという女の子と寝たんだと。でももちろん言っても仕方ないことだった。だから僕は黙っていた。僕が黙っていると、彼女はまたプロフェッショナルに僕を勃起させた。二回目。僕は本当に何もせずにそこにごろりと寝転んでいるだけだった。彼女が全部やってくれた。手際の良いガソリン・スタンドみたいだった。車を停めて鍵を渡せば、給油から、洗車から、空気圧のチェックから、オイルの点検から、窓拭きから、灰皿の掃除から、何から何までやってくれる。こういうものを果たしてセックスと呼べるのだろうか？　しかしとにかく何もかもが終わったのは二時過ぎだった。それから僕らはうとうとした。そして六時前に目が覚めた。ラジオがつけっぱなしになっていた。外はもう明るく、早起きのサーファーが既に海岸にピックアップ・トラックを並べていた。僕の隣では裸のジューンが体を丸めてぐっすりと眠っていた。床にはピンクの服とピンクの靴とピンクのリボンが落ちていた。僕はラジオを消し、彼女を揺すって起こした。

「ねえ、起きて」と僕は言った。「人が来るんだ。若い女の子が朝飯を食べにくるんだ。わるいけど君がいるとまずい」

「オーケー、オーケー」と彼女は言って起きた。そして裸のままバッグを持ってバスルームに行って歯を磨き、髪をとかした。そして服を着て、靴をはいた。

「私良かったでしょう？」と彼女は口紅を塗りながら言った。

「良かった」と僕は言った。

ジューンはにっこり笑って口紅をバッグに入れ、ぱちんと口金をしめた。「それで、次はいつにする？」

「次？」

「三回分払ってもらってるの。だからまだあと二回残ってるわけ。いつがいい？　それとも気分を変えて

私じゃない別の子とする? それでもいいのよ。私ぜんぜん気にしないから。男の人っていろんな子と寝たいんでしょう?」

「いや、もちろん君でいいよ」と僕は言った。他に言いようもない。三回分。きっと牧村拓は僕の体から精液を一滴残らずしぼりとるつもりなのだろう。

「ありがとう。絶対後悔させないから。今度はもっとすごくやってあげるから。大丈夫よ。期待しててね。You can rely on me. ねえ、あさっての夜でどうかしら? あさっての夜なら私も暇だし、みっちりとやってあげられるけど」

「それでいい」と僕は言った。そして車代にといって十ドル札を渡した。

「ありがとう。じゃあまたね、バイバイ」と彼女は言った。そしてドアを開けて出ていった。

*

僕はユキが起きて朝食を食べにやってくるまでにグラスを全部きちんと洗ってかたづけ、灰皿を洗い、シーツの皺をなおし、ピンクのリボンをごみ箱に捨てた。それで大丈夫なはずだった。でもユキは部屋に入ってきた途端にちょっと顔をしかめた。部屋の中の何かが気に入らないのだ。とても勘がいい。何かを推測している。僕は気がつかないふりをして口笛を吹きながら朝食の用意をした。コーヒーを作り、トーストを焼き、果物をむいた。そして食卓に運んだ。ユキは疑わしそうな目でちらちらとあたりを見ながら冷たいミルクを飲み、パンを齧っていた。僕が話しかけてもまったく返事をしなかった。どうもまずいな、と僕は思った。部屋の中にシリアスな空気が漂っている。

緊張した朝食が終わると、彼女はテーブルの上に両手を置き、じっと僕の目を見た。とても真剣な目だった。「ねえ、ここに昨日の夜、女の人が来たでしょう?」とユキは言った。

「よくわかるね」と僕は何でもないふりをして気軽に言った。
「誰よ、いったい。あれからそのへんで女の子をひっかけてきたの？」
「まさか。そんなことしないよ。僕はそんなにマメじゃないもの。向こうの方から勝手に来たんだ」
「嘘言わないでよ。そんなことあるわけないじゃない」
「嘘じゃないよ。僕は君に嘘はつかない。本当に向こうから勝手に来たんだ」と僕は言った。そして全部をきちんと説明した。牧村拓が僕の為に女の子を買ってくれたこと。その子が突然僕を訪ねてきたこと。僕もそれは寝耳に水だったこと。僕の性欲を満たしておけばユキの身が安全だと牧村拓は考えたのだろうということ。
「まったく、もう」と言ってユキは深い溜め息をつき、目を閉じた。「どうしてあの人って、いつもいつもそういう下らないことばかり思いつくのかしら。どうしてそういう見当違いなことばかりやってるんだろう。本当に大事なことは何もわかってないし、何も感じないくせに、そういうどうでもいい余計なところには気がまわるのよ。ママもママだけど、パパもそれとは違うところで頭がどうかしてるわよ。いつも見当違いなことをやってぶち壊しにするの」
「確かに君の言うとおりだ。非常に見当ちがいだ」と僕は同意した。
「でもあなた、どうして中に入れたりしたの？　部屋の中に入れたんでしょう、その女の人を？」
「入れたよ。よく事情がわからないから彼女と話し合う必要があった」
「でもまさか変なことしなかったわよね？」
「それがそう単純でもないんだ」
「まさか——」と言いかけて彼女は口をつぐんだ。適当な表現方法を思いつかないのだ。そして頬が少し赤くなった。

「そうだよ。事情を説明すると話が長くなるけれど、とにかくうまく断れなかったんだ」と僕は言った。

彼女は目を閉じ、両方の手で頬を押さえた。「信じられない」ととても小さな乾いた声でユキは言った。「あなたがそんなことするなんて、とても信じられない」

「最初はもちろん断るつもりだったんだ」と僕は正直に言った。「でもそのうちになんだかどうでも良くなってきた。あれこれと考えるのが面倒になってきた。言い訳するんじゃないけれど、君の両親は確かにある種の強さを持っているね。お母さんはお母さんなりに、お父さんはお父さんなりに、人に何かしら影響を与える。それを認めるか認めないかは別にして、スタイルというものを持っている。敬意は払えないにせよ、無視することもできない。つまりね、それで君のお父さんの気が済むんなら別にいいやと思ったんだ。それに悪くなさそうな子だった」

「でもそんなのひどすぎるわよ」とユキは乾いた声で言った。「あなたはパパに女の人を買ってもらったのよ。それで何とも思わないの？　そんなのいけないことよ。間違っているし、恥ずかしいことよ。そう思わないの？」

確かにそのとおりだった。

「確かにそのとおりだ」と僕は言った。

「本当に本当に恥ずかしいことよ」とユキは繰り返した。

「そうだ」と僕は認めた。

朝食のあとで僕らはボードを持ってビーチに出た。そしてまたシェラトンの沖に出て、昼まで波乗りをやった。でもその間彼女は一言も口をきいてくれなかった。何を話しかけても返事をしなかった。必要に応じて肯いたり、首を振ったりするだけだった。

そろそろ陸に戻って昼御飯を食べようと言うと彼女は肯いた。部屋で何か作って食べるかと訊くと彼女

日焼を防いだ。じゃあ外で軽く食べようと言うと彼女は肯いた。僕らはフォート・デラシーの芝生に座ってホット・ドッグを食べた。僕はビールを飲み、ユキはコーラを飲んだ。彼女はまだ一言も口をきかなかった。もう一時間も黙りこんでいた。

「何か喋ろよ」と僕は彼女に言った。

彼女はサングラスを取って、まるで空の裂け目でも見るみたいに僕の顔をじっと見た。三十秒くらいじっと見ていた。それから綺麗に日焼けした手で前髪を払った。

「やった？」と彼女は不思議そうに言った。「やったっていうことよ？」

僕は牧村拓があと三回分を先払いしていることを説明した。そして二回目はあさっての夜なんだと。彼女は手で芝生を何度か叩いた。「信じられない。本当に馬鹿みたい」

「別にかばうつもりはないけど、お父さんはお父さんなりに心配してるんだ。つまり僕が男で、君が女だから」と僕は説明した。「わかるだろう？」

「本当に本当に馬鹿みたい」と彼女は白けたような声で言った。そして自分の部屋に入って夕方まで出てこなかった。

僕は少し昼寝をし、近所のスーパーマーケットで買ってきた「プレイボーイ」を読みながらベランダで日光浴をした。四時頃から雲が姿を現し、徐々に空を覆い、五時すぎには激しい本格的なスコールになった。この調子であと一時間も降り続けば島ごと南極まで押し流されてしまうんじゃないかという気がするくらいの激しい雨だった。これほど激しい雨を見たのは生まれて初めてだった。五メートル先のものもろくに見えなかった。ビーチの椰子の木は気がふれたようにばたばたとその葉を上下に震わせ、アスファルト道路はあっという間に河のようになった。サーファーが何人かボードを傘がわりに頭の上にかざして窓の下を足早に通りすぎて行った。そのうちに雷が鳴り始めた。アロハ・タワーのあたりの海上で閃光が走

るのが見えた。そしてソニック・ブームのような激しい音がびりびりと空気を震わせた。僕は窓を閉め、キッチンでコーヒーをいれた。そして今夜は夕食に何をつくろうかと考えた。

もう一度雷鳴が轟いた時にユキがそっと部屋に入ってきて、キッチンの隅の壁にもたれて僕を見ていた。僕は微笑みかけたけれど、彼女はただじっと僕を睨んでいた。僕はコーヒー・カップを持ち、彼女を連れて居間に行ってソファに並んで腰掛けた。ユキは顔色があまりよくなかった。たぶん雷が嫌いなのだろう。どうして女の子はみんな雷やら蜘蛛やらが嫌いなのだろう？ 雷なんてただの少しやかましい空中の放電現象だ。蜘蛛だって特殊なものを別にすれば無害な小さな虫だ。もう一度青白い閃光が光った時、ユキは僕の右腕を両手でぎゅっと握った。

十分ほど僕らはそのままの格好でスコールと雷を眺めていた。彼女は僕の右腕を握り、僕はコーヒーを飲んでいた。やがて雷は遠くなり、雨は上がった。雲が切れ、夕暮れに近い太陽が姿を見せた。あとには方々に池のような水溜まりが残っているだけだった。椰子の葉は水滴をきらきらと光らせていた。海は何事もなかったように相変わらず白い波を立て、雨宿りをしていた観光客もまたぼちぼちとビーチに姿を見せ始めた。

「確かに僕はあんなことするべきじゃなかった」と僕は言った。「何があっても断って帰すべきだった。でもあの時は疲れていたし、うまく頭が働かなかった。僕はとても不完全な人間なんだ。不完全だししょっちゅう失敗する。でも学ぶ。二度と同じ間違いはしないように決心する。それでも二度同じ間違いをすることはすくなからずある。どうしてだろう？ 簡単だ。何故なら僕が馬鹿で不完全だからだ。そういう時にはやはり少し自己嫌悪になる。そして三度は同じ間違いを犯すまいと決心する。少しずつ向上する。少しずつだけれど、それでも向上は向上だ」

ユキは長い間なんの反応も返さなかった。彼女は僕の腕から手を離して、何も言わずにじっと外の景色

CamScannerでスキャン

を見ていた。僕の言ったことを彼女が聞いていたかどうかさえわからなかった。日が落ちて、ビーチに沿って並んだ街灯が白く灯をともし始めた。雨上がりの夕暮れは空気がくっきりとして光が鮮やかだった。ダーク・ブルーの夕空を背景に放送局の高いアンテナがそびえ、そのてっぺんの赤いライトが心臓の鼓動のように規則正しくゆっくりと点滅していた。僕はキッチンに行って冷蔵庫からビールを出して飲んだ。そしてクラッカーを何枚か食べながら、僕は本当に少しずつでも向上しているんだろうか、と思った。あまり自信はなかった。よく考えると全然自信がなかった。十六回くらい続けて同じ間違いをやったこともあるような気がした。でも基本的な姿勢としては彼女に言ったことは嘘ではなかったし、そう説明する以外に説明の方法はなかったのだ。

居間に帰ると、ユキはまだ同じ格好で外を眺めていた。脚を折り曲げて、両手で膝を抱えるようにしてソファに座り、頑固そうに顎をぎゅっと引いていた。僕はふと結婚生活を思い出した。そういえば結婚している時にはこういうのが何度もあったっけな、と僕は思った。僕は何度も妻を傷つけて、何度も謝った。そういう時、妻もまた何時間も何時間も僕と口をきいてくれなかった。どうしてそんなに傷つくんだろう、と僕はよく思ったものだ。考えてみればそれほど大したことじゃないのに、と僕は思った。でも僕はいつもそういう時には我慢強く謝り、説明し、その傷を癒すように努めた。そしてそういう作業を積み重ねることによって我々の関係は向上していると考えていた。でも結末を見ればわかるように、多分向上なんかしなかったんだろう。

彼女が僕を傷つけたことは一度しかなかった。たった一度だ。彼女は他の男と出ていってしまった。その時だけだ。結婚生活——あれはすごく奇妙なものだったな、と僕は思った。渦のようなものだ。ディック・ノースが言うように。

僕が隣に座ってしばらくすると、ユキは僕に手を差し出した。僕はそれを握った。

CamScannerでスキャン

「許したわけじゃないのよ」とユキは言った。「とりあえず仲直りするだけ。あれは本当にいけないことだったし、私はすごく傷ついたのよ。わかる?」
「わかる」と僕は言った。
それから僕らは夕食を食べた。僕は海老といんげん豆を使ってピラフを作り、茹で卵とオリーブとトマトを使ってサラダを作った。僕はワインを飲み、彼女も少しワインを飲んだ。
「君を見てるとときどき女房を思い出す」と僕は言った。
「あなたに愛想をつかせて他の男と出ていった奥さん」とユキは言った。
「そう」と僕は言った。

30

ハワイ。

それからの何日かは平和な日々が続いた。楽園的とまでは言えないにしても、まあ平和な日々だった。

僕はジューンの来訪を丁重に断った。風邪をひいたみたいで熱がある、咳も出る（こほんこほん）、しばらくはとてもその気になれないと思う、と僕は言った。そして車代にと言ってまた十ドル札を渡した。それはいけないわね、もしよくなったらここに電話ちょうだいねと彼女は言って、シャープ・ペンシルをバッグから出し、ドアに電話番号を書いた。「バイ」と彼女は言って腰を振りながら帰っていった。

僕は何度かユキを母親のところに連れていった。そして僕は片腕の詩人ディック・ノースと二人でビーチを散歩したり、プールで泳いだりした。彼はけっこう上手く泳ぐこともできた。ユキと母親はその間二人きりで話をしていた。彼女たちがどんなことを話していたのか、僕は知らない。ユキはそれについては何も言わなかったし、僕も別に聞かなかった。僕はレンタカーを借りて彼女をマカハまで送り届け、ディック・ノースと世間話をしたり泳いだりサーファーを眺めたりビールを飲んで小便したりし、また彼女をホノルルに連れて帰ってくるだけだった。

僕は一度ディック・ノースがロバート・フロストの詩を朗読するのを聞いた。詩の内容まではもちろんわからなかったけれど、なかなか上手い朗読だった。リズムが美しく、情感がこもっていた。現像したばかりのまだ濡れているアメの写真を見たこともある。ハワイの人々の顔を写した写真だった。何でもない

普通のポートレイトなのだが、彼女が写すとどの顔もいきいきとして、生命の核とでもいうべきものを浮かび上がらせていた。南国の島に生きる人々の素直な優しさや、下品さや、ひやりとするような酷薄さや、生きる喜びが、写真から直接に伝わってきた。パワフルで、なおかつ静かな写真だった。才能、と僕は思った。「僕とも違うし、あなたとも違う」とディック・ノースは言った。そのとおりだ。見るだけでわかる。

僕がユキの面倒を見ているようにディック・ノースはアメの面倒を見ていた。でももちろん彼の方が遥かに本格的だった。彼が掃除をし、洗濯をし、料理を作り、買い物をし、詩を朗読し、冗談を言い、煙草の火を消してまわり、歯を磨いたかと尋ね、タンパックスを補充し（一度僕は彼の買い物に同行したのだ）、写真をファイルし、タイプライターを使ってきちんとした彼女の作品目録を作った。彼はそれを全部片腕でやっていたのだ。それだけやったあとで、自分の創作にむけるための時間が彼に残されているとは、僕にはとても思えなかった。かわいそうな男だ、と僕は思った。でも考えてみたら、僕だって彼に同情できるような立場にはなかった。ユキの面倒を見るのと引き換えに父親に飛行機代とホテル代を出してもらい、その上女まで買ってもらっている。どう見てもどっこいどっこいだ。

*

母親の家を訪問しない日には、僕らはサーフィンの練習をしたり、泳いだり、ただ何をするともなくビーチに寝転んだり、買い物をしたり、レンタカーを借りて島のあちこちをまわったりした。夜になると僕らは散歩をし、映画を見て、ハレクラニかロイヤル・ハワイアンのガーデン・バーでピナ・コラーダを飲んだ。僕は暇にまかせていろんな料理を作った。我々はリラックスし、指先まで綺麗に日焼けした。ユキはヒルトンのブティックでトロピカルな花柄の新しいビキニを買ったが、それを身につけるとハワイで生

まれて育った少女のように見えた。サーフィンの腕もかなり上達して、僕がとても捕まえられないような小さな波を上手に乗りこなした。ストーンズのテープを何本か買って、毎日繰り返し聴いていた。僕が飲み物を買いにいったりする時にユキをひとりでビーチに残していくと、いろんな男が彼女に話しかけてきた。でもユキは英語が話せなかったから、そういう男たちを一〇〇パーセント無視していた。僕が帰ってくると彼らはみんな「失礼」と言って（あるいはもっとひどいことを言って）去っていった。彼女は黒く、美しく、健康だった。そしてとてもリラックスして毎日を楽しんでいた。

「ねえ、男の人ってそれほど強く女の人が欲しくなるものなの？」とある日ビーチに寝転んでいる時に突然ユキが僕に訊いた。

「そうだね。その強さに個人差はあるけれど、原理的に、肉体的に、男というのは女を欲しくなるものなんだ。セックスについてはだいたい知ってるよね？」

「だいたい知ってる」とユキは乾いた声で言った。

「性欲というものがあるんだ」と僕は説明した。「女の子と寝たいと思う。自然なことだよ。種族保持のために——」

「種族保持のことなんか聞いてないわよ。保健の時間みたいなこと言わないでよ。その性欲について聞いてるのよ。それがどういうものかについて」

「もし君が鳥だとする」と僕は言った。「そして空を飛ぶのがすごく気持ち良くて好きだとする。でもいろんな事情でたまにしか飛ぶことができない。そうだな、天候とか、風向きとか、あるいは季節とかによって、飛べたり飛べなかったりするんだ。でも飛べない日が続くと力も余るし、苛々してくる。自分が不当に貶められているような気がしてくる。どうして飛べないんだと腹も立ってくる。こういう感じわかる？」

「わかる」と彼女は言った。「いつもそんな風に感じてる」
「じゃあ、話が早い。それが性欲なんだ」
「この前、いつ空を飛んだの？　その、つまり、この間のパパに買ってもらった女の人の前は？」
「先月の末だね」と僕は言った。
「楽しかった？」
僕は肯いた。
「いつも楽しいの？」
「そうとは限らない」と僕は言った。「不完全な生物が二人集まってやることだから、いつもいつも上手く行くとは限らない。失望することもある。気持ち良く飛んでいてうっかりして木にぶつかることもある」
「ふうん」とユキは言った。そしてそれについてひとしきり考えていた。たぶん鳥が空を飛んでいて脇見か何かしてうっかり木にぶつかる光景を想像しているのだろう。僕はちょっと不安になった。そんな説明で本当に良かったんだろうか？　ひょっとして僕は感じやすい年頃の女の子にまるっきり間違ったことを教えてしまったのではないだろうか？　まあいいや、どうせ大きくなったらひとりでにわかることなのだ。
「でも歳とともにだんだん上手くいく確率は向上する」と僕は続けて説明した。「コツがわかってくる。天候や風向きを測れるようになってくる。しかし通常それに比例して性欲そのものは徐々に減少してくる。そういうものなんだ」
「惨め」とユキは首を振りながら言った。
「実に」と僕は言った。

CamScannerでスキャン

＊

ハワイ。

いったいこれでもう何日僕はこの島にいるんだろう？　日にちの観念というものが、頭の中から完全に消滅していた。昨日の次が今日で、今日の次が明日だった。日が上って日が沈んで、月が上って月が沈んで、潮が満ちて、潮が退いた。僕は手帳をひっぱり出してカレンダーで日にちを勘定してみた。もうここに来て十日になっていた。四月もだんだん終わりに近づいている。僕がとりあえず休暇として決めた一ヵ月はもう過ぎ去ってしまっていた。どうしたものかな、と僕は思った。頭のねじがゆるんでいる。ゆるみきっている。サーフィンとピナ・コラーダの日々。それはそれで悪くない。でも僕はそもそもキキの行方を捜していたのだ。そこから全ては始まったのだ。僕はその筋を辿り、流れを追ってきた。なのにふと気がついたらいつのまにかこんな具合になってしまっている。奇妙な人々が次から次へと出てきて、物事の流れがすっかり変わってしまったのだ。そのおかげで僕は今こうして椰子の木陰でトロピカル・ドリンクを飲みながらカラパナを聴いている。何処かで流れを修正しなくてはならない。メイが死んだ。殺された。警察が来た。そうだ、メイの事件はいったいどうなったんだろう？　文学と漁師は彼女の身元をつきとめることができただろうか？　そして、五反田君はどうなっただろう？　彼はひどく疲れて参っているように見えた。彼は僕と何を話したがっていたんだろう？　とにかく全てが中途半端なまま放置してある。そんな風に放り出したままにしておくことはできない。そろそろ日本に帰らなくてはならない。

でも僕は腰を上げることができなかった。それはユキにとってと同じように僕にとってもやはり、久し振りに緊張から解放された日々であったし、彼女と同じように僕もそれを必要としていたのだ。僕は毎日殆ど何も考えなかった。肌を焼き、泳ぎ、ビールを飲み、ストーンズやブルース・スプリングスティーン

を聴きながら島中をドライブした。月に照らされたビーチを散歩し、ホテルのバーで酒を飲んだ。

もちろんそんな生活がいつまでも続くわけがないことはよくわかっていた。でもただ単にそこから腰を上げることができなかったのだ。僕はリラックスし、ユキもリラックスしていた。彼女を見ていると僕の口から「さあ、もう帰ろうよ」とはなかなか言い出せなかったし、それが自分自身に対する言い訳にもなった。

二週間が経った。

*

僕はユキと一緒にドライブをしていた。夕暮れのダウンタウンだった。道路は渋滞していたが、とくにこれという急ぎの用事があるわけでもないから、我々はゆっくりと車を走らせながら道沿いの風景を眺めていた。ポルノ専門の映画館やら、スリフト・ショップやら、アオザイ用の生地を売っているヴェトナム人の洋服屋やら、中国食品店やら、古本屋やら中古レコード店やらが延々と続いていた。どこかの店先では二人の老人がテーブルと椅子を持ち出して碁を打っていた。いつものホノルルのダウンタウンだった。街角のところどころに、とろんとした目をした男が何をするともなく立っていた。面白い町だ。安くて美味い店もある。でも女の子が一人で歩くのには適さない。

ダウンタウンを外れて港に近付くと、貿易会社の倉庫やオフィスが増えてくる。町並みもどことなくがらんとして、不愛想になる。会社が退けて帰宅を急ぐ人々がバスを待ち、コーヒー・ショップはところどころ字の抜けたネオンを灯している。

「E.T.」をもう一度見たい、とユキが言った。

いいよ、夕食のあとで見にいこう、と僕は言った。

それから彼女は「E.T.」について話しはじめた。あなたがE.T.みたいだとよかったのに、と彼女は言った。そしてひとさし指の先で僕の額に軽く触れた。

「駄目だよ、そんなことしてもそこは治らない」と僕は言った。

ユキはくすくす笑った。

その時だった。

その時突然何かが僕を打った。頭の中でカチンという音を立てて何かが繋がった。何かが起こったのだ。でも何が起こったのかその瞬間僕には判断がつかなかった。

僕は殆ど反射的にブレーキを踏んだ。後ろのカマロが何度も鋭く警笛を鳴らし、通り過ぎるときに窓から僕に罵声を浴びせかけた。そうだ、僕は何かを見たのだ。今そこで、とても大事な物を。

「ねえ、どうしたのよ、急に？　あぶないじゃない」とユキが言った。

でも僕は何も聞いていなかった。キキだ、と僕は思った。間違いない、僕は今そこでキキを見かけたのだ。このホノルルのダウンタウンで。どうしてこんなところにいるのかはわからない。でもあれはキキだったのだ。僕は彼女とすれちがったのだ。僕の車の脇を、手を伸ばせば触れることができそうな近くを、彼女は歩いて通り過ぎて行ったのだ。

「ねえ、窓を全部閉めてドアをロックするんだ。外に出るんじゃないよ。誰が声をかけても開けないで。すぐに戻る」僕はそう言って車を下りた。

「ちょっと待ってよ。嫌よ、一人でこんなところ――」

でも僕は構わずに道路を走った。途中で何人もの人にぶつかったが、そんなことをいちいち気にしている余裕はなかった。僕はキキをつかまえなくてはならないのだ。何のためにかはわからない。でも僕は彼女をつかまえて、話をしなくてはならないのだ。僕は人の流れに沿って二ブロックか三ブロック走った。

CamScannerでスキャン

走りながら僕は彼女の着ていた服を思い出した。ブルーのワンピースと白いショルダー・バッグ。ずっと前方にブルーのワンピースと白いショルダー・バッグが見えた。夕暮れの中で白いショルダー・バッグが彼女の歩調にあわせて揺れていた。彼女はダウンタウンの賑やかな方に向かっていた。大通りに出ると急に通行人が増え、僕は上手く走れないようになった。ユキの三倍の体重はありそうな巨大な女が僕の行く手を塞いだ。それでも何とか少しずつ僕はキキとの間の距離を詰めていった。彼女はただ歩き続けていた。速くも遅くもない普通のスピードだった。後ろも振り返らず、脇見もせず、バスに乗る気配も見せず、ただただ真っ直ぐに歩いていた。すぐにでも追いつけそうな気がするのだけれど、でも不思議に距離はあまり詰まらなかった。信号は一度も彼女を止めなかった。まるでそうなることを計算して歩いているみたいに、信号はずっと青だった。僕は彼女を見失わないために車に轢かれそうになりながら一度赤信号を走って渡らなくてはならなかった。

僕があと二十メートルくらいに近づいたところで、彼女は突然角を左に曲がった。僕ももちろん後を追って左に折れた。人気のない狭い通りだった。あまりぱっとしない古いオフィス・ビルが両側に並び、道路には汚れたライトバンやピックアップ・トラックが駐車していた。通りには彼女の姿が見えなかった。僕は息を切らせながら、そこに立ち止まって目をこらした。おい、どうしたんだ、君はまた消えちゃったのか？　でもキキは消えてはいなかった。彼女は大型のデリバリ・トラックの陰になって一瞬見えなかっただけだった。彼女は歩道の上を同じ調子で歩き続けていた。夕闇は刻々と深まっていたが、僕はその白いショルダー・バッグが腰のあたりで振り子のように規則正しく揺れているのをはっきりと見ることが出来た。

「キキ！」と僕は大声で叫んだ。

僕の声は彼女の耳に届いたようだった。彼女はちらりと僕の方を振り返った。キキだ、と僕は思った。

もちろん僕らの間の距離は離れていたし、夕暮れで、街灯もろくに灯っていない暗い通りだった。でもそれがキキであることが僕には確信できた。間違いない。そして彼女は僕だということを知っていたのだ。彼女は僕に向かって微笑みかけさえしたのだ。

でもキキは立ち止まらなかった。彼女はちらりと振り返っただけだった。歩調も緩めなかった。彼女はそのまま歩き続け、通りに並んだオフィス・ビルのひとつに入っていった。僕は二十秒ほど遅れてその中に入った。でも遅すぎた。ホールのつきあたりにあるエレベーターの扉は既に閉まっていた。そして旧式の階数表示の針はゆっくりと回り始めていた。僕は息を整えながら、その針の行きつく先を睨んでいた。針はもどかしいほどゆっくりと回り、8という番号のところでぴくりと震えてから止まった。そしてそれっきり動かなくなった。僕はエレベーターのボタンを押したが、それから思い直して近くにあった階段を走って上がった。途中でバケツを下げたビルの管理人らしい白髪頭のサモアンにでくわした。僕はもう少しで彼を突き倒すところだった。

「おい、何処にいくんだ?」と彼は僕に訊いたが、「あとで」と僕は言って、そのまま階段を駆け上がった。ほこりっぽい臭いのする人気のないビルだった。しんとして、ばたばたという僕の靴音だけが嫌に大きく廊下に響いた。人のいる気配というものがまったくなかった。八階の廊下に出ると僕はまず左右を見渡してみた。でも何もなかった。誰もいなかった。廊下に沿ってこれという特徴のないビジネスライクなドアが七つか八つずらりと並んでいるだけだった。それぞれのドアには番号とオフィスの名札が取り付けられていた。

僕はドアにかかった名札をひとつひとつ読んでいった。でもそれらの名前は僕には何も語りかけてはこなかった。貿易会社や法律事務所や歯科医の治療室――どの名札もひどく古ぼけて、汚れていた。名札に書かれた名前までが古ぼけて汚らしいように感じられた。それらのオフィスはどれも流行っているように

は見受けられなかった。ぱっとしない通りの、ぱっとしないビルの、ぱっとしない階に並んだ、ぱっとしないオフィスだった。僕はもう一度ゆっくりと順番に名前をあたってみたが、そこにはキキに結び付くようなものは何ひとつみつけられなかった。僕は途方に暮れてじっとそこに立ちすくんだ。そして耳を澄ませた。何の物音もしなかった。ビルは廃墟のように静まりかえっていた。

それからその音が聞こえた。ハイヒールの踵がコッコッと硬い床を踏む音だった。その靴音は天井の高い人気のない廊下に異様と言ってもいいくらい大きくこだました。それはまるで太古の記憶のような重く乾いた響きを持っていた。その響きは僕の今の存在を少し揺るがせた。突然自分が、大昔に死んで風化し、ひからびてしまった巨大生物の迷宮のごとき体内を彷徨っているような気がした。僕は何かの加減で時の穴を抜けて、その空洞にすっぽりとはまりこんでしまったのだ。

靴音はあまりに大きく響いたので、それがどの方向から聞こえてくるのか、僕にはしばらく判断できなかった。でもそれは右手の廊下の端から聞こえてきた。僕はテニス・シューズの靴音を殺して、足早にそちらに行ってみた。靴音は一番端のドアの奥から聞こえていた。ずいぶん遠くから聞こえてくるような気がしたが、でもそれがそのドアの向こうであることは確かだった。ドアには名札がついていなかった。変だな、と僕は思った。さっき僕がドアを全部調べたときには、ちゃんとここには名札がかかっていたのだ。何のオフィスだったかは思いだせない。でもとにかくそこには何かしらの名札はかかっていた。間違いない。名札のないドアがあったら絶対に覚えている。

これはひょっとして夢なんじゃないか、と僕は思った。でも夢ではなかった。夢であるわけがない。何もかもがきちんと連続して続いている。ひとつひとつ順番を辿れる。僕はホノルルのダウンタウンにいて、キキを追ってここまで来たのだ。夢じゃない。現実だ。少し何かがずれているような気はする。でも現実は現実だ。

僕はとにかくそのドアをノックしてみた。

僕がノックすると、靴音は止まった。最後の響きが空中に吸い込まれてしまうと、あたりはまたもとの完全な沈黙に覆われた。

僕は三十秒ほどそのままドアの前で待った。でも何も起こらなかった。靴音も止んだままだった。

僕はノブを握り、思いきってそっと回してみた。鍵はかかっていなかった。ノブは軽く回り、微かな軋んだ音を立ててドアが内側に開いた。中は暗く、微かに床磨きの洗剤の臭いがした。部屋の中はまったくのがらんどうだった。家具もなく、照明器具もなかった。僅かに暮れ残った光が部屋の中を淡いブルーに染めているだけだった。床には変色した新聞紙が何枚か落ちていた。人の姿はなかった。

そしてまた靴音が聞こえた。正確に四歩、そしてまた沈黙。

音は右手の上方から聞こえたようだった。僕は部屋の一番奥まで行って、窓際にドアがひとつあるのをみつけた。そのドアにも鍵はかかっていなかった。ドアの奥は階段になっていた。僕はひやりとした金属の手すりを握りしめて、ゆっくりと足元を確かめながら真っ暗な階段を上ってみた。急な勾配の階段だった。たぶん普段は使わない非常用の階段か何かなのだろう。でもその階段の上から音が聞こえたことは確かだった。階段を上りきると、そこにまたドアがあった。電灯のスイッチを探してみたがそんなものは何処にも見当たらなかった。しかたなく僕は手探りでノブをさがしあて、それをまわしてドアを開けた。

部屋の中は暗かった。真っ暗というのではないのだが、でも中の様子はまったくと言ってもいいくらい何も見えなかった。でもそれがかなり広い空間であるということだけはわかった。たぶんペントハウスか屋根裏の倉庫のようなものなのだろう、と僕は想像した。窓はひとつもないか、あるいはあっても閉ざされていた。高い天井の真ん中に小さな明かり取りの窓のようなものが幾つか見えた。しかし月はまだ高く上がってはいなかったので、明かりと呼べそうなものはそこからは入ってこなかった。仄かな街灯の明か

うな影絵に影絵を重ねたみたいにほんの少しだけそのドアの窓から忍びこんでいたが、殆ど何の助けにもならなかった。

僕はそんな奇妙な闇の中に首を差し出すようにして「キキ！」と一度呼んでみた。しばらく待ったが、反応はなかった。

どうしたものかな、と僕は思った。中に入っていくには暗すぎる。手の打ちようがない。僕はそのまま少し待ってみることにした。そのうちに目が馴れるかもしれない。何か新たな展開があるかもしれない。

どれくらいの時間そこにじっとしていたのか、僕にはわからない。僕は耳を澄ませ、じっと闇の中を見つめていた。やがて何かの加減で、部屋にさしこむ光がほんの少しだけ明るさを増した。月が上がってきたのだろうか？　あるいは街の光が明るく灯り始めたのだろうか？　僕はドアのノブから手を離し、部屋の中央に向かって足下に注意しながらゆっくりと進んでみた。僕のゴムの靴底がさっがさっという重い乾いた音を立てた。僕がさっき聞いた靴音と同じような、奥行きとひろがりの感覚した奇妙に非現実的な響き方だった。

「キキ！」と僕はもう一度呼んでみた。返事はない。

最初に直観的に感じた通り、それはとても広い部屋だった。がらんとして、空気が静止していた。真ん中に立ってぐるりと見回すと、隅のほうに家具らしいものがぽつぽつと置いてあるのが見えた。はっきりとは見えない。でもその灰色の輪郭から想像すると、ソファや椅子やテーブルやチェストやそんなものであるらしかった。それは何となく奇妙な光景だった。家具が全然家具らしく見えないのだ。距離はそこに現実感が欠けていることだった。あまりにも部屋が広く、それに比べて家具の数が圧倒的に少ないのだ。遠心的に拡大された非現実の生活空間。

僕は何処かにキキの白いショルダー・バッグが見えないものかと目を凝らした。彼女のブルーのワンピ

ースはおそらくこの部屋の闇のなかに埋もれてしまうことだろう。でもあのショルダー・バッグの白はわかるはずだ。彼女はどこかの椅子かソファに腰掛けているのかもしれない。

でもショルダー・バッグは見えなかった。ソファや椅子の上には白い布のようなものがくしゃっとした形に置いてあるだけだった。たぶん麻布のカバーか何かだろうと僕は思った。でも近付いてみると、それは布なんかではなかった。骨だった。ソファの上には人骨がふたつ並んで座っていた。どちらも完全にきちんと揃った人骨だった。何ひとつ欠けていなかった。ひとつの人骨は大きく、もうひとつは小柄だった。彼らは生きている時の姿勢そのままにそこに腰掛けていた。大きな方の人骨は片腕をソファの背もたれにかけていた。小さな方は両手をきちんと膝の上に載せていた。二人は自分たちでも気がつかないうちに死んでしまって、そのまま肉体を失って骨だけになってしまったように見えた。彼らは微笑んでいるようにさえ見えた。そして驚くほどに白かった。

僕は恐怖を感じなかった。どうしてかはわからない。でも怖くはなかった。すべてはここに留まっているものなのだ、と僕は思った。留まって、動かないものなのだ。あの刑事が言ったように、骨は清潔で静かなものなのだ。彼らは非常に完全に死んでしまっているのだ。怖いことなんか何もない。

僕は部屋をぐるりと歩いてまわってみた。それぞれの椅子の上には、それぞれの人骨が座っていた。骨は全部で六体あった。ひとつを除けばどれも完全な人骨で、死んでから長い時間が経っていた。どれも死んだことに気がつきもしないようにごく自然な姿勢で椅子に座っていた。ひとつの人骨はＴＶを眺め続けていた。ＴＶはもちろん切れていた。でも彼は（その大きさからたぶん男だろうと僕は想像した）そのブラウン管をじっと睨んでいた。視線はまっすぐそこに繋がっていた。虚無の映像に釘づけされた虚無の視線。テーブルに就いたまま死んでいるものもいた。テーブルにはまだ食器が載ったままだった。食器の中のものは、それがかつて何であったにせよ、ただの白いほこりに変わっていた。ベッドに横になって死ん

CamScannerでスキャン

でいるものもいた。その人骨だけが不完全だった。左腕が根本から無くなっていたのだ。
僕は目を閉じた。
これはいったい何なんだ？　君は僕にいったい何を見せようとしているんだ。
また靴音が響いた。靴音は別の空間から聞こえていた。それがどの方向から聞こえてくるのかは、僕にはわからなかった。どこでもない方角から、どこでもない場所からそれは聞こえてくるように感じられた。でも見たところ、この部屋が行き止まりだった。この部屋からはどこにも抜けることはできなかった。足音はひとしきり続き、そして消えた。それに続く沈黙は息が詰まりそうなほど濃密だった。僕は手のひらで顔の汗を拭いた。キキはまた消えてしまったのだ。
僕は入ってきたドアを開けて外に出た。最後に振り返ると、青い闇の中に六体の骨がぼんやりと白く浮かんでいるのが見えた。彼らは今にもすっと起き上がって動きだしそうに見えた。僕がいなくなってしまうのを待ちつづけているように見えた。僕がいなくなるとさっとTVのスイッチがつき、皿の中に温かい料理が戻ってくるのではないか、という気がした。僕は彼らの生活を邪魔しないように静かにそっとドアを閉めて階段を下り、もとのがらんどうのオフィスに戻った。オフィスはさっき見た時のままだった。誰の姿もなかった。床の同じ場所に古新聞が落ちているだけだった。
僕は窓際に寄って下を見下ろしてみた。街灯が白く光り、歩道に沿ってライトバンとピックアップ・トラックが前と同じように駐車していた。人影はなかった。日はすっかり暮れていた。
それから僕は埃のつもった窓枠の上にそれを見つけた。名刺くらいの大きさの紙片で、そこにはボールペンで電話番号とおぼしき七つの数字が書きつけてあった。紙もインクも変色しない程度には新しかった。番号にはまったく覚えがない。裏返してみたが、何も書かれていなかった。ただの白紙だ。
僕はその紙をポケットに入れて廊下に出た。

そして廊下に立って、またしばらくじっと耳を澄ませてみた。
でももう何の物音も聞こえなかった。
全ては死に絶えていた。線を切られてしまった電話機のような完璧な沈黙だった。僕はあきらめて階段を下りた。ホールに出てさっきの管理人を捜してみた。どこにも行けない沈黙だった。あそこがいったい何のオフィスなのか聞いてみようと思ったのだが、彼の姿は見当たらなかった。僕は少しそこで待ってみたのだが、そのうちにだんだんユキのことが心配になってきた。いったい俺はどれくらい彼女を置きっぱなしにしたんだろう、と僕は考えてみた。でもどれくらいの時間が経ったのか、僕には見当もつかなかった。二十分くらいだろうか？ あるいは一時間くらいだろうか？ 薄闇がもう夜に変わっている。そしてあまり環境が良いとは言えない通りに彼女を置いてきてしまったのだ。とにかく引き上げようと僕は思った。これ以上ここにいても仕方ない。
僕はその通りの名前を覚えてから、急いで車を停めたところまで戻った。ユキは不貞腐れた顔でシートに寝そべるようにしてラジオを聴いていた。僕がノックすると顔を上げてドアのロックを外した。
「悪かった」と僕は言った。
「いろんな人が来たわよ。何か怒鳴ったり、窓ガラスを叩いたり、車をゆすったりしたの」と彼女は表情のない声で言った。そしてラジオのスイッチを切った。「すごく怖かった」
「悪かった」
それから彼女は僕の顔を見た。彼女の目は一瞬凍りついたように見えた。瞳がふっとその色を失い、静かな水面に木の葉が落ちた時のように表情が微かに揺れた。唇が言葉にならない言葉を形成しながらゆっくりと小さく動いた。「ねえ、あなたいったい何処で何してきたの？」
「わからない」と僕は言った。僕の声はどこかよくわからない場所から聞こえてくるみたいだった。あの

足音の響きと同じように奥行きとひろがりが混濁していた。僕はポケットからハンカチを出して、ゆっくり汗を拭いた。僕の顔の上で、汗は冷たく固い膜のようになっていた。「よくわからないんだ。いったい何をしていたんだろう?」

ユキは目を細め、そっと手を伸ばして僕の頬に触れた。その指先はやわらかく、滑らかだった。彼女は僕の頬に指をつけたまま、匂いを嗅ぐときのようにすうっと音を立てて鼻から息を吸い込んだ。彼女の小さな鼻が少しだけ膨らんで堅くなったように見えた。彼女は僕をじっと見ていた。一キロメートルも向こうから見られているような気がした。「でも何かを見たんでしょう?」

僕は肯いた。

「口には出せないこと。言葉にならないこと。説明しようとしても、誰にもうまく説明できないこと。でも私にはわかるのよ」彼女は体をもたせかけるようにして僕の頬にそっと頬をつけた。そして十秒か十五秒くらいそのままの姿勢でじっとしていた。「かわいそうに」と彼女は言った。

「何故だろう?」と僕は言って、笑った。別に笑いたくなんかなかったが、笑わないわけにいかなかった。「僕はどう考えてみてもごく普通の当たり前の人間なんだ。どちらかといえば実際的な人間なんだ。なのにどうしていつもこんな奇妙なことにひきずりこまれてしまうんだろう?」

「さあ、どうしてかしら?」とユキは言った。「私に訊かないで。私は子供で、あなたが大人なのよ」

「確かに」と僕は言った。

「でもあなたの気持ちよくわかるわよ」

「僕にはよくわからない」

「無力感」と彼女は言った。「何かすごく大きいものに振り回されていて、自分が何をしてもどうにもならないような気分」

「そうかもしれない」
「そういう時には大人はお酒を飲むのよ」
「正論だ」と僕は言った。

僕らはハレクラニのバーに行った。プールサイド・バーじゃない方の室内バーだった。僕はマティーニを飲み、ユキはレモン・ソーダを飲んだ。セルゲイ・ラフマニノフみたいな深刻な顔をした髪の薄い中年のピアニストが、グランド・ピアノに向かって黙々とスタンダード・ナンバーを弾いていた。客はまだ僕ら二人だけだった。彼は「スターダスト」を弾き、「バット・ノット・フォー・ミー」を弾き、「ヴァーモントの月」を弾いた。技術的にはもうしぶんなかったが、あまり面白い演奏ではなかった。彼はそのステージの最後にショパンのプレリュードをきちんと弾いた。これはなかなか素晴らしい演奏だった。ユキが拍手をすると、彼は二ミリくらい微笑み、それからどこかに消えた。

僕はそこのバーでマティーニを三杯飲んだ。そして目を閉じてあの部屋の中の光景を思い起こしてみた。それはリアルな夢のように感じられた。それはぐっしょりと汗をかいて目覚めて、ああやっぱり夢だったんだ、とほっと溜め息をつくような光景だった。でもそれは夢ではない。僕もそれが夢でないことを知っているし、ユキもそれが夢でないことを知っている。ユキは知っているのだ。僕がそれを見たことを。風化した六体の白骨。それは何を意味するのだろう？　あの左腕のない白骨はディック・ノースのものなのだろうか？　それではあとの五体は誰のものだ？

キキは僕にいったい何を伝えようとしているのだ？

僕はふと気がついてポケットからさっき窓枠の上で見つけた紙片を取り出し、電話ボックスに行ってその番号を回してみた。誰も出なかった。コール音が深い底無しの虚無の中におもりを垂らすようにいつま

でもいつまでも鳴り響いていた。僕はバーの椅子に戻って溜め息をついた。

「もし飛行機の席が取れたら、僕は明日日本に帰る」と僕は言った。「僕は少しここに長くいすぎた。楽しい休暇だったけど、そろそろ引き上げ時だという気がするんだ。日本に帰って片付けなくちゃいけないこともあるしね」

ユキは肯いた。僕が切り出す前から彼女にはそれがわかっていたようだった。「いいわよ、私のことは気にしないで。あなたが帰りたいと思えば帰ればいいのよ」

「君はどうする？　ここに残る？　それとも僕と一緒に日本に戻る？」

ユキは肩を小さくすぼめた。「しばらくママのところに泊めてもらうことにするわ。まだあんまり日本に戻りたくないから。泊めてくれって言えば断りもしないでしょう」

僕は肯いてグラスの底に残っていたマティーニを飲み干した。

「じゃあ明日マカハまで車で送ってあげるよ。まあ、それに、僕も最後にもう一度君のお母さんに会っておいた方がよさそうだしね」

それから僕らはアロハ・タワーの近くのシーフード・レストランに最後の夕食を食べにいった。彼女はロブスターを食べ、僕はウィスキーを飲んでからフライド・オイスターを食べた。彼女も僕もあまり喋らなかった。僕の頭の中はひどくぼんやりとしていた。カキを食べながらそのまま眠りこんで、白骨になってしまいそうな気がした。

ユキは時々僕の顔を見た。そして食事が終わると、「あなたもう帰って寝た方がいいみたいよ。ひどい顔してる」と僕に言った。

僕は部屋に戻ってTVをつけ、しばらく一人でワインを飲んでいた。TVは野球中継をやっていた。ヤンキーズ対オリオールズの試合だった。でも僕はとくに試合を見ていたわけではなかった。ただ何となく

TVをつけておきたかっただけなのだ。何か現実的なものと繋がっているというしるしに。

僕は眠くなるまでワインを飲んだ。それから思い出して、もう一度紙片に書いてあった電話番号を回してみた。やはり誰も出なかった。僕は十五回ベルを鳴らしてから電話を切った。そしてまたソファに座ってTVのブラウン管を睨んだ。ウィンフィールドがバッターボックスに入っていた。それから何かが頭にひっかかっていることに気づいた。何か、だ。

僕はTVを睨みながら、しばらくその何かについて考えてみた。

何かと何かが似ている。何かと何かが繋がっている。

まさか、と僕は思った。でも試してみる価値はある。僕はその紙片をもってドアのところに行き、ジューンがそこに書いた電話番号と、その紙片の電話番号を照合してみた。

同じだった。

何もかもが繋がっているんだ、と僕は思った。何もかもが繋がっている。そして僕だけがその繋ぎめを理解できないでいる。

*

翌朝僕はJALのオフィスに行って午後のフライトを予約した。そして部屋を引き払い、車でユキをマカハの母親のコテージまで送った。僕は朝アメに電話をかけて急な用事ができたので今日、日本に帰ることになったと言った。彼女はとくには驚かなかった。ユキを寝かせるくらいの場所はあるし、ここに連れてきてくれてかまわない、ということだった。その日は珍しく朝から曇っていた。いつまたスコールが降り出してもおかしくないような天気だった。僕はいつもの三菱ランサーで、いつものようにラジオを聴きながら、いつものように海岸沿いのハイウェイを一二〇キロで走った。

「パックマンみたい」とユキが言った。
「何みたい？」僕は聞き返した。
「あなたの心臓の中にパックマンがいるみたい」とユキは言った。「パックマンがあなたの心臓を食べてるの。ピッピピッピッピピピッピッッピッピ、て」
「比喩がよく理解できない」
「何かが蝕んでる」
僕はそれについて考えながらしばらく運転を続けた。「時々死の影のようなものを感じることがある」と僕は言った。「とても濃密な影なんだ。死がすぐ側にまで迫っているような気がする。腕がすっと伸びてきて、今にも僕の足首を掴みそうな気がするんだ。でも怖くはない。どうしてかというと、それはいつも僕の死じゃないからだ。その手がつかむのはいつも別の誰かの足首なんだ。でも誰かが死んでいくたびに僕の存在が少しずつずれていくような気がする。どうしてだろう？」
ユキは黙って肩をすぼめた。
「どうしてかはわからない。でもいつも死というものが僕の脇にいる。そしてチャンスが来ると、それがどこかの隙間からふと姿を見せる」
「それがたぶんあなたの鍵なんじゃないかしら？　あなたは死というものを通して世界と繋がっているのよ、きっと」
僕はまたそれについてしばらく考えてみた。
「君はすごく僕を落ち込ませる」と僕は言った。
ディック・ノースは僕がいなくなることを真剣に寂しがってくれた。我々の間にはたいして共通点はな

かったけれど、それだけにある種の気楽さはあった。それに僕は彼の詩的な現実性に対して敬意のようなものさえ抱いていた。僕らは握手をして別れた。握手をするときにふとあの白骨のことを思い出した。あれは本当にディック・ノースだったんだろうか？

「ねえ、君は自分がどういう死に方をするか考えたことはある？」と僕は彼に訊いてみた。

彼は微笑んで少し考えていた。「戦争中はよく考えたね。あそこには実にいろんな死に方があったから。でも最近はあまり考えない。あまりややこしいことを考える暇がないんだね。戦争より平和の方がずっと忙しい」彼は笑った。「でもどうしてそんなことを訊くの？」

別に理由はない、と僕は言った。ただちょっと思いついたんだと。

「考えておくよ。今度君に会うまでにね」と彼は言った。

それからアメが僕を散歩に誘った。僕らは肩を並べてジョギング用のコースをゆっくりと歩いた。

「いろいろと有り難う」とアメが言った。「本当に感謝してるのよ。私、そういうことどうも上手く言えないんだけど。でもね——うん、まあ、そうなのよ。あなたがいてくれたおかげでいろんなことが上手く行ったような気がするわ。あなたが中間にいてくれると、どうしてか物事が円滑に流れるのよ。ユキともふたりでいろんな話ができたし、少しはお互いを理解しあえるようになったみたいだし。こうして泊まりに来てくれるようにもなったし」

「それはよかった」と僕は言った。僕が「それはよかった」という台詞を使うのは、他に何ひとつとして肯定的言語表現方法を思いつけず、しかも沈黙が不適当であるという危機的状況に限られている。でももちろんアメはそんなことには気がつかなかった。

「あなたと会ってからずいぶんあの子も精神的に落ち着いてきたように思うのよ。苛々したところも前よりは減ってきたし。きっとあなたとあの子は相性がいいのね。どうしてかは知らないけれど。ひょっとし

CamScannerでスキャン

てあなたたちの間には何かしら共通するところがあるのかしら。それ、どう思う？」

僕にはよくわからない、と僕は言った。

学校のことはどうしたらいいだろう、と彼女が僕に訊いた。

本人が行きたくないのなら行かせなくてもいいんじゃないか、と僕は言った。「とても難しい子だし、傷つきやすい子だし、無理に力ずくで何かをやらせようとしても無駄だと思いますね。それよりはきちんとした家庭教師をつけて最低限必要なことだけ教えた方がいいですよ。受験勉強の詰め込みやら下らないクラブ活動やら無意味な競争やら集団の抑圧やら偽善的な規則やらというのはどう考えてもあの子の性格に向いてない。学校なんて行きたくなければ行かなくていいものですよ。一人でやった方がきちんとできる人間だっているんです。それよりはあの子にしかない才能をみつけてのびのびと伸ばしてやった方がいいんじゃないですか？　あの子には何かしらうまく良い方に伸ばせるものがあると僕は思うんです。あるいはそのうちに自分の方から学校に行きたいと言い出すかもしれない。それならもちろん行かせればいい。いずれにせよそれはあの子自身に決めさせればいいことでしょう？」

「そうね」アメはしばらく黙って考えていたが、そう言って肯いた。「たしかにあなたの言うとおりかもしれない。私も全然団体的な人間じゃないし、ろくに学校なんか行かなかったから、あなたの言うことはよくわかるわよ」

「それがよくわかるんなら、何も考えることないじゃないですか。いったい何が問題だったんですか？」

彼女はぼきぼきという音を立てて何度か首を振った。

「別に、何も問題なんてないのよ。ただ私があの子に対して母親として確固とした自信を持てなかっただけ。だからそんな風にさっぱりと思い切れなかったのよ。向こうが何を言おうと、学校なんか行かなくったって構わないんだとはね。自信がないから弱気に考えちゃうのね。やっぱり学校に行かないとなんとな

く社会的にまずいんじゃないか、とか、そういう風に」
社会的に、と僕は思った。「もちろんそれが正しい結論かどうかはわかりませんよ。誰にも先のことはわかりませんからね。結果的に上手く行かないかもしれない。でももしあなたがあの子に対して――母親としてであれ、友達としてであれ――きちんと結びついているんだということを生活のレベルでこまめに示してやることができれば、そしてある程度の敬意のようなものを示してやることができれば、勘の良い子だから、あとは自分で何とか上手くやっていくでしょう」
彼女はショート・パンツのポケットに手をつっこんだまま、しばらく黙って歩いた。「あなたにはあの子の気持ちがとてもよくわかるのね。どうしてかしら」
理解しようと努めているからだと言いたかったが、もちろん言わなかった。
それから彼女は僕にユキの面倒をみてもらったことに対して何かお礼をしたいと言った。お礼なら牧村拓氏からもう充分にしてもらっているから気にすることはない、と僕は言った。今でももう充分すぎるくらいだ、と。
「でもしておきたいのよ。あの人はあの人、私は私。私は私として、あなたにお礼したいのよ。今しておかないと、私ってすぐに忘れちゃうから」
「そんなのこそ忘れちゃってかまわないですよ」と僕は笑って言った。
彼女は道端のベンチに腰をおろしてシャツのポケットから煙草を出して吸った。セイラムの青い箱は汗でくしゃっと柔らかくなっていた。いつもの鳥がいつもの複雑な音階で鳴いていた。
アメはそのままずっと黙って煙草を吸っていた。もっとも実際に煙を吸ったのは二口か三口で、あとは全部彼女の指の間でただの灰になってぼろぼろと芝生の上に落ちた。それは僕に時間の死骸のようなものを想起させた。彼女の手の中で時間が次々に死んで焼かれて白い灰になっていくのだ。僕は鳥の声を聞

き、下の道をかたかたと走っていくカートに乗った庭師を眺めていた。僕らがマカハに着いたころから大僕は徐々に回復に向かい始めていた。一度だけどこか遠くで微かな雷鳴が聞こえたが、それだけだった。圧倒的な力に押されるように厚い灰色の雲は次々に分断され、またいつもの勢いの良い光と熱気が地上に戻ってきた。彼女は半袖のダンガリ・シャツを着て（仕事をしている時彼女は大抵その同じシャツを着ていた、胸のポケットにボールペンとフェルト・ペンとライターと煙草を入れて）、サングラスもかけずに強い日差しの中に座っていた。彼女は眩しさも暑さもとくに気にならないようだった。たぶん暑いのだろうとは思う。その証拠に首筋を汗が幾筋か流れ、シャツのところどころに黒い染みができていた。でも感じないのだ。それが精神の集中のせいなのか、精神の拡散のせいなのか、僕には判断できなかった。でもとにかくそんな風にして十分が経った。瞬間的時空間移動のような実体のない十分間だった。彼女は時間の経過という現象をまるで気にしていないようだった。時間というのは彼女の生活を構成する要素の中には入っていないのだろう。あるいは仮に入っているとしても、その地位はとても低いのだろう。でも僕にとってはそうではない。僕は飛行機の予約をしてあるのだ。

「そろそろ行きます」と僕は腕時計を見て言った。「空港でレンタカーを返して料金を精算しなくちゃならないんで、できたら少し早めに着きたいんです」

彼女はもう一度焦点を合わせなおそうとするようなぼんやりとした目で僕を見た。それは時々ユキが見せる表情にとてもよく似ていた。現実と折り合いをつけねばというような表情だ。この母子のあいだにはたしかに共通する気質なり性向なりがある、と僕はあらためて思った。「ああ、そうね、時間がないのね。ごめんなさい。気がつかなかったわ」と彼女は言った。そしてゆっくりと一度ずつ頭を左右に傾けた。「ちょっと考え事をしてたものだから」

僕らはベンチを立って、もと来た道を歩いてコテージに戻った。

僕が出発するとき、三人は外に出て見送ってくれた。僕はユキにあまりジャンク・フードを食べすぎないようにと言った。彼女は唇をすぼめただけだった。でもまあディック・ノースがついているからその点は大丈夫だろう。

バックミラーに並んで映る三人の姿はとても奇妙だった。ディック・ノースは右手を高く上げて振り、アメは腕組みをしてぼんやりとした目で前方を見つめ、ユキは横をむいてサンダルの先で石を転がしていた。それは本当に不完全な宇宙の端っこに置き去りにされた寄せ集めの一家みたいに見えた。ついさっきまで自分もそんな中に混じっていたなんてとても信じられなかった。でも僕がカーブで左にハンドルを切ると、彼らの姿はミラーからふっと消えて見えなくなってしまった。そして僕は一人きりになった。とても久し振りに。

*

一人になるのは良い気分だった。もちろんユキと二人でいることが嫌なわけではなかったけれど、それとは関係なく、一人になるというのは悪くなかった。何かをやる前に誰に相談する必要もなく、失敗しても誰に言い訳する必要もなかった。おかしなことがあれば一人で冗談を言って一人でくすくす笑っていればよかった。誰も「その冗談はつまらない」とは言わなかった。退屈すれば灰皿でも眺めていればよかった。僕がじっと灰皿を眺めていても誰も「どうして灰皿なんか眺めてるの？」と訊かなかった。良くも悪くも、僕は一人の生活にあまりにも馴れてしまったのだ。

一人になると、僕の回りの光の色や風の匂いまでが僅かに――しかし確実に――変化したように感じられた。空気を思い切り吸い込むと体の中の空間が幾らか広がったような気がした。僕はジャズのFM局に

CamScannerでスキャン

ラジオをあわせ、コールマン・ホーキンズだのリー・モーガンだのを聴きながら空港までのんびりと運転した。空を一面に覆っていた雲はむりやりにひきちぎられたみたいにばらばらになって、今では隅のほうにぽつんぽつんと残っているだけだった。747が銀色の楔のように激しい角度で空にのめりこんでいくのが見えた。貿易風が椰子の葉を揺らせ、そんな雲の断片をゆっくりと西の方向に流していった。

一人になると、僕は急に何も考えられなくなってしまった。頭の中で急速に重力が変化してしまったような感じがした。僕の思考はその重力変化に上手くついていくことができなかった。でも何も考えられないというのも素敵なことだった。いいじゃないか、何も考えるな、と僕は思った。ここはハワイなんだ、糞ったれ、なんで考え事なんかしなくちゃいけないんだ。僕は頭を空っぽにして運転に神経を集中し、「スタッフィー」や「サイドワインダー」にあわせて口笛と隙間風の中間くらいの音色の口笛を吹いた。時速一六〇キロを出して坂を下るとまわりで風がうなった。坂道の角度が変わると、太平洋が鮮やかな青に染まって視界いっぱいに広がった。

さて、と僕は思った。これで休暇は終りだ。何はともあれ、終わるべくして終わったのだ。

空港の近くのレンタカー・オフィスに車を返し、JALのカウンターで搭乗手続きを済ませてから、僕は最後にもう一度だけ空港の電話ボックスで例の謎の電話番号を回してみた。でも予想したとおり、誰も出なかった。いつまでもコール音が鳴り響いているだけだった。僕は電話を切り、しばらくボックスの中で電話機を眺めていた。それからあきらめてファースト・クラスの待合室に行ってジン・トニックを飲んだ。

東京、と僕は思った。でも東京のことがうまく思い出せなかった。

31

渋谷のアパートに戻って、留守中の郵便物にざっと目を通し、留守番電話をプレイバックしてみた。重要なものは何ひとつなかった。相変わらず細々とした仕事の用件ばかりだった。次の号の原稿についての問い合わせとか、僕が姿をくらませていることに対する苦情とか、新しい注文とか、そういうものだ。でも面倒なので全部無視することにした。いちいち言い訳をするだけで相当な時間が潰されてしまいそうだったし、そんなことするくらいならいっそのこと言い訳抜きでさっさと仕事を片づけてしまった方が話が早いし楽だった。でも一度そんな雪かき仕事を始めたらそれ以外のことに手がつけられなくなってしまうことはわかりきっている。だから一切無視するしかないのだ。もちろん多少の義理は欠くことになる。しかし有り難いことに今のところ金の心配はないし、先のことは先のことでまあなんとかなるだろう。だいたい僕はこれまで文句ひとつ言わずに相手の言い分どおりに黙々と仕事をしてきたのだ。少しくらいは自分の生きたいように生きる。僕にだってそれくらいの権利はある。

それから僕は牧村拓の家に電話をかけた。フライデーが出て、すぐに牧村拓につないでくれた。僕はだいたいの経過を彼に説明した。ユキはハワイでずいぶんリラックスしていたし、問題は何もなかったと。

「結構」と彼は言った。「まったく君には感謝するよ。明日にでもアメのところに電話するよ。金は足りたか、ところで?」

「充分です。余ってます」

「好きに使っていい。気にするな」

「ひとつうかがいたいことがあるんですが」と僕は言った。「女のことです」

「ああ、あれね」と彼は何でもなさそうに言った。

「あれはいったいどういう組織なんですか？」

「コールガールの組織だよ。そんなこと考えればわかるだろう。君だってその女と一晩トランプ遊びしてたわけじゃないんだろう？」

「いや、そうじゃなくて、どうして東京からホノルルの女が買えるんですか？　その仕組みが知りたいんです。ただの好奇心で」

牧村拓はちょっと考えていた。たぶん僕の好奇心の質について考えていたのだろう。「つまり国際宅急便みたいなもんだ。東京の組織に電話してホノルルのどこそこに何日の何時頃に女を届けてほしいと頼む。するとその東京の組織はホノルルで契約のある組織に連絡してその時間に女を送り届ける。俺は東京に金を払う。東京はコミッションを取って残りの金をホノルルに送る。ホノルルはコミッションを取って残りの金を女に渡す。便利だろう。世の中にはいろんなシステムがあるんだ」

「そのようですね」と僕は言った。国際宅急便。

「そう、金はかかるが便利だ。良い女が世界中何処でも抱ける。東京から予約できるんだ。向こうに行ってから苦労して探す必要もないし、安全だ。途中でヒモが出てくるなんてこともない。おまけに経費で落ちる」

「でもその組織の電話番号は教えてもらえないんでしょうね？」

「そりゃ駄目だ。絶対に秘密なんだ。会員しか取り次いでくれないし、会員になるにはものすごく厳しい資格審査がある。金と地位と信用が必要なんだ。君にはまず無理だ。あきらめろ。俺がこのシステムのこ

とを君に教えるだけですでに俺は部外者には秘密厳守という規約を破ってるわけなんだよ。俺がそれを君に教えてるのはただ単に純粋な好意からなんだぜ」

僕はその純粋な好意に対して礼を言った。

「でも良い女だったろう？」

「そうですね、確かに」と僕は言った。

「そりゃ良かった。良い女を寄越すようにって言っておいたんだ」と牧村拓は言った。「なんていう名前だった？」

「ジューン」と僕は言った。「六月のジューン」

「六月のジューン」と彼は繰り返した。「白だったか？」

「白？」

「白人」

「いや、東南アジア系です」

「今度ホノルルに行くことがあったら試してみよう」と彼は言った。

他に特に話すべきこともなかったので僕は礼を言って電話を切った。

次に僕は五反田君に電話をかけてみた。彼の電話は例によって留守番電話になっていた。僕は日本に戻ったので電話を欲しいというメッセージを入れておいた。そうこうするうちに日が暮れてきたので、僕はスバルに乗って青山通りに買い物に行った。そしてまた紀ノ国屋で調教済みの野菜を買った。あるいは長野の山奥あたりに紀ノ国屋出荷専用の調教的野菜畑があるのかもしれない。広い畑で、たぶんその回りには鉄条網が巡らせてあることだろう。「大脱走」みたいな感じのものものしい鉄条網だ。機関銃つきの監視塔があってもおかしくない。そしてその中でレタスやセロリに対して何かが行われているのだ、きっ

と。我々の想像を絶した非野菜的な訓練が。僕はそんなことを考えながら野菜を買い、肉と魚と豆腐と漬物を買った。そして家に帰った。

五反田君からの連絡はなかった。

翌朝僕はダンキン・ドーナツで朝食を済ませてから図書館に行って半月分の新聞を調べてみた。もちろんメイの事件の捜査の進捗ぶりを確かめるためだ。僕は朝日と毎日と読売の三紙を丁寧に読んでみたが、彼女の事件はただの一行も報道されてはいなかった。選挙の結果とレフチェンコ発言と中学生の非行問題が大きく取り上げられているだけだった。ビーチ・ボーイズが音楽的に不穏当だという理由でホワイト・ハウスでのコンサートをキャンセルされたという記事も載っていた。間違ったことだ。ビーチ・ボーイズが音楽的に不穏当でホワイト・ハウスを追われるとしたら、ミック・ジャガーは三回火あぶりにされてもおかしくないからだ。でもとにかく新聞には赤坂のホテルで一人の女がストッキングで絞め殺された事件についての記事は見当たらなかった。

僕はそれから週刊誌のバックナンバーをまとめて読んでみた。そのうちのひとつにメイの殺人についての一ページの記事が載っていた。「赤坂のQホテル・美女全裸絞殺事件」とタイトルにはあった。ひどいタイトルだ。写真のかわりに死体から専門の画家がおこしたらしい似顔絵が出ていた。死体写真を雑誌に載せるわけにはいかないからだろう。確かにじっとよく見るとその絵の女はメイに似ていたが、それは僕が最初からそれがメイだと知っているからこそ言えることであって、何の脈絡もなく急にその絵を見せられてもたぶんそれがメイだとはわからなかったんじゃないかと思う。確かに顔の細かい部分は上手く似せて描かれていたけれど、一番肝心なところが似ていなかったからだ。その絵は彼女の表情の根幹として存在していたものを伝えてはいなかった。それは死んだメイなのだ。生きているメイはもっと温かく、そしてもっと激しく動いていたのだ。彼女は間断なく希望し、幻想を抱き、思考していたのだ。彼女は優しく

熟練したゴージャスな官能的雪かきだったのだ。だからこそ僕らは幻想を取引することができたのだ。彼女は朝に、イノセントに「かっこう」と言うことができたのだ。でもその線画のメイは実際よりずっと貧乏臭く、汚らしく見えた。僕は首を振った。そして目を閉じて、ゆっくりと溜め息をついた。その絵を見ていると、メイが死んでしまったんだということが僕にはあらためて実感できた。ある意味では死体写真を見るよりもずっと強くその死を、あるいはその存在の欠落を実感することができた。非常に、完全に、死んでしまったのだ。彼女はもう戻ってはこないのだ。彼女の生は暗黒の虚無の中に吸い込まれてしまったのだ。そう思うと僕は胸の中に固く乾いた哀しみを感じた。

記事の方もその絵とおなじように貧乏臭く汚らしい文章で書かれていた。赤坂の一流ホテルQで二十代前半と推定される若い女がストッキングで絞殺されているのが発見された。女は裸で、身元を示すようなものは何ひとつとして身につけてはいなかった。フロントに告げた名前は偽名で云々、記事の中身は警察が僕に教えてくれたこととだいたい同じだった。ただし僕が知らないことも少しは書いてあった。警察はこの事件を売春組織に——それも一流ホテルを舞台にするような高級コールガール組織に——関連させて調査を進めている、と記事の最後にはあった。僕はバックナンバーの束をラックに戻し、ロビーの椅子に座って考えをめぐらせた。

どうして彼らは売春に捜査を絞ることにしたんだろう？　何か確実な証拠が出たのだろうか？　でもまさか警察に電話をかけて漁師か文学を呼び出して、ところであれはその後どうなりましたかと訊くわけにもいかない。僕は図書館を出て、近くで簡単に昼食を済ませ、それから町をふらふらと散歩した。歩いているうちに何か良い考えが浮かぶんじゃないかと思ったのだが全然駄目だった。春の空気は漠然として重く、そして皮膚をむずむずとさせた。いったい何をどう考えればいいのか、思いがさっぱりまとまらなかった。僕は明治神宮まで歩いていって芝生に寝転んで空を眺めた。そして売春について考えてみた。国際

宅急便、と僕は思った。東京で注文してホノルルで女と寝る。システマティックだ。手際が良いし、ソフィスティケートされている。汚らしくない。ビジネスライクだ。どんないかがわしいものでもあるポイントを越えると単純な善悪の尺度がきかなくなってしまう。そこにそれ独自の独立した幻想が生じるからだ。そして一度幻想が生じると、それは純粋な商品として機能しはじめる。高度資本主義はあらゆる隙間から商品を掘りおこす。幻想、それがキイ・ワードだ。売春だって人身売買だって階層差別だって個人攻撃だって倒錯性欲だってなんだって、綺麗なパッケージでくるんで綺麗な名前をつければ立派な商品になるのだ。そのうちに西武百貨店でコールガールがカタログ注文できるようになるかもしれないな、と僕は思った。You can rely on me.

ぼんやりとした春の空を眺めながら、僕は女と寝たいなと思った。そして出来ることならあの札幌のユミヨシさんと寝たかった。うん、そしてそれはけっして不可能なことではない。僕は自分が彼女のアパートのドアの隙間に靴を差し込んで――あのうっとうしい刑事みたいに――閉まらないようにしているところを想像した。そしてこう言うのだ。「君は僕と寝なくてはいけない。そうするべきなんだ」と。それから僕は彼女と寝るだろう。僕は優しく、プレゼントのリボンをとくように彼女の服を脱がせる。コートを脱がせ、眼鏡を取り、セーターを脱がせる。服を脱がせるとそれはメイになった。「かっこう」とメイが言った。「私の体、素敵だと思う?」

僕が答えようとする間もなく夜があけた。そして隣にはキキがいた。キキの背中を五反田君の指が優雅に這っていた。ドアが開いてユキが姿を見せた。そして彼女は僕とキキが抱き合っているところを目撃した。それは五反田君ではなくて僕だった。指は五反田君のものだった。でもキキと性交しているのは僕だった。「信じられない」とユキは言った。「本当に信じられない」

「そうじゃないんだ」と僕は言った。

「どうしたっていうのよ？」とキキが繰り返した。

白日夢。

ワイルドでごったがえして意味のない白日夢。

そうじゃないんだ、と僕は言った。僕が寝たい相手はユミヨシさんなんだ。でも駄目だった。混乱していた。繋がりがもつれているのだ。まずそのもつれを何とか解消しなければならない。そうしないことには僕は何も手に入れることができない。

僕は明治神宮を出て、原宿の裏通りにある美味いコーヒーを飲ませる店で熱くて濃いコーヒーを飲んだ。そしてのんびりと歩いて家に帰った。

夕方前に五反田君から電話があった。

「ねえ、今あまり時間がないんだ」と五反田君は言った。「今夜君と会えるかな？　八時か九時か、それくらいの時間に」

「会えるよ。まるで暇だから」と僕は言った。

「食事をして、酒を飲もう。迎えにいくよ」

僕は鞄を整理して旅行中の領収書を集め、牧村拓に請求するものと僕が自分で払うものとに分けた。食費の半分とレンタカーの料金は彼の方にまわしてもいいだろう。そしてユキの個人的な買い物（サーフボード、ラジオ・カセット、水着、エトセトラ）。僕はメモにその明細を書き、封筒に入れ、余ったトラベラーズ・チェックを銀行で現金化してそれと一緒にすぐに送れるように整理しておいた。僕はそういう事務処理がすごく手早くてきちんとしている。別に事務作業が好きなわけではない。そんなものが好きな人間なんていない。僕はただ金のことでごたごたするのが嫌なのだ。

精算を終えると、ホウレンソウを茹でてちりめんじゃこと混ぜ、軽く酢を振って、それをつまみにオリンの黒ビールを飲んだ。そして佐藤春夫の短編を久し振りにゆっくりと読みかえしてみた。何ということもなく気持ちの良い春の宵だった。夕暮れの青が透明な刷毛でかさね塗りされるみたいに一段また一段と濃くなり、夜の闇に変わっていった。本を読むのに疲れるとスターン・ローズ・イストミンの演奏するシューベルトの作品一〇〇のトリオを聴いた。僕はずっと昔から、春になるとこのレコードをよく聴いた。春の夜が含むある種の哀しみが、この曲のトーンに呼応しているように僕は感じていた。胸の中までが青い柔らかな闇に染められてしまいそうな、春の夜。そして目を閉じると、その闇の奥に白い人骨がぼんやりと浮かんだ。生は深い虚無の中に沈み、骨は記憶のように固く、僕の前にあった。

CamScannerでスキャン

32

五反田君は八時四十分に例のマセラティに乗ってやってきた。僕のアパートの前に停まると、マセラティはひどく場違いに見えた。それは誰のせいでもない。ある種のものはある種のものに宿命的にそぐわないのだ。あの巨大なメルセデスも全然そぐわなかったが、マセラティもやはりそぐわなかった。仕方ない。人にはそれぞれの生活のスタイルというものがある。

五反田君はごく普通のグレーのVネックのセーターに、ごく普通のブルーのボタンダウン・シャツに、ごく普通のコットン・パンツをはいていた。でも、それでも彼は目立った。エルトン・ジョンが紫の上着にオレンジ色のシャツを着てハイジャンプしているのと同じくらい目立った。彼は僕の部屋のドアをノックし、僕がドアを開けるとにっこりと笑った。

「もしよかったら部屋に寄っていかないか？」と僕は誘ってみた。彼が僕の部屋を見たそうなそぶりを見せていたからだ。

「いいね」と彼は何となく恥ずかしそうに微笑みながら言った。もしよかったらそのまま一週間くらい泊まっていってもいいよと言ってしまいそうになるくらい感じの良い微笑だった。

狭い部屋だったが、その狭さは彼にある種の感銘を与えたようだった。「懐かしい」と彼は言った。「昔こういう部屋に住んだことがあった。まだ売れてない頃に」

他の人間が同じことを言ったら厭味に聞こえたと思うが、彼が言うと素直に褒められているような気が

した。

簡単に説明すると、僕のアパートの部屋は四つの部分に分かれている。台所・浴室・居間・寝室、である。どれもかなり狭い。台所は部屋というよりはむしろ広い目の廊下と言ったほうが事実に近いだろう。細長い食器棚と二人用の食卓を置くと、あとはもう何も入らない。寝室も同様で、ベッドと洋服箪笥と仕事用の机でいっぱいになる。居間はかろうじて空間を保持している。ここには殆ど何も置いてないからだ。本棚とレコード棚と小さなステレオ・セット、それだけだ。椅子もないし、机もない。マリメッコの大きなクッションがふたつあって、それをあてて壁にもたれるとなかなか気持ちがいい。机が必要な時は押し入れからおりたたみ式の書きもの机を出してくる。

僕は五反田君にクッションの使い方を教え、机を置いて、黒ビールとグラスとホウレンソウのつまみを出した。そしてもう一度シューベルトのトリオをかけた。

「素晴らしい」と五反田君は言った。別に社交辞令ではなくて、本当にそう思っているみたいだった。

「もっと何かつまみを作ろう」と僕は言った。

「迷惑じゃないかな？」

「迷惑じゃない。簡単だよ。あっという間だ。大したものはないけど、酒のつまみ程度なら作れるだろう」

「隣で見てていいかな」

「もちろん」と僕は言った。

僕は長葱と梅肉のあえものを作ってかつおぶしをかけ、わかめと海老の酢のものを作り、わさび漬けと大根おろしに細かく切ったはんぺんをからめ、オリーブ・オイルとにんにくと少量のサラミを使ってせん切りにしたじゃが芋を炒めた。胡瓜を細かく刻んで即席の漬物を作った。昨日作ったひじきの煮物も残っ

ていたし、豆腐もあった。薬味にはたっぷりと生姜をつかった。

「素晴らしい」と五反田君は溜め息をついて言った。「天才的だ」

「簡単なんだよ。どれも全然手がこんだものじゃない。馴れればすぐにできる。要は、ありあわせのものでどれだけ作れるかっていうことだよ」

「天才的だ。僕にはとてもできない」

「僕には歯医者の真似なんてとてもできない。人には人それぞれの生き方がある。Different strokes for different folks.」

「実に」と彼は言った。「ねえ、今日は外にでるのはやめてここで寛ぎたいね。かまわないかな」

「僕は構わない」

我々は黒ビールを飲みながら、僕の作ったつまみを食べた。ビールがなくなるとカティー・サークを飲んだ。そしてスライ&ザ・ファミリー・ストーンのレコードを聴いた。ドアーズとかストーンズとかピンク・フロイドとかも聴いた。ビーチ・ボーイズの「サーフズ・アップ」も聴いた。六〇年代的な夜だった。ラビン・スプーンフルもスリー・ドッグ・ナイトも聴いた。もしシリアスな宇宙人がそこに居合わせたらたぶんタイム・ワープか何かだと思っただろうと思う。

宇宙人は来なかったけれど、十時過ぎからしとしとと雨が降り始めた。柔らかくて静かな雨だった。軒先から落ちる雨音でようやくその存在がわかるようなタイプの雨だった。死者のように静かな雨。

夜が更けると僕は音楽をかけるのを止めた。僕のアパートは壁のしっかりした五反田君のマンションとは違う。十一時を過ぎて音楽をかけていると苦情が来る。音楽が消えると僕らは雨だれの音を聞きながら死者の話をした。メイの事件の捜査はあれ以来あまり進んでないらしい、と僕は言った。それは知っている、と彼は言った。彼もやはり新聞と雑誌で捜査の進展ぶりをチェックしていたのだ。

CamScannerでスキャン

僕は二本目のカティー・サークを開け、その最初の一杯を飲む時にメイのためにグラスを上げた。

「警察はコールガール組織に捜査の対象を絞っている」と僕は言った。「それについてたぶん何かは掴んだんだと思う。だからそっちの方から君のところに手が伸びる可能性はあるかもしれないよ」

「可能性はあるね」と五反田君は微かに眉をしかめて言った。「でも多分大丈夫だと思う。僕もちょっと気になったんで事務所の人間にそれとなく聞いてみたんだ。あの組織は秘密を絶対に守るっていうけど、それは本当に確かかって。するとどうもね、かなり政治関係が絡んでるらしいんだ。上のほうの政治家が何人かかんでいる。だからあの組織がもし警察に割れたとしても内部にまでは手が入らないだろうということだった。手が出せないんだ。それにうちの事務所にだっていささかの政治力はある。大物のタレントを何人も抱えているから、それくらいのものは持っている。やばい方面とも一応の繋がりがある。だからいずれにせよ上手く抑えるだろう。事務所にとっても僕は金づるだからね、それくらいのことは当然やるだろう。僕がスキャンダルに巻き込まれて商品として通用しなくなったら困るのは事務所だ。事務所は僕にかなりの資本投下してるからね。もちろんあの時点で君が僕の名前を出してたら、そんなこととは無関係に僕は間違いなくひっぱられていただろうけどね。なにしろ君は唯一の直接的なコネクションだったからね。そうなったら政治力が出てくる暇もない。でももうその心配もない。あとはシステムとシステムの力関係の問題になってしまった」

「汚い世界だ」と僕は言った。

「実に」と五反田君は言った。「実に汚い」

「汚いに一票」

「失礼？」と彼は聞き返した。

「汚いに一票、動議採択」

彼は肯いた。そして微笑んだ。「そう、汚いに一票。誰も殺された女のことなんか考えてない。自分の保身のことだけだ。僕ももちろん含めてね」

僕は台所に行って氷を補充し、クラッカーとチーズを持ってきた。

「ひとつ頼みがある」と僕は言った。「その組織に電話をかけて訊いてほしいことがあるんだ」

彼は指で耳たぶをつまんだ。「何が知りたい？ 事件に関係したことなら無駄だぜ。何も言わない」

「事件には関係ないことだよ。ホノルルのコールガールについて知りたいことがあるんだ。たしかその組織を通して外国のコールガールが買えると聞いたんだけど」

「誰に聞いた？」

「名前のない、ある人だよ。その男が話していた組織と君が話している組織はたぶん同じものだと僕は想像するんだけどね。地位と信用と金がないとそのクラブには入れないということだったから。僕なんか足元にも寄れないと言われた」

五反田君は微笑んだ。「たしかに電話一本で外国で女が買えるシステムがあるというのは聞いたことがある。試したことはないけどね。たぶん同じ組織だろう。で、ホノルルのコールガールの何が知りたいの？」

「ジューンという東南アジア系の女の子がいるかどうか知りたい」

五反田君は少し考えていたが、それ以上は何も質問しなかった。手帳をだして女の名前をそこに書いた。

「ジューン。姓は？」

「よせよ、コールガールだぜ」と僕は言った。「ただのジューン。六月のジューン」

「わかった。明日連絡をつけてみよう」と彼は言った。

CamScannerでスキャン

「服に着るよ」と僕は言った。

「気にしなくていい。僕のためにやってくれたことに比べれば本当にこんなの些細なことだ。気にしなくていい」彼は親指とひとさし指の先をつけて目を細めた。「ところで、ハワイは一人で行ったの？」

「ハワイに一人で行く人間なんていない。もちろん女の子と二人で行ったよ。おそろしく綺麗な子だよ。まだ十三だけど」

「十三の子と寝たの？」

「まさか。まだ胸だってろくに膨らんでないような子だぜ」

「じゃあいったいハワイまで行って二人で何してたんだ？」

「テーブル・マナーを教えたり、性欲の仕組みを解説したり、ボーイ・ジョージの悪口を言ったり、『E.T.』を観たり、いろいろ」

五反田君はしばらく僕の顔を見ていた。それから上唇と下唇をほんのちょっとずらせるようにして笑った。「変わってる」と彼は言った。「君のやることはいつも本当に変わってる。どうしてだろう？」

「どうしてだろう？」と僕は言った。「僕だってとくにやりたくてやっているわけじゃない。事態がそういう方向に流されていくんだ。メイの時と同じようにね。あれだって誰のせいでもない。でもああなってしまうんだ」

「ふうん」と彼は言った。「でもハワイは楽しかった？」

「もちろん」

「よく焼けてる」

「もちろん」

五反田君はウィスキーを飲み、クラッカーを齧った。

「君がいない間にまた前の女房と何度か会った」と彼は言った。「結構うまくいってるんだ。変な話だけど、女房と寝るのっていいもんだ」

「気持ちはわかる」と僕は言った。

「君も別れた奥さんと会ってみれば？」

「駄目だよ。別の誰かともうすぐ結婚するんだ。そのことは言わなかったっけ？」

彼は首を振った。「聞いてない。でもそれは残念だな」

「いや、その方がいいんだ。残念じゃない」と僕は言った。その方がいい。「ところで、君の方は奥さんとどうするつもりなんだ？」

彼はまた首を振った。「絶望的だね。絶望的。それ以外の形容が思いつけない。どう考えても、どこにも行けっこないんだ。僕ら二人はこれまでになく上手くやってる。こっそりと会って、顔の割れないモテルに行って寝る。僕らは二人でいるとお互いにほっとする。彼女と寝るのは素敵だよ、さっきも言ったようにね。何も言わなくてもすっと心が通じる。お互いのことを理解しあっている。結婚していた時よりも深く理解しあっている。愛しているんだ、正確に言うと。でもこんなことをずっとずっといつまでも続けていくわけにはいかない。モテルでこそこそ会うなんて本当に消耗だ。いつかはマスコミにばれる。ばれたらスキャンダルになる。そうなったらあいつらは僕らを骨までしゃぶるよ。いや骨だって残してくれないかもしれない。我々は危ない橋を渡ってるんだよ。とても疲れる。そういうんじゃなくて、僕は明るいところに出て彼女と二人できちんとまっとうな生活をしたいんだよ。それが僕の望みだ。一緒にのんびり飯をくったり、散歩したりしたい。子供だって作りたい。でもそれは無理な相談だ。彼女の家族と僕は絶対に仲直りできない。あいつらもひどいことをしたし、僕も言いたいことを言った。もう元には戻らない。彼女が家族と切れれば話はいちばん簡単だが、それが彼女にはできない。ひどい家族だし、彼女のこ

とを徹底的に利用している。そのことは彼女にもわかってるんだ。でも切れない。女房とその家族はシャム双生児みたいにぴたっとくっついてる。離れない。出口がない」
五反田君はグラスを振って中の氷をくるくると回した。
「なんだか不思議だね」と彼は微笑みながら言った。「手に入れようと思えば大抵のものは手に入るのに、本当に欲しいものが手に入らない」
「そういうものだろう」と僕は言った。「もっとも僕の場合は手に入れられる物は限られていたから、たいしたことは言えないけれどね」
「いや、それは違うな」と五反田君は言った。「君の場合はもともとあまり物を欲しがらないというだけのことなんじゃないのかな。つまりたとえばね、マセラティとか、麻布のあのマンションとかを君は欲しいかい？」
「それほど欲しいとは思わないね。今のところ必要がないからね。スバルとこの狭いアパートでけっこう満足して暮らしてる。満足というのはオーバーかもしれないけれど、分相応だし、気楽だし、不満もない。でも先になってもしそういう必要が生じたとすれば、それは欲しいだろうね」
「いや、違うね。必要というものはそういうものじゃない。自然に生まれるものじゃないんだ。それは人為的に作り出されるものなんだ。たとえばね、僕は家なんかどこにあったってかまやしないんだ。板橋だろうが亀戸だろうが中野区都立家政だろうが、本当にどこだっていい。屋根がついて、満足に暮らせればそれでいい。でも事務所の人間はそうは思わない。君はスターなんだから港区に住めと言う。そして麻布のマンションを勝手に見つけてきたんだ。下らん。港区にいったい何がある？　洋服屋の経営する高くてまずいレストランとみっともない東京タワーと朝まで起きてうろうろしてるわけのわからん馬鹿な女、それくらいだ。マセラティにしたってそうだ。僕はスバルでいい。充分だ。ちゃんと走る。東京の道路でマ

セラティが何の役にたつ？　馬鹿馬鹿しい。でもあれも事務所のやつがみつけてきたんだ。スターはスバルやらブルーバードやらコロナに乗ってちゃいけないんだ。それでマセラティだ。新車じゃないけどね、それでもかなり高かった。僕の前はどっかの演歌歌手が乗ってた」

　彼は氷の溶けたグラスにウィスキーを注いで一口飲んだ。そしてしばらく顔をしかめていた。

「僕の住んでるのはそういう世界なんだ。港区と欧州車とロレックスを手に入れれば一流だと思われる。下らないことだ。何の意味もない。要するにね、僕が言いたいのは、必要というものはそういう風にして人為的に作り出されるということだ。自然に生まれるものではない。でっちあげられるんだ。誰も必要としていないものが、必要なものとしての幻想を与えられるんだ。簡単だよ。情報をどんどん作っていきゃあいいんだ。住むんなら港区です、車ならＢＭＷです、時計はロレックスです、ってね。何度も何度も反復して情報を与えるんだ。そうすりゃみんな頭から信じこんじまう。住むんなら港区、車はＢＭＷ、時計はロレックスってね。ある種の人間はそういうものを手に入れることで差異化が達成されると思ってるんだ。みんなとは違うと思うのさ。そうすることによって結局みんなと同じになってることに気がつかないんだ。想像力というものが不足しているんだ。そんなものただの人為的な情報だ。ただの幻想だ。僕はそういうのにとことんうんざりしている。自分自身の生活にうんざりしている。もっとまともな暮らしがしたいと思う。でも駄目だ。僕は事務所に全部押さえられちまっている。着せかえ人形と同じだ。借金を抱えているから、文句ひとつ言えない。僕がこうしたいと言っても、僕の言うことなんか誰も聞いてくれない。港区の瀟洒なマンションに住んで、マセラティに乗って、パテク・フィリップスの時計をつけて、高級コールガールと寝てる。ある種の人間はそういうのをうらやましいと思うだろう。でもね、それは僕の求めているものではないんだ。僕が求めているのは、そういう生活をしている限り手に入れることのできないものだ」

「たとえば愛」と僕は言った。

「そう、たとえば愛。そして平穏。健全な家庭。単純な人生」と五反田君は言った。そして顔の前で手を合わせた。「ねえ、わかるかい？　僕には手に入れようと思えばそういうものを手に入れることはできたんだ。自慢してるわけじゃないけど」

「知ってるよ。君は全然自慢してるわけじゃない。その通りだ」と僕は言った。

「僕にはやろうと思えば何だってできた。僕はあらゆる可能性を持っていた。僕には機会もあったし、能力もあった。でも結局僕はただの人形になった。夜中にその辺をうろうろしてる女の大抵とは簡単に寝ることができる。嘘じゃないぜ、本当にやれるんだ。でも本当に欲しい女とは一緒になれない」

五反田君はかなり酔っているようだった。顔つきはまったく変わらなかったけれど、いつもよりはいささか饒舌になっていた。でも彼が酔っぱらいたい気持ちはわからないではなかった。時計は十二時を回っていたので、僕はまだ時間は大丈夫なのかと彼に訊いてみた。

「うん、明日は昼まで仕事がないんだ。だからゆっくりできる。君の方は迷惑じゃないか？」

「僕は大丈夫だ。相変わらず何もすることがない」と僕は言った。

「つきあわせちゃって悪いとは思うんだけど、君しか話し相手がいないんだ。本当だよ。誰にも話せない。僕がマセラティよりはスバルに乗りたいなんて言ったらみんな僕の気が違ったんだと思うだろうね。そして下手したら精神科医に連れていかれる。流行ってるんだ。精神科医に行くのが。下らん。芸能人専門の精神科医なんて反吐掃除専門家みたいなもんだ」彼はしばらく目を閉じていた。「しかし僕はここにきてまたずっと愚痴を言ってるような気がするな」

「下らん、って二十回くらい言った」と僕は言った。

「そうだっけ？」

「言いたりなかったらもっと言っていいよ」

「もう充分だよ。ありがとう。愚痴ばかり聞かせて申し訳ないと思う。でも僕のまわりを取り囲んでいるものは、みんなみんなみんなひからびた下らん糞みたいなものなんだ。純粋に吐き気がする。純粋で絶望的な反吐が喉まででかかってる」

「出せばいい」

「下らない奴らがまわりにうようよいる」と五反田君は吐き捨てるように言った。「都会の欲望をすすって生きている吸血鬼のような連中だよ。もちろんみんながみんなひどいわけじゃない。まともな人間も少しはいる。でもひどい奴が多すぎる。口先だけ達者な要領の良い奴ら。地位を利用して金やら女やらを手に入れる奴ら。そういう有象無象が世界の欲望のうわずみをすすってむくむく太ってるんだ。醜く太って、そして威張ってる。僕の生きているのはそういう世界なんだ。君は知らないだろうけど、本当にひどいやつがいっぱいいるんだよ。時々そういう奴らと酒を飲まなきゃならないこともある。その間僕はずっと自分に言い聞かせてなきゃいけないんだ。おい、頭に来ても絞め殺すなよ、こんなやつら、殺すだけエネルギーの消耗なんだ、ってね」

「金属バットで叩き殺すのはどうだろう？　絞め殺すのは時間がかかる」

「正論だ」と五反田君は言った。「でもできることなら絞め殺したい。一瞬で殺すのはもったいない」

「正論だ」と僕は言って肯いた。「僕らは正論を言いあってる」

「本当に――」と言いかけて彼は口をつぐんだ。そして溜め息をつき、また顔の前で手を合わせた。「ずいぶんすっきりした」

「よかった」と僕は言った。「『王様の耳はロバの耳』みたいだ。穴を掘って怒鳴るんだ。口に出しちゃえばすっとする」

「まったく」と彼は言った。
「お茶漬でも食べない？」
「有り難い」
僕は湯を沸かし、海苔と梅干しとわさびを使って簡単に茶漬を作った。そして二人で黙ってそれを食べた。
「僕の目から見ると、君は生活を楽しんでいるように見えるんだけれど？」と五反田君は言った。
僕は壁にもたれてしばらく雨の音を聞いていた。「ある部分においてはそうだね。それなりに楽しんでいるかもしれない。でも決して幸せなわけではない。君にある種のものが欠けているのと同じように僕にもある種のものが欠けている。だからまともな生活が送れない。ただ単にダンスのステップを踏みつづけているだけだ。体がステップを覚えているから、踊りつづけることはできる。感心してくれる人間も中にはいる。しかし社会的には僕は完全なゼロだ。三十四になって結婚もしてないし、まともな定職もない。その日暮らしだ。公団住宅のローンさえ組めない。今のところ寝る相手すらいない。あと三十年後にはどうなっていると思う？」
「なんとかなるものさ」
「あるいはね」と僕は言った。「なるかもしれない。ならないかもしれない。誰にもわからない。みんな同じだよ」
「でも僕は現在のところある部分に、、、、、おいてさえ楽しんでいないぜ」
「そうかもしれないけど、君はとてもよくやっている」
五反田君は首を振った。「よくやっている人間がこうして際限なく愚痴を言うものかな？　そして君に迷惑をかけるものかな？」

CamScannerでスキャン

「そういう時もある」と僕は言った。「我々は人間について話をしてるんだよ。等比数列の話をしてるわけじゃない」

一時半に五反田君はそろそろ帰ると言った。

「ここに泊まっていってもいいぜ。客用の布団くらいはあるし、夜が明けたら美味い朝飯だって作ってあげるよ」と僕は言った。

「いや、そう言ってくれるのは有り難いけど、酔いも覚めたし、家に帰る」と五反田君は頭を何度か振って言った。確かに酔いは覚めているようだった。「ところで君にひとつ頼みがあるんだ。変な頼みだけど」

「いいよ。言ってみてくれ」

「悪いんだけど、もしよかったら君のスバルをしばらくの間貸してくれないかな？　かわりにマセラティを置いていくから。実を言うと、女房とこっそり会うのにマセラティだといささか目立ちすぎるんだ。どこに行っても、あの車があると僕だってすぐにわかってしまう」

「スバルはいくらでも貸してあげるよ」と僕は言った。「好きに使ってていい。僕は今のところ仕事をしてないからそんなに車を使うわけじゃないんだ。だから君に貸すのはぜんぜん構わない。でも正直言って、あのファッショナブルなスーパー・カーを替わりに置いていかれるのはとても困る。だって僕は月ぎめ駐車場を使ってるから、夜の間にどんないたずらをされるかもしれない。それに運転中に何かあって車に疵がついても僕にはそんなのとても弁償できない。責任が持てない」

「かまわないよ。そういうのは全部事務所が面倒みるんだ。しっかりと保険がきいてる。君が疵つけてもちゃんと保険はおりる。心配しなくてもいい。気が向いたら海に放り込んでくれてもいい。本当にいいんだぜ。そうしたら次はフェラーリを買う。フェラーリを売りたがってるエロ本書きがいるんだ」

「フェラーリ」と僕は言った。

「言いたいことはわかる」と彼は笑って言った。「でもあきらめてくれ。君には想像もつかないだろうけど、僕らの世界では趣味がいいと生き残っていけないんだ。そこでは『趣味が良い人』というのは『ひねくれた貧乏人』というのと同義なんだ。同情されるだけだ。誰もほめてくれない」

結局五反田君はスバルに乗って帰っていった。僕は彼のマセラティを駐車場に入れた。敏感でアグレッシブな車だった。反応が鋭く、パワフルだった。アクセルをちょっと踏むと月まで飛んでいってしまいそうだった。

「そんなに頑張らなくていいんだよ。気楽にやろう」と僕はダッシュボードをとんとんと叩き、明るい声でマセラティに言いきかせた。でもマセラティは僕の言葉なんかろくに聞いてもいないみたいだった。車だって相手の顔を見るのだ。やれやれ、と僕は思った。マセラティだって。

33

翌日の朝、僕は駐車場にマセラティの様子を見にいってみた。夜の間に悪戯をされたり、盗まれたりしてないか心配だったからだ。でも車は無事だった。

いつもスバルがある場所にマセラティが収まっているというのは、何かしら変なものだった。僕は車の中に入ってシートに身を沈めてみたが、やはりどうも落ち着かなかった。目が覚めたら隣に見たことのない女が寝ているというのと同じだった。素敵な女なのだけれど、それとは関係なく落ち着かない。何か緊張する。僕は何によらず物事に馴れるのに時間がかかる性格なのだ。

結局その日は僕は一度も車に乗らなかった。昼のあいだ街を散歩し、映画を見て、本を何冊か買った。夕方に五反田君から電話がかかってきた。彼は昨日の礼を言った。礼を言われるほどのことではない、と僕は言った。

「あの、ホノルルのことだけど」と彼は言った。「組織に問い合わせてみた。それでね、うん、確かにここからホノルルの女を予約することはできる。便利な世の中だ。まるでみどりの窓口だね。スモーキングですか、ノン・スモーキングですか？　なんてね」

「まったく」

「それで、ジューンという子のことも聞いてみた。ジューンという子を前におたくで紹介してもらった知

CamScannerでスキャン

り合いがいて、とても良かったから試してみろって言うんだけど、その子を予約することはできるだろうかって。ジューンっていう名前の東南アジア系の女の子。調べるのにちょっと時間がかかった。本当はいちいちそんなことやってくれないんだけど、僕ならやってくれる。自慢じゃないけれど、お得意だから。無理がきくんだ。ちゃんと調べてくれた。ジューンていう子はたしかにいた。フィリピーノだ。でも彼女は三ヵ月前にいなくなってる。もう働いてない」

「いなくなった?」と僕は聞き返した。「やめたっていうこと?」

「おい、よしてくれよ。いくらなんでもそこまでは調べてはくれない。コールガールなんてしょっちゅう出入りするんだ。いちいち追跡調査もしてられないでしょうが。彼女は辞めた、もうここにはいない、それだけだよ。残念ながら」

「三ヵ月前?」

「そう三ヵ月前」

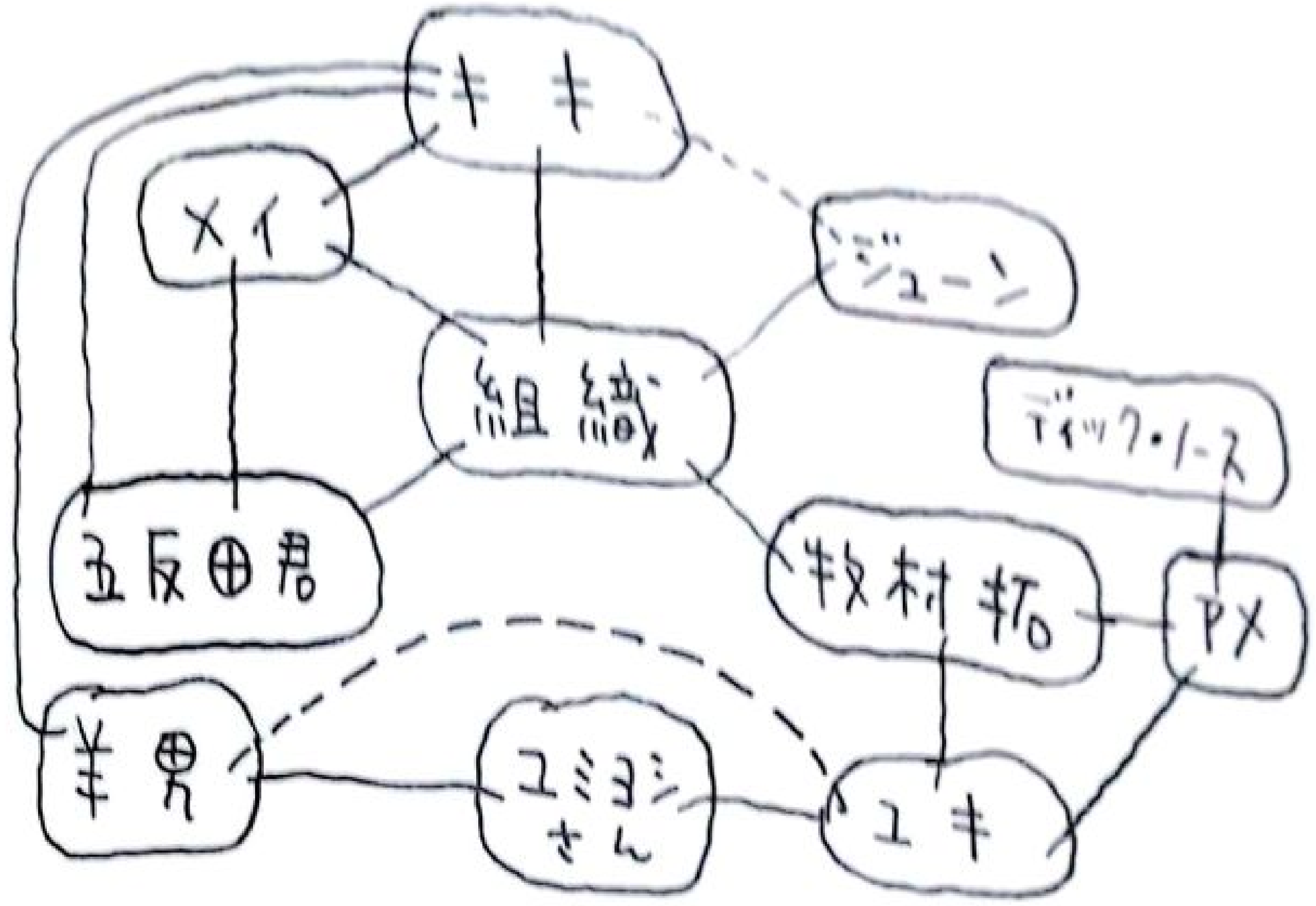
いくら考えてみても結論は出てきそうになかった。僕は礼を言って電話を切った。

そしてまた街を散歩した。

ジューンは三ヵ月前にいなくなっている。でもたしかに二週間前に彼女は僕と寝たのだ。そして電話番号まで書き残していった。誰も出ない電話の番号を。不思議だ、と僕は思った。これでコールガールが三人になった。キキとメイとジューン。みんな消えた。一人は殺され、二人は行方がわからない。みんなまるで壁に吸い込まれるみたいにすっとどこかに消えていく。そしてみんなそれぞれに僕と絡んでいる。彼女たちと僕の間には五反田君と牧村拓が存在している。

僕は喫茶店に入って手帳にボールペンで僕の回りの人間関係を図にして描いてみた。かなり複雑な関係だった。第一次大戦開戦直前の列強関係図みたいだ。

CamScannerでスキャン



僕は半ば感心し、半ばうんざりしつつしばらくその図を眺めていたが、どれだけ眺めても何のアイデアも浮かんではこなかった。三人の消えた娼婦と一人の俳優と三人の芸術家と一人の美少女と神経症的なホテルのフロント係の女の子。どう好意的に見てもまともな交遊関係とは言えない。アガサ・クリスティの小説みたいだった。「わかった、執事が犯人だ」と僕は言ってみたが、誰も笑わなかった。面白くない冗談なのだ。

正直なところこれ以上手も足も出なかった。どこまで糸をたぐっていっても、余計にもつれるだけなのだ。全然すっきりとしない。最初はキキとメイと五反田君のラインだけだった。それなのに今では牧村拓とジューンのラインまで加わっている。そしてキキとジューンはどこかで繋がっている。ジューンの残していった電話番号とキキの残していった電話番号は同一のものなのだ。コネクションがぐるりと回っている。

「これはむずかしいぜ、ワトソン君」と僕はテーブルの上の灰皿に向かって言った。もちろん灰皿は何も答えなかった。灰皿は頭がいいから、こういうことには一切関わり合いにならないようにしているのだ。灰皿もコーヒ

ー・カップもシュガー・ポットも伝票も、みんな頭がいい。誰も返事をしない。聞こえないふりをしている。馬鹿なのは僕一人だけだ。いつも変なことと関わり合っている。そしていつもくたびれている。気持ちの良い春の宵に、デートする相手もいない。

僕はアパートに戻ってユミヨシさんに電話をかけてみた。でもユミヨシさんはいなかった。今日は早番であがりました、ということだった。スイミング・クラブに行く夜なのかもしれない。そして僕はいつものようにスイミング・クラブに嫉妬した。五反田君みたいな感じの良いハンサムな教師がユミヨシさんの手を取って泳ぎ方を優しく教えている光景に嫉妬した。僕はユミヨシさん一人の為に、札幌からカイロに到る世界中のスイミング・クラブを憎悪した。糞、と僕は思った。

「何もかも下らん。まるっきりの糞だ。ひからびた糞だ。純粋に吐き気がする」僕は五反田君の真似をして声に出してそう言ってみた。全然期待はしていなかったのだが、実際に声に出して言ってみると、不思議なことにそれで少し気分が良くなった。五反田君は宗教家になればいいのに、と僕は思った。朝と夕に彼がみんなを唱導するのだ。「何もかも下らん。まるっきりのひからびた糞です。純粋に吐き気がします」と。受けるかもしれない。

でもそれとは別にユミヨシさんにひどく会いたかった。僕は彼女のいささか神経症的な喋り方やぴりぴりとした身のこなしが懐かしかった。指先で眼鏡のブリッジを押さえる仕種や、するりと部屋に忍び込んでくるときの真剣な表情や、ブレザー・コートを脱いで僕の隣に座るときの格好が好きだった。そういう彼女の姿を思い浮かべると、僕は幾らかあたたかい気持ちになることができた。僕は彼女の中にある何かしら真っすぐなものにとても強く引かれていた。我々は二人でうまくやっていくことができるだろうか？

彼女はホテルのフロントで働くことに喜びを見出していたし、週に何日か夜にスイミング・クラブに通っていた。僕は雪かき仕事をし、スバルと古いレコードを好み、きちんとした食事をすることにごくごく

ささやかな喜びのようなものを見出していた。そういう二人。うまく行くかもしれないし、行かないかもしれない。データが不足しすぎていて、予測というものがまったくつかない。

彼女は僕と一緒になると、やはりいつか傷つくことになるだろうか？　別れた妻が予言したように、僕は関わり合いになる女性のすべてを結局は傷つけていくことになるのだろうか？　僕は自分のことしか考えない人間だから、他人を好きになる資格なんてないのだろうか？

でもユミヨシさんのことを考えているうちに、僕は今からすぐ飛行機に乗って札幌に行きたくなってきた。そして彼女を抱き締め、データは不足しているかもしれないが、僕はとにかく君が好きだと言いたかった。でも、駄目だ。その前に結び目をきちんと整理しなくてはならない。中途半端なままで物事を放り出すことはできない。そんなことをしたら、その中途半端さを次の段階にまでずるずるとひきずっていくことになる。どこまで進んでもすべての事物が中途半端さの薄暗い影に染まることになる。そしてそれは僕の理想とする世界の在り方ではない。

問題はキキだ。そう、キキがすべての中心にいる。彼女は様々な形で僕とコンタクトをとろうとしている。札幌の映画館からホノルルのダウンタウンに到るまで、彼女は影のように僕の前をさっと横切っていく。そして彼女は僕に何かのメッセージを伝えようとしている。それは明らかだ。でもそのメッセージは余りにも暗示的で、僕にはそれを理解することができない。キキはいったい僕に何を求めているのだろう？

僕はいったいどうすればいいのだろう？

でもどうすればいいのかは僕にはわかっていた。

とにかく待っていればいいのだ。

何かがやってくるのを待てばいいのだ。いつもそうだった。手詰まりになったときには、慌てて動く必

要はない。じっと待っていれば、何かが起こる。何かがやってくる。じっと目をこらして、薄明の中で何かが動き始めるのを待っていればいいのだ。僕は経験からそれを学んだ。それはいつか必ず動くのだ。もしそれが必要なものであるなら、それは必ず動く。

よろしい、ゆっくり待とう。

*

僕は何日かおきに五反田君と会って酒を飲んだり、食事をしたりした。しばらくすると彼と会うことは僕の習慣の一部になった。会う度に彼はスバルを借りっぱなしにしていることを詫びた。問題ない、気にしないでいい、と僕は言った。

「まだマセラティは海に放り込んでいない?」と彼は訊いた。

「残念ながら海に行く暇がなくてね」と僕は言った。

僕と五反田君はバーのカウンターに並んでウォッカ・トニックを飲んでいた。僕より彼の方が少しだけ飲むペースが早かった。

「でも、本当に放り込んだら気持ち良いだろうな」と彼はグラスの縁に唇を軽くつけたまま言った。

「確かに胸がすっとするだろうね」と僕は言った。「でもマセラティがなくなってもすぐにフェラーリが来る」

「それもついでに放り込もう」と五反田君は言った。

「フェラーリの次は何だろう?」

「何だろうな。でもそんなにいっぱい放り込んだら、きっと保険会社が文句を言うだろうね」

「保険会社のことは気にしなくていい。もっと気を大きく持とう。どうせこれはみんな空想なんだ。二人

で酒を飲んで空想しているだけだよ。君がよく出る低予算映画とは違うんだよ。空想には予算というものがないんだ。中産階級的な心配はこの際忘れた方がいい。細かいことは気にせずにどんどん派手にやろう。ランボルギーニだって、ポルシェだって、ジャガーだって、何だっていいんだよ。片っ端から放り込めばいいんだ。遠慮しなくていいよ。海は深くて広いんだ。何千台だって受け入れてくれる。想像力を駆使するんだよ、君」

彼は笑った。「君と話してると胸がすっとする」

「僕もすっとする。他人の車だし、他人の想像力だからね」と僕は言った。「ところで最近奥さんとは上手くいってる？」

彼はウォッカ・トニックをすすり、そして肯いた。外は雨が降っていて、店はすいていた。僕ら二人の他には客がいなかった。バーテンダーはやることがないので酒瓶を磨いていた。

「上手くいってるよ」と彼は静かに言った。そして唇を曲げて微笑んだ。「僕らは愛しあっている。僕らの愛は離婚によって確認され、深められた。どう、ロマンティックじゃない？」

「ロマンティックだ。失神しそうだ」

彼はくすくす笑った。

「でも本当だよ」と彼は真顔で言った。

「知ってるよ」と僕は言った。

＊

僕と五反田君は会うとだいたいそんな風に話をした。僕らは軽口を叩きながらかなり真剣に話しあった。それは絶え間なく冗談を必要とするくらい真剣な話だったのだ。その多くはあまり出来の良い冗談で

CamScannerでスキャン

はなかったけれど、それはとくに問題にはならなかった。とにかく冗談であればよかったのだ。それは冗談のための冗談にすぎなかった。我々は冗談という共通認識を必要としていただけだった。僕らがどれくらい真剣かというのは、我々自身にしかわからなかった。我々はどちらも三十四歳で、それは十三歳とはまた違った意味でとても難しい年齢だった。二人とも年をとるということの本当の意味を少しずつ認識しはじめていた。そして我々はそれに対してなにがしかのものを準備しはじめなくてはならない時期にさしかかっていた。来るべき冬のあいだに体を温めてくれそうなものを確保しておくのだ。彼はそれを簡潔な言葉で表現した。

「愛」と彼は言った。「僕に必要なものはそれなんだ」

「感動的だ」と僕は言った。でも僕にだってやはりそれは必要だったのだ。

五反田君はしばらく黙っていた。彼は黙って愛について考えていた。僕もそれについて考えていた。僕はちょっとユミヨシさんのことを考えた。そして彼女があの雪の降る夜にブラディー・マリーを五杯か六杯飲んだことをふと思いだした。彼女はブラディー・マリーが好きなのだ。

「女なんて嫌というほどいっぱい寝た。もう要らない。何人寝たって同じだよ。やることは同じだもの」と五反田君は少しあとで言った。「愛が欲しい。ねえ、大変なことを君に打ち明ける。僕が寝たいのは女房だけだ」

僕はぱちっと指を鳴らした。「すごい。まるで神の言葉みたいだね。光り輝いている。記者会見をやるべきだね。そして『私が寝たい相手は女房だけです』って宣言するんだ。みんな感動する。総理大臣に表彰されるかもしれない」

「いや、ノーベル平和賞だってもらえるんじゃないかな。なにしろ『私が寝たい相手は女房だけです』って世界にむかって宣言するんだぞ。普通の人間にちょっと出来ることじゃない」

「しかしノーベル賞をもらうとフロック・コートが必要になるな」
「なんだって買えばいい。全部経費で落ちる」
「素晴らしい。まさに神の言葉だ」
「受賞の挨拶をスウェーデンの王様の前でやる」と五反田君は言った。「皆様、私が今寝たい相手は女房だけです、ってね。感動の嵐だ。雪雲が割れて太陽が姿を見せる」
「氷が溶け、バイキングが平伏し、人魚姫の歌が聞こえる」
「感動的だ」
僕らはまた黙りこんで、しばらくそれぞれに愛について考えていた。愛については考えるべきことがいっぱいあった。ユミヨシさんを家に招待するときはウォッカとトマト・ジュースとリー&ペリン・ソースとレモンを用意しておかなくちゃな、と僕は思った。
「でも、あるいは君は賞なんて何ももらえないかもしれない」と僕は言った。「変質者だと思われるだけかもしれない」
五反田君はそれについてしばらく考えていた。そしてゆっくりと何度か肯いた。
「そうだな、それはあり得るね。僕の言ってることは性的反革命だ。激昂した群衆に蹴り殺されるかもしれない」と彼は言った。「そうなると僕は性的殉教者になる」
「性的殉教者になった最初の俳優になれる」
「でも死んだら二度と女房と寝られない」
「正論だ」と僕は言った。
そして僕らはまた黙ってしばらく酒を飲んだ。
そんな風に僕らは真剣な話をした。隣で我々の話を聞いていた人間がいたとしたら、全部冗談だと思っ

ただろう。でも僕らはこのうえなく真剣だったのだ。
彼は暇があれば僕のところに電話をかけてきた。そして何処かの店に行くか、僕のアパートに来て食事をするか、あるいは彼のアパートに行くかした。そのようにして日々は流れた。僕は腹を決めて一切仕事をしなかった。仕事なんてもうどうでもよくなってしまった。僕がいなくたって、世の中はちゃんと進んでいくのだ。そして僕はじっと何かが起こるのを待った。
僕は牧村拓のところに余った金と旅行中に使った分の領収書を郵送した。すぐにフライデーから電話があった。もっと金をとってくれ、と彼は言った。
「先生もこれでは気が済まんとおっしゃってられますし、僕の方も困ってしまいますので」とフライデーは言った。「ひとつここは僕に任せてくれませんか？　決してあなたにそのことで負担はおかけしませんから」
押し問答するのも面倒になったので、わかった、今回のことはとにかくそちらの気の済むようにしてくれ、と僕は言った。牧村拓はすぐに三十万円分の銀行小切手を送ってきた。中に領収書が入っていて、そこには「取材調査費」と書いてあった。僕は領収書にサインして印鑑を押し、郵送した。何だって経費で落ちるのだ。感動的な世界だ。
僕はその三十万円の小切手を額に入れて机の上に置いておいた。

＊

連休がやってきて、去っていった。
僕はユミヨシさんと何度か電話で話をした。
どれくらいの時間話をするかは、彼女が決定した。長く話す時もあったし、「忙しいから」と言って簡単

に切ってしまうこともあった。長い間じっと黙っていることもあれば、突然がちゃんと切ってしまうこともあった。でもとにかく電話をとおして、僕と彼女は話をすることができた。我々は少しずつデータを交換した。ある日彼女は自宅の電話番号を教えてくれた。これは確実な進歩だった。

彼女は週に二回、スイミング・スクールに通っていた。彼女がスイミング・スクールの話を持ち出す度に、僕の心は無垢な高校生のように震えたり傷ついたり暗くなったりした。僕は何度も彼女の水泳教師について質問してみようとした。どんな教師なのか、幾つくらいなのか、ハンサムなのか、彼女に親切すぎないか、等々。でもそれがうまく訊けなかった。彼女に僕の嫉妬を見破られそうで、怖かったのだ。「ねえ、あなたスイミング・スクールに嫉妬しているんでしょう？　ああ、嫌だ、そういう人って大嫌い。スイミング・スクールに嫉妬する人なんて男として最低よ。私の言ってることわかる？　本当に最低なのよ。あなたとなんか二度と会いたくないわ」そう言われるのが怖かったのだ。

だから僕はスイミング・スクールに関してはじっと口をつぐんで黙っていた。黙っていると僕の中でスイミング・スクール妄想がどんどん膨らんでいった。レッスンが終わったあとで、教師が彼女だけを残して特別レッスンをするのだ。教師はもちろん五反田君だった。彼はユミヨシさんの胸と腹に手をあててクロールの練習をさせた。彼の指は彼女の乳房を撫で、彼女の脚の付け根をさすった。でも気にしなくていい、と彼は言った。

「気にしなくていいよ」と彼は言った。「僕が寝たい相手は女房だけなんだ」

そして彼はユミヨシさんの手をとって、自分の勃起したペニスを握らせた。水中の勃起したペニス。まるで珊瑚みたいだ。ユミヨシさんはとてもうっとりしている。

「大丈夫」と五反田君は言った。「僕が寝たいのは女房だけなんだから」

スイミング・プール妄想。

馬鹿気てる。でも僕はそれを頭から追い払うことができなかった。僕はユミヨシさんに電話をかけるたびにしばらくその妄想に悩まされることになった。妄想はだんだん複雑化し、さまざまな人物が登場するようになった。キキやメイやユキが出てきた。ユミヨシさんの体を這う五反田君の指を見ているうちに、いつのまにかユミヨシさんはキキに変わったりした。

「ねえ、私はとても平凡でありきたりの人間なのよ」とある日ユミヨシさんは言った。その夜彼女はひどく元気がなかった。「人と変わってるのは名前だけ。あとは何もないの。ただこうやってホテルのカウンターで毎日毎日働いて人生を無駄に磨り減らしていくだけ。もう私になんか電話しないで。私、長距離電話料金に値するような人間じゃないのよ」

「でも君はホテルで働くのが好きなんだろう?」

「ええ、それは好きよ。働くこと自体は苦痛でもなんでもない。でもね、時々ホテルに呑み込まれちゃうような気がすることがあるの。時々。そういう時、私っていったい何だろうと思うの。私なんてないも同じだわ。ホテルはちゃんとそこにあるの。でも私はそこにないの。私には私が見えないの。私は見失われているの」

「君は少しホテルのことを真剣に考えすぎるんじゃないかな」と僕は言った。「ホテルはホテルであって、君は君だよ。僕はよく君のことを考えるし、時々ホテルのことを考える。でも一緒には考えない。君は君で、ホテルはホテルだ」

「知ってるわよ、それくらい。でも時々混乱しちゃうのよ。境界線が見えなくなっちゃうの。私という存在やら感覚やら私生活やらがホテルという宇宙の中にひきずりこまれて消えちゃうの」

「誰だってそうなんだよ。みんな何かにひきずりこまれて、境界線が見えなくなっちゃうんだ。君だけじ

ゃない。僕だって同じだよ」と僕は言った。

「同じじゃないわよ、全然」とユミヨシさんは言った。

「そうだ。全然同じじゃない」と僕は言った。「でも君の気持ちはよくわかるし、君のことが好きだ。君の中にある何かが僕を引きつける」

ユミヨシさんはしばらく黙りこんでいた。電話的沈黙の中に彼女はいた。

「ねえ、私、あの暗闇がとても怖いの」と彼女は言った。「もう一度あれがやってきそうな気がするの」

電話口でユミヨシさんがしくしく泣きだす声が聞こえた。最初のうち僕はそれが何だかよくわからなかった。でもそれはどう考えてもすすり泣きだった。

「ねえ、ユミヨシさん」と僕は言った。「どうしたの？　大丈夫？」

「大丈夫に決まってるでしょう？　ただ泣いてるだけよ。泣いちゃいけないの？」

「いや、別にいけなくないよ。心配しただけだよ」

「ねえ、少し黙っていて」

僕は言われたとおり黙っていた。僕がじっと黙っていると、ユミヨシさんはひとしきり泣いてから電話を切った。

五月七日にユキから電話がかかってきた。

「帰ってきたわよ」と彼女は言った。「今からどこかに遊びにいかない？」

僕はマセラティに乗って赤坂のマンションまでユキを迎えにいった。ユキはマセラティを見ると顔をしかめた。

「この車どうしたの？」

CamScannerでスキャン

盗んだわけじゃない。泉に車を落としたらイザベル・アジャーニみたいな泉の精が出てきて『今落としたのは金のマセラティですか、銀のBMWですか』って訊くから、いいえ僕の車は銅の中古のスバルですって答えたんだ。すると——」

「下らない冗談はやめてよ」と彼女は真剣な顔で言った。「真面目に訊いてるのよ。本当にこれいったいどうしたのよ？」

「友達と一時的に交換したんだ」と僕は言った。「僕のスバルにどうしても乗りたいっていうから、取り替えた。その友達にもいろいろと理由があるんだ」

「友達？」

「そう。信じてくれないかもしれないけど、僕にも一人くらいは友達はいる」

彼女は車の助手席に乗って中をぐるっと見回した。そしてまた顔をしかめた。「変な車」と彼女は吐き捨てるように言った。「馬鹿みたい」

「そういえば持ち主も同じようなことを言ってたね」と僕は言った。「表現は幾分違ったけど」

彼女は黙っていた。

僕はまた湘南方面に車を進めた。ユキはどこまでいってもずっと黙っていた。僕はスティーリー・ダンのテープを小さな音でかけながら、注意深くマセラティを運転した。とても良い天気だった。僕はアロハ・シャツを着て、サングラスをかけていた。彼女は薄手のコットン・パンツにピンク色のラルフ・ローレンのポロ・シャツを着ていた。日焼けした肌にその色がとてもよく合っていた。まるでハワイにいるみたいな気分だった。僕の前には家畜運搬トラックがいて、豚たちが板張りの柵の隙間から僕らの乗ったマセラティを赤い目でじっと見ていた。きっと豚にはスバルとマセラティの違いなんてわからないんだろうな、と僕は思った。豚は差異化というのがどういうことかなんて知らないのだ。キリンも知らないし、ウ

ナギも知らない。
「ハワイはどうだった？」と僕は訊いてみた。
彼女は肩をすぼめた。
「お母さんとは上手くいった？」
彼女は肩をすぼめた。
「サーフィンは上手くなった？」
彼女は肩をすぼめた。
「すごく元気そうに見えるよ。日焼けがたまらなく魅力的だ。まるでカフェ・オ・レの精みたいに見える。背中にかっこいい羽をつけて、スプーンを肩にかつぐと似合いそうだよ。カフェ・オ・レの精。君がカフェ・オ・レの味方になったら、モカとブラジルとコロンビアとキリマンジャロが束になってかかってきても絶対かなわない。世界中の人間がこぞってカフェ・オ・レを飲む。世界中がカフェ・オ・レの精に魅了される。君の日焼けはそれくらい魅力的だ」
精一杯素直に賞賛したつもりだったが、まるで効果はなかった。彼女は肩をすぼめただけだった。あるいは逆効果だったのだろうか？　僕の素直さはどこかで歪んでねじくれているのだろうか？
「生理か何かなの？」
彼女は肩をすぼめた。
僕も肩をすぼめた。
「帰りたい」とユキは言った。「Uターンして東京に帰ろう」
「ここは東名高速だよ。たとえニキ・ラウダといえどもここでUターンはできない」
「どこかで下りて」

CamScannerでスキャン

僕は彼女の顔を見た。たしかに彼女はぐったりとしているように見えた。目に生気がなく、視線が澱んでいた。たぶん青白くなっているのだろうが、日焼けのせいで顔色の変化までは読みとれなかった。

「何処かで休んだ方がいいんじゃないかな」と僕は訊いてみた。

「いいのよ。休みたくなんかない。とにかく早く東京に戻りたい」とユキは言った。

僕は横浜の出口で下りて、そのまま東京まで戻ってきた。しばらく外に座っていたいとユキが言うので、彼女のマンションの近くの駐車場にマセラティを停め、乃木神社のベンチに二人でならんで座った。

「ごめんなさい」とユキは珍しく素直に謝った。「でもすごく気分が悪かったの。とても我慢できないくらい。あまりそういうことを言いたくなかったんでずっと我慢してたんだけど」

「我慢なんかすることなかったんだ。気にすることないさ。女の子にはそういうことはよくあるんだ。僕は馴れてる」

「そういうんじゃないったら！」とユキは怒鳴った。「そういうんじゃないのよ。それとはまた違うのよ。私が参っちゃったのはあの車のせい。あの車に乗っていたせいよ」

「でも、あのマセラティのいったいどこがいけないんだろう?」と僕は訊いた。「決して悪い車じゃないよ。性能もいいし、乗り心地もいい。たしかに自分で金を出して買うにはいささか値段は高すぎると思うけどね」

「マセラティ」と彼女は自分に言い聞かせるように言った。「でも車種が問題じゃないのよ。車種を問題にしてるんじゃないの。問題はあの車なのよ。あの車には何か嫌な雰囲気があるの。それが何というか——私を圧迫するのよ。気持ちが悪くなるの。胸が締め付けられて、胃の中に変なものを押し込まれたような気分がするの。まるで綿屑を押しこまれたような感じ。あなたはあの車に乗っていてそういう風に感じたことはない？」

「ないと思うね」と僕は言った。「僕も確かにあの車には何かしら馴染めないものを感じる。でもそれは僕がたぶんスバルに馴れすぎたせいだと思うんだ。だから急に違う車に乗せられてもうまく順応できない。感情的なものだ。でもそれは君の言う圧迫感とはまた違うんだろうね？」

彼女は首を振った。「私の言ってるのは、そういうんじゃないの。とても特殊な感じなのよ」

「例のやつ？　いつも君が感じるっていう——」僕は霊感と言おうとしてやめた。違うな。何と言えばいいんだろう？　精神的感応力？　いずれにせよ、上手く口にはだせない。それはまるで卑猥なことばみたいに感じられる。

「そう、例のやつ。感じるの」とユキは静かに言った。

「どんな風に感じるんだろう？　あの車について」と僕は訊いた。

ユキは肩をすぼめた。「それがきちんと正確に説明できれば簡単なんだけどね。でも駄目。具体的なイメージが浮かんでくるというわけじゃないから。私はぼんやりとしてつかみどころのない不透明な空気の固まりのようなものを感じるだけなの。重くて、とても嫌な感じがするもの。それが私を圧迫するの。何かとてもいけないこと」ユキは膝の上に両手を載せて、言葉を探した。「具体的なことはわからない。でもいけないこと。間違ったこと。歪んでいること。あの中にいるとすごく息苦しくなるの。とても空気が重い。まるで鉛の箱に押し込められて海の底に沈んでいくような気がするの。最初は思い過ごしだと思ったから我慢してたの。ただ私が旅行から帰ったばかりで疲れているせいなんだろうって。でもそうじゃないのよ。だんだんひどくなってくるの。あの車には二度と乗りたくない。あなたのスバルを返してもらって」

「呪われたマセラティ」と僕は言った。

「これ、冗談で言ってるんじゃないわよ。あなたもあの車にはあまり乗らないようにした方がいい」と彼

女は真剣な顔つきで言った。

「不吉なマセラティ」と僕は言った。そして微笑んだ。「わかった。君が冗談で言ってるんじゃないことはよくわかってる。あの車にはなるべく乗らないようにするよ。それともいっそのこと海に沈めちゃった方がいいのかな?」

「できたら」とユキは真面目な顔で言った。

ユキがショックから回復するまでの一時間ばかり、僕らは神社のベンチに座っていた。ユキは頬杖をついてじっと目を閉じていた。僕は目の前を行ったり来たりする人々の姿を見るともなく眺めていた。昼下がりの神社にやってくる人々は老人か、子供連れの母親か、首からカメラを下げた外人観光客くらいのものだった。どちらも大した数ではない。時々外まわりの営業マンらしい会社員がやってきてベンチに腰を下ろした。彼らは黒いスーツを着て、プラスティックの鞄を下げていた。そして焦点のあわないぼうっとした目つきで十分か十五分体を休めてからいずこへともなく去っていった。言うまでもなく、この時刻にはまともな人間はみんなちゃんと働いているのだ。まともな子供はみんなちゃんと学校に行っているのだ。

「お母さんはどうしたの?」と僕は尋ねた。「君と一緒に帰ってきたの?」

「うん」とユキは言った。「今は箱根の家にいるわ。あの片腕の人と一緒に。カトマンズとハワイの写真を整理しているの」

「君は箱根には帰らないの?」

「気がむいたら、そのうちにね。でもしばらくはここにいる。箱根に帰ってもとくにやることないから」

「純粋な好奇心から君にひとつ質問がある」と僕は言った。「君は箱根に帰ってもとくにやることがない

CamScannerでスキャン

から一人で東京にいると言う。しかし、ここにいて君はいったい何をやるんだろう？」

ユキは肩をすぼめた。「あなたと遊んでる」

しばらく、沈黙があった。宙吊りになったような、沈黙だった。

「素晴らしい」と僕は言った。「神の言葉みたいだ。単純で、しかも啓示に満ちている。ずっと二人で遊んで暮らす。まるで楽園にいるみたいだ。僕と君とで色とりどりのバラを摘んだり、黄金の池にボートを浮かべて水遊びをしたり、柔らかな栗色の毛の子犬を洗ったりして日々を送る。腹が減ると上からパパイヤが落ちてくる。音楽が聴きたいなあと思うと天上からボーイ・ジョージが二人の為に歌いかけてくれる。素晴らしい。言うことない。でも現実的に考えれば、僕もそろそろ働かなきゃならない。いつまでも君と遊んで暮らしているわけにはいかない。そして君のパパからお金をもらうわけにもいかない」

ユキは唇を歪めてしばらく僕の顔を見ていた。「あなたがパパやママからお金をもらいたくないというのはよくわかってるわよ。でもそんな風な意地のわるい言い方しないで。私だってこんな風にあなたをひっぱりまわしてるのが時々すごく辛くなるの。なんだかあなたの邪魔して、迷惑をかけてるみたいで。だからもしあなたが——」

「金を受けとればってこと？」

「そうしてくれると少なくとも私は楽になれる」

「君にはわかってない」と僕は言った。「僕はたとえ何があろうと、仕事として君とつきあいたくない。個人的な友達としてつきあっていたい。君の結婚式で司会者に『こちらは新婦の十三歳のころに、新婦の職業的男性乳母をつとめておられました方です』なんて紹介されたくない。そんなことされたらみんなに『職業的男性乳母っていったい何ですか？』と質問されるに決まってるもの。それよりは『この方は新婦十三歳の時のボーイフレンドでした』と紹介されたい。その方がずっとかっこいい」

CamScannerでスキャン

「馬鹿みたい」とユキは赤くなって言った。「私、結婚式なんてあげないもの」
「結構。僕だって結婚式なんか出たくない。下らないスピーチを聞かされて、作り損ねの煉瓦みたいなケーキを土産に持たされる。大嫌いだ。時間の消耗だ。自分のだってやらなかった。だからこれはあくまで贊え話だよ。僕が言いたいのはこういうことだ。友達は金では買えない。ましてや経費では買えない」
「そういうテーマで童話でも書いたら」
「素晴らしい」と僕は言って笑った。「実に素晴らしい。君はだんだん会話のコツを習得してきた。もう少し上達したら僕と二人で立派に漫才ができる」
ユキは肩をすぼめた。
「ねえ」と僕は咳払いをして言った。「真面目に話をしよう。もし君が僕と一緒に毎日遊んでいたいんなら、毎日遊んでもいい。別に仕事なんかしなくてもいい。どうせ下らない雪かき仕事だ。そんなのどうでもいいんだ。でもこれだけはひとつはっきりしている。金をもらって君とはつきあわない。ハワイのことは例外だ。あれは特別イベントだ。旅費もだしてもらった。女も買ってもらった。でもおかげで君の信用まで失いかけた。自分が嫌になった。もうああいうことは二度とやらない。おしまいだ。これからは僕のペースでやる。誰にも余計な口は出させない。金も出させない。僕はディック・ノースとも違うし、書生のフライデーとも違う。僕は僕で、誰にも雇われてはいない。つきあいたいから君とつきあう。君が僕と遊びたいんなら、僕は君と遊ぶ。君は金のことなんか考えることない」
「本当に私と遊んでくれるの?」とユキは足の爪のマニキュアを眺めながら言った。
「構わないよ。僕も君も世間からずるずると落ちこぼれてるんだ。今更気にすることもないだろう。のんびり遊んで暮らせばいい」
「どうしてそんなに親切なの?」

「親切なわけじゃない」と僕は言った。「やりかけたことを途中で放り出せない性格なんだ。君が僕と遊びたいっていうのなら、気が済むまで遊べばいい。僕と君が札幌のホテルで巡り合ったのも何かの縁だ。やるからにはとことん気の済むまでやろう」

ユキはしばらくサンダルの先で地面に小さな図形を描いていた。四角い渦巻きのような図形だった。僕はそれを眺めていた。

「私はあなたに迷惑をかけてるのかしら？」とユキは言った。

僕はそれについて少し考えてみた。「かけてるかもしれない。でもそれは君が気にするべきことじゃない。それに結局のところ、僕だって君と一緒にいるのが好きだから一緒にいるんだ。何も義務的につきあっているわけじゃない。どうしてだろう？　どうして僕は君といるのが好きなんだろう？　歳もこんなに違うし、共通する話題だってろくにないのに？　それはたぶん君が僕に何かを思い出させるからだろうな。僕の中にずっと埋もれていた感情を思い起こさせるんだ。僕が十三か十四か十五の頃に抱いていた感情だよ。もし僕が十五だったら君に宿命的に恋していただろう。それは前に言ったっけね？」

「言った」と彼女は言った。

「だからそういうことだよ」と僕は言った。「君と一緒にいると、時々そういう感情が戻ってくることがあるんだ。そしてずっと昔の雨の音やら、風の匂いをもう一度感じることができる。すぐそばに感じるんだよ。そういうのって悪くない。それがどれほど素敵なことかというのは君にもそのうちにわかる」

「今でもちゃんとわかるわよ、あなたの言ってることは」

「そう？」

「私だってこれまでにいろんなものをなくしてきたもの」とユキは言った。

「じゃあ話は早い」と僕は言った。

それから十分ほど彼女は黙っていた。僕はまた神社の中の人々の姿を眺めていた。

「私にはあなたの他にきちんと話をできる人がいないの」とユキは言った。「本当よ。だからあなたといない時は、殆ど誰とも話をしないの」

「ディック・ノースはどうだった？」

ユキは舌を出して品の悪い仕種をした。「とてつもない馬鹿よ、あれは」

「ある意味ではそうかもしれない。でもある意味ではそうじゃない。決して悪い男じゃない。君もそのことは理解するべきだと思うよ。片腕しかないのにそこらの連中よりずっとよくやっているし、よくやっているわりに押し付けがましいところがない。そういう人間ってそれほど多くないんだ。そりゃ君のお母さんに比べれば、スケールも小さいかもしれない。才能だってそんなにないかもしれない。でも彼は君のお母さんのことを真剣に考えている。たぶん愛してもいるだろう。信用できる人間だよ。料理も上手い。親切だ」

「そうかもしれないけど、馬鹿」

僕はそれ以上は何も言わなかった。ユキにはユキの立場があり、感情があるのだ。

ディック・ノースについての話は結局それでおしまいだった。僕らはハワイのイノセントな太陽や波や風やピナ・コラーダについてしばらく話した。少しおなかが減ってきたとユキが言うので、近くのフルーツ・パーラーに入ってフルーツ・パフェとパンケーキを食べた。それから地下鉄に乗って映画を見に行った。

その次の週にディック・ノースが死んだ。

34

ディック・ノースは月曜日の夕方に箱根の町に買い物に出て、スーパーマーケットの袋を抱えて外に出たところをトラックにはねられて死んだ。出合い頭の事故だった。トラックの運転手もどうして下り坂のあんな見通しの悪いところにスピードを落とさずにつっこんでしまったのか自分でもわからない、魔がさしたとしか思えないと言った。もっともディック・ノースの方にもいささかの落ち度はあった。道路の左の方向だけを見て、右方向の確認が一呼吸か二呼吸遅れたのだ。外国で長く暮らして日本に戻ってくるとよくそういう一瞬の間違いをする。車の左側通行に神経が馴れないのだ。そしてつい左右確認を逆にやってしまう。大抵の場合ひやりとする程度で済むが、時には大きな事故に巻き込まれることもある。ディック・ノースの場合がそうだった。彼はそのトラックにはねとばされ、向かいから来たライトバンに轢かれた。即死だった。

その知らせを聞いた時、まず僕はマカハのスーパーで買い物をしていたディック・ノースの姿を思い出した。手際良く品物を選び、果物を真剣な目付きで検分し、タンパックスの箱をそっとショッピング・カートに放り込んでいた彼の姿を。かわいそうに、と僕は思った。考えてみれば、最後まで運のない男だった。隣の兵隊が踏んだ地雷で左腕を失った男。朝から晩までアメの吸いさしの煙草を消してまわっていた男。そしてスーパーマーケットの袋を抱えたままトラックにはねられて死んだ男。

彼の葬儀は奥さんと子供のいる家で行われるということだった。もちろんアメもユキも僕もそこには行

かない。

僕は五反田君から返してもらったスバルにユキを乗せて、火曜日の午後に箱根まで行った。ママを一人で置いておくわけにはいかないから、とユキは言った。

「あの人一人じゃ本当になにもできないのよ。お手伝いのおばさんはいるけど、もう歳であまり気もきかないし、それにその人夜になると帰っちゃうから、一人にしておけないのよ」

「しばらくはお母さんと一緒にいた方がいいだろうね」と僕は言った。

ユキは肯いた。そしてしばらくロードマップのページをぱらぱらと繰っていた。「ねえ、私この前、彼についてひどいこと言ったわよね」

「ディック・ノースのこと？」

「そう」

「どうしようもない馬鹿だって言った」と僕は言った。

ユキはロードマップをドアのポケットに戻し窓枠に片肘をついて、じっと前方の風景を眺めた。「でも今思うと悪い人じゃなかった。私にも親切だったし、とてもよくしてくれた。サーフィンも教えてくれた。片腕なのに、両腕がある人よりしっかり生きてた。ママのことだって大事にしていた」

「知ってるよ。悪い男じゃなかった」

「でもひどいことを言いたかったのよ、私」

「知ってる」と僕は言った。「言わずにいられなかったんだ。君が悪いんじゃない」

彼女はずっと前を向いてた。一度も僕の方を見なかった。開けはなたれた窓からはいってくる初夏の風が彼女のまっすぐな前髪を草の葉のように揺らしていた。

「気の毒だけれど、彼はそういうタイプの人間だったんだ」と僕は言った。「悪い男じゃない。ある意味で

は尊敬にさえ値する。でもときどき品の良いごみ箱みたいに扱われる。いろんな人間がいろんなものをそこに投げ込んでいく。投げ込みやすいんだ。どうしてかはわからない。たぶん生まれながらにそういう傾向が備わっているんだろう。君のお母さんが黙っていてもみんなに一目おかれるのと同じようにね」凡庸さというのは白い上着についた宿命的なしみと同じなのだ。一度ついたものは永遠に落ちない。

「不公平なのね」

「原理的に人生というのは不公平なんだ」と僕は言った。

「でも自分がひどいことをしたような気がする」

「ディック・ノースに対して？」

「そう」

僕は溜め息をついて車を道ばたに停め、キイを回してエンジンを切った。そしてハンドルから手を放して彼女の顔を見た。

「そういう考え方は本当に下らないと僕は思う」と僕は言った。「後悔するくらいなら君ははじめからきちんと公平に彼に接しておくべきだったんだ。少なくとも公平になろうという努力くらいはするべきだったんだ。でも君はそうしなかった。だから君には後悔する資格はない。全然ない」

ユキは目を細めて僕の顔を見た。

「僕の言い方はきつすぎるかもしれない。でも僕は他の人間にはともかく、君にだけはそういう下らない考え方をしてほしくないんだ。ねえ、いいかい、ある種の物事というのは口に出してはいけないんだ。口に出したらそれはそこで終わってしまうんだ。身につかない。君はディック・ノースに対して後悔する。そして後悔していると言う。本当にしているんだろうと思う。でももし僕がディック・ノースだったら、僕は君にそんな風に簡単に後悔なんかしてほしくない。口に出して『酷いことをした』なんて他人に言っ

CamScannerでスキャン

てほしくないと思う。それは礼儀の問題であり、節度の問題なんだ。君はそれを学ぶべきだ」
ユキは何も言わなかった。窓枠に肘をついて、こめかみに指先をじっと押しつけていた。彼女はまるで眠りこんでしまったみたいに静かに瞼を閉じていた。時々まつげが微かに上下に動き、唇が小さく震えるだけだった。たぶん体の中で泣いているんだろうと僕は思った。声も涙も出さずに泣いているのだ。僕は十三歳の少女に対して余りにも多くを望んでいるのだろうか、とふと思った。そして僕はそんな偉そうなことを口にできる人間なんだろうか、と。でも仕方ない。相手が幾つだろうと、自分自身がどういう人間であろうと、僕はある種のことに対しては手加減というものができないのだ。下らないことは下らないと思うし、我慢できないことは我慢できないのだ。
長い間ユキは同じ格好をしたままぴくりとも動かなかった。僕は手を伸ばしてそっと彼女の腕に触れた。
「大丈夫だよ、君が悪いんじゃない」と僕は言った。「たぶん僕が偏狭すぎるんだ。公平に見れば君はとてもよくやってる。気にしなくていい」
涙が一筋彼女の頬をつたって膝の上に落ちた。でもそれだけだった。それ以上は涙もこぼさなかったし、声も出さなかった。立派なものだ。
「いったい私はどうすればいいのかしら?」と少しあとでユキは言った。
「何もしなくていい」と僕は言った。「言葉にならないものを大事にすればいいんだ。それが死者に対する礼儀だ。時間が経てばいろんなことがわかるよ。残るべきものは残るし、残らないものは残らない。時間が多くの部分を解決してくれる。時間が解決できないことを君が解決するんだ。僕の言うことは難しすぎる?」
「少し」とユキは言って、微かに微笑んだ。

「確かに難しいな」と僕も笑って認めた。「僕の言ってることは、大抵の人間にはまず理解されないだろうと思う。普通の大方の人は僕とはまた違った考えかたをしていると思うから。でも僕は自分の考え方がいちばん正しいと思ってる。具体的に嚙み砕いて言うとこういうことになる。人というものはあっけなく死んでしまうものだ。人の生命というのは君が考えているよりずっと脆いものなんだ。だから人は悔いの残らないように人と接するべきなんだ。公平に、できることなら誠実に。そういう努力をしないで、人が死んで簡単に泣いて後悔したりするような人間を僕は好まない。個人的に」

ユキはドアにもたれかかるようにしてしばらく僕の顔を見ていた。

「でもそれはとても難しいことみたいに思えるけれど」と彼女は言った。

「難しいことだよ、とても」と僕は言った。「でもやってみる価値はある。ボーイ・ジョージみたいな唄の下手なオカマの肥満児でもスターになれたんだ。努力がすべてだ」

彼女は少し笑って、そして肯いた。「あなたの言うことなんとなくわかるような気がする」とユキは言った。

「わかりがいい」と僕は言った。そしてエンジンを入れた。

「でもどうしてそんなにボーイ・ジョージばかり目のかたきにするのかしら?」とユキは言った。

「どうしてだろう」

「本当は好きだからじゃないの?」

「今度ゆっくりそれについて考えてみよう」と僕は言った。

＊

アメの家は大手の不動産会社が開発した別荘地の中にあった。大きな門があり、門の近くにプールやコ

ーヒー・ハウスがあった。コーヒー・ハウスの隣にはジャンク・フードを山積みにしたミニ・スーパーのようなものもあった。しかしディック・ノースのような人間はそんな間にあわせの店で買い物をすることを拒否するのだ。僕だってこんなところで買い物なんかしたくない。道はずっと曲がりくねった上り坂で、僕の自慢のスバルもさすがに少し息が荒くなった。アメの家はその丘の中腹あたりにあった。親子二人で住むにはかなり大きな家だった。僕は車を停め、ユキの荷物を持って石垣の脇の階段を上っていった。斜面に立ち並んだ杉の木の間から小田原の海が見下ろせた。空気はぼんやりと霞み、海は春の鈍い色合いに光っていた。

　アメは日当たりの良い広い居間の中を火のついた煙草を手に歩きまわっていた。大きなクリスタル・ガラスの灰皿は折れたり曲がったりしたセイラムの残骸で溢れていた。そしてそこに誰かが思いきり息を吹きかけたみたいに、テーブルの上には灰が勢い良く散乱していた。彼女は吸いさしのセイラムを灰皿に放りこんでユキのところに行き、彼女の頭をくしゃくしゃと撫でた。彼女は現像用の薬品の染みのついたオレンジ色のLサイズのトレーナー・シャツを着て、色の褪せたブルージーンズをはいていた。髪が乱れて、目が赤くなっていた。たぶんずっと寝られずに煙草を吸いつづけていたのだろう。

「大変だったわ」とアメは言った。「本当にひどい。どうしてこんなにひどいことばかり起こるんだろう？」

　本当にひどいことだと僕も言った。彼女は昨日の事故の顛末を話して聞かせてくれた。余りにも突然のことなので、自分はどうしようもなく混乱しているのだ、と彼女は言った。精神的にも、現実的にも。

「おまけにお手伝いのおばさんが今日は熱を出して来られないっていうのよ。こういう時に限って。何でこんな時に熱なんか出すのよ？　何だかもう気が狂いそうだわ。警察の人は来るし、ディックの奥さんから電話はかかってくるし。私、本当にもうどうしていいかわかんない」

CamScannerでスキャン

「ディックの奥さんはなんて言ったんですか？」と僕は訊いてみた。
「それが何が何だかよくわからないの」とアメは溜め息をついて言った。「ただ泣いてるだけ。ときどき小さな声でぼそぼそ何か言うだけ。殆ど聞き取れないの。私だってこんな時に何を言っていいか見当もつかないし……。そうでしょう？」
僕は肯いた。
「だからうちに残ってる彼の荷物はなるべく早くそちらに送りとどけるようにしますと言ったんだけど。でもその人ずうっと泣いてるだけなの。手のつけようがないの」
そう言うと彼女は深い溜め息をつき、ソファにもたれた。
「何か飲みますか？」と僕は訊いた。
できたら熱いコーヒーが飲みたいと彼女は言った。
僕はとりあえず灰皿をかたづけ、テーブルの上に散らばった灰を雑巾で拭き、ココアのかすのこびりついたカップを下げた。そして台所をざっとかたづけ、湯を沸かし、濃いめのコーヒーを作った。台所はいかにもディック・ノースが働きやすいようによく整頓されていたが、死後一日を経ずしてそこにははっきりとした崩壊の様相がうかがえた。流しの中には無秩序に食器が放りこまれ、砂糖壺の蓋は開いたままだった。ステンレスのレンジにはココアがべっとりとこびりついていた。包丁はチーズか何かを切ったままの姿で放置されていた。
かわいそうな男だ、と僕は思った。一所懸命彼は彼なりの秩序をここに作りあげたのだろう。でも一日でそんなものはあとかたもなく消え失せてしまう。あっという間だ。人というものは自分にいちばん似合った場所にその影を残していく。ディック・ノースのそれは台所だった。そしてそれも、そのかろうじて残った不安定な影も、あっという間に消滅してしまう。

かわいそうに、と僕は思った。
それ以外の言葉を思いつけなかった。
僕がコーヒーを持っていくと、アメとユキは寄り添うように並んでソファに座っていた。アメは潤んだようなとろんとした目つきでユキの肩に頭を載せて休んでいた。彼女は何かの薬物の作用で精神が後退しているようにさえ見えた。ユキは無表情だったが、母親が虚脱状態で自分にもたれかかっていることをとくに不快にも不安にも思っていないようだった。まったく不思議な親子だ、と僕は思った。二人が一緒になると、そこに何か奇妙な雰囲気が生まれる。アメだけの時とも違う、ユキだけの時とも違う何かだ。そこには何かしら近寄りがたいものがある。いったい何だろう?
アメは両手でコーヒー・カップを抱え、とても大事なものを飲むようにゆっくりとコーヒーを飲んだ。「おいしい」と彼女は言った。コーヒーを飲んでしまうと、アメは幾分落ち着いたようだった。目に少し光が戻ってきた。
「君は何か飲む?」と僕はユキに尋ねた。
ユキは無表情に首を振った。
「いろんなことの処理はもう終わったんですか? 事務的なこととか、法律的なこととか、そういう細い手続きは」と僕はアメに訊いた。
「うん、もう終わったわ。具体的な事故処理についてはとくに面倒なことはなかったの。ごく普通の交通事故だから。家に警官が来て、知らせてくれただけ。それで、私、その人にディックの奥さんのところに連絡してもらったの。奥さんはすぐに警察に来たみたい。彼女が細かいことは全部済ませたの。だって法律的にも事務的にも私はディックとは無関係な人間だから。その後で彼女が家に電話してきたの。殆ど何も言わないで、ただ泣いてるだけ。非難もしないし、何もないの」

僕は肯いた。ごく普通の交通事故、と僕は思った。

あと三週間も経てばたぶんこの女はディック・ノースがいたことなんかあらかた忘れてしまうだろう、と僕は思った。忘れやすいタイプの女だし、忘れられやすいタイプの男なのだ。

「何か僕にできることはありますか？」と僕はアメに訊いた。

アメは僕の顔をちらりと見て、それから床に目をやった。奥行きのない平板な視線だった。彼女はしばらく考えこんでいた。考えるのに時間がかかった。目の色が鈍くなり、それからまた少しずつそこに光が戻ってきた。遠くの方までふらふらと歩いて行って、ふと思い直してまた戻ってくるような感じだった。

「ディックの荷物」と彼女は呟くように言った。「奥さんに返すって言ったやつ。そのことさっきあなたに言ったわよね？」

「ええ、聞きました」

「それを昨日の夜に整理したの。原稿とかタイプライターとか本とか服とか、そういうものをまとめて彼のスーツケースの中に詰めておいたの。そんなに沢山じゃないの。あまり物を持たない人だったから。中くらいの大きさのスーツケースひとつ分。悪いんだけど、それを彼の家に届けていただけないかしら？」

「いいですよ。届けます。家は何処にあるんですか？」

「豪徳寺」と彼女は言った。「細かい住所はわからないわ。調べてくれる？ たぶんスーツケースのどこかに書いてあったと思うんだけど」

そのスーツケースは二階の廊下の突き当たりにある部屋に置いてあった。スーツケースのネームタッグにはいかにも几帳面そうな字でディック・ノースという名前と豪徳寺の住所が書いてあった。ユキがその部屋に僕を案内してくれた。屋根裏部屋のような狭く細長い部屋だったが、雰囲気は悪くなかった。昔住み込みのお手伝いさんがいるときに、この部屋を与えていたのだとユキは言った。ディック・ノースはそ

の部屋をとてもきちんと整理していた。小さなライティング・デスクの上には鉛筆が五本見事にほっそりと削られて、消しゴムと一緒に静物画みたいな感じに並べられていた。壁のカレンダーには細かい書込みがあった。ユキは戸口にもたれて、黙って部屋の中を見ていた。空気はしんとしていた。鳥の声の他には物音ひとつ聞こえなかった。僕はマカハのコテージを思い出した。あそこも静かだった。そしてやはり鳥の声しか聞こえなかった。

僕はそのスーツケースを抱えて下におりた。スーツケースの中には原稿や本がたっぷりと入っているらしく、みかけよりずっと重かった。その重みは僕にディック・ノースの死の重みを想像させた。

「今から届けてきます」と僕はアメに言った。「こういうことは早ければ早い方がいいですからね。他に何か僕のすることはありますか?」

アメは迷ったようにユキの顔を見た。ユキは肩をすぼめた。

「実は食料品があまりないの」とアメは小さな声で言った。「彼が買いに出て、それであんなことになって、だから……」

「いいですよ。適当に買ってきます」と僕は言った。

そして僕は冷蔵庫の中身を点検し、必要と思えるものをメモした。そして下の町に下りて、ディック・ノースがその前で死んだスーパーマーケットで買物をした。四、五日はもつだろう。僕は買ってきた食品をひとつひとつきちんとラップに包んで冷蔵庫にしまった。

アメは僕に礼を言った。大したことじゃないです、と僕は言った。実際に大したことではなかった。ディック・ノースがやろうとしてやり残して死んだことを僕が引き継いで済ませただけのことだった。

二人は石垣の上から僕を見送ってくれた。マカハの時とまったく同じように。でも今回は誰も手を振らなかった。僕に手を振るのはディック・ノースの役目だったのだ。二人の女は石垣の上に並んで立って、殆ど身動きひとつせずにじっと僕の姿を見下ろしていた。どことなく神話的な趣のある情景だった。僕はそのグレーのプラスティックのスーツケースをスバルの後部席に入れ、それから運転席に入った。彼女たちは僕がカーブを曲がってしまうまで、ずっとそこに立っていた。日没が近付いていて、西側の海がオレンジ色に染まり始めていた。あの二人はこれからここでいったいどういう夜を過ごすんだろう、と僕は考えた。

それから僕はホノルルのダウンタウンのあの奇妙な薄暗い部屋で見た片腕の白骨のことを思い出した。あれはやはりディック・ノースの骨だったんだろうな、と僕は思った。たぶんあそこには死が集められていたんだ。六体の白骨——六つの死。あとの五つは誰の死なんだろう？　一つは鼠かもしれない。鼠——死んでしまった僕の友達。そしてもうひとつはたぶんメイだ。あと三つ。

あと三つ。

でもどうしてキキがそんなところに僕を導いたんだろう。何故キキが僕にその六個の死を提示しなくてはならなかったんだろう？

僕は小田原まで下り、東名高速に入った。そして三軒茶屋で首都高速を下り、ロードマップを頼りに世田谷の曲がりくねった道路をしばらくうろうろしてからやっとディック・ノースの家にたどりついた。家そのものはこれという特徴のないごく普通の建売住宅だった。小ぢんまりとした二階建ての家で、ドアも窓も郵便受けも門灯も、何から何までみんなひどく小さく見えた。ドアの脇に犬小屋があって、鎖に繋がれた雑種犬が自信なげにうろうろとその回りを歩きまわっていた。家中に明かりがついていた。人々の声も聞こえた。狭い玄関には黒い革靴が五足か六足、きちんと向きを揃えて並べられていた。出前の寿司桶

CamScannerでスキャン

も見ずに、ディック・ノースの遺体がどこに置かれ、誰がなげかれているのか。僕にも、少なくとも死んだ人は帰る場所があったのだ、と僕は思った。

僕はスーツケースを車から出し、玄関まで運んだ。ベルを押すと中年の男が出てきたので、この荷物をここまで運ぶように言われたのだ、と僕は言った。そしてそれ以上のことは何も知らないという顔をしていた。男はスーツケースのネームタッグを見て、すぐに事情を理解したようだった。どうも御丁寧に有り難うございました、と彼は丁重に礼を言った。

僕はなんだか割り切れない気分のまま砂浜のアパートに戻った。

やれやれ、と僕は思った。

＊

ディック・ノースの死はいったい何を意味するのだろう、と僕は部屋で一人でウィスキーを飲みながら考えた。でも彼の唐突な死は、殆ど何の意味も持っていないように僕には感じられた。僕のジグソー・パズルに開いたいくつかの空白には、その断片はまったく合致しなかった。裏返しても、横にしても駄目だった。たぶん違うカテゴリーに属する断片なのだ。しかし彼の死は、それ自体に何の意味もないとしても、状況に何か大きな変化をもたらすだろうという気がした。それもあまり良くない方向に。どうしてかはわからないけれど。僕は直観的にそう思った。ディック・ノースは本質的に善意の男だった。そして彼は彼なりに何かを繋ぎとめていた。でも今ではそれが消滅してしまった。きっと何かが変わる。たぶん状況は今までよりもっとハードなものになってくるだろう。

例えば？

例えば――僕はアメといるときのユキの無表情な目付きがどうも好きになれなかった。そしてユキと一

緒にいるときのアメのとろんとして平板な目付きがどうも好きになれなかった。そこには何かしら不吉なものがあるように僕には思えた。僕はユキのことが好きだった。頭の良い子だ。時々ひどく頑固になるが、根は素直だ。また僕はアメに対しても好意のようなものを抱いていた。二人だけで話すと、彼女はやはり魅力的な女性だった。才能にあふれ、無防備だった。ユキよりずっと子供っぽいところもあった。でも二人が一緒になると、その組み合わせは僕をひどく疲れさせた。牧村拓があの二人のおかげで俺の才能は尽きて消えてしまったと言う意味も何となく理解できた。

そう、そこには直接的なパワーのようなものが生じるのだ。

これまではその二人の間にディック・ノースがいた。でももう今はいない。ある意味では僕が二人に直接に対面している。

例えば——そういうことだ。

僕はユミヨシさんに何度か電話をし、五反田君と何度か会った。ユミヨシさんの態度は全体的に見れば相変わらずクールだったが、その口調からすると僕から電話がかかってくることを多少は嬉しく思っているようだった。少なくともそれほど迷惑には思っていないようだった。彼女は一日も休まず週に二回スイミング・スクールに通い、休みの日にはボーイフレンドと時々デートをしていた。先週の日曜日に彼と何とかという湖にドライブに行ったと彼女は言った。

「でも、その人とは何もないのよ。ただの友達なの。高校のクラスが同じで、札幌で働いてる人なの。それだけ」

別にそんなこと気にしなくていい、と僕は言った。本当にそんなことどうでもよかったのだ。僕が気にしていたのはスイミング・スクールのことだけなのだ。ボーイフレンドと何処の湖に行こうが、何処の山にのぼろうが、僕の知ったことではない。

の、私は嫌だから」

「でも一応言っておいた方がいいと思ったから」とユミヨシさんは言った。「何かを隠しておくっていう

「そんなこと全然気にしなくていいんだよ」と僕は繰り返した。「僕はもう一度札幌に行って君に会って話をする。それだけが問題なんだ。君は好きに誰とでもデートすればいいさ。そんなの、僕と君との間の事柄にはなんの関わりもない。僕はずっと君のことを考えてる。前にも言ったように僕らの間にはなにかしら相通ずるものがあるんだ」

「たとえば？」

「たとえばホテルだ」と僕は言った。「あそこは君の場所であり、また僕の場所でもある。あそこは僕らふたりにとっていわば特別の場所なんだ」

「ふうん」と彼女は言った。肯定的でも否定的でもない、あくまで中立的な「ふうん」だった。

「僕は君と別れてからいろんな人に会った。いろんな目にも会った。でも根本的にはずっと君の事を考えているような気がする。しょっちゅう君に会いたいと思っている。でもまだ行けない。用事がまだかたづいてないから」

心はこもっているが、非論理的な説明だった。僕らしい。

中くらいの長さの沈黙があった。中立からのほんの少しだけポジティブな方向に傾いた感じのする沈黙だった。でも結局のところ沈黙はただの沈黙にすぎない。僕は物事を好意的に考え過ぎるのかもしれない。

「その作業は進展はしているのかしら？」と彼女は質問した。

「そうだと思う。たぶんそうだと思う。そう思いたい」と僕は答えた。

「来年の春までにかたづくといいわね」と彼女は言った。

「まったく」と僕は言った。

＊

五反田君はいささか疲れているように見えた。仕事のスケジュールがひどくタイトな上に、その間を縫うようにして別れた奥さんと隠れて会っているせいだ。それもこっそりと人目につかないように。

「こんなことはいつまでも続けられないね。それだけは確信をもって言える」と五反田君は深い深い溜め息をつきながら言った。「僕はもともとこういう技巧的な生活に向いてないんだよ。僕はどちらかといえば家庭的な人間なんだ。だから毎日毎日すごく疲れる。神経が伸びきっているような気がする」

彼はゴム紐を伸ばすみたいに両腕を左右に広げた。

「彼女と二人で休暇をとってハワイに行くべきだな」と僕は言った。

「そうできればね」と彼は言った。そして力なく微笑んだ。「そうできればどんなに楽しいだろうね。何も考えずにぼんやりと何日か二人でビーチに寝転んで暮らすんだ。五日でいい。いや贅沢は言わない。三日でもいいよ。三日あれば随分疲れが取れるんだろうけど」

その夜僕は彼と一緒に麻布の彼のマンションに行き、シックなソファに座って、酒を飲みながら彼の出演したTVコマーシャルを集めたビデオを見た。胃腸薬のCM。そのCMを見たのは初めてだった。どこかのオフィスのエレベーター。壁もドアも仕切りもないオープンなエレベーターがかなり高速で四基並んで上がったり下がったりしている。五反田君はダーク・スーツを着て革鞄を抱えてエレベーターに乗っている。いかにもエリート・サラリーマンという風貌だ。彼はそのエレベーターからエレベーターへとひょいひょいと跳び移る。あっちのエレベーターに上役が乗っているとそちらに行って仕事の打ち合わせをし、こっちのエレベーターに綺麗なOLが乗っているとデートの約束をし、向こうのエレベーターにし残

した仕事が置いてあるとそっちにいって急いで仕上げたりするのだ。二つ向こうのエレベーターで電話が鳴っていたりもする。高速で動くエレベーターからエレベーターへと跳び移るのはけっして簡単なことではない。五反田君はクールに表情を崩さず、しかしいかにも必死にとびうつっている。

そしてコメントがはいる。「疲労する毎日。疲労は胃にたまります。忙しいあなたに、優しい胃腸薬、……」

僕は笑った。「面白いね、これは」

「僕もそう思う。もちろん下らんCMだ。CMなんて根本的にはみんな屑だ。でもこれはなかなかよく撮れてる。情け無い話だが、僕の主演した大部分の映画よりずっと質が高い。これでけっこう金もかかってるんだ。セットとか、特殊撮影とかね。広告の連中は細かいところに惜しげなく金をかけるからね。設定も面白い」

「そして君の今の状況を示唆している」

「実に」と言って彼は笑った。「君の言うとおりだ。本当に良く似ている。寸暇を縫ってあっちにひょいと跳び移り、こっちにひょいと跳び移っている。やってる方は命懸けだ。疲労が胃にたまる。でもこの薬も効かないんだ。一ダースもらったから試してみたんだけど、見事に効かない」

「でもとても動きが良いね」と僕はリモコンでもう一度そのCMをプレイバックして見ながら言った。「どことなくバスター・キートン的おかしみがある。君は意外にこういう感じの演技が向いているのかもしれないね」

五反田君はくちもとに微笑みを浮かべて肯いた。「そうだな、僕は喜劇って好きだよ。興味がある。可能性を感じる。何と言うかね、僕みたいなストレートなタイプの役者のストレートな故のおかしみのようなものが上手く出せると面白いと思うんだ。このまがりくねったややこしい世界できちっとストレートに

CamScannerでスキャン

生きていこうとする。でもそういう生き方自体が滑稽だというようなね。僕の言ってることわかるかな？」

「わかるよ」と僕は言った。

「別に特に滑稽なことはやらなくていいんだ。ごく普通に振る舞っていればいい。それだけでけっこうおかしい。そういう演技には興味があるよ。そういうタイプの俳優は今の日本にはいないからね。コメディーとなると大抵の人間はオーバー・アクトする。僕のやりたいのはその逆なんだ。何も演じない」彼は一口酒を飲んで天井を見た。「でも誰も僕のところにそういう役をもってこない。あいつらには想像力というものがないからね。僕の事務所に持ち込まれるのは明けても暮れても医者だの教師だの弁護士だの、そんな役ばっかりだ。もう、飽きた。断りたいが、断れる立場に僕はない。疲労が胃にたまる」

そのCMはかなり評判が良くて、幾つか続編が作られた。パターンはいつも同じだった。端正な顔をした五反田君がビジネス・スーツに身を包み、電車やバスや飛行機に間一髪のタイミングで飛び乗ったりしていた。あるいは彼は書類を小脇に抱え、高層ビルの壁にしがみついたり、ロープをつたったりしてあっちの部屋からこっちの部屋へと移動していた。どれもよく出来ていた。何といっても五反田君が表情を崩さないところがよかった。

「最初はすごく疲れた顔をしろって言われたんだ。ディレクターに。くたくたで疲労困憊でもう死にそうって感じでやれってさ。でも僕は嫌だって言った。そうじゃない、これはクールにやるからこそ面白いんだって。もちろんあいつらは馬鹿だから僕の言うことなんて全然信じなかった。でも僕も引かなかった。僕は好きでこんなCMに出てるわけじゃない。金のために仕方なくやってるんだ。でもそれとは別にこれはきっと面白いものになるっていう気がしたんだ。で、徹底的にごねた。結局二種類のフィルムを作ってみんなに見せたんだ。もちろん僕が主張したやり方のフィルムの方がずっと受けた。でもCMが成功した

ら手柄は全部そのディレクターどものものになった。何かの賞をとったっていうことだよ。別にそんなことどうでもいいさ。僕はただの役者だ。誰がどう評価されようと僕には関係ない。でもね、僕はあいつらがごく当然みたいなでかい面してのさばってるのが気にくわない。賭けてもいいけど、あいつらは今ではあのCMのアイデアは最初から最後まで全部自分で思いついたことだと信じこんでいるよ。そういうやつらなんだ。想像力のないやつらに限って自己合理化が素早いんだ。そして僕はごねるのが好きなただのハンサムなだけの大根だと思われてる」

「お世辞を言うわけじゃないけど、君には何か特別なものがあるような気がするな」と僕は言った。「正直言って、こうして君と実際に会って話してみるまではそんな風には感じなかった。何本か君の出た映画を見たけど、率直に言ってどれも程度の差こそあれひどい映画だった。そういうのに出てると君までひどく見えた」

五反田君はビデオ・デッキのスイッチを切り、新しい酒を作り、ビル・エヴァンスのレコードをかけた。そしてソファに戻って酒をひとくち飲んだ。そんな一連の動作は相変わらず見事に優雅だった。

「そのとおりだよ。実にそのとおりだ。あんな下らない映画に出てると、自分がだんだん下らなくなってくるのがわかる。自分がひどくみすぼらしく感じられる。でもさっきも言ったように、僕は何かを選べる立場にはないんだ。なにひとつとして選べない。自分のしめるネクタイの柄さえろくに選ばせてもらえない。自分の頭が良いと思ってる馬鹿どもと、自分の趣味が良いと思ってる俗物どもが好き勝手に僕を小突きまわすんだ。あっち行け、こっち来い、あれやれ、これやれ、この車に乗れ、この女と寝ろってね。下らない映画みたいな下らない人生だ。いつまでもいつまでもだらだらと続いている。いつまで続くんだろう？　自分でも見当がつかない。もう三十四なのにね。あと一月で三十五になるんだぜ」

「思い切って何もかも捨ててゼロになればいいだろう。君ならゼロからやりなおせるよ。事務所を出て好

きなことをしてぼちぼちと借金を返していけばいい」

「そのとおりだ。僕だって何度もそのことを考えた。そして僕ひとりだったら、きっともうそうしていただろうな。ゼロになって、どこかの劇団で好きな芝居をやっているかもしれない。それで構わないよ。金のことはなんとかなるだろう。でもね、僕がゼロになったら、彼女は間違いなく俺を捨てるよ。あれはそういう女なんだ。こういう世界でしか呼吸していけないんだ。ゼロになった僕と一緒にいたら、あれは呼吸困難になっちゃうね。良いも悪いもない。そういう体質なんだ。彼女はスター・システムというシステムの中で、そういう気圧の中で生きてるし、相手にもそれと同じ気圧を要求する。そして僕は彼女を愛している。彼女からは離れられない。それだけは駄目だ」

出口がないのだ。

「八方塞がりなのさ」と五反田君は微笑みながら言った。「何か別の話をしようよ。これについて話していると朝までかけても何処にもいかない」

僕らはキキの話をした。彼がキキと僕の関係について聞きたがったのだ。

キキが我々を引き合わせたようなものなのに、考えてみたら君の口から彼女の話を殆ど聞いていないような気がする、と五反田君は言った。それは話しにくい種類のことなのかな?もしそうだったら話さなくてもいいけど。

いや、話しにくいってわけじゃない、と僕は言った。

僕はキキと会った時の話をした。ふとしたことで我々は知り合い、一緒に暮らすようになったのだ、と。まるで空白に何かの気体が音もなく自然にもぐりこんでくるように、彼女は僕の人生にはいりこんできたのだ。

「ごく自然なことだったんだ」と僕は言った。「上手く説明できないな。何も彼もがすうっと自然に流れ

ていってそうなったんだ。だからその時はとくに不思議だとは思わなかった。でもあとになって考えてみるといろんなことが非現実で筋が通ってないように感じられる。言葉にしてみると馬鹿気ているんだ、実に。だから僕はそれについてこれまで誰にも話さなかった」

　僕は酒を飲み、グラスの中の綺麗な氷を揺すった。

「キキはその当時耳のモデルをしていてね、僕は彼女のその耳の写真を見て、それでキキに興味を持ったんだ。あれはね、何というか本当に完璧な耳だったんだ。僕はその時その耳の写真を使って広告を作る仕事をしていた。その写真にコピーをつけるんだよ。何の広告だっけな、忘れた。でもとにかくその耳の写真が僕のところに送られてきた。ものすごく大きく拡大されたキキの耳の写真だ。産毛まで見えるくらいのやつだよ。僕はそれを事務所の壁にかけて毎日眺めて暮らしていた。最初は広告コピーのインスピレーションを得る為だったんだけど、そのうちにその写真を見ることは僕の生活の一部になった。広告の仕事が終わったあとでも、僕はずっとその写真を眺め続けていた。それは本当に素晴らしい耳だったんだ。君にも見せたい。実物を見せなくちゃ説明にも何にもならないだろうからさ。それの存在自体が意味を持っているような、完璧な耳だった」

「そう言えば君はキキの耳のことについて何か言ってたな」と五反田君は言った。

「うん、そう。それで僕はどうしてもその耳の持ち主に会いたくなった。彼女に会わないことには人生がこれ以上一歩も前に進まないような気がした。どうしてだろう？　でもそういう気がしたんだ。それで僕はキキに電話をかけた。彼女は僕と会ってくれた。そして会った最初の日にキキは僕に個人的に耳を見せてくれた。個人的な耳を見せてくれたんだ。営業用じゃない個人的な方の耳を。それは写真よりももっと凄い耳だった。信じられないくらい凄い耳だった。彼女は営業用に耳を出す時には——つまりモデルをする時には——意識的に耳を閉鎖するんだ。だから個人的な耳というのは、それとはまったく違う。わかる

CamScannerでスキャン

かな、彼女が耳を見せると、それだけでそこにある空間が変化してしまうんだ。世界のありようが一変するんだ。こんな風に言ってもたぶん凄く馬鹿馬鹿しく聞こえるんだろうけどね。でもそうとしか、表現のしようがない」

五反田君はそれについてじっと考えこんでいた。「耳を閉鎖するというのはどういうことだろう？」

「耳と意識を分断するんだよ。簡単に言えば」

「ふうん」と彼は言った。

「コンセントを抜くんだ。耳の」

「ふうん」

「馬鹿みたいだ。でも本当なんだ」

「もちろん信じてるよ、君の言うことは。ちゃんと理解しようとしているだけだよ。馬鹿にしてるんじゃない」

僕はソファにもたれて壁にかかった絵を眺めた。

「そして、彼女の耳は特殊な力を持っているんだ。何かを聞き分け、人をしかるべき場所に導くんだ」と僕は言った。

五反田君はまたしばらく考えこんでいた。「それで」と彼は言った。「そのときキキは君を何処かに導いたんだね？　しかるべき場所に？」

僕は肯いた。でもそれについては何も話さなかった。話を始めると長くなるし、話したいとも思わなかった。五反田君もとくにそれ以上は質問しなかった。

「そして彼女は今また僕をどこかに導こうとしている」と僕は言った。「僕はそれをはっきりと感じるんだよ。この何ヵ月かずっとそれを感じ続けていた。そして僕はその糸を少しずつたぐり寄せてきた。ずる

するとね。細い糸だし、何度も切れそうになった。でも何とかここまで辿ってきた。そしてその過程でいろんな人間と巡り合った。君もその一人だ。中心的な一人だね。でも僕は彼女の意図するところをまだ掴めていない。途中で人が二人死んだ。一人はメイで、もう一人は片腕の詩人だ。動きはある。でもどこにも行かない」

グラスの中の氷が溶けてしまったので、五反田君は台所からアイスペールいっぱいの氷を持ってきて、二人分の新しいオン・ザ・ロックを作ってくれた。優雅な手付きだった。彼が空のグラスに氷を入れるとからんというとても気持ちの良い音がした。まるで映画のシーンみたいだなと僕は思った。

「僕もやはり手詰まりなんだ」と僕は言った。「君と同じだ」

「いや、そうじゃない。君と僕とは違う」と五反田君は言った。「僕は一人の女を愛している。そしてそれは全く出口のない愛情だ。でも君はそうじゃない。少なくとも君は何かに導かれている。今は混乱しているかもしれない。でも僕がひきずりこまれているこの感情の迷路に比べたら、君の方がずっとずっとましだし、希望だって持てる。少なくとも出口があるという可能性はある。僕のは全くないんだ。その二つの状況には決定的な違いがあると思うね」

そうかもしれない、と僕は言った。「とにかく僕に出来ることはなんとかキキのラインにしがみついていることだ。それ以外に今のところやることもない。彼女は僕に何かしらの信号なりメッセージなりを送ろうとしている。僕はそれに耳を澄ましている」

「ねえ、どうだろう？」五反田君は言った。「キキが殺されてしまったという可能性はないだろうか？」

「メイと同じように？」

「うん、だって消え方があまりにも唐突に過ぎる。メイが殺されたって聞いたとき僕はすぐにキキのことを思い出した。彼女もやはり同じような目にあったんじゃないかってね。あまりそういうことを口にした

CamScannerでスキャン

くないから黙ってたけど、その可能性はなくはないだろう？」
僕はじっと黙っていた。でも僕は彼女に会ったのだ、ホノルルのダウンタウンで、あの淡い灰色に染まった夕暮れの時刻に。本当に僕は彼女と出会ったのだ。そしてユキもそれを知っているのだ。
「ただの可能性だ。意味はないよ」と五反田君は言った。
「もちろんそういう可能性はあるだろうね。でもそれでも彼女は僕にメッセージを送ってくるよ。僕にはそれがはっきり感じられる。彼女はあらゆる意味で特別なんだ」
五反田君は長いあいだ腕を組んで考えこんでいた。彼はそのまま疲れて眠りこんでしまったみたいに見えた。でももちろん眠ってはいなかった。ときどき手の指が組みあわされたり離されたりした。指以外には何ひとつ動かなかった。夜の闇が何処かから部屋の中に忍び込んできて、羊水のように彼のスマートな体をすっぽりと包んでいるみたいに僕には感じられた。
僕はグラスの中の氷を一度くるっと回してからウィスキーを一口すすった。
そしてそのときふと部屋の中に第三者の存在を感じた。僕と五反田君の他に誰かがこの部屋の中に存在しているような。僕はその体温や息遣いやかすかな臭いをはっきりと感じることができた。でもそれは人間の気配ではなかった。それはある種の動物が引き起こす空気の乱れのようなものだった。動物、と僕は思った。そしてその気配は僕の背筋をはっとこわばらせた。僕はさっと部屋を見回してみた。でももちろん何も見えなかった。そこにあるのはただの気配だけだった。空間の中に何かがもぐりこんでいる硬質な気配。でも何も見えない。部屋の中には僕がいて、五反田君がじっと目を閉じて考え事をしているだけだった。僕は深く息を吸いこんで耳を澄ませた。どんな動物だろう、と僕は思った。でも駄目だった。何も聞き取れなかった。その動物もやはりじっと息を殺してどこかの空間にうずくまっていた。そしてやがて気配が消えた。動物はいなくなった。

僕は肩の力を抜いて、酒をまた一口飲んだ。

二、三分あとで五反田君が目を開けた。そして僕に向かって感じ良く微笑みかけた。

「悪いな。何だか辛気臭い奴になっちゃったな」と彼は言った。

「それはたぶん僕らが二人とも本質的に辛気臭い人間だからだろう」と僕は笑って言った。

五反田君も笑ったが、何も言わなかった。

一時間ばかり二人で音楽を聴いて酔いをさましてから僕はスバルに乗って家に帰った。そしてベッドにもぐりこんでこう思った。あの動物はいったい何だったんだろう、と。

35

五月の末に偶然――偶然なのだろう、たぶん――僕は「文学」に会った。メイの事件で僕を尋問した二人の刑事のかたわれだ。渋谷の東急ハンズではんだごてを買って外に出ようとしたところで彼とばったり鉢合わせした。夏を思わせるような暑い日なのに彼は当然のような顔をしてまだ厚手のツイードの上着を着ていた。警察官というのはあるいは気温に対して特殊な感覚を持っているのかもしれない。彼は僕と同じように東急ハンズの袋を下げていた。僕は気がつかないふりをしてそのまま通り過ぎようとしたが、「文学」の方が僕にすかさず声を掛けた。

「ねえ、冷たいじゃないですか」と文学は冗談めかして言った。「お互い知らない仲じゃないのに、知らんふりして行っちまうこともないでしょうが?」

「忙しいんですよ」と僕は簡単に言った。

「へえ」と文学は言った。僕が忙しいなんて全然信じてもいないみたいだった。

「仕事の準備にもかからなくちゃいけないし。いろいろやることがあるんです」と僕は言った。

「そうでしょうね、そりゃ」と彼は言った。「でもちょっとくらいいいじゃないですか、十分くらい。どうですか、お茶でも飲みませんか? 仕事抜きであなたと一度話してみたかったんですよ。本当に十分でいいですから」

僕は彼と一緒に混んだ喫茶店に入った。どうしてそんなことをしたのか自分でもわからない。僕は断っ

てそのまま帰ってしまうことだってできたのだから。でも僕はそうせずに、彼の誘うままに喫茶店に入ってコーヒーを飲んだ。まわりに座っているのは若いカップルか、学生のグループばかりだった。コーヒーはひどくまずかったし、空気も悪かった。文学は煙草を出して吸った。

「煙草やめたいんですけどね」と彼は言った。「この仕事やってる限りやめられないですね。絶対駄目だな。吸わずにはいられないんです。神経を使うから」

僕は黙っていた。

「神経を使うんですよ。みんなに嫌われるから。刑事を何年もやってるとね、本当に嫌われるんです。目付きも悪くなるし、肌も汚くなるしね。どうして肌が汚くなるのかよくわからんですけどね、とにかく汚くなるんですわ。そして実際の歳よりずっと老けて見えるようになる。喋り方だって変わってくる。良い事なんて何もないです」

彼はコーヒーに砂糖を三杯入れ、クリームを入れて丁寧に掻き回し、ゆっくりと美味そうに飲んだ。

僕は時計を見た。

「ああ、そうね、時間ね」と文学は言った。「まだあと五分くらいあるでしょう？　大丈夫です。そんなに時間は取らせません。あの殺された女の子のことですよ。メイっていう女の子」

「メイ？」と僕は聞き返した。そんなに簡単にはひっかからない。

彼は唇をちょっと歪めて笑った。「ああ、そうなんです。あの子、メイっていうんです。名前がわかったんです。もちろん本名じゃないですけどね。源氏名ってやつです。やっぱり売春婦でした。私の勘のとおりです。素人じゃなかったです。一見どうみても素人なんですがね、でも素人じゃない。最近は見分けがつきにくいんです。昔はよかった。一目見れば売春婦かそうじゃないかすぐにわかった。着てる服とか、化粧とか、顔つきなんかでね。最近は駄目です。そんなこととてもしそうにない子が売春やるんです。金

の為とか、あるいは好奇心からとかね。よくないことです。それに危険だ。そうでしょう？　しょっちゅう知らない男と会って、密室に閉じこもるんです。世の中にはいろんなやつがいる。変態もいるし、異常者もいる。危険ですよ。そう思いませんか？」

僕は仕方なく肯いた。

「でも若い女の子にはそれがわからない。彼女たちは世の中の幸運が全部自分の味方だと思っているんです。まあ仕方ないですけどね。それが若いっていうことだから。若い時はなんだって上手く行くみたいに思えるんです。そうじゃないってわかった時には、もう遅い。その時にはもうストッキングが首にまきついているんです。かわいそうにね」

「それで犯人はわかったんですか？」と僕は尋ねてみた。

文学は首を振った。そして顔をしかめた。「残念ながらまだです。いろいろと細かい事実はわかりました。でも新聞には発表してません。まだ捜査の途中だしね。例えば――彼女の名前はメイで、職業は売春婦です。本名は……まあ別に本名はいらないですね。大した問題じゃない。生まれは熊本です。父親は公務員です。あまり大きな市じゃないですけど、助役までやってます。ちゃんとした家です。金の面でも不自由はないです。仕送りだって充分に与えている。月に一回か二回母親が上京して服やら何やらを買ってやっている。ファッション関係の仕事をしていると家族には言っていたようです。兄弟は姉が一人、弟が一人。姉は医者と結婚してます。弟は九州大学の法学部に入ってます。りっぱな家庭ですね。何故売春なんかするんだろう？　家族はみんなショックを受けています。売春のことは気の毒だから家族には言ってません。でもホテルで男に絞め殺されるというのはショックだったんですね。そりゃそうでしょう、物静かな家庭ですから」

僕は黙って彼に喋らせておいた。

「彼女が属していたコールガール組織のことも我々はつきとめました。かなり大変だったですけど、なんとかそこまでたどりつきました。どうしたと思います？　都内の高級ホテルのロビーを張って、売春をしていると思える女を二、三人警察にひっぱったんです。そしてあなたに見せたのと同じ写真を見せて、しめあげたんです。一人が口を割った。みんながあなたみたいにタフなわけじゃない。それに向こうにも弱みがありますからね。それで彼女の属していた組織がわかりました。高級売春組織です。会員制のやたら高いやつだ。私とかあなたとかは残念ながら全然お呼びじゃないやつ。そうでしょう、一回アレやるのにあなた七万も払えますか？　私は払えないね。冗談じゃない。それくらいならあきらめて女房とやって、子供に新しい自転車を買ってやる。まあ、何というか貧乏臭い話ですけどね」彼は笑って僕の顔を見た。「それにたとえ七万払う気になったとしても、私なんか絶対に相手にしてもらえません。身元を調べられますからね。徹底的に調査するんです。安全第一なんです。やばい客はとらない。刑事なんか会員にしてくれませんよ。警官が駄目ってわけでもないんです。警官でもずっと上の方ならいいですよ。ずうううっと上の方。そういうのはいざという時に役に立つから。私みたいな下っ端は駄目だ」

彼はコーヒーを飲み干し、煙草をくわえてライターで火をつけた。

「それで上の方にクラブの強制捜査を申請しました。三日ほどかかって許可は下りました。我々が捜査令状をもってクラブに踏み込んだときには、事務所の中には何も残ってなかった。きれいさっぱりもぬけの殻でした。空っぽ。情報が漏れてたんですね。何処から漏れたんだろう？　何処だと思います？」

知らない、と僕は言った。

「もちろん警察の内部ですよ。上の方が絡んでたんですね。そして情報を流したんだ。証拠はないですよ。でも私ら現場の人間にはちゃんとわかるんです。何処から漏れたかは。誰かが捜査があるからさっさと何処かに消えろって連絡したんですよ。恥ずかしいことですね。あるまじきことです。クラブの方もそ

ういうのに馴れてますからね、引っ越しなんてあっという間です。一時間あればどっかに消えちゃいます。そしてまた別の事務所を借りて、別の電話を何台か買って、同じ商売を始めるんです。簡単です。顧客リストがあって、女の子さえしっかり揃っていればどこでだって商売はできます。我々にはつきとめようもありません。それでアウトです。糸がぷつんと切れちゃった。彼女がどういう客を取っていたかがわかると話はもう少し進展していたんですがねえ、これじゃ今のところ手の打ちようがない」

「わからないな」と僕は言った。

「何がわからないんですか?」

「彼女があなたの言うように会員制の高級コールガールだったとしたらですね、どうしてその客が彼女を殺したりしたんだろう? だってそんなことしたら誰が殺したかすぐにわかってしまうでしょう?」

「そのとおり」と文学は言った。「だから殺したのは顧客リストに載ってない人物ですね。彼女の個人的な恋人か、あるいはクラブを通さないで手数料をねこばばしていたか。どちらかはわからないですね。彼女のアパートを捜索してみました。でもヒントになりそうなものは何もみつからなかった。お手上げです」

「僕が殺したわけじゃない」と僕は言った。

「もちろんそれはわかってます。あなたじゃない」と文学は言った。「だから言ったでしょう、あなたが殺したんじゃないことはわかってるって。おたくは人を殺すタイプじゃないです。見たらわかる。人を殺さないタイプというのは、本当に人を殺さないんです。でもあなたは何かを知ってる。それはね、勘でわかるんだ。私らはプロですからね。だからね、教えてくれませんか? 教えてくれればそれでいいです。それでどうこうと固いことは言いませんよ。約束します。本当です」

何も知らない、と僕は言った。

CamScannerでスキャン

「やれやれ」と文学は言った。「駄目だな、これは。実を言うと上の方もあまり捜査に乗り気じゃないんです。ホテルで売春婦が殺されただけの事件ですからね、どうでもいいようなものなんです。連中にとっては。売春婦なんて殺された方がいいと思ってるくらいなんです、上の連中は。連中は死体なんて殆ど見たこともないんです。綺麗な女の子が裸で絞め殺されているのがどういうことなのか、彼らには想像もつかんのですよ。それがどれくらいかわいそうなことかというのがね。それからこの売春クラブには警察関係だけじゃなくて、どうも政治家筋がからんでいるらしい。ときどき闇の中で金バッジがきらっと光るんです。警察官というのはね、敏感なんですよ、この光に。ちょっとこれが光ると亀みたいに首をひっこめちまう。特に上の方がね。というわけで、どうもメイちゃんは殺され損ということになりそうな雲ゆきですね。かわいそうに」

ウェイトレスが文学のコーヒー・カップを下げた。僕は半分しか飲まなかった。

「私はね、あのメイっていう女の子にどういうわけか妙に親近感を感じたんですよ」と文学は言った。「どうしてだろうね。自分でもわからん。でもあの子がホテルのベッドで裸で絞め殺されてるのを見たときにね、私はこう思ったんだ。俺は絶対にこの犯人は捕まえてやるってね。もちろんね、そういう死体なんて我々はいやっていうほど見ている。今更死体を見てどうこうって思わんですよ。ばらばらだって、焼け焦げだって、何だって見てきた。しかしね、あの死体は何かしら特別だった。奇妙に美しかった。朝の光が窓から差し込んでね、そこにあの子が凍りついたみたいに横になっていた。目を見開いて、口の中で舌をもつれさせて、首にストッキングをまきつけられていた。ネクタイみたいにまきつけられてたんです。そして脚を開いて小便をもらしていた。それを見ていてね、私は感じたんですよ。この子は私に解決を求めているって。そして私が解決しないうちはずっとあの朝の空間の中で、あの奇妙な姿勢のままじっと凍てついているって。そうなんです。まだ凍りついているんです。あそこで。犯人があがって事件が解決

CamScannerでスキャン

しないことには、あの子は解きはなたれないんです。こういう感じ方って変ですかね？」
わからない、と僕は言った。
「あなた、しばらくいなかったけど、旅行でもしてたんですか？　ずいぶん日焼けしてますねえ」と刑事は言った。
仕事でハワイに行っていたのだ、と僕は言った。
「いいですね。うらやましいな。私もそういう優雅な仕事に鞍替えしたいね。明けても暮れても死体ばかり見てると人間が暗くなるものね。ねえ、死体って見たことありますか？」
ない、と僕は言った。
彼は首を振って時計を見た。「どうもどうも、時間を潰しちゃって申し訳なかったですね。でもまあ、袖振りあうも他生の縁って言いますからね。あきらめてください。私だってたまには誰かと個人的な話がしたくなる。ところでそれ何を買ったんですか、東急ハンズで？」
はんだごて、と僕は言った。
「私は排水管の掃除用品です。家の流しが詰まり気味なんです」
彼が喫茶店の勘定を払った。僕は自分の分を払うと主張したが、彼はどうしても受け取らなかった。
「まあいいじゃないですか。私が誘ったんだ。それにたかがコーヒー代です。気にすることもないでしょう」
喫茶店を出るときに僕はふと思いついて彼に質問してみた。こういう娼婦の殺人事件というのはよくあるのか、と。
「そうですねえ。まあどちらかというとよくある事件ですね」と彼は言った。目付きが少し鋭くなった。「毎日あるってわけでもないけど、盆と暮れにしかないってものでもない。売春婦殺しに何か興味でもあ

るんですか？」

別に興味なんかない、と僕は言った。ただちょっと聞いてみただけだ、と。

そして我々は別れた。

彼が行ってしまうと、胃の中に嫌な感触が残った。その感触は翌日の朝になってもまだ取れなかった。

CamScannerでスキャン

36

ゆっくりと空を流れる雲のように、五月が窓の外を過ぎ去っていった。

僕が仕事を取らなくなってからもう二ヵ月半になっていた。仕事の関係の電話も一時に比べれば随分数が減った。僕の存在は少しずつ世間から忘れられつつあるのだろう。当然のことながら銀行の口座にも金が入らなくなったわけだが、でも口座にはまだ十分に金が残っていた。僕はそれほど金がかかる生活を送っていない。食事も自分で作るし、洗濯も自分でする。何かとりたてて欲しいものがあるわけでもない。借金もないし、服やら車やらに凝る方でもない。だからまだ今のところ金の心配はしなくてもよかった。計算機を使って一ヵ月の大体の生活費を算出し、預金残高をそれで割ってみると、あと五ヵ月くらいはもちそうなことがわかった。五ヵ月あればまあなんとかなるだろう、と僕は思った。なんとかならなければまたその時に考えればいい。それに机の上には牧村拓がくれた三十万円の小切手がまだ手付かずで飾ってある。さしあたって飢え死にすることもあるまい。

僕は生活のペースを乱さないように心掛けながら、じっと何かが起こるのを待ち続けた。週に何度かプールに行ってくたくたになるまで泳ぎ、買い物をして食事をきちんと作り、夜は音楽を聴きながら図書館で借りてきた本を読んだ。

図書館で僕は新聞の縮刷版のページを繰って、この何ヵ月かに起こった殺人事件をひとつひとつ丁寧に調べた。もちろん女が殺された事件だけに限った。そういう視点から世界を見てみると、世の中では結構

多くの女が殺されていた。刺し殺されたり、殴り殺されたり、絞め殺されたりしていた。でもキキらしい女が殺された形跡はなかった。少なくとも彼女の死体は見つかってはいなかった。もちろん死体を見つからないようにする方法は幾つかある。足におもしをつけて海に放り込めばいい。あるいは山に運んでいって埋めればいい。僕がいわしを埋めたのと同じように。そうすれば誰にもみつからない。

あるいは事故かもしれない、と僕は思った。僕は事故のことも調べてみた。ディック・ノースと同じように、町で車にはねられて死んでしまったのかもしれない。女が死んだ事故。世の中には多くの事故があり、多くの女が死んでいた。交通事故があり、焼死があり、ガス中毒があった。でもそれらの被害者の中にキキらしい女は見当たらなかった。

自殺もあるな、と僕は思った。心臓発作でぱったりと死んでしまうことだってあるかもしれない。そこまでは新聞には載らない。世界にはあらゆる種類の死が満ちているし、それらの死がいちいち丁寧に新聞に報道されるわけではないのだ。いや、報道される死のほうが圧倒的に例外なのだ。大芸の人間はひっそりと死んでいく。

だから可能性はある。

キキは殺されてしまったのかもしれない。何かの事故に巻き込まれて死んだのかもしれない。自殺したのかもしれない。心臓発作で死んだのかもしれない。

でも何の確証もない。死んだという確証もないし、生きているという確証もない。

僕は時々気が向くとユキのところに電話をかけた。元気かい、と僕が訊くと、まあねと答えた。彼女はいつも心ここにあらずといったような、焦点の合わないぼんやりとした喋り方をした。その喋り方はどうも僕の気にいらなかった。

「なんてことないのよ」と彼女は言った。「良くもなく悪くもなく……普通よ。普通に生きてる」
「お母さんは？」
「……ぼんやりしてる。仕事もあまりしないの。一日椅子に座ってぼんやりしてるの。何だか気が抜けちゃったみたい」
「僕に出来ることはあるかな？　買い物とか？」
「買い物はおばさんがやってくれるからいいのよ、別に。配達もしてくれるし。私達ふたりはふたりでぼうっとしてるだけ。ねえ……ここにいるとなんだか時間が止まってるみたい。時間はちゃんと動いてる？」
「残念ながらちゃんと動いてるね。時はどんどん過ぎ去っていく。過去が増えて未来が少なくなっていく。可能性が減って、悔恨が増えていく」
ユキはしばらく黙っていた。
「声にあまり元気がないね」と僕は言った。
「そうかしら？」
「そうかしら？」と僕は繰り返した。
「何よそれ？」
「何よそれ？」
「真似しないでよ」
「真似じゃないよ。それは君自身の心のこだまだよ。コミュニケーションの欠落を証明するためにビョン・ボルグが激しく打ち返してるんだ。スマッシュ！」
「相変わらず変な人」とユキはあきれたような声で言った。「そんなの子供と同じじゃない」

「違うな。同じじゃない。僕のは深い内省と実証の精神にしっかりと裏打ちされてる。これはメタファーとしてのエコーだ。メッセージとしてのゲームだ。単なる子供の真似ごっことは質が違う」
「ふん、馬鹿みたい」
「ふん、馬鹿みたい」と僕は繰り返した。
「よしてよ、それ、もう！」とユキが怒鳴った。
「よすよ」と僕は言った。「また最初からやりなおそう。声にあまり元気がないね」
彼女は溜め息をついた。そして「うん。そうかもしれない」と言った。「ママと一緒にいるとね……どうしてもママの気分にひきずりこまれちゃうのよ。そういう意味ではあの人は強い人だから。影響力があるのね、きっと。あの人、まわりの人間がどうこうなんて全然考えてないから。自分のことしか考えてないのよ。そういう人って強いのよ。わかるでしょ？　それで巻き込まれちゃうの。知らないうちにそうなってるの。彼女がブルーだとね、私もブルーになるの。元気な時は私も触発されて元気なんだけど」
ライターで煙草に火をつける音が聞こえた。
「たまにはそこを出て僕と二人で遊んだ方がいいみたいだな」と僕は言った。
「そうかもしれない」
「明日そちらに迎えに行こうか？」
「うん、いいわよ」とユキは言った。「あなたと話して少し元気になったみたいな気がする」
「良かった」と僕は言った。
「良かった」とユキが真似をした。
「よせよ」
「よせよ」

「明日ね」と僕は言って真似をされないうちに電話を切った。

アメは確かにぼんやりとしていた。彼女はソファに座って綺麗に脚を組み、奥行きのない平板な目で膝の上に載せた写真雑誌を見ていた。まるで印象派の絵みたいな光景だった。窓は開いていたが風のない日だったのでカーテンも雑誌のページもそよとも動かなかった。僕が部屋に入ると彼女はほんのちょっとだけ顔を上げて頼りなさそうに微笑んだ。空気が揺れるような淡い微笑みだった。そして細い指を五センチほど上にあげて向かいの椅子に僕を座らせた。手伝いの女性がコーヒーを運んできた。

「荷物はディック・ノースの家に運んでおきました」と僕は言った。

「奥さんに会った？」とアメが訊いた。

「いいえ、会ってないです。玄関に出た人に荷物を渡しただけです」

アメは肯いた。「有り難う。とにかく」

「構いませんよ。何でもないことです」

彼女は目を閉じ、顔の前で両手を合わせた。それから目を開けて部屋の中をぐるりと見回した。部屋には僕と彼女しかいなかった。僕はコーヒー・カップを取って飲んだ。

アメはいつものダンガリのシャツによれよれのコットン・パンツという格好ではなかった。彼女は上品なレースのついた白いブラウスに淡いグリーンのスカートをはいていた。髪はきちんとセットされ、口紅もつけていた。美しい女性だった。いつもの溢れるようなバイタリティーは消えていたが、そのかわりに危うげなほど繊細な魅力が彼女のまわりをほんのりと蒸気のように包んでいた。その蒸気は今にもふらふらと揺れて消えうせてしまいそうに見えるのだが、ただそう見えるというだけのことで、いつまでもそれは彼女のまわりに漂っていた。彼女の美しさはユキの美しさとは全く違った種類のものだった。対極にあ

ると言ってもいいかもしれない。それは歳月と経験によって育てあげられ、磨かれた美しさだった。それは彼女の自己証明とも言うべき美しさだった。その美しさはいうなれば彼女自身だった。彼女はその美しさをきちんと把握し、自分自身の為に有効に使用する術を心得ていた。それに比べて、ユキの美しさは多くの場合無目的だったし、ある場合には彼女自身がそれを持て余していた。僕は時々思うのだけれど、美しく魅力的な中年の女性を見ることは人生における大きな喜びのひとつだ。

「どうしてだろう？」とアメは言った。空中に何かをぽつんと浮かべてじっとそれを眺めるような喋り方だった。

僕は黙って続きを待った。

「どうしてこんなに落ちこんじゃったんだろう？」

「人が一人死んだからでしょう。当然のことです。人が死ぬというのは大きな出来事です」と僕は言った。

「そうね」と彼女は力なく言った。

「でも——」と僕は言った。

アメは僕の顔を見た。そして首を振った。「あなた馬鹿じゃないわよね。私の言いたいことわかるでしょう？」

「こんなはずじゃなかったのに——ということですか？」

「そうね。まあ、そうだわね」

「たいした男じゃなかった。たいして才能もなかった。でも誠実な男だった。立派に責務を果たした。長い歳月をかけて手に入れた大事なものをあなたの為に捨てて、そして死んでいった。死んでから彼の良さがわかってきた」と僕は言おうと思った。でも言わなかった。ある種のことは口に出してはならないの

CamScannerでスキャン

だ。
「どうしてだろう?」と彼女はその空間に浮かべた何かを眺めながら言った。「どうして私と一緒になる男はみんな駄目になっていくんだろう? どうしてみんな変な方に変な方にと行っちゃうんだろう? どうして私には何も残らないんだろう? いったい何がいけないんだろう?」
それは質問ですらなかった。僕は彼女のブラウスの襟もとのレースを眺めていた。それは上品な動物の清潔な内臓のひだのように見えた。灰皿の中で彼女のセイラムが静かに狼煙のような煙を上げていた。煙はずっと上にのぼって分解し、沈黙の塵と同化した。
ユキが着替えをすませてやってきて、僕にねえ行こうと言った。僕は立ち上がって、そろそろ行きますとアメに言った。
アメは何も聞いていなかった。ユキが「ねえ、ママ、私たち出かけてくるわよ」と怒鳴った。アメは顔を上げて肯いた。そして新しい煙草を出して火をつけた。
「少しドライブしてくる。夕御飯はいらないから」とユキは言った。
我々はソファに座り込んだまま身動きひとつしないアメをあとに残して家を出た。その家の中にはまだディック・ノースの気配が残っているようだった。僕の中にも彼の気配は残っていた。僕は彼の笑顔をよく覚えていた。パンを切る時に足を使うのかと僕が訊いた時に彼が浮かべた本当におかしそうな笑顔を。まったく変な男だ、と僕は思った。死んでからの方が存在感がある。

37

そんな風に僕は何度かユキと会った。三度だ、正確に言うと。彼女は箱根の山の中で母親と二人きりで暮らすことに対してこれといった特別な感興は抱いていないようだった。そういう生活を楽しんでいるわけでもないし、かといって嫌がってもいなかった。ボーイフレンドが死んで母親が一人ぼっちになって落ち込んでいるので、なんとかその面倒を見なくてはというような思いも特にはないようだった。彼女は風に吹きよせられるようにただそこに運ばれ、存在しているだけだった。そこでの生活のあらゆる側面に対して彼女は無感動だった。

僕と会うと、ユキはその間だけ少し精気を取り戻した。冗談を言えば少しずつ反応が返ってきたし、声も以前のクールな緊張感を取り戻した。しかし箱根の家に帰るとまたもとの木阿弥だった。彼女の声には張りがなくなり、目つきは無感動になった。まるでエネルギーを節約するために自転をやめかけている惑星みたいに。

「ねえ、一度また東京で一人で暮らしてみたほうがいいんじゃないか?」と僕は言ってみた。「気分転換にさ。それほど長い間じゃなくていいんだ。三日か四日でいい、ちょっと環境を変えてみても悪くないよ。箱根にいるとだんだん元気がなくなっていくみたいだからさ。ハワイにいた時に比べると別人みたいに見えるよ」

「仕方ないのよ」とユキは言った。「あなたの言ってることはよくわかるわよ。でも今はこういう時期な

の。今はどこにいても同じなのよ」
「ディック・ノースが死んで、お母さんがああいう調子だから？」
「そうね、それもあるわね。でもね、それだけじゃないと思うの。ママから離れてそれが解決するというようなものでもないのよ。私の力ではどうしようもないの。何というのかな、結局のところそういう流れなのよ。星まわりがどんどん悪くなってるのよ。今は何処にいて何をしていても同じなの。体と頭がしっくりと結びつかないの」
僕らは海岸に寝転んで海を眺めていた。空はどんよりと曇っていた。生温かい風が砂浜に生えた草の葉を揺らせていた。
「星まわり」と僕は言った。
「星まわり」とユキは弱々しく微笑んで言った。「でも本当よ。悪くなってるの。私とママは何かそういう周波数が共通しているみたいね。この前も言ったように、ママが元気だと私も活発になるし、ママが落ち込んでくると私もだんだん駄目になってくるの。どっちが先なのかよくわからないこともあるけれど。つまり、ママが私を引っ張ってるのかあるいは私がママを引っ張っているのかがね。でもとにかく彼女と私は何かで繋がってるような気がするの。くっついていても、離れていても、同じなの」
「繋がってる？」
「そう、精神的に繋がってるの」とユキは言った。「ある時はそういうのが嫌になって反発するし、ある時はどうでもよくなってぐったりしちゃうの。あきらめちゃうの。時々、なんて言えばいいんだろう、自分自身をうまくコントロールすることができなくなることがあるの。何か外の大きな力に操られているような気がする。そうなると、どこまでが自分でどこからが自分じゃないのかがわからなくなってくる。だからあきらめちゃうの。何もかも放り出したくなるの。もう嫌だと思うの。私はまだ子供なのよ、と叫んで

部屋のすみっこにうずくまっていたくなっちゃうの」

僕は夕方に彼女を箱根の家に送り届け、そして東京に帰った。食事を一緒にしていかないかとアメに誘われたけれど、いつも断った。悪いとは思うけれど、彼女たち二人と食卓を共にするなんて僕にはとても耐えられそうになかった。とろんとした目つきの母親と、無感動な娘。死者の気配。重い空気。影響を与えるものと影響を受けるもの。沈黙。物音ひとつ聞こえない夜。そういう情景を想像しただけで胃が固くこわばってしまう。「不思議の国のアリス」に出てくる気違い帽子屋のお茶会の方がずっとましだった。そこには不条理なりにも一応動きというものがある。

僕はカー・ステレオで古いロックンロールを聴きながら東京に戻り、ビールを飲みながら夕食を作り、それを一人で静かに楽しく食べた。

*

ユキと会って二人で特に何かをしたというわけでもない。僕らは音楽を聴きながらドライブし、海岸に寝転んでぼんやり雲を眺めたり、富士屋ホテルでアイス・クリームを食べたり、芦ノ湖に行ってボートに乗ったりした。そして二人でぼそぼそといろんな話をしながら午後の時間を過ごし、一日また一日と月日が過ぎていくのを眺めていた。これじゃまるで年金生活者みたいだな、と僕は思った。

ある日、ユキが何か映画を見たいと言った。僕は小田原まで下りて新聞を買って調べてみたが、たいした映画はやっていなかった。二番館で五反田君の出る「片想い」をやっているだけだった。僕が五反田君は中学校の時の同級生で、今でもときどき会っていると言うと、ユキはその映画に興味を持ったようだった。

「あなたはその映画を見た？」
「見た」と僕は言った。でももちろん何回も見たことは黙っていた。何回も見たなんて言うとその理由をあらためて説明しなくてはならなくなってくる。
「面白かった？」とユキが訊いた。
「面白くない」と僕は即座に言った。「くだらない映画だよ。ごく控え目に表現して、フィルムの無駄遣いだ」
「お友達はなんて言ってるの、その映画について？」
「下らない映画で、フィルムの無駄遣いだと言ってる」と僕は笑って言った。「出演している人間が自分でそう言ってるからまず間違いないよ」
「でもそれ見てみたいわ」
「いいよ、じゃあ今から見に行こう」
「あなたはかまわないの？　二回見ても？」
「まあいいだろう。他にやることもないし、それに特に害になる映画でもないから」と僕は言った。「害にさえならないんだ」
僕は映画館に電話をかけて「片想い」の始まる時間を調べ、それまで城の中の動物園に行って時間を潰した。お城の中に動物園のある町なんて小田原以外にはまずないだろう。変わった町だ。僕らはだいたい猿を見ていた。猿を見ていると飽きない。おそらくその光景がある種の社会を連想させるからだろう。こそこそとしているのがいる。お節介なのがいる。向こう気の強いのがいる。よく太った醜い猿が山の上の方であたりを睥睨していたが、態度の高圧的な割にその目は脅えと猜疑に満ちていた。そして実に汚らしかった。どうやったらあんなにぶくぶくと太って醜く陰惨になれるんだろうと僕は不思議に思った。でも

CamScannerでスキャン

もちろん象に訊いてみるわけにもいかない。

平日の昼間だったから、映画館は言うまでもなくがらがらだった。椅子は固く、押し入れの中にいるみたいな匂いがした。僕は休憩時間にチョコレートを買ってユキに与えた。僕も何か食べようと思ったが、残念ながら僕の食欲をそそるようなものは売店にはひとつも置いてなかった。売り子の若い女の子も積極的に何かを売ろうというタイプではなかった。それで、ユキのチョコレートをひとかけらだけ食べた。チョコレートを食べたのは殆ど一年振りくらいだった。僕がそう言うとユキは「へえ」と言った。

「チョコレートが好きじゃないの？」

「興味が持てないんだ」と僕は言った。「好きでも嫌いでもない。ただ単に興味が持てない」

「変な人」とユキは言った。「チョコレートに興味が持てないなんて、精神に異常があるわよ」

「全然変じゃないよ。そういうことってある。君はダライ・ラマは好き？」

「何よ、それ？」

「チベットの一番偉い坊主だよ」

「知らないわよ、そんなの」

「じゃあ君はパナマ運河が好きかい？」

「好きでも嫌いでもないわよ」

「あるいは、君は日付変更線が好きか嫌いか？　円周率はどうだ？　独占禁止法は好き？　ジュラ紀は好きか嫌いか？　セネガル国歌はどう？　一九八七年の十一月八日は好きか嫌いか？」

「うるさいわね、もう。本当に馬鹿みたい。よく次から次へと思いつくわね」とユキはうんざりしたように言った。「わかったわよ、よく。あなたはチョコレートが嫌いでも好きでもなくて、ただ興味が持てないだけのことなのね。わかったわよ」

CamScannerでスキャン

「わかってくれればいいんだ」と僕は言った。

やがて映画が始まった。僕は筋を全部知っていたから、ろくに映画なんか見ないで考え事をしていた。ユキもこの映画をひどいと思っているようだった。時々溜め息をついたり、鼻を鳴らしたりするのでそれがわかった。

「馬鹿みたい」と彼女はたまりかねたように小さな声で囁くように言った。「どこの馬鹿がわざわざこんなひどい映画つくるのかしら？」

「当然の疑問だな」と僕は言った。「どこの馬鹿がわざわざこんなひどい映画をつくるんだろう？」

スクリーンの上ではハンサムな五反田君が授業をしていた。演技とはいえ彼の教え方は立派なものだった。はまぐりの呼吸法についての説明だったが、わかりやすく、親切で、ユーモアに溢れていた。僕は彼の授業を感心して眺めていた。主役の女の子も頬杖をついて教壇の上の彼をじっと見つめていた。何回も見たのにそのシーンを注意して見たのは初めてだった。

「あれがあなたの友達なの？」

「そう」と僕は言った。

「何だか馬鹿みたいに見えるけど」とユキは言った。

「たしかに」と僕は言った。「実物の方がずっときちんとしてる。実物はそれほどひどくない。頭も良いし、面白い男だよ。映画がひどすぎるんだ」

「ひどい映画に出なきゃいいのに」

「正論だ。でもそれにはいろいろと複雑な事情があるんだ。話すと長くなるから話さないけど」

映画は当然すぎるほど当然な筋を辿って凡庸に進展していった。台詞も凡庸なら、音楽も凡庸だった。タイム・カプセルに入れて「凡庸」というラベルを貼って土に埋めてしまいたいくらいのものだった。

CamScannerでスキャン

やがてキキの出てくる例のシーンになった。この映画のなかではかなり重要なポイントだ。五反田君がキキと寝ている。日曜の朝のシーン。

僕は深く息を吸い込んで、スクリーンに意識を集中した。ブラインドから差し込む日曜日の朝の光。そこにあるのはいつもいつも同じ光だ。同じ色、同じ角度、同じ明るさ。僕はその部屋の全てに精通している。その部屋の空気を吸い込むことだってできるのだ。そして五反田君が見える。彼の手がキキの背中を撫でている。とても優雅に、まるで記憶の繊細な溝を辿るようにそっと、キキの背中を撫でている。キキの体が敏感にそれに反応する。彼女は体をふっと震わせる。肌には感じられない微妙な空気の流れに蠟燭の炎が微かに揺らぐように。その震えは僕の息を詰まらせる。五反田君の指とキキの背中が大映しになる。やがてカメラが移動していく。キキの顔が見える。主人公の女の子がやってくる。彼女はアパートの階段を上り、とんとんとドアをノックし、開ける。どうして鍵がかかってないんだろうと僕は改めて疑問に思う。でもまあ仕方ない。これは何といっても映画なのだ。それも凡庸な映画なのだ。とにかく彼女はドアを開けて中に入る。そして五反田君とキキがベッドの上で抱き合っているのを目にする。彼女は目を閉じ息を止め、クッキーか何かが入った箱を落とし、走って行ってしまう。五反田君がベッドの上で身を起こし、茫然としてそれを見ている。キキが声をかける。「ねえ、どうしたっていうのよ?」

同じだ。いつもいつも同じだ。

僕は目を閉じ、頭の中にその日曜日の朝の光と、五反田君の指と、キキの背中をもう一度思い浮かべた。それは独立して存在する一個の世界であるように僕には感じられた。そういう世界が架空の時空間にぽっかりと浮かんで漂っているのだ。

気がついたとき、ユキは前屈みになって顔を伏せ、額を前の座席の背もたれの上に載せていた。両腕は寒さを防ぐかのようにしっかりと胸の前で組み合わされていた。彼女は音も立てず、ぴくりとも動かなか

った。息をしている気配すらなかった。彼女はまるでそこで凍りついて死んでしまったみたいに見えた。
「ねえ、大丈夫？」と僕は訊いた。
「あまり大丈夫じゃない」とユキは絞り出すような声で言った。
「とにかく外に出よう。どう、動けそう？」
ユキは小さく肯いた。僕は彼女の固くこわばった腕を取って映画館を出た。客席の通路を歩く我々の背後の画面では五反田君がまた教壇に立って生物の講義をしていた。外では細かい雨が音もなく降っていた。海の方から風が吹いているらしく、微かに潮の匂いがした。僕は彼女の肘を摑んで体を支え、車を停めた場所までゆっくりと歩いた。ユキはぎゅっと唇を嚙んで、何も言わなかった。僕も何も話しかけなかった。映画館から駐車した車まではせいぜい二百メートルほどの距離だったが、それはひどく長い道のりに感じられた。このまま永遠に歩き続けているんじゃないかという気がするくらいだった。

38

僕はユキを助手席に座らせ、窓をあけた。雨は静かに降り続いていた。はっきりと目には映らないくらいの細い雨だったが、それは少しずつアスファルトの路面を淡い墨色に染めていった。雨の匂いもした。傘を開く人もいれば、気にせずそのまま歩いていく人もいた。その程度の雨だ。風というほどの風もない。ただ静かにまっすぐに雨が空から降っているだけだった。僕はためしに手のひらをしばらく窓の外に出してみたが、少し湿ったような気がしただけだった。

ユキは窓枠に腕を置いてその上に顎を載せ、首をかしげるような格好で顔の半分を外に出していた。そしてそんな格好のまま長い間身動きひとつしなかった。呼吸にあわせて背中が規則的に揺れるだけだった。それはとても微かな揺れだった。ほんの少し息を吐くといった小さな呼吸だった。でもとにかくそれは呼吸だった。そんな後ろ姿を見ていると、ほんの少し力を加えただけで肘や首がぽきんと折れてしまいそうに思えた。どうしてこんなに脆く無防備に見えるんだろう、と僕は思った。それは僕が大人になったせいなのだろうか？　不完全ではあるにせよ僕なりに世界を生きのびていく術を僕は身につけ、この子がそれをまだ身につけていないからなのだろうか？

「何か僕にできることはあるかな？」と僕は訊いてみた。

「何もしなくていい」と小さな声でユキは言って、うつぶせになったまま唾を飲みこんだ。飲みこむときに不自然なくらい大きな音がした。「どこか人のいない静かなところに連れてって。あまり遠くないとこ

ろ」

「海でいい？」

「どこでもいい。でもゆっくり走らせてね。あまり揺れると吐いちゃうかもしれないから」

僕は彼女の頭を割れやすい卵を扱うようにそっと手で支えて車の中に入れ、ヘッドレストにもたせかけてから窓を半分閉めた。そして交通事情のゆるす限りゆっくりと車を運転し、国府津の海岸まで行った。海岸に車を停め、砂浜まで連れていくと、吐きたい、と彼女は言った。そして足下の砂浜の上に吐いた。胃の中にはたいしたものは入っていなかった。吐くべきものもろくになかった。どろりとしたチョコレートの茶色い液を吐いてしまうと、あとは胃液か空気くらいしか出てこなかった。一番苦しい吐き方だ。体が痙攣するだけで、何も出てこない。体がしぼりあげられているような気がする。胃がこぶしくらいの大きさに縮んでしまうように感じられる。僕は彼女の背中をそっとさすった。相変わらず霧のような雨が降り続いていたが、ユキは雨のことなんか気がつきもしないようだった。僕は指先で彼女の胃の後ろあたりを軽く押してみた。筋肉がまるで石化したように固くこわばっていた。彼女は夏物の綿のセーターと色褪せたブルージーンズにコンヴァースの赤いバスケットボール・シューズという格好で砂浜によつんばいになって、目を閉じていた。僕は彼女の髪が汚れないように束ねて後ろにまわし、背中をゆっくりと上下にさすり続けた。

「苦しい」とユキは言った。彼女の目には涙がにじんでいた。

「知ってる」と僕は言った。「よくわかってる」

「変な人」と彼女は顔をしかめながら言った。

「僕も前にそういう吐き方をしたことがある。とても苦しかった。だからよくわかる。でももうすぐ収まる。もう少し辛抱すれば終わる」

CamScannerでスキャン

彼女は肯いた。そしてまた体を痙攣させた。十分ほどで痙攣は引いた。僕は彼女のくちもとをハンカチで拭いてやり、吐いたものの上に足で砂をかけた。そして肘を取って彼女の体を支え、寄り掛かって座ることのできる堤防のところまで連れていった。

僕とユキは雨に濡れながらそのままずっとそこに座っていた。堤防にもたれ、西湘バイパスを走る車のタイヤ音に耳を澄ませ、海に降る雨を眺めていた。雨は細かいなりに降り始めた頃よりは少し勢いを増していた。海岸には釣り人が二、三人立っていたが彼らは僕らの方にはまったく注意を払わなかった。後ろを振り返りさえしなかった。彼らは鼠色のレイン・ハットをかぶり、雨具にしっかりと身を包み、大きな竿を旗印のように波打ち際に立ててじっと沖合を睨んでいた。彼らの他には人の姿は見えなかった。ユキは頭を僕の肩にぐったりともたせかけていた。何も喋らなかった。知らない人が遠くから見たら、きっと僕らのことを仲の良い恋人同士だと思ったことだろう。

ユキは目を閉じて、相変わらずとても静かに呼吸をしていた。まるで眠っているように見えた。湿りけを帯びた前髪が一房額の上にはりつき、呼吸にあわせて鼻腔が小さく震えた。顔には一月前の日焼けがまだ淡い記憶のように残っていたが、どんよりとした空の下では、それは何かしら不健康な色を帯びて見えた。僕はハンカチで雨に濡れた彼女の顔を拭き、涙の跡をとってやった。遮るものもない海の上に、雨は音もなく降り続いていた。ヤゴのような形をした自衛隊の対潜哨戒機が鈍い音をたてて何度も頭上を通り過ぎていった。

やがて彼女は目をあけ、僕の肩に頭を載せたまま澱んだ視線を僕に向けた。そしてズボンのポケットからバージニア・スリムを出して、マッチを擦った。火はなかなかつかなかった。マッチを擦る力がないのだ。でも僕は放っておいた。「今煙草を吸うのは良くない」とも言わなかった。彼女はやっと煙草に火を

つけ、マッチ棒を指で弾いて捨てた。そしてふたくち吸ってから顔をしかめて、煙草も同じように指で弾いて捨てた。煙草はコンクリートの上でしばらく燃えていたが、やがて雨に濡れて消えた。

「胃はまだ痛い？」と僕は訊いた。

「まだ少し」と彼女は答えた。

「じゃあもう少しここでじっとしてよう。寒くはない？」

「大丈夫。雨に濡れてた方が気持ちいいから」

釣り人たちは相変わらず太平洋を睨み続けていた。魚釣りのいったい何処が面白いんだろう、と僕は思った。たかが魚を釣るだけじゃないか？　どうしてそれだけのために雨の日に一日波打ち際に立って海を睨んでなくちゃならないのだろう？　でもそれは好きずきというものだ。神経症的な十三の女の子と海岸に並んで座って雨に濡れているのも物好きと言えばそれまでだ。

「あの、あなたのお友達だけど――」とユキは小さな声で言った。妙に固くこわばった声だった。

「友だち？」

「うん、さっきの映画に出ていた人」

「本名は五反田君っていうんだ」と僕は言った。「山手線の駅と同じだよ。目黒の先、大崎の手前」

「彼があの女の人を殺したのよ」

僕は目を細めてユキの顔を見た。彼女はひどく疲れた顔をしていた。息が乱れ、肩が不規則に上下していた。まるで溺れかけたところを助けあげられたばかりの人のように見えた。彼女が何を言っているのか、僕にはさっぱり見当がつかなかった。「殺した？　誰を？」

「あの女の人。日曜日の朝に彼と一緒に寝てた人」

僕はそれでもまだわけがわからなかった。僕の頭はどうしようもなく混乱していた。状況のどこかに間

曲った力が加えられている。そのおかげで本来の流れが損われている。しかしその間違った力がどこからどのようにやってきたのかを把握することができなかった。僕は半分無意識に微笑んだ。「あの映画じゃ誰も死なないよ。君は何か思い違いしてる」

「映画の話じゃない」実際のこの世界で、本当に殺したのよ。私ちゃんとわかるの」ユキはそう言って僕の腕をぎゅっと握りしめた。「怖かった。胃の中に何か重いものをぐっと突っ込まれたみたいだった。息ができないくらい苦しかった。怖くて息ができないの。ねえ、例のアレが来たのよ。わかるの、はっきりと。あなたのお友だちがあの女の人を殺したのよ。嘘じゃないわ。本当よ」

彼女が何を言っているのか僕にはやっと理解することができた。一瞬にして背筋が凍りついた。僕はそれ以上口をきくことができなかった。僕は暗闇の中でじっと体をこわばらせたままユキの顔を見ていた。いったいどうすればいいんだろう、と僕は思った。何もかもが致命的にいびつに歪んでいる。何もかもが僕の手に負いきれなくなってしまっている。

「ごめんね。こんなこと言うべきじゃなかったのかもしれない」とユキは言った。そして深い溜め息をついた。彼女は僕の腕を握りしめていた手をはなした。「正直いって、私にはわからないのよ。私はそれを事実だと感じるけれど、それが本当に事実なのかどうかは私にも確信が持てない。それにそんなこと言ったら、あなたも他のみんなと同じように私を憎んだり嫌ったりするようになるかもしれない。でも言わないわけにいかなかったのよ。でもそれが本当のことであるにせよ、ないにせよ、私にはそれがはっきり見えるし、私一人の中にそれを止めておくことなんてできないから。怖いのよ、すごく。自分一人でそれを抱えきれないの。だからお願い、私のことを怒ったりしないでね。あまり責められると、私駄目になっちゃうの」

「ねえ、責めてなんかいないから、落ち着いて話して」と僕はユキの手をそっと握って言った。「君にはそ

れが見えるの？」

「そうよ、はっきりとそれが見えるの。こんなの初めて。あの人が殺したの。映画の中の女の人を絞め殺したの。そしてあの車で死体を運んだの。ずっと遠くまで。あの車、あなたが一度私を乗せたイタリアの車よ。あの車、彼のでしょう？」

「そうだ。彼の車だ」と僕は言った。「ほかに何がわかる？　ゆっくり落ち着いて考えて。どんな細かいことでもいい。わかることがあったら教えてくれないかな？」

彼女は僕の肩から頭をどかせ、二、三度試すようにそれを左右に振った。そして鼻で深く息を吸った。

「たいしたことはわからない。土の匂い。シャベル。夜。鳥の声。それくらい。あの女の人を絞め殺して、あの車でどこかに運んで埋めた。それだけ。でもね、変な話だけれど、悪意というものがまるで感じられないの。犯罪というような感じがしないの。まるで儀式みたい。とても静かだわ。殺す方も殺される方もすごく静かなの。変な静けさ。私にはうまく表現できない。世界の端っこにいるみたいに静か」

僕は長い間目を閉じていた。僕はその静かな暗闇の中で考えをまとめようとしたが駄目だった。なんとか足を踏んばってそこに踏み留まろうとしたが、それも駄目だった。頭の中に記録された世界中の物事や事象が一瞬にしてばらばらにほどけてしまったような気がした。すべてが細かな断片として砕け、飛び散っていた。僕はユキの言ったことをただ単に受け入れた。そのまま信じたわけでもないし、信じなかったわけでもない。ただ僕は心の中に彼女の言葉を自然に滲みこませただけだった。それはあくまで可能性にすぎなかった。しかしその可能性の含んでいる力は圧倒的であり致命的だった。ただ彼女の口にしたその可能性が、この何ヵ月の間に僕の中に漠然と形成されていたある種の体制をばらばらに吹き飛ばしてしまったのだ。その体制は漠然として暫定的で、厳密に言えば実証性を欠いてはいたものの、それなりに確固とした存在感と均衡を身につけつつあったのだ。でもその存在感も均衡も今ではあとかたもなく消え失せ

ていた。

可能性はあるのだ、と僕は思った。そしてそう思った瞬間に何かが終わったような気がした。とても微妙に、そして決定的に、その何かは終わってしまったのだ。何かとはいったい何だ？　でも何も考えたくなかった。あとで考えよう、と僕は思った。でもとにかく、僕はまた孤独になった。雨の砂浜に十三歳の少女と二人で並んで腰かけながら、僕はたまらなく孤独だった。

ユキはそっと僕の手を握った。

ずいぶん長く彼女は僕の手を握っていてくれた。小さな温かい手だったが、何かしら現実のものには思えなかった。その温かい小さな感触は過去の記憶の再現にすぎないように感じられた。記憶なのだ、と僕は思った。温かい。でもそれは何も救うことができないのだ。

「帰ろう」と僕は言った。「家まで送るよ」

僕は彼女を箱根の家まで送った。僕も彼女も口をきかなかった。沈黙が耐えられなかったので、目についたテープをカー・ステレオに入れてかけた。何か音楽が流れたが、それが何の音楽なのかさっぱりわからなかった。僕は運転に意識を集中した。僕は手と足の動きをきちんと把握し、掌握しながら、細かくギヤを変え、注意深くハンドルを握った。ワイパーがかた・かた・かた・かたと単調な音をたてた。

僕はアメに会いたくなかったので、家の階段の下でユキと別れた。

「ねえ」とユキは言った。彼女は運転席の窓の外で、寒そうにしっかりと腕組みをして立っていた。「私の言ったことをそのまま鵜呑みにしないでね。私にはただそれが見えただけなのよ。さっきも言ったように何が確実なことかなんて、私には全然わからないのよ。ねえ、私のことをそれで憎んだりしないでね。あなたに憎まれたりしたら、私どうしようもなくなっちゃうから」

「憎んだりしないよ」と僕は微笑んで言った。「君の言ったことを鵜呑みにもしない。でもいずれにせよ、

CamScannerでスキャン

いつかは本当のことが現れてくる。霧が引くようにそれは現れてくるんだ。僕にはそれがわかるんだ。もし君の言ったことが本当だとしても、たまたま君を通してその真実が姿をあらわしただけなんだ。君のせいじゃない。君のせいじゃないことはよくわかっている。いずれにせよ、とにかく僕は自分でそれを確かめてみる。そうしないことには何もかたづかない」

「彼に会うの？」

「もちろん会う。そして直接訊いてみる。それしかないさ」

ユキは肩をすぼめた。「私のことを怒ってない？」

「怒ってないよ、もちろん」と僕は言った。「君のことを怒るわけがないじゃないか。君は何も間違ったことをしていない」

「あなたすごく良い人だったわ」と彼女は言った。ヽヽヽヽヽどうして過去形で話すんだ、と僕は思った。「あなたみたいな人に会ったのは初めて」

「僕も君みたいな女の子に会ったのは初めてだ」

「さよなら」とユキは言った。そして僕をじっと見た。彼女は何となくもじもじしていた。何かつけ加えて言うか、僕の手を握るか、あるいは頰にキスするかしたそうに見えた。でももちろんそんなことはしなかった。

帰りの車の中には彼女のそんなもじもじとした可能性が漂っていた。僕はわけのわからない音楽を聴き、前方にしっかりと神経を注ぎながら車を運転して、東京にもどった。東名高速を出るあたりで雨がやんだ。でも僕は渋谷のいつもの駐車場に車を停めるまで、ワイパーを切り忘れていた。雨が止んだのには気がついたのに、ワイパーを止めることに気がまわらなかったのだ。頭が混乱している。何とかしなくちゃいけない。僕は駐車したスバルの中でハンドルを握ったまま長い間ぼんやりとしていた。ハンドルから

CamScannerでスキャン

手をもぎはなすのに結構時間がかかった。

39

気持ちを整理するのにはもっと長い時間がかかった。

まず一番最初にユキの言ったことを信じるか信じないかという問題があった。僕はそれを純粋な可能性の問題として分析してみた。感情的な要素を見わたせる限りのフィールドから徹底的に排除した。それはさして困難な作業ではなかった。僕の感情はそもそもの最初から蜂に刺されたみたいにぼんやりと麻痺していたからだ。可能性はある、と僕は思った。そして時間が経つにつれて、その可能性は僕の中でどんどん膨らみ、増殖し、ある種の確かさを帯びていった。その流れには抗うことのできない確かな勢いがあった。僕は台所に立って湯を沸かし、コーヒーの豆を挽き、時間をかけて丁寧にコーヒーをいれた。食器棚からカップを出し、コーヒーを注ぎ、ベッドに腰かけてそれを飲んだ。そしてそれを飲み終える頃には、可能性は殆ど確信に近いものに変わっていた。おそらくそのとおりだろう、と僕は思った。ユキは正確なイメージを見たのだ。五反田君がキキを殺してどこかに死体を運んで埋めるか何かしたのだ。

不思議だ、と僕は思った。そこには何の確証もないのだ。ただ感じやすい十三歳の少女が映画を見てそう感じたというだけのことなのだ。でもどういうわけか僕は彼女の言ったことに対して疑念をはさむことができなかった。もちろんショックはあった。でも僕はユキの見たイメージを殆ど直観的に受け入れたのだ。どうしてだろう？　何故そんなに確信が持てるのだ？　わからない。

でもわからないなりにとにかく僕はそこから話を進めることにした。

話を進める。次の問題。何故五反田君がキキを殺さなくてはならなかったのだろう？

わからない。次の問題。メイを殺したのもやはり彼なんだろうか？　もしそうだとしたら、それは何故だ？　何故五反田君がメイを殺さなくてはならなかったのだ？

やはりわからない。どれだけ考えてみても、五反田君がキキを、あるいはキキとメイの両方を、殺さなくてはならない理由は思いつけなかった。ひとつとして思いつけない。

わからないことが多すぎた。

結局のところユキにも言ったように僕が五反田君に会って、直接訊いてみるしかないのだ。でもいったいどういう風に切りだせばいいのだろう？　僕は自分が彼に向かって「君がキキを殺したのか？」と質問する情景を想像してみた。それは何だか馬鹿げていたし、どう考えてもグロテスクだった。そして汚らしい。そういうことを口にする自分を想像しただけで吐き気がするほど汚らしく感じられた。そこには明らかに何か間違った要素が含まれている。でもそれをやらないことには、前に進めないのだ。適当に事実をぼかしたまま成り行きを見るというわけにはもういかないのだ。今の僕は選り好みできる立場にはないのだ。グロテスクであるにせよ、間違った要素が含まれているにせよ、それはやらなくてはならないことなのだ。やらなくてはならないことは、きちんとやらなくてはならないのだ。僕は何度か五反田君に電話をかけようとした。でも駄目だった。僕はベッドに腰掛け、深呼吸し、電話機を膝に載せてダイヤルをゆっくりと回した。しかしいつも最後までその番号を回しきることはできなかった。僕はあきらめて受話器を戻し、そのままベッドに寝転んで天井を眺めた。五反田君の存在は僕にとって、僕が考えていたよりずっと大きな意味を持っていたのだ。そう、僕と彼は友達だったのだ。彼がもしキキを殺していたとしても、それでも彼は僕の友達なのだ。そして僕は彼を失いたくないのだ。僕は既にあまりに多くのものを失ってきたのだ。駄目だ。どうしても電話ができない。

僕は留守番電話装置のスイッチを入れて、電話が鳴っても絶対受話器を取らなかった。もし五反田君から今電話がかかってきても、今のままでは彼に対して何と言えばいいのかわからなかったからだ。一日に何度か電話のベルは鳴った。誰からの電話かはわからない。ユキかもしれない、ユミヨシさんかもしれない。でもとにかく僕はその呼び掛けに応じなかった。それが誰からのものであるにせよ、今のところ僕は誰とも話をする気になんかなれなかった。僕は電話が鳴るたびに、電話局に勤めていたガールフレンドのことを思い出した。「月へ帰りなさい、君」と彼女は僕に言った。本当だ、君の言うとおりだ、と僕は思った。僕はたしかに月に帰った方がいいのかもしれない。ここの空気は僕にはいささか濃すぎる。ここの重力は僕にはいささか重すぎる。

四日か五日、僕はじっと考えつづけていた。何故だ、と。僕はその間ほんの少しだけ食べ、ほんの少しだけ眠り、一滴の酒も飲まなかった。体の機能を上手く把握できないような気がしたので、外にも殆ど出なかった。様々な物が失われていく、と僕は思った。失われ続けている。いつも一人で取り残されてしまう。こんな風に、いつもこんな風に。僕も五反田君もある意味では同じような種類の人間なのだ。状況も違う、考え方や感じ方も違う。でも我々は同じ種類の人間なのだ。我々はどちらも失い続ける人間なのだ。そして僕らは今お互いを失おうとしている。

僕はキキのことを考えた。僕はキキの顔を思い出した。「どうしたっていうのよ」と彼女は言った。彼女は死んでいて、穴に横たわり、その上から土がかけられた。死んだいわしと同じように。結局のところキキは死ぬべくして死んでしまったのだという気がした。不思議な感じ方だったが、僕にはそういう風にしか感じられなかった。僕が感じたのは諦めだった。広大な海面に降りしきる雨のような静かな諦めだった。僕は哀しみをさえ感じなかった。魂の表面にそっと指を走らせるとざらりとした奇妙な感触があった。すべては音もなく過ぎ去っていくのだ。砂の上に描かれたしるしを風が吹きとばしていくように。そ

れは誰にも止めようがないことなのだ。
つもこれで、おそらく、また死体がひとつ増えた。鼠、メイ、ディック・ノース、そしてキキ。これで四つだ。残りはあと二つ。これ以上誰が死ぬんだ？ でもどうせみんないつか死ぬんだ、と僕は思った。遅かれ早かれ。そして白骨となって、あの部屋に運ばれるんだ。様々な種類の奇妙な部屋が僕の世界に結びついていた。ホノルルのダウンタウンの、あの死体を集めた部屋。札幌のホテルの、暗く冷やかな羊男の部屋。そして五反田君がキキを抱いていたあの日曜日の朝の部屋。いったい何処までが現実なんだろう、と僕は思った。僕は頭がどうかしてしまっているのだろうか？ 俺はまともなんだろうか、と。あらゆる出来事が非現実の部屋で起こって、それが徹底的にデフォルメされて現実の中に持ち込まれたみたいに感じられた。いったい何がオリジナルの現実なんだろう？ 考えれば考えるほど、真実が僕から遠ざかっていくように感じられた。雪の降りしきるあの三月の札幌は現実だったのだろうか？ それは非現実に見えた。ディック・ノースと二人でマカハの海岸に座っていたことは現実なんだろうか？ それも非現実に見えた。それに類することはあったと思うのだが、それはオリジナルの現実ではないような気がした。だって片腕の男にどうしてあんなに綺麗にパンが切れるのだ？ どうしてホノルルのコールガールがキキの案内した死の部屋の電話番号を僕に書き残していくのだ？ でもそれは現実であるはずだった。何故ならそれが僕の記憶している現実だからだ。それを現実としてみとめなくなったら、僕の世界認識そのものが揺らいでしまうことになる。

僕の精神は狂いを見せ、病んでいるのだろうか？

それとも現実が狂いを見せ、そして病んでいるのだろうか？

わからない。わからないことが多すぎる。

でもいずれにせよ、どちらが狂ってどちらが病んでいるにせよ、僕はこの中途半端なまま放置された混

乱の状況をきちんと整理しなくてはならなかった。そこに含まれているものが哀しみであれ、怒りであれ、諦めであれ、僕はとにかくそこに終止符を打たなくてはならないのだ。それが僕の役割なのだ。それがあらゆる物事が僕に示唆してきたことだった。そのために僕は様々な人々と出会い、この奇妙な場所にまで運ばれてきたのだ。

さて、と僕は思った。もう一度ダンスのステップを取り戻すのだ。みんなが感心するくらい上手く踊らなくてはならない。ステップ、それが唯一の現実なのだ。それはきちんと決まっていることなのだ。考えるまでもない。それは僕の頭の中に一〇〇パーセントの現実として刻みこまれている。踊るのだ。すごく上手に。五反田君に電話をかけて、こう訊くのだ。「ねえ、君がキキを殺したのか?」と。

でも駄目だった。手が動かないのだ。電話機の前に座っただけで僕の心はどうしようもなく震え混乱した。強い横風を受けた時のように、僕の体は揺らぎ、息をすることさえ困難になった。僕は五反田君が好きだったのだ。彼は僕の唯一の友人であり、そして僕自身だった。五反田君は僕という存在の一部だった。僕には彼のことが理解できるのだ。僕は何度もダイヤルを回し間違えた。何度やっても正確な数字の配列を辿ることができなかった。そして五回目か六回目で僕は受話器を床に放り投げた。駄目だ、僕にはできない。どうしてもうまくステップが踏めない。

部屋の中の静けさは僕をたまらない気持ちにさせた。電話のベルの音を聞くのも嫌だった。僕は外に出て、街を歩き回った。まるでリハビリテーションの患者みたいに足の動かし方や、道路の横断の仕方をひとつひとつ確かめながら。そして人込みに混じって歩き、公園に座って人々の姿を眺めた。僕はたまらなく孤独だった。僕は何かにつかまりたいと思った。しかしまわりを見回しても、つかまるべきものは何もなかった。つるりとして捉えどころのない氷の迷宮の中に僕はいた。闇は白く、音はうつろに響いた。僕は泣きたかった。でも泣くことさえできなかった。そう、五反田君は僕自身なのだ。そして僕は僕自身の

一部を失おうとしているのだ。
結局僕は五反田君に電話をかけることはできなかった。電話をかけられるようになる前に、五反田君が僕のアパートを訪ねてきたのだ。
それはまた雨の夜だった。五反田君は二人で横浜に行った時と同じ白いトレンチ・コートを着て、眼鏡をかけ、コートと同じ色のレイン・ハットをかぶっていた。かなり強い雨だったが、傘はさしていなかった。帽子からは水滴がしたたり落ちていた。彼は僕の顔を見るとにっこりと微笑んだ。僕も反射的に微笑んだ。
「ひどい顔してる」と彼は言った。「電話しても誰も出ないから直接来てみたんだ。具合でも悪かったの？」
「あまり良くはなかったね」と僕はゆっくりと言葉を選んで言った。
彼は目を細めてしばらく僕の顔を検分していた。「じゃあまた出直してこようか？　何だかその方がいいみたいだな。いずれにせよ、こういう風に直接訪ねて来るのは良くなかったね。君が元気になったらまた会おう」
僕は首を振った。そして息を吸い込んで言葉を捜した。言葉はなかなか出てこなかったが五反田君はじっと待っていてくれた。「いや、体がどうこうっていうんじゃないんだ」と僕は言った。「あまり寝なかったし、あまり食べなかったから疲れてるように見えるだけだよ。もう大丈夫だし、君に話もある。外に出よう。久し振りにまともな食事がしたい」
僕と彼はマセラティに乗って街に出た。マセラティは僕を緊張させた。雨に滲んだ色とりどりのネオンの中を、彼はしばらくあてもなく車を走らせた。五反田君のギヤ・チェンジはスムーズで正確だった。車はかたりとも震えなかった。加速は優しく、ブレーキは静かだった。街の騒音が切り立った谷のように

我々のまわりにそびえていた。

「何処がいいかな。ロレックスをつけた業界の人間に会う恐れがなくて、二人で静かに話ができて、まともなものの食える店」と彼は言って、僕の方をちらりと見た。でも僕は何も言わずぼんやりと外の景色を眺めていた。三十分ほどぐるぐると走ってから、彼はあきらめた。

「やれやれ、どういうわけか全然思いつけないいや」と五反田君は溜め息をついて言った。「君の方はどう、どこか知ってるところはある?」

「いや、僕も駄目だ。何も思いつけない」と僕は言った。本当に何も思いつけなかった。頭がまだうまく現実に接続されていないのだ。

「オーケー、じゃあ逆の考え方をしようじゃないか」と五反田君はよく通る明るい声で言った。

「逆の考え方?」

「徹底的にうるさいところに行こう。そうすればかえって二人だけで落ち着いて話ができるんじゃないかな?」

「悪くないけど、例えば何処?」

「シェーキーズ」と五反田君は言った。「ピッツァでも食べないか?」

「僕は別に構わない。ピッツァは嫌いじゃない。でもそんなところに行って、君の顔は割れないかな?」

五反田君は力なく微笑んだ。木の葉の間からこぼれる夏の夕暮れの最後の光のような微笑みだった。

「君はこれまでシェーキーズで有名人を見掛けたことある?」

週末だったので、シェーキーズは混んでいて、うるさかった。バンド・スタンドがあって、そこで揃いのストライプのシャツを着たディキシーランド・ジャズのバンドが「タイガー・ラグ」を演奏し、ビールを飲みすぎたらしい学生の団体がそれに負けじと声を張り上げていた。薄暗かったし、誰も僕らになんか

注意を払わなかった。ピッツァの焼ける香ばしい匂いが店内に漂っていた。僕らはピッツァを注文し、生ビールを買って、いちばん奥の派手なティファニー・ランプの下がったテーブルに座った。

「ほらね、僕の言った通りだろう？　気楽だし、かえって落ち着く」と五反田君が言った。

「そうだね」と僕は認めた。確かに話がしやすそうだった。

僕らは何杯かビールを飲み、それから焼きあがった熱いピッツァを齧った。僕は久し振りに空腹感を感じた。ピッツァが食べたくなることなんて余りないのだが、一口食べてみると世の中にこれ以上美味いものはないような気がした。僕はたぶんすごく空腹だったのだろう。五反田君も腹が減っていたらしく、我々は何も考えずに黙々とビールを飲み、ピッツァを食べた。ピッツァがなくなってしまうと、もう一杯ずつビールを買って飲んだ。

「美味い」と彼は言った。「三日前からずっとピッツァが食べたかったんだ。ピッツァの夢まで見たよ。オーブンの中でね、じりじりと音をたててピッツァが焼けているんだ。夢の中で僕はただじっとそれを見ている。ただそれだけの夢。始めもないし、終わりもない。ユングだったらどう解釈するだろう？　僕だったら『僕はピッツァが食べたいんだ』と解釈するけどね。さて、僕に何の話があるのかな？」

さあ今だ、と僕は思った。でもうまく切り出すことができなかった。五反田君はとてもリラックスして、夜を楽しんでいるように見えた。僕は彼のイノセントな微笑みを見ると、うまく言葉が出てこなかった。駄目だ、と僕は思った。今はとても切り出せない。少なくとも今は駄目だ。

「君の方はどうなんだ？」と僕は言った。おい、そんな風にずっと後回しにはしつづけられないんだぞ、と僕は思った。でも駄目だった。切り出せない。どうしても駄目だ。「仕事のこととか、奥さんのこととか？」

「仕事は相変わらずだね」と五反田君は唇を曲げて笑いながら言った。「相変わらずだよ。僕のやりたい

仕事は来ない。やりたくない仕事はいっぱい来る。雪崩みたいにいっぱい来る。雪崩にむかって大声で怒鳴っても誰にも聞こえない。喉が痛くなるだけだよ。女房のことは——しかし変なものだな、もう別れたのにずっと女房って呼んでるなんてね——女房とはあれから一度だけ会った。ねえ、君はモテルとかラブ・ホテルとかで女と寝たことある？」

「あまりないね。殆どない」

五反田君は首を振った。「あれは変なものだよ。あれが続くとね、疲れるんだ。部屋の中はとても暗い。窓が塞いであるんだ。やるための部屋だからね、窓なんて要らないんだ。光なんて入ってこなくていいんだ。早い話、風呂とベッドさえあればいいようなものなんだよ。あとはBGMとTVと冷蔵庫。それでいい。即物的なんだ。必要なものしか置いてない。もちろんやるには便利なところだ。僕はそういうところで女房とやってる。まさにやってるっていう感じだね。うん、彼女とやるのは素敵だよ。落ち着くし、楽しいんだ。優しい気持ちになれる。終わったあとでずっと優しく抱き締めていてやりたいという気分になる。でもね、光が差し込まないんだ。密閉されているんだ。何もかもが人工的なんだよ。あんなところ、僕は全然好きになれない。でもそこでしか女房と会うことができない」

五反田君はビールを一口飲み、紙ナプキンでくちもとを拭った。

「僕のマンションの部屋に彼女を連れてくるわけにはいかない。そんなことしたらあっという間に週刊誌にばれちゃう。本当だよ。あいつらはそういうことってすぐに嗅ぎつけるんだ。どうしてかはわからないけど、わかっちゃうんだ。二人で何処かに旅行するってわけにもいかない。そんなまとまった時間はとれない。だいいちどこに行ったってすぐに顔が割れる。僕らはプライバシーの切り売りをしているようなものだからね。結局どっかの安っぽいモテルに行くしかないんだ。まったくこんなのってさ……」五反田君はそこで話しやめて僕の顔を見た。そして微笑んだ。「また愚痴だ」

「構わないよ。愚痴だろうが何だろうが、話したいだけ話せばいいよ。僕はずっと聞いてる。今日のところ、僕は喋るより聞いてる方が楽だから」

「いや、今日だけじゃないさ。君はいつも僕の愚痴を聞いている。僕は君の愚痴を聞いたことがない。他人の話を聞く人間ってあまりいないんだよ。みんな話したがる。たいした話もないくせにね。僕もその一人だけど」

ディキシーランドのバンドは「ハロー・ドリー」を演奏していた。僕と五反田君はしばらくそれに耳を傾けていた。

「ねえ、もっとピッツァを食べないか？」と五反田君が僕に訊いた。「あと半分ずつなら食べられるだろう。どういうわけか、今日はやけに腹が減ってる」

「いいよ、僕もまだ腹が減ってる」

彼がカウンターに行ってアンチョビのピッツァを注文してきた。そしてピッツァが焼きあがると僕らはまた何も言わずに黙々と、そのアンチョビのピッツァを半分ずつ食べた。学生の団体はまだ大声で騒いでいた。やがてバンドが最後のステージを終えた。バンジョーやトランペットやトロンボーンがそれぞれのケースに仕舞いこまれ、ミュージシャンたちは舞台から消えていった。あとにはアップライト・ピアノが一台残っているだけだった。

ピッツァを食べ終えたあとでも、僕らはしばらく何も言わずに空っぽのステージをじっと眺めていた。音楽が消えると、人々の話し声が奇妙な硬質さを帯びたように感じられた。それは漠然とした硬質さだった。実体が柔らかいのに、存在の状況が硬質なのだ。そばに来るまではとても固そうに見える。でも体に当たると柔らかく砕けてしまう。それは波のように僕の意識を打っていた。ゆっくりとやってきて意識を打ち、そしてひいていった。それが何度も何度も繰り返された。僕はしばらくその波の音に耳を澄ませて

「構わないよ。愚痴だろうが何だろうが、話したいだけ話せばいいよ。僕はずっと聞いてる。今日のところ、僕は喋るより聞いてる方が楽だから」

「いや、今日だけじゃないさ。君はいつも僕の愚痴を聞いている。僕は君の愚痴を聞いたことがない。他人の話を聞く人間ってあまりいないんだよ。みんな話したがる。たいした話もないくせにね。僕もその一人だけど」

ディキシーランドのバンドは「ハロー・ドリー」を演奏していた。僕と五反田君はしばらくそれに耳を傾けていた。

「ねえ、もっとピッツァを食べないか？」と五反田君が僕に訊いた。「あと半分ずつなら食べられるだろう。どういうわけか、今日はやけに腹が減ってる」

「いいよ、僕もまだ腹が減ってる」

彼がカウンターに行ってアンチョビのピッツァを注文してきた。そしてピッツァが焼きあがると僕らはまた何も言わずに黙々と、そのアンチョビのピッツァを半分ずつ食べた。学生の団体はまだ大声で騒いでいた。やがてバンドが最後のステージを終えた。バンジョーやトランペットやトロンボーンがそれぞれのケースに仕舞いこまれ、ミュージシャンたちは舞台から消えていった。あとにはアップライト・ピアノが一台残っているだけだった。

ピッツァを食べ終えたあとでも、僕らはしばらく何も言わずに空っぽのステージをじっと眺めていた。音楽が消えると、人々の話し声が奇妙な硬質さを帯びたように感じられた。それは漠然とした硬質さだった。実体が柔らかいのに、存在の状況が硬質なのだ。そばに来るまではとても固そうに見える。でも体に当たると柔らかく砕けてしまう。それは波のように僕の意識を打っていた。ゆっくりとやってきて意識を打ち、そしてひいていった。それが何度も何度も繰り返された。僕はしばらくその波の音に耳を澄ませて

いた。僕の意識は僕自身から離れてひどく遠くにあった。遠い波が、遠い意識を打っていた。

「どうしてキキを殺したの？」と僕は五反田君に訊いてみた。訊こうと思って訊いたわけではない。それはふと口をついて出てしまったのだ。

彼はずっと遠くにある何かを見るような視線で僕の顔を見た。唇が少し開いて、その間から白い綺麗な歯が見えた。長い間、彼は僕の顔をじっと見ていた。喧騒が僕の頭の中で大きくなったり小さくなったりした。まるで現実との接触が近づいたり離れたりしているみたいに。彼の端正な十本の指がテーブルの上にきちんと組み合わされていたのを覚えている。現実との接触が遠く離れると、それは精巧な細工みたいに見えた。

それから彼は微笑んだ。とても静かな微笑みだった。

「僕がキキを殺したのか？」と彼はゆっくりと言葉を区切るようにして言った。

「冗談だよ」と僕も微笑んで言った。「ただ何となくそう言ってみただけだよ。ちょっと言ってみたかったんだ」

五反田君は視線をテーブルの上に落として、自分の手の指を見ていた。「いや冗談なんかじゃないよ。それはとても大事なことなんだ。きちんと考えなくちゃならないことだ。僕はキキを殺したのか？　真剣に考えなくちゃならない」

僕は彼の顔を見た。くちもとは微笑んでいたが、目は真剣だった。彼は冗談を言っているわけではないのだ。

「何故君がキキを殺す？」と僕は質問した。

「何故僕がキキを殺すか？　何故だろう、僕にもそれがわからない。何故殺したんだろう？」

「ねえ、よくわからないな」と僕は笑って言った。「君はキキを殺したのか、それとも殺してないのか？」

「だからそれについて考えているんだよ。僕はキキを殺したのか、それとも僕はキキを殺してないのか？」

五反田君はビールをひとくち飲み、グラスをテーブルに置いて、頬杖をついた。「僕にも確信が持てないんだ。こういう言い方って、馬鹿馬鹿しいと思うだろう？　でも本当なんだよ。確信が持てない。僕はキキを絞め殺したような気がするんだ。あの僕の部屋で僕はキキの首を絞めた。そういう気がする。どうしてだろう？　どうして僕はあの部屋にキキと二人きりでいたんだろう？　僕は彼女と二人きりになんかなりたくなかったのにね。でも駄目だ、思い出せない。とにかく僕はキキと二人で僕の部屋にいた。——僕は彼女の死体を車で運んで何処かに埋めた。どこかの山の中に。でもそれが事実だという確信が持てない。本当に起こったことだとは思えない。気がするっていうだけなんだ。証明できない。それについて僕はずっと考えていた。でも駄目なんだ。わからない。肝心なことが空白の中に呑みこまれている。何か具体的な証拠がないかと考えてみる。たとえばシャベル。僕は彼女を埋めるのにシャベルを使ったはずだ。それがみつかれば、現実だってわかる。でもそれも駄目だ。ばらばらになった記憶を辿ってみる。僕は何処かの園芸店でシャベルを買った。そしてそれを使って穴を掘って彼女を埋めた。シャベルは何処かに捨てた。そういう気がする。でも細かいところが思い出せない。何処でシャベルを買って、どこでそれを捨てたんだろう？　証拠がないんだ。だいいち、僕は彼女を何処に埋めたんだろう？　ただ山の中としか覚えてないんだ。それは夢みたいにきれぎれなんだ。話があっちに行ったかと思うとこっちに来る。錯綜している。順番通りに辿っていけないんだ。記憶はあるよ。でもそれは本当の記憶なんだろうか？　あるいはそれはあとから僕が状況にあわせて適当にこしらえたものなんだろうか？　僕はどうかしていると思う。女房と別れてから、その傾向はますますひどくなってきた。疲れている。そして絶望している。絶望的に絶望している」

僕は黙っていた。しばらく間があった。五反田君が続けた。

「いったいどこまでが現実なんだろう？　どこまでが妄想なんだろう？　どこまでが真実なんだろう？　そしてどこからが演技なんだろう？　そしてどこからが妄想なんだろう？　僕はそれを確認したかった。こうして君とつきあっているうちにそれがわかるんじゃないかという気がした。君が僕にキキのことを最初に尋ねた時から僕はずっとそう思っていたんだ。君が僕のこの混乱を解消してくれるんじゃないかってね。まるで窓を開けて冷たい新鮮な空気を入れるみたいにさ」彼はまた指を組んだ。そしてその指をじっと見ていた。「でももし僕がキキを殺したとしたら、それはどうしてだろう？　僕にはキキを殺すどんな理由があるんだろう？　僕は彼女のことが好きだった。彼女と寝るのが好きだった。僕が絶望している時に、彼女とメイが僕の唯一の息抜きだった。それなのに、何故殺すんだろう？」

「君はメイも殺したの？」

五反田君は長いあいだテーブルの上においた自分の両手をじっと見ていた。そして首を振った。「いや、僕はメイを殺してはいないと思う。あの夜の僕にはありがたいことにきちんとしたアリバイがある。TV局で夕方から真夜中までアテレコをやって、それからマネージャーと一緒に車で水戸まで行った。だから間違いはないんだ。もしそうじゃなかったら、もし誰かがその夜ずっと僕が放送局にいたことを証明してくれなかったら、僕は自分がメイを殺したかもしれないと真剣に悩んでいたと思う。でもね、それでも何だか僕はメイの死にたいしてもたまらなく責任を感じるんだ。どうしてだろう？　しっかりとしたアリバイがあるというのに、なんだかまるで僕自身がこの手で彼女を殺したように感じられる。僕のせいで彼女が死んだんだっていう気がする」

また間があった。沈黙が長く続いた。彼はずっと自分の十本の指を見ていた。

「君は疲れてるんだよ」と僕は言った。「それだけだよ。君はたぶん誰も殺してないんだ。キキはただ何

気かに消えちゃったただけだよ。あの子は僕の時にだってそういう風にふっと消えちゃったんだ。初めてじゃない。君は自分を責めたい気持ちになっているだけなんだ。だから何もかもを、自分を責める方向に結びつけちゃうんだよ」

「いや違うね。それだけじゃない。そんなに簡単なことじゃない。僕はたぶんキキを殺したよ。メイは殺してないだろう。でもキキは殺したように感じる。彼女の首を絞めた感触がまだこの両手に残っている。シャベルを土に入れた時の手応えも覚えている。僕は彼女を殺したんだ。実質的に」

「でも何故君がキキを殺すんだ？　意味がないじゃないか？」

「わからない」と彼は言った。「たぶんある種の自己破壊本能だろう。僕には昔からそういうのがあるんだ。一種のストレスだよ。自分自身と、僕が演じている自分自身とのギャップがあるところまで開くと、よくそういうことが起きるんだ。僕はそのギャップをこの目で実際に見ることができるんだ。まるで地震でできた地割れみたいにね、ぽっかりとそれが開いてるんだ。深くて、暗い穴だ。目が眩みそうに深い。そしてそうなると、何かを無意識に破壊してしまうんだ。気がつくと何かを壊している。そういうことは子供のころからよくあった。何かを叩き壊している。鉛筆を折る。グラスを叩きつける。プラモデルを踏み潰す。でもどうしてそんなことをしたのかはわからない。もちろん人前ではやらないよ。自分一人になった時にやるんだ。でも小学生の時、友達の背中をついて崖から落としたことがあった。どうしてそんなことやったのかはわからない。でも気がついたらそうしてたんだ。でもそれほど高くない崖だったし、その時は軽い怪我ですんだ。突き落とされた友達も事故だと思った。たまたま体がぶつかるか何かしたんだとね。だって誰も僕がわざとそんなことをやるなんて思わないもの。でも違う。僕は自分でわかってる。僕はこの手でその友達をわざと突き落としたんだよ。そんなことは他にもまだまだいっぱいある。高校生の時に郵便ポストを何度か燃やした。火をつけた布をポストの中に放り込むんだ。卑劣で意味のないこと

だ。でもやってしまうんだよ。気がついたらやってるんだ。そうせずにはいられないんだ。そうすることでね、そういう無意味で卑劣なことをやることによってやっと自分自身が取り戻せるような気がするんだ。無意識的な行為なんだ。でもその感触だけは覚えている。そういう感触のひとつひとつが僕の両手にしっかりとしみついている。どれだけ洗っても落ちない。死ぬまで落ちない。ひどい人生だ。僕にはもう耐えられそうにない」

僕は溜め息をついた。五反田君は首を振った。

「でも僕には確かめようもないんだ」と五反田君は言った。「僕が殺したという確証がないんだ。死体もない。シャベルもない。ズボンに土もついてない。手にマメもできてない。もっとも人を埋める穴を掘るくらいでマメもできやしないけどさ。どこに埋めたかも覚えてない。たとえ警察に行って自白したとしても、誰が信じる？　死体がなきゃそれは殺人でさえないんだ。僕には償うことさえできないんだ。彼女は消えた。はっきりとわかっているのはそれだけだ。僕は君にそのことを何度となく打ち明けようとした。でも言えなかった。もし僕がそんなことを口に出したら、僕らの間の親密な空気が消えてしまうだろうという気がしたんだ。ねえ、僕は君といる時はとてもリラックスできた。そういうギャップというものを感じずにすんだ。そういうのは僕にとってはとても貴重なことだったんだ。そして僕はそういう関係を失いたくなかった。それで、少しずつ後にのばしていた。また今度にしよう、もっとあとでいい……結局ここまで来てしまった。本当は僕がきちんと打ち明けるべきだったんだろうね」

「でも打ち明けるもなにも、君が言うように確証がないじゃないか」と僕は言った。

「確証云々の問題じゃない。僕は自分の口から君に話すべきだったんだ。僕はそれを隠していたんだ。それが問題なんだ」

「でももしそれが本当にあったことだとしても、もし君がキキを殺したんだと仮定しても、君には殺すつ

CamScannerでスキャン

ちりかなかった」

彼は両手の手のひらを広げてじっと見つめた。「なかったよ。あるわけがないさ。何故僕がキキを殺さなくちゃならない。僕は彼女が好きだった。僕と彼女はきわめて限定された形態においてではあるにせよ、友達だった。僕らはいろんな話をした。僕は彼女に女房の話をした。キキはちゃんと聞いてくれた。何故僕が彼女を殺さなくちゃいけない？　でも殺したんだよ、この手で。殺意なんてなかった。僕は自分の影を殺すみたいに彼女を絞め殺したんだ。僕は彼女を絞めてるあいだ、これは僕の影なんだと思っていた。この影を殺せば僕は上手くいくんだと思っていた。でもそれは僕の影じゃなかった。キキだった。でもそれは闇の世界で起こったんだ。**ここは違う世界なんだ。**わかるかい？　ここじゃないんだよ。そして誘ったのはキキなんだ。私を絞めなさいって、キキが言ったんだ。いいのよ、絞めて殺しなさいって。彼女は僕を誘い、僕を許したんだ。嘘じゃないよ、本当にその通りだったんだ。僕にはわからない。そんなことが起こるんだろうか？　何もかもが夢みたいに思える。考えれば考えるほど現実が溶解していくんだ。何故キキが僕を誘うんだ。何故僕に自分を殺せなんて言うんだ？」

僕は生温くなったビールの残りを飲んだ。煙草の煙が上の方に固まっていて、それが空気の流れにあわせて何かの心霊現象のようにふらふらと揺れていた。誰かが僕の背中にぶつかって「失礼」と言った。店内放送が焼きあがったピッツァの番号を呼んでいた。

「ビールをもう一杯飲まないか？」と僕は彼に訊いて見た。

「飲みたいね」と彼は言った。

僕はカウンターに行ってビールを二杯買って帰ってきた。そして我々は何も言わずに黙ってそれを飲んだ。店はラッシュ・アワーの秋葉原駅みたいに混乱してごったがえしていて、僕らのテーブルの脇を人がしょっちゅう行ったり来たりしたが、誰も僕らには注意を払わなかった。誰も僕らの話なんて聞いてなか

ったし、誰も五反田君の顔を見なかった。

「言っただろう」と五反田君は感じの良い微笑みをくちもとに浮かべて言った。「ここは穴なんだよ。シェーキーズで有名人なんて見ないもの」

五反田君は三分の一ほどビールの残ったグラスを、試験管でも振るみたいにふらふらと揺らしていた。

「忘れよう」と僕は静かな声で言った。「僕は忘れることができる。君も忘れろ」

「僕に忘れられるだろうか？　口で言うのは簡単だ。君は自分の手で彼女を絞め殺したわけじゃないからね」

「ねえ、いいかい、君がキキを殺したという確証はなにもないんだ。確証のないことでそんな風に自分を責めるのはよせ。君は君自身の罪悪感を彼女の失踪に結びつけて無意識的に演技しているだけかもしれないじゃないか。そういう可能性はあるだろう？」

「じゃあ可能性の話をしよう」と五反田君は言って、テーブルの上に両手を伏せて置いた。「僕は最近可能性についてよく考えるんだ。いろんな可能性がある。たとえば僕が女房を殺す可能性もある。そうだろう？　もし彼女がキキとおなじように僕を許すと言ったら僕はやはり絞め殺しちゃうんじゃないかという気がする。僕は最近そのことばかり考えてるんだ。そして考えれば考えるほどその可能性が僕の中で膨らんでいくんだ。止めようがないんだ。自分がコントロールできなくなってくる。郵便ポストを焼いただけじゃない。僕は猫を何匹も殺した。いろんなやり方で殺した。止められないんだよ。夜中に近所の家の窓にパチンコで石をぶっつけて割った。そして自転車で逃げる。止められないんだよ。このことは今まで誰にも言わなかった。話したのは君が初めてだ。言ってしまってすっとした。でもだからといってそれが止まるわけじゃないんだ。止まりゃしない。演技する僕と、根源的な僕との溝が埋まらないかぎり、それはいつまでも続く。それは自分でもわかってるんだ。僕がプロの役者になってからその溝はどんどん大きく

CamScannerでスキャン

なっている。演技が大掛かりになるにしたがって、その反動も大きくなってくる。どうしようもないんだ。僕は今に女房を殺すかもしれない。コントロールできない。**それはここの世界で起こっていることじゃないからだ。**僕にはどうしようもないんだ。遺伝子に刻みこまれているんだよ、はっきりと」

「君は深刻に考えすぎる」と僕は無理に微笑んで言った。「遺伝子にまで遡って考え始めると、もうどこにも行けないよ。仕事を休んだ方がいいね。仕事を休んで、しばらく彼女と会うのをやめるんだよ。それしかないね。何もかも放り出すんだよ。僕と一緒にハワイに行こう。ビーチに毎日寝転んで、ピナ・コラーダを飲もう。あそこはいいところだよ。何も考えないでいい。朝から酒を飲んで、泳いで、二人で女の子を買おう。ムスタングを借りて、ドアーズでも、スライ&ザ・ファミリー・ストーンでも、ビーチ・ボーイズでも何でもいいから聴きながら一五〇キロ出してドライブしよう。気持ちが解放される。もし何かを真剣に考えたいのなら、そのあとで改めて考えるんだな」

「悪くないな」と彼は言った。そして目の脇に小さく皺を寄せて笑った。「また女の子を二人呼んで、四人で朝まで遊ぼう。あの時は楽しかった」

かっこう、と僕は言った。官能的雪かき。

「僕はいつでも行ける」と僕は言った。「君はどうだ？　仕事の始末つけるのにどれくらいかかる？」

五反田君は不思議そうに微笑みながら僕を見た。「君は何もわかってないな。仕事の始末なんていつまでたったってつきゃしないんだよ。全部放り出すしかないんだよ。そしてそんなことしたら僕はまず間違いなくこの世界を永久追放される。永久に、だよ。そしてそれと同時に、前にも言ったように、僕は女房を失うことになる。永久に」

彼はビールの残りを飲み干した。

「でもいいよ。何もかもなくしたって、もうかまわない。あきらめてもいい。君の言うとおりだ。僕は疲

れてる。ハワイに行って頭を空っぽにするべき時期だ。オーケー、何もかもを放りだそう。君と一緒にハワイに行こう。そのあとのことは、一度頭をしっかり空っぽにしてから考えよう。僕は――そうだな、まともな人間になりたい。もう駄目かもしれない。でもたしかにもう一度試してみる価値はある。君に任せるよ。僕は君を信頼してる。本当だよ。君が僕に電話してきた時から、僕はそう思っていたんだ。どうしてだろうね。君にはひどくまともなところがある。そしてそれは僕がずっと求めていたものだった」
「僕はまともなんかじゃない」と僕は言った。「僕はただきちんとステップを守っているだけなんだ。ただ踊っているだけだ。意味なんかないんだ」
五反田君はテーブルの上で五十センチほどの幅に両手を広げた。「何処に意味なんてある? 我々の生きることの意味がいったい何処にある?」そして笑った。「でもいいよ、別に。それはもうどうでもいいんだ。諦めてる。僕も君を見習うことにするよ。エレベーターからエレベーターへと乗り移ってやっていこう。それは不可能なことじゃないんだ。やろうと思えば何だってできるんだ。僕は頭がきれてハンサムで感じの良い五反田君だからね。いいとも、ハワイに行こう。明日切符を取ってくれ。ファースト・クラスを二枚。ファースト・クラスじゃなくちゃ駄目だよ。そう決まってるんだ。車はメルセデス、時計はロレックス、マンションは港区、飛行機はファースト・クラスなんだ。明後日に荷物をまとめて飛び立つ。その日のうちにホノルルだ。僕はアロハ・シャツが似合うんだ」
「君は何でも似合う」
「有り難う。微かに残されたエゴがくすぐられる」
「まずビーチ・バーに行って、ピナ・コラーダを飲む。きりっと冷えたやつ」
「悪くない」
「悪くない」

だが五反田君はじっと僕の目を見た。「ねえ、君は僕がキキを殺したことを本当に忘れられるのか？」

僕は肯いた。「忘れられると思う」

「僕にはまだ言ってないことがある。いつか僕は留置所に放り込まれて二週間完黙したって言ったね？」

「言った」

「あれは嘘だ。僕は何もかもぺらぺらしゃべってすぐに出てきた。怖かったからじゃない。自分を傷つけたかったからだ。自分を貶めたかったからだ。卑劣なことだよ。だから君が僕の為にずっと黙っていてくれたことは、僕には本当に嬉しかったんだ。何か、自分の卑劣さまでが救われたような気がした。変な感じ方だとは思うけどね。でもそういう気がしたんだ。君が僕の卑劣な部分を洗い流してくれたようなさ。しかし今日一日でずいぶん打ち明け話をしたな。総ざらいだ。でも話せてよかった。ほっとした。君は不快だったろうけれど」

「そんなことはない」と僕は言った。君に以前よりもっと近づけたような気がする、と僕は思った。そしてたぶんそう言うべきだったのだろう。でも僕はそれをもう少しあとにまでとっておくことにした。そんな必要もなかったのに。でもその時はそうした方がいいような気がしたのだ。そういう言葉がもっと力を持つ機会がいつか近いうちに巡ってくるような気がしたのだ。「そんなことはない」と僕はもう一度繰り返した。

彼は椅子の背にかけたレイン・ハットを取って、その湿りけを調べ、それをまたもとに戻した。「友達のよしみで、ひとつ頼みがある」と彼は言った。「もう一杯ビールが飲みたい。でも今は立ってあそこまで行く元気がない」

「いいですよ」と僕は言った。そしてカウンターに行って、またビールを二杯買った。カウンターは混んでいて、買うのに時間がかかった。グラスを両手に奥のテーブルに戻った時、彼の姿はなかった。レイ

CamScannerでスキャン

ン・ハットも消えていた。駐車場のマセラティもなくなっていた。やれやれと思った。そして首を振った。でもどうしようもなかった。彼は消えてしまったのだ。

40

マセラティが芝浦の海から引き上げられたのは翌日の昼過ぎだった。予想通りだったから、僕は驚かなかった。彼が消えた時から、僕にはそれがわかっていたのだ。

何はともあれ死体がまたひとつ増えた。鼠、キキ、メイ、ディック・ノース、そして五反田君。全部で五つだ。残りはひとつ。僕は首を振った。嫌な展開だった。次に何が来るのだろう？　次に誰が死ぬのだろう？　僕はユミヨシさんのことをふと考えた。いや、彼女であるわけがない。それはあまりにもひどすぎる。ユミヨシさんは死んだり消えたりするべきではないのだ。ユミヨシさんじゃないとしたら誰だ？　ユキ？　僕は首を振った。あの子はまだ十三なんだ。彼女を死なせるわけにはいかない。僕は頭の中に死者と化すかもしれない人々のリストを並べてみた。そんなことをしていると、なんだか自分が死神になったような気がした。僕は無意識のうちに死者の順位を選んでいるのだ。

僕は赤坂署に行って文学に会って、昨夜五反田君と一緒にいたことを話した。何となく彼に話しておいた方がいいような気がしたのだ。でももちろん彼がキキを殺したかもしれないということは話さなかった。それはもう終わったことなのだ。死体さえないのだ。僕は死の直前まで五反田君と一緒にいたこと、彼がひどく疲れていてノイローゼ気味だったと話した。借金がかさんで、やりたくない仕事に追われて、離婚のことを気にやんでいた、と僕は言った。

彼は僕の言うことを簡単に調書にした。前と違ってとてもとても簡単な調書だった。僕はそれに署名し

た。一時間もかからなかった。調書を書き終えると、彼は指の間にボールペンをはさんだまま僕の顔を見た。「あなたのまわりで実によく人が死にますねえ」と彼は言った。「そういう人生を送ってると友達ができないですよ。みんなに嫌われる。みんなに嫌われると目付きが悪くなって、肌が荒れる。いいことないですよ」

そして彼は深い溜め息をついた。

「でもとにかくあれは自殺だ。それははっきりしてる。目撃者もいる。しかしもったいないね。いくら映画スターだからといって、何もマセラティを海に放り込むことないだろうにね。シビックかカローラで充分だったのに」

「保険がかかってるから大丈夫なんですよ」と僕は言った。

「いや、自殺の場合は駄目でしょう、いくらなんでも保険はおりないでしょう」と文学は言った。「でもいずれにせよ、馬鹿気てる。私なんか金がないからつい子供の自転車のことを考えちゃうね。子供が三人いるんです。三人もいると金がかかる。みんな自分の自転車を欲しがるんですよ」

僕は黙っていた。

「いいですよ、もう帰って。お友達は気の毒だったね。わざわざ話しに来てくれてありがとう」彼は出口まで僕を送ってくれた。「メイちゃんの事件はまだ片付いてません。でもちゃんと捜査は続けています。いつか片付けます」と彼は言った。

長いあいだ、僕は自分が五反田君を殺してしまったような気がしていた。僕はその重苦しい気分をどうしても拭い去ることができなかった。僕はシェーキーズでの彼との会話をひとつひとつ思い返してみた。そのひとつひとつについて、僕はもっとうまく答えて彼を救うことができたんじゃないかと思った。そしてそうすれば今頃は二人でマウイのビーチに寝転んでビールを飲んでいたんじゃないかと。

でもたぶん駄目だったろうと僕は思った。結局彼ははじめから決めていたのだ。彼はきっかけを待っていただけなのだ。彼はずっとマセラティを海に放り込むことを考えていたのだ。それが唯一の出口だということが彼にはわかっていたのだ。彼はその出口の扉のノブにずっと手をかけて待っていたのだ。彼は頭の中で何度もマセラティが海の底に沈んでいく光景を描いていたのだ。窓の隙間から水が入り込んできて呼吸が出来なくなっていくその光景を。その自己破壊の可能性を弄ぶことでやっと自分を現実の世界に結びつけていたのだ。でもそれがいつまでも続くわけはなかった。いつかは扉を開けなくてはならないのだ。それも彼にはわかっていた。彼はただきっかけを待っていたのだ。

メイの死が僕にもたらしたものは古い夢の死と、その喪失感だった。ディック・ノースの死は僕にある種の諦めをもたらした。しかし五反田君の死がもたらしたのは出口のない鉛の箱のような絶望だった。五反田君の死には救いというものがなかった。五反田君は自分の中の衝動を自分自身にうまく同化させることができなかった。そしてその根源的な力が彼をぎりぎりの場所にまで押し進めていってしまったのだ。意識の領域のいちばん端にまで。そしてその境界線の向こうの闇の世界にまで。

しばらくの間、週刊誌やTVやスポーツ新聞が彼の死を食い荒らしていた。彼らは甲虫みたいに腐肉をとてもうまそうに齧っていた。そんな見出しを見ているだけで僕は吐き気がした。彼らが何を書いて何を言っているかは見なくても聞かなくても想像がついた。僕はそういう連中をひとりひとり絞め殺してまわりたかった。

金属バットで殴り殺せばいいんだ、と五反田君が言った。その方が簡単だし、早い。いや、そうじゃない、と僕は言った。そんなに早く殺しちゃもったいない。ゆっくりと絞め殺してやる。

それから僕はベッドに寝転んで目を閉じた。暗闇の奥の方から「かっこう」とメイが言った。

僕はベッドの上で世界を憎んだ。心の底から、激しく、根源的に、世界を憎んだ。世界は後味の悪い不

条理な死で満ちていた。僕は無力であり、そして生の世界の汚物にまみれていた。人々は入口から入って来て、出口から出ていった。出ていった人間は二度と戻ってこなかった。僕は自分の両手を眺めた。僕の手のひらにもやはり死の匂いがしみついていた。どれだけ洗ってもそれはおちないのだ、と五反田君が言った。ねえ、羊男、これが君の世界の繋げ方なのか？　僕は終わることのない死によって世界に結びつけられているのか？　僕はこれ以上何を失おうとしているんだ？　君が言ったように僕はもう幸せになれないかもしれない。それはそれでかまわないよ。でもこれはあまりにもひどすぎる。

僕はふと子供の頃に読んだ科学の本を思い出した。そこには「もし摩擦がなかったら世界はどうなるか？」という項があった。「もし摩擦がなかったら」とその本には書いてあった。「自転の遠心力で地球上の何もかもが宇宙に吹き飛ばされてしまうでしょう」と。僕は実にそんな気分だった。

「かっこう」とメイが言った。

41

五反田君がマセラティを海に沈めた三日後に僕はユキに電話をかけた。僕は正直なところ誰とも話をしたくなかった。でもユキとだけは話さないわけにはいかなかった。彼女は無力で、一人ぼっちなのだ。子供なのだ。彼女を庇うことのできる人間は僕しかいないのだ。そして何よりも、彼女は生きているのだ。僕には彼女を生かしつづける責務があった。少なくとも僕はそんな風に感じた。

箱根の家にユキはいなかった。アメが電話に出て、娘は一昨日に赤坂のアパートに行ってしまったと言った。アメは眠いところを起こされたようなひどくもったりとした喋りかたをした。彼女はあまり喋らなかったし、その方が僕にとっても好都合だった。僕は赤坂に電話をかけた。ユキは電話のそばにいたらしくすぐに受話器を取った。

「もう箱根にはいなくていいの?」と僕は訊いた。

「わからないわ。でもしばらく一人になりたかったの。何のかの言っても、ママは大人でしょう? 私がいなくてもちゃんとやれるわよ。私は少し自分のことを考えたかったの。これからどうするかとか、そういうことを。そろそろそういうことを真剣に考えるべき時期だと思ったの」

「そうかもしれないな」と僕は同意した。

「新聞で読んだわ。あなたのお友達、死んだのね」

「そう、呪われたマセラティだ。君の言う通りだった」

ユキは黙っていた。沈黙が水のように僕の耳を浸した。僕は受話器を右の耳から左の耳に移し換えた。

「御飯でも食べにいかないか?」と僕は言った。「どうせろくでもないものを食べてるんだろう? 二人で少しはましなものを食べよう。僕も実はこの何日かあまりものを食べてないんだ。一人でいると食欲が湧いてこない」

「二時に人と会う約束があるんだけど、その前だったらいいわ」

僕は時計を見た。十一時過ぎだった。

「いいよ。今から支度をして迎えに行く。三十分でそちらに着く」と僕は言った。

僕は服を着替え、冷蔵庫からオレンジ・ジュースを出して飲み、車の鍵と財布をポケットに入れた。そして「さて」と思った。でも何かを忘れているような気がした。そう、髭を剃り忘れているのだ。僕は洗面所に行って、丁寧に髭を剃った。そして鏡を見ながら、まだ二十代だといっても通用するだろうか、と考えてみた。するかもしれない。でも僕が二十代に見えたって見えなくたって、そんなことおそらく誰も気にもしないだろうな、と思った。どうでもいいことなのだ。それから僕はもう一度歯を磨いた。

外は良い天気だった。夏がもうそこまで来ていた。雨さえ降らなければとても感じの良い季節だ。僕は半袖のシャツに薄いコットンのズボンをはき、サングラスをかけ、ユキのマンションまでスバルを走らせた。口笛まで吹いた。

かっこう、と僕は思った。

夏だ。

僕は車を運転しながら林間学校のことを思い出した。林間学校では三時に昼寝の時間があった。でも僕はとても昼寝なんかできなかった。さあ眠りなさいと言われて眠れるわけがないじゃないか、と僕は思った。でも大抵の人間はぐっすりと眠っていた。僕は一時間ずっと天井を見ていた。ずっと天井を見ている

と、天井が独立した世界みたいに思えてくる。そこに行けばここ とはまったく違う世界に入り込めるような気がする。価値の転換した上下逆の世界。「鏡の国のアリス」みたいに。僕はずっとそんなことを考えていた。だから僕が林間学校で思い出せるのは天井のことだけだ。かっこう。

後ろのセドリックがクラクションを三回鳴らした。信号が青に変わっていた。落ち着けよ、と僕は思った。急いだって、それほど立派な場所に行けるわけでもないだろう？　僕はゆっくりと車を出した。

とにかく夏だ。

僕がマンションの玄関のベルを押すと、ユキはすぐに下に降りてきた。彼女は上品なプリント地の半袖のワンピースにサンダルをはき、深い青色の革のショルダー・バッグを肩にかけていた。

「今日はシックななりをしてるね」と僕は言った。

「二時から人に会うって言ったでしょう？」と彼女は言った。

「とてもよく似合うよ。品がいい」と僕は言った。「大人になったみたいに見える」

彼女は微笑んだだけで何も言わなかった。

僕らは近くのレストランに入って、スープとスパゲッティのサーモン・ソースとすずきとサラダというランチを食べた。まだ十二時になっていなかったから店はすいていたし、味もまともだった。十二時をすぎてサラリーマンがどっと街に繰り出す頃に僕らは店を出て、車に乗った。

「どこかに行く？」と僕は訊いた。

「どこにも行かない。ただぐるぐるとその辺を回っていて」とユキは言った。

「反社会的行為だ。ガソリンの無駄づかいだ」と僕は言った。でも彼女はとりあわなかった。聞こえないふりをしていた。まあいいさ、と僕は思った。どうせもともとひどい街なんだ。もう少し空気が汚れたか

らといって、もう少し交通が混雑したからといって、誰がそんなこと気にするだろう？

ユキはカー・ステレオのボタンを押した。中にはトーキング・ヘッズのテープが入っていた。たぶん「フェア・オブ・ミュージック」。いったいいつ入れたんだろう？　いろんなことが記憶から欠落している。

「私、家庭教師につくことにしたの」と彼女は言った。「それで今日その人に会うの。女の人。パパがみつけてきてくれたの。勉強がしたくなったってパパに言ったら、あの人あくる日にはちゃんとみつけてくれた。きちんとした良い人だって。変な話だけど、あの映画見てたら何だか勉強したくなったの」

「あの映画？」と僕は聞き返した。「『片想い』のこと？」

「そうよ。あれよ」と言ってユキは少し赤くなった。「馬鹿みたいだとは思うわよ、自分でも。でもとにかくあの映画を見たあと急に勉強したくなったの。たぶんあなたのお友達が先生の役をやってるのを見たせいだと思う。あの人、見てる時は馬鹿みたいだと思ったけど、でも何か訴えるところがあるみたいね。才能があったのかしら」

「そうだね。ある種の才能があった。それは確かだ」

「うん」

「でももちろんあれは演技でありフィクションだ。現実とは違う。それはわかるね？」

「知ってる」

「歯医者の役も上手い。とても手際が良い。でもそれは演技なんだ。手際がよく見えるだけなんだ。イメージだ。本当に何かをやるというのは惨めに混乱して骨の折れることだよ。意味のない部分が多すぎるしね。でも何かをしたくなるっていうのはいいことだ。そういうものがないと上手く生きていけない。五反田君もそれを聞いたら喜ぶだろうね」

CamScannerでスキャン

「僕に会ったの？」
「会ったよ」と僕は言った。「会って話をした。ずいぶん長く話をしたな。とても正直に話をした。そしてそのまま死んでしまった。僕と話して、それからすぐに海にマセラティを放り込んだんだ」
「私のせいね？」
僕はゆっくりと頭を振った。「君のせいじゃない。誰のせいでもない。人が死ぬにはそれなりの理由がある。単純そうに見えても単純じゃない。根っこと同じだよ。上に出てる部分はちょっとでも、ひっぱっているとずるずる出てくる。人間の意識というものは深い闇の中で生きているんだ。入り組んでいて、複合的で……解析できない部分が多すぎる。本当の理由は本人にしかわからない。本人にだってわかってないかもしれない」
彼はその出口の扉のノブにずっと手をかけていたんだよ、と僕は思った。きっかけを待っていたんだよ。誰のせいでもない。
「でもあなたはそのことで私をきっと憎むわ」とユキは言った。
「憎んだりしない」と僕は言った。
「今は憎んでないにしても、きっと先になって憎むわ」
「先になっても憎まない。僕はそんな風に人を憎んだりはしない」
「たとえ憎まないにしても、でもきっと何かは消えてしまうのよ」と彼女は小さな声で言った。「本当よ」
僕はちらりと彼女の顔を見た。「不思議だな、君も五反田君とまったく同じことを言ってる」
「そう？」
「そう。彼も何かが消えるのをずっと気にしていた。でもね、何をそんなに気にする？　どんなものでもいつかは消えるんだ。我々はみんな移動して生きてるんだ。僕らのまわりにある大抵のものは僕らの移動

にあわせてみんないつか消えていく。それはどうしようもないことなんだ。消えるべき時がくれば消える。そして消える時が来るまでは消えないんだよ。たとえば君は成長していく。あと二年もしたら、その素敵なワンピースだってサイズがあわなくなる。トーキング・ヘッズも古臭く感じるようになるかもしれない。そして僕とドライブなんてしたいとは思わなくなるだろう。それは仕方ないことなんだ。流れのままに身をまかせよう。考えたって仕方ないさ」

「でも私はずっとあなたのことを好きだと思うわ。それは時間とは関係ないことだと思う」

「そう言ってくれるのは嬉しいし、僕もそう思いたい」と僕は言った。「でも公平に言って、君は時間のことをまだあまりよく知らない。いろんなことを頭から決めてしまわない方がいい。時間というのは腐敗と同じなんだ。思いもよらないものが思いもよらない変わり方をする。誰にもわからない」

彼女は長い間黙っていた。テープのA面が終わって、オート・リターンした。

夏だ。街のどこに目をやっても夏が目についた。警官も高校生もバスの運転手もみんな半袖になっていた。ノースリーブで歩いている女の子だっていた。おい、ついこのあいだまで雪が降っていたんだぞ、と僕は思った。僕は雪の降りしきる中で彼女と二人で「ヘルプ・ミー・ロンダ」を唄っていたんだぞ。あれからまだたった二ヵ月半しか経っていないんだぞ。

「本当に私を憎まない？」

「もちろん」と僕は言った。「憎んだりしない。そんなことあるわけがない。この不確実な世界にあって、それだけは確信をもって言える」

「絶対に？」

「絶対に。二五〇〇パーセントありえない」

彼女は微笑んだ。「それが聞きたかったの」

僕は肯いた。

「五反田君のことを好きだったんでしょう？」とユキが訊いた。

「好きだったよ」と僕は言った。そう言って、僕は突然声がつまった。目の奥に涙があふれた。でも僕はやっとのことでそれを押しとどめた。そして深呼吸をした。「会うたびに好きになっていった。そういうことってあまりないんだけどね。特に僕くらいの歳になってからはね」

「彼があの人を殺したの？」

僕はしばらくサングラス越しに初夏の街を眺めていた。「それは誰にもわからない。でもどちらでもよかったんだ」

彼はきっかけを待っていただけなんだ。

ユキは窓枠に頬杖をついて、トーキング・ヘッズを聴きながら外の景色を眺めていた。彼女は僕が最初に会ったときに比べて少しおとなっぽくなったように思えた。でも気のせいだろう。まだ二ヵ月半しか経ってないのだ。

夏だ、と僕は思った。

「これからどうするつもりなの？」とユキが訊いた。

「どうしたものかな」と僕は言った。「何も決めてないね。何をすればいいんだろう？　でもいずれにせよ、もう一度札幌に戻るよ。明日か明後日にでも。札幌に戻ってやらなくちゃいけないことが残ってるんだ」

僕はユミヨシさんに会わなくてはならない。そして羊男にも。あそこには僕の為の場所があるのだ。僕はそこに含まれているのだ。そして誰かが僕の為に泣いているのだ。僕はもう一度そこに戻ってほどけた輪をしめなくてはならないのだ。

CamScannerでスキャン

代々木八幡の駅の近くに来ると彼女はそこで降りると言った。「小田急線に乗っていくの」と彼女は言った。

「目的地まで車で送ってあげるよ。どうせ今日の午後は暇だから」と僕は言った。

彼女は微笑んだ。「ありがとう。でもいいの。けっこう遠くだし、電車の方が早いわ」

「変だ」と僕はサングラスを外して言った。「『ありがとう』って言った」

「別に言ったっていいでしょう？」

「もちろんいいよ」と僕は言った。

彼女は十秒か十五秒僕の顔をみた。とくに表情らしい表情は浮かべていなかった。奇妙に表情のない子なのだ。目の輝き方と唇の形がすこしずつ変わるだけだ。唇は幾分すぼめられ、目は鋭く、生気を含んでいた。その目は僕に夏の光を思わせた。鋭く水中に差し込んで屈曲し輝いて散るあの夏の光。

「ただ単に感動してるだけだよ」と僕は言った。

「変な人」とユキは言った。そして車を下り、ばたんとドアを閉めて、後ろも振り向かずに歩いて行ってしまった。僕はユキのほっそりした後ろ姿が人込みの中に消えていくのをじっと見送った。彼女の姿が見えなくなると、僕はとても哀しい気持ちになった。まるで失恋したみたいな気分だった。

僕は口笛でラビン・スプーンフルの「サマー・イン・ザ・シティー」を吹きながら表参道を通って青山通りまで行って紀ノ国屋で買い物をしようとした。しかし駐車場に車を入れかけたところで、そうだ、明日か明後日にはもう札幌に行くんだと思った。食事を作る必要もないし買い物する必要もないのだ。そう思うと僕は急に手持ち無沙汰になった。さしあたって何もやるべきことがない。

僕はもう一度あてもなく街をぐるりとまわり、それからアパートに戻った。アパートの部屋はひどくがらんとして見えた。やれやれ、と僕は思った。そしてベッドにごろんと横になって天井を眺めた。こうい

うのには名前がつけられるぜ、と僕は思った。喪失感、と僕は口に出して言ってみた。あまり感じの良い言葉ではなかった。

かっこう、とメイが言った。それはがらんとした部屋の中に大きく響きわたった。

42

〈キキの夢〉

僕はキキの夢を見た。それはたぶん夢だったのだろうと思う。でなければ夢に類する行為だ。「夢に類する行為」っていったい何だろう？ 僕にもわからない。でもそういうものがあるのだ。我々の意識の辺境には名づけようもない様々なものが存在する。

でも簡単に僕はそれを夢と呼ぶことにする。やはりその表現がいちばん実体に近いと思うから。

＊

僕は夜明けの時間にキキの夢を見た。

夢の中でも時間は夜明けだった。

僕は電話をかけていた。国際電話。僕はあのホノルルのダウンタウンの部屋の窓枠にキキらしい女が残していった電話番号を回していた。かたかたかたかたと回線が繋がっていく音が聞こえた。繋がっている、と僕は思った。ひとつひとつと番号が順番に繋がっていくのだ。そし

てやや間があってから、コール音が聞こえはじめた。僕は受話器をしっかり耳につけてそのくぐもった音を勘定していた。五回、六回、七回、八回、と僕は数えた。十二回目に誰かが出た。そしてそれと同時に僕はあの部屋にいた。ホノルルのダウンタウンのがらんとしたあの「死の部屋」に。時刻は昼らしく、天井の明かり取りからまっすぐに日が差し込んでいた。光は何本かの太い柱となって床から直立し、その中で細かな塵が舞っているのが見えた。その光の柱は刃物で切り取られたようにくっきりと鋭角的で、南国の太陽の激しさを部屋の中に送り込んでいた。光のない部分は暗く冷やかだった。その差はあまりにも対照的だった。まるで海底にいるみたいだな、と僕は思った。

僕はその部屋のソファに座って、受話器を耳につけていた。電話のコードは長く長く床を横切って延びていた。コードは暗い部分を横切り、光の中を抜け、そしてまたぼんやりとした淡い闇の中に消えていた。すごく長いコードだ。こんな長いコードは見たことがない。僕は電話機を膝に載せたまま、部屋の中を見渡した。

部屋の中の家具の配置は前に見た時と同じだった。ベッド、テーブル、ソファ、椅子、ＴＶ、フロア・スタンド。そういうものが不自然なほどばらばらに配置されている。部屋の匂いも同じだった。長く閉めきりになっていた部屋の匂いだ。空気が澱んでいて、そして黴くさい。でも六個の白骨はなくなっていた。ベッドの上にも、ソファにも、ＴＶの前の椅子にも、食卓にも、白骨の姿はなかった。みんな消えてしまっていた。食卓の上にあった食べかけの食器も消えていた。僕は電話をソファの上に置いて立ちあがった。でも頭が少し痛んだ。ひどく高い音を聞いた時のようなキンとする痛みだった。それで僕はまたそこに腰を下ろした。

いちばん遠くの、淡い暗がりの中にある椅子の上で何かが動いたように見えた。僕は目をこ

らしてみた。その何かはすっと立ちあがり、こつこつというあの靴音を響かせてこちらにやってきた。キキだった。彼女はゆっくりと闇の中から現れ、光の中を横切り、食卓の椅子に座った。彼女は前と同じ格好をしていた。ブルーのワンピースに白いショルダー・バッグ。

　キキはそこに座って、じっと僕を見ていた。彼女の表情はとても穏やかだった。彼女は光の領域でも影の領域でもない、ちょうどその中間のあたりに位置していた。僕は立ち上がってそこまで行こうかと思ったが、なんとなく気後れがしてやめた。それにこめかみにはまだ微かな痛みが残っていた。

「白骨は何処に行ったんだろう？」と僕は言った。

「さあ」とキキは微笑みながら言った。「消えたんでしょう」

「君が消したの？」

「いいえ、ただ消えちゃったのよ。あなたが消したんじゃないかしら？」

　僕は隣に置いた電話機にふと目をやった。そして指先で軽くこめかみを押さえた。

「あれはいったい何を意味してたんだろう？　六体の白骨」

「あなた自身よ」とキキは言った。「ここはあなたの部屋なんだもの、ここにあるのはみんなあなた自身なのよ。何もかも」

「僕の部屋」と僕は言った。「じゃあ、いるかホテルは？　あそこはどうなんだい？」

「あそこもあなたの部屋よ、もちろん。あそこには羊男がいる。そしてここには私がいる」

　光の柱は揺らがない。硬く、均質だ。その中の空気が微かに揺れているだけだった。僕はその揺れを見るともなく見ていた。

「いろんなところに僕の部屋がある」と僕は言った。「ねえ、僕はずっと夢を見てたんだ。いる

かホテルの夢だよ。そこでは誰かが僕の為に泣いていた。毎日のようにその同じ夢を見てたんだ。いるかホテルがひどく細長い形をしていて、そこで誰かが僕の為に泣いていたんだ。僕はそれが君だと思っていた。それで、どうしても君に会わなくてはならないような気がしたんだ」

「誰もがあなたの為に泣いているのよ」とキキが言った。とても静かな、神経を慰撫するような声だった。「だってそれはあなたの為の場所なんだもの。そこでは誰もがあなたの為に泣くのよ」

「でも君は僕を呼んでいた。だからこそ僕は君に会うためにいるかホテルまで行った。そしてそこから……いろんなことが始まったんだ。前と同じようにね。いろんな人間に会った。いろんな人間が死んだ。ねえ、君は僕を呼んでいたんだろう？　そして君が僕を導いたんだろう？」

「そうじゃない。あなたを呼んでいたのはあなた自身なのよ。私はあなた自身の投影に過ぎないのよ。私を通してあなた自身があなたを呼び、あなたを導いていたのよ。あなたは自分の影法師をパートナーとして踊っていたのよ。私はあなたの影に過ぎないのよ」

僕は彼女を絞めているあいだ、これは自分の影なんだと思っていた、と五反田君は言った、この影を殺せば上手くいくんだと思っていた。

「でもどうしてみんなが僕の為に泣くんだろう？」

彼女はそれには答えなかった。彼女はそっと立ちあがって、こつこつと靴音を響かせてやってきて、僕の前に立った。そして床に膝をついて手を伸ばし、指先を僕の唇にあてた。つるりとした細い指だった。彼女はそれから僕のこめかみに指を触れた。

「あなたが泣けないもののために私たちが泣くのよ」とキキは静かに言った。まるで言い聞かせるようにゆっくりと。「あなたが涙を流せないもののために私たちが涙を流し、あなたが声を上げることのできないもののために私たちが声を上げて泣くのよ」

「君の耳はまだあのままなの？」と僕は訊ねた。

「私の耳は――」と言って彼女はにっこりと笑った。「まだあのままよ。前と同じ」

「もう一度僕に耳を見せてくれないかな？」と僕は言った。「僕はもう一度あの気持ちを味わってみたいんだ。君がいつかレストランで僕に耳を見せてくれた時の、あの、世界が生まれ変わるような気分を。僕はずっとそのことを考えていたんだ」

彼女は首を振った。「いつかね」と彼女は言った。「でも今は駄目。あれはいつでも見られるっていうものではないの。あれは本当に、それに適した時にしか見られないものなの。あの時はそうだった。でも今はそうじゃない。いつかまた見せてあげる。あなたが本当にそれを必要としている時にね」

彼女はまた立ち上がって、天窓からまっすぐに差し込む光の柱の中に入った。そしてそこにじっと立っていた。強い光の塵の中で、彼女の体は今にも分解して消え失せてしまいそうに見えた。

「ねえ、キキ、君は死んだのかい？」と僕は訊いた。

光の中で彼女はくるりと身を回転させて僕の方を向いた。

「五反田君のこと？」

「そうだよ」と僕は言った。

「五反田君は自分が私を殺したと思っているわ」とキキは言った。

僕は肯いた。「そうだね、彼はそう思っていた」
「彼は私を殺したかもしれない。彼にとってはそうなの。彼にとっては、彼は私を殺したの。それは必要なことだったの。あの人はそうしないことには何処にも行けなかったのよ。私を殺すことが必要だったのよ。彼は私を殺すことで自分を解決することができたのよ。可哀そうな人」とキキは言った。「でも私は死んでいない。ただ消えただけ。消えるの。もうひとつの別の世界に移るの。となりに並行して走っている電車に乗り移るみたいに。それが消えるっていうこと。わかる?」
わからない、と僕は言った。
「簡単よ、見ていて」
キキはそう言うと床を歩いて横切り、壁に向かってどんどん歩いて行った。壁の前まで来ても歩調を緩めなかった。そしてそのまますっと壁の中に吸い込まれて消えた。靴音も消えた。
僕はずっと彼女が吸い込まれた壁の部分を眺めていた。それはただの壁だった。部屋の中はしんとしていた。光の塵だけが相変わらずゆっくりと空中を漂っていた。こめかみがまた少し痛んだ。僕は指をこめかみにつけ、じっとその壁を見ていた。あの時も、あのホノルルの時も、彼女は同じように壁に吸い込まれていったんだ、と僕は思った。
「どう? 簡単でしょう?」というキキの声が聞こえた。「あなたもやってみれば」
「僕にもできる?」
「だから簡単だって言ったでしょう? やってみなさいよ。まっすぐそのまま歩いていけばいいのよ。そうすればこっち側に来られる。怖がっては駄目よ。何も怖くないんだから」
僕は電話機を持ってソファから立ち上がり、コードをひきずりながら彼女が吸い込まれたあ

たりの壁に向かって歩いて行った。壁が迫ってくると僕は少しひるんだが、それでも歩調は緩めずにそのまま壁に当たっていった。でも体が壁に当たっても、何の衝撃もなかった。僕の体は不透明な空気の層をすりぬけただけだった。空気の質がちょっと変化したような気がしただけだった。僕は電話機を下げたままその層を抜け、そして僕の部屋のベッドに戻った。僕はベッドに腰をかけ、電話機を膝の上に置いていた。「簡単だ」と僕は言った。「すごく簡単だ」

僕は受話器を耳にあててみたが、電話は切れていた。

それは夢なのだろうか？

夢だ、たぶん。

でも誰にそんなことがわかる？

CamScannerでスキャン

43

僕がいるかホテルに着いた時、フロントのカウンターには三人の女の子が立っていた。彼女たちは前と同じようにしわひとつないブレザー・コートに純白のブラウスという格好で僕をにこやかに出迎えてくれたが、その中にユミヨシさんの姿はなかった。僕はそのことにひどく失望した。いや、絶望したといってもいいくらいだ。僕はここに来れば当然ユミヨシさんとすぐに再会できるものと頭から思いこんでいたのだ。それで僕はうまく口をきくことができなくなってしまった。僕は自分の名前さえうまく発音することができなかったし、その結果僕の相手をしてくれた女の子の微笑みは油が切れたみたいに少しこわばることになった。彼女は僕のクレジット・カードを疑わしそうに眺めてからコンピューターにさしこみ、それが盗品でないことを確かめた。

僕は十七階の部屋に入って荷物を置いて洗面所で顔を洗い、ロビーに下りた。そしてふわふわした上等なソファに座って、雑誌を読むふりをしながらちらちらとフロントを眺めていた。ユミヨシさんはあるいは休憩をとっているだけなのかもしれないのだ。でも四十分たってもユミヨシさんは現れなかった。同じような髪型をした見分けのつかない三人の女の子がいつまでも働いているだけだった。ちょうど一時間待ってから僕は諦めた。ユミヨシさんは休憩をとっているわけではないのだ。

僕は街に出て、夕刊を買った。そして喫茶店に入ってコーヒーを飲みながら、ひょっとして何か僕に興味のある記事が出てないだろうかと思って隅から隅まで読んでみた。

でも何もなかった。五反田君のこともメイのことも、何も載っていなかった。別の殺人やら別の自殺やらについての記事が載っているだけだった。僕は新聞を読みながら、ホテルに帰ったらたぶんユミヨシさんはフロントに立っているだろうと思った。そうでなくてはならないのだ。

でも一時間後にも相変わらずユミヨシさんの姿はなかった。

僕は彼女が何らかの理由で世界から突然消えてしまったんじゃないかとふと思った。たとえば壁に吸い込まれてしまうみたいに。そう思うと、僕はひどく不安な気持ちになった。それで僕は彼女のアパートに電話をかけてみた。電話には誰も出なかった。僕はフロントに電話をかけてユミヨシさんはいるかと訊いてみた。「ユミヨシは昨日から休暇を取って休んでおります」と別の女の子が教えてくれた。明後日から勤務に戻るということだった。やれやれと僕は思った。どうして前もって彼女に電話をしておかなかったんだろう？　どうして電話をするということを思いつかなかったんだろう？

でも僕はとにかく飛行機に乗ってすぐに札幌に来るということしか頭になかったのだ。そして札幌に来ればすぐにユミヨシさんに会えると思いこんでいたのだ。馬鹿気た話だ。だいたい僕はこの前いつ彼女に電話をかけた？　五反田君が死んでから一度もかけてない。いや、その前だってかけてないぜ、と僕は思った。ユキが海岸で吐いて、僕に五反田君がキキを殺したと言った時からずっとかけてない。ずいぶん長い期間だ。僕はずっとユミヨシさんをほったらかしにしておいたのだ。その間に何が起こったかわからない。いろんなことが起こり得るのだ。簡単にいろんなことが起こるのだ。

でも、と僕は思う、僕には何も言えなかったのだ。本当に何も言えなかったのだ。五反田君がキキを殺したとユキが言った。そして五反田君はマセラティで海に突っ込んだ。僕はユキに「大丈夫、君のせいじゃない」と言った。キキが僕に私はあなたの影にすぎないのよと言った。僕にいったい何が言えるだろう？　何も言えやしない。僕はまずユミヨシさんの顔を見たかったのだ。それから自分が何を彼女に言う

べきかを考えたかったのだ。電話では何も言えないのだ。

でも僕は不安だった。ユミヨシさんは既に壁に吸い込まれてしまっていて、僕はもう永遠に彼女に会うことができないのではないだろうか？　そう、あの白骨は全部で六個あったのだ。五つまでは誰だかわかっている。でもあとひとつだけ骨は残っているのだ。それは誰のものなのだろう？　そのことを考え始めると僕は居ても立ってもいられないような気持ちになった。息苦しくなるくらい胸がどきどきした。心臓がどんどん膨らんでいって肋骨を突き破るんじゃないかという気がしたほどだった。そんな気持ちになったのは生まれて初めてだった。僕はユミヨシさんを愛しているのだろうか？　わからない。会って顔を見てみないことには何も考えられないのだ。僕は指が痛くなるくらい何度もユミヨシさんのアパートに電話をかけてみた。でも誰も出なかった。

僕は上手く眠れなかった。激しい不安感が僕の眠りを何度も分断した。僕は汗をかいて目覚め、電灯をつけて時計を見た。それは二時だったり、三時十五分だったり、四時二十分だったりした。そして四時二十分のあとはとうとう眠れなくなってしまった。僕は窓際に座って心臓の音を聞きながら街が明るくなっていく様子をじっと眺めていた。

ねえユミヨシさん、僕をこれ以上一人ぼっちにしないでくれ、と僕は思った。僕には君が必要なんだ。僕はもう一人ぼっちになりたくないんだ。君がいないと僕は遠心力で宇宙の端っこの方に吹き飛んでいってしまいそうな気がするんだ。お願いだから僕に顔を見せて、僕を何処かにつなぎとめてほしい。現実の世界につなぎとめてほしいんだ。僕はお化け組になりたくないんだ。僕はごく普通の当たり前の三十四歳の男なんだ。僕には君が必要なんだ。

僕は朝の六時半からずっと彼女の部屋の電話番号を回し続けた。三十分おきに僕は電話の前に座ってダイヤルを回した。でも誰も出なかった。札幌の六月は素敵な季節だった。雪解けはずっと前に終わり、は

んの数ヵ月前には固く凍えていた大地は今は黒々として、柔らかな生命の息吹をたたえていた。木々は青い葉をいっぱいに茂らせ、清潔で優しい風がその葉を揺らせていた。空は高く透き通り、雲は輪郭をくっきりとさせていた。そんな風景は僕の心を震わせた。でも僕はずっとホテルの部屋の中に留まって、彼女の家の電話番号を回し続けていた。明日になれば彼女は戻ってくるんだ、それまで待てばいいじゃないか、と僕は十分ごとに自分に言いきかせた。でも僕は明日がくるのが待てなかった。明日がくるなんて誰に保証できる？　僕は電話機の前に座ってダイヤルを回し続けた。そして電話をかけていない時はベッドに寝転んでうとうとまどろみ、意味もなくじっと天井を眺めた。

昔ここにいるかホテルがあったんだ、と僕は思った。ひどいホテルだった。でもそこにはいろんなものが留まっていた。人々の思いや時の残滓が、その床の軋みのひとつひとつに、壁のしみのひとつひとつに留まっていた。僕は椅子に深く座り足をテーブルの上に載せ、目を閉じているかホテルの光景を思い出してみた。その入り口のドアの形から、擦り切れたカーペットから、変色した真鍮の鍵から、隅にほこりのたまった窓枠まで。僕はその廊下を歩き、扉を開け、部屋に入ることができる。

いるかホテルは消えた。でもその影と気配はまだここに残っていた。僕はその存在を感じ取ることができた。いるかホテルは、この新しく巨大な「ドルフィン・ホテル」の中に潜んでいるのだ。目を閉じれば僕はその中に入っていくことができた。ごとごとごとごと、というあの老犬の咳みたいなエレベーターの震える音を聞き取ることもできた。それはここにあるのだ。誰も知らない。でもここにある。この場所が僕の結び目なのだ。大丈夫、ここは僕の為の場所なのだ、と僕は自分に言い聞かせた。彼女は必ず戻ってくる。じっと待っていればいいのだ、と。

僕はルーム・サービスで夕食を取り、冷蔵庫からビールを出して飲んだ。そして八時にもう一度ユミヨシさんに電話をかけてみた。誰も出なかった。

僕はTVをつけて九時まで野球の中継を見た。音を消して画面だけを見ていた。つまらない試合だったし、とくに野球の試合が見たいというのでもなかった。でも僕はとにかく生身の人間が動き回っているところを見ていたかった。バドミントンの試合だろうが、水球の試合だろうが、なんでもよかった。僕は試合の流れを追わずに、ただ人がボールを投げたり、それを打ったり、走ったりするのを見てた。ずっと遠くにある、自分とは関係のない誰かの生の断片として。まるで空を流れる遠い雲を眺めているみたいに。

九時になって僕はまた電話をかけてみた。今度はたった一度のコールで彼女が出た。僕はしばらくの間彼女が電話に出たことが信じられなかった。突然の巨大な一撃で僕を世界に繋ぎとめていた綱が断ち切られたような気がした。体の力が抜けて固い空気の塊が喉もとに上がってきた。ユミヨシさんがそこにいるのだ。

「今旅行から帰ってきたばかりなの」とユミヨシさんはとてもクールな声で言った。「休暇を取って東京に行ってたの。親戚の家に。あなたの家に二回電話したわよ。誰も出なかったけど」

「僕は札幌に来て、君にずっと電話かけてたんだ」

「すれ違い」と彼女は言った。

「すれ違いだ」僕はそう言って受話器を握りしめ、TVの無音の画面をしばらくじっと睨んでいた。上手く言葉が浮かんでこない。僕はどうしようもなく混乱していた。どう言えばいいんだろう？

「ねえ、どうしたの？　もしもし」とユミヨシさんが言った。

「ちゃんといるよ」

「あなた声が変みたいだけど」

「緊張してるんだよ」と僕は説明した。「直接君と会って話さないとうまく喋れない。ずっと緊張していたし、電話だとその緊張が解けないいんだ」

「明日の夜なら会えると思うけど」と彼女はちょっと考えてから言った。たぶん眼鏡のブリッジに指を触れているんだろうな、と僕は想像した。

僕は受話器を耳にあてたまま床に腰を下ろし、壁にもたれた。「ねえ、明日じゃ遅いような気がするんだ。今日これから会いたい」

彼女は否定的な声を出した。声にならない声だったが、その否定的な空気はちゃんと伝わってきた。「今とても疲れてるのよ。くたくたなの。帰ってきたばかりだって言ったでしょう？　だから今からと言われても困るのよ。明日は朝から仕事に出なくちゃならないし、今はただただ眠りたいの。明日、仕事が終わってから会うわ。それでいいでしょう？　それとも明日はもうここにはいないの？」

「いや、僕はしばらくずっとここにいるよ。君が疲れているのもよくわかってる。でもね、正直に言ってなんだか心配なんだ。明日になったらもう君が消えちゃっているんじゃないかって」

「消える？」

「この世界から消えちゃうこと。消滅」

ユミヨシさんは笑った。「そんなに簡単には消えたりはしないわよ。大丈夫よ、安心して」

「ねえ、そうじゃないんだ。君にはわかってないんだ。僕らはどんどん移動しつづけている。そしてその移動にあわせていろんなものが、僕らの回りにあるいろんなものが、消えていく。これはどうしようもないことなんだ。何ひとつとしてとどまらないんだ。意識の中にはとどまる。でもこの現実の世界からは消えていくんだ。僕はそれが心配なんだ。ねえ、ユミヨシさん、僕は君を求めている。僕はとても現実的に君を求めている。僕が何かをこんなに求めるなんて殆どないことなんだ。だから君に消えてほしくない」

ユミヨシさんは僕の言ったことについてしばらく考えていた。「おかしな人ね」と彼女は言った。「でも約束するわよ。消えない。そして明日あなたに会う。だからそれまで待って」

CamScannerでスキャン

「わかった」と僕は言った。そしてあきらめた。あきらめないわけにはいかないのだ。彼女がまだ消えていないことがわかっただけでも良かったのだ、と僕は自分に言い聞かせた。

「おやすみなさい」と彼女は言った。そして電話が切れた。

僕はしばらく部屋の中を歩きまわっていた。それから二十六階のバーに行って、ウォッカ・ソーダを飲んだ。僕が初めてユキを見掛けたバーだ。バーは混み合っていた。カウンターで若い女が二人で酒を飲んでいた。二人ともとてもシックな服を着ていた。着こなしも上手かった。一人は脚がきれいだった。僕はテーブル席に座って彼女たちを特に何の意味もなく眺めながらウォッカ・ソーダを飲んだ。それから夜景も眺めた。僕はこめかみに指をあててみた。別に痛みはない。それから僕は指で頭蓋骨の形をなぞった。僕の頭蓋骨。ゆっくり時間をかけて自分の頭蓋骨の形を確認してしまうと、こんどはカウンターに座った女たちの骨の形を想像してみた。頭蓋骨から脊椎から肋骨、骨盤、腕と脚、関節。とても綺麗な脚の中のとても綺麗な白骨。雪のように真っ白で、清潔で無表情な骨。脚の綺麗な方の女が僕の方をちらりと見た。たぶん僕の視線を感じたのだろう。僕は彼女に説明したかった。僕は君のからだを見ていたんじゃなくて、ただ骨の形を想像していただけなんだと。でももちろんしなかった。僕はウォッカ・ソーダを三杯飲んで部屋に帰って眠った。ユミヨシさんの存在を確認できたせいか、僕はぐっすり眠ることができた。

*

ユミヨシさんがやってきたのは午前三時だった。午前三時にドア・ベルが鳴った。僕はベッドサイドのライトを点け、時計を見た。そしてバスローブを羽織って、何も考えずにドアを開けた。ひどく眠くて、きちんと何かを考えるような余裕はなかった。ただ起きて歩いて、ドアを開けただけだった。ドアを開けると、そこにユミヨシさんが立っていた。彼女はライト・ブルーの制服のブレザー・コートを着ていた。

CamScannerでスキャン

彼女はいつもと同じようにドアのすきまからするりと部屋に入った。僕はドアを閉めた。彼女は部屋の真ん中に立って、大きく息をついた。それからブレザー・コートを音もなく脱ぎ、皺にならないようにそれをきちんと椅子の背にかけた。いつもと同じように。

「どう、消えてないでしょう?」と彼女は言った。

「消えてない」と僕はぼんやりとした声で言った。僕には現実と非現実の境がまだうまく把握できなかった。僕は驚くことさえできなかった。

「そんなに簡単には人は消えないのよ」とユミヨシさんは噛んで含めるように言った。「君は知らないんだ。この世界ではなんでも起こり得るんだよ。なんでも」

「でもとにかく私はここにいるわよ。消えてない。それは認めるわよね?」

僕はあたりを見回し、深呼吸し、ユミヨシさんの目を見た。現実だった。「認める」と僕は認めた。「君は消えてないみたいだ。でも夜中の三時にどうして君が僕の部屋に来るんだろう?」

「眠れなかったの、うまく」と彼女は言った。「あれからすぐに眠ることは眠ったんだけど、一時過ぎにぱっちり目が覚めちゃって、それっきり全然眠れなくなったの。あなたの言ったことが気になったの。ひょっとしたらこのまま消えちゃうかもしれないんだってね。だからタクシーを呼んでここに来ることにしたのよ」

「でも夜中の三時に君が出勤して来たりしたらみんな変に思わないのかな?」

「大丈夫よ、見つかってないから。この時間はみんな寝てるの。二十四時間フル・サービスとは言っても、夜の三時だもの、特にやることもないのよ。きちんと起きて待機してるのはフロントとルーム・サービスの関係だけ。地下の駐車場から従業員用のドアを通って上がってくればわからないようになってるの。それに見つかったって、ここは従業員が多いから勤務か非番かなんていちいちわからないし、わかっ

たとしても仮眠室に眠りにきたんだって言えば全然問題ないのよ。こういうの、前にも何度かやったことがあるの」

「前にもある？」

「うん、眠れないとこっそり夜中にホテルに来るの。そして一人でうろうろするの。すると落ち着くの。馬鹿みたい？　でも好きなのよ、そういうのが。ホテルの中にいるとすごくほっとするの。一度も見つかったことないわよ。だから安心しなさい。見つからないし、見つかっても何とでも言い抜けられるわよ。もちろん、この部屋に入ってることがわかったらそりゃちょっとした問題だけど、そうでなきゃ大丈夫。ここに朝までいて、出勤時間になったらそっと出ていく。いいでしょう？」

「僕はいいさ。出勤時間は何時なの？」

「八時」と彼女は言った。そして腕時計を見た。「あと五時間」

彼女は神経質そうな手付きで時計を腕から外し、ことんという小さな音を立ててテーブルの上に置いた。そしてソファに座って、スカートの裾をひっぱってまっすぐにし、顔を上げて僕を見た。僕はベッドの端に腰を下ろして少しずつ意識を取り戻していた。「それで――」とユミヨシさんは言った。「あなたは私を求めているのね？」

「とても激しく」と僕は言った。「いろんなことが一回りしたんだ。ぐるりと。そして僕は君を求めている」

「激しく」と彼女は言った。そしてスカートの裾をまた引っ張った。

「そう、とても激しく」

「一回りして何処に帰ってきたの？」

「現実にだよ」と僕は言った。「ずいぶん時間がかかったけど、僕は現実に帰ってきた。いろんな奇妙なも

のの中を通り抜けてきた。いろんな人々が死んだ。いろんなものが失われた。とても混乱していたし、その混乱は解消したわけじゃない。たぶん混乱は混乱のままで存続しつづけるだろうと思うんだ。でも僕は感じるんだ。僕はこれで一回りしたんだって。そしてここは現実だ。僕は一回りするあいだくたくたに疲れていた。でも何とか踊り続けた。きちんとステップは踏み外さなかった。だからこそここに戻ってくることができたんだ」

彼女は僕の顔を見ていた。

「細かいことは今はとても説明できそうにない。でも僕を信用してほしい。僕は君を求めているし、それは僕にとってとても大事なことなんだ。そして君にとってもとても大事なことなんだ。嘘じゃないよ」

「それで、私はどうすればいいのかしら?」とユミヨシさんは表情を変えずに言った。「感動してあなたと寝ればいいの? 素敵、そんなに求められるなんて最高! っていう具合に」

「違うよ、そうじゃない」と僕は言った。そして適当な言葉を探した。でも適当な言葉なんてもちろんなかった。「なんて言えばいいんだろうな? それは決まっていることなんだよ。僕は一度もそれを疑ったことはない。君は僕と寝るんだ、最初からそう思っていた。でも最初の時はそれができなかった。そうするのが不適当だったからだよ。だからぐるっと一回りするまで待った。一回りした。今は不適当じゃない」

「だから今私はあなたと寝るべきだって言うの?」

「論理的には確かに短絡していると思う。説得の方法としては最悪だろうと思う。それは認める。でも正直に言おうとするとこうなってしまうんだよ。そうとしか表現のしようがない。ねえ、僕だって普通の状況ならもっとちゃんと手順を踏んで君を口説くよ。僕だってそれくらいのやり方は知ってる。その結果が上手く行くか行かないかはともかく、方法的にはもっとちゃんと人並みに口説ける。でもこれはそうじゃ

ないんだ。これはもっと単純なことなんだ。わかりきってることなんだ。だからこれはこういう風にしか表現できないんだよ。上手くやるとかやらないとかの問題じゃないんだ。僕と君は寝るんだよ。決まってるんだ。決まっていることを僕はこねくりまわしたくないんだ。そんなことをしたら、そこにある大事なものが壊れてしまうからだよ。本当だよ。嘘じゃない」

ユミヨシさんはテーブルの上に置いた自分の時計をしばらく眺めていた。「あまりまともとは言えないわね」と彼女は言った。それから溜め息をついてブラウスのボタンを外し始めた。

「見ないで」と彼女は言った。

僕はベッドに寝転んで天井の隅を見ていた。あそこには別の世界がある、と僕は思った。でも僕は今ここにいる。彼女はゆっくりと服を脱いでいった。小さなきぬずれの音が続いていた。彼女はひとつ服を脱ぐと、それを畳んできちんとどこかに置いているようだった。眼鏡をテーブルの上に置くかたんという音も聞こえた。とてもセクシーな音だった。それから彼女がやってきた。彼女は枕もとのライトを消し、僕のベッドの中に入ってきた。するりと、とても静かに彼女は僕の隣に潜りこんできた。ドアのすきまから部屋に入る時と同じように。

僕は手を伸ばして彼女の体を抱いた。彼女の肌と僕の肌が触れた。とても滑らかだ、と僕は思った。そしてそこには何かしら重みがある。現実だ。メイとは違う。彼女の体は夢のように素晴らしかった。でも彼女は幻想の中にいたのだ。彼女自身の幻想と、彼女を含む幻想の、二重の幻想の中に。かっこう。でもユミヨシさんの体は現実の世界に存在していた。その温かみや重みや震えは本当に現実のものだった。僕は彼女の体を撫でながらそう思った。キキを愛撫する五反田君の指も幻想の中に存在していた。それは演技であり、画面の上の光の動きであり、ひとつの世界からもうひとつの世界へとすりぬけていく影だった。でもこれは違う。これは現実なのだ。かっこう。僕の現実の指がユミヨシさんの現実の肌を撫でてい

るのだ。
「現実だ」と僕は言った。
ユミヨシさんは僕の首に顔を埋めていた。僕は彼女の鼻先の感触を感じた。暗闇の中で僕は彼女の体の隅から隅までをひとつひとつ確かめていった。肩から、肘、手首、手のひら、そして十本の指の先まで。僕はどんな細かいところも抜かさなかった。僕はそれを指で辿り、そこに封印をするみたいに唇をつけた。そして乳房と腹、脇腹、背中、足、そんなひとつひとつの形を僕は確かめ、そして封印をした。そうする必要があったのだ。そうしなくてはならなかったのだ。そして僕は彼女の柔らかな陰毛を手のひらでやさしく撫で、そこにもくちづけした。かっこう。それから性器にも。
現実なのだ、と僕は思った。
僕も何も言わなかったし、彼女も何も言わなかった。彼女はただ静かに呼吸をしていた。でも彼女もまた僕を求めていた。僕にはそれを感じることができた。彼女は僕が何を求めているのかがわかっていたし、それに合わせて微妙に姿勢を変えた。僕は彼女の体を全部確かめてしまうと、もう一度彼女を腕の中にしっかりと抱きしめた。彼女の腕も僕の体をしっかりと抱いていた。彼女の吐く息は温かく、湿っていた。それは言葉にならない言葉を空中に浮かべていた。そして僕は彼女の中に入った。僕のペニスはとても固く、そして熱かった。それだけ激しく僕は彼女を求めていたのだ。僕はひどく乾いていたのだ。
最後にユミヨシさんは僕の腕を血がにじむくらい強く噛んだ。でもかまわない。これが現実なのだ。痛みと血。僕は彼女の腰を抱きながら、ゆっくりと射精した。とてもゆっくりと、順番を確かめるみたいに。
「すごい」と少し後でユミヨシさんが言った。
「だから決まってたんだよ」と僕は言った。

CamScannerでスキャン

ユミヨシさんはそのまま僕の腕の中で眠った。とても静かな眠りだった。僕は眠らなかった。全然眠くなかったし、眠っている彼女を抱いているのは素敵だった。やがて空が明るくなり、朝の光が部屋を少しずつ淡く照らしていった。テーブルの上には彼女の腕時計と眼鏡が置いてあった。僕は眼鏡をかけていないユミヨシさんの顔を見た。眼鏡をかけていない彼女も素敵だった。僕は彼女の額に軽く唇をつけた。僕はまた固く勃起していた。もう一度彼女の中に入りたかったけれど、彼女はとても気持ち良さそうにぐっすり眠っていたし、その眠りを僕は乱したくなかった。そして彼女の肩を抱いたまま、光の領域が部屋の隅々に広がり、闇が後退して消えていく様を眺めていた。

椅子の上には彼女の服が畳んで置いてあった。スカートとブラウスとストッキングと下着と。そして椅子の足元には黒い靴が揃えられていた。現実なのだ。現実の服は皺にならないように現実的に畳まれるのだ。

七時に僕は彼女を起こした。

「ユミヨシさん、起きる時間だ」と僕は言った。

彼女は目を開けて僕を見た。そして僕の首にまた鼻をつけた。「すごかった」と彼女は言った。そして魚のようにすっとベッドを出て、裸で朝の光の中に立った。まるで充電でもしているみたいに。僕は枕に片肘をついて、彼女の体を眺めていた。僕が何時間か前に確かめ、封印したその体を。

ユミヨシさんはシャワーに入り、髪を僕のヘア・ブラシでとかし、簡潔に的確に歯を磨いた。そして丁寧に服を身につけた。僕は彼女が服を着るのを眺めていた。彼女は白いブラウスのボタンを注意深くひとつまたひとつととめ、ブレザー・コートを着て、全身を映す鏡の前に立って皺もなくごみもついていないことを確かめた。ユミヨシさんはそういうことにはとても真剣だった。そういう彼女の仕種を見ているのは素敵だった。朝だという感じが伝わってきた。「お化粧道具は仮眠室のロッカーに入れてあるの」と彼

女は言った。
「そのままで綺麗だ」と僕は言った。
「ありがとう。でもお化粧しないと叱られるの。お化粧するのも仕事のうちなの」
僕は立ったまま部屋の真ん中でユミヨシさんをもう一度抱いた。ライト・ブルーの制服を着て眼鏡をかけたユミヨシさんを抱くのもまた素敵だった。
「夜が明けてもまだ私を求めてる？」と彼女は訊いた。
「とても」と僕は言った。「昨日より激しく」
「ねえ、こんなに激しく求められたのって初めて」とユミヨシさんは言った。「そういうのってちゃんと感じるの。自分が求められているって。そういうことを感じたのは初めて」
「これまで誰も君を求めなかったの？」
「あなたのようにはね。誰も」
「求められるとどんな気がするの？」
「とてもリラックスする」とユミヨシさんは言った。「こんなにリラックスできたの久し振り。まるで温かい気持ちの良い部屋にいるみたいな気分なの」
「ずっとそこにいればいい」と僕は言った。「誰も出ていかないし、誰も入ってこない。僕と君しかいない」
「そこにとどまるのね？」
「そうだよ、とどまるんだ」
ユミヨシさんは少し顔を離して僕の目を見た。「ねえ、今日の夜もまたここに泊まりに来ていいかしら？」

「ここに君が泊まりに来ることは僕は全然構わない。でも君にとっては危険が大きすぎるんじゃないかな。だって、ばれたら君はクビになるかもしれないよ。それよりは君のアパートか、それとも別のホテルに泊まった方がいいんじゃないかな？　その方が気が楽だろう？」

ユミヨシさんは首を振った。「いいえ、ここがいいの。私はこの場所が好きなの。ここはあなたの場所であると同時に私の場所でもあるの。私はここであなたに抱かれたいの。あなたさえよければ」

「僕はどこだって構わない。君の好きなようにすればいい」

「じゃあ今日の夕方にね。ここで」と彼女は言った。そしてドアを小さく開け、外の様子をうかがってから、すっと身をくねらせるようにして消えていった。

＊

僕は髭を剃り、シャワーを浴びてから、外に出て朝の街を散歩し、それからまたダンキン・ドーナッツに入ってドーナッツを食べ、コーヒーを二杯飲んだ。

街は出勤をする人々で溢れていた。そういう光景を眺めていると、僕もまた仕事を始めなくてはという気持ちになった。ユキが勉強を始めたように、僕も仕事を始めなくてはならない。現実的になるのだ。札幌で仕事を見つけることになるのだろうか？　それも悪くない、と僕は思った。そしてユミヨシさんと一緒に暮らすのだ。ユミヨシさんはホテルに働きにでかけ、僕は僕の仕事をするのだ。何の仕事だ？　まあいいさ、何かあるだろう。たとえすぐに仕事がみつからなくても、まだ何ヵ月かは食べていける。

何か物を書くのも悪くないな、と僕は思った。僕は文章を書くことは嫌いではないのだ。ほぼ三年間切れ目なく雪かき仕事をやってきたあとで、僕は何か自分の為に文章を書きたいというような気持ちになっていた。

そう。僕はそれを求めているのだ。

ただの文章。詩でも小説でも自叙伝でも手紙でもない自分の為のただの文章。注文も締切もないただの文章。

悪くない。

それから僕はまたユミヨシさんの体のことを思い出した。僕は彼女の体の隅から隅までを覚えていた。僕がそれを確かめ、封印したのだ。僕は幸せな気分で初夏の街を歩き、美味い昼食を食べてビールを飲み、ホテルのロビーに座って植木の陰からフロントでユミヨシさんが働いている姿を少し眺めた。

44

ユミヨシさんは夕方の六時半にやってきた。彼女はやはり制服のままだったが、ブラウスが違うかたちのものになっていた。そして今度はちゃんと着替えや洗面用具や化粧品をいれた小さなビニールのバッグを持っていた。

「いつかばれる」と僕は言った。

「大丈夫よ。私は抜け目ないもの」とユミヨシさんは言って、にっこり笑い、ブレザー・コートを脱いで椅子の背中にかけた。そして僕らはソファの上で抱き合った。

「ねえ、今日ずっとあなたのことを考えていたの」と彼女は言った。「そしてこう思ったの。私が毎日昼間このホテルで働いて、夜になったらこうしてあなたの部屋にそっと忍びこんできて、二人で抱きあって眠って、そして朝になったらまたそのまま働きに出ていけたら素敵だろうなって」

「職住近接」と僕は笑って言った。「しかし残念ながら僕にはいつまでもここに泊まりつづけるような経済的余裕はないし、それにそんなこと毎日やってたら幾らなんでもいつかばれる」

ユミヨシさんは不服そうに膝の上で指をぱちぱちと小さく何度か鳴らした。「世の中は上手くいかないわね」

「実に」と僕は言った。

「でもあと何日かはここに泊まってるんでしょう?」

「そうだね。たぶんそうなると思う」

「じゃあその何日かでいいわよ。ふたりでこのホテルの中で暮らしましょう」

それから彼女は服を脱いで、またひとつひとつきちんと畳んだ。癖なのだ。腕時計と眼鏡を取って、テーブルの上に置いた。それから僕らは一時間くらいかけてセックスをした。僕も彼女もさすがにくたくたになったが、でもそれはとても心地良い疲労感だった。

「すごい」とユミヨシさんは言った。そしてまた僕の腕の中でうとうとと眠ってしまった。リラックスしているのだ。僕はシャワーを浴び、冷蔵庫からビールを出して一人で飲んだ。そして椅子に座ってユミヨシさんの寝顔を眺めていた。彼女はとても気持ち良さそうに眠っていた。

八時前に彼女は目を覚ましておなかが減ったと言った。我々はルーム・サービスのメニューを点検し、マカロニ・グラタンとサンドイッチを注文した。彼女は服と靴をクローゼットの中に隠し、ボーイがドアをノックすると、さっとバスルームに隠れた。ボーイがテーブルの上に料理を並べて出ていくと、僕はバスルームのドアを小さくノックした。

我々はグラタンとサンドイッチを半分ずつ食べ、ビールを飲んだ。そしてこれから先の話をした。僕は東京から札幌に越してくると言った。

「東京にいても仕方ないんだ。もういる意味もない」と僕は言った。「今日の昼間ずっとそのことを考えてたんだ。ここに落ち着くことにする。そして僕にできそうな仕事を探してみる。ここにいれば君と会えるからね」

「とどまるのね？」と彼女は言った。

「そうだよ、とどまるんだ」と僕は言った。引っ越しの荷物は大した量ではないだろう。レコードや本や台所用品、その程度だ。スバルに乗せてフェリーで運べるだろう。大きなものは売るか捨てるかして、ま

た買い直せばいいのだ。ベッドも冷蔵庫もそろそろ買いかえてもいい頃合だった。だいたいにおいて、僕は物を長く大事に使いすぎる。

「札幌でアパートを借りる。そして新しい生活を始める。君は来たい時にそこに来て、泊まっていけばいい。しばらくそういう風にしてやっていってみよう。僕らはたぶんうまくやれると思う。僕は現実を取り戻し、君はリラックスする。そしてふたりでそこにとどまる」

ユミヨシさんは微笑んで僕にくちづけした。「素敵」と彼女は言った。

「その先のことは僕にもわからない。でも良い予感はある」と僕は言った。

「先のことは誰にもわからない」と彼女は言った。「でも今はすごく素敵よ。すごく最高に素敵」

僕はもう一度ルーム・サービスに電話をして、アイスペール一杯分の氷を注文した。彼女はまたバスルームに隠れた。氷が来ると、僕は昼間街で買っておいたウォッカのハーフ・ボトルとトマト・ジュースを出し、ブラディー・マリーをふたつ作った。レモン・スライスとリー&ペリン・ソースはなかったけれど、とりあえずはブラディー・マリーだった。僕らはそれでささやかに乾杯した。背景音楽が必要だったので、枕元の有線放送のスイッチをいれ、チャンネルを「ポピュラー音楽」というのにあわせた。マントヴァーニ・オーケストラが「魅惑の宵」を麗々しく奏でていた。言うことない、と僕は思った。

「あなたって気がきくのね」とユミヨシさんが感心して言った。「実はさっきからブラディー・マリーが飲めるといいなあってずっと思っていたの。どうしてちゃんとわかるんだろう？」

「耳を澄ませば求めているものの声が聞こえる。目をこらせば求められているものの姿が見える」

「標語みたい」と彼女は言った。

「標語じゃない。生きる姿勢を言葉にしただけだ」と僕は言った。

「あなた、標語作りの専門家になればいいんだわ」とくすくす笑いながらユミヨシさんは言った。

CamScannerでスキャン

我々は三杯ずつブラディー・マリーを飲み、それからまた裸になって抱き合い、優しく交わった。我々はとても充足していた。彼女を抱いているときに一度、あのごとごとごとというかホテルの旧式エレベーターの震える音が聞こえたような気がした。そう、ここが僕の結び目なんだ、と僕は思った。僕はここに含まれているのだ。そして何にも増して、これは現実なのだ。大丈夫、僕はもう何処にも行かない。僕はしっかりと繋がっている。僕は結び目を回復し、そして現実と繋がっているのだ。僕がそれを求め、羊男がそれを繋げるのだ。十二時になって、我々は眠った。

*

ユミヨシさんが僕の体を揺すって起こした。「ねえ、起きてよ」と彼女は僕の耳もとで囁いていた。彼女はいつの間にかきちんと制服を着ていた。あたりはまだ暗く、僕の頭の半分はまだ温かい泥のような無意識の領域に留まっていた。ベッドサイド・ライトが点いていた。枕もとの時計は三時過ぎを指している。何かまずいことが起こったのだと僕はまず思った。たぶん彼女がここに来ていることが上役にばれたのだろうと。ユミヨシさんはとても真剣な顔つきで僕の肩を掴んで揺さぶっているし、時刻は夜中の三時だった。それに彼女はきちんと服を着ている。そうとしか思えなかった。どうすればいいのかな、と僕は考えた。でも僕の思考はそこから先に進まなかった。

「起きてよ。お願い、起きて」と彼女は小さな声で言った。

「起きてる」と僕は言った。「何が起こったんだ？」

「いいから早く起きて服を着て」

　僕は何も聞かずに素早く服を着た。Tシャツを頭からかぶり、ブルージーンズをはき、スニーカーをはき、ウィンドブレーカーを着てジッパーを首の上まで上げた。一分もかからなかった。僕が服を着てしま

うと、ユミヨシさんは僕の手を取ってドアのところに連れていった。そして小さくドアを開けた。ほんの二センチか三センチだけ。

「見てよ」と彼女は言った。僕はその隙間から外を覗いた。廊下は真っ暗だった。何も見えない。ゼリーのような濃厚で冷やかな闇だ。手をさしだしたらそのまま吸い込まれてしまいそうなほど闇は深く、暗かった。そしてあのいつもの臭いがした。黴臭い、古びた紙の臭い。古い時間の深淵から吹きこんでくる風の匂い。

「またあの闇が来たのよ」と彼女は僕の耳もとで囁いた。

僕は彼女の腰に手を回してそっと抱き寄せた。「大丈夫だよ。怖がることはない。ここは僕の為の世界なんだ。悪いことは起こらない。最初に君が僕にこの闇のことを話した。だから僕らは知り合ったんだ」

でも僕には確信が抱けなかった。僕はどうしようもなく怖かった。それはどんな理屈も通じない根源的な恐怖だった。それは僕の遺伝子に刻みこまれ、太古の時代から営々と伝えられた恐怖だった。闇というものはどのような存在理由があったとしてもやはり怖くおぞましいものなのだ。それは人をすっぽりと呑み込み、その存在を歪め、引き裂き、消しさってしまうかもしれないものなのだ。いったい誰が完全な闇の中で確信を抱けるだろう？　闇の存在理由——いったい誰がそんなものを信じるだろう？　闇の中ではあらゆるものが容易にねじ曲がり、転換し、消滅してしまうのだ。そして闇の論理である虚無が全てを覆ってしまうのだ。

「大丈夫だよ、何も怖がることはない」と僕は言った。でもそれは自分に言いきかせるための言葉だった。

「どうするの？」とユミヨシさんは訊いた。

「二人で先の方に行ってみよう」と僕は言った。「僕は二人の人物に会う目的でこのホテルに戻ってきた

んだ。一人は君で、もう一人はその相手だ。彼はこの闇の奥の方にいる。そしてそこで僕を待ってるんだ」

「あの部屋にいた人ね？」

「そうだよ。彼だ」

「でも怖いわ。本当にすごく怖い」とユミヨシさんは言った。彼女の声は震えてうわずっていた。仕方ない、僕だって怖いのだ。

僕は彼女の瞼にそっと唇をつけた。「怖くない。今度は僕が一緒にいる。ずっと手を握りあっていよう。手を放さなければ大丈夫だよ。どんなことがあっても放しちゃ駄目だよ。じっとくっついているんだ」

僕は部屋の中に戻って、バッグの中から前もって用意しておいたペンライトとビックのライターを出し、ウィンドブレーカーのポケットに突っ込んだ。そしてゆっくりとドアを開け、ユミヨシさんの手を取って廊下に足を踏み出した。

「どっちに行くの？」と彼女が訊いた。

「右だよ」と僕は言った。「いつも右なんだ。決まってるんだ」

僕はペンライトで足元を照らしながら廊下を歩いた。暗闇の中で以前に感じた通り、それはドルフィン・ホテルの廊下ではなかった。もっともっと古い建物の廊下だった。赤いカーペットは擦り切れ、廊下はところどころへこんでいた。漆喰の壁には老人斑のような宿命的な染みがついていた。いるかホテルだ、と僕は思った。正確にそのままのいるかホテルではない。でもここはいるかホテルに似た何かなのだ。いるかホテル的な何かなのだ。しばらくまっすぐ進むと、廊下は前回と同じようにやはり右に折れていた。僕は廊下を曲がった。でもこの前とは何かが違っていた。光が見えないのだ。遠くのドアの隙間か

らこぼれていたあの蠟燭の微かな光が見えないのだ。僕は念のためにライトを消してみた。でも同じだった。そこに光はなかった。完璧な闇が狡猾な水のように音もなく僕らを包んだ。

ユミヨシさんは僕の手をぎゅっと強く握っていた。「光が見えない」と僕は言った。僕の声はひどく乾いていた。それは全然僕の声に聞こえなかった。「あそこのドアから光が見えたんだ。この前は」

「私の時もそうだったわ。あそこに見えた」

僕はその曲がり角でしばらく止まっていた。そして考えた。羊男の身に何が起こったんだろう？　彼は眠っているのだろうか？　いや、そうじゃない。彼はいつもあそこにいて灯をともしているはずなのだ。灯台のように。それが彼の役目なのだ。たとえ眠っていたとしても、光は常にそこにあるはずなのだ。なくてはならないのだ。嫌な予感がした。

「ねえ、このまま戻りましょう」とユミヨシさんは言った。「これはあまりにも暗すぎるわ。戻って、次の機会を待ちましょう。その方がいいわ。無理をしないで」

彼女の言いぶんには筋が通っていた。これはあまりにも暗すぎる。そして何かまずいことが起こっているような気がする。でも僕は引き返さなかった。

「いや、僕は心配なんだよ。あそこに行って何が起こったのか見届けてみたい。彼は何かの理由で僕を求めているのかもしれない。だから僕らをまたこの世界に繋げたんだよ」僕は再びペンライトを点けた。細く黄色い光の筋が闇の中をさっと走った。「行こう。じっと手を握ってるんだよ。僕は君を求めてるし、君は僕を求めてる。心配することはない。我々はとどまるんだ。何処にもいかない。ちゃんと戻る。心配しなくていい」

我々はゆっくりと足元を確かめながら一歩ずつ前に進んだ。暗闇の中でユミヨシさんのヘア・リンスの微かな匂いが感じられた。そしてその匂いは僕の鋭く尖った神経を甘く浸した。彼女の手は小さく温かく

CamScannerでスキャン

硬かった。僕らは暗闇の中で繋がっていた。

羊男のいた部屋はすぐにわかった。そこだけドアが開いていて、その隙間からひやりとした黴臭い空気がこぼれ出ていたからだ。僕はそのドアをそっとノックしてみた。それは最初の時と同じように不自然なくらい大きく響いた。まるで巨大な耳の中の巨大な増幅器官を叩いたみたいに。僕はこんこんこんと三度ドアをノックし、そして待った。二十秒か三十秒待った。でも反応はなかった。羊男はどうしたのだろう？　彼はひょっとして死んでしまったのだろうか？　そういえば、この前会った時、彼はひどく疲れて年老いているように見えた。そのまま死んでしまったとしても不思議はないような気がした。彼はとても長く生きたのだ。でも彼だってやはり年老いる。そしていつかは死ぬのだ。他のみんなと同じように。そう思うと僕は急に不安になった。もし彼が死んでしまったら、誰がこの世界と僕とを結びつけておくのだろう？　誰が僕を繋げてくれるのだろう？

僕はドアを開け、彼女の手を引いてそっと部屋の中に入り、ペンライトで床を照らしてみた。部屋の中の様子はこの前見た時と全く同じだった。古い本が床じゅうに所狭しと積み上げられ、小さなテーブルがあり、その上に粗末な燭台代わりの皿が置いてあった。蠟燭は五センチほど残して消えていた。僕はポケットからライターを出してそれに火を灯し、ペンライトを消してウィンドブレーカーのポケットにしまった。

部屋の何処にも羊男の姿は見えなかった。

何処に行ってしまったんだ、と僕は思った。

「ここにいったい誰がいたの？」とユミヨシさんが訊いた。

「羊男」と僕は答えた。「羊男がこの世界の管理をしているんだ。ここが結び目で、彼が僕のためにいろんなものを繋げている。電話の配電盤と同じようにね。彼は羊の毛皮を着て、ずっと昔から生きつづけて

る。そしてここに住みついている。隠れてるんだ」
「何から隠れているの？」
「何からだろう？　戦争から、文明から、法律から、システムから……、羊男的じゃないありとあらゆるものから」
「でも彼はいなくなってしまったのね？」
僕は肯いた。僕が肯くと、壁の上の誇張された影が大きくぐらりと揺れた。「そう、いなくなってしまった。どうしてだろう。いなくてはならないのに」僕は世界の端に立っているような気がした。古代人が考えた世界の端。何もかもが滝になって奈落の底に落下しているような、世界の端だ。そこの突端に我々は立っている。二人きりで。我々の前には何もない。暗黒の虚無が広がっているだけだ。部屋の空気は骨に染みるように冷たかった。我々はお互いの手のひらからかろうじて温かみを取り合っていた。
「彼はもう死んでしまったのかもしれない」と僕は言った。
「暗いところで悪いことを考えちゃだめよ。もっと物事を明るく考えるのよ」とユミヨシさんは言った。
「どこかに買い物に出かけているだけかもしれないでしょう？　蠟燭のストックが切れたのかもしれない」とユミヨシさんは言った。
「あるいは所得税の払い戻しを受取りに行ってるのかもしれない」と僕は言った。そして僕はライトで彼女の顔を照らした。彼女のくちもとが少しだけ微笑んでいた。僕はライトを消し、薄暗い蠟燭の光の中で彼女の体を抱き寄せた。「ねえ、休みの日には二人でいろんなところに行こう」
「もちろんよ」と彼女は言った。
「僕のスバルを持ってくる。中古だし、年式も古いけど、いい車なんだ。気に入ってる。僕はマセラティにも乗った。でも正直言って僕のスバルの方がずっといい」

「もちろん」
「エアコンもついてるし、カー・ステレオだってついてる」
「言うことないみたい」
「言うことないんだ」と僕は言った。「それに乗っていろんなところに行こう。そして二人でいろんなものを見たい」
「当然な考えね」
僕らはしばらく抱き合ってから体を離し、僕はまたライトをつけた。彼女は身をかがめて床の上の薄い本を一冊取り上げた。それは「ヨークシャー種緬羊の品種改良の研究」というパンフレットだった。表紙は茶色く変色し、その上に白い埃が牛乳の膜のように積もっていた。
「そこにあるのは全部羊についての本だよ」と僕は言った。「昔のドルフィン・ホテルの一部は羊についての資料室になっていたんだ。支配人の父親が羊の研究家だったんだ。それがここに集めてある。羊男がそのあとを継いで管理していたんだ。もう何の役にも立たない。誰もこんなもの今さら読まない。でも羊男は取っておいたんだ。たぶんそれはここの場所にとって大事なものだったんだろうね」
ユミヨシさんは僕のライトを取ってそのパンフレットを開き、壁にもたれてそれを読んだ。僕は壁の上の自分の影を見ながらぼんやりと羊男について考えていた。彼はいったい何処に消えてしまったんだろう、と。それから急にひどく嫌な予感がした。心臓が喉もとまでせりあがってきた。何かが間違っている。何かまずいことが持ちあがろうとしている。いったい何だろう？　僕はその何かに意識を集中した。それからはっと気づいた。駄目だ、いけない、と僕は思った。僕とユミヨシさんはいつの間にか手を離している。手を離しちゃいけないんだ、絶対に。一瞬のうちに体中の毛穴から汗が吹きだした。僕は急いで手をのばしてユミヨシさんの手首を掴もうとした。でもその時はもう遅かった。僕が手をのばすのとまっ

たく同時に彼女の体はすっと壁に吸い込まれてしまっていた。キキがあの死の部屋の壁に吸いこまれた時と同じように。ユミヨシさんの体はまるで流砂に呑まれるように一瞬にして消えてしまった。彼女の姿が消え、ペンライトの光も消えた。

「ユミヨシさん！」と僕は大声で呼んだ。

誰も答えなかった。沈黙と冷気が一体となって部屋を支配していた。闇が一段階深まったように感じられた。

「ユミヨシさん！」と僕はもう一度叫んだ。

「ねえ、簡単よ」と壁の向こうからユミヨシさんのくぐもった声が聞こえた。「本当に簡単。壁を抜けたらすぐこっちに来られるわよ」

「違うんだ！」と僕は怒鳴った。「簡単そうに見える。でもそっちに行っちゃうと、もう戻れないんだよ。君にはそれがわかってないんだ。そこは違うんだ。そこは現実じゃないんだよ。それはそちらの世界なんだ。こちらの世界とは違うところなんだ」

彼女は返事をしなかった。また深い沈黙が部屋に満ちた。まるで海の底にいるように沈黙が僕の体を重く圧していた。ユミヨシさんは消えてしまったのだ。どこまで手をのばしても彼女には届かないのだ。僕と彼女とのあいだにはあの壁がたちはだかっているのだ。ひどすぎる、と僕は思った。無力感。ひどすぎる。僕とユミヨシさんはこちら側にいなくちゃならないんだ。僕はそのためにこれまで努力してきたのだ。僕はそのために複雑なステップを踏みながらここまでやってきたのだ。

でも考えている余裕はなかった。ぐずぐずしている暇はないのだ。僕はユミヨシさんを追って壁にむかって足を踏み出した。そうする以外に方法はなかった。だって僕はユミヨシさんを愛していたのだ。そしてキキの時と同じように僕は壁を抜けた。前と同じだった。不透明な空気の層。ざらりとした硬質な感

触。水のような冷やかさ。時間が揺らぎ、連続性がねじ曲げられ、重力が震えた。太古の記憶が時の深淵の中から蒸気のように立ちあがっているのが感じられた。それは僕の遺伝子なのだ。僕は自分の肉の中に進化のたかぶりを感じた。僕はその複雑に絡み合った巨大な自分自身のDNAを越えた。地球が膨らみ、そして冷えて縮んだ。洞窟の中に羊が潜んでいた。海は巨大な思念であり、その表面に音もなく雨が降っていた。顔のない人々が波打ち際に立って沖を見つめていた。終りのない時間が巨大な糸玉となって空に浮かんでいるのが見えた。虚無が人々を呑み、より巨大な虚無がその虚無を呑んだ。人々の肉が溶け、白骨が現れ、それも塵となって風に吹きとばされた。非常に完全に死んでいる、と誰かが言った。かっこう、と誰かが言った。僕の肉は分解し、はじけ飛び、そしてまたひとつに凝結した。

その混乱とカオスの空気の層を抜けると、僕は裸でベッドの中にいた。あたりは真っ暗だった。漆黒の闇というのではない。でも何も見えなかった。僕は一人だった。手をのばしたが、隣りには誰もいなかった。僕は孤独だった。僕はまた一人ぼっちで世界の端に取り残されたのだ。「ユミヨシさん！」と僕は声を限りに叫んだ。でも実際には叫び声は出てこなかった。乾いた息が洩れただけだった。僕はもう一度叫ぼうとしたが、そのときぱちんという音が聞こえ、フロア・スタンドが点いた。部屋がさっと明るくなった。

そしてユミヨシさんはそこにいた。彼女は白いブラウスとスカートに黒い靴という格好でソファに座り、優しく微笑みながら僕を見ていた。ライティング・デスクの椅子の背にはライト・ブルーのブレザー・コートが彼女の分身のようにかかっていた。僕の体をこわばらせていた力が、ねじをゆるめるようにゆっくり少しずつその力をゆるめていった。僕は自分が右手でぎゅっとシーツを握りしめていたことに気づいた。僕はシーツから手を放し、顔の汗を拭った。ここはこちら側なんだろうか、と僕は思った。この光は本物の光なんだろうか？

「ねえ、ユミヨシさん」と僕はかすれた声で言った。
「なあに？」
「君は本当にそこにいるの？」
「もちろん」と彼女は言った。
「何処にも消えてないんだね？」
「消えてない。そんなに簡単に人は消えないのよ」
「夢を見てた」と僕は言った。
「知ってるわ。じっとあなたのことを見てたの。あなたが眠って夢を見て私の名前を呼んでるのを見てたの。真っ暗な中で。ねえ、何かを真剣に見ようとすれば、真っ暗な中でもちゃんと見えるものなのね」
僕は時計を見た。四時少し前だった。夜明け前の小さな時間。思いが深まり屈曲する時間。僕の体は冷えて、まだ固くこわばっていた。あれは本当に夢だったんだろうか？　あの闇の中で羊男は消え、そしてユミヨシさんも消えた。僕はその時の行き場のない絶望的な孤独感をはっきりと思い出すことができた。ユミヨシさんの手の感触を思い出すこともできた。それはまだ僕の中にしっかりと残っていた。それは現実以上にリアルだった。現実はまだ十分なリアリティーを取り戻してはいなかった。
「ねえ、ユミヨシさん」と僕は言った。
「なあに？」
「どうして服を着てるの？」
「服を着てあなたを見ていたかったの」と彼女は言った。「なんとなく」
「もう一度脱いでくれないかな？」と僕は訊いた。僕は確かめたかったのだ。彼女がちゃんとここにいるということを。そしてこれがこちらの世界なんだということを。

「もちろん」と彼女は言った。彼女は時計を外してテーブルの上に置いた。靴を脱いで床に揃えた。ブラウスのボタンをひとつずつ外し、ストッキングを脱ぎ、スカートを脱ぎ、それらをきちんと畳んだ。眼鏡をとって、いつものようにかたんという音を立ててテーブルに置いた。そして裸足で音もなく床を横切り、毛布をそっと持ち上げて僕のとなりに入ってきた。僕は彼女をしっかりと抱き寄せた。彼女の体は温かく、滑らかだった。そしてきちんと現実の重みを持っていた。

「消えてない」と僕は言った。

「もちろん」と彼女は言った。「言ったでしょう、そんなに簡単に人は消えないのよ」そうだろうか、と僕は彼女を抱きしめながら思った。いや、どんなことだって起こり得るんだ、と僕は思った。この世界は脆く、そして危ういのだ。この世界ではあらゆることが簡単に起こり得るのだ。そしてあの部屋にあった白骨はまだ一つ残っているのだ。あれは羊男の骨だったのだろうか？　それとも別の誰かの死が僕のために用意されているのだろうか？　いやあるいはあの白骨は僕自身のものかもしれない。それはあの遠く薄暗い部屋で僕の死をじっと待ちつづけているのかもしれない。僕は遠くでいるかホテルの音を聞いた。まるで遠くから風に乗って聞こえてくる夜汽車の音のように。エレベーターがごとごとごとという音を立てながら上り、そして止まった。誰かが廊下を歩いていた。誰かがドアを開け、誰かがドアを閉めた。いるかホテルだ。僕にはそれがわかる。何もかもが軋み、何もかもが古びた音を立てた。僕はそこに含まれていた。誰かが僕の為に涙を流していた。僕が泣けないもののために誰かが涙を流しているのだ。

僕はユミヨシさんの瞼に唇をつけた。

ユミヨシさんは僕の腕の中でぐっすりと眠った。僕は眠ることができなかった。僕の体の中には一片の眠りも存在しなかった。まるで干あがった井戸のように僕は目覚めていた。僕は彼女の体をつつみこむようにそっと抱きつづけていた。時々声を出さずに泣いた。僕は失われたもののために泣き、まだ失われて

いないもののために泣いた。でも実際にはほんの少し泣いただけだった。ユミヨシさんの体は柔らかく、そして僕の腕の中で温かく時を刻んでいた。時間が現実を刻んでいた。やがて静かに夜が明けた。僕は顔を上げて、枕もとの目覚まし時計の針が現実の時間にあわせてゆっくり回転するのをじっと見ていた。少しずつ少しずつそれは前に進んでいた。僕の腕の内側にユミヨシさんの息がかかって、その部分だけが温かく湿っていた。

現実だ、と僕は思った。僕はここにとどまるのだ。

やがて時計の針は七時を指し、夏の朝の光が窓から差し込んで、部屋の床にほんの少しだけ歪んだ四角い図形を描いた。ユミヨシさんはぐっすりと眠っていた。僕は静かに彼女の髪を上げて耳を出し、そこにそっと唇をあてた。なんて言えばいいのかな、と僕はそのまま三分か四分くらい考えていた。いろんな言い方がある。様々な可能性があり、表現がある。上手く声が出るだろうか？　僕のメッセージは上手く現実の空気を震わせることができるだろうか？　いくつかの文句を僕は口の中で呟いてみた。そしてその中からいちばんシンプルなものを選んだ。

「ユミヨシさん、朝だ」と僕は囁いた。

CamScannerでスキャン

村上春樹全作品 1979〜1989 ⑦
ダンス・ダンス・ダンス

一九九一年五月二〇日 第一刷発行
二〇一一年五月三〇日 第七刷発行

著者 村上春樹
発行者 鈴木哲
発行所 株式会社 講談社
東京都文京区音羽二-一二-二一 〒一一二-八〇〇一
出版部 (〇三)五三九五-三五〇四
販売部 (〇三)五三九五-三六二二
業務部 (〇三)五三九五-三六一五
印刷所 株式会社 精興社
製本所 大口製本印刷 株式会社
定価は函に表示してあります。

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することはたとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。
落丁本・乱丁本は購入書店名を明記のうえ、小社業務部あてにお送りください。送料小社負担にてお取り替えいたします。なお、この本についてのお問い合わせは文芸図書第一出版部あてにお願いいたします。
© Haruki Murakami

ISBN4-06-187937-5

CamScannerでスキャン